

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第227集

# 的場古墳群・的場遺跡

第二東名N0.26地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-6

2010

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 的場古墳群・的場遺跡

第二東名N0. 26地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-6

2010

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

第二東名高速道路は、現在の東名高速道路の混雑緩和のために計画された道路で、現在の東名高速道路の北側に並行して建設されています。

的場古墳群と的場遺跡の発掘調査は、この道路の建設に先立って、平成11年度から平成22年度にかけて実施したものです。

調査では、平安時代の住居跡や6世紀末から7世紀前半にかけて作られた古墳、縄文時代の炉跡、旧石器時代の石器製作跡などを検出しました。

中でも数回にわたる追葬があった古墳と、その古墳から出土した「鉄鐸」と呼ばれる遺物は、静岡県で初めて出土したもので、大変貴重な資料です。

縄文時代から旧石器時代にかけての調査でも、多量の縄文土器や石器が出土し、雄大な駿河湾を望む日当たりの良い的場遺跡が、旧石器時代以来の重要な居住地であったことがうかがわれました。

この調査を通じてお世話になった中日本高速道路株式会社、静岡県教育委員会、沼津市教育委員会、そして、現地作業と整理作業に精を出してくださった皆様に、心よりお礼を申し上げます。

平成22年9月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 石出 彰

# 例　言

- 1 本書は静岡県沼津市根古屋939-2他にある的場古墳群及び的場遺跡（第二東名No.26地点）の調査報告書である。
- 2 調査は、第二東名高速道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公団（現中日本高速道路株式会社）静岡県建設局の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（現文化財保護課）の指導のもと、沼津市教育委員会の協力を得て、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 的場遺跡の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査 平成11年7月～8月、平成11年10月～11月

本調査 平成11年5月～平成12年3月、平成12年4月～9月、平成12年9月～平成13年3月、平成13年8月～平成14年1月、平成15年10月～平成16年3月 平成19年12月～平成20年1月

資料整理・本報告書作成 平成19年1月～平成22年7月

- 4 本遺跡の調査担当は下記のとおりである。

平成11年度（確認調査・本調査）

所長 斎藤忠 制所長 山下晃 総務部長 伊藤友雄 総務課長 杉木敏雄 経理専門員 稲葉保幸  
総務係長 田中雅代 会計係長 大石真二

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長兼資料課長 佐野五十三 調査研究一課長 及川司

調査担当 前嶋秀張 岩崎しのぶ 小林靖彦

平成12年度（本調査）

所長 斎藤忠 制所長 山下晃 総務部長 伊藤友雄 総務課長 杉木敏雄 経理専門員 稲葉保幸  
総務係長 田中雅代 会計係長 大橋薫

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川司

調査担当 前嶋秀張 岩崎しのぶ

平成13年度（本調査）

所長 斎藤忠 制所長 山下晃 総務部長 余田徳幸 総務課長 本杉昭一 経理専門員 稲葉保幸  
総務係長 山本広子 会計係長 大橋薫

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川司

調査担当 前嶋秀張 岩崎しのぶ

平成15年度（本調査）

所長 斎藤忠 制所長 鈴木英夫 総務部長 余田徳幸 総務部次長兼総務課長 鎌田英巳  
経理専門員 稲葉保幸 総務係長 山本広子 会計係長 野島尚紀

調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫

調査担当 前嶋秀張 笹原芳郎

平成18年度（資料整理）

所長 斎藤忠 総務部長 平松公夫 総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 総務係長 芦川美奈子  
会計係長 杉山和枝

調査研究部長 石川素久 調査研究部次長兼調査課長 及川司

調査担当 富樫孝志

平成19年度（現地調査・資料整理）

所長 斎藤忠 事務局長 清水哲 事務局次長兼総務課長 大場正夫 総務係長 芦川美奈子

会計係長 杉山和枝

事務局次長兼調査課長 及川司 東部調査二係長 笹原千賀子

調査担当 木崎道昭（現地調査） 富樫孝志（整理作業）

平成20年度（資料整理）

所長 清水哲 次長兼総務課長 大場正夫 総務係長 山内小百合 会計係長 杉山和枝

次長兼調査課長 及川司 次長兼事業係長 稲葉保幸 東部総括係長 中鉢賢治

東部調査係長 笹原千賀子

調査担当 富樫孝志

平成21年度（資料整理）

所長 天野忍 次長兼総務課長 松村亨 総務係長 山内小百合 会計係長 杉山和枝

次長兼調査課長 及川司 次長兼事業係長 稲葉保幸 次長兼東部総括係長 中鉢賢治 東部調査係

長 笹原千賀子

調査担当 富樫孝志

平成22年度（資料整理）

所長 石田彰 次長兼総務課長 松村亨 専門監兼事業係長 稲葉保幸 総務係長 龍みやこ

会計係長 杉山和枝 調査課長 中鉢賢治 調査第一係長 勝又直人 調査第二係長 岩本貴

調査担当 富樫孝志

5 本書は、特記のない限り富樫が執筆した。

6 黒曜石の原産地推定は、独立行政法人沼津工業高等専門学校教授 望月明彦氏に依頼した。

7 炭化物の年代測定は、パリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社加速器分析研究所に依頼した。

8 発掘調査及び整理作業では、下記の方々に指導、助言をいただいた。

現地調査方法等 稲田孝司

縄文土器の分類 池谷信之

また、下記の方々にも指導、助言をいただいた。

伊藤透玄 小崎晋 栗田稔 鈴木一有 松井・明（五十音順、敬称略）

9 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

10 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

## 凡 例

- 1 現地調査は、2002年4月の世界調査系への移行以前に行なったため、それ以降に行なった調査を含めて日本測地系による平面直角座標系WGS系のX=28300.0、Y=-94550.0を起点として設定してある。
- 2 整理作業の過程で、遺構番号を付け直してあるため、下記に新旧遺構番号対照表を示す。
- 3 編集の都合上、下記のものは付属CDに所収した。
  - ・遺構別遺物組成表 ・第VII黑色帶での年代測定と樹種同定
  - ・炭化物年代測定結果 ・黒曜石の産地推定結果 ・遺物台帳

新旧遺構番号対照表

旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号
FC01	遺物集中域1	RG16	集石12	RG45	集石39
FC02	遺物集中域2	RG17	集石3	RG46	集石19
FC03	土坑21	RG18	集石10	RG47	土坑34
FP01	焼土土坑5	RG19	集石15	RG48	土坑35
FP02	焼土土坑1	RG20	集石16	SB01	竪穴住居跡1
FP03	焼土土坑3	RG21	集石34	SB03	竪穴住居跡2
FP04	焼土土坑4	RG22	集石7	SG02	礫群10
FP05	焼土土坑2	RG23	集石4	SG03	礫群11
FP10	焼土土坑6	RG24	集石5	SG04	礫群2、ブロック1
FP11	焼土土坑10	RG25	集石2	SG05	礫群3、ブロック10
FP12	焼土土坑11	RG26	集石14	SG06	ブロック12
FP13	焼土土坑9	RG27	集石8	SG07	ブロック15
FP14	焼土土坑8	RG28	集石29	SG08	ブロック18
FP15	焼土土坑7	RG29	集石9	SG09	ブロック16
RG01	集石23	RG30	集石11	SG11	ブロック17
RG02	集石25	RG31	集石32	SG12	ブロック19
RG03	集石24	RG32	集石33	SG13	ブロック20
RG04	集石40	RG33	集石31	SG14	ブロック8
RG05	集石41	RG34	集石1	SG15	ブロック9
RG06	集石42	RG35	集石13	SG16	礫群28、ブロック13
RG07	集石17	RG36	集石30	SG17	ブロック14
RG08	集石20	RG37	集石6	SP032	土坑27
RG09	集石21	RG38	礫群3	SP033	土坑28
RG10	集石26	RG40	集石35	SP034	土坑29
RG11	集石43	RG41	集石37	SP035	土坑30
RG12	集石22	RG42	集石38	SP036	土坑31
RG13	集石18	RG43	集石36	SP037	土坑33
RG15	土坑26	RG44	集石44	SP039	土坑32

旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号
SP063	土坑2	SP122	土坑17	SS28	礫群36
SP064	土坑9	SP123	土坑18	SS29	礫群33
SP065	土坑13	SS01	礫群1	SS30	礫群34
SP066	土坑3	SS02	礫群12	SS31	礫群35
SP067	集石27	SS03	礫群25	SS32	礫群31
SP068	土坑4	SS04	礫群19	SS33	礫群30
SP069	集石28	SS05	礫群20	SS34	礫群32
SP070	土坑5	SS06	礫群18、ブロック11	SS35	礫群29
SP072	土坑22	SS07	礫群16	SS36	礫群39
SP074	土坑6	SS08	礫群14	SS37	欠番
SP075	土坑23	SS09	礫群26	SS38	礫群38
SP076	土坑24	SS10	礫群15	SX01	1号墳
SP079	土坑11	SS11	礫群21	SX02	2号墳
SP080	土坑8	SS12	礫群22	SX03, SP078	土坑1
SP081	土坑25	SS13	礫群23	SX04	3号墳
SP083	土坑10	SS14	礫群17	SX05	4号墳
SP084	土坑36	SS15	礫群24	TA01	竪穴住居跡3
SP085	土坑37	SS16	礫群46	なし	焼土土坑12
SP086	土坑38	SS17	礫群27	なし	焼土土坑13
SP089	土坑7	SS18	礫群6	なし	焼土土坑14
SP096	土坑12	SS19	礫群4	なし	ブロック2
SP099	土坑40	SS20	礫群29	なし	ブロック3
SP100	土坑41	SS21	土坑39	なし	ブロック4
SP101	土坑42	SS22	礫群7	なし	ブロック5
SP110	土坑14	SS23	礫群9	なし	ブロック6
SP111	土坑19	SS24	礫群8	なし	ブロック7
SP112	土坑20	SS25	礫群5	なし	遺物分布域1
SP120	土坑15	SS26	欠番	なし	遺物分布域2
SP121	土坑16	SS27	礫群37	なし	遺物分布域3

本書で用いる石材の略号は下記のとおりである。

和名	英名	略号	和名	英名	略号
瑪瑙	agate	Ag	翡翠	jade	Jd
琥珀	amber	Am	火山礫凝灰岩	lapilli tuff	LT
安山岩	andesite	An	泥岩	madstone	MS
輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)	砂岩(中粒)	medium-grained sandstone	MSS
玄武岩	basalt	Ba	黒曜石	obsidian	Ob
チャート	chert	Ch	石英	quartz	Qz
玉髓	chalcedony	Cha	水晶	rock crystal	RC
礫岩	conglomerate	Co	流紋岩	rhyolite	Rn
結晶片岩	crystalline schist	CSc	赤玉石(碧玉)	red jasper	RJa
砂岩(粗粒)	coarse-grained sandstone	CSS	頁岩(ケツガン)	shale	Sh
閃綠岩	diorite	Di	シルト岩	siltstone	Si
輝綠岩	diabase	Dia	粘板岩	slate	Sl
砂岩(細粒)	fine-grained sandstone	FSS	砂岩	sandstone	SS
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAN	珪質頁岩	siliceous shale	SSh
細礫岩	granule conglomerate	GCo	珪質粘板岩	siliceous slate	SSI
花崗岩	granite	Gr	凝灰岩	tuff	Tu
ホルンフェルス	hornfels	Hor	玄武岩(多孔質)	vesicular basalt	VBa
碧玉	jasper	Ja			

本書で用いる黒曜石原産地の略号は下記のとおりである(望月明彦氏による)。

産地		略号	
長野県	諏訪	星ヶ台群	SWHD
	和田(WD)	鷹山群	WDTY
		小深沢群	WDKB
		土屋橋北群	WDTK
		土屋橋西群	WDTN
		土屋橋南群	WDTM
	和田(WO)	芙蓉ライト群	WDHY
		ブドウ沢群	WOBD
		高松沢群	WOTM
静岡県	蓼科	冷山群	TSTY
		双子山群	TSHG
天城	柏嶽群	AGKT	
神奈川県	箱根	芦ノ湯群	HNAY
		烟宿群	HNHJ
		黒岩橋群	HNKI
		鍛冶屋群	HNKJ
東京都	神津島	恩馳島群	KZOB
		砂糠崎群	KZSN

## 目 次

序・例言・凡例	
第1章 調査の概要	
第1節 第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3節 層位と文化層の設定	8
第3章 平安時代の調査	11
第4章 古墳時代の調査	15
第5章 縄文時代の調査	
第1節 10区の遺構と遺物	59
第2節 2区の遺構と遺物	83
第3節 3区の遺構と遺物	93
第4節 8区の遺構と遺物	115
第5節 11区の遺構と遺物	128
第6節 14区の遺構と遺物	143
第7節 4区の遺構と遺物	149
第8節 5区の遺構と遺物	159
第9節 1区の遺構と遺物	169
第10節 12区の遺構と遺物	181
第11節 包含層出土の縄文土器	207
第12節 包含層出土の石器	238
第6章 旧石器時代の調査	
第1節 ホルンフェルス製石器の個体別分類	317
第2節 文化層の設定	317
第3節 休場層上層～中層の遺構と遺物	319
第4節 休場層下層～第Ⅰスコリア帯の遺構と遺物	364
第5節 第Ⅰ黒色帯～ニセローム層の遺構と遺物	401
第6節 第Ⅱ黒色帯の遺物	411
第7節 第Ⅲ黒色帯の遺構と遺物	413
第8節 第Ⅴ黒色帯の遺構と遺物	415
第9節 第Ⅶ黒色帯の遺物	444
第7章 まとめ	
第1節 的場古墳群の調査	445
第2節 的場遺跡の調査	446

## 図版目次

第 1 図 調査区全体図	3	第 39 図 4号墳出土遺物 2	57
第 2 図 周辺地形図	5	第 40 図 縄文時代遺物分布図	58
第 3 図 周辺遺跡分布図	6	第 41 図 10区縄文時代遺構、遺物分布図	
第 4 図 土層図 1	9		60
第 5 図 土層図 2	10	第 42 図 堪穴住居跡 2	61
第 6 図 平安時代遺構分布図	12	第 43 図 堪穴住居跡 2 出土遺物	62
第 7 図 堪穴住居跡 1	13	第 44 図 堪穴住居跡 3	63
第 8 図 堪穴住居跡 1 の竈と出土土器	14	第 45 図 烧土土坑 1、2 実測図	65
第 9 図 1号墳周辺地形図	16	第 46 図 烧土土坑 3～5 実測図	66
第 10 図 1号墳検出状況	17	第 47 図 集石 1、2 実測図	67
第 11 図 1号墳実測図と出土土器	18	第 48 図 集石 3、4 実測図と出土土器	68
第 12 図 2号墳、3号墳、土坑 1 検出状況		第 49 図 集石 5、6 実測図	69
	20	第 50 図 集石 7 実測図	71
第 13 図 2号墳実測図	21	第 51 図 集石 8、9 実測図	72
第 14 図 2号墳石室展開図	22	第 52 図 集石 10、11 実測図と出土石器	73
第 15 図 2号墳完掘図、遺物分布図	23	第 53 図 集石 12、13 実測図	74
第 16 図 2号墳出土遺物	24	第 54 図 集石 14 実測図と出土石器	75
第 17 図 3号墳検出状況	26	第 55 図 集石 15、16 実測図	76
第 18 図 3号墳石室展開図	28	第 56 図 10区出土縄文土器 1	78
第 19 図 3号墳蝶床変遷図	29	第 57 図 10区出土縄文土器 2	79
第 20 図 3号墳根石、墓坑、墓道実測図	30	第 58 図 10区出土縄文土器 3	80
第 21 図 3号墳遺物分布図	32	第 59 図 10区出土縄文土器 4	81
第 22 図 3号墳第 1、2、5 遺物群	34	第 60 図 10区出土縄文土器 5	82
第 23 図 3号墳第 1、2 遺物群	35	第 61 図 2区縄文時代遺構、遺物分布図	
第 24 図 3号墳第 2 遺物群	36		84
第 25 図 3号墳第 3、4 遺物群分布図	37	第 62 国 集石 17、18 実測図	85
第 26 国 3号墳第 3 遺物群 1	38	第 63 国 集石 19、土坑 2 実測図	86
第 27 国 3号墳第 3 遺物群 2	40	第 64 国 土坑 3、4 実測図と出土縄文土器	
第 28 国 3号墳第 3 遺物群 3	41		87
第 29 国 3号墳第 4 遺物群	43	第 65 国 十三菩提式土器軸体 1 分布図	88
第 30 国 3号墳第 5 遺物群	45	第 66 国 十三菩提式土器軸体 1 実測図	89
第 31 国 3号墳その他の出土遺物	47	第 67 国 2区出土石器 1	91
第 32 国 上坑 1 実測図と出土土器	49	第 68 国 2区出土石器 2	92
第 33 国 4号墳周辺地形図と検出状況	50	第 69 国 2区出土石器 3	93
第 34 国 4号墳石室展開図	51	第 70 国 3区縄文時代遺構、遺物分布図	
第 35 国 4号墳根石実測図	53		94
第 36 国 4号墳完掘状況	54	第 71 国 遺物集中域 1 実測図と出土石器	
第 37 国 4号墳遺物出土状況	55		95
第 38 国 4号墳出土遺物 1	56	第 72 国 遺物集中域 1 出土縄文土器	96

第 73 図	遺物集中域 2 実測図と出土遺物	第 108 図	14 区縄文時代遺構・遺物分布図、 土坑 14 実測図
	.....		.....
98	142		
第 74 図	集石 20、21 実測図	第 109 図	土坑 15~18 実測図
	.....		.....
100	144		
第 75 図	集石 22 実測図と出土石器	第 110 図	土坑 19 実測図
	.....		.....
101	145		
第 76 図	集石 23 実測図	第 111 図	土坑 20 実測図
	.....		.....
102	146		
第 77 図	集石 24 実測図	第 112 図	14 区出土縄文土器
	.....		.....
103	147		
第 78 図	集石 25 実測図	第 113 図	4 区縄文時代遺構・遺物分布図
	.....		.....
105	148		
第 79 図	集石 26 実測図と出土石器	第 114 図	土坑 21 実測図と出土遺物
	.....		.....
106	150		
第 80 図	集石 27、28 実測図と出土縄文土器	第 115 図	土坑 22、23 実測図
	.....		.....
107	152		
第 81 図	土坑 5、6 実測図と出土縄文土器	第 116 図	土坑 24 実測図
	.....		.....
108	153		
第 82 図	3 区出土縄文土器 1	第 117 図	土坑 25、26 実測図
	.....		.....
110	154		
第 83 図	3 区出土縄文土器 2	第 118 図	4 区出土縄文土器 1
	.....		.....
111	155		
第 84 図	3 区出土縄文土器 3	第 119 図	4 区出土縄文土器 2
	.....		.....
112	156		
第 85 図	3 区出土縄文土器 4	第 120 図	4 区出土縄文土器 3
	.....		.....
113	157		
第 86 図	3 区出土縄文土器 5	第 121 図	4 区出土縄文土器 4
	.....		.....
114	158		
第 87 図	8 区縄文時代遺構・遺物分布図	第 122 図	5 区縄文時代遺構・遺物分布図
	.....		.....
116	160		
第 88 図	土坑 7 実測図	第 123 図	焼土土坑 6、7 実測図
	.....		.....
117	161		
第 89 図	土坑 8、9 実測図	第 124 図	焼土土坑 8、9 実測図
	.....		.....
118	162		
第 90 図	土坑 10 実測図	第 125 図	焼土土坑 10、11 実測図
	.....		.....
119	163		
第 91 図	土坑 11 実測図	第 126 図	集石 35、36 実測図
	.....		.....
120	164		
第 92 図	土坑 12、13 実測図	第 127 図	集石 37 実測図
	.....		.....
121	165		
第 93 図	8 区出土縄文土器 1	第 128 図	集石 38 実測図
	.....		.....
123	166		
第 94 図	8 区出土縄文土器 2	第 129 図	集石 39 実測図、5 区出土縄文土器
	.....		.....
124	167		
第 95 図	8 区出土縄文土器 2 文様展開図	第 130 図	1 区縄文時代遺構・遺物分布図
	.....		.....
125	168		
第 96 図	8 区出土縄文土器 3	第 131 図	集石 40 実測図と出土縄文土器
	.....		.....
127	170		
第 97 図	11 区縄文時代遺構・遺物分布図	第 132 図	集石 41、42 実測図と出土縄文土器
	.....		.....
129	171		
第 98 図	集石 29 実測図	第 133 図	集石 43、土坑 27 実測図
	.....		.....
130	172		
第 99 図	集石 30、31 実測図	第 134 図	土坑 28、29 実測図
	.....		.....
131	173		
第 100 図	集石 32 実測図と出土縄文土器	第 135 図	土坑 30、31 実測図
	.....		.....
132	174		
第 101 図	11 区出土縄文土器 1	第 136 図	土坑 32、33 実測図
	.....		.....
133	175		
第 102 図	集石 33 実測図と出土縄文土器	第 137 図	1 区出土縄文土器 1
	.....		.....
135	176		
第 103 図	集石 34 実測図	第 138 図	1 区出土縄文土器 2
	.....		.....
136	178		
第 104 図	集石 34 上縄文土器	第 139 図	1 区出土縄文土器 3
	.....		.....
137	179		
第 105 図	11 区出土縄文土器 2	第 140 図	12 区縄文時代遺構・遺物分布図
	.....		.....
138	180		
第 106 図	11 区出土縄文土器 3	第 141 図	12 区遺物分布域 1
	.....		.....
140	182		
第 107 図	11 区出土縄文土器 4		
	.....		
141			

第142図	12区遺物分布域1出土縄文土器	183	第179図	包含層出土石器1	239
	.....		第180図	包含層出土石器2	240
第143図	12区遺物分布域1出土石器1	186	第181図	包含層出土石器3	242
第144図	12区遺物分布域1出土石器2	187	第182図	包含層出土石器4	243
第145図	12区遺物分布域1出土石器3	188	第183図	包含層出土石器5	245
第146図	土坑34実測図	189	第184図	包含層出土石器6	247
第147図	土坑35実測図と出土縄文土器	190	第185図	包含層出土石器7	248
第148図	12区遺物分布域2	192	第186図	包含層出土石器8	250
第149図	12区遺物分布域2出土縄文土器	193	第187図	包含層出土石器9	251
第150図	12区遺物分布域2出土石器	195	第188図	包含層出土石器10	252
第151図	12区遺物分布域2、3出土石器	196	第189図	包含層出土石器11	253
第152図	焼土土坑12、集石44実測図	197	第190図	包含層出土石器12	254
第153図	12区遺物分布域3	198	第191図	包含層出土石器13	255
第154図	12区遺物分布域3出土縄文土器	200	第192図	包含層出土石器14	256
第155図	12区遺物分布域3出土石器1	202	第193図	包含層出土石器15	257
第156図	12区遺物分布域3出土石器2	203	第194図	包含層出土石器16	259
第157図	12区遺物分布域3出土石器3	204	第195図	包含層出土石器17	260
第158図	12区遺物分布域3出土石器4	205	第196図	包含層出土石器18	261
第159図	焼土土坑13、14実測図	206	第197図	包含層出土石器19	262
第160図	縄文土器分布図	208	第198図	包含層出土石器20	263
第161図	包含層出土縄文土器1	209	第199図	包含層出土石器21	264
第162図	包含層出土縄文土器2	211	第200図	包含層出土石器22	265
第163図	包含層出土縄文土器3	212	第201図	包含層出土石器23	267
第164図	包含層出土縄文土器4	213	第202図	包含層出土石器24	268
第165図	包含層出土縄文土器5	215	第203図	包含層出土石器25	269
第166図	包含層出土縄文土器6	216	第204図	包含層出土石器26	270
第167図	包含層出土縄文土器7	218	第205図	包含層出土石器27	271
第168図	包含層出土縄文土器8	220	第206図	包含層出土石器28	273
第169図	包含層出土縄文土器9	221	第207図	包含層出土石器29	274
第170図	包含層出土縄文土器10	223	第208図	包含層出土石器30	275
第171図	包含層出土縄文土器11	225	第209図	包含層出土石器31	276
第172図	包含層出土縄文土器12	226	第210図	包含層出土石器32	277
第173図	包含層出土縄文土器13	228	第211図	包含層出土石器33	279
第174図	包含層出土縄文土器14	230	第212図	包含層出土石器34	280
第175図	包含層出土縄文土器15	232	第213図	包含層出土石器35	281
第176図	包含層出土縄文土器16	233	第214図	包含層出土石器36	282
第177図	包含層出土縄文土器17	235	第215図	包含層出土石器37	283
第178図	包含層出土縄文土器18	237	第216図	包含層出土石器38	285
			第217図	包含層出土石器39	286
			第218図	包含層出土石器40	287
			第219図	包含層出土石器41	288

第220図	包含層出土石器42·····	289	第257図	11、8区出土石器·····	332
第221図	包含層出土石器43·····	290	第258図	11区出土石器·····	333
第222図	包含層出土石器44·····	292	第259図	5区休場層上層～中層 遺構、遺物分布図·····	335
第223図	包含層出土石器45·····	293	第260図	土坑39実測図·····	336
第224図	包含層出土石器46·····	294	第261図	疊群4、5実測図·····	337
第225図	包含層出土石器47·····	295	第262図	疊群6、7実測図·····	338
第226図	包含層出土石器48·····	296	第263図	疊群8、9実測図·····	339
第227図	包含層出土石器49·····	297	第264図	5区遺構外出土石器·····	340
第228図	包含層出土石器50·····	298	第265図	4区休場層上層～中層 遺構、遺物分布図·····	341
第229図	包含層出土石器51·····	299	第266図	ブロック3～5遺物分布図·····	343
第230図	包含層出土石器52·····	300	第267図	ブロック6、7遺物分布図·····	344
第231図	包含層出土石器53·····	302	第268図	ブロック7出土石器·····	345
第232図	包含層出土石器54·····	303	第269図	ブロック3～7、 4区遺構外出土石器·····	347
第233図	包含層出土石器55·····	304	第270図	12区休場層上層～中層 遺構・遺物分布図、土坑40実測図 ·····	348
第234図	包含層出土石器56·····	305	第271図	土坑41実測図·····	349
第235図	包含層出土石器57·····	306	第272図	土坑42実測図·····	350
第236図	包含層出土石器58·····	307	第273図	ブロック8、9遺物分布図·····	351
第237図	包含層出土石器59·····	308	第274図	ブロック8出土石器·····	352
第238図	包含層出土石器60·····	309	第275図	12区休場層上層～中層 遺構外出土石器·····	353
第239図	包含層出土石器61·····	310	第276図	休場層上層～中層 遺構外出土石器1·····	354
第240図	包含層出土石器62·····	311	第277図	休場層上層～中層 遺構外出土石器2·····	356
第241図	包含層出土石器63·····	312	第278図	休場層上層～中層 遺構外出土石器3·····	358
第242図	包含層出土石器64·····	313	第279図	休場層上層～中層 遺構外出土石器4·····	359
第243図	包含層出土石器65·····	314	第280図	休場層上層～中層 出土接合資料·····	360
第244図	包含層出土石器66·····	315	第281図	休場層上層～中層 遺構外出土石器5·····	361
第245図	包含層出土石器67·····	316	第282図	休場層出土細石核·····	362
第246図	休場層上層～中層 遺物分布図·····	318	第283図	休場層出土細石刃·····	363
第247図	10区休場層上層～中層 遺構、遺物分布図·····	320	第284図	休場層下層～第1スコリア帯 遺物分布図·····	365
第248図	土坑36、37実測図·····	321			
第249図	土坑38、疊群1実測図·····	322			
第250図	疊群2、ブロック1実測図·····	323			
第251図	ブロック1出土石器·····	324			
第252図	10区遺構外、2区出土石器·····	326			
第253図	2区出土石器·····	327			
第254図	3、8、11区休場層上層～中層 遺構、遺物分布図·····	328			
第255図	疊群3、ブロック2実測図·····	329			
第256図	ブロック2、3・8・11区 遺構外出土石器·····	331			

第285図	礫群10実測図	366	第311図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯
第286図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構内出土石器	367	第312図	遺構外出土石器6
第287図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 出土接合資料1	368	第313図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯
第288図	10区休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺物分布図	369	第314図	遺構外出土石器7
第289図	礫群11、12実測図	370	第315図	第0黒色帯、第Ⅰスコリア帯 出土石器
第290図	礫群13、ブロック10実測図	371	第316図	5区第Ⅰ黒色帯～ニセローム層 礫群30、31実測図
第291図	11区休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構、遺物分布図	372	第317図	礫群32、33実測図
第292図	礫群14実測図	373	第318図	礫群34、35実測図
第293図	礫群15、16実測図	375	第319図	礫群36実測図
第294図	礫群17実測図	376	第320図	礫群37実測図
第295図	礫群18・19、ブロック11 実測図	377	第321図	礫群38、39実測図
第296図	ブロック11出土石器	378	第322図	礫群40、ブロック14 実測図
第297図	ブロック11出土接合資料	379	第323図	第Ⅰ黒色帯～ニセローム層 出土石器
第298図	礫群20実測図	380	第324図	第Ⅱ黒色帯遺物分布図
第299図	礫群21、22実測図	381	第325図	第Ⅱ黒色帯、第Ⅲ黒色帯 出土石器
第300図	礫群23、24実測図	382	第326図	11区第Ⅲ黒色帯 遺構、遺物分布図
第301図	礫群25、26実測図	384	第327図	礫群21、ブロック15 実測図
第302図	ブロック12遺物分布図	385	第328図	3区第Ⅴ黒色帯 遺構、遺物分布図
第303図	5区休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構、遺物分布図	386	第329図	ブロック16 遺物分布、接合図
第304図	礫群27・28、ブロック13 実測図	387	第330図	ブロック17 遺物分布、接合図
第305図	12区休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構・遺物分布図、 礫群29実測図	388	第331図	第Ⅴ黒色帯出土石器1
第306図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構外出土石器1	389	第332図	第Ⅴ黒色帯出土石器2
第307図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構外出土石器2	391	第333図	ブロック18 遺物分布、接合図
第308図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構外出土石器3	392	第334図	第Ⅴ黒色帯出土石器3
第309図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構外出土石器4	394	第335図	ブロック19 遺物分布、接合図
第310図	休場層下層～第Ⅰスコリア帯 遺構外出土石器5	395		

第336図	ブロック20 遺物分布、接合図	424	第345図	第V黒色帶出土接合資料9	435
第337図	第V黒色帶出土接合資料1	426	第346図	第V黒色帶出土接合資料10	436
第338図	第V黒色帶出土接合資料2	427	第347図	第V黒色帶出土接合資料11	437
第339図	第V黒色帶出土接合資料3	428	第348図	第V黒色帶出土接合資料12	438
第340図	第V黒色帶出土接合資料4	429	第349図	第V黒色帶出土接合資料13	439
第341図	第V黒色帶出土接合資料5	430	第350図	第V黒色帶出土接合資料14	440
第342図	第V黒色帶出土接合資料6	431	第351図	第V黒色帶出土接合資料15	441
第343図	第V黒色帶出土接合資料7	433	第352図	第V黒色帶出土接合資料16	442
第344図	第V黒色帶出土接合資料8	434	第353図	第V黒色帶出土接合資料17	443
			第354図	第VI黒色帶出土石器	444

## 写真図版目次

図版1	調査区全景	図版16	土坑1遺物出土状況	
図版2	基本土層断面		田戸下層式土器と縄文土器の 共伴状況	
	4号墳出土玉類	図版17	集石24出土状況	
図版3	3号墳出土玉類		集石25出土状況	
図版4	3号墳出土金属製品	図版18	集石14断面	
	3号墳出土金属製品X線透過写真		集石16出土状況	
図版5	4号墳出土金属製品	図版19	集石17出土状況	
	4号墳出土金属製品X線透過写真		集石22出土状況	
図版6	共伴した田戸下層式土器と縄文土器	図版20	集石30出土状況	
図版7	第V黒色帶出土接合資料		集石34出土状況	
図版8	第V黒色帶出土接合資料と 第VI黒色帶出土石器	図版21	礫群18出土状況	
図版9	竪穴住居跡1遺物出土状況		礫群25出土状況	
	竪穴住居跡1完掘状況	図版22	第V黒色帶遺物出土状況	
図版10	竪穴住居跡2床面検出状況		第VI黒色帶遺物出土状況	
	1号墳完掘状況	図版23	3号墳出土七大刀	
図版11	2号墳石室完掘状況		3号墳出土大刀X線透過写真	
	2号墳墓坑完掘状況	図版24	3号墳第3遺物群	
図版12	4号墳石室完掘状況		3号墳第3遺物群X線透過写真	
	4号墳墓坑完掘状況	図版25	3号墳第4遺物群	
図版13	3号墳石室完掘状況		3号墳第4遺物群X線透過写真	
	3号墳閉塞石検出状況	図版27	2号墳出土遺物	
図版14	3号墳閉塞石検出状況		2号墳出土遺物X線透過写真	
	3号墳墓坑完掘状況	図版28	平安時代～古墳時代出土土器	
図版15	3号墳第3遺物群出土状況		図版29	縄文時代早期の土器
	3号墳第4遺物群出土状況	図版30	縄文時代前期～後期の土器	
		図版31	遺物集中域1出土縄文土器	

- |      |                 |      |                           |
|------|-----------------|------|---------------------------|
| 図版32 | 12区遺物分布域Ⅰ出土縄文土器 | 図版45 | 打越式土器                     |
| 図版33 | 12区遺物分布域Ⅱ出土縄文土器 | 図版46 | 清水柳E類土器、上ノ山式土器、<br>入海式土器他 |
| 図版34 | 12区遺物分布域Ⅲ出土縄文土器 | 図版47 | 十三菩提式土器                   |
| 図版35 | 撚糸文土器           | 図版48 | 大歳山式土器                    |
| 図版36 | 撚糸文土器と山形文土器     | 図版49 | 五領ヶ台Ⅰ式土器                  |
| 図版37 | 撚糸・山形文土器        | 図版50 | 曾利IV・V式土器                 |
| 図版38 | 梢円文土器Ⅰ          | 図版51 | 12区出土縄文時代石器               |
| 図版39 | 梢円文土器Ⅱ          | 図版52 | 2区出土縄文時代石器                |
| 図版40 | 梢円文土器Ⅲ          | 図版53 | 打製石斧                      |
| 図版41 | 沈線文土器           | 図版54 | 休場層上層～中層出土石器Ⅰ             |
| 図版42 | 野鳥式土器           | 図版55 | 休場層上層～中層出土石器Ⅱ             |
| 図版43 | 鶴ヶ島台式土器Ⅰ        | 図版56 | 休場層下層以下出土石器               |
| 図版44 | 鶴ヶ島台式土器Ⅱ        |      |                           |

# 第1章 調査の概要

## 第1節 第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

昭和62年 東名・名神高速道路の混雑緩和の対策として、道路審議会において、第二東名、第二名神高速道路の建設が建議された。

平成元年 第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、神奈川県横浜市から愛知県東海市に至る第二東名高速道路（以下、第二東名）が計画された。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置し、静岡県教育委員会文化課（以下、文化課）もこの協議に参加した。

平成3年 第二東名の基本計画について、文化財を含む環境調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図り、9月24日、静岡県の長泉町から引佐町（現浜松市、以下同じ）に至る都市計画の決定が告示された。

平成4年 環境調査と並行して、埋蔵文化財の分布状況も把握された。第二東名建設に係る調査の指示を受けた日本道路公団（現中日本高速道路株式会社、以下同じ）は、2月17日付けで文化庁にこれを通知するとともに、5月11日付けで、日本道路公団東京第一建設局長（以下、建設局長）から静岡県教育委員会教育長宛て（以下、県教育長）に、第二東名建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査が依頼された。また、8月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長（以下、事務所長）から県教育長宛てに、「第二東名自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」が照会された。これを受けて県教育委員会は、9月29日に関係市町村教育委員会の関係者を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在について、当該市町教育委員会に照会し、当該教育委員会から回答を得た。

平成5年 県教育委員会はこの回答をもとに協議を行い、結果を3月18日付けで、県教育長から事務所長宛てに回答した。この時点で、調査対象箇所は136箇所、調査対象面積は1,453,518m<sup>2</sup>となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、11月19日付けで日本道路公団に施工命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局及び静岡県土木部高速道路建設課、文化課で、埋蔵文化財調査の進め方を協議した。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について検討するとともに発掘調査の実施については日本道路公団が財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、当財團）に委託することが確認された。しかし、短期間に膨大な調査を行うための体制作りが課題となった。

平成6年 文化課が調査対象箇所の状況を調査するとともに、前年度に告示されたパーキングエリア、サービスエリア建設予定地内の踏査を、当該市町教育委員会に依頼。その結果、調査対象地は133箇所、調査対象総面積は1,286,759m<sup>2</sup>となった。

平成7年 日本道路公団静岡建設所と文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、12月13日に第1回会議が行われた。

平成8年 第二東名に係る埋蔵文化財調査に向けて、建設局と県教育委員会は、9月24日付けで埋蔵文化財の取り扱いに関する確認書を締結した。さらに調査実施機関である当財團を加えた三者は、9月25日付けで第二東名に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について定めた協定書を締結し、年度内に調査を始めることになった。そして、掛川市、浜北市（現浜松市）で確認調査を始めた。

平成9年 本格的に発掘調査を開始した。これ以降、原則として第二東名の本線、サービスエリア、パーキングエリア、廃土処分場については、当財團が調査を実施、工事用道路、取り付け道路部分については、当該市町教育委員会が対応することとし、現在に至っている。

## 第2節 発掘調査の方法と経過

### (1) 発掘調査の方法

遺跡の測量や遺物の出土位置の特定などのため、平面直角座標系Ⅶ系のX=-93700、Y=33960を原点として調査区全体に10m四方の方眼を設定した。そして、Y軸に対して南から北に向かってアルファベット、X軸に対して西から東へアラビア数字によって記号をつけた。10m四方のグリッドの名称は、南西隅の記号をとり、R31区、W36区のように呼ぶこととした。

遺構の測量や遺物の出土位置は、株式会社トブコンのトータルステーションGTS-700を使用して、国家座標により記録し、そのデータは株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」にて管理した。

### (2) 現地調査

第二東名高速道路の工事工程に合わせて調査するため、第1回のように調査区を設定し、中日本高速道路との協議を経て、調査区ごとに確認調査と本調査を実施した。以下、年度ごとに調査の経過を記す。  
平成11年度（1区、2区、3区-1、4区と8区の縄文時代までを調査）

石組の竈を持つ平安時代の堅穴住居跡を1軒検出した。竈は、焚口から煙道にかけて、石を二列に配置し、その上に天井石を乗せて作ってある。竈に使われたと思われる礫は、住居跡の床面からも多数出土したことから、住居廃絶に伴って竈を破壊する行為があったと思われる。また、この住居跡の床面から炭化物や焼け土が出土したことから焼失した可能性も考えられた。

2号墳と3号墳を調査した。2号墳は、有段無袖式の横穴式石室を持つ古墳で、後世の搅乱によって上部を破壊され、根石と礫床が残っていただけであったが、礫床上面で鉄鏃が出土した。

3号墳は、有段無袖式の横穴式石室を持つ古墳で、床面付近が良好に残っており、6世紀後半～7世紀前半の須恵器、各種玉類、大刀、鉄鏃など、多くの副葬品が出土した。また、副葬品の位置や礫床を作り直した状況、閉塞石を積み直した状況などから、5回以上の追葬を想定できた。さらに、3号墳の墓道に接して検出した土坑からは、3号墳と同時期の須恵器がまとまって出土したことから、3号墳の墓前祭祀を行った土坑の可能性が考えられた。

縄文時代の調査では、住居跡と集石を検出した。住居跡は2基検出し、1基は床面に炉を作つてあった。もう1基は崩れた方形で、検出できた掘り込みも浅く、住居跡かどうか苦慮したが、住居跡の可能性がある遺構として記録した。遺物では、早期～中期の土器群や石鏃、打製石斧などが出土した。

平成12年度（3区-2、5区、10区～12区、4区と8区の旧石器時代を調査）

1号墳と4号墳を調査した。1号墳は、調査当初から大きな搅乱を受けていることが予想でき、調査でも予想通り、周溝と主体部の痕跡しか検出できなかったが、直径6～7mの円墳であると考えられた。

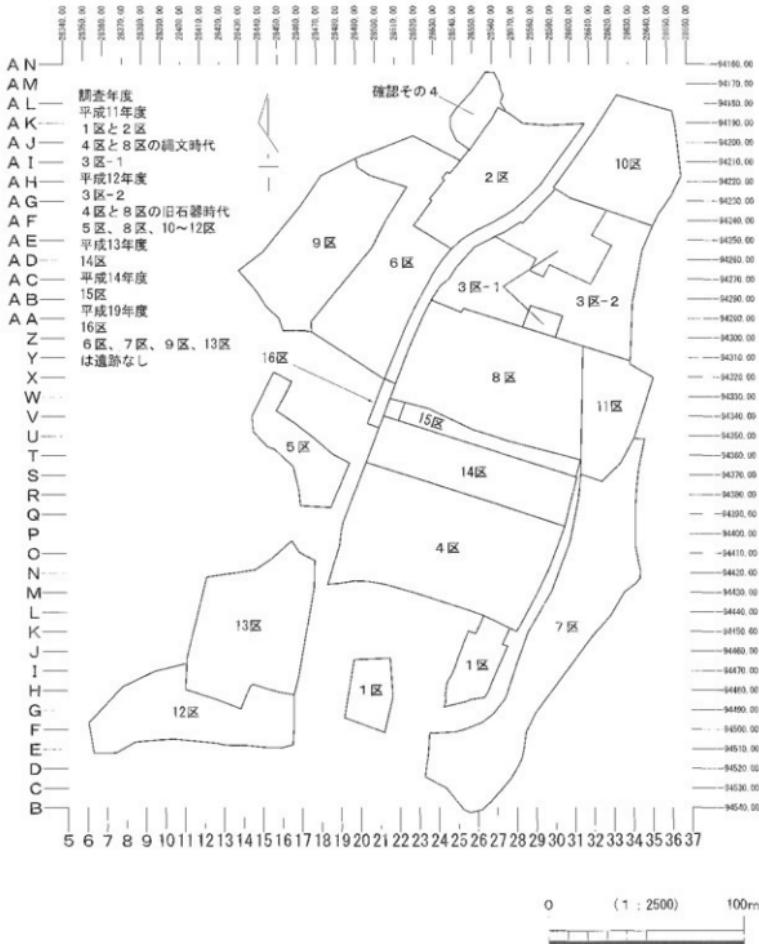
4号墳は、有段無袖式の横穴式石室で、根石と床面が残っていた。礫床から土師器の环や大刀、鉄鏃、耳環、玉類が出土した。古墳の築造は6世紀後半から7世紀初頭と考えられた。

縄文時代の調査では、尾根上の平坦部で集石群を検出した。また、早期末の沈線文土器と梢円文土器が入れ子状になって出土した。系統の異なる土器の並行関係を考える上で興味深い事例である。

旧石器時代の調査では、尾根上の平坦部の休場層、第I黒色帶、第II黒色帶、第V黒色帶からブロックと礫群を検出した。第V黒色帶では、近接して複数のブロックが出土し、接合作業によるブロック間の関係の解明に期待がもたれた。一方で、静岡県で発見が相次いでいる旧石器時代の落とし穴状の土坑の検出を期待したが、今回の調査区内では存在しなかった。

平成13年度（14区調査）

第VI黒色帶から礫器と剥片が1点ずつ出土した。後期旧石器時代の初頭に当たると考えられ、貴重な資料である。この層から、炭化物を採集できたため、放射性年代測定を依頼した。



第1図 調査区全体図

平成15年度（15区調査）

調査面積は狭かったが、第VII黒色帯で配石のような礫が分布しているのを確認した。本来、礫が含まれる地層ではないため、人間が持ち込んだ可能性がある。

平成19年度（16区調査）

狭い調査区で、大きな搅乱を受けていたが、第VII黒色帯～中部ローム層が残っていることが予想され、後期旧石器時代初頭の石器群の出土を期待したが、遺物は出土しなかった。

なお、6区、7区、9区、13区については、事前に調査区を設定し、その後に確認調査を行ったが、遺跡が存在しないことがわかったため、本調査を実施していない。

### （3）資料整理、報告書作成

平成19年1月～平成22年3月まで袋井整理事務所で行った。

#### 古墳時代の整理作業

1号墳～4号墳の整理作業を行った。このうち3号墳は、横穴式石室の床面が良好に残っており、須恵器、大刀、鉄鎌、玉類など、多くの副葬品が出土したため、鉄製品の保存処理と並行して実測、詳細な遺物の分布図を作製した。複数回の追葬があることは確実であったため、遺物の出土状況や出土位置、遺物群の分類と組み合わせなどを詳細に検討し、埋葬回数とその時期の特定に重点を置いた。現地では、古墳の調査所見を詳細に記録してあり、整理作業ではおおいに有効であった。

#### 縄文時代の整理作業

炉跡や集石、土坑が多く検出されたため、それらの図面を作成した。包含層からは縄文早期～中期の土器がまとまって出土したため、その接合と復元、実測を行った。中でも複雑な文様を持つ中期の曾利I式は圧巻であった。前期末の十三菩提式土器は、文様のバリエーションが多く、良好な一括資料になると思われる。また、十三菩提式土器と大歳山式土器の折衷土器も確認でき、両型式の密接な関係をうかがうことができた。

縄文時代の石器では、尖頭器と石鎌、打製石斧が多く見られ、その実測に重点を置いた。休場層よりも上に堆積した宮士黒土層や栗色土層などからは、縄文時代の遺物とともに、旧石器時代の遺物も出土するため、器種によっては、縄文時代の石器と旧石器時代の石器の分離ができないものがあった。今回の整理作業では、休場層よりも上の層から出土した石器のうち、ナイフ形石器と細石器以外の石器は縄文時代に帰属させた。

#### 旧石器時代の整理作業

文化層の設定に重点を置いた。特に休場層の上層、中層、下層での文化層の設定と、ナイフ形石器文化期の遺物と細石器文化期の遺物の分離の検討には時間を要した。休場層上層と下層が別の文化層になることは、想定できたが、休場層中層を独立した文化層にするのか、上層、あるいは下層と同じ文化層に含めるのかは判断に苦しんだ。

休場層よりも下の層は、遺物の分布と出土層が明瞭であったため、文化層の設定も容易であった。

第V黒色帯では、原石を持ち込んで剥片剥離作業を行ったことを示す、良好な接合資料が得られた。

個体別資料の分類については、黒曜石は、同一原産地での個体別分類は不可能であった。黒曜石とともに主要石材を占めるホルンフェルスは、風化が進んでいる上に、特に風化が進んでいる石器は、表面の剥落を防ぐために、現地で強化処理をした。強化処理をした石器は、薬剤の浸透によって茶色に変色するため、個体別分類は不可能になった。実際に接合作業をやってみると、強化処理をしていない白く風化したホルンフェルスと、強化処理によって茶色になったホルンフェルスは相次いで接合した。このため、ホルンフェルスの個体別分類は断念した。

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 地理的環境

愛鷹山（標高1,504m）は、富士山の南側にある山で、40年前から10万年前まで活動していた成層火山である。愛鷹山麓の南東側に広がるなだらかな丘陵地は、この火山活動によって形成された。また、この火山活動でできたデイサイトは、台石や石皿、石斧などの石器の材料として使われた。

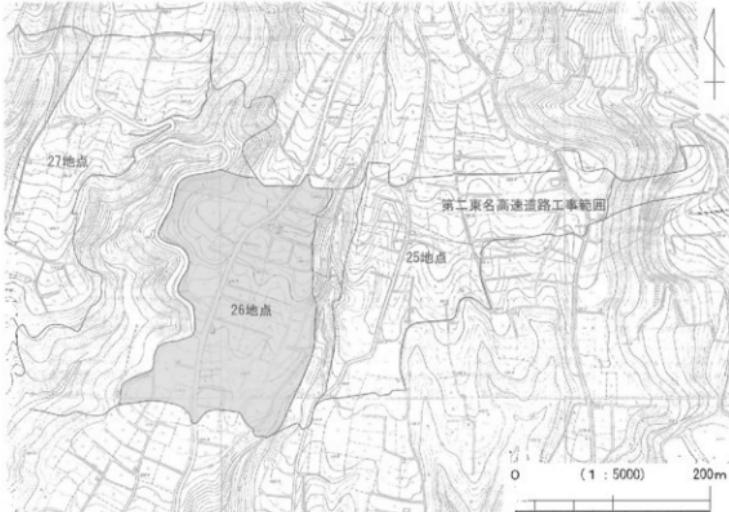
愛鷹山が火山活動を終えた後、8万年前、今の富士山の前身である古富士が火山活動を始めた。この噴火は激しいもので、多量の火山灰を噴出しながら、現在の富士山へと成長した。この火山灰は、偏西風で西に運ばれ、関東ローム層形成の一因にもなったが、火山灰は主に西に運ばれたため、愛鷹山山麓に積もった火山灰の厚さは4m程度である。

愛鷹山麓に積もった火山灰は、ローム化して愛鷹ローム層と呼ばれている。この中で上部のローム層に遺跡が残っている。このローム層は、腐植質土壤の黒色帯と、激しい噴火で短時間に堆積したスコリア層が交互に堆積している。

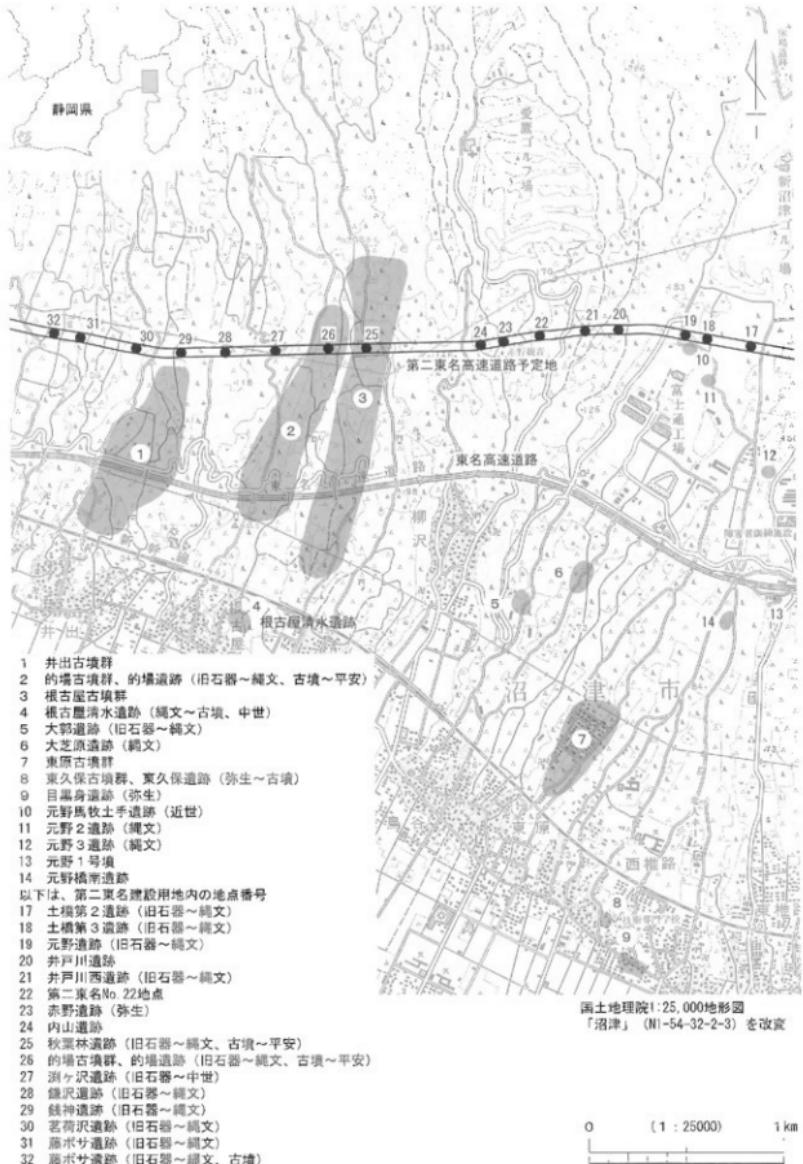
この愛鷹ローム層が堆積した愛鷹山麓は、いくつもの川が南北方向に谷を刻み、谷に挟まれた丘陵地は、眺望が開けた良好な居住地で、丘陵地上には旧石器時代以降の多くの遺跡がある。

的場古墳群、的場遺跡は、上記のような開析谷に挟まれた緩斜面上にあり、北に富士山、南に駿河湾を望む雄大な光景が広がっている。地形の詳細を第2図に示す。第二東名高速道路の工事範囲内で、遺跡がある範囲には、それぞれ番号が付けられており、的場古墳群、的場遺跡は、その中で「26地点」と呼ばれる場所である。西側には深い谷があり、その谷を挟んで西側の丘陵上、27地点と呼ばれる所に淵ヶ沢遺跡がある。東側には浅い谷があり、その谷をはさんで東側の25地点に秋葉林遺跡がある。

的場古墳群、的場遺跡がある丘陵は、昭和40年代の農業基盤整備事業により大きく削平し、起伏の少ない茶畠になっている。



第2図 周辺地形図



第3図 周辺遺跡分布図

## 第2節 歴史的環境

周辺での遺跡分布を第3図に示す。沼津市の元野遺跡では、第二東名建設に伴う調査で、愛鷹ローム層の第VII黒色帯から石器が出土した。放射性炭素年代測定で、3万年を越える年代値が出ている層から石器が出土したこと、日本最古級の石器として話題になった。その後、第二東名建設に伴って調査したNo25地点、No27地点、東細尾遺跡、富士石遺跡、梅ノ木沢遺跡、向田A遺跡、そして、今回報告する的場遺跡でも第VII黒色帯から遺物が出土し、日本最古級の石器群として貴重な資料が蓄積された。

愛鷹山の南東側山麓は、東にある箱根山麓と並んで、旧石器時代の落とし穴が集中する地域でもある。これらはいずれも愛鷹ローム層の第III黒色帯に掘りこまれたもので、硬いスコリア層を掘り抜いて作られている。1986年、三島市の初音ヶ原B遺跡で60基もの土坑が並んで発見されて以降、愛鷹山麓と箱根西麓では、当然のようにこうした土坑の発見が相次いだ。

第二東名建設に伴う調査でも、No27地点、No28地点、東細尾遺跡、富士石遺跡、東野遺跡、塚松遺跡、向田A遺跡などで土坑が発見されているが、今回報告する的場遺跡では発見されなかった。

ニセローム層と呼ばれる層には、2万5千年前の始良丹沢火山灰が含まれ、他の地域との年代比較の材料になっている。その上層に堆積している黒色帯や休場層には非常に多くの遺跡が残されている。

縄文時代に入ても愛鷹山南東山麓には多くの遺跡が分布する。縄文時代草創期～前期は遺跡の多い時期で、沼津市の葛原沢IV遺跡では、縄文時代草創期の押圧縄文土器を伴う竪穴住居跡が発見されており、縄文時代に入って間もなく定住に近い生活が始まつたことがうかがえる。また、清水柳北遺跡では、縄文時代草創期の良好な石器ブロックが発見されている。

縄文時代早期になると遺跡数が急増する。尾上イラウネ遺跡や清水柳北遺跡などで、この時期の良好な集落が発見されている。また、早期前半になると、この地域独特の土器型式が見られるようになる。「駿豆燃文系土器」はその代表である。

早期後半になると、清水柳E類、元野式といった独自の土器型式が見られると同時に、木島式のように東海系の土器が下地となって、この地域で独自に発達した型式や、南関東や長野県の土器が下地となって発達した型式が見られるようになり、この地域が各方面の文化的交流地になっていたことがわかる。

この時期、集落を外れた地域には、落とし穴が多く作られた。沼津市の植出遺跡や拓南東遺跡では、丘陵上や尾根上に列をなした落とし穴が発見されている。多くの落とし穴には、そこに逆茂木を刺したと思われる小さな穴が複数掘られている。

このような縄文時代集落の盛行は縄文時代前期前葉までは続くが、その後は徐々に遺跡数が減り、前期末には無人の地になってしまったかのように遺跡が見られなくなる。長野県や関東地方で縄文時代中期以降、遺跡数や規模が増大する傾向と対照的である。

次に愛鷹山麓に遺跡が見られるようになるのは、弥生時代後期以降である。沼津市の植出遺跡では、弥生時代後期の大規模な集落が発見されている。ここでは、竪穴住居跡が301軒、掘立柱建物跡54棟の他に方形周溝墓などが発見された。また、尾上III橋西遺跡や清水柳北遺跡では、弥生時代後期の大規模な墳丘墓が発見されている。

古墳時代前期の遺跡は見られないが、後期になると、6世紀初頭の長塚古墳や、年代は明らかでないが、長塚古墳に先行するととも考えられる子ノ神古墳といった前方後円墳が出現する。

その後、6世紀後半から7世紀初頭になると、群集墳が作られるようになり、古墳の数は激増する。清水柳2号墳や虎杖原古墳などが築かれる。荒久城山古墳からは金銅製の馬具が出土しており、二ツ塚古墳からは單鳳環頭大刀が出土している。今回報告する的場古墳群もこの一例である。

参考文献『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』沼津市 2006年

### 第3節 層位と文化層の設定

#### (1) 層位

休場遺跡での層位を第4図と第5図に示す。愛鷹山麓の標準的な層位であるが、第4図のD、F地点や第5図のM地点では、多くの部分が削平を受けている。また、第5図のJ地点では、流れ込みによる再堆積も見られる。

#### (2) 文化層の設定

##### 休場層上層～中層、休場層下層～第Iスコリア帶

休場層上層、休場層中層、休場層下層、その下の第0黒色帯に何枚の文化層があるのか検討した。まず、休場層中層の扱いを検討した。この時に重要なのが接合関係であるが、休場層中層から出土した遺物は、休場層上層、休場層下層の両方の遺物と、どちらが多いということもなく接合しているため、接合関係からは判断できなかった。

次に疊群の出土レベルを検討したところ、休場層下層から出土した疊群の多くは、出土レベルが一定しており、まとまった一群になることから、休場層下層と休場層中層を別の文化層と考えた。

休場層中層と休場層上層との分離については、疊群の出土レベルの他に、ナイフ形石器の形態も含めて検討したが、分離できなかったため、休場層中層と上層を同じ文化層として扱うこととした。

休場層上層で常に問題になるのが、ナイフ形石器と細石器の分離であるが、分布が重なるうえに、両者とも同じ産地の黒曜石を使っていることなどから、分離できなかった。

次に、休場層下層～第Iスコリア帶を分離できるか検討した。休場層下層～第0黒色帯では遺物の分布が重なり、同一遺構でも遺物の分布が両層にまたがるもののが多かったため、休場層下層～第0黒色帯は同一文化層と考えた。5区と11区では、この下に堆積している第Iスコリア帶から、少数の石器が出土しているが、分布が休場層下層～第0黒色帯と重なるため、休場層下層～第Iスコリア帶で1つの文化層にした。

##### 第I黒色帯～ニセローム層

第I黒色帯～ニセローム層の遺物は、5区で集中して出土した。上下の層からは遺物がほとんど出土していないため、第I黒色帯～ニセローム層を1つの文化層とした。

##### 第II黒色帯

13区内の確認調査で、遺物が散在している状況が確認できた。その後の調査では、周囲からは遺物は出土せず、上下の層にも遺物が認められなかったため、遺物は少ないながらも単独の文化層にした。

##### 第III黒色帯

ほとんどの遺物が11区から出土している。上下の層からは遺物が出土しておらず、接合もこの層内に収まるため、1つの文化層にした。

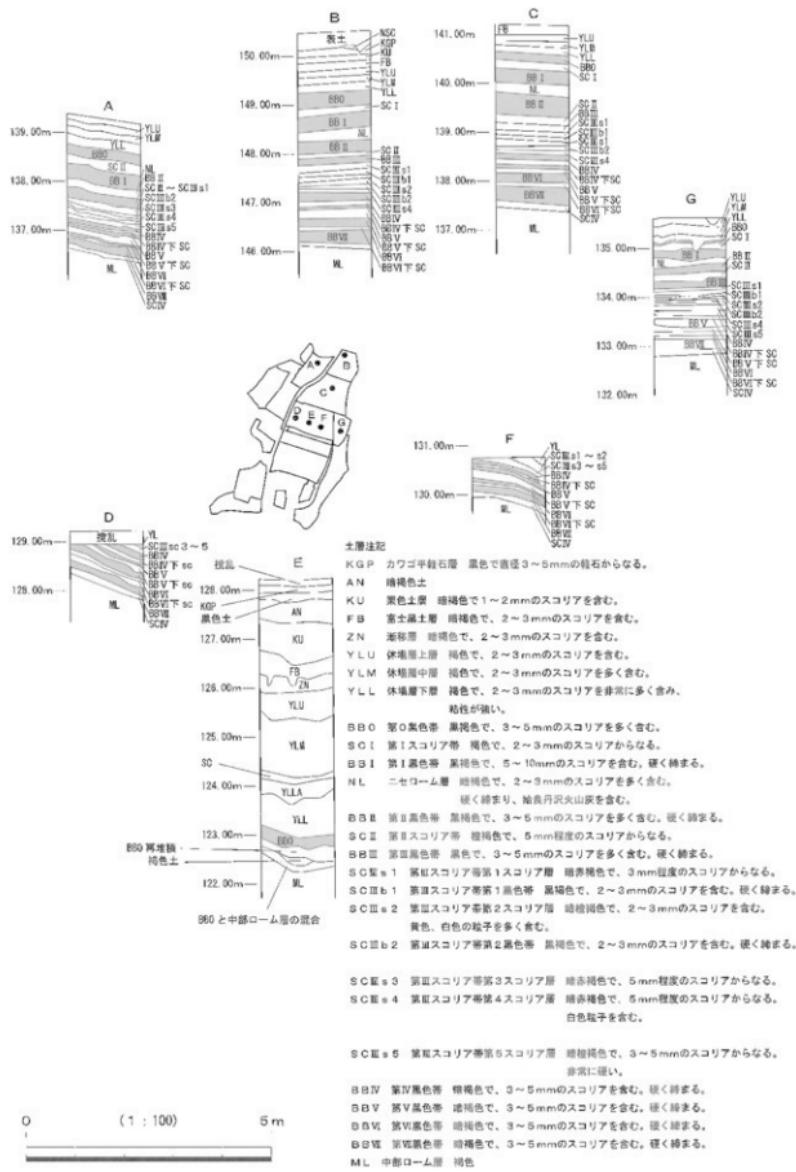
##### 第V黒色帯

3区の南半で遺物が集中して出土した場所がある。上下の層からはほとんど遺物は出土しておらず、接合関係も層内に収まるため、単独の文化層にした。

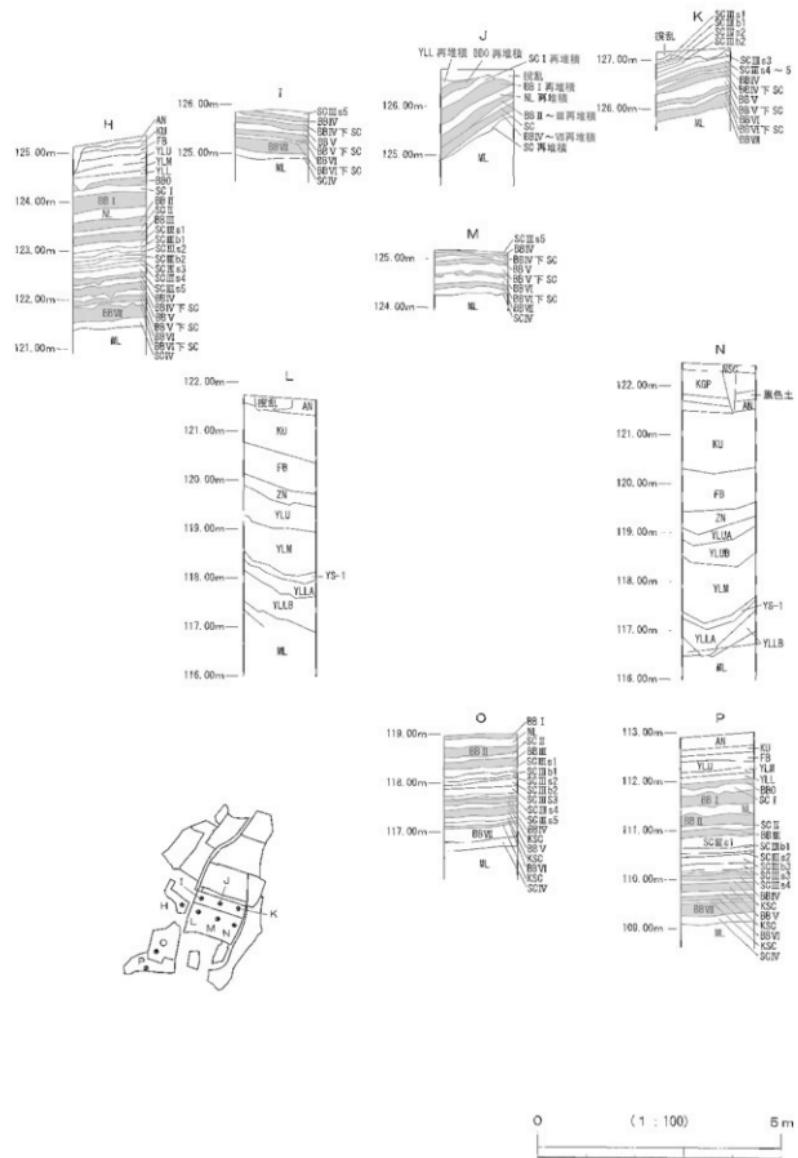
##### 第VII黒色帯

14区の一部で石器が2点出土しただけであるが、上層からは遺物が出土していないため、単独の文化層と考えた。

なお、以上の他に、中部ローム層から疊が数点出土している。石器と考えられるものはないが、本来、疊が含まれている層ではなく、人間が持ち込んだ可能性を考えられる。文化層は設定しないが、今後の課題として残しておく。



第4図 土層図1



第5図 土層図2

## 第3章 平安時代の調査

平安時代の遺構は、第6図に示すように、2区で竪穴住居跡を1軒検出した。周囲に比べてやや疎んだ場所である。周囲に同時代の遺構はなく、孤立した存在である。

### (1) 竪穴住居跡 1

一辺3m程の方形の竪穴住居である。平面図と断面図、及び完掘状況を第7図に示す。四隅には柱穴が明顯に残っており、壁際には排水用と思われる溝も検出できた。排水用と思われる溝は、住居跡の北西側で切れている。この部分はちょうど竈の反対側であり、ここに住居の出入り口があったと思われる。平面図左下の柱穴は、柱穴の建て替えがあつたらしく、2つの柱穴が切り合って検出できた。

住居の南東隅には、第8図に示す石組の竈が残っていた。上り窓のような構造になっており、構築過程は下記のとおりである。

- 1 焚口と煙道を掘る。煙道は3段の階段状に掘る。
- 2 焚口を煙道の側壁に沿って板状の礫を並べ、竈の壁を作る。
- 3 板状の礫の上に、同じく板状の礫を渡し、天井を作る。

焚口には焼上がり固まっている上に、竈の周縁部や竈を作っている礫も焼けていることから、日常的に竈を使っていたことがうかがえる。焚口と煙道の境界付近には、分煙柱のような礫が見られるが、これは、竈にかけた土器を支えるための石であろう。

竈内の堆積状況を観察すると、1層が焚口に堆積した焼土で、2層と3層、7層、8層は、竈内の整地と壁材の固定を目的に貼った粘土と思われる。4～6層は煙道から流れ込んだ土である。

住居内の床には、竈を中心にして焼土と炭化物が分布していることから、この住居が焼失していることがうかがえる。そして、焼け土と炭化物の分布から、火元は竈であると考えられる。

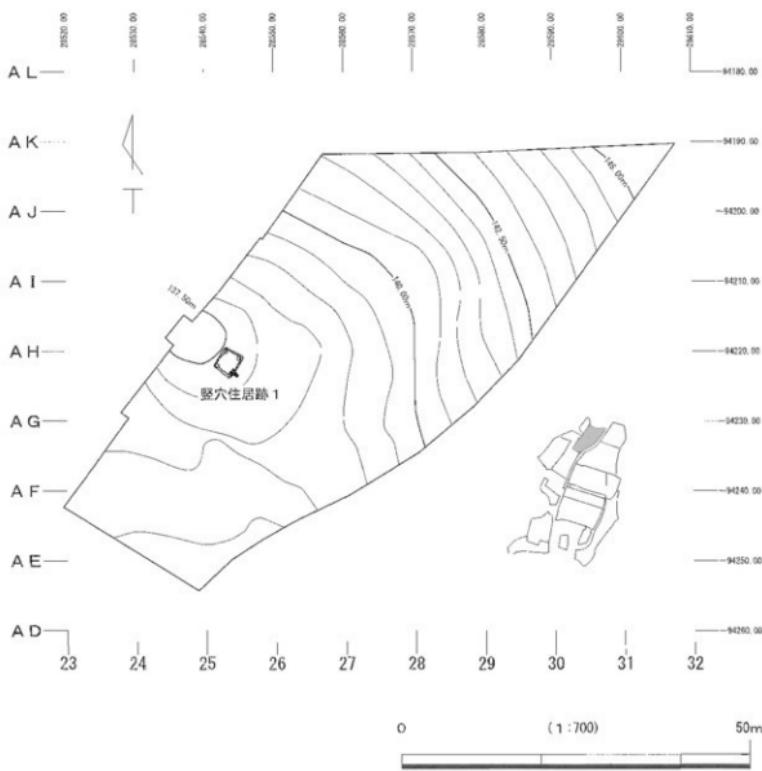
住居内に堆積した層のうち、6層は床面に張った粘土で、それより上に堆積した層が、住居焼失後の堆積である。床面付近から竈の構築材と思われる礫が多数出土したが、残っている竈を見る限り、竈が破壊されているように見えない。竈を作り直すための礫、あるいは作り直した後の礫と考えた方が良さそうである。床面で採集した炭化物から、測定値で $1,240 \pm 30$ yrB.P.の年代が得られている。

出土遺物を第8図に示す。1は、灰釉陶器の椀である。口縁部付近に釉がかかるが、口縁部はやや外反している。底部には糸切り痕がわずかに残る。高台は、底部に粘土板を張り付け、底を厚くしてから高台を付けた、付け足し高台である。旗指古窯産で、時期は10世紀前半と考えられる。

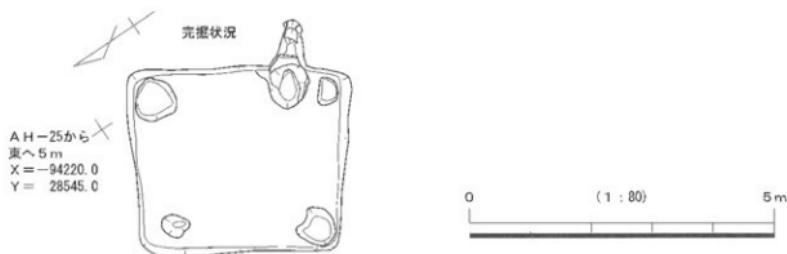
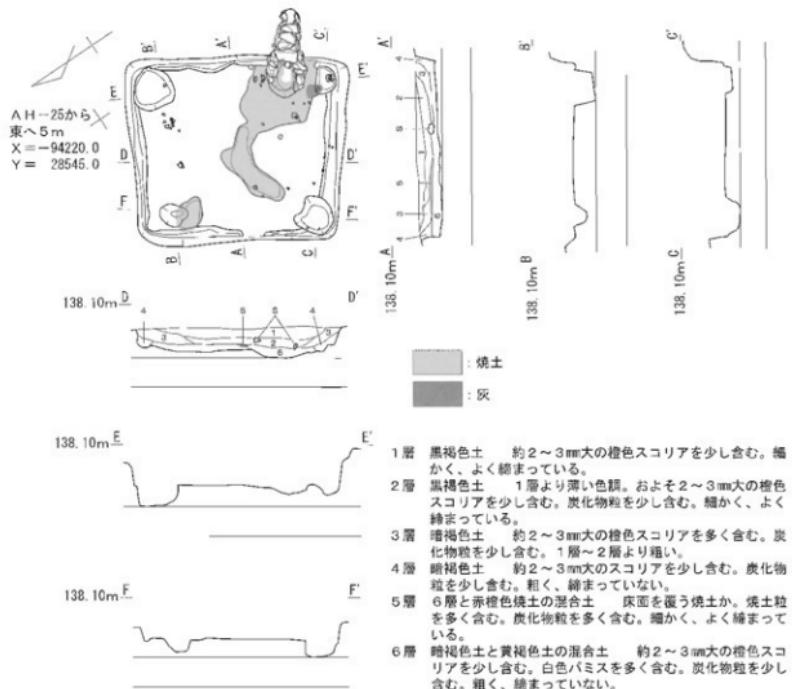
2は土師器の环である。外面は、口縁部はなでてあるが、胴部は指の押圧によって仕上げてある。これに対して内面は丁寧になでて仕上げてある。また、底部には木の葉の圧痕が残っている。底部には、胴部の粘土が覆いかぶさるように重れていることから、この土器を作る際、粘土の円盤で底部を作り、その上に粘土紐を乗せて胴部を作り、その際、粘土紐を底部の円盤に固着させた様子がうかがえる。

3も土師器の环である。内外面とも丁寧になでてあるが、外面はなでが強く、胴部中ほどには、なでの境界が大きな稜線になって飛び出している。底部は不定方向になでて、ほぼ真っ平らに仕上げてある。器形は、灰釉陶器を模倣しているようである。4は土師器の高环で、外面は指による押圧の後なでて仕上げてある。内面は丁寧になでてある。脚部は欠損しているが、欠損部分を観察すると、脚部は外側に大きく開いていたようである。5は土師器の环で、口縁部は残っていない。内外面とも丁寧になでて仕上げてある。底部は丁寧になでてあり、平らになっているが、木の葉の圧痕と思われる痕跡がわずかに見える。実測図の底部外面にある稜線は、底部をなでた時に外側にはみ出した粘土を指でなでた跡である。

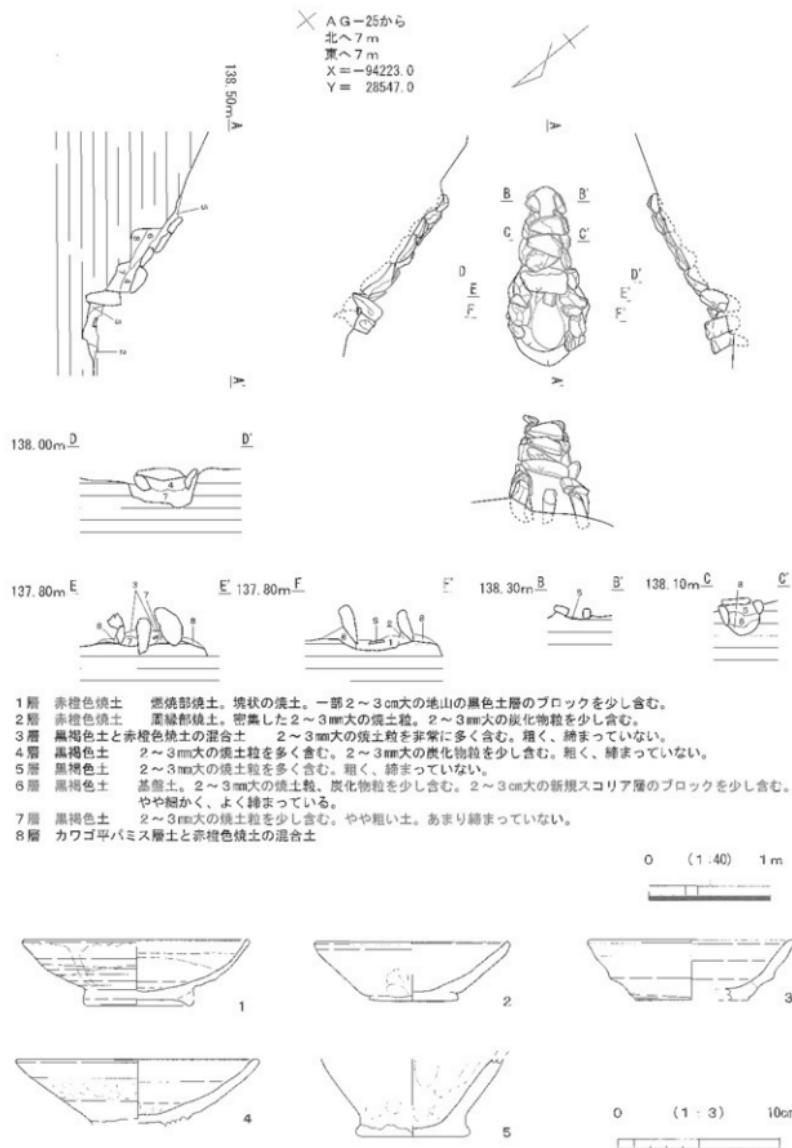
2～5の時期は、土器そのものからは推定しにくいが、1の灰釉陶器とともに出土したことから、10世紀前半と考えて良い。



第6図 平安時代遺構分布図



第7図 積穴住居跡1



第8図 竪穴住居跡1の竪と出土土器

## 第4章 古墳時代の調査

的場古墳群の調査では、4基の古墳と土坑を1基調査した。土坑は、古墳に隣接しているうえに、隣接する古墳と同時期の土器がまとまって出土しており、古墳との密接な関係をうかがわせる。

### (1) 1号墳

#### 検出状況

第9図に示すように、南北に細長く伸びた尾根の先端近くの緩斜面上にある。この古墳のすぐ東側は、深い谷に向かう急な崖になっている。西側は浅い谷に向かって緩やかに下っていく。この古墳がある辺りは、檜の植林地であったためか、農業基盤整備事業の対象地ではなく、旧地形を保っている。

調査前は、檜林となっており、古墳周辺には笹竹が密集していたため、立ち入りが困難であった。古墳の主体部と思われる部分は、浅い溝地のようになっており、石室に使われたと思われる石が露出していたことから、墳丘、主体部ともに相当な攪乱を受けていると予想できた。

表土を除去したところで、周溝が明瞭に検出できたため、古墳の規模は容易に把握できた(第10図)。また、予想通り大きな攪乱も検出し、墳丘は残っておらず、主体部の残存も絶望的であった。

表土除去後、第10図にトーンで示した範囲で、この古墳の築造前に整地した痕跡を確認することができた。薄いトーンで示した範囲が、表土除去後、富士黒土層が見られず、その下の休場層が露出している範囲である。この部分は、周囲に比べて盛り上がっていていることから、富士黒土層と休場層の一部を除去して、古墳を築造する部分が盛り上がって見えるように地形を改変したと推定される。濃いトーンで示した部分は、表土除去後、平坦に近くなっていた部分で、古墳築造前に削平した部分と推定される。

#### 周溝

第10図に示したように、周溝は馬蹄形に近い円形にめぐり、規模は南北約7m、東西約6mで、石室の開口部に当たると思われる南側は途切れている。深さは、80cm~50cmで、断面は逆台形になっている。周溝の底は、凹凸が顕著に見られる。掘削した時の工具の痕跡かもしれない。

#### 主体部

主体部は4回にわたる攪乱により、破壊されていた。攪乱土の観察から、下記のことがわかる。

最初の攪乱上からは18~19世紀の瀬戸焼された灯明皿が出土したことから、この時期に最初の攪乱が入ったと思われる。

次の攪乱土には、石室に使われたと思われる礫が入っている。礫は長さ50~70cm、幅40~50cmの分厚い板状で、横穴式石室の側壁に使われた礫と思われる。このことから、2回目の攪乱の時に石室が大きく破壊されたと考えられる。

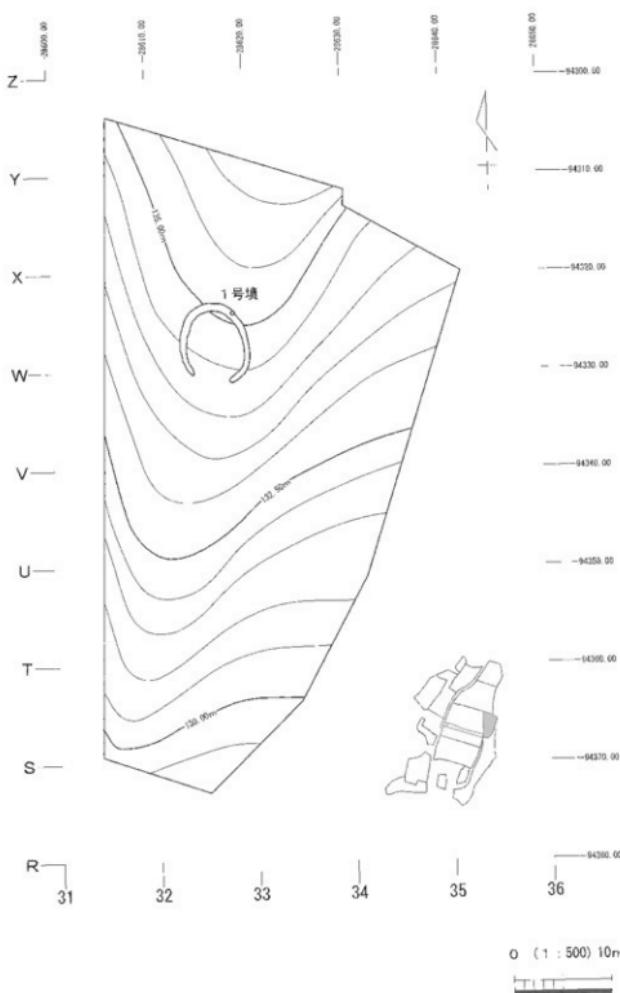
3回目の攪乱は、主体部想定位置の中央付近に入っている。この攪乱で石室は、床面まで完全に破壊されたと考えられる。

4回目の攪乱土は、3回目の攪乱土の上に見られる。現代の表土に似た黒色土で、焼け土を多く含んでいることから、伐採した木などを燃やした痕跡と思われる。

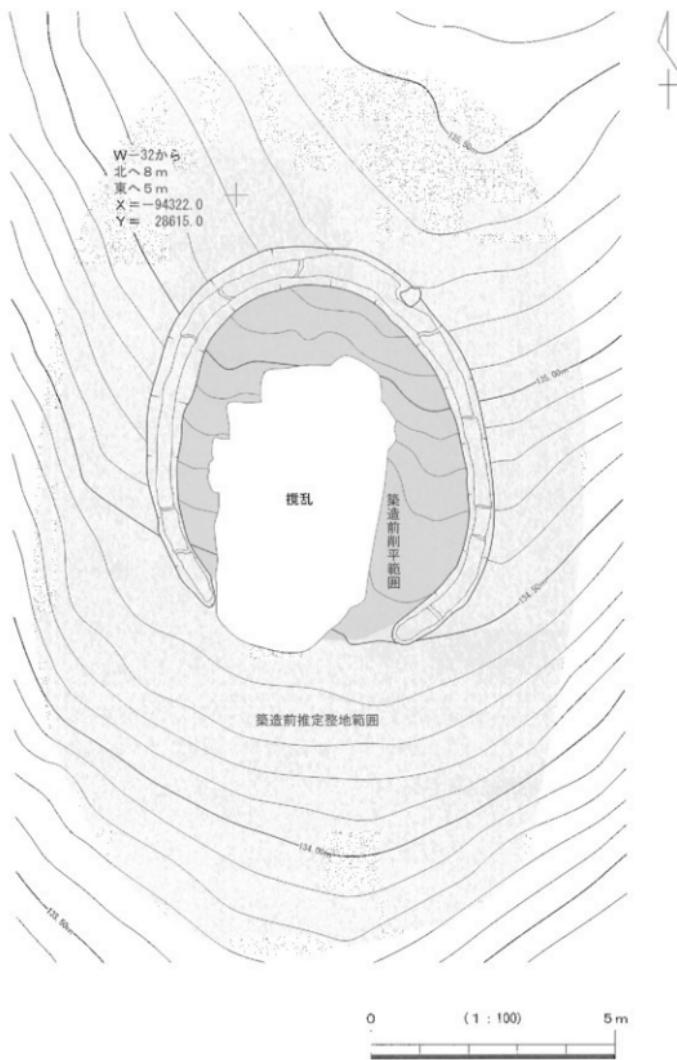
1~3回目の攪乱は、古墳の主体部を狙ったように入っていることから、盜掘の痕跡と考えられる。しかし、盜掘目的であつただけに、攪乱の形が主体部の形に近く、第11図のように、墓坑の規模をおよそ推定できる。幅3m、長さ5.4m程度の墓坑であったと思われる。

#### 出土遺物

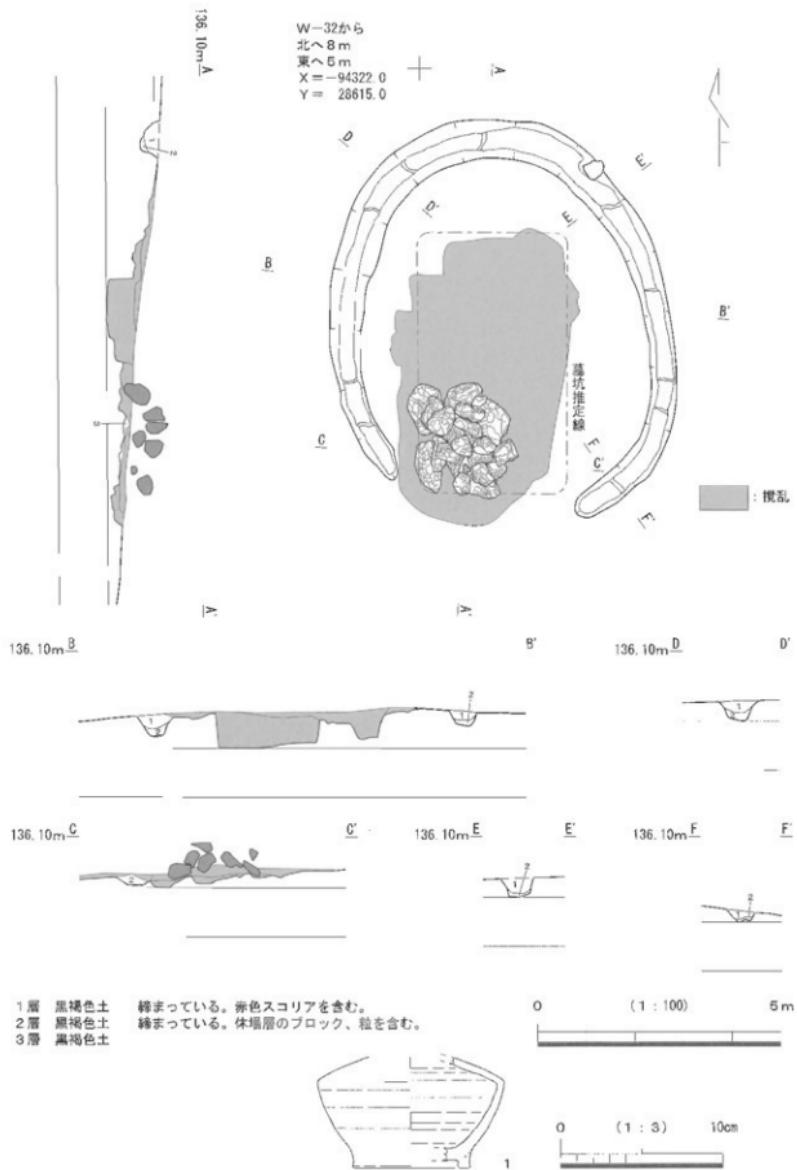
周溝の底から、第11図に示す須恵器が出土した。有台の長頸壺か甌か判断しにくいか、大きさから考えると、甌の可能性の方が高い。全体に自然釉がかかっている。時期は、甌であれば8世紀前半、長頸壺であれば7世紀後半である。



第9図 1号墳周辺地形図



第10図 1号墳検出状況



第11図 1号墳実測図と出土土器

## (2) 2号墳

### 検出状況

第12図に示すように、3区で検出した。すぐ北側には3号墳がある。地形は南西方向に緩やかに下る斜面である。明瞭に検出できたが、茶畠開連施設があった場所のため、墳丘の盛土は残っていない。

### 周溝

第13図に示したように、主体部の北側に、直径7.5mの半円を描いて巡っている。西端には樹木の攪乱が入った所で途切れている。東端も最近まであった建物跡に破壊されてなくなっているため、周溝が、検出した通り半円形で巡っていたのか、さらに伸びて円形になっていたのかはわからない。

周溝の底面は平坦である。埋土は2層に分かれ、第13図で2層とした層は、黒褐色土とローム層と思われる土の混合土で、異なる質の土が混ざっていることから、古墳築造時に、墳丘用に作った土が流れ込んだものと思われる。

### 主体部

主体部の断面図を第14図に示す。主体部は、有段無袖式の横穴式石室である。石室には安山岩の亜角礫が使われているが、攪乱により根石よりも上は失われていた。その根石も東側では2つ抜き取られていた。奥壁も抜き取られていた。主体部の規模は全長7.9m、石室長4m、石室幅は1mである。

石室の床には疊床が残っていたが、攪乱を受けているようで、疊がまばらな部分がある。

石室内の埋土のうち、1～4層は流れ込みによる自然堆積である。5層～6層は石室の裏込めに入れた土で、7層と8層は根石を固定するために入れた土である。

### 墓道

墓道は、長さ3.2m、幅は石室側で1m、深さは27cmである。南に行くに従って次第に浅くなり、自然消失している。底は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は自然堆積である。

### 墓坑

第15図左に完掘状況を示す。長さ4.4m、幅2.8mの長方形で、深さは奥壁付近で60cm、開口部付近で20cmである。墓道と玄室の間に段を作っているのが特徴である。

### 出土遺物

第15図右に遺物の出土状況を示す。床面付近は攪乱を逃れた部分があり、この部分で鉄製品や土器が出土した。床面付近で出土した鉄製品は破片が多く、同化できた遺物は少ない。

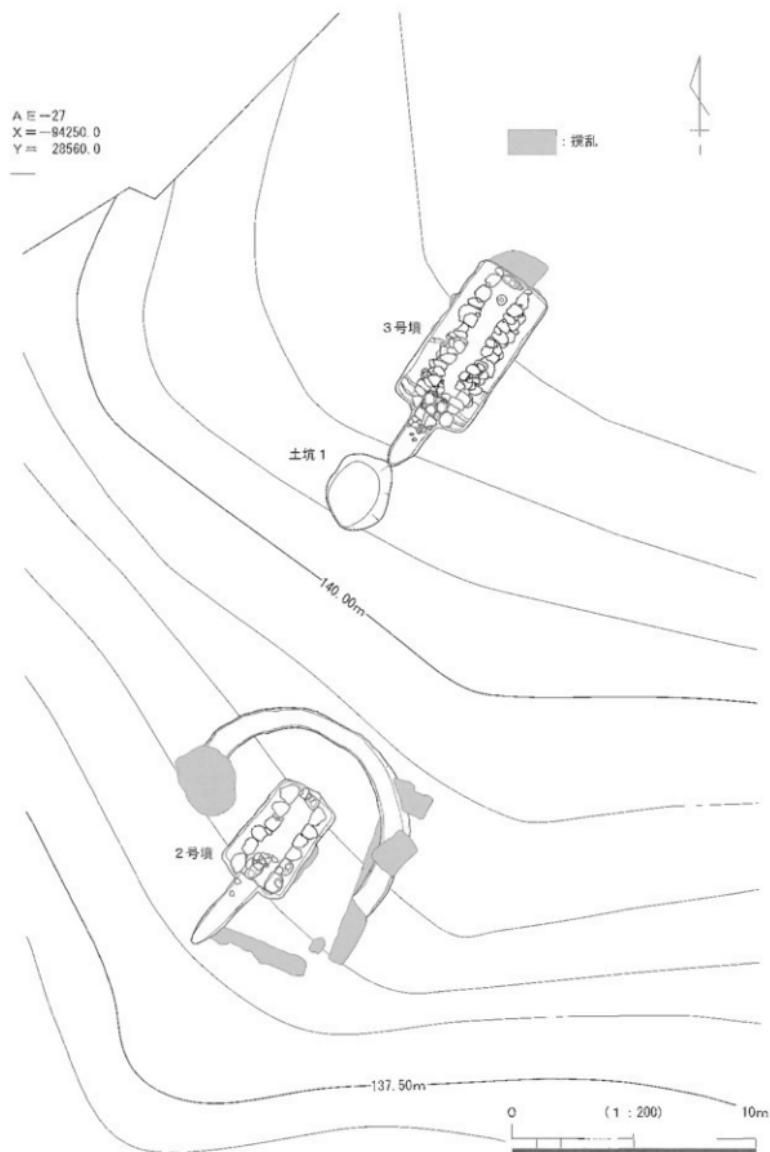
第16図-1～6は鉄鎌で、鎌身の破片である。1は片丸造、両刃の鎌身で、簡式式か柳葉式の長頭鎌になると思われる。2は片丸造、両刃の鎌身で、これも長頭鎌になるとと思われる。角闘がわずかに確認できる。1、2とも鎌身の厚さは薄い。3は片刃の鎌身で、鎌身闇は角闘である。ふくらの張りは弱い。4～6は片刃の鎌身の破片で、ふくらが強く張っている。6の鎌身には角闘が確認できる。

7～32は頭部の破片である。7は棘闘を確認できる。矢柄が残っており、一部に口巻きも残っている。8は口巻き、矢柄とともに良く残っている。9は矢柄が一部に残っている。10は口巻きが残っており、頭部の闇は、X線透過写真による限り角闘と思われる。11と12は茎先端の破片で矢柄が残っている。

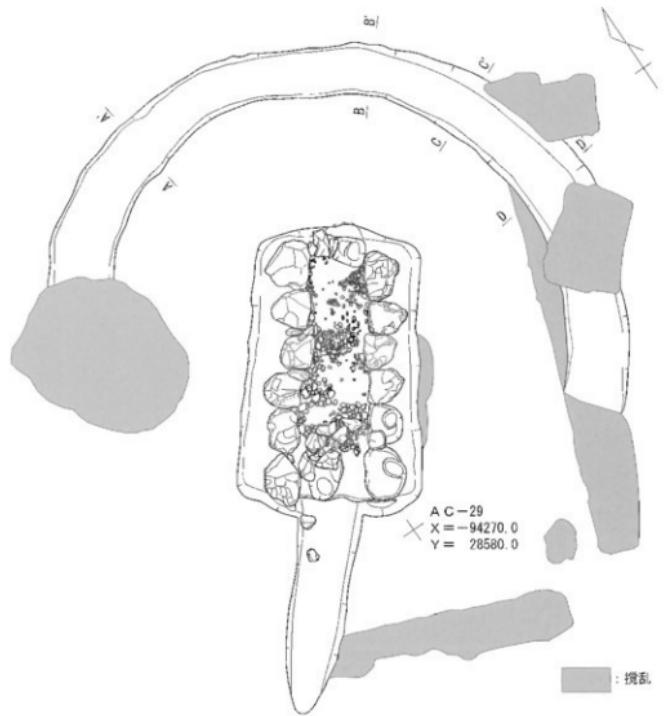
13は矢柄が残っている。14は口巻きと矢柄が残っている。先端に向かって細くなっていることから、闇に近い部分と思われる。15は棘闘で口巻きが残っている。16は闇の形態を確認しにくいが、鍔の状態から、棘闘であったと推定できる。17、18は矢柄が残っている。19は茎の破片で、先端が大きく曲がっている。20は棘闘を確認できる。21～26は矢柄が残っている。27～32は頭部の破片である。

副葬された鉄鎌の数は、鎌身の数から数えると6本、頭部の闇は7本、茎先端の破片は8本になることから、少なくとも8本の鉄鎌が副葬されていたと考えられる。

33～36は鉄釘である。34には木質が残っている。



第12図 2号墳、3号墳、土坑1検出状況



139.50m A A'

139.50m B B'

1層 黒褐色土 復土。3mm大の橙色のスコリア、白色

バミスを含む。やや緑まっている。

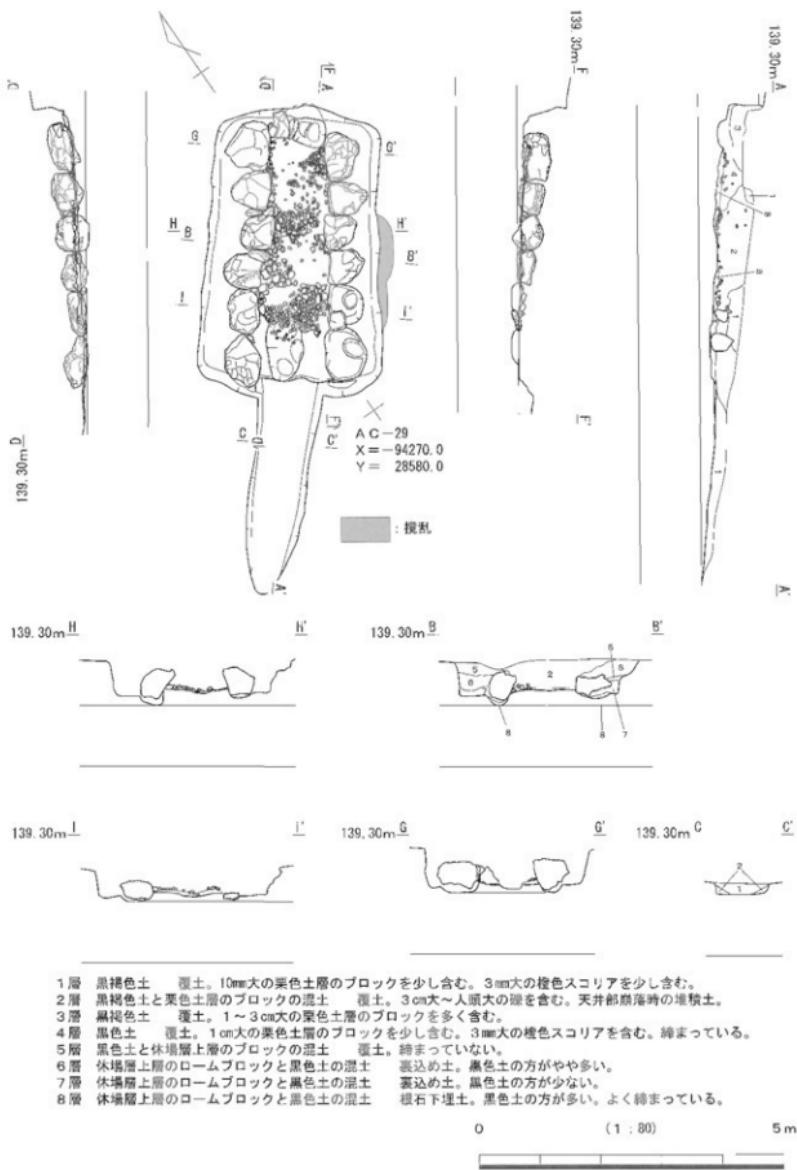
2層 黒褐色土とロームブロック(栗色土層ないし上部休  
場層)の混合土  
復土。双方同じ量を含む。やや  
緑まっている。

139.50m C C'

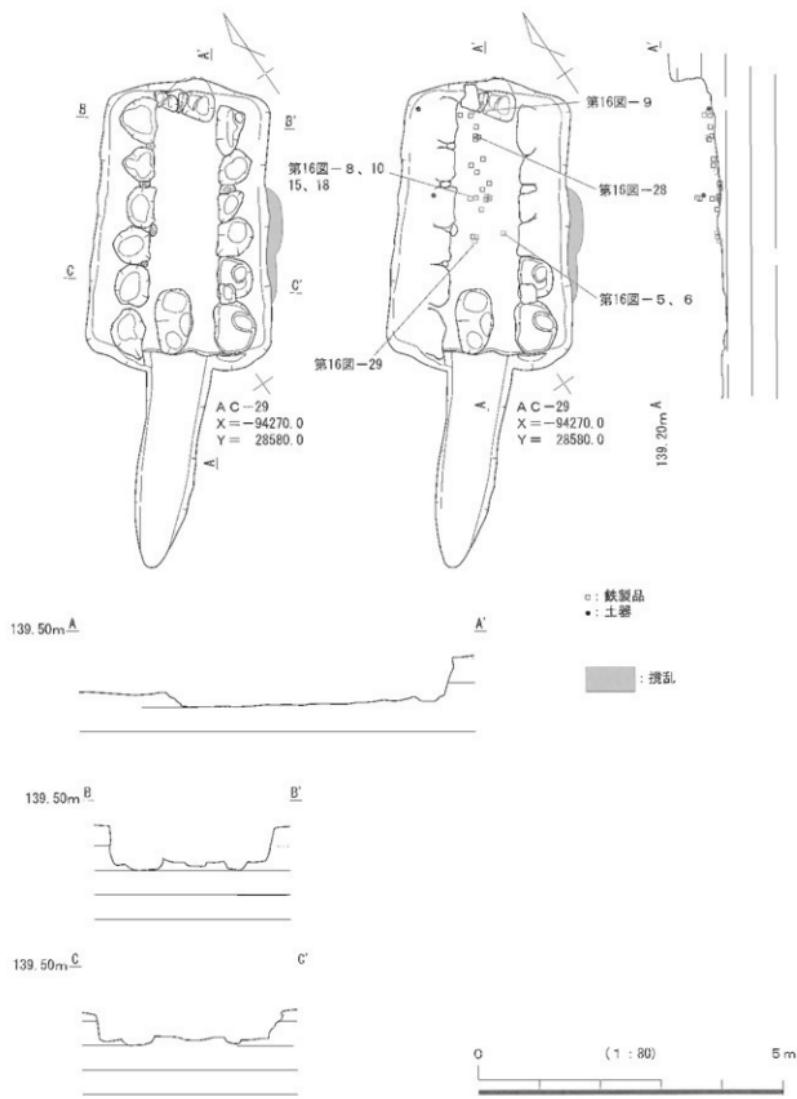
139.50m D D'

0 (1 : 80) 5m

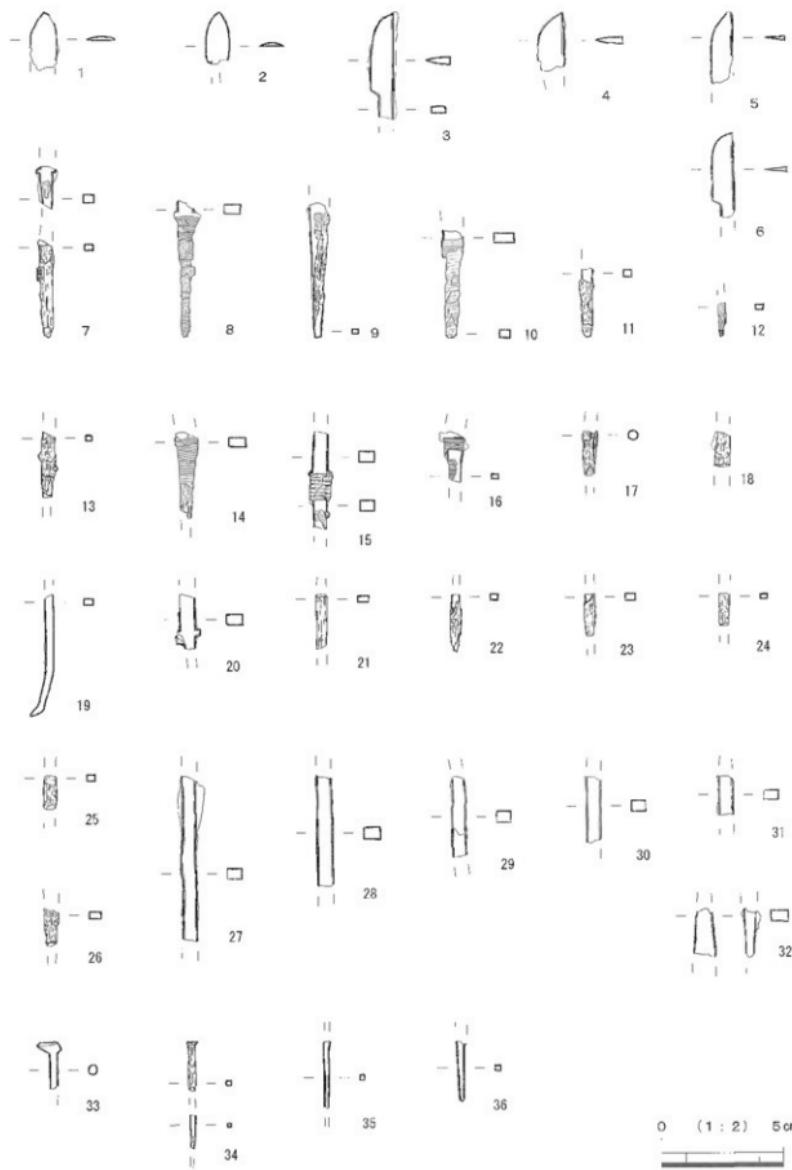
第13図 2号填実測図



第14図 2号墳石室展開図



第15図 2号墳完掘図、遺物分布図



第16図 2号墳出土遺物

### (3) 3号墳

#### 検出状況

第12図に検出状況を示す。2号墳の北側で検出した。地形は、北から南に向かう緩斜面で、尾根の付け根に近く、やや傾斜がきつい部分に当たる。この付近は、茶畠を作る際に地形を改変しており、墳丘と周溝が失われていた。したがって、古墳の規模は不明である。主体部の輪郭は、主体部の埋土が黒色の上であったため、明瞭に検出できた。

#### 主体部

擾乱は根石の直上まで及んでおり、第17図に示すように、根石と崩落した側壁が出土した。

埋土は、1層は流れ込みの自然堆積である。2層は石室中央部に堆積した層で、崩落した側壁の礫を含んでいる。

3層は、2層が流れ込む以前に流入した土で、奥壁付近と石室開口部付近で厚くなっている。

4層は、4a層と4b層に分けられる。礫床を覆うように堆積している層で、玄室内にだけ堆積しているため、追葬に伴って敷いた層のように見えるが、原位置を保った遺物は、すべてこの層の下から出土しているため、この層も流れ込みの可能性が高い。

5層は、追葬時に古墳構築時に敷いた礫床の上を置った整地層で、後述する第5遺物群がこの上から出土している。6層は、奥壁付近にだけ見られ、礫床の上を覆うように堆積していることから、流れ込みの可能性が高い。

7層は、側壁の裏込めの土である。一部は側壁の崩落に伴って、玄室内に流れ込んでいる。この層は、根石や側壁の隙間にも入り込んでいることから、石を固定するとともに、その上に石を積みやすくするために、隙間を埋めて固めたことがわかる。

8層は、最初の礫床を作る前に貼った整地層である。良く固められて締まっている。

9層～11層は擾乱上の可能性がある。12層は墓道に堆積している土で、側壁崩落後に流れ込んだと思われる。13層は、墓道と石室の境界付近に部分的に見られる層で、追葬時の整地層と思われる。

14層は墓道に見られる土で、後述の18層とともに墓道の床面を作っている。この層は、閉塞石や敷石に切られていることから、追葬時に貼った整地層と考えられる。

15層は、休場層や富士黒土層、黒色土の混合土で、非常に固く締まっている。この上に閉塞石が置いてあることから、閉塞石を積む前に整地した層と思われる。16層は、石室構築時に墓道に掘られた浅い皿状の土坑の埋土である。

17層は、墓道に流れ込んだ自然堆積層である。18層は良く締まっており、先述の14層とともに墓道床面を作っている。19層は固く締まっており、墓道床面を作っている。

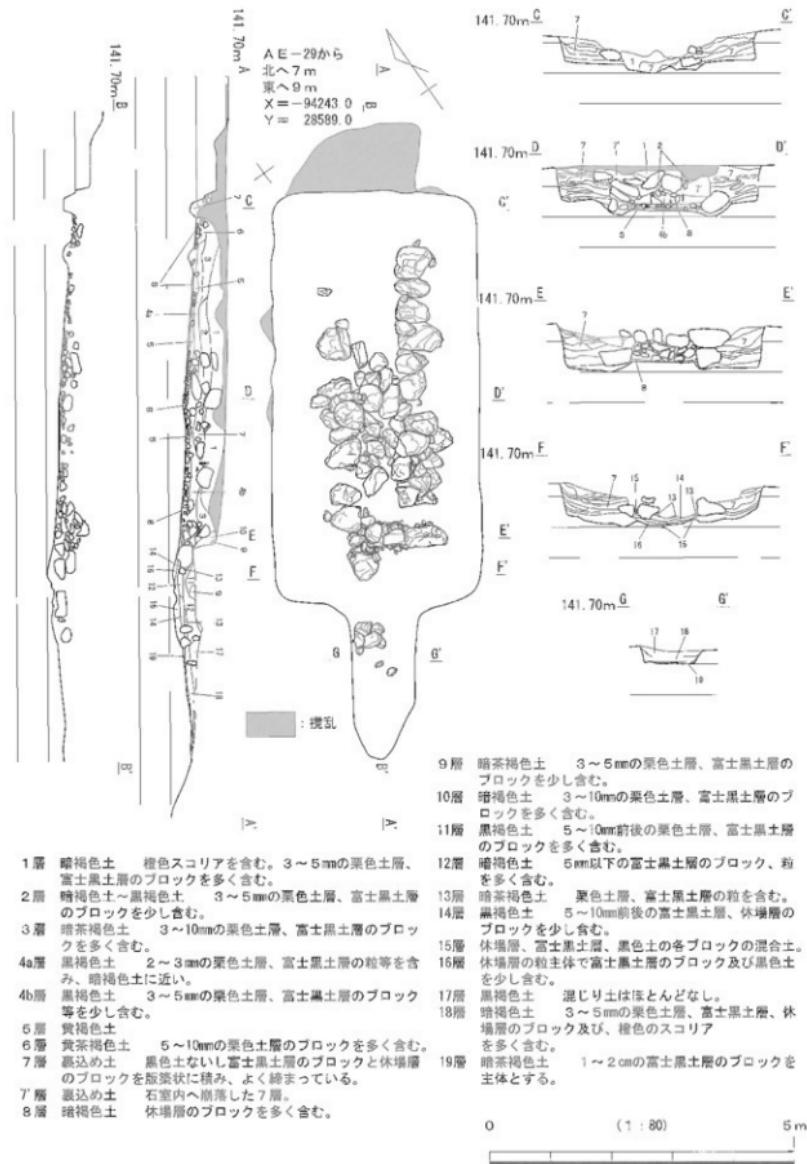
以上のように、墓道の床面は、19層で作られた床面と、その上の14層と18層で作られた床面の2面が存在することから、追葬時に墓道の床面を新しく作っていることがうかがえる。

主体部の展開図を第18図に示す。墓道と玄室の間に段を設けた有段無袖式の横穴式石室である。規模は、長さ6.3m、幅は1mでほぼ一定している。根石だけが残っている部分と3段目まで残っている部分があるが、多くの側壁は、崩落して玄室内に落ちたり、傾いたりしている。石室内の掘削途中でも崩落した側壁の石が多く出土した。側壁に詰め石は見られず、裏込めの土で側壁の石を固定した後に上段の石を積んでいる。

根石は、長さ60～70cm、幅40～60cm、厚さ30cm程度の礫を使っている。据え方は、開口部に近い2列は広口面を玄室に向け、それより奥は小口面を玄室に向けて据えてある。

根石の上に積んだ石は、長さ50～60cm、幅40～50cmと、根石よりも一回り小さな石が多い。

奥壁の石は抜き取られ、構築時の掘り込みが残っているだけである。



第17図 3号填検出状況

### 閉塞石

第18図に示したように、石室開口部に閉塞石が見られる。後述する第4遺物群と第5遺物群を副葬した際の閉塞石である。これらの閉塞石の下にも、閉塞石を置いたと思われる埴みが多数検出できることから、第1～3遺物群を副葬した際にも閉塞石を置いていたことが確認できる。

### 礫床

礫の敷き分けと追跡に伴う作り直しが見られるため、第19図を示し、順を追って記載する。

石室構築時に床に整地用の粘土、8層を貼り、その上に最初の礫床を作る。整地面は平坦ではなく、第18図の断面図に見られるように、奥壁から開口部に向かって緩やかに下り、墓道の手前で緩やかな上り傾斜に転じている。この時の床面が、第19図の左側に示した1次礫床である。この礫床では、第19図でA～Dとした範囲で、礫の敷き分けが見られる。Aの範囲には、様々な大きさの礫を敷いているのに對して、Bの範囲には、Aよりも小ぶりの礫を、横方向に並べるように敷き詰めている。Bの範囲には礫が見られない空白があるが、ここは最初から礫を敷いていない部分である。

Cの範囲は、Bよりも大きな礫を使っており、並べ方に規則性は見られないが、隙間なく敷いてある。Dの範囲には、Cに比べると大きさの揃っていない礫を敷き詰めてあるため、雑然とした印象を受ける。

2次礫床は、1次礫床の上に大きめの礫を敷いて作っている。この時、礫床の上に第19図中央に示した棺台石を6個置いている。棺台石については、沼津市の原分古墳（当財団報告書第184集）に類例がある。また、この埋葬時に石室開口部には、15層を敷き、その上に閉塞石を置いている。

その後、第19図の右側に示したように、石室の開口部付近に新たに棺台石を5個置き、石室開口部には新しい閉塞石を積んでいる。

### 根石

根石の出土状況を第20図左に示す。側面に平坦面を持つ板状の角礫を使っており、平坦面を石室内に向いている。大きさにはばらつきがある。奥壁は抜き取られ、掘り込みだけが検出できた。

### 墓坑・墓道

墓坑と墓道を第20図の右側に示す。墓坑の規模は長さ6.8m、幅3.6m、深さは50cmで、場所によっては80cm程の所もある。墓坑の底は、奥壁から開口部に向かって傾斜しているが、墓坑の縱断面図に示すように、根石の内側と外側では形状が異なる。根石の内側では、A～A'の断面に示すように、奥壁から石室開口部に向かって緩やかに傾斜している。開口部付近には皿状の土坑がある。この土坑は、樋石を据えるための土坑と思われるが、その後の1次礫床を設置するための整地層を作る時に、この土坑は埋められており、樋石が置かれた形跡はない。したがって、墓坑掘削時には樋石を置く計画であったのかもしれないが、実際の埋葬時にはその計画が変更され、樋石を据えなかつたのであろう。

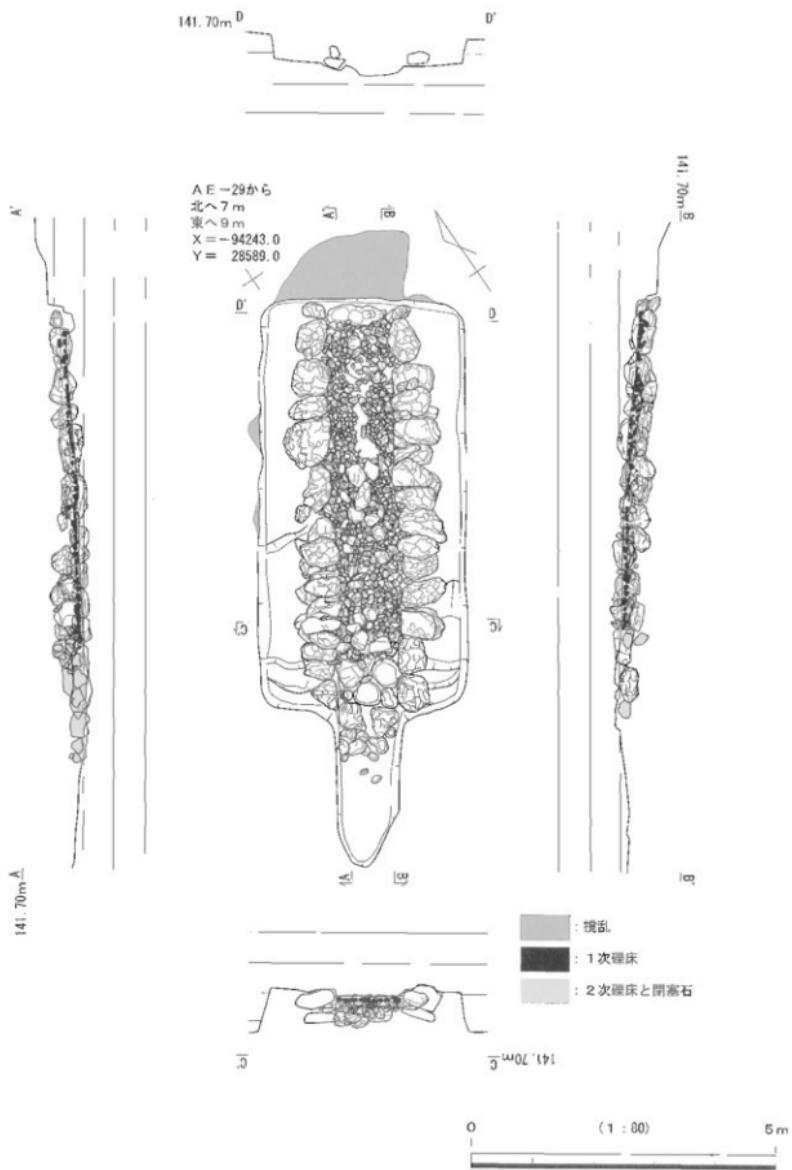
根石の外側は、第20図に示すように、墓坑の南側半分近くが掘り埋められている。ここを掘り窪めた目的は明らかでないが、根石を据える掘り込みの外側だけが掘られていることから、墓坑掘削時に、意図的に掘ったことは間違いない。

石室内部の床には、第17図で8層とした粘土が、厚さ1～3cmで貼られ、良く叩き締めてある。これが1次礫床の下地になっている。

奥壁を立てた土坑は、長楕円形で、長軸1m、短軸30cmであることから、奥壁に立てた石は、幅1m程度の大きな石を据えたと推定できる。

根石を据える部分には、まず土坑を掘り、次に、土坑の底に土を入れて底面を整地した後、その上に根石を置いている。

墓道は、長さ2.5m、幅1m、深さ40cmの規模で、緩やかな登り傾斜になっている。墓道は、後述する土坑1の直前でなくなっている。

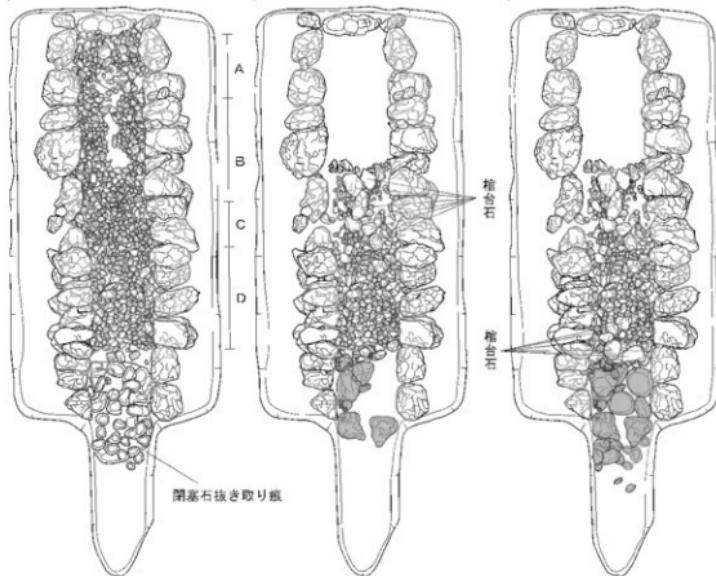


第18図 3号墳石室展開図

A E -29から  
北へ 7 m  
東へ 9 m  
 $X = -94243.0$   
 $Y = 28589.0$

A E -29から  
北へ 7 m  
東へ 9 m  
 $X = -94243.0$   
 $Y = 28589.0$

A E -29から  
北へ 7 m  
東へ 9 m  
 $X = -94243.0$   
 $Y = 28589.0$



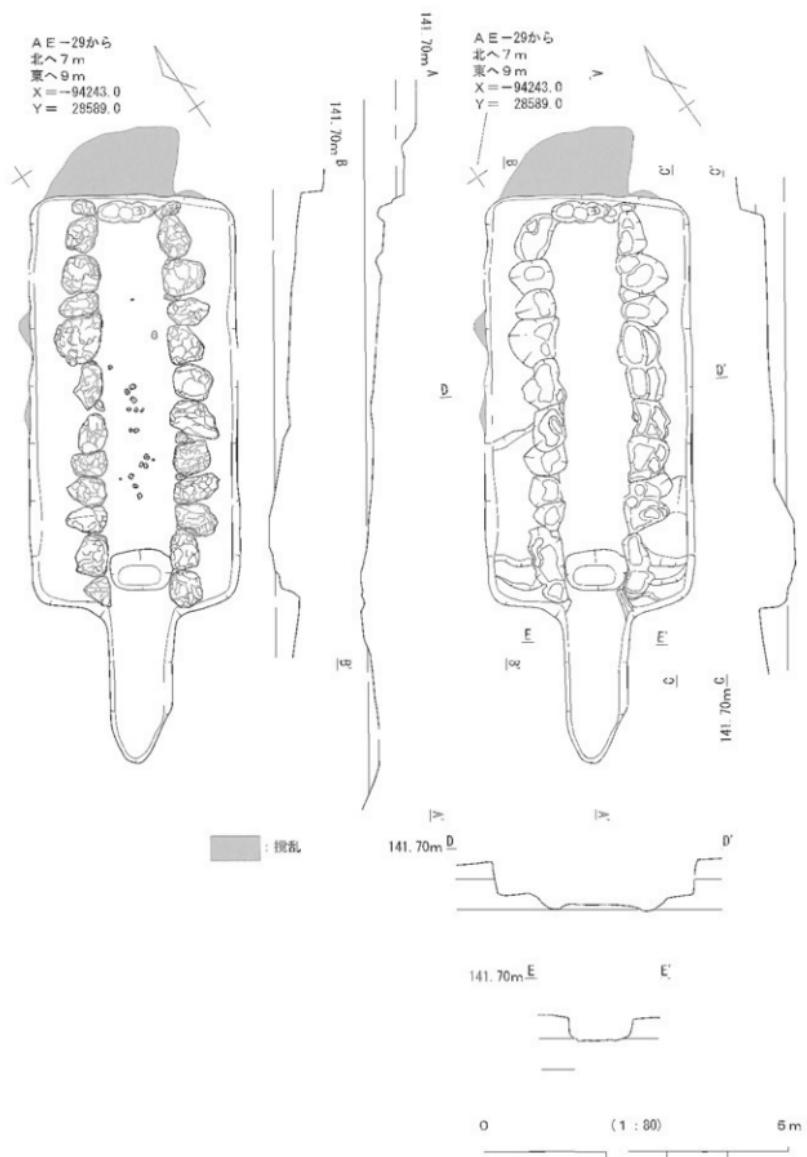
1次礫床

2次礫床  
トーンは閉塞石

2次礫床と最終閉塞石  
トーンは閉塞石とその抜き取り板  
黒塗りは堵合石



第19図 3号填礫床変遷図



第20図 3号墳根石、墓坑、墓道実測図

## 出土遺物

石室内の掘削前にサブトレンドを設定し、砾床面とその上の層を確認し、できる限り層ごとに掘り下げた。出土した遺物はすべて出土位置を計測して取り上げた。

また、微細な遺物を検出するため、石室内から出た土はすべて簡にかけ、掘削時に見逃した遺物の検出に努めた。

石室上部は破壊されてなくなっていたが、床面付近の残りは良く、第21図に示すように、多くの遺物が出土した。遺物はいくつかのまとまりに分けられるため、第21図に示したように、第1～5遺物群に分類した。分類基準は下記のとおりである。

第1遺物群：第19図で1次砾床のAの範囲から出土した遺物群

第2遺物群：第19図で1次砾床のBの範囲から出土した遺物群

第3遺物群：第19図で1次砾床のCの範囲から出土した鉄製品の一群

第4遺物群：第19図で1次砾床のCとDの境界付近で出土した鉄製品の一群

第5遺物群：第19図で2次砾床の上面で出土した遺物群

### 第1遺物群

1次砾床の奥壁から1mまでの範囲で、第19図でAとした範囲から出土した遺物群である。第21図の断面投影図に示したように、砾床からは若干浮き上がって出土しており、原位置からは動いていることも考えられる。第1遺物群が出土した範囲が搅乱を受けているかどうかははっきりしないが、奥壁には明らかに搅乱が入っており、この遺物群が出土した範囲もこの搅乱に近いことから、この遺物群も搅乱を受けている可能性はある。

### 須恵器

第22図-1は壺の破片である。口縁部は二段に分けてなでてあり、屈曲する部分がある。上段のなでは口縁部を鋭く尖るようになであげている。蓋の受け部は水平に近い。時期は、6世紀末～7世紀初頭、TK209段階であろう。

### 耳環

第22図-2は耳環で、1個だけ出土した。銅の地に銀箔を貼っている。

### 玉類

特に集中する場所はなく、床面付近に散在した状態で出土した。第23図-1は瑪瑙製の勾玉である。穴は実測図に示した面の裏側から開けている。2～24はガラス玉で、すべて青色～藍色である。2～6は、穴の周囲に平坦面があるのに対して、7～24は穴の周囲は曲面になっている。また、10と17は、平面は円形だが、側面形が歪んでいる。

### 第2遺物群

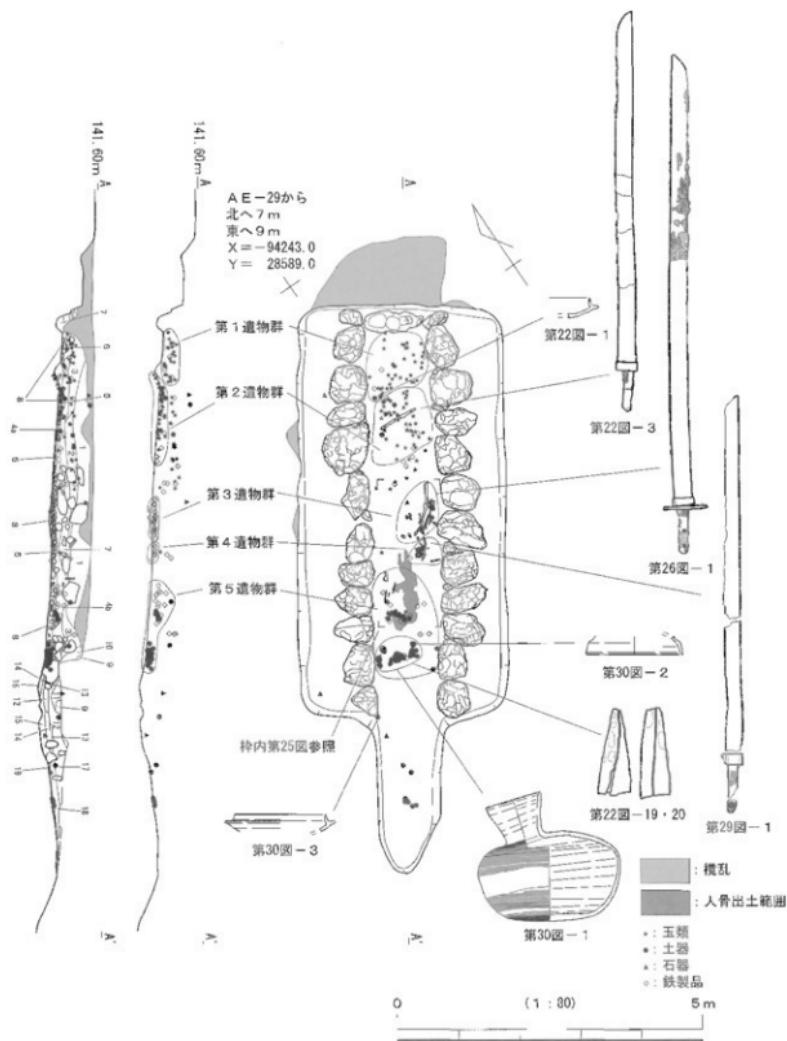
1次砾床で、第19図でBとした範囲から出土した遺物群である。砾床の上から出土しており、原位置を保っていると思われる。

### 大刀

第22図-3は長さ65.5cm、幅3.1cmの大刀である。石室の長軸から90度近く傾いて出土したことから、2次的に動かされているか、石室に立てかけてあった大刀が倒れた状態で出土したと思われる。

刃部の根元にはぼきが残っている。ぼきは、長方形の鉄板を円形に曲げて作ってある。ぼきと大刀の間を銷が埋めているため、X線透過写真でも銷の形態ははっきりしないが、両側で撫閑になっているよう見える。

4は鎧で、1/3程を欠損している。3の大刀に付くものと思われる。5は、3の大刀の頭部で、鉄製の目釘が残っている。



第21図 3号墳遺物分布図

### 弓金具

6は弓金具で、両端の頭部は球ではなく、円筒形に近い。その根元に花弁が4弁つく。胸部には木質が残り、その中に中空の鉄製の芯がある。

### 鉄鎌

7は平根脇抉三角形式である。鎌身は両丸造で、ふくらが張り、五角形に近くなっている。関は棘関である。これと接合はしないが、同一の鉄鎌と思われる頭部が出土しており、これには口巻きが良好に残っている。8は鉄鎌の茎で木質が残っている。

### 玉頬

第23図-25～69はガラス玉である。色はすべて藍色～青色である。25～43は穴の周囲に平坦面がある。これに対して44～69の穴の周囲は曲面である。

第24図-1～9は勾玉で、すべて瑪瑙製である。穿孔の方向は、2、5、7、8は実測図に示した面から裏面に向けて開けている。これに対して、1、3、4、6、9は裏面から実測図に示した面に向けて開けている。ただし、4だけは、実測図に示した正面から穿孔を試みた形跡があり、その後に裏面から実測図に示した正面に向けて穿孔している。

10は瑪瑙玉で、琥珀と思われる有機質の素材を使っていると思われるが、材質ははつきりしない。

### 第3遺物群

1次発床で、第19図でCとした範囲で、側壁付近でまとめて出土した一群で、第25図に示したように、大刀が鉄鎌の上に乗ったような状態で出土した一群である。大刀と長頸鎌は、石室の長軸に並行する向きでまとめて出土した。これに対して、短頸鎌は大刀の西側に散在する状態で出土した。

### 大刀

第26図-1は長さ83cm、刃部の幅3.1cmの大刀である。後述する鉄鎌の上に乗った状態で出土した。刃部の根元には、はばきと鍔が残っている。はばきは長方形の鉄板を梢円形に巻いて作ってある。頭部は短く、鉄製の目釘が2箇所残っている。関は、X線透過写真を見る限り両関で、撫関のようである。刃部には鞘と思われる木質が残っている。2は、1の大刀に伴う無窓鍔である。

### 切羽

3は大刀の切羽である。この切羽に伴う大刀は出土していないが、切羽は頭椎大刀に伴うことが多いため、頭椎大刀が副葬されていた可能性を示す重要な遺物である。

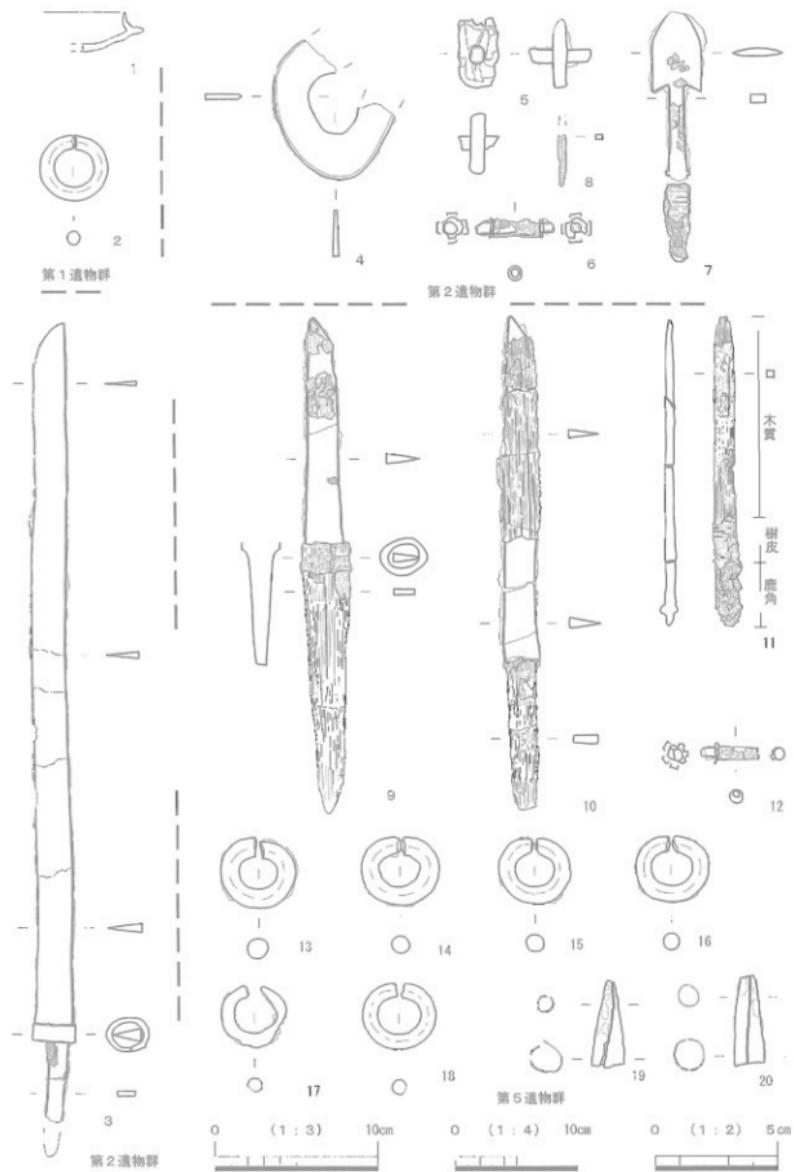
### 刀子

4は鹿角の柄がついた刀子である。刃部にも木質が残っている。関は両関で、撫関と思われる。X線透過写真で見る限り、目釘穴は見られない。

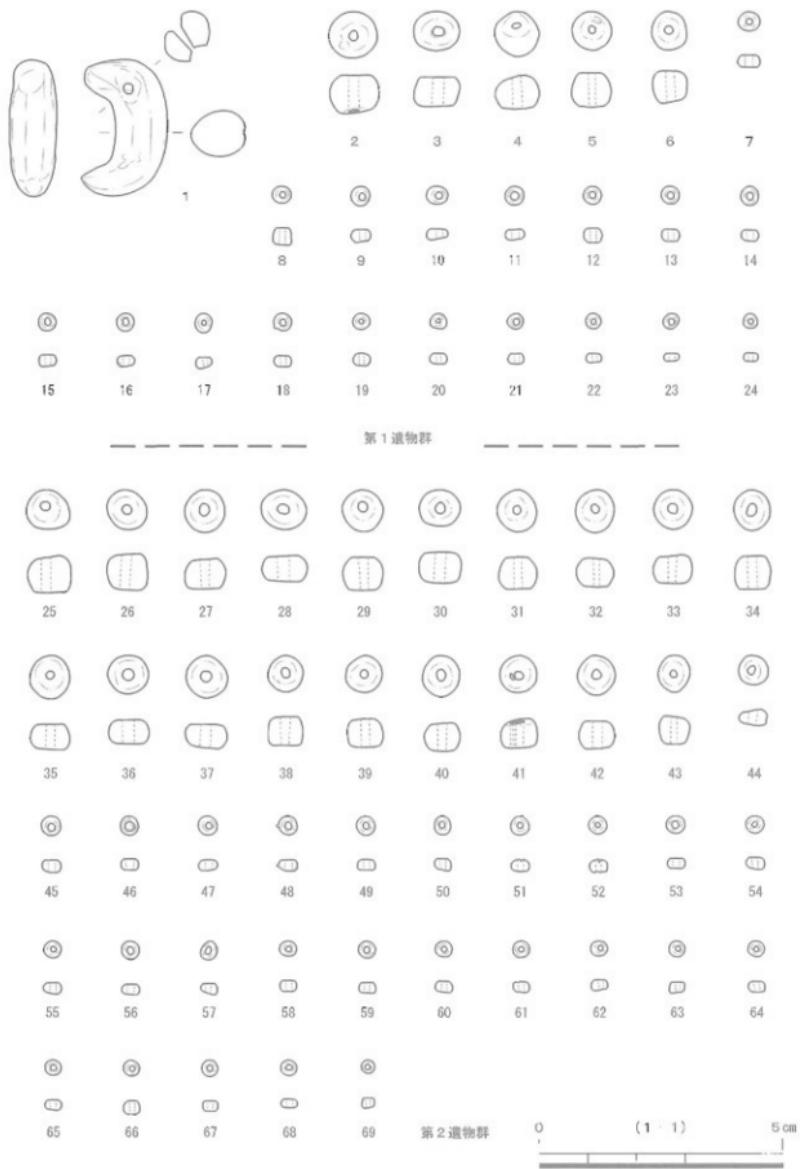
### 鉄鎌

鉄鎌は、鎌身が23本、関の部分で数えると22本、これに無関の鉄鎌2本を加えると24本になることから、20本強の鉄鎌が副葬されていたと思われる。鉄鎌の分布は、第25図に示したように、大刀をはさんで西側に短頸鎌、東側に長頸鎌が分布している。長頸鎌は方向をそろえてまとまっているため、東になっていたと思われる。これに対して、短頸鎌は分散した状況であることから、東ではなく、個別に置かれたと思われる。

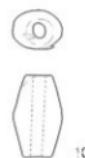
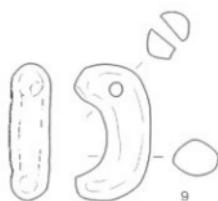
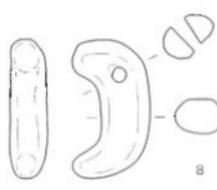
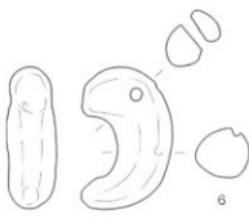
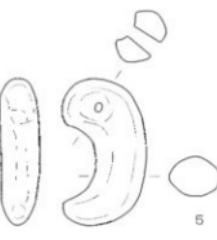
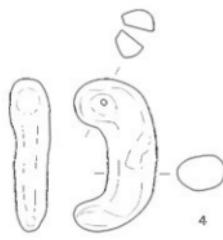
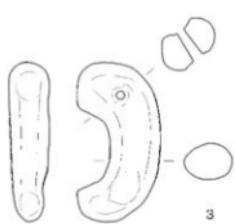
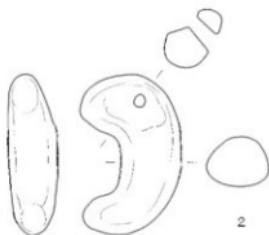
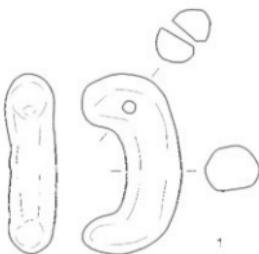
第26図-5は平根三角形式の短頸鎌である。鎌身は平造で、鎌身の関は角関である。頭部の関は棘関で、矢柄が残っている。6は平根三角形式の短頸鎌である。鎌身は平造で、鎌身の関は角関である。根挟みの木質が残っており、矢柄を固定するため、大きめの穿孔が見られる。7は平根式短頸鎌で、鎌身は平造、鎌身の関は角関、頭部の関も角関である。頭部に、有機質を巻いたような痕跡が見られる。通常、矢柄を付ける部分ではないが、この部分にも矢柄を巻いていた可能性がある。



第22図 3号墳第1、2、5遺物群 (1 : 1/3、3 : 1/4、2・4~20 : 1/2)

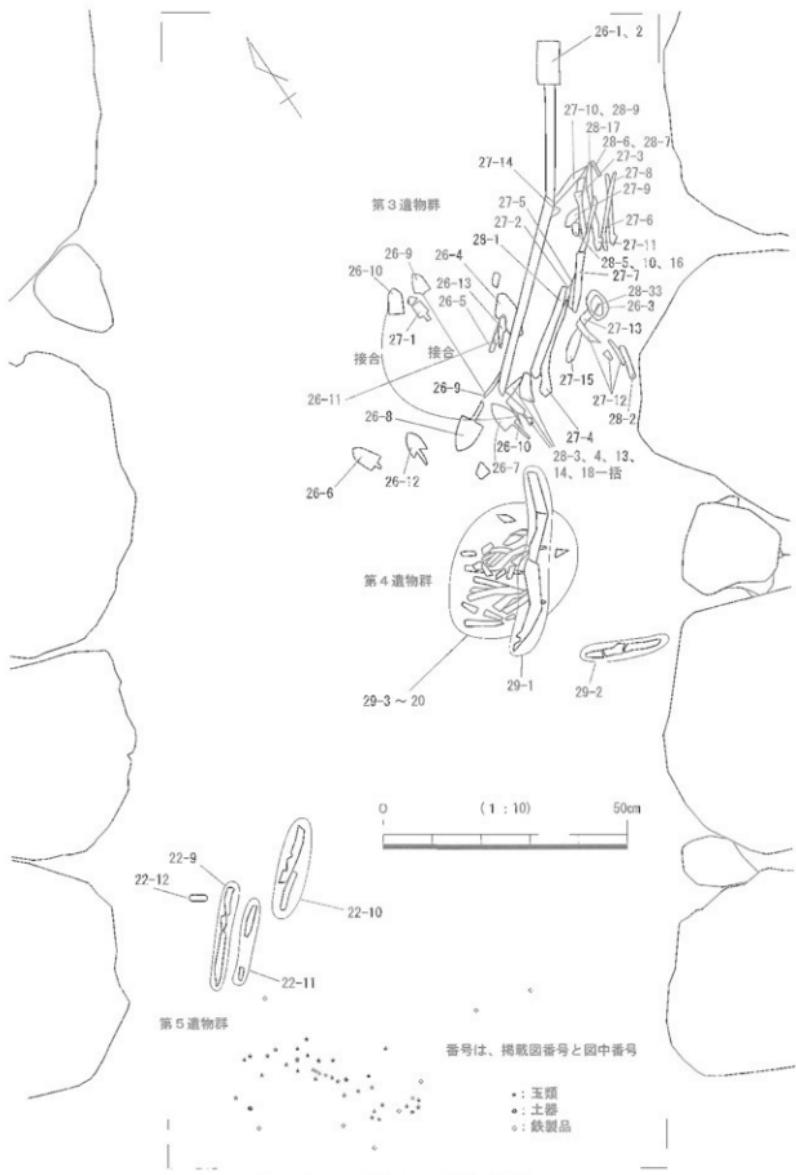


第23図 3号墳第1、2遺物群

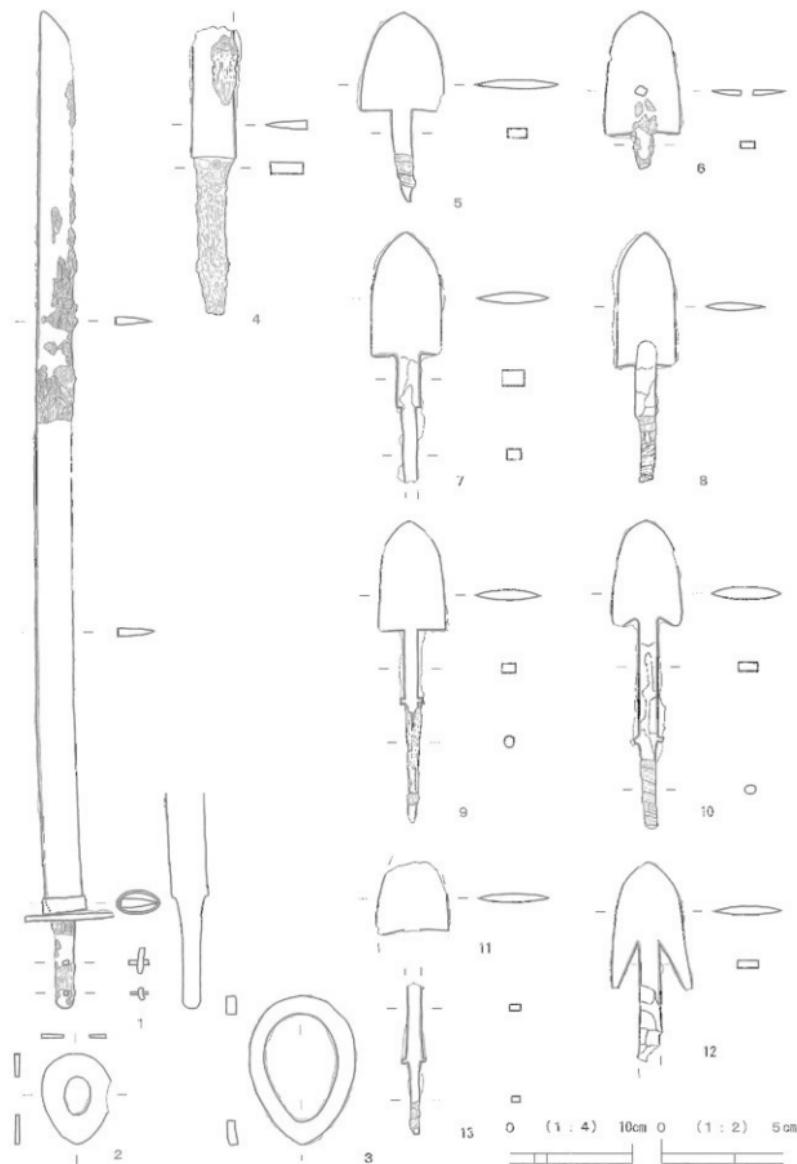


0 (1 : 1) 5cm

第24図 3号墳第2遺物群



第25図 3号墳第3、4遺物群分布図



第26図 3号墳第3遺物群1 (1、2:1/4、3~13:1/2)

8は平根式短頸鐵で、鐵身は平造、鐵身の関は角関である。頸部の関は、X線透過写真を見る限り棘関と思われる。頸部には、根挟みの痕跡のようなものが見られる。9は短頸鐵で、鐵身は平造である。鐵身の関は角関である。頸部の関は棘関で、矢柄が残っている。10は、5～9に比べて頸部がやや長いが、5～9と同じように、短頸鐵が分布する範囲で出土したため、短頸鐵に含めておく。鐵身は両丸造で、逆刺が付いている。頸部の関は棘関で、口巻きが残っている。頸部には、有機質を卷いたような痕跡が見られる。通常、矢柄を巻く部分ではないが、ここにも矢柄を巻いている可能性がある。11は鐵身の破片で、平造である。12は長い逆刺をもつ短頸鐵で、鐵身は平造である。これも頸部に矢柄を巻いたような痕跡が見られる。13は頸部～茎の破片で、棘関が残っている。また、口巻きも一部に残っている。11と同じ場所で出土したことから、同一の鉄鐵かもしれない。

第27図-1は平根三角形式の短頸鐵である。鐵身は平造で関は角関である。ふくらの張りは弱い。頸部には有機質を巻いたような痕跡が見られる。矢柄を巻いているのかもしれない。

以上の鉄鐵の中に、頸部に矢柄を巻いた可能性のあるものが複数見られた。頸部に矢柄を巻いた例は、掛川市の大谷横穴群（当財団報告書第121集）などにある。

2は平根三角形式の短頸鐵で、鐵身は平造である。関は角関で、1よりもふくらが張っている。鐵身には、根挟みと思われるふくらみが見られる。3は三角形式の長頸鐵で、鐵身の関は撫関、頸部の関は棘関である。鐵身の作りは両丸造である。関の下には口巻きが残っている。4は長頸鐵で、鐵身は両丸造で関は撫関である。5は鐵身が長楕円形で、片丸造である。鐵身の関は角関である。頸部の関は棘関で、口巻きが残っている。後述の7と同形態である。6は尖根鐵で、鐵身に関がないため、鐵身と頸部の境界がはつきりしない。頸部の関は棘関で、口巻きが残っている。7は柳葉式の長頸鐵である。鐵身は両丸造で、鐵身の関は撫関である。頸部の関は棘関で、矢柄が残っている。5と同形態である。8は、鐵身に逆刺のある尖根式の長頸鐵で、鐵身は両丸造である。頸部の関は棘関で、口巻きと矢柄が残っている。9も鐵身に逆刺のある長頸鐵で、鐵身は両丸造である。頸部の関は棘関で、口巻きが残っている。10は尖根鐵で、鐵身は逆刺のある両丸造になっている。頸部の関は棘関で、口巻きが残っている。11は逆刺のある長頸鐵で、鐵身は片丸造になっている。頸部の関は棘関である。他の長頸鐵に比べると頸部が短い。12は三角形式の長頸鐵で、鐵身は両丸造、関は角関である。頸部の関は、角関と思われる。

13は鐵身と頸部が分かれているが、同じ場所で出土したため、同一の鉄鐵であると思われる。鐵身には逆刺があり、両丸造である。頸部には角関が確認できる。

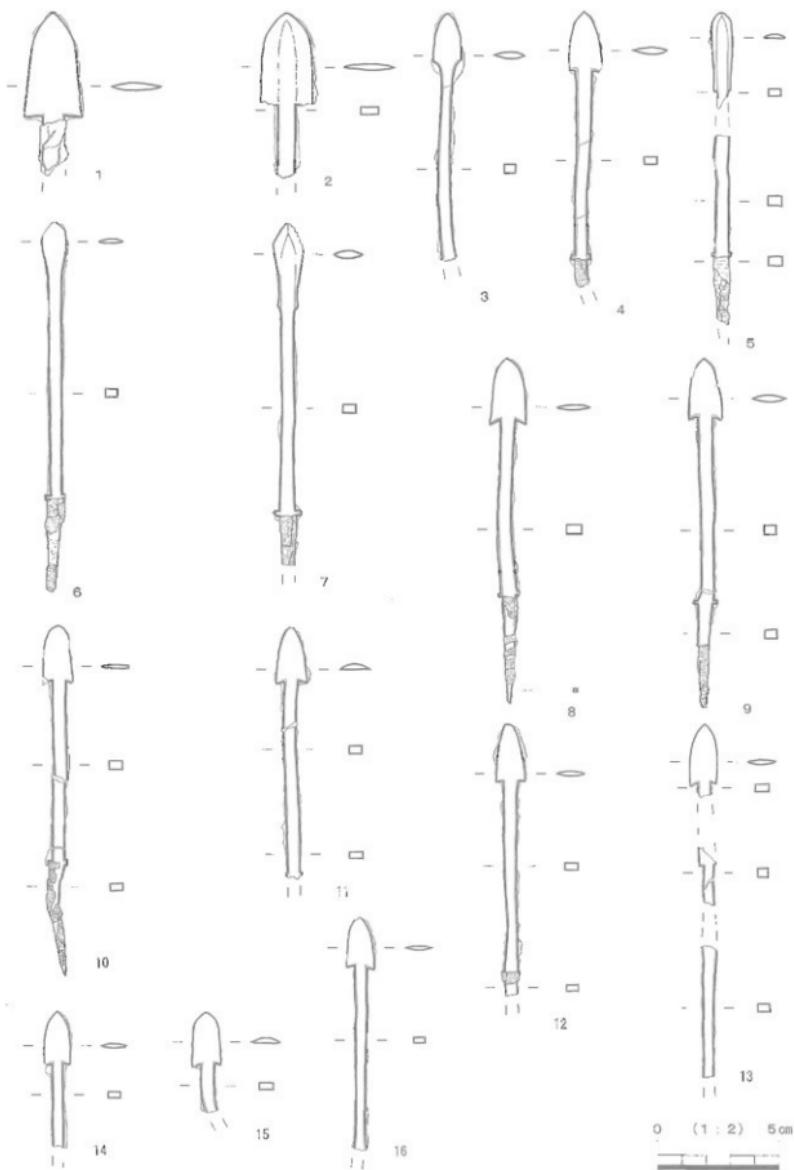
14は鐵身が両丸造の長頸鐵で、鐵身の関は角関である。15は鐵身に逆刺をもつ長頸鐵で、鐵身は片丸造である。16は鐵身が両丸造で、角関を持つ長頸鐵である。

第28図-1は尖根鐵の茎である。棘関を確認でき、その下に口巻きと矢柄が残っており、さらに糸巻き痕も見られる。2も尖根鐵の頸部で、棘関を確認でき、その下に矢柄が残っている。3、4は頸部の破片で、棘関が残っている。5は口巻きの残りが良い。6～8も11巻きが残っている。9～18は頸部の破片である。14は2本の茎部が鏽で固着している。15にはわずかに木質が残っている。19は矢柄が残っている。20は棘関が確認でき、その下に口巻きが残っている。21は頸部の破片だが、口巻きの残りが良い。22は口巻きと矢柄が残っている。関はX線透過写真でも明確ではないが、台形関のように見える。23は矢柄が残っている。24は片丸の可能性があるが、はつきりしない。25～28は茎先端で口巻きが良好に残っている。29も木質がわずかに確認できる。30～32は茎先端の破片である。

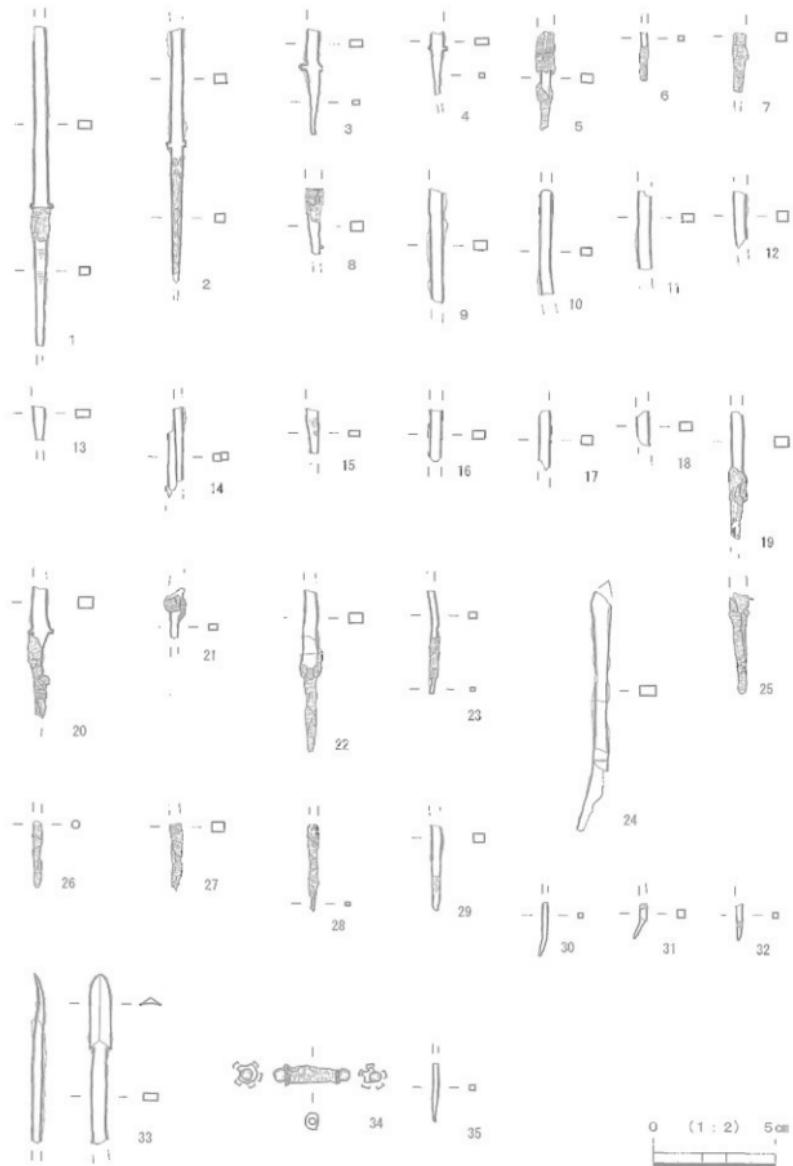
33は柳葉式で、鐵身に鏽が見られる。35は、釘か鉄鐵の茎かはつきりしない。

弓金具

第28図-34は弓金具である。両端に球状の頭部が付き、5弁の花弁が付いている。胴部には木質が残り、中には鉄製の芯がある。芯は中空である。



第27図 3号墳第3遺物群2



第28図 3号墳第3遺物群3

#### 第4遺物群

第19図の左に示したCとDの境界付近で、第3遺物群の南側でまとまって出土した鉄製品の一群である。出土状況は第25図に示したとおりである。

出土状態は鉄鎌の上に大刀が乗った状態である。大刀は、石室の長軸に並行する向きで出土したのに対し、その下の長頸鎌の一群は、大刀とは直交する方向で向きをそろえて出土した。長頸鎌は東になっていたと思われる。

##### 大刀

第29図-1は3か所で折れて、蛇行したような状態で出土した。欠損箇所のいずれでも接合しないため、長さは不明である。刃部は欠損が著しい。刃部の根元には、はばきが残っている。はばきは、長方形の鉄板を梢円形に折り曲げて作っているが、合わせ目が開いている。関は、かろうじて残っている部分から刃部側が角関になっていると思われる。茎部先端は接合しないが、出土位置から、この大刀のものと考えて間違いない。茎尻付近に目釘が1本残っている。

##### 刀子

第29図-2の刀子は、大刀や鉄鎌とはやや離れて出土した。関は両側に撫閂がある。刃部は研ぎ減りしている。関の下には、柄縁金具の一部が残っていて、茎部には木質が残っている。

##### 鉄鎌

大刀の下から長頸鎌が一括で出土したもので、方向がそろっていることから、東になっていたと思われる。大刀が石室の主軸に並行して出土したのに対して、鉄鎌は、大刀と直交する方向で出土した。すべての鉄鎌が折れしており、鉄鎌の上で、欠損して蛇行した状態で出土した大刀の状況と併せて考えると、側壁の石が落ちた時にぶされたような状況である。本数は、鎌身の数で数えると9本である。

3は鎌身が細長い梢円形に近い形態の長頸鎌である。鎌身は薄く、片丸造である。関は撫閂に見えるが、はつきりしない。関がないまま鎌身から頸部に至る形態であろう。頸部の関は棘関である。

4は鎌身が長梢円形に近い形態で、鎌身の関は緩い撫閂のように見える。鎌身は薄く、片丸造である。頸部はかなり長く、関が見られない。

5は鎌身が短く、円形に近い長頸鎌で、鎌身の関はない。鎌身は薄く、片丸造である。頸部の残存部分には関はない。4と同じで関を作っていないのかもしれない。

6は鎌身に関がなく、頸部の幅が広がって鎌身につながっている。そのため、鎌身と頸部の境がはつきりしない。鎌身は薄く、片丸造である。鎌身の先端は欠損部分が多いが、鑿衝鎌のように見える。

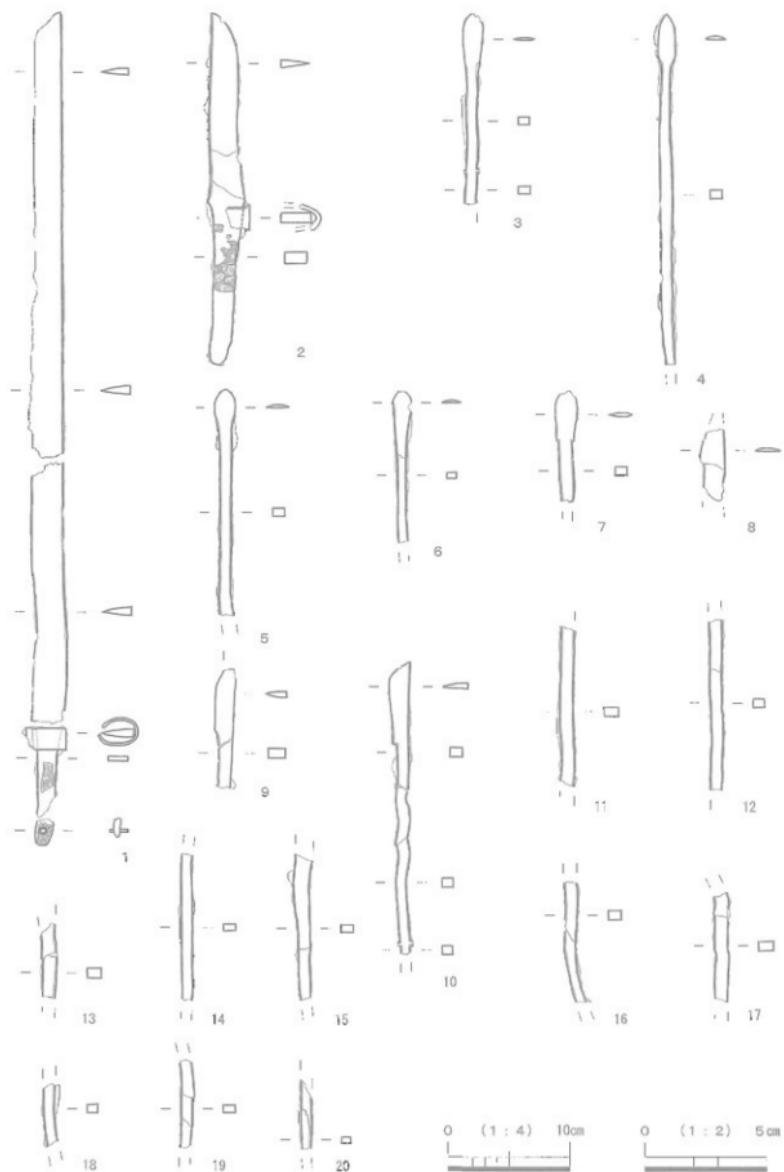
7は鎌身が梢円形に近い長頸鎌で、鎌身の関は作られていないが、鎌身と頸部の間がややくびれているため、鎌身と頸部の境界がわかる。

8は鎌身の破片で、両丸造になっている。なお、8は上下が逆になるかもしれない。

9と10は鎌身が片刃になる長頸鎌である。9の鎌身の関は撫閂、10の鎌身の関は角関になっている。10は鎌身が先端まで残っており、先端が斜めに研ぎだされていることから片刃箭鎌に近い形態である。11~20は頸部の破片である。

第3遺物群の鉄鎌と第4遺物群の鉄製品は、下記の特徴を持っている。

- ・ いずれも大刀1本、刀子1本と鉄鎌の組み合わせからなる。
- ・ 第3遺物群の鉄鎌は平根鎌と尖根鎌が見られる。
- ・ 第4遺物群の鉄鎌はすべて尖根鎌である。
- ・ 鎌身の形態は、第3遺物群の鉄鎌は、三角形式が主体である。
- ・ 第4遺物群の鉄鎌は、長梢円形で鑿衝鎌に近いもの、もしくは片刃箭鎌に近いものが主体である。
- ・ 関の形態は、いずれも棘関が主体である。



第29図 3号墳第4遺物群 (1:1/4、2~20:1/2)

## 第5遺物群の遺物

5次埋葬時の遺物は、2次疊床の上面で出土した遺物群で、石室開口部付近に分布している。内容は須恵器と刀子、耳環、玉類である。須恵器は、鉄製品の一群とはやや離れた場所から出土した。

### 須恵器

1個体分が出土し、ほぼ完全な形に復原できた。第30図-1は平瓶である。頸部が短い初現的な形態である。胴部にはカキ目が顯著に残っている。胴部内側には、胴部製作の際に中央部に空いていた穴をふさいだ痕跡が残っている。頸部は丁寧になでて仕上げてある。

2は須恵器の蓋で、胴部下半は器体を強くなでているため、屈曲する部分ができる。3は坏で、口縁部の立ち上がりは2段に分けてなでてあり、上段のなでは口縁頂部が鋭く尖るようになであげている。2と3はセットになると思われるが、3は石室の開口部付近で出土しており、第5遺物群の他の遺物とは離れて出土している。時期は、いずれも6世紀末～7世紀前半に納まる。

### 玉類

第30図-4～8は東玉である。4、6、7、8は琥珀製で、5は石製であるが、石材名は不明である。9～70はガラス玉で、色は藍色～青色である。9～13は穴の周囲に平坦面があり、これに対して14～70は穴の周囲が曲面になっている。

### 刀子

第22図-9は木製の柄が付いた刀子である。刃部の関はX線透過写真を見ると両関で撫閂になっている。刃部末端には、これも鹿角製の柄縁金具が残っている。また、刃部にも鞘と思われる有機質が残っているが、木と言うよりも、布か革のように見える。

10は木製の柄がついた刀子である。刃部には鞘と思われる木質が残っている。柄縁金具は付いていない。また、刃部の関はX線透過写真でもはつきりしない。

### 不明遺物

第22図-11は、鹿角、樹皮、木質の3つの部分からなる棒状の遺物で、鹿角と木質の境界に樹皮を巻き、さらに糸を巻いている。X線透過写真を見ると、中に鉄製の棒状遺物が入っている。棒状遺物は、一端が膨らんでおり、柄から抜けないように膨らませているように見えることから、膨らみのある方を柄と考えた。したがって、鹿角製の柄が付いた錐状の鉄製品に木製の鞘をかぶせ、その上に樹皮を糸で巻きつけた遺物と言うことになる。

### 弓金具

第22図-12は片方の頭部が欠損した弓金具である。残っている頭部は、先端が丸い円柱状になっている。花弁は6弁になると思われる。胴部には木質が残っている。

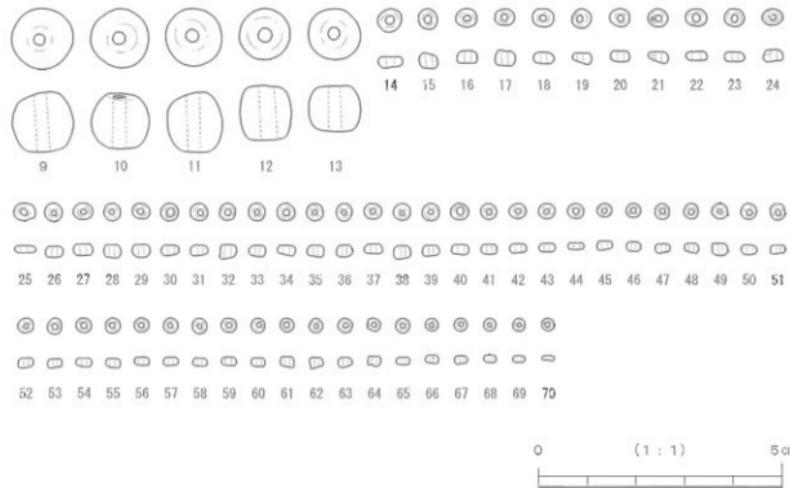
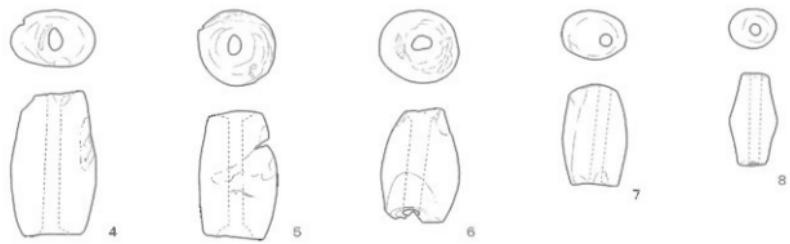
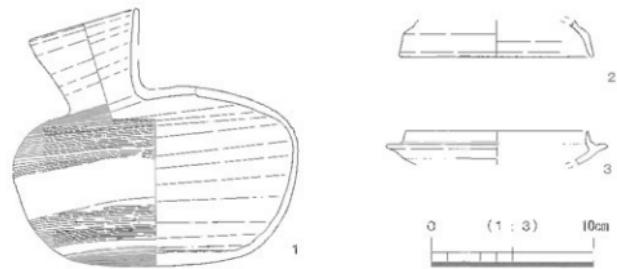
### 耳環

第22図-13と14は銀環で残存状況が似ている。15と16も銀環であるが、ともに金色に近い色をしている。17と18は鎖の進行状況が似ている。以上から、13と14、15と16、17と18が組になると考えられる。したがって、3体の遺体が埋葬されたと推定される。

### 鉄鐸

極めて珍しい遺物として、鉄鐸が2点出土した。ともに第30図-1の須恵器に隣接して出土したもので、第5遺物群に含まれる。第22図-19、20は扇状の薄い鉄板を丸めて作ってある。そして、2つとも中に角か骨と思われる組織が残っている。

早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号愛知県埋蔵文化財センター2008年によれば、愛知県、岐阜県、近畿地方、岡山県などで出土例があり、時期は5世紀中葉～7世紀に及んでいる。そして、鉄器製作者集団による儀礼遺物の可能性が高いと位置付けられている。



第30図 3号墳第5遺物群 (1~3 : 1/3, 4~70 : 1/1)

静岡県での出土例はこれが初めてであろう。第5遺物群は、玉類の他、刀子と耳環、弓金具が主体で、鍛治用具や鉄滓といった鉄器製作を示唆する遺物はない。また、出土位置も他の鉄製品から離れた場所で、須恵器とともに置かれたか、須恵器の中に入れた状態で出土した。したがって、的場3号墳の出土例では鉄鐸と鉄器製作集団との直接的な関連をうかがうことはできない。

#### その他の遺物

石室の掘削途中で出土したものや、箇掛けで検出した遺物を第31図に示す。

第31図-1は大刀の刃部片で、接合はないが、同一の大刀と思われる。鞘と思われる木質が残っている。破壊された大刀が出土したことから、大規模な盗掘があったことがうかがえる。

2は鉄鎌の鎌身部分で、鉄鎌を包んでいたと思われる織維痕が残っている。3は鉄鎌の鎌身で、片刃で鎌身の間は、角間である。4は、接合はないが、同一の鉄鎌と思われる。矢柄が残っており、間の形態は、X線透過写真でもはっきりしない。5は鉄鎌の頭部で、棘間と矢柄を確認できる。6も鉄鎌の頭部で、棘間が残っている。7は鉄鎌の茎で、木質が良く残っている。8は鉄鎌の頭部で、口巻きが残っている。間は確認できない。9は基部の破片で、木質が残っている。10～22は茎の破片で、10～13、15～17、19は矢納や口巻きが残っている。23、24は弓金具である。

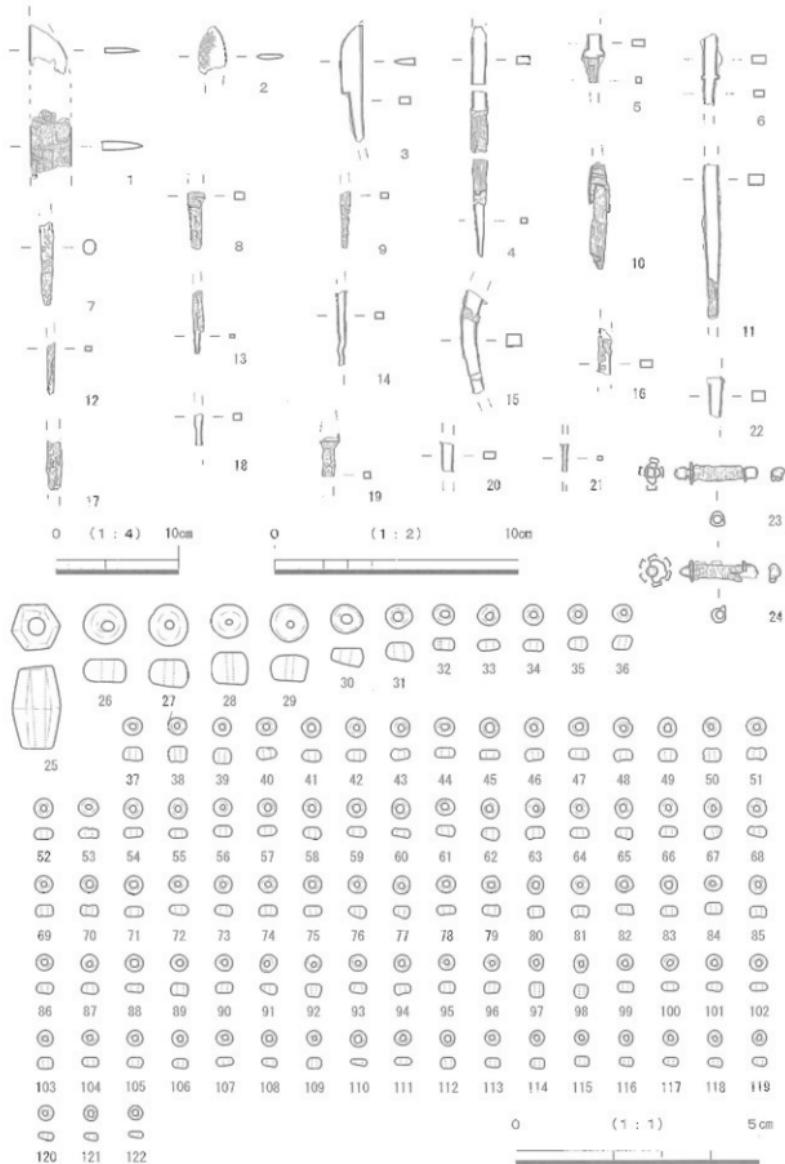
25は水晶製の切子玉である。26～122はガラス玉で、26～30は穴の周囲に平坦面があり、31～80は穴の周囲が曲面になっている。

#### 小結

3号墳は有段無袖式の横穴式石室を持つ古墳である。墳丘と周溝は失われているため、規模は不明である。6世紀後半か6世紀末に作られ、7世紀前半にかけて複数回の埋葬が行われた。埋葬の回数は、第1～5遺物群をそれぞれ異なる埋葬時の副葬と考えると、第1～4遺物群で4回、第5遺物群では、耳環の数から3体の埋葬が確認できるため、これを3回の埋葬と考えると、最高で7回の埋葬があったことになる。

上記の埋葬を、築造から順を追うと下記のようになる。

- ①石室を作るために墓坑を掘る。
- ②奥壁と根石を据えるための土坑を掘る。
- ③根石用の土坑底面に、石材を安定させるための土を入れて調整する。
- ④根石上面まで土を入れて根石を固定する。この時、根石の隙間にも裏込めの土を充填して根石を固定する。
- ⑤上段の石を積み上げる。その後、その石の上面まで裏込めの土を入れて、突き固めて石を固定する。礫床の下に見られる整地層（第17図の5層）は、根石を据えた後に作っており、段部で切れていることから、石室構築後に敷いたことになる。
- ⑥墓坑内の玄室部分に1～3cmの土（第17図の8層）を盛る。
- ⑦表面を突き固め、貼床状にする。これが礫床の下地になる。
- ⑧礫を敷き詰める。この時、第19図に示したように場所によって、礫を敷き分ける。
- ⑨礫床が完成したところで、遺体とともに第1～4遺物群が埋葬される。
- ⑩石室開口部を閉塞石で塞ぐ。この時の閉塞石は追葬の時に取り除かれ、第19図の左図に示したように、石の抜き取り痕だけが確認できる。
- ⑪1次礫床の上に2次礫床を貼る。
- ⑫遺体を埋葬し、第5遺物群を副葬する。第5遺物群に含まれる耳環の数から、3体の遺体が埋葬される。第19図の中央図と右図に示したように、この時の閉塞石は、少なくとも2回に分けて積まれていることから、この3体は、少なくとも2回に分けて埋葬されたことになる。



第31図 3号墳その他の出土遺物 (1:1/4、2~24:1/2、25~122:1/1)

#### (4) 土坑1

3号墳に隣接して検出した土坑である（第32図）。4号墳の墓道に接しており、明瞭に検出できた。形状は歪んだ円形で、大きさは3m×2.5m、深さは30cmである。3号墳と同様、上部を削平されている。

土坑の中から第32図に示す土器が出土した。1は須恵器の短頸壺で、土坑の中央付近で出土した。出土レベルは、この土坑から出土した土器の中で最も低く、埋土の2層上面付近である。底部外面は螺旋状にヘラ削りをしており、底部内面は螺旋状になでている。頸部は強くなでてつまみ上げている。2は須恵器の壺である。口縁部は、上半のなでと下半のなでによって2つに折れるように屈曲しており、口唇部は鋭く尖るようにつまみあげである。時期は6世紀末～7世紀初頭、TK209段階である。

3は須恵器の蓋である。底部は回転削りの後、不定方向に削っている。時期は7世紀前半、TK217段階である。4は須恵器の壺で、底部は螺旋状の回転削りが見られる。口縁の受け部は強く外反している。時期は7世紀前半、TK217段階である。

3と4の須恵器には、胴部にため痕が見られる。これは胴部を作る際に、粘土を強く外反するようにつまみだしているもので、製作者の癖と思われる。3と4には同じ癖が見られることから、この蓋と壺は、同一製作者、あるいは同一の製作集団によって作られたもので、セットになると考えられる。

5は須恵器の蓋で、強い稜線が残っている点では6世紀前半の可能性もあるが、口径が小さいことから、6世紀末～7世紀前半、TK209～TK217段階と考えた方が妥当であろう。

以上の土器は、1の時期は決め難いが、2～5はいずれも6世紀末～7世紀前半である。3号墳から出土した土器と接合するものはないが、3号墳から出土した上器の時期と一致する。このことから、この土坑は3号墳に伴うもので、3号墳の墓前祭祀を行った跡と考えることができる。

#### (5) 4号墳

##### 検出状況

検出状況を第33図に示す。西に向かう緩斜面で検出した。すぐ西側は深い谷になっている。墳丘は失われていたが、主体部の東側に周溝がわずかに残っていた。主体部、周溝ともに明瞭に検出できた。

##### 周溝

第33図に示すように、主体部の東側に残っていた。主体部までの距離を古墳の半径とすれば、直径14m程の円墳であったと推定できる。残っていた周溝の深さは20cm程度である。

##### 主体部

石室の形態は、墓道が両側壁の中央付近にあることと、後述するように、墓道と石室内に段があることから、有段無袖式の横穴式石室と推定できる。

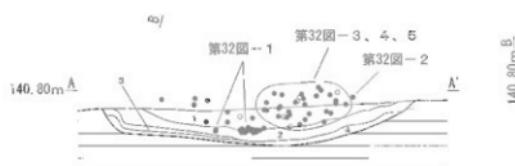
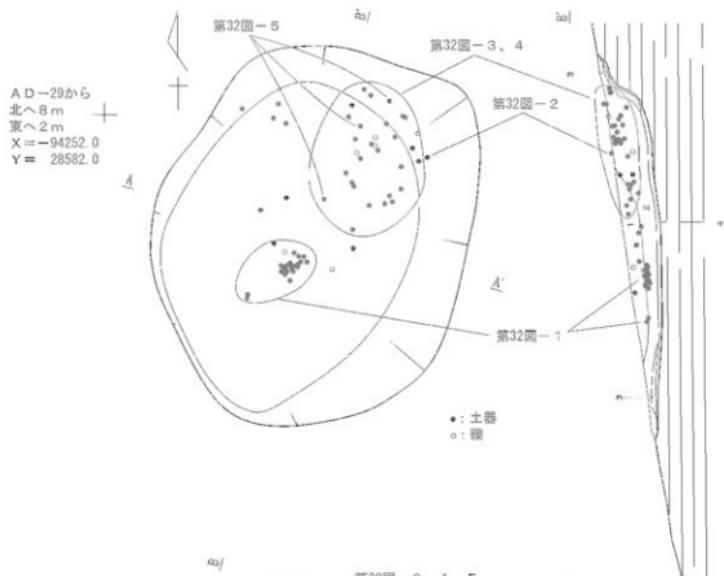
石室の展開図を第34図に示す。礎床は石室の北側半分ほどが残っていた。石の大きさは不揃いで、大きな石を据えて、その隙間を小さな石で充填している。石室開口部には、明瞭な段が作られている。

##### 根石

第35図に示すように、根石は東壁と西壁の北半分である。根石には、小口面に平坦面がある板状の礎を使っており、その平坦面を石室内部に向けて据えてある。大きさは平均で長さ80cm、幅60cm、厚さ40cm程度である。奥壁は抜き取られていたが、奥壁を固定した土坑の大きさから、幅1m強、厚さ60cm程の石を使っていたと推定できる。根石の間には小さな礎で隙間を埋めてある。

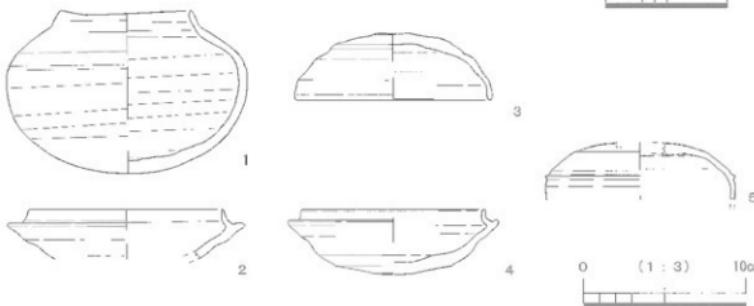
##### 根石の構築方法は下記のとおりである。

墓坑内に根石を据える土坑を掘る。この後、墓坑内全体に黒色土と栗色土層の土、富士黒土層の土を混ぜた土（9層）を敷き詰めて整地する。この土は根石を据える土坑内にも入れてある。整地後、根石を据える。次に根石と墓坑の間に黒色土（1'層）と黒色土と栗色土層の土を混ぜた土（2'層）を入れて裏込めにする。その後、玄室内に黒色土と栗色土層の土を混ぜた土（8層）を敷き詰めて礎床の下地を作る。

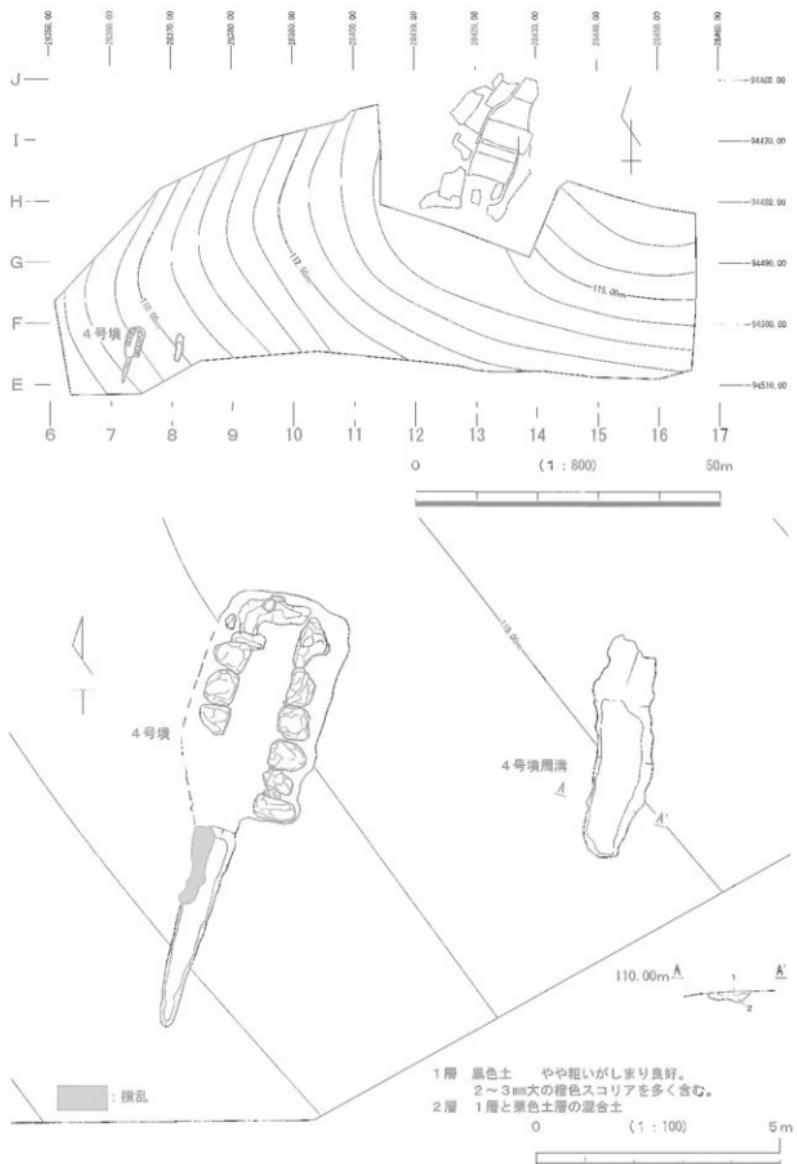


1層 黒褐色土 2mm大的ローム粒子を少し含む。2mm大的橙色のスコリアを少し含む。  
やや締まっている。  
2層 黒褐色土 2mm大的橙色のスコリアを含む。やや締まっている。  
3層 黒褐色土と栗色土層のブロックとの混合土 やや締まっている。  
4層 栗色土層ブロック

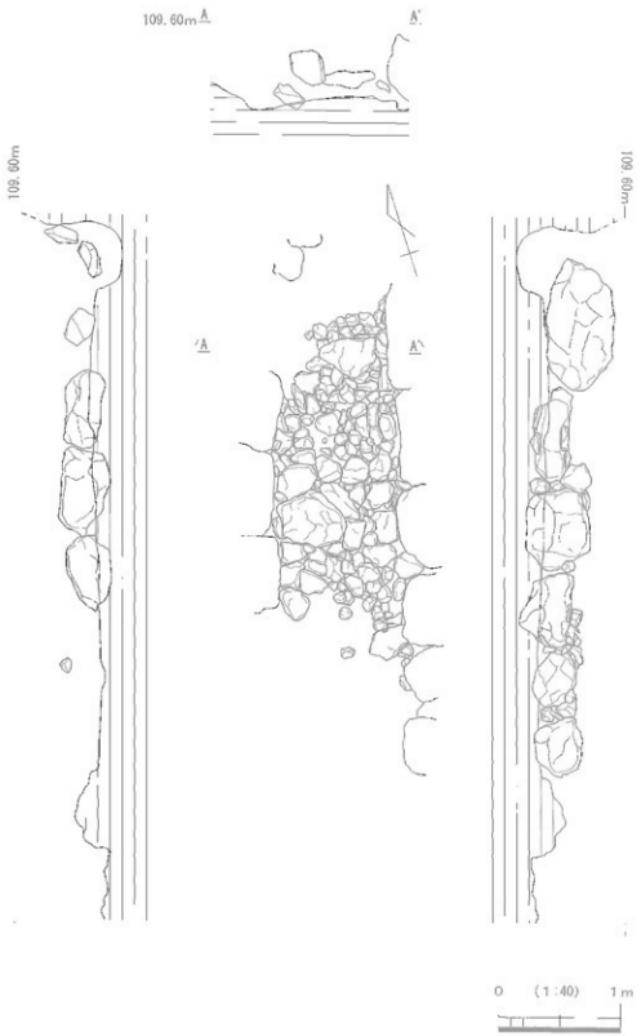
0 (1:40) 1m



第32図 土坑1実測図と出土土器



第33図 4号墳周辺地形図と検出状況



第34図 4号墳石室展開図

## 墓坑・墓道

墓坑は第36図に示したように、長さ4.6m、幅は推定で2.8m、深さは60cm程で掘ってある。根石や奥壁を据える土坑は不整形である。

墓道は2.6mの長さで掘ってある。幅は石室から離れるに従って細くなって、最後は自然消滅している。深さは40cmである。底に黒色土と休場層を混ぜた土、第35図の5層が堆積している。この層は敷き詰めたようになっており、墓道を整地したのかもしれない。

墓道と石室の境界には、第36図のA-A'の断面に示したように盛り上がった部分があり、明瞭に段を作っている。同様の作り方は、沼津市の秋葉林1号墳（当財團報告書第216集）に見られる。

## 出土遺物

礎床が残っている部分は擾乱が及んでいないため、第37図に示すように、遺物が残っていた。玉類は集中して出土しており、おそらく遺体の首にかけた状態を保っていると思われる。

## 刀子

第38図-1は刀子である。刃部の基部には、柄縁金具が残っている。刃部の間は刃部側だけに撫閂が作られている。柄の部分の一部に木質が残っている。

## 鉄鎌

第38図-2は鎌身の幅が広く、逆刺がついた平根三角形式の短頭鎌である。鎌身の作りは平造である。3は鎌身が寸詰まりのように短い。長頭か短頭かは不明である。鎌身の作りは両丸造で、逆刺が作られている。

4は鎌身に逆刺のある長頭鎌で、飛燕式と呼ばれるものである。鎌身は平造で、頭部の間は欠損のため、確認できない。5と6は鎌身に逆刺のある長頭鎌である。鎌身の作りは片丸造である。

7は片刃の鉄鎌で、鎌身だけが残っている。刃部側に、わずかに角闘のような屈曲部分が見られる。8は鑿箭式である。鎌身に間がなく、鎌身と頭部の境界がはっきりしない。

9は頭部の破片で、台形間が確認でき、口巻きが残っている。10は頭部の破片で、棘間が確認でき、矢柄が残っている。11～18は頭部の破片で、13と16に棘間が確認できる。17は片刃になるかもしれない。19は茎の破片である。

## はばき

第38図-20は、薄い鉄板を曲げて作ったはばきで、内側には木質が残っている。これが出土しているということは、大刀が副葬されていたことが推定される。

## 耳環

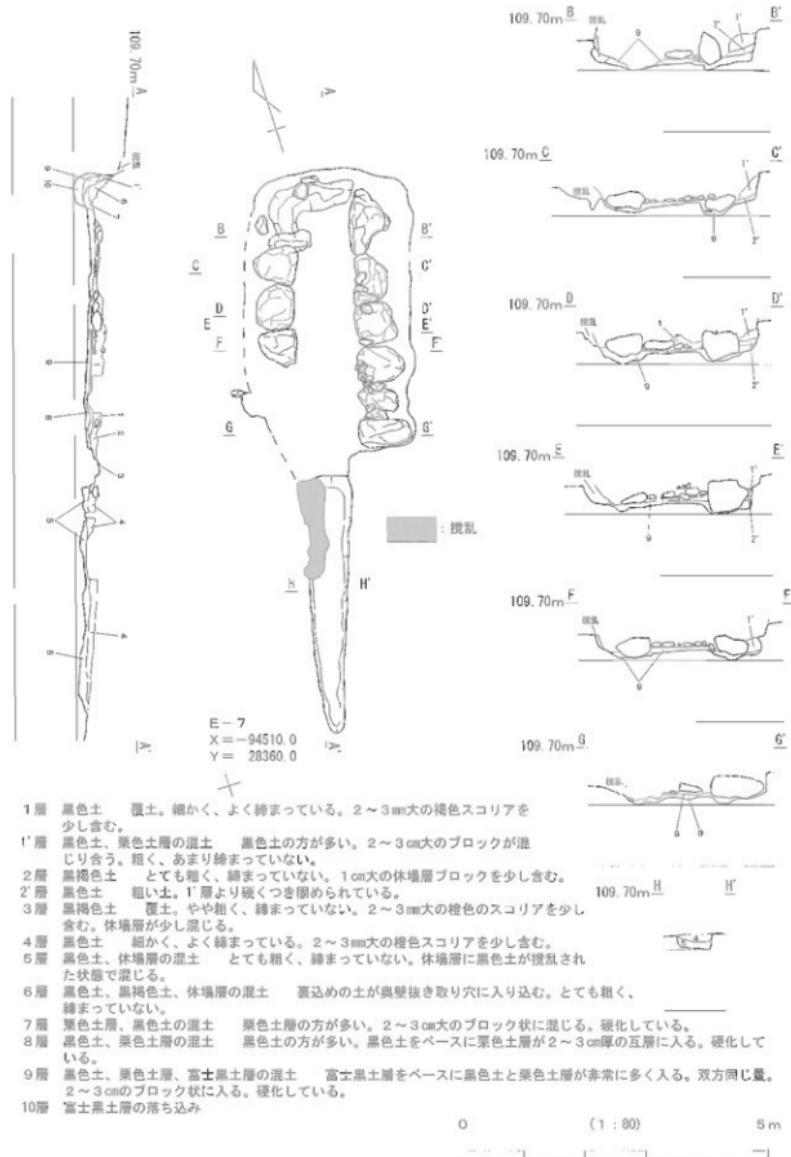
第38図-21と22は耳環で、ともに残りが非常に良い。玉類が集中していた辺りから出土していることから、原位置からあまり動いていないと思われる。ともに淡い金色であることから、銀箔か金箔を巻きつけている。耳環の切れ目には、箔の末端を巻き込んだ歴が確認できることから、同一の技法で作られていることがわかる。したがって、この耳環は同時に副葬されたもので、この石室で一括出土した副葬品は、遺体一体分ということになる。

## 玉類

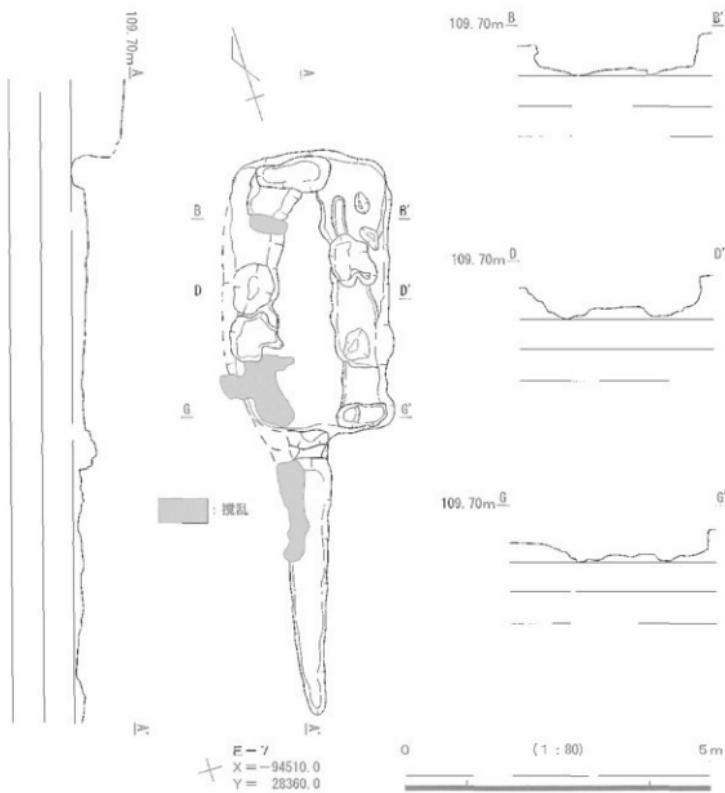
第39図-1、2は、碧玉製の管玉である。図示したように、穴は片面穿孔である。3～8は水晶製の切子玉、9～12はガラス玉である。9～33は、穴の周囲に平坦面があり、34～121は穴の周囲が曲面になっている。

## 土師器

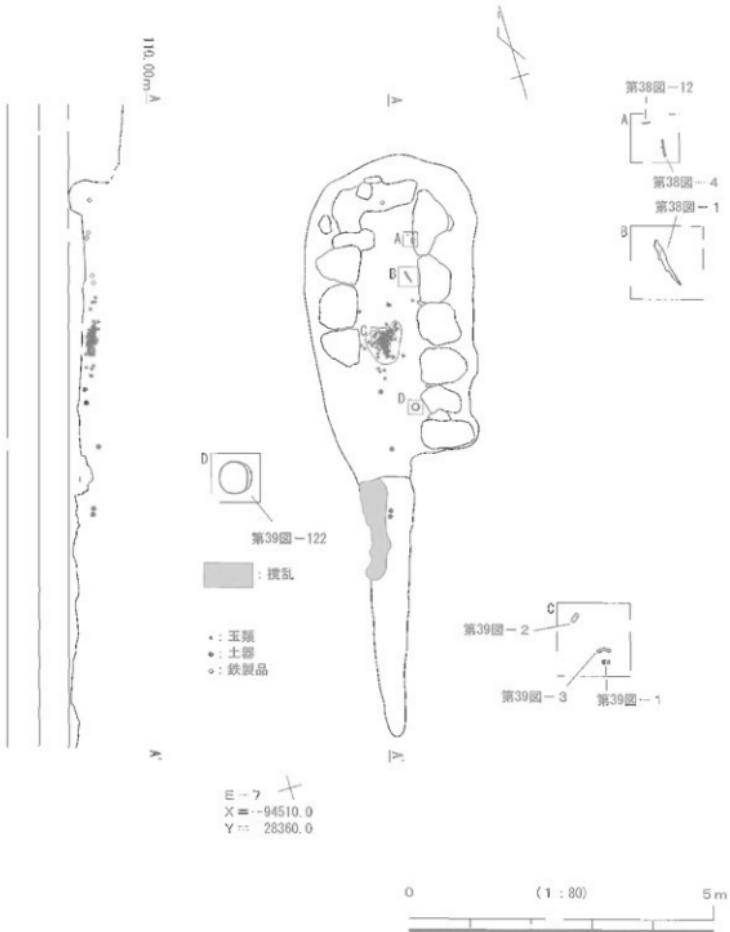
第39図-122は土師器の壺で、焼してあるため全体的に黒い。口縁部の立ち上がり部分は内外面とも強くなっている。胴部は内外面とも細い工具を使って丁寧に磨いてある。全体的に丁寧な作りである。



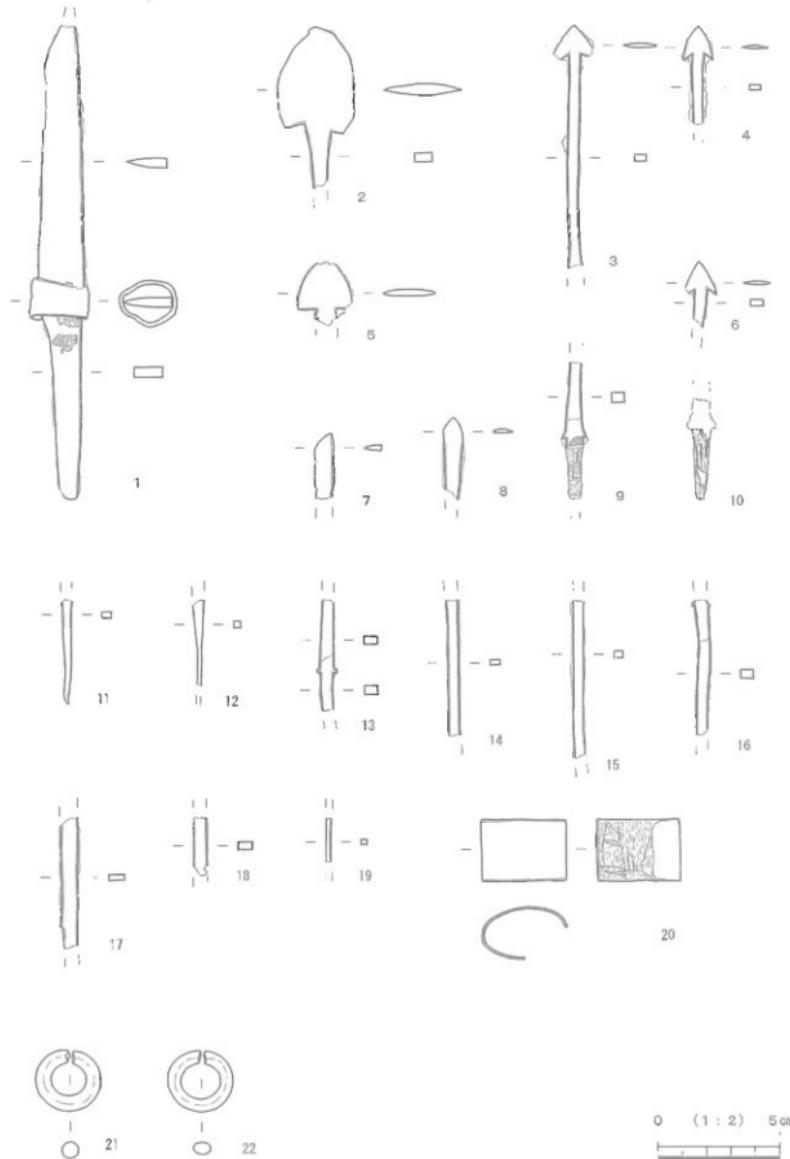
第35図 4号墳根石実測図



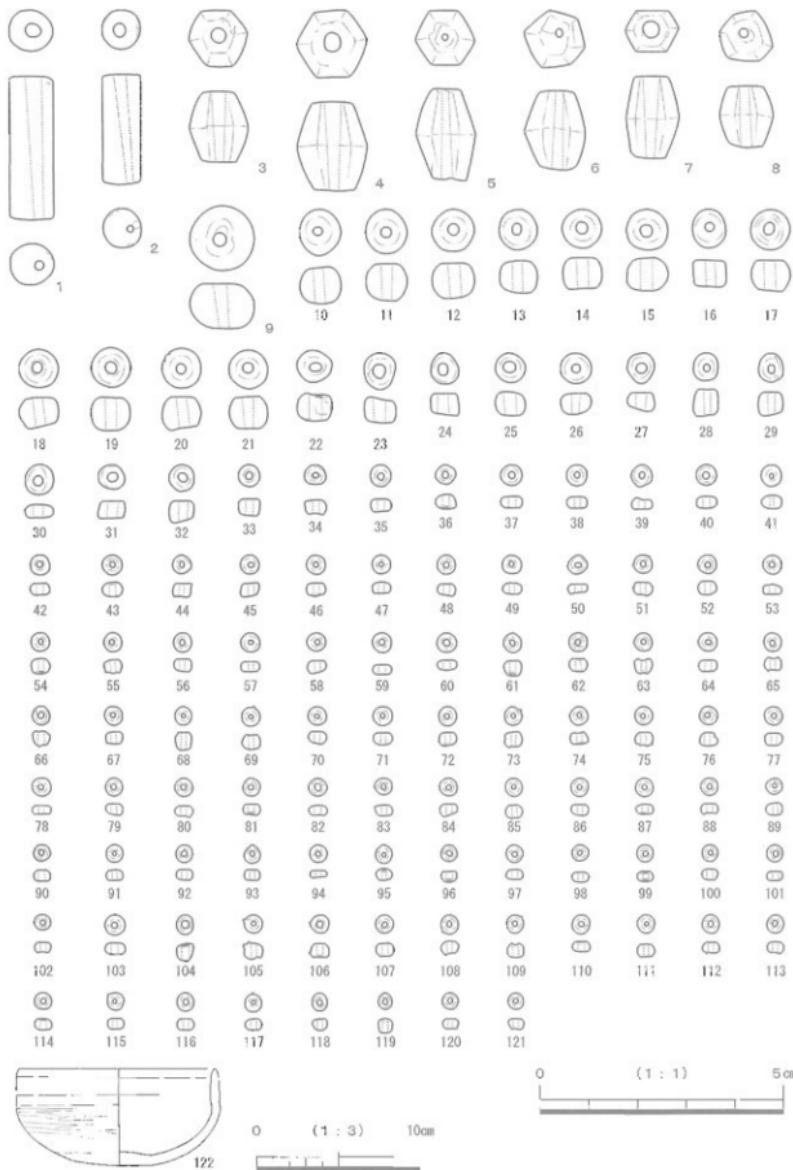
第36図 4号填完掘状況



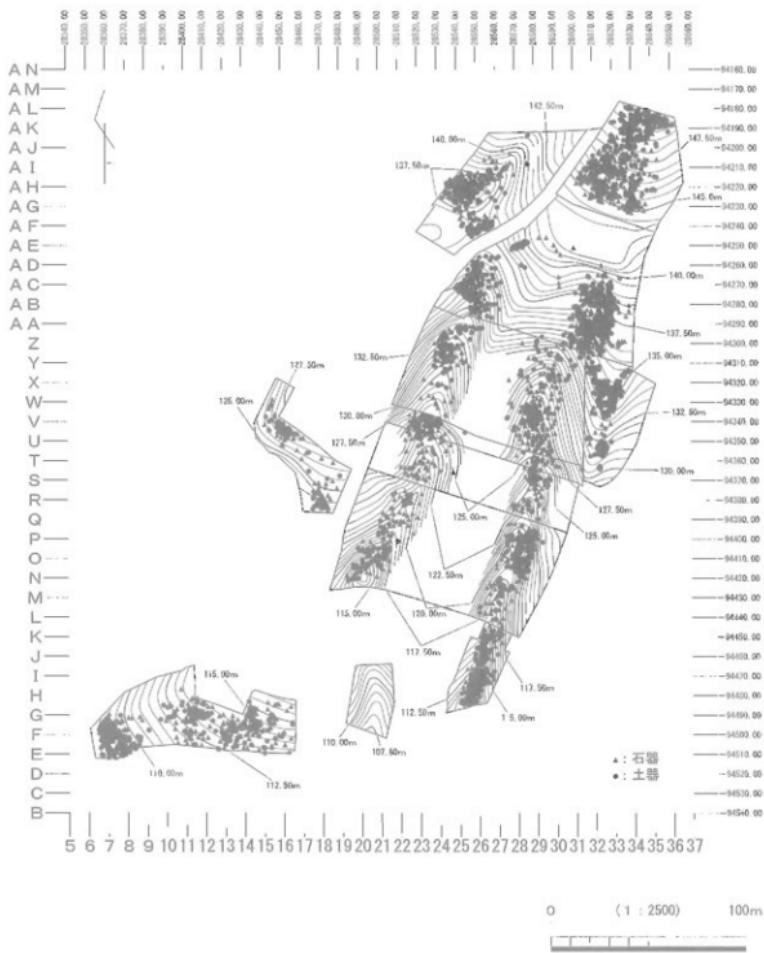
第37図 4号墳遺物出土状況



第38図 4号墳出土遺物1



第39図 4号墳出土遺物2 (1~121:1/1、122:1/3)



第40図 繩文時代遺物分布図

## 第5章 縄文時代の調査

縄文時代の遺構と遺物は、第40図に示すように、調査域のはば全域で検出できた。ともに丘陵上で検出したものと谷の中で検出したものがある。遺物の分布域によって、いくつかの区域に区切ることができる。調査区画と遺物の分布域が大方一致するため、調査区ごとに記載する。

### 第1節 10区の遺構と遺物

…番北の調査区で、第41図に示したように、遺物、遺構とも今回の調査範囲の中では比較的多い。丘陵に当たっており、南に向かって緩やかに下っている。南に隣接する3区に、遺構と遺物の空白域があるため、この調査区内を遺構、遺物の分布域として設定できる。

縄文土器は、押型文土器が最も多く、調査区の全域に分布する。次に多いのは判ノ木山西式で、これは同一個体と思われる土器が特定の部分に集中している。その他には、撫糸文土器が調査区の北側に分布し、曾利Ⅰ式と曾利Ⅱ式が調査区の西側に分布する傾向がある。

#### (1) 壴穴住居跡2

丘陵上で検出した円形の住居跡である。平面図と断面図を第42図に示す。直径は3m程で、床面には石組の炉跡が残っている。

埋土のうち最下層の6層は、A-A'断面とB-B'断面に見られるように、柱穴と壁沿いに掘られた溝の両方に堆積していることから、柱穴の腐朽による堆積物ではなく、住居廃絶後に流れ込んだ土である。住居廃絶後に柱穴が建った状態で腐朽したならば、柱穴の中と壁沿いの溝に同じ土層が形成されることはない。柱穴と壁沿いの溝に同じ土層が形成されるためには、住居廃絶後、埋土が流れ込む前に、柱穴は空いていなければならぬ。したがって、この住居は廃絶後、すぐに柱が抜かれたと考えられる。

5層は、A-A'断面に見られるように、6層に切られていることから、6層堆積以前に形成された層である。6層は住居廃絶後、最初に流れ込んだ土であるため、それ以前に形成された5層は、住居廃絶以前に形成された層ということになり、床面直上に堆積していることと、後述する石皿がこの上に据えられた状態で出土していることも考え合わせると、5層は貼り床と考えられる。

炉跡は、住居跡の中心よりもやや北寄りに直径80cm、深さ25cm程の穴を掘り、その中に明褐色の土を入れて整地した上に礎を円形に並べている。礎の大きさは描っていない。

柱穴と思われる土坑は少なくとも6基検出されている。床面からの深さは40cm程である。隣接する土坑があるので、住居の建て替えがあったと思われる。

住居の外側でも土坑を検出している。住居に伴う土坑と思われるが、性格ははつきりしない。

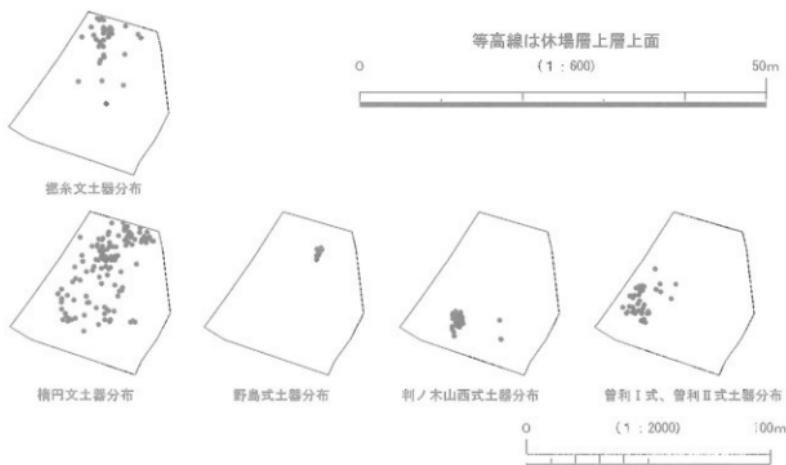
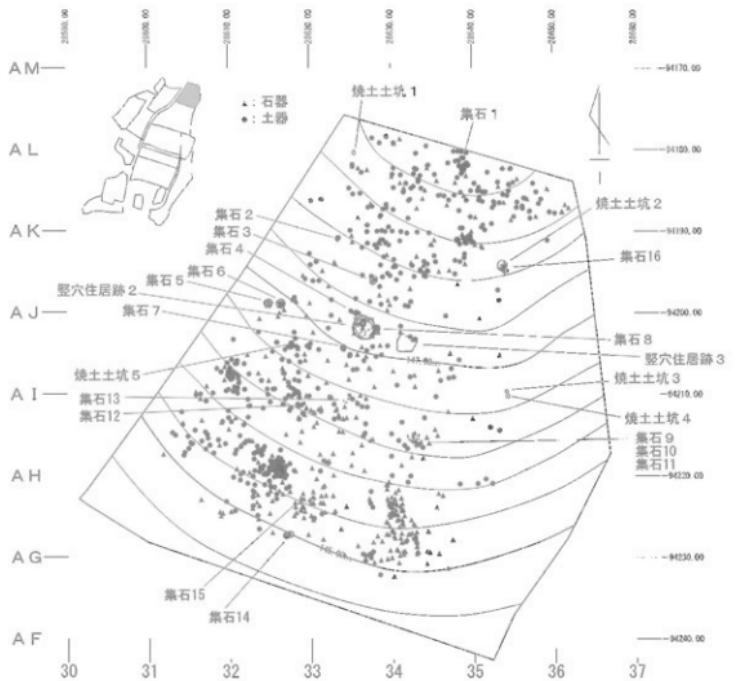
壁沿いには浅い溝が掘られている。この溝は住居の南東側で切れている。住居内では炉跡の反対側にあることから、溝が切れた辺りが、住居の出入り口だったと考えられる。

出土遺物は多くないが、第43図-1の縄文時代中期の土器片が出土している。炉跡の内部から出土したもので、この住居に伴うものと考えて良い。口縁部の破片で、RLの縄文が見られる。住居跡の時期を判断できる遺物は、これが唯一である。また、2の梢円文土器も出土しているが、これは床面から浮いた状態で出土したことから、流れ込みである。

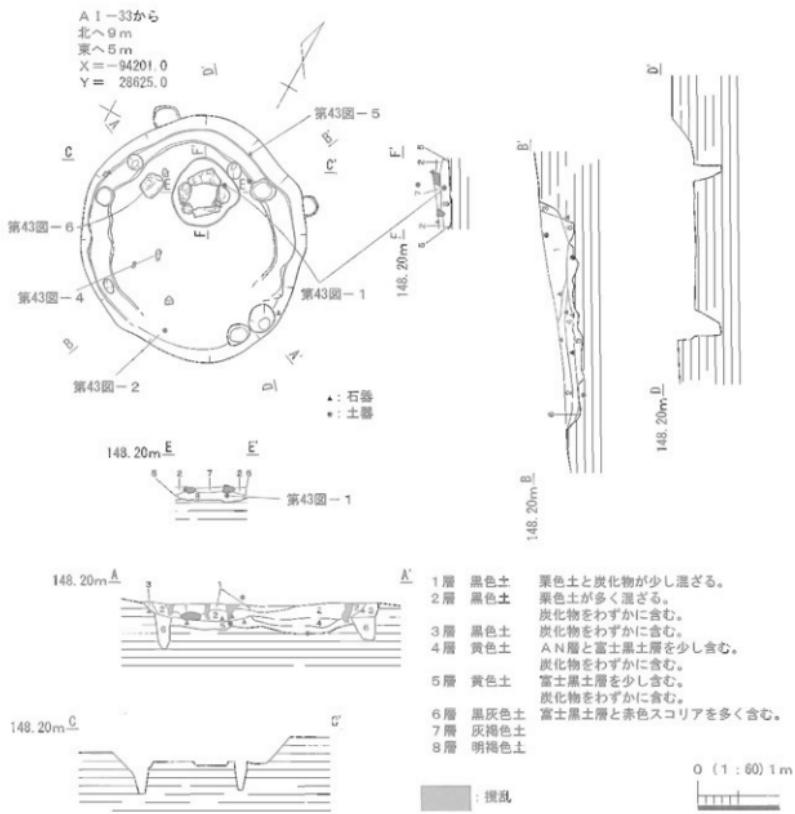
炉跡の横には、6の石皿が据えられた状態で出土した。玄武岩の平坦な礎を使っており、一面が平坦になっている。また、床面付近で、4の打製石斧が出土した。円礎面が大きく残る大型の剥片を使っており、両端から平坦削離を入れて全体の形を作っている。加工の量は多くない。

壁際では、5に示した敲打痕のある礎が出土している。これも住居跡に伴う遺物であろう。

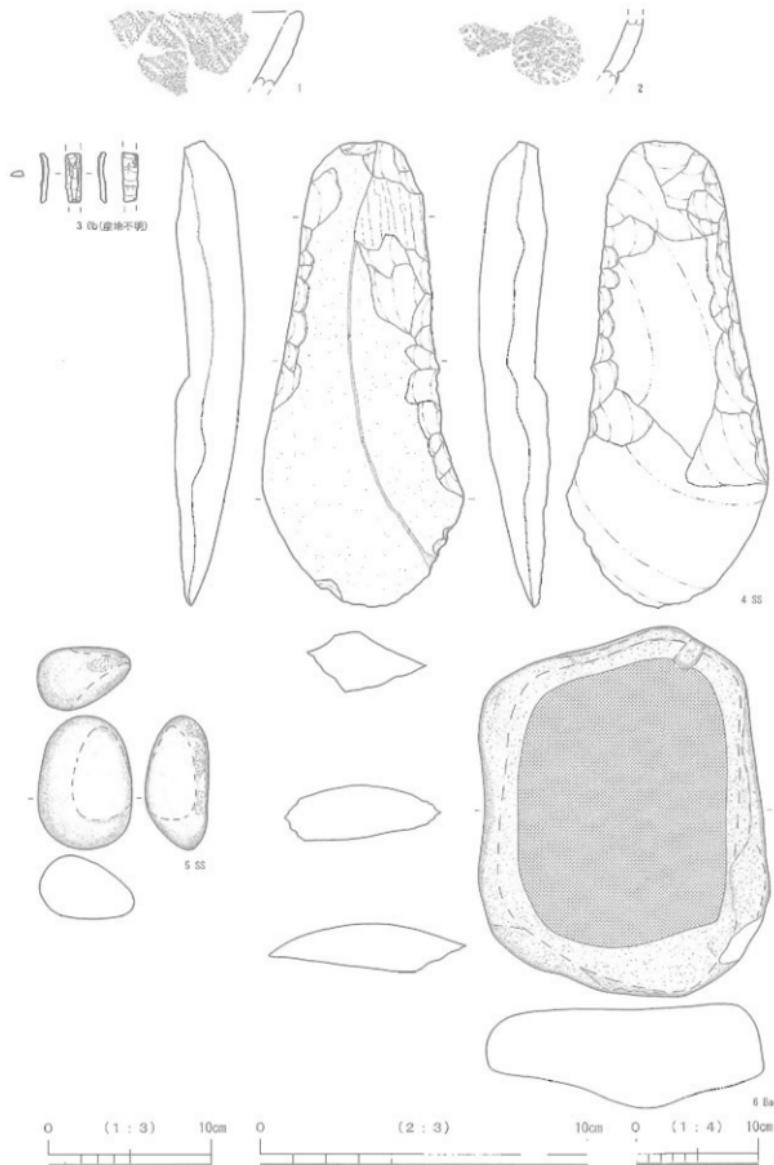
3の細石刃は流れ込みである。



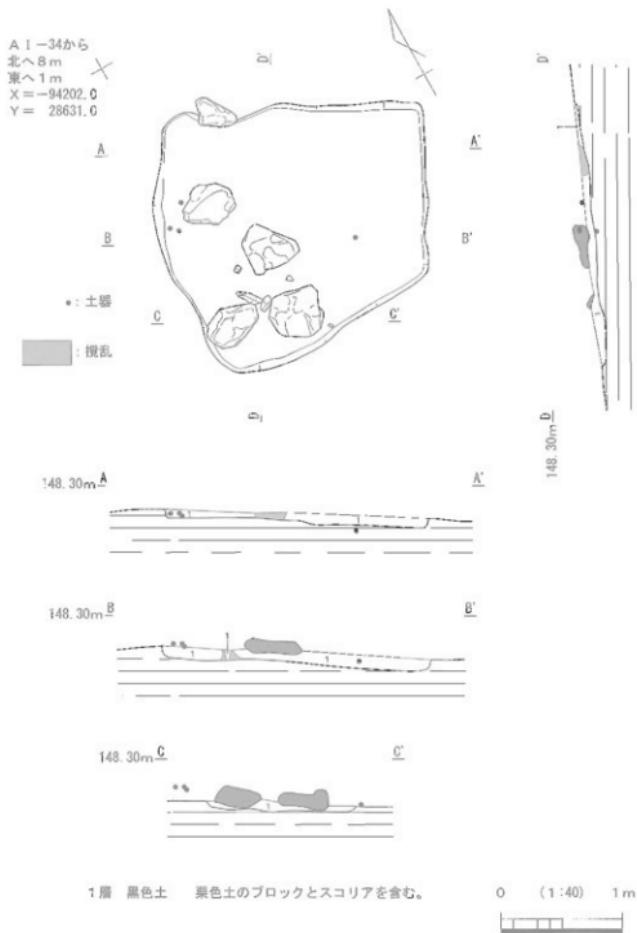
第41図 10区縄文時代遺構、遺物分布図



第42図 竪穴住居跡2



第43図 穫穴住居跡2出土遺物 (1・2・5:1/3、3・4:2/3、6:1/4)



第44図 竪穴住居跡3

## (2) 穫穴住居跡3

調査区の中央付近で、竪穴住居跡2に隣接して検出した。第44図に示すように不整形で、柱穴のような遺構は検出されなかつたため、住居跡と積極的に認定しにくいが、通常の土坑にしては大きすぎるため、住居跡として報告する。

上部を削平されていると思われ、検出できた深さは40cm程度である。縄文土器片が出土しているが、時期は不明である。また、遺構内から一抱えもあるような礫が数点出土している。遺構廃絶後に投げ込まれたような出土状況である。時期は不詳である。

## (3) 燃土土坑1

楕円形の土坑で、炭化物を含んだ焼土が入っている（第45図上段）。遺物は出土していないが、周辺で撲糸文土器が出土していることから考えると、縄文時代早期の可能性が高い。

## (4) 燃土土坑2

直径1.3m程の円形土坑で、焼土土坑の中では大きなものである（第45図下段）。埋土は炭化物を含んだ焼土だが、2層に分けることができる。遺物は出土していない。

## (5) 燃土土坑3

円形の土坑で、炭化物を含んだ焼土が入っている（第46図上段）。遺物は出土していない。

## (6) 燃土土坑4

円形の土坑で、炭化物を含んだ焼土が入っている（第46図中段）。埋土は2層に分かれている。

## (7) 燃土土坑5

楕円形の土坑で、炭化物を含んだ焼土が入っている（第46図下段）。埋土は2層に分かれている。遺物は出土していない。

## (8) 集石1

富士黒土層の上面で検出したもので、20点の礫からなる（第47図上段）。浅い土坑を作っているように見えるが、輪郭をはっきりとらえることができなかった。周辺では楕円文土器が出土していることから、縄文時代早期の可能性が最も高い。

## (9) 集石2

栗色土層中で検出したもので、32点の礫からなる（第47図下段）。深い土坑を作っており、埋土は1層である。

## (10) 集石3

栗色土層中で検出したもので、16点の礫からなる（第48図上段）。礫の中に石皿が1点含まれている。凝灰質砂岩の円礫を使っており、表面が擦れてわずかに窪んでいる。

## (11) 集石4

栗色土層中で検出した土坑を伴う集石で、45点の礫からなる（第48図下段）。埋土は1層である。2点の礫を除いてすべて赤化している。完形の礫は2点でいずれも赤化している。33点の礫は割れ面が赤化しており、割れ面の赤化していない礫が8点ある。

## (12) 集石5

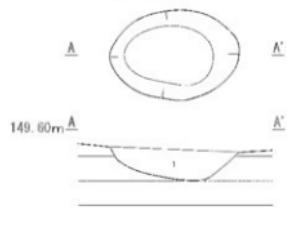
栗色土層中で検出した土坑を伴う集石で、33点の礫からなる（第49図上段）。土坑中の埋土は1層である。完形の礫は3点でいずれも赤化している。割れ面が赤化した礫が22点あり、割れ面が赤化していない礫は6点ある。

## (13) 集石6

富士黒土層中で検出した土坑を伴う集石で、大きく削平を受けている（第49図下段）。20点の礫からなり、完形の礫は2点ある。15点の礫は割れ面が赤化しており、割れ面が赤化していない礫は2点ある。

A L -33から +  
 東へ6m  
 X = -94180.0  
 Y = 28626.0

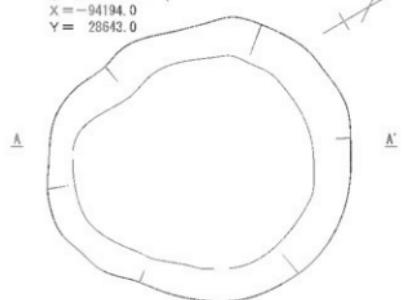
焼土土坑 1



1層 赤褐色土  
 烧土で、炭化物を含む。

A J -35から  
 北へ6m  
 東へ3m  
 X = -94194.0  
 Y = 28643.0

焼土土坑 2



1層 赤褐色土 烧土で、炭化物を含む。  
 2層 錆色土 烧土と炭化物を含む。

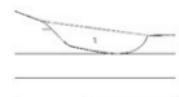
0 (1 : 20) 1m

第45図 焼土土坑 1、2実測図

焼土坑3

A I -35から  
北へ1m  
東へ4m  
 $X = -94209.0$   
 $Y = 28644.0$

147.40m A



1層 明褐色土 焼土で、炭化物を含む。

A I -35から  
東へ5m  
 $X = -94210.0$   
 $Y = 28645.0$

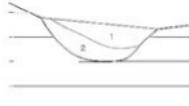


焼土坑4



147.30m A

A'



1層 赤褐色土 焼土、炭化物を含む。  
2層 褐色土 焼土。

焼土坑5

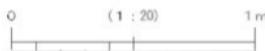
A I -32から  
北へ7m  
東へ7m  
 $X = -94203.0$   
 $Y = 28617.0$

147.60m A

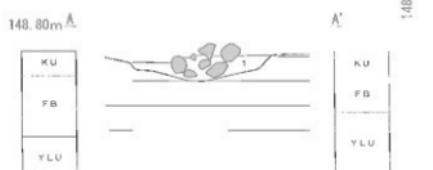
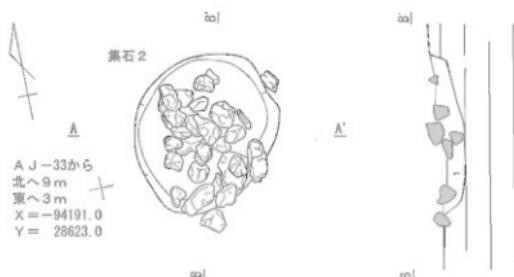
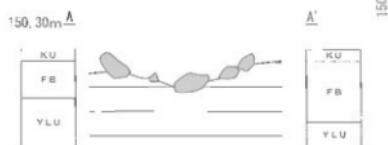
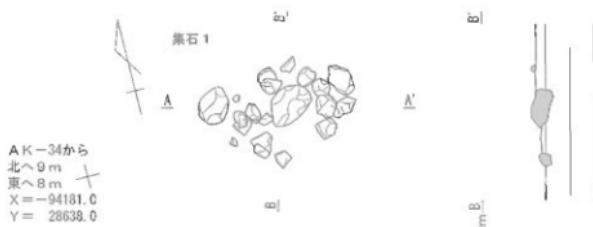
A'



1層 橙褐色土 焼土、炭化物を少し含む。  
2層 褐色土 焼土、炭化物を少し含む。

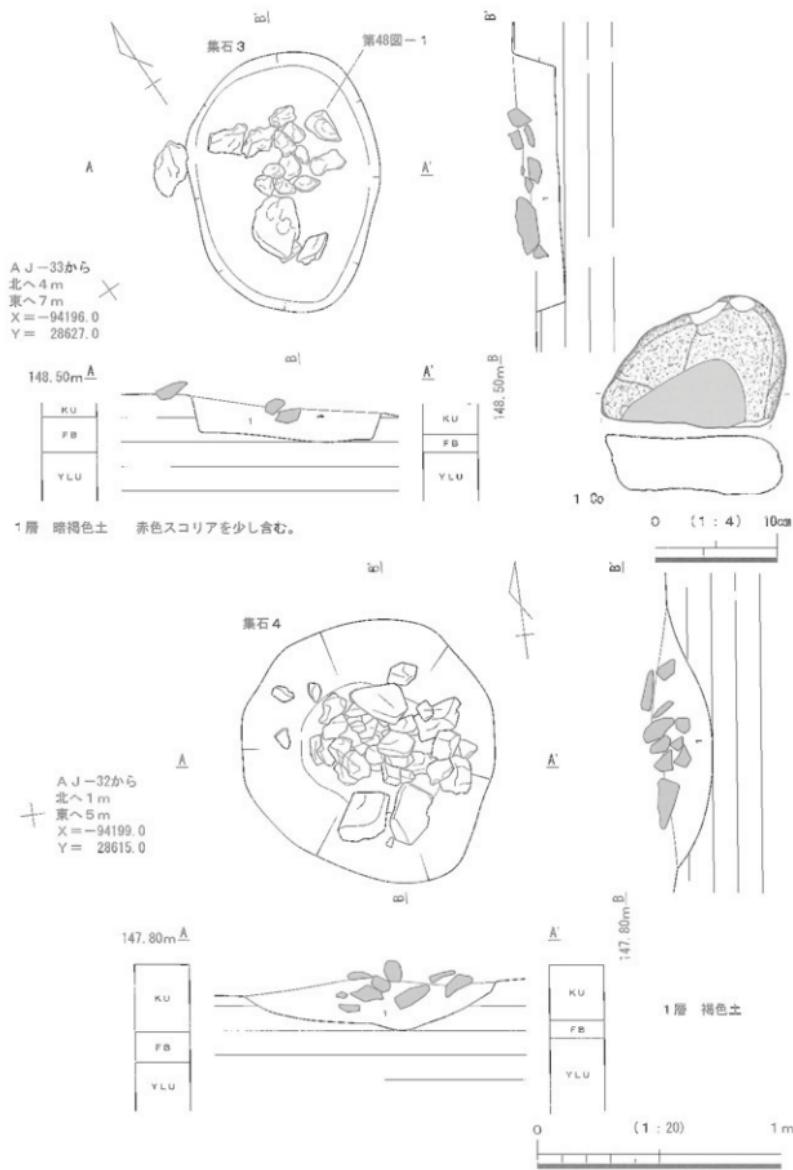


第46図 焼土土坑3～5実測図

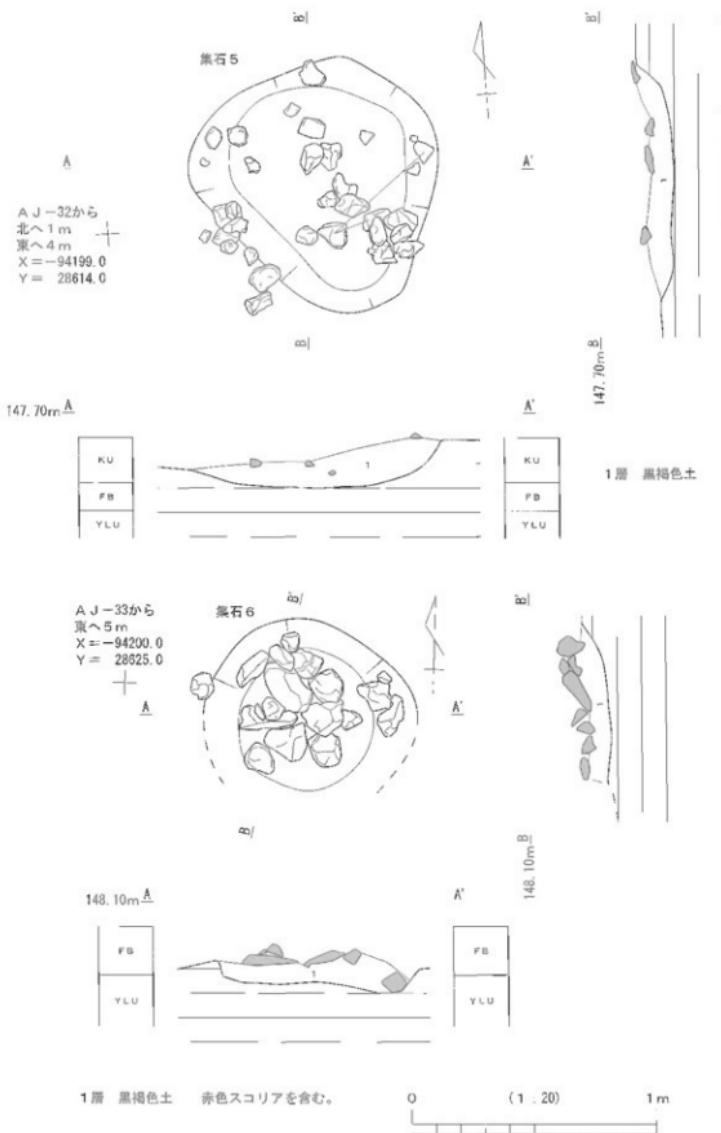


1層 褐色土 スコリア、炭化物を少し含む 0 (1 : 20) 1m

第47図 集石 1、2 実測図



第48図 集石3、4実測図と出土石器



第49図 集石 5、6 実測図

(14) 集石7

栗色土層中で検出した土坑を伴う土坑で、24点の礫からなる（第50図）。16mほど離れた遺構外の礫が接合する。完形の礫が3点あり、2点が赤化している。割れ面が赤化した礫が16点あり、割れ面が赤化していない礫が4点ある。

(15) 集石8

栗色土層中で検出した土坑を伴う集石である（第51図上段）。37点の礫からなり、礫を土坑内に詰め込んだようになっている。完形の礫は9点あり、8点が赤化している。割れ面が赤化した礫は20点、赤化していない礫は5点ある。

(16) 集石9

富士黒土層中で検出した集石で、土坑はない（第51図下段）。礫が密集するという感じではなく、むしろ散在している。27点の礫からなっており、完形の礫は8点で、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は17点で、赤化していない礫は2点ある。

(17) 集石10

栗色土層中で検出したもので、土坑はない（第52図上段）。12点の礫が密集している。完形の礫は4点あり、すべて赤化している。破碎した礫は、すべて割れ面が赤化している。

(18) 集石11

栗色土層中で検出した集石で、土坑はない（第52図下段）。37点の礫が密集しており、中に1点石皿がある。完形の礫は1点あり、赤化している。割れ面が赤化した礫は27点、赤化していない礫は7点ある。石皿は、相当使い込んだようで、表面が大きく窪んでいる。集石に転用された後に焼かれて赤化している。

(19) 集石12

栗色土層中で検出した、6点の礫からなる小規模な集石である（第53図上段）。6点中5点が完形礫で赤化している。

(20) 集石13

13点の礫からなる小規模な集石である（第53図下段）。すべての礫が破碎しており、12点の礫は割れ面が赤化している。また、ホルンフェルスの剥片と橢円文土器の小片が伴っている。

(21) 集石14

栗色土層中で検出した集石で、深さ50cmに及ぶ橢円形の土坑を伴っている（第54図）。断面図の所見から、橢円形の土坑内に別の土坑があり、その土坑内に扁平な礫を敷き詰め、その上に扁平な礫を被せて蓋をしたような構造になっていることがわかる。

礫は72点あり、すべて破碎している。68点が赤化している。割れ面が赤化した礫は54点あり、割れ面が赤化していない礫は14点ある。

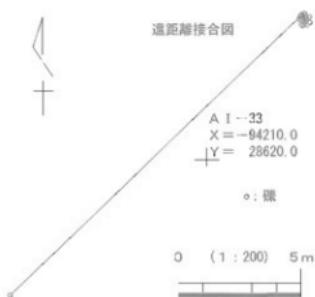
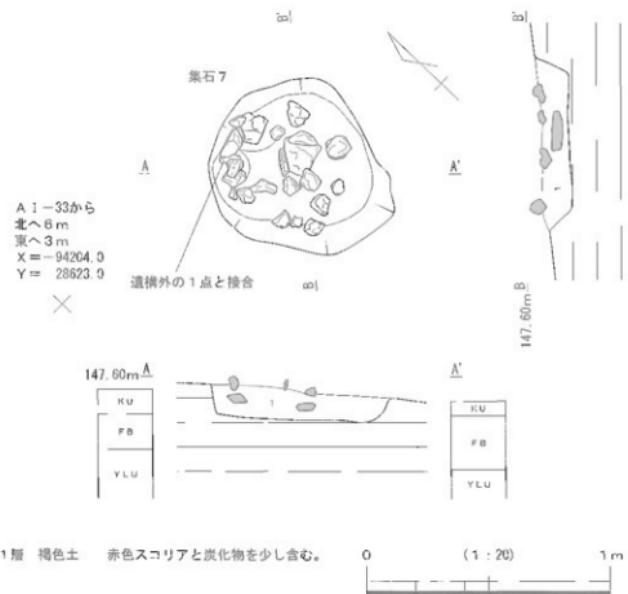
また、礫の中に1点石皿がある。砂岩の円礫を使っており、表面が窪んでいる。半分に割れた石皿を転用したのであろう。これも火を受けて赤化している。

(22) 集石15

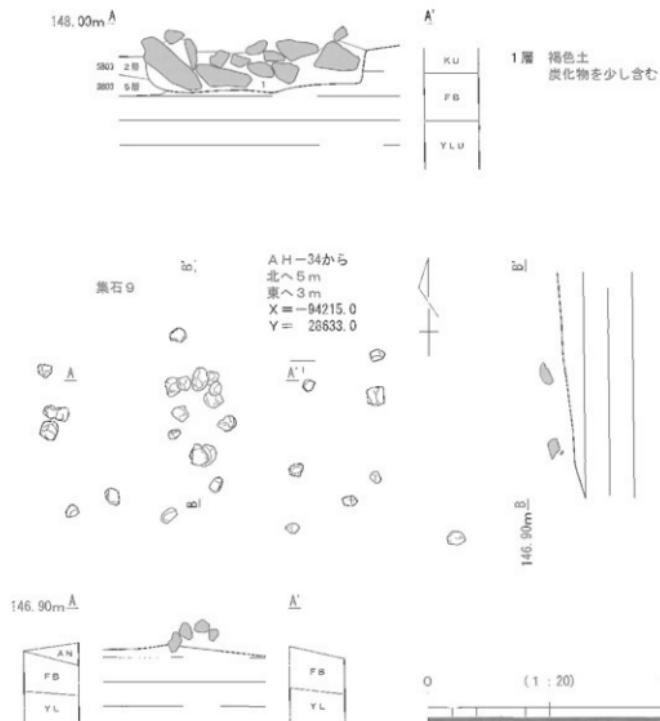
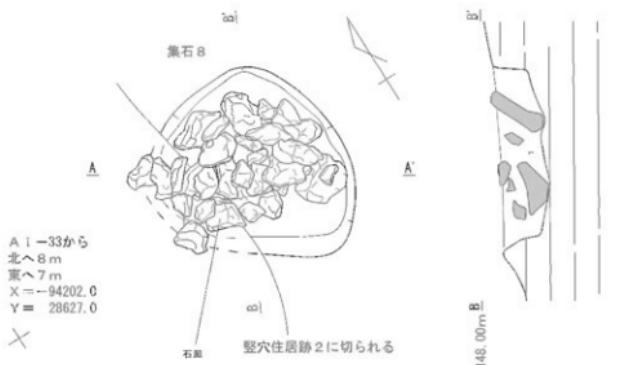
栗色土層中で検出した、8点の礫からなる小規模な集石である（第55図上段）。6点の礫が完形で赤化している。割れ面が赤化した礫が1点、割れ面が赤化していない礫が1点ある。

(23) 集石16

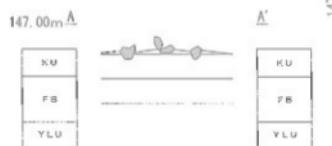
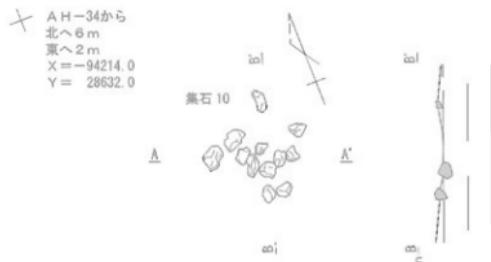
富士黒土層の上面で検出した土坑のない集石である（第55図下段）。61点の礫からなり、1点は40cm×30cmの大きな礫である。完形礫は13点あり、12点が赤化している。割れ面が赤化した礫は39点あり、割れ面が赤化していない礫が7点ある。



第50図 集石 7 実測図

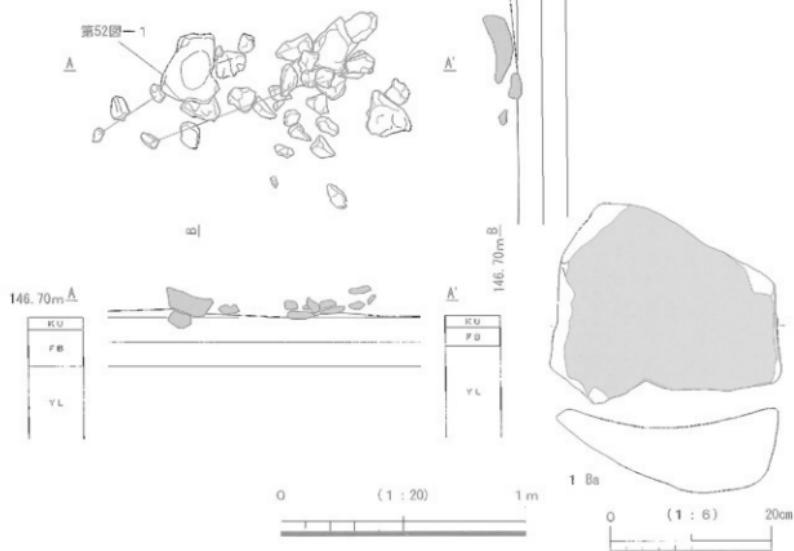


第51図 集石 8、9 実測図



AH-34から  
北へ5m  
東へ3m  
 $X = -94215.0$   
 $Y = 28633.0$

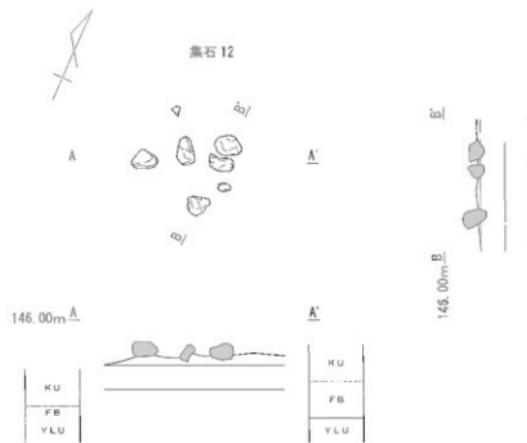
集石 11



第52図 集石10、11実測図と出土石器

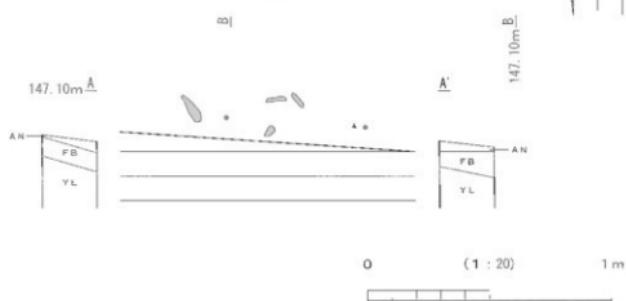
AH-32から  
北へ9m  
東へ8m  
 $X = -94211.0$   
 $Y = 28618.0$

集石 12

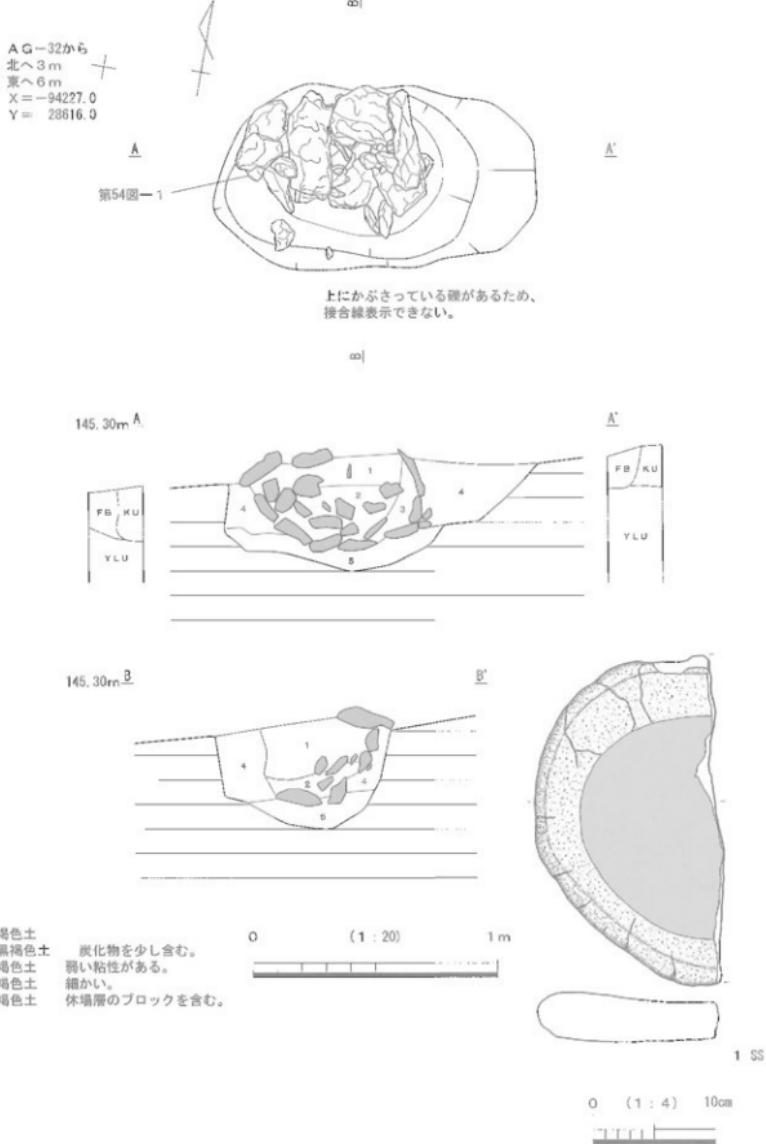


集石 13  
A I-33から  
東へ5m  
 $X = -94210.0$   
 $Y = 28625.0$

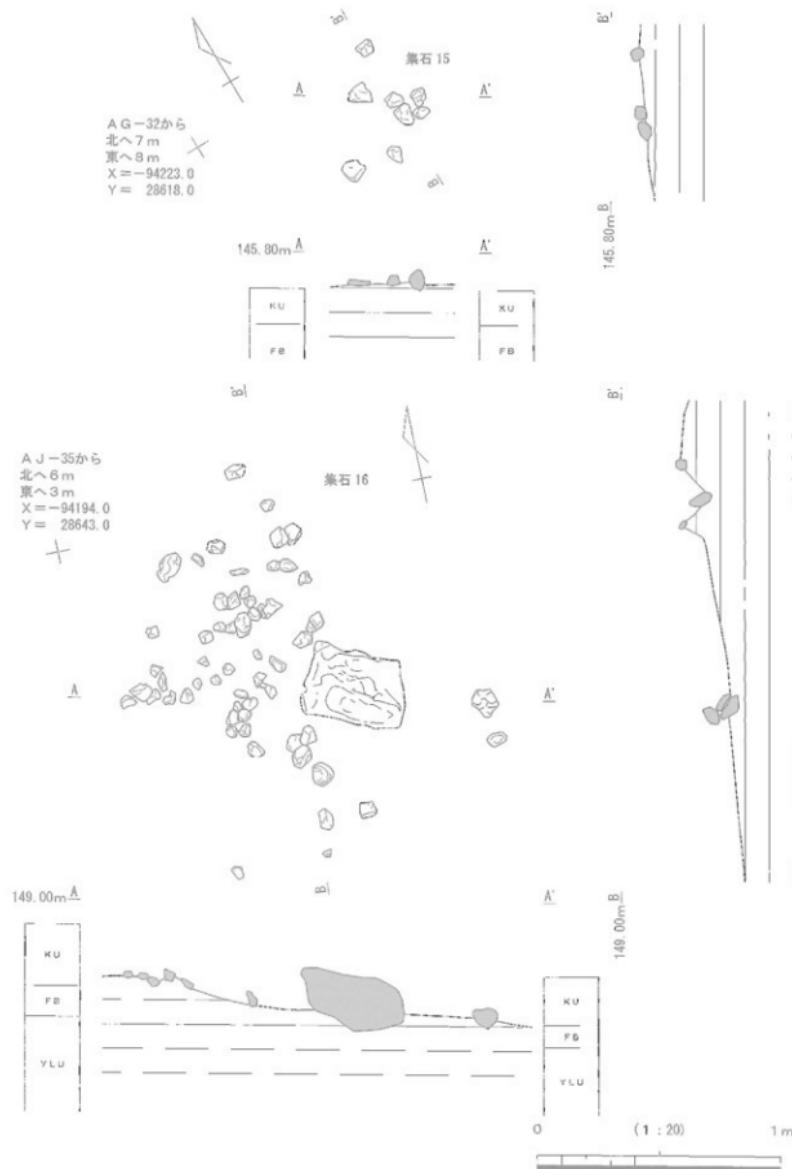
\*: 石器  
\*: 土器



第53図 集石12、13実測図



第54図 集石14実測図と出土石器



第55図 集石15、16実測図

## (24) 出土土器

### 撚糸文土器

第56図に示した土器は、いずれも胎土の状況や施文方法などから、同一個体と思われるもので、横方向に交差するLの撚糸文が見られる。いずれも内側は丁寧になでて仕上げてある。1は口縁部から残つており、ほぼ全面に撚糸文が見られる。5は底部に近い部分と思われ、ここにも交差する撚糸文が入っていることから、この個体は、ほぼ全面に交差する撚糸文が入っていたと考えられる。4、7、8は粘土のつなぎ目で割れている。

### 楕円文土器

第57図に示した土器は、胎土の状況や施文方法などから同一個体と思われる。全体に小片が多く、図示できたものは4点だけである。楕円は大きめではっきりしている。また、胎土に白い砂粒が目立つ特徴がある。3は底部に近い破片で、複数の楕円文が切り合っている。

### 野島式土器

第58図に示した土器は、同一個体の破片が集中して出土したもので、大方の破片が接合した。口縁部から頸部にかけて、斜め方向に沈線を入れている。施文方法は2種類あるようで、棒状の工具で右下がありの沈線を引いた後、その沈線を分断するように、指で左下がりの沈線を入れた部分と、逆に、棒状工具で左下がりの沈線を引いた後に、指で右下がりの沈線を入れている部分がある。

また、棒状工具による沈線の代わりに太い条痕文を入れ、それを指による凹線状の沈線で分断している部分もある。

くびれた部分よりも下の胴部には文様は入っていない。また、胴部中央から上には煤が付いていることから、火にかけた時、胴部中央から下が炎の中にあったことがわかる。

### 判ノ木山西式土器

第59図に示した土器は、同一個体の土器が集中して出土したもので、その分布は、第41図下段に示した、判ノ木山西式土器の分布図のとおりである。一部の破片は数十m離れて出土したが、接合関係から、同一個体であることは間違いない。

いずれも内外面に条痕文が見られる。外面は条痕を地文として、胴部上半に斜め方向に交差する、3列・単位の条痕のような文様を入れている。そして、口縁直下には、その施文工具を斜め下から突き上げるように突き刺した跡がある。この文様は一見したところ条痕文に見えるが、地文の条痕とは明らかに異なる工具を使っている。条の溝と溝の間には、粘土が盛り上がりしている状況を確認できる。これは条と条の間に施文原体が当たっていない証拠で、貝殻や板を使った場合には、まず起こらない。したがって、貝殻とは別の道具、たとえば櫛のように先端が細く枝分かれした道具を使っていると考えられる。

そこで考えられるのが、三叉のフォークのような工具である。口縁直下にある施文工具の押圧痕からもフォーク状の工具を想定できる。

この文様は胴部上半だけに見られ、下半は条痕文だけである。1には補修孔が見られる。

### 曾利Ⅰ式土器

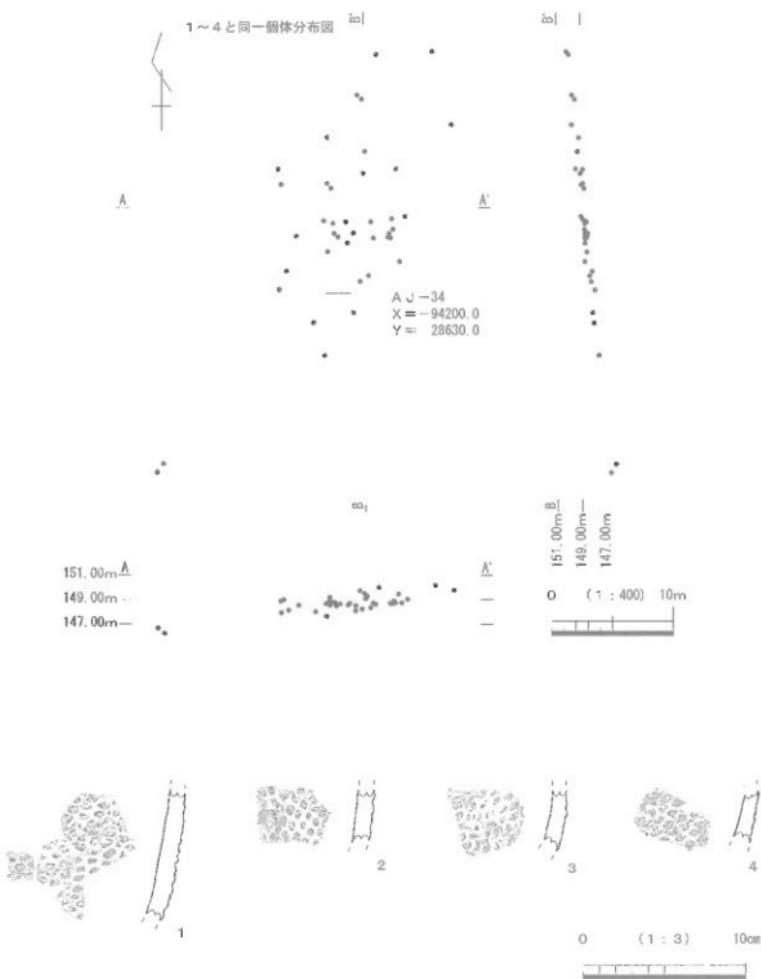
第60図に示した土器は、胎土の状況や施文方法などから、同一個体と思われる破片が集中して出土したものである。1は胴部上半の破片で、横方向に結節浮線文を貼り付けてあり、その上には深い沈線を波状に入れて、波状に浮線文を貼り付けたような文様を表現している。結節浮線文の下には、縱方向に深い条線文を入れ、その上に2本粘土紐で渦巻き文を付け、さらに2本の粘土紐の間を棒状工具で沈線を入れるようになぞって、渦巻き文が浮き出るようにしている。

2も胴部の破片で、横方向に深い沈線を入れて、浮線文を貼り付けたような文様を表現し、その下には縱方向に深い条線が見られる。

1~12と同一個体分布図

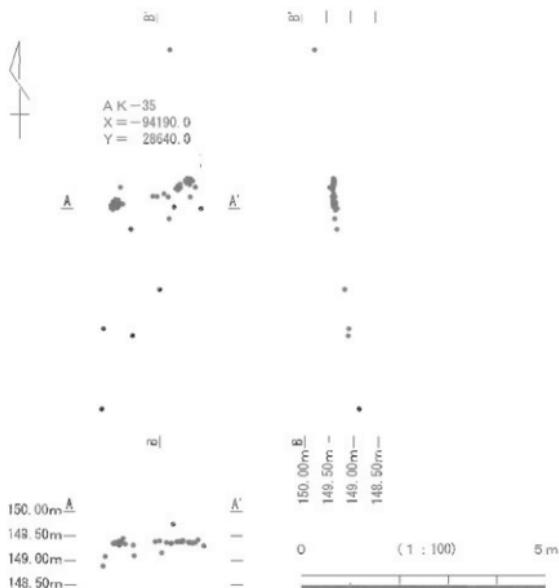


第56図 10区出土網文土器 1

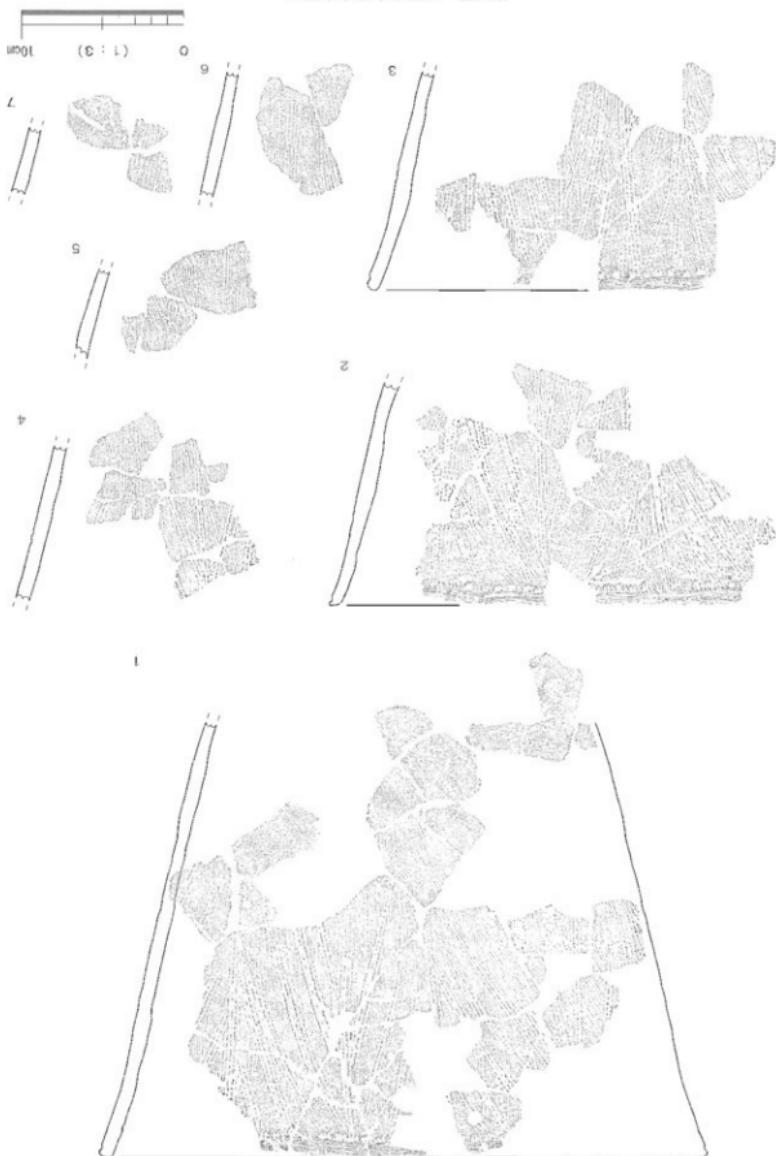


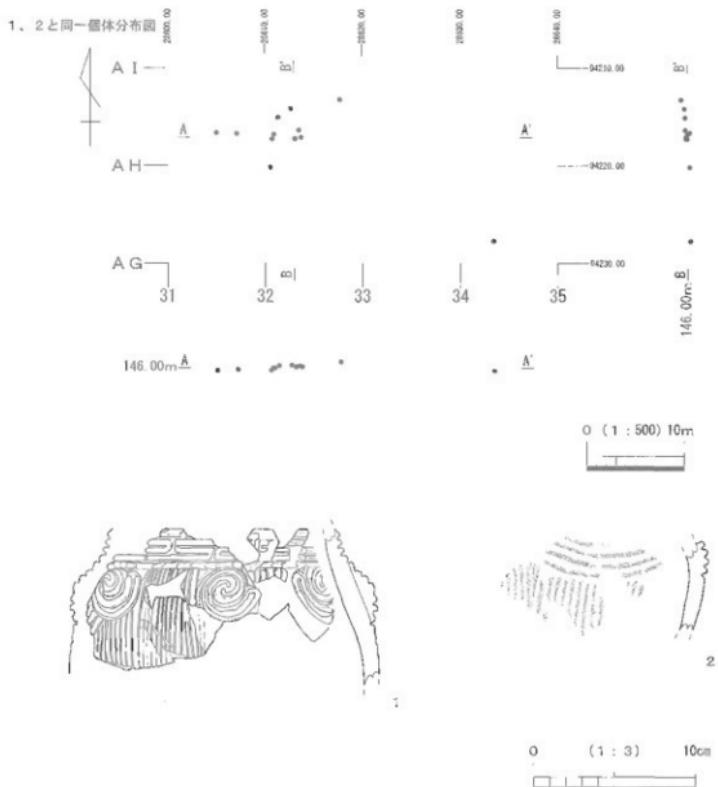
第57図 10区出土繩文土器 2

同一個体分布圖



第59圖 10區出土鐵文化器物4





第60図 10区出土繩文土器 5

## 第2節 2区の遺構と遺物

第61図に示したように、調査区の中央付近に浅い谷があり、その中に遺構と遺物が分布している。2区は、隣接する3区と10区の間に遺構、遺物の空白域があるため、この調査区を独立した遺構、遺物の分布域として設定できる。

出土した縄文土器は、十三菩提式と大歳山式が主体であることから、この調査区で検出した遺構も前期末が主体であると考えられる。

### 検出遺構

#### (1) 集石17

79点の礫からなり、七坑を伴う集石である（第62図上段）。埋土は2層に分かれ。礫のうち10点は完形で、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は61点で、割れ面が赤化していない礫が4点ある。

#### (2) 集石18

栗色土層中で検出した集石で、16点の礫が集まっている（第62図下段）。この土坑から採集した炭化物から、測定値で $4,750 \pm 40$ yrB.P.の年代が得られている。

#### (3) 集石19

暗褐色土層中で検出した集石で、14点の礫が密集している（第63図上段）。礫が集中する部分は礫を積み重ねたようになっている。また、浅い土坑を伴っているように見えるが、輪郭がはつきりしない。完形の礫は7点あり、いずれも赤化している。割れ面が赤化した礫は2点あり、割れ面が赤化していない礫は5点ある。

#### (4) 土坑2

平面・断面とも形の整わない土坑である（第63図下段）。一部が削平を受けている。形は整わないものの、埋土は11層に分かれ、いずれも自然堆積であることから、風倒木のような自然の土坑ではなく、土坑が時間をかけて埋まっていったと考えた方が良い。埋土のうち、9層と10層は壁の崩落土である。

#### (5) 土坑3

浅い土坑で、上部は削平されていると思われる（第64図上段）。一部に張り出した部分が見られる。底に近い所で大歳山式土器が出土した。RLの縄文が付けられており、この調査区で出土した他の大歳山式土器のような筋の細かい縄文ではないが、他の大歳山式土器と同じ灰白色の胎土を使っている点と器壁が薄い点から、大歳山式土器と考えて良い。

#### (6) 土坑4

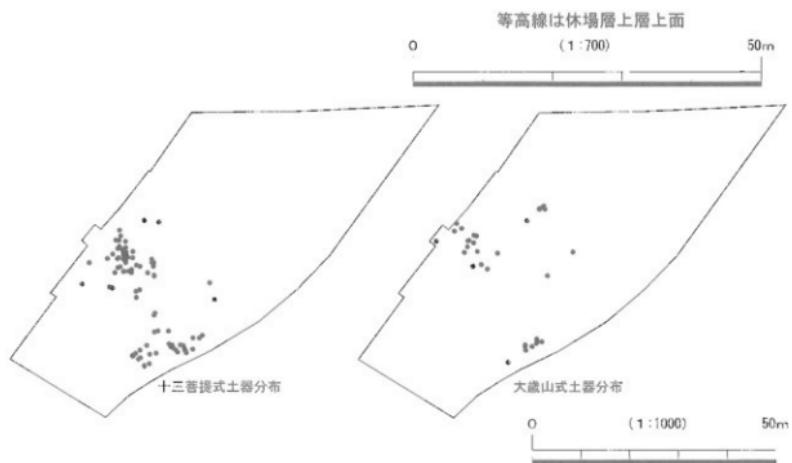
直径40cmほどの小さな土坑である（第64図下段）。埋土のうち4層は壁の崩落土である。遺物は出土していない。

以上の遺構は、遺物が出土していない遺構でも、周辺で出土した土器は、十三菩提式土器と大歳山式土器がほとんどであることから、縄文時代前末期と考えられる。

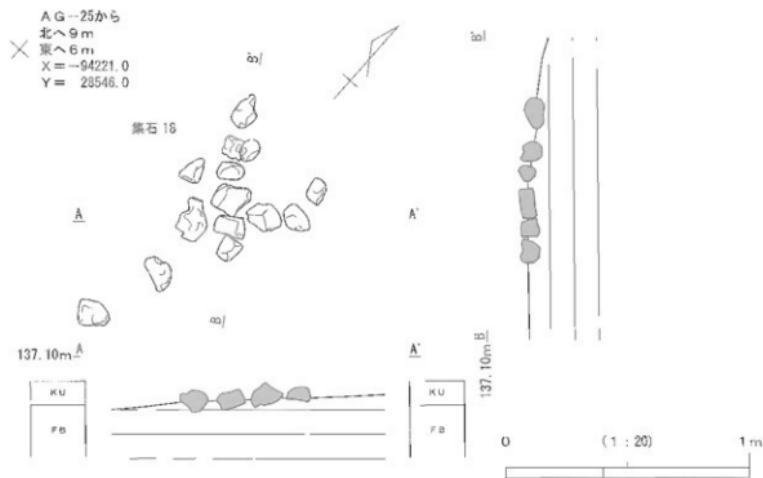
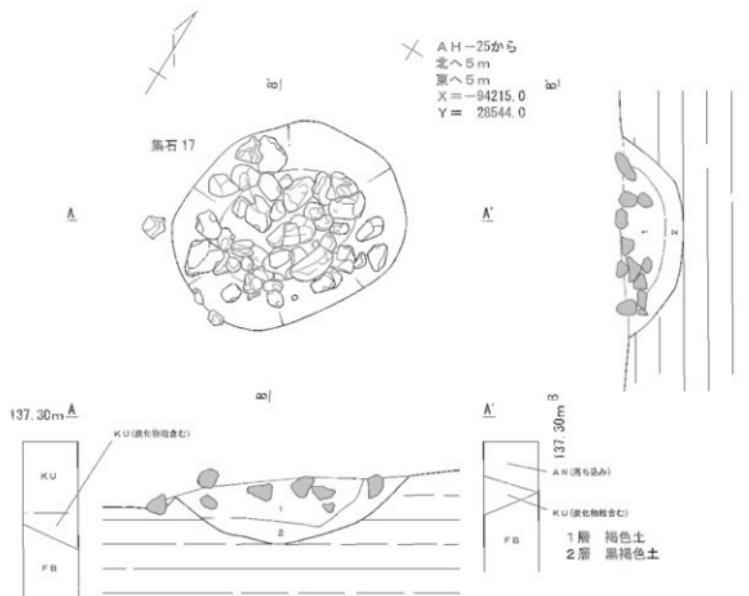
#### (7) 出土土器

##### 十三菩提式土器

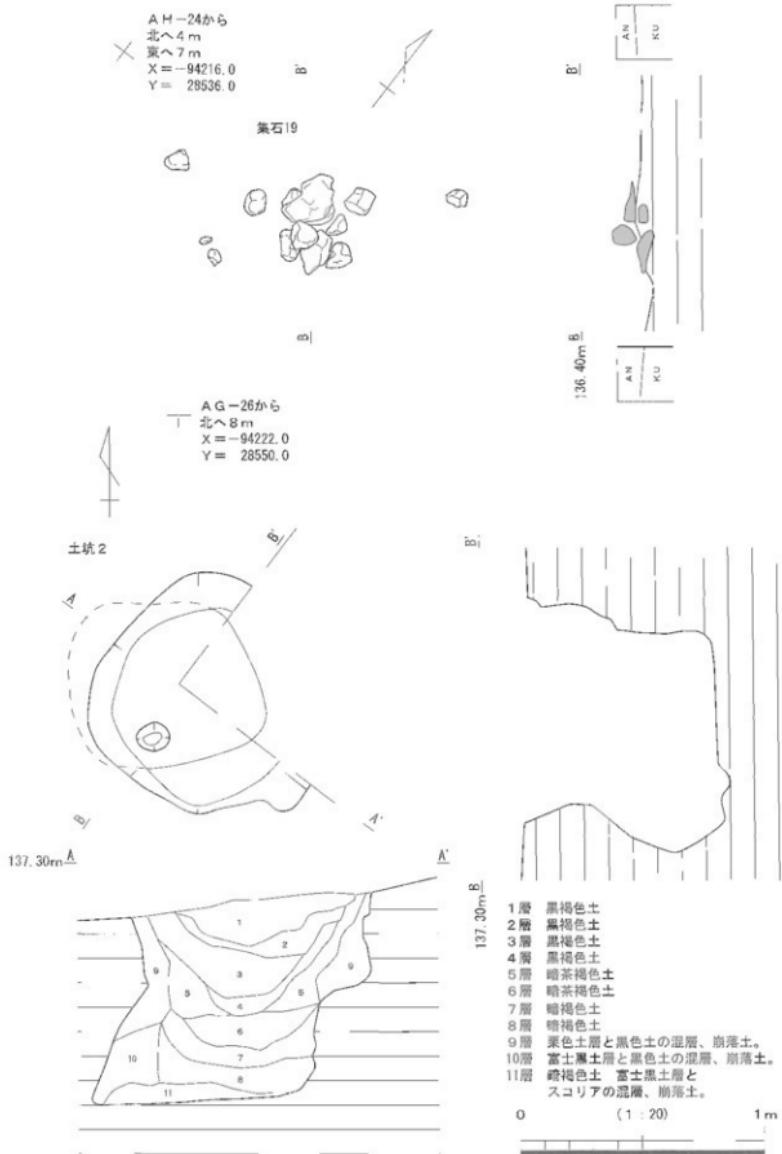
第65図に示すように、谷の中で破片が集中して出土したもので、一部は数十m離れて出土したが、ほとんどが接合した（第66図）。平底の深鉢で、口縁下と胴部下半にくびれがある。口縁頂部はなでて面取りをしてある。文様は、RLの縄文を地文として、口縁部から胴部の張り出し部分にかけて浮線文を貼っている。口縁部と口縁直下に並行する浮線文を貼り、その間に蛇行する浮線文を入れている。そして、その後に蛇行する浮線文と口縁部の浮線文を縦方向の浮線文で結んでいる。胴部の張り出した部分の浮線文は、直線状の浮線文の下に蛇行する浮線文を貼っている。



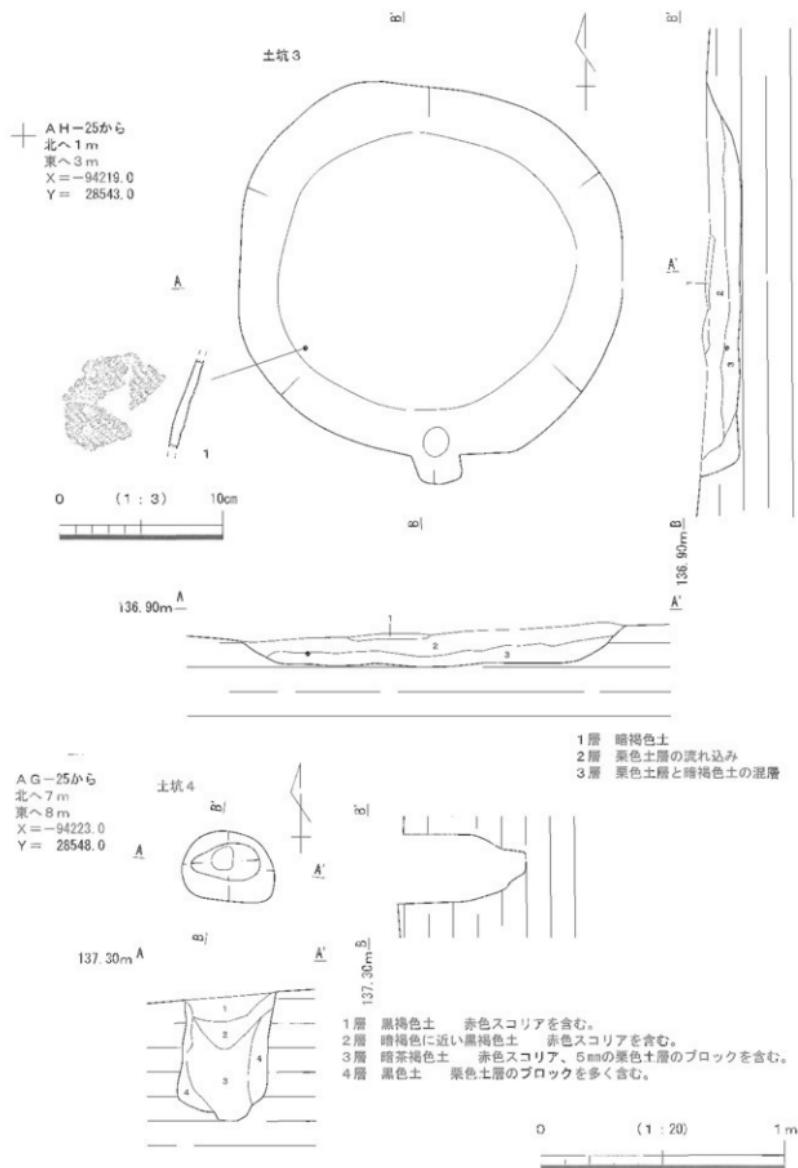
第61図 2区縄文時代遺構、遺物分布図



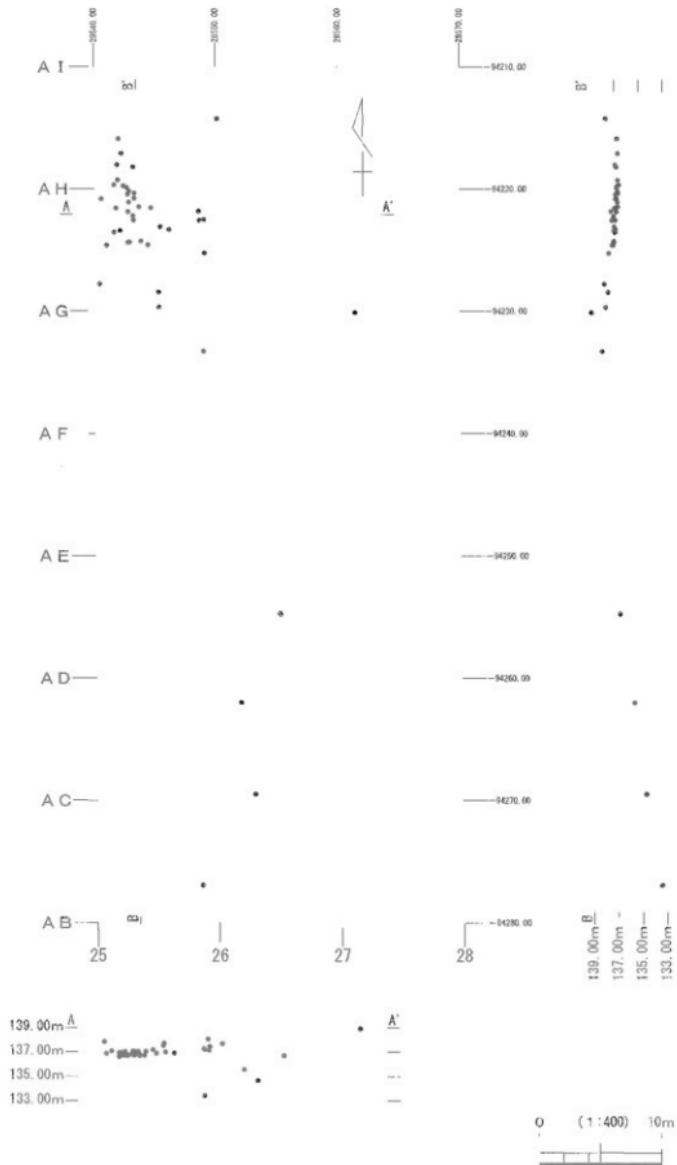
第62図 集石17、18実測図



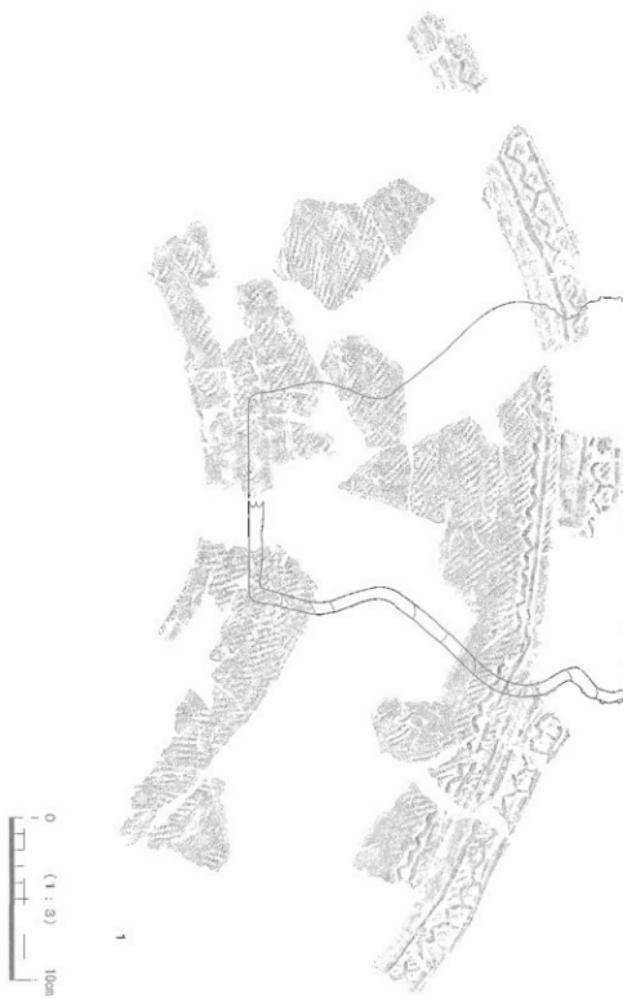
第63図 集石19、土坑2実測図



第64図 土坑 3、4 実測図と出土繩文土器



第65図 十三菩提式土器個体1分布図



第66図 十三善提式土器個体1実測図

## (8) 出土石器

この調査区で出土した石器は、出土した土器から、前期末の十三菩提式土器と大藏山式土器に共伴すると考えられるため、まとまった一群として報告する。

### 石鎌

第67図-1～3は有茎の石鎌で、いずれも逆刺が作られており、茎部を欠損している。4は基部に深い抉りが入っていて、片方の脚を欠損しているが、欠損後再加工しているようである。5は基部に深い弧状の抉りを入れて脚部の末端が尖るよう加工している。6は基部に抉りを入れているが、脚部の末端は丸くなるように仕上げている。7は基部に弧状の抉りを入れて脚部の末端が尖るようにしている。8は正面と裏面で加工の度合いが異なっており、裏面の方が、加工が細かい。

9は基部に浅い抉りが入っており、側縁は鋸歯状に仕上げているが、加工が粗い印象を受ける。10は長さに対して幅が広い。素材になっている剥片の形が影響しているのであろう。11は、両面の一部に剥片の素材面が残っている。12と13は、実測図の正面に据えた面の方が、裏面よりも加工が細かい。14は、実測図の正面に据えた面よりも裏面の方が、加工が細かい。

15は結晶片岩製で、薄く削がれる性質があるため、その性質を活かした薄い剥片を使い、縁辺だけを加工して完成品をしている。16は細長い石鎌で、基部に浅い抉りが入っている。17は風化が進んでいるため、平面の形しかわからない。先端が細長い上に、基部に深い抉りが入っているため、脚部、胸部ともに細長い印象を受ける。18は基部に抉りが入らずに平坦になっている。加工は、細長い剥離が並行して入っているため、形態が整った印象を受ける。19は長さに対して幅のある石鎌で、大きさから考えて完成品と思われるが、大きさの割に厚みもある。20は石鎌としてはかなり小さい。縁辺がやや鋸歯状になっているが、加工が粗い印象を受ける。

### スクレイパー

第67図-21は打面が大きく残っている剥片を使っており、縁辺に平坦な剥離を入れて刃部を作っている。22は剥片の側縁に急角度の剥離を入れている。左側縁は裏面から加工し、右側縁は表面から加工している。もしかしたらナイフ形石器の可能性もある。

### 石錐

第67図-23は厚みがあり、一件、角錐状石器にも見えるが、先端を細く作りだしていることから石錐と判断した。素材になった剥片の稜状剥離が見られることから、稜付きの剥片を使っているかもしれない。そうだとしたら、旧石器時代の遺物の可能性が出てくる。

### 微細な剥離のある剥片

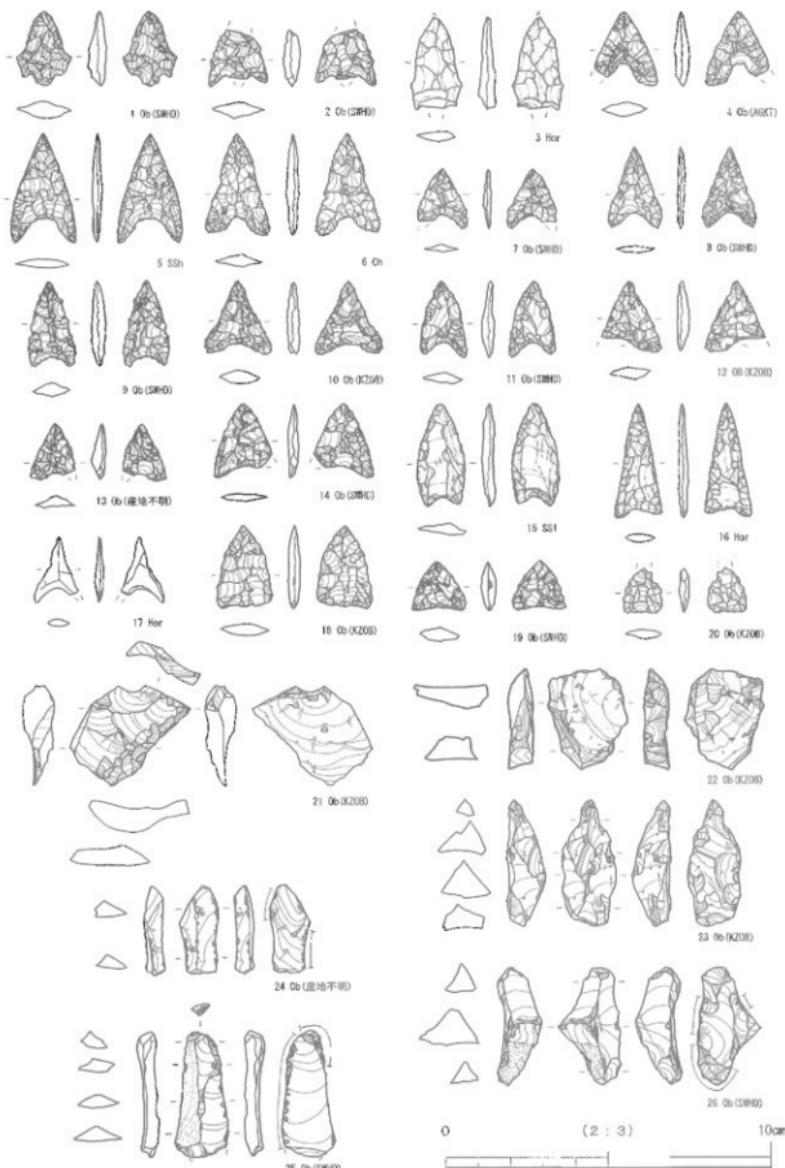
第67図-24～26は剥片の両側縁に不規則に微細な剥離が見られる。第68図-2～4は、片面に大きく自然面が残る剥片で、縁辺に微細な剥離が入っている。いずれも砂岩の円盤から剥離した剥片で、円盤面の状態から、扁平な円盤から剥離されていると思われる。

### 石匙

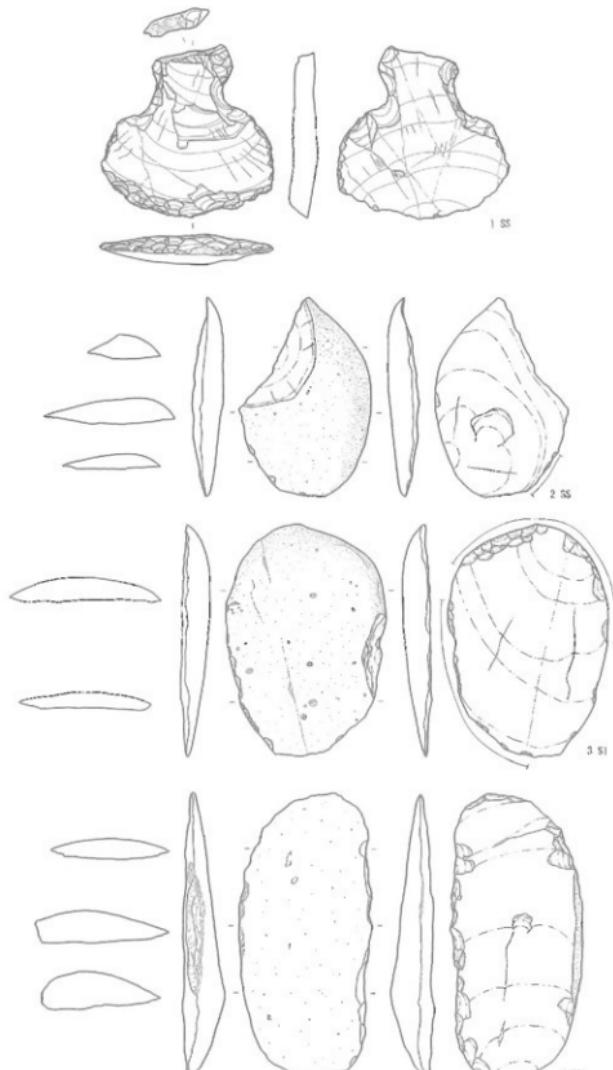
第68図-1は、石の目の多い剥片を使っており、つまみの部分を両面から加工して作っているのに対して、刃部は裏面から加工して作っている。

### 打製石斧

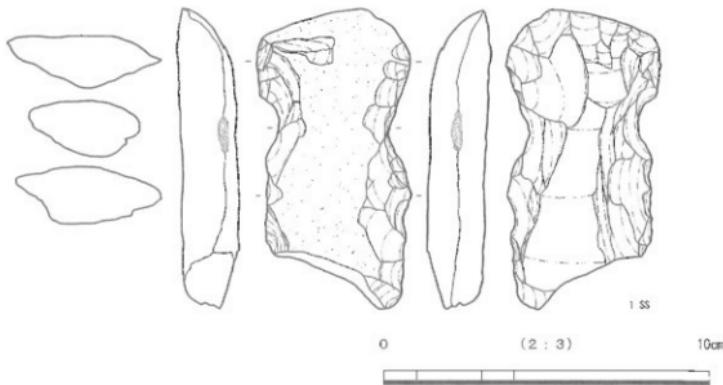
第69図-1は表面に平坦面のある円盤面が残っており、裏面に素材になった剥片の主剥離面、もしくは平坦な分割面が残っていることから、扁平な円盤から剥離した剥片か、扁平な円盤を分割したものを使っていると思われる。加工は両側縁から平坦な剥離を入れているが、器体中央まで及ぶ剥離はほとんどない。器体中央附近に抉りが入っている。刃部に近い所に抉りを入れることはないと想われるため、欠損した部分に刃部があったと想定した。



第67図 2区出土石器 1



第68図 2区出土石器2



第69図 2区出土石器3

### 第3節 3区の遺構と遺物

3区の地形は、第70図に示したように、北側の10区から伸びてくる丘陵とその両脇の深い谷から構成されている。遺構と遺物は、丘陵上ではなく、その両脇にある谷から出土している。いずれの遺構、遺物分布域も、北側の10区、南側の8区と11区の遺構、遺物分布域との間に空白域があるため、3区を独立した遺構、遺物分布域として設定できる。

出土した縄文土器は、押型文土器、鶴ヶ島台式土器、打越式土器、諸磯式土器、十三菩提式土器、五領ヶ台1式土器と多時期に渡る。いずれも分布域が重なっているため、土器が出土していない遺構の時期決定は難しい。

#### (1) 遺物集中域1

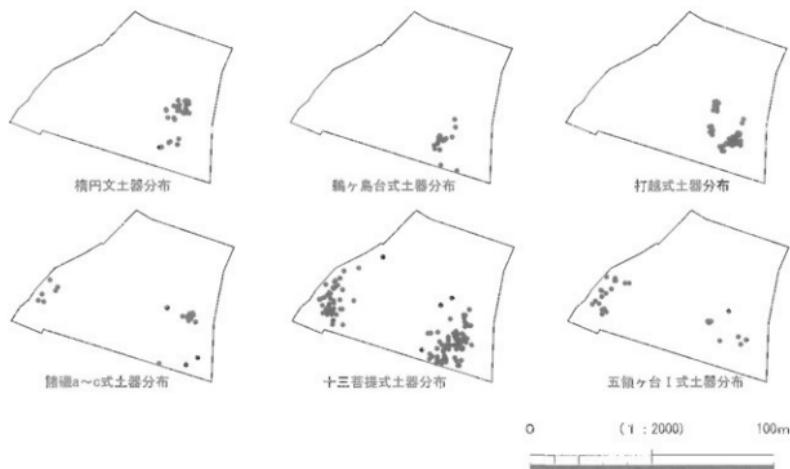
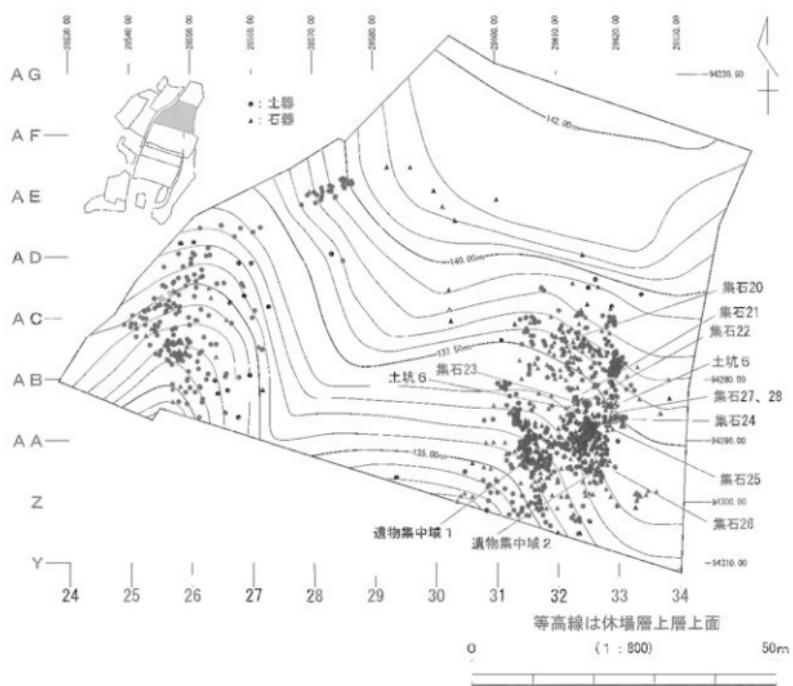
谷に向かう緩斜面で検出した石器と土器、礫の集中域で、土坑などは伴っていない（第71図）。詳細に見ると集中域の西側に石器が集まり、東側に土器が集まる傾向がある。後述するように、石器集中部では、黒曜石の石核を持ち込んで、石鎚や尖頭器を製作した跡と考えられることと、土器は同一個体と思われるものが複数見られることから、短期間に集中的に石鎚と尖頭器を製作したと考えられる。

出土した石器は400点で、うち395点は黒曜石である。ほとんどが剥片と碎片のため、図示できる石器がほとんどないが、石鎚や尖頭器の破片が出土していることや、剥片や碎片では、湾曲して薄いものが多いことから、石鎚や尖頭器の製作跡と考えて良い。剥片と碎片の数から考えて、石鎚や尖頭器を集中的に製作し、欠損品以外を持ち出したと考えられる。

また、サイコロ状に小さくなったり黒曜石の石核も出土していることと、自然面の付いた剥片は出土していないことから、石核を持ち込んで剥片剥離する段階から開始していると思われる。黒曜石製の石器以外には、第71図-1に示した粘板岩製の石鍬が出土している。これは粘板岩の円礫を使っており、円礫の両端を打ち欠いて紐掛けを作っている。石鎚や尖頭器の製作跡から出土した石器としては異端な存在である。

土器は、早期の打越式土器がわずかに見られるが、前期末の十三菩提式が主体で、個体別に見ると、3個体ほどが確認できる。後述の第85図-1の土器も半分ほどの破片がこの集中域から出土している。

第72図-1は特徴的な赤褐色の胎土を使った土器で、条痕による調整が見られる。遺構外から出土した同一個体と思われる土器から、打越式の破片と思われる。



第70図 3区縄文時代遺構、遺物分布図

AA-31  
X=-94290.0  
Y= 28800.0



A

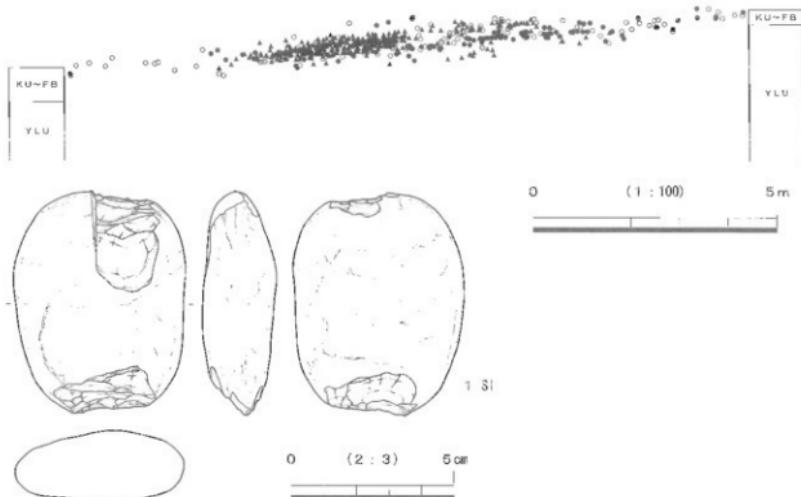
A'

第71図-1

●: 土器  
▲: 石器  
○: 標

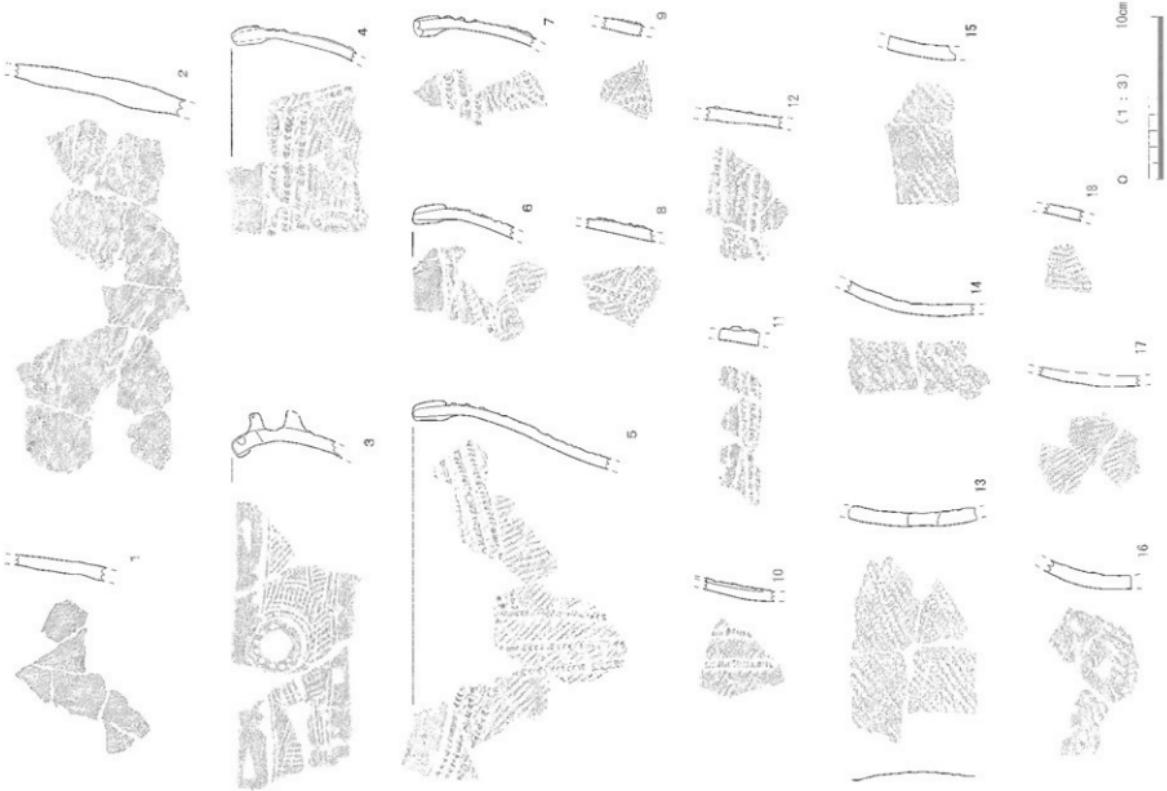
138.00m A

A'



第71図 遺物集中域1実測図と出土石器

第72圖 遺物集中域1出土繩文土器



2は厚い条痕文土器で、特徴的な赤っぽい胎土である。調整は、条痕の後でなでている。

3は十三菩提式で、口縁直下に三角形の印刻文が見られる。印刻文を入れた文様帶の下には、沈線で区画した中に条線文を充填する文様帶が見られ、その下には無文の部分が見られる。

また、条線文による文様帶には、条線文を入れる前に円形の突起を付けており、円形突起の先端には棒状工具による刺突がある。印刻文や条線文が見られる点で、以下に記載する十三菩提式土器よりも古い段階のものと考えられる。

4～9は胎土や文様から見て同一個体と思われる。4は口縁部の内外面に粘土の貼り付けが見られ、その部分は無文帯になっている。口縁部の無文帯の下は、RLの縄文を地文として、結節浮線文が見られる。結節浮線文は、口縁部の無文帯に並行して3本貼り付け、縱方向に垂下する部分と円形に巡る部分がある。縱方向の結節浮線文も3本付けてあるが、その施文方法は、口縁部無文帯の下に並行する3本が、そのまま向きを変えて垂下するのではなく、縱方向に別の結節浮線文を貼り付け、横方向の結節浮線文を分断している。

5は口縁を含んだ破片で、口縁の内外面には粘土を貼り付け、無文帯を作っている。無文帯の下には、RLの縄文を施文後、3本の結節浮線文を貼り、これを分断して縱方向に3本の結節浮線文を貼っている。

6と7は口縁部を含む破片で、口縁の内外面に粘土を貼り付けて無文帯を作っている。無文帯の下にはRLの縄文を地文にして、口縁部の無文帯に並行する結節沈線文と円形に巡る結節浮線文が見られる。

8は胸部の破片で、RLの縄文の上に屈曲する結節浮線文が見られる。9はRLの縄文の上に、おそらく円形に巡ると思われる結節浮線文が見られる。

10はRLの縄文の上に、縱方向の結節沈線文がある。11は太い浮線文の下に結節浮線文が並行している。12は11と同一個体と思われ、RLの縄文の上に結節浮線文を貼ってある。

13～16は同一個体と思われる破片である。13と14は胸部の破片で、LRの粗い縄文を付け、一部をなでているため、縄文が消えかかっている。15はLRの縄文を施した後、なでて縄文を消している。粘土のつなぎ目で割れており、粘土をつないだ際、土器の外側をなで上げ、内側を下に向かってなでて粘土を接着させた状態が良く残っている。

16はLRの縄文が見られ、一部で縄文が薄くなっている部分があるが、これは土器が湾曲しており、縄文のあたりが浅かったためである。

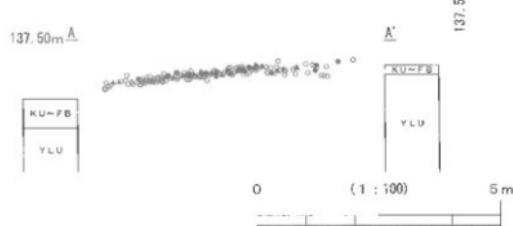
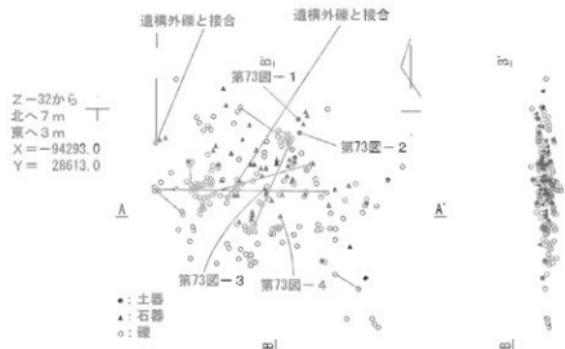
17は目の細かいRLの縄文を施し、一部をなでて消している。18はRLの縄文が見られる。

## (2) 遺物集中域2

遺物集中域1と同じく谷に向かう緩斜面で検出した、石器と土器、礫の集中域である（第73図）。遺物集中域1に比べると遺物の数は少ないが、周囲に比べると遺物が集中していること、ほぼ一面で面をそろえて出土したことから、まとまりのある単位と考えた。内容は礫が最も多く、石器がこれに次ぎ、土器が最も少ない。

内容は礫が主体で、これに黒曜石の剥片や碎片が混じり、土器片がわずかに混じっている状況である。礫は遺構外の礫と數mの距離を隔てて接合するものがある。礫は161点出土しており、そのうちほぼ半数が赤化しているうえに、100点余りの礫が破碎している。このことから考えると、この遺構を集石と考え、そこに不要になった石器や土器を捨てた遺構と考えた方が良いかもしれない。

土器はわずかだが、大歳山式土器が出土している。1は口縁部の破片で、口縁部の外面と内面、そして口縁頂部に、LRの細かい縄文を入れている。口縁内部の文様帶の下は、丁寧になでてあり、文様帶と無文部分の間に角ができる。11縁外部の下には独特の「 $\Sigma$ 」形の結節浮線文が2本並行しており、その下にはLRの細かい縄文が見られる。2は胸部の破片で、RLの縄文を施文している。薄い器壁と灰白色の胎土から、これも大歳山式と考えて良い。



第73図 遺物集中域2実測図と出土遺物 (1・2 : 1/3、3・4 : 2/3)

石器は47点出土しており、46点は黒曜石である。内容は石鎚と尖頭器の他は剥片と碎片で、2点の剥片に微細な剥離が見られる。剥片や碎片を見ると、湾曲している上に薄いものが多いことから、ここでは押圧剥離による平坦剥離を行っていたことが考えられる。このことは、石鎚と尖頭器の製作と整合すること、数は少ないものの、石鎚や尖頭器の製作跡と考えられる。

第73図-3は石鎚で、完成形に近いと思われるが、脚部の片方が折れている。基部の抉りを入れている途中で脚部を欠損したのであろう。4は石鎚の未完成品と思われ、大きさの割に厚みがあり、先端も形成されていない。裏面には素材になった剥片の剥離面が残っている。これを完成させるには、さらに薄くする必要があるが、すでに完成品と同じ程度に小さくなっているため、これ以上の加工は不可能であろう。この遺構に伴って出土した炭化物から、測定値で4,820±40yrB.P.の年代が得られている。

#### (3) 集石20

富士黒土層の上面で検出したもので、規模は大きくないが、土坑内に12点の礫を詰め込んだような集石である（第74図上段）。礫はすべて割れしており、そのうち10点の割れ面が赤化している。

#### (4) 集石21

栗色土層の下部で検出した集石で、浅い土坑の中に30点の礫が入っている（第74図下段）。完形の礫は1点だけで赤化している。残りの29点中28点の礫は割れ面が赤化している。

#### (5) 集石22

栗色土層で検出した集石で、直径150cm程の円形の土坑の中から138点の礫が出土した（第75図）。また、土坑に隣接して8点の礫が出土した。隣接しているという以外に理由はないが、土坑外で出土した礫も同じ集石と考えた。集石24の礫と接合関係があり、その接合距離は7.5mである。また、10m離れた集石26とも接合関係がある。

断面図に表れているように、礫は土坑内に敷いたようになっているが、土坑の底ではなく、2~6層が堆積した後に礫を入れている。土坑掘削後、2~6層が自然堆積してから礫を入れたとは考えにくく、土坑を掘った後、中に土を入れて整地してから礫を入れたと考えた方が良い。中に石皿が1点混じっている。分厚い円盤を使っており、片面が磨り減って窪んでいる。使わなくなった石皿を集石に入れたのであろう。この集石内から採集した炭化物から、測定値で4,750±40yeB.P.の年代が得られている。

#### (6) 集石23

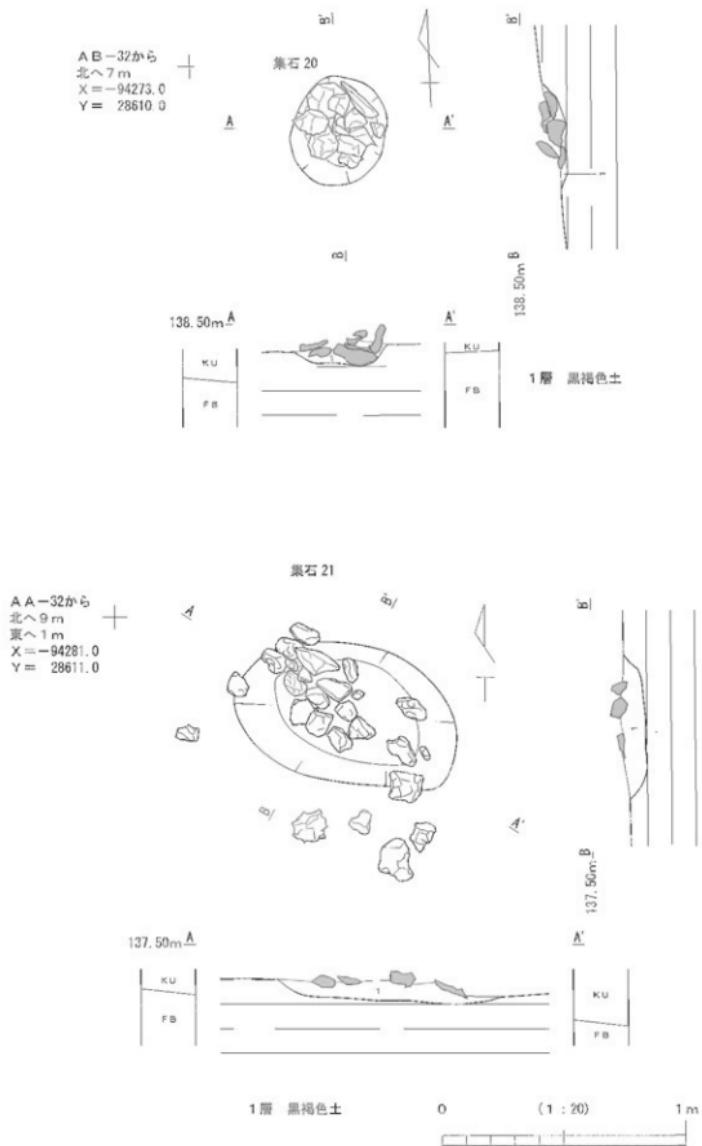
土坑と重複して礫が分布しているが、土坑の中に礫を入れた状態ではなく、土坑の上面とその周辺に礫が散在している状況である（第76図）。したがって、礫と土坑が別の遺構で、偶然重なっている可能性もあるが、土坑の埋土中に食い込んでいる礫が複数あることから、土坑と礫は共伴するものと考えた。遺構内に接合する礫は少ないが、3.5m離れた集石25の礫と接合するものがあり、また、7.2m離れて出土した遺構外の礫とも接合する。

礫数は43点で、完形の礫は14点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は17点、割れ面が赤化していない礫は12点ある。遺物が出土していないため、時期決定は難しい。

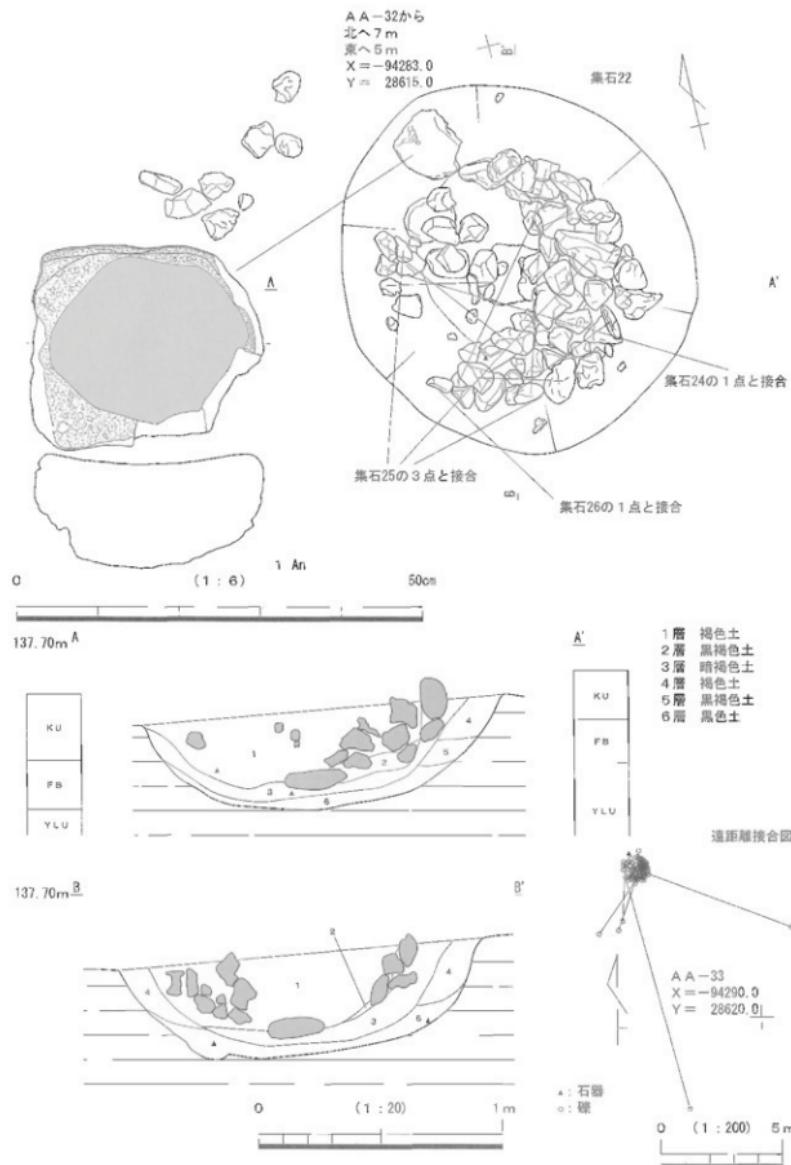
#### (7) 集石24

暗褐色土層中で検出した土坑を伴う集石で、土坑の中とその周辺から113点の礫が出土した（第77図）。土坑中の礫は、土坑に詰め込んだような状態で出土している。この集石の特徴は、図示したような遠距離の接合関係がある点である。集石22、25、28、そして遺物集中域2と礫が接合しており、特に集石25とは多くの礫が接合している。さらに集石38とは1点であるが、183mの距離で接合していることは特記できる。

礫のうち完形礫は12点で、ともに赤化している。割れ面が赤化している礫は69点で、割れ面が赤化していない礫は31点である。礫以外の遺物が出土していないため、時期決定は困難である。

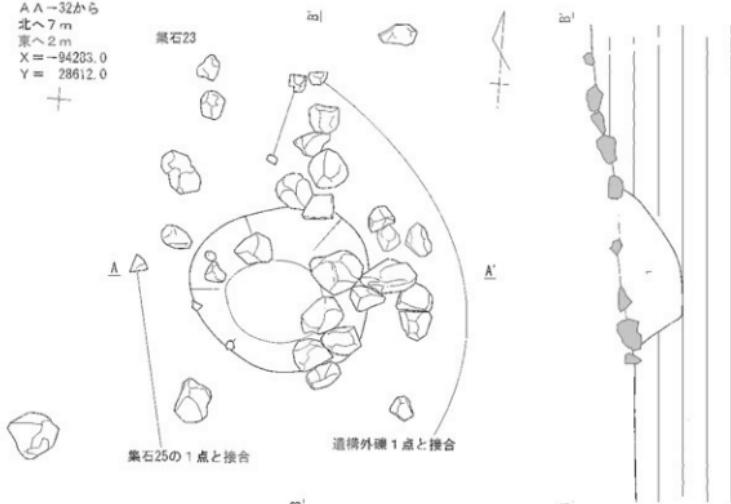


第74図 集石20、21実測図

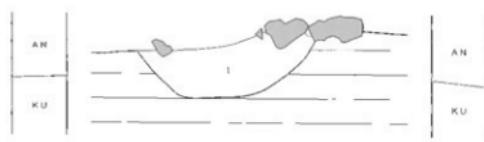


第75図 集石22実測図と出土石器

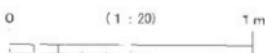
AA-32から  
北へ7m  
東へ2m  
 $X = -9423.0$   
 $Y = 28612.0$



137.60m A



1層 褐色土

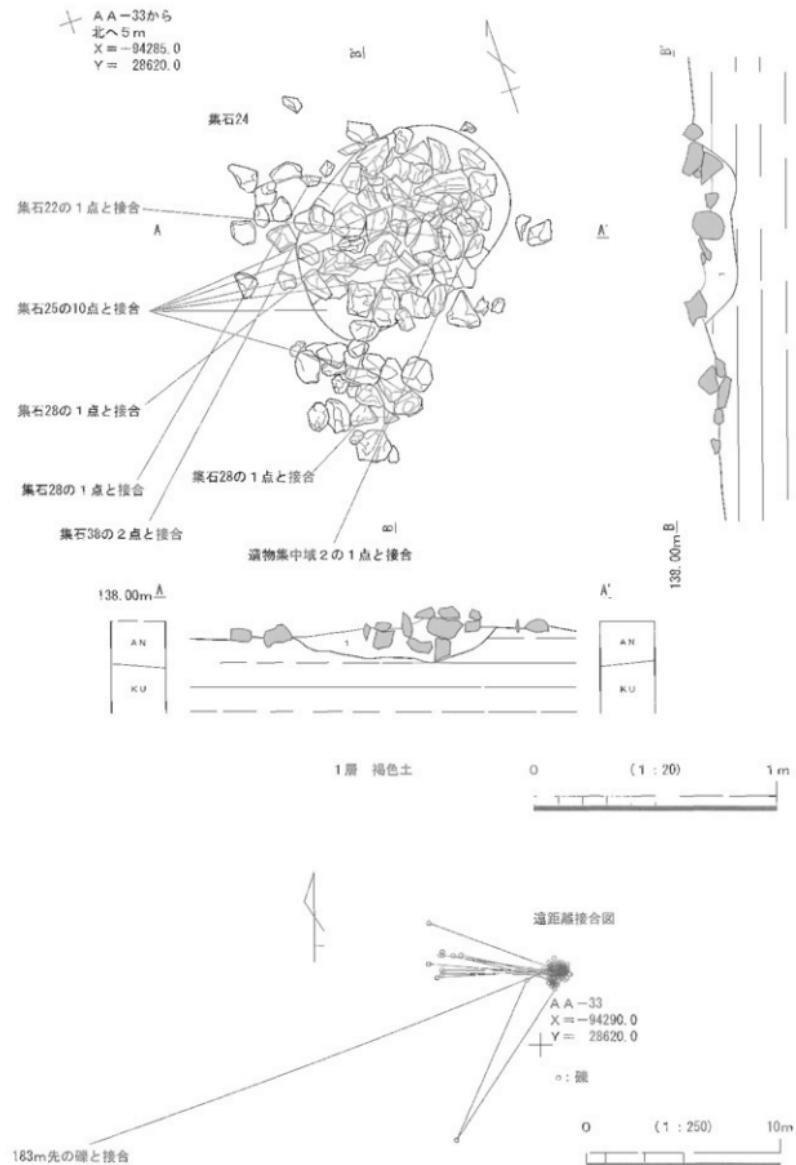


AB-32  
 $X = -9428.0$   
 $Y = 28610.0$

遠距離接合図

AA-32  
 $X = -9429.0$   
 $Y = 28610.0$

第76図 集石23実測図



第77図 集石24実測図

### (8) 集石25

暗褐色土層の下部で検出した土坑を伴う集石である（第78図）。礫は土坑内に密集しており、その周辺にも散在した状態で出土した。これも図示したように、他の遺構との接合関係が頻繁に見られる。特に集石24とは多くの接合関係が見られる。遺物が出土していないため、時期の特定は困難である。

### (9) 集石26

栗色土層から検出した土坑を伴う集石で、96点の礫からなる（第79図）。土坑の底面に接している礫ではなく、底面上に堆積した2層の上面に敷いたような状態で出土した礫が多い。完形の礫は9点あり、いずれも赤化している。割れ面が赤化した礫は54点あり、割れ面が赤化していない礫は28点ある。

土器は入海式と思われる破片が1点出土している。石器は石鏃が出土している。1は黒曜石製で、基部にわずかに抉りが入っている。先端は丸くなっていることから未完成品とも思えるが、加工は進んでいる。2は黒曜石製で、抉りが深く脚部が長い。3は石鏃の未完成品である。黒曜石の剥片の一辺に剥離を入れている。この土坑から採集した炭化物から、測定値で $4,750 \pm 40$ yrB.P.の年代が得られている。

### (10) 集石27

土坑の中に30cm×30cm程度の礫が入っている（第80図上段）。礫が入った土坑と考えた方が良いかも知れないが、礫は流れ込んだものではなく、土坑の中に掘えたような状態で出土したため、集石とした。第244図-1、2の石皿が出土している。

### (11) 集石28

栗色土層中で検出した土坑を伴う集石である（第80図下段）。遺物集中域2や集石24、集石25、土坑5と接合関係を持つ。接合距離は5m程度である。礫は71点出土しており、完形の礫は3点あり、いずれも赤化している。割れ面が赤化した礫は39点あり、割れ面が赤化していない礫は27点ある。

この集石からは、時期を特定できる土器が出土している。第80図-1は底部に近い破片で、条痕による調整が見られる。打越式と思われる。2は小片であるが、横方向と斜め方向の集合沈線が見られるところから五領ヶ台I式と思われる。

これらの土器片が、この集石の時期を決める手掛かりになる。通常ならば、五領ヶ台I式の時期を考えるが、土坑の内部から出土したのは1の打越式で、これは流れ込みの可能性もある。2の五領ヶ台I式は、土坑の外で土坑に接して出土したものであり、この土坑には伴わないかもしれない。したがって、この2点の土器からは遺構の時期を決めるのは難しくなる。そこで、この集石と接合関係をもつ遺構の時期を検討すると、遺物集中域2は、大歳山式土器が出土していることから前期末である。また、後述する土坑5とも接合関係があり、こちらでは十三菩提式土器が出土している。

この状況から考えると、この集石の時期は縄文時代前期末で、1は流れ込み、2はここで報告しておくが、集石には伴わないと考えた方が良いであろう。

### (12) 土坑5

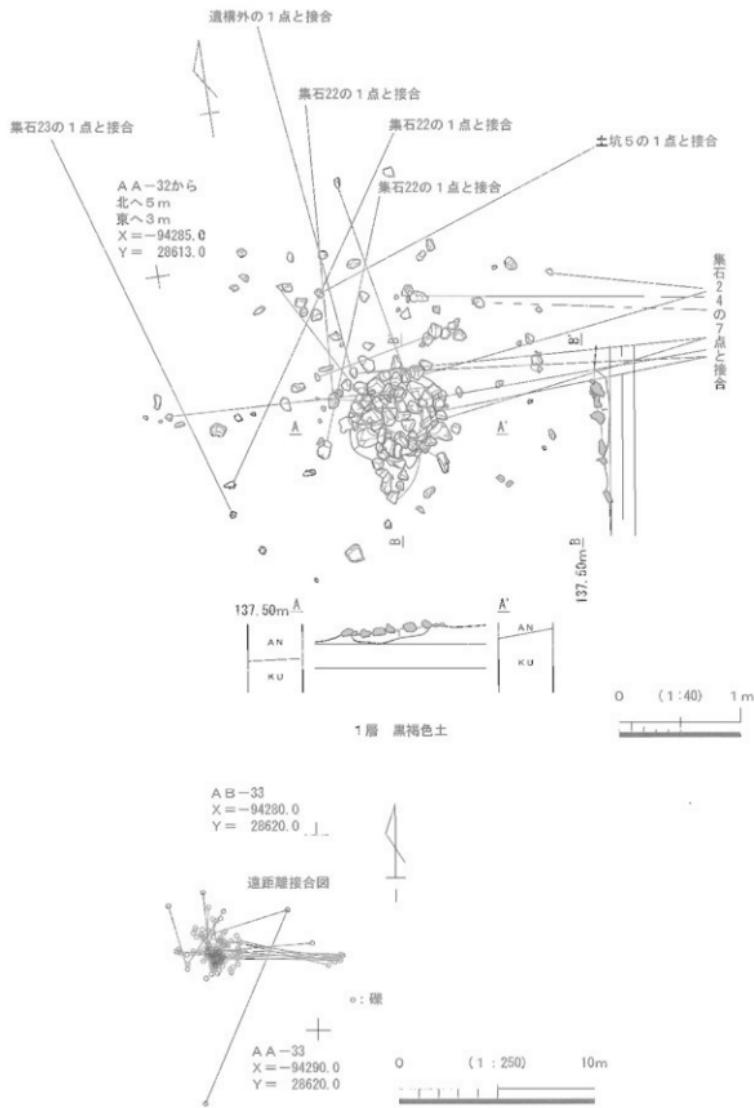
礫が出土しているが、集石と言ふ程には集中していない上に、流れ込んだ状況であったため、土坑として記載する（第81図上段）。

楕円形の土坑で、埋土から29点の礫が出土している。完形の礫は4点で、うち3点が赤化している。割れ面が赤化した礫は16点で、割れ面が赤化していない礫は7点である。遺物集中域2、集石25、集石28と接合関係がある。

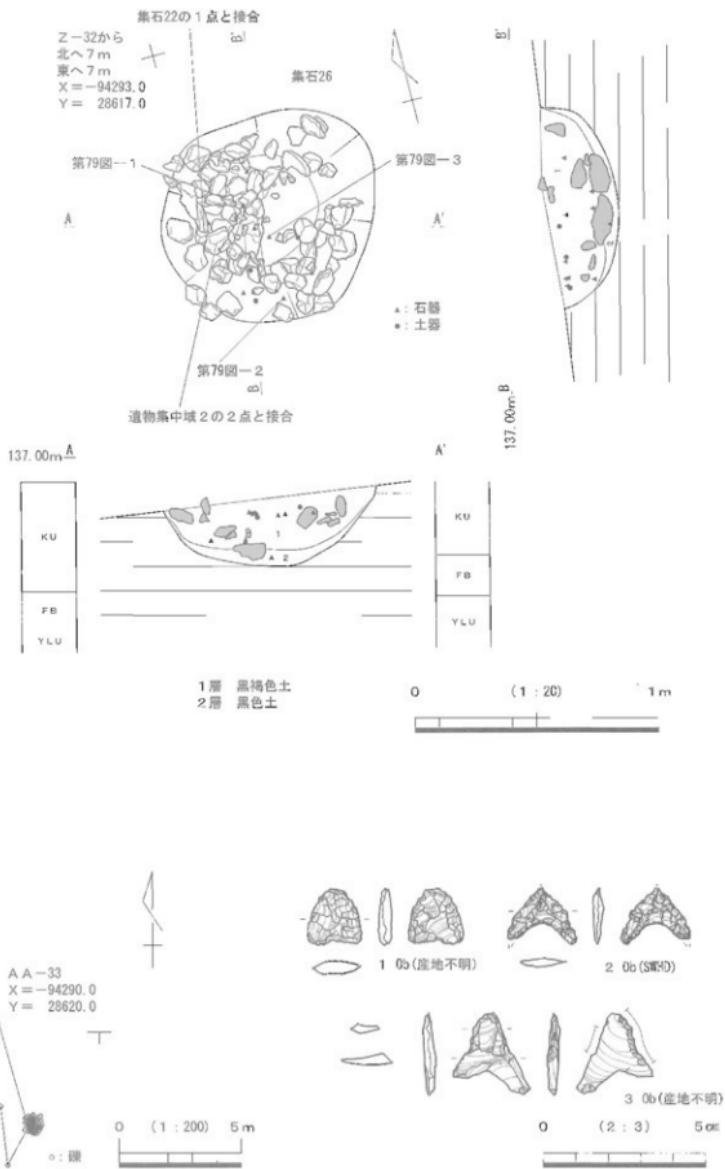
遺物は、図示した土器片が出土している。RLの縄文とその上に結節浮線文が見られることから、十三菩提式と思われる。

### (13) 土坑6

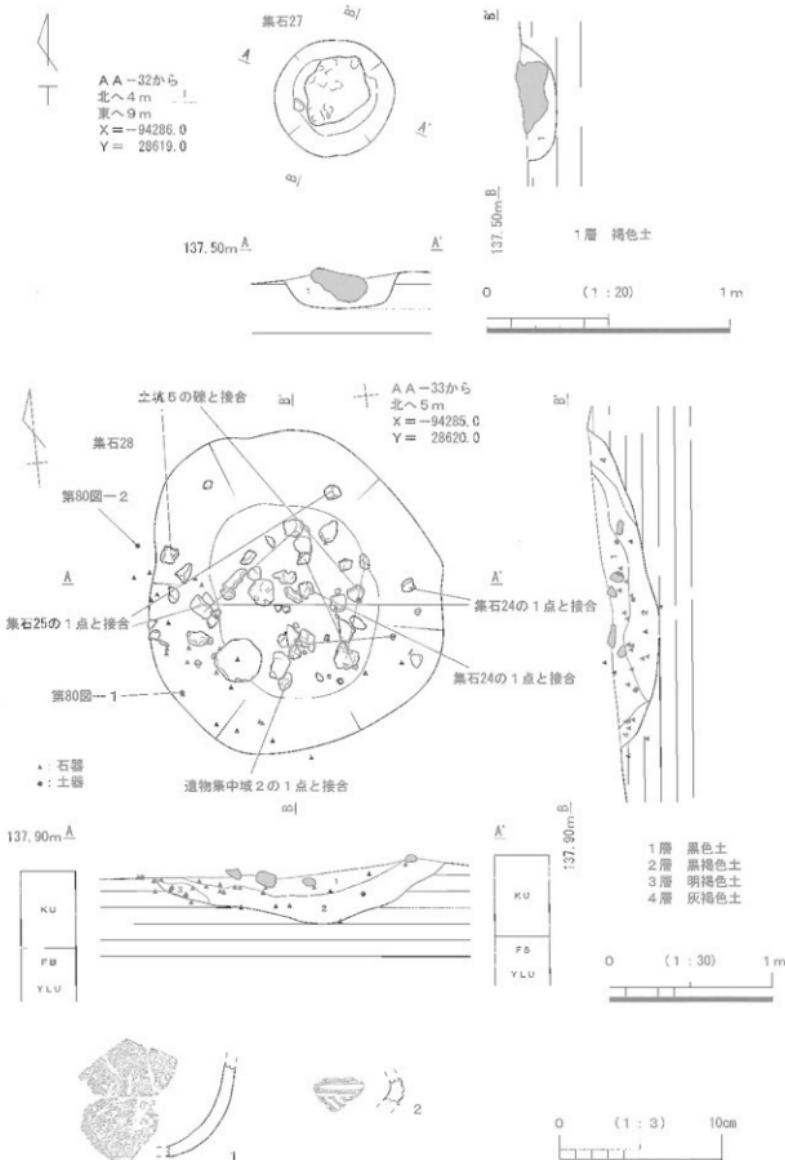
直径50cm程の円形の土坑である（第81図下段）。埋土は1層で、遺物は出土していない。



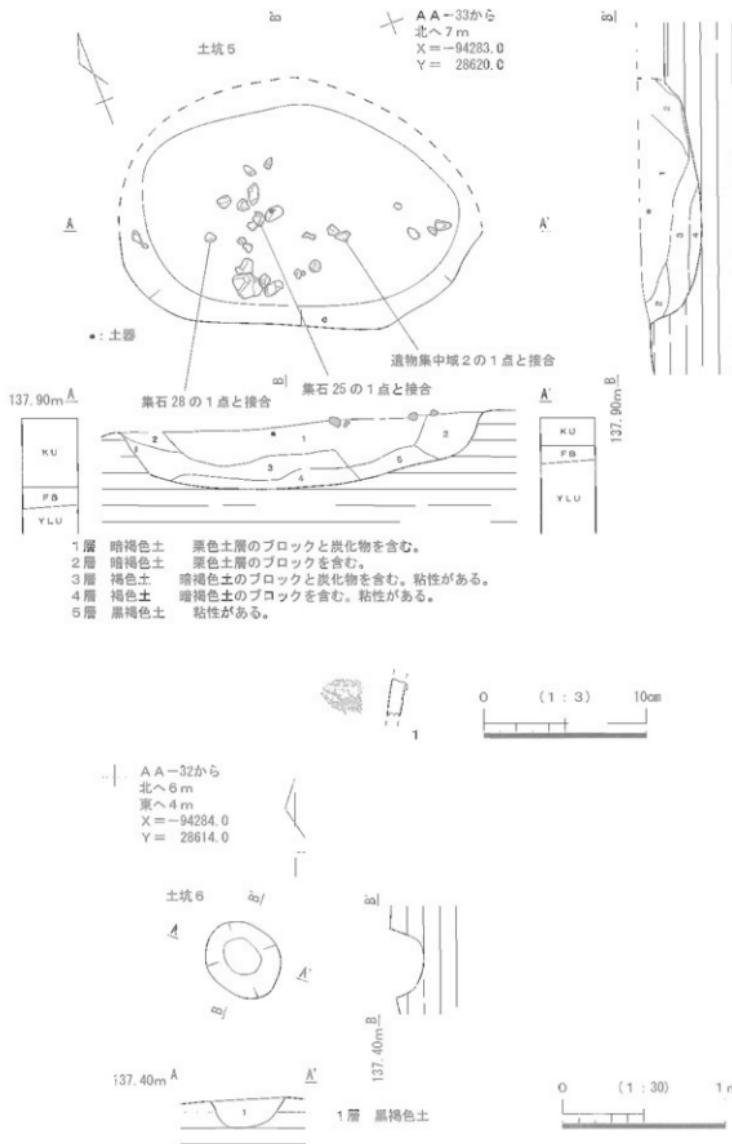
第78図 集石25実測図



第79図 集石26実測図と出土石器



第80図 集石27、28実測図と出土縄文土器



第81図 土坑 5、6 実測図と出土縄文土器

#### (14) 出土土器

##### 石山式並行土器

早期後半の同一個体と思われる土器が散在して出土した（第82図上段）。小片が多く、図示できたものは少ないが、1～4はいずれも条痕調整の後に連續する爪形文が入っている。横方向の爪形文とジグザグに施文している爪形文が見られることから、石山式、もしくは石山式に並行する土器と思われる。

##### 打越式土器

条痕文の見られる同一個体と思われる土器が散在して出土した（第82図下段）。5、6は、表裏両面とも条痕文が見られる。独特の赤褐色の胎土から考えて、打越式と思われる。

また別の個体もまとまって出土したものがある（第83図）。1、2とともに口縁を含む破片で、砲弾形になると思われる。表裏両面に条痕による調整が見られる。口縁直下には2列で並行する貝殻腹縁文がある。共に独特の赤褐色の胎土である。

##### 諸磯a式土器

AB33グリッド付近で諸磯a式土器がまとめて出土した（第84図上段）。すべて同一個体と思われる。1は胴部の破片で、RLの縄文が見られる。この破片は上下とも粘土のつなぎ目で割れている。2は胴部のくびれた部分の破片で、RLの縄文を地文として、くびれ部の上部には円形のスタンプ文を付けている。そして、くびれ部には並行する押し引き竹管文が3本引かれている。3本のうち上2本の間隔が広く空いており、その間の縄文は磨り消してある。くびれ部の下はRLの縄文だけが見られる。

3は胴部下半の破片で、RLの縄文を付けている。下の方は縄文を磨り消している。

##### 諸磯b式土器

上記の諸磯a式がまとめて出土したAB33グリッド付近では、諸磯b式土器もまとめて出土した（第84図下段）。同一個体と思われ、4～6には、口縁部外面をなでて面取りをする特徴が見られ、その直下に「C」字形のスタンプ文を連続して付けている。竹管文を引く際に使う半裁竹管を押しつけていると思われる。

##### 十三菩提式土器

調査区の南東部の遺構や遺物が集中する範囲では、十三菩提式土器が最も多く出土した。特にAA32グリッド付近では、第85図に示す良好な資料が出土した。

この資料は、口縁直下に4箇所の突起を持つ深鉢である。口縁はやや内湾し、口縁部の内側はきれいになでて面取りをしてある。内部も丁寧に横方向になでて調整している。

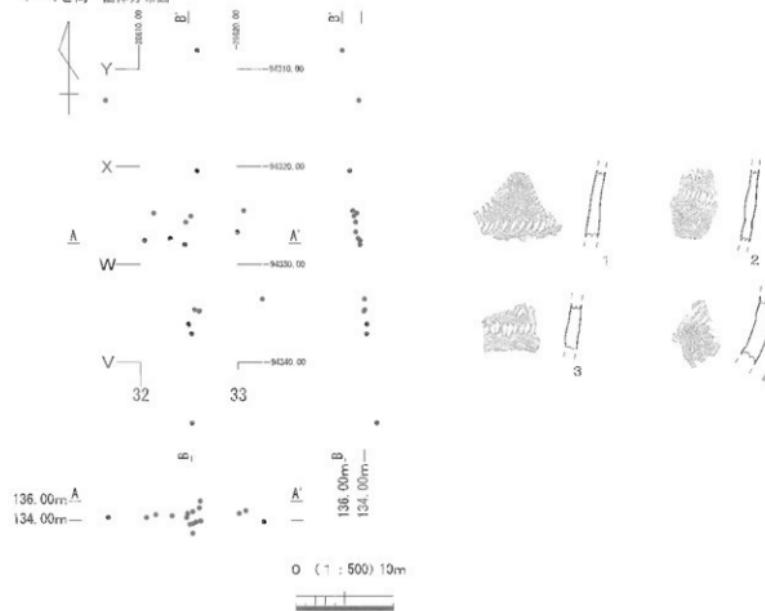
文様は、RLの縄文を地文として、浮線文や結節浮線文、条線文が見られる。施文方法は下記の通りである。

口縁からくびれ部にかけては、RLの縄文を地文として、その上にほぼ5mm間隔で縦方向に浮線文を貼り付けている。浮線文の長さは3.5cm程度で揃っている。その後、縦方向の浮線文の下に3本の並行する結節浮線文を貼っている。竹管の移動方向は、図面上で左から右に向かっている。右手で竹管を持って、左から右に向かって押し引きしたと思われる。

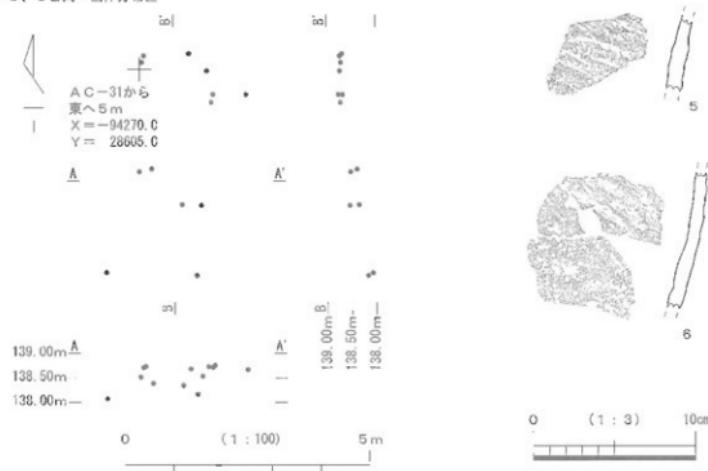
突起の根元には半円形に結節浮線文が巡っており、突起上には竹管文が見られる。これを棒状工具による沈線ではなく竹管文と判断した理由は、後述する。

くびれ部よりも下は、結節竹管文で文様帶を区画した後、丁寧になでる部分と竹管文を充填する部分に分かれている。結節竹管文による区画は、まず、縦に長方形の区画を作る。縦方向の竹管の移動方向は図面上で上から下に向かっている。この区画は3箇所認められ、その間隔は揃っていない。次に長方形の区画の間に藤手のような区画と三角形の区画を作る。結節浮線文の切り合いから見ると、藤手のような区画を先に作り、その後に空いた隙間に斜めの結節竹管文を入れて三角形の区画を作っている。

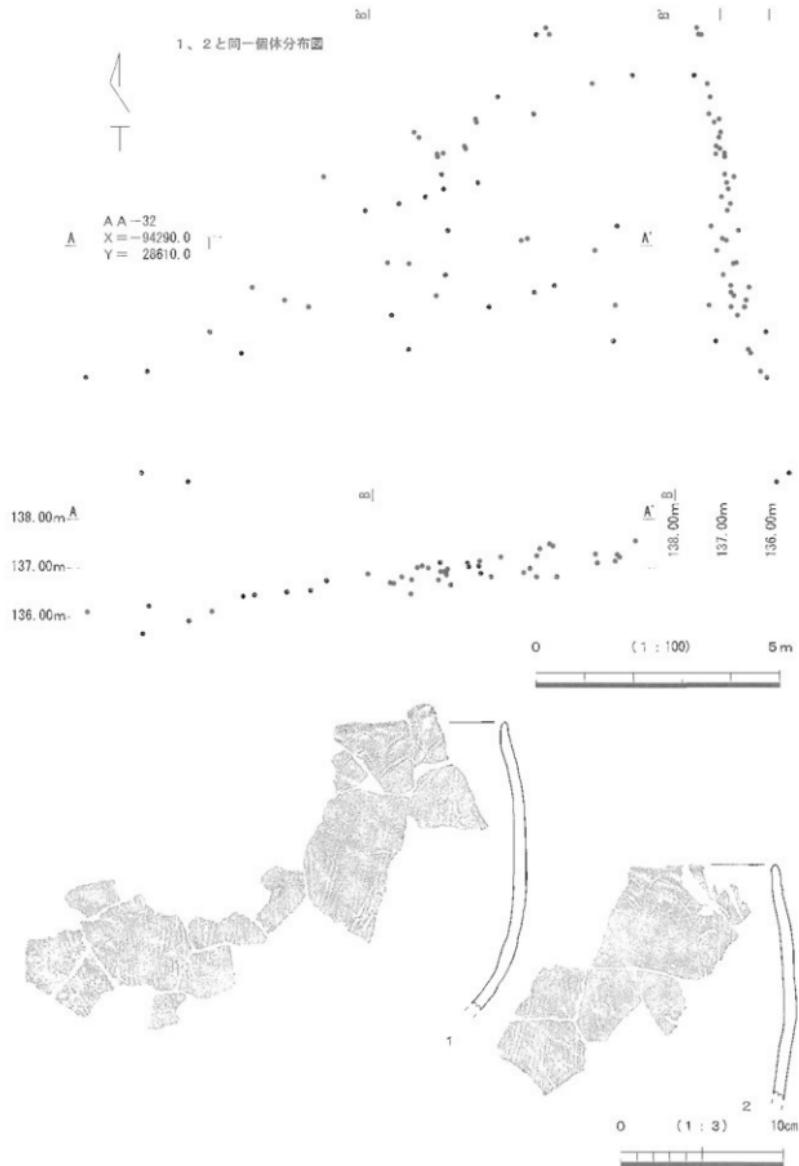
1~4と同一個体分布図



5, 6と同一個体分布図

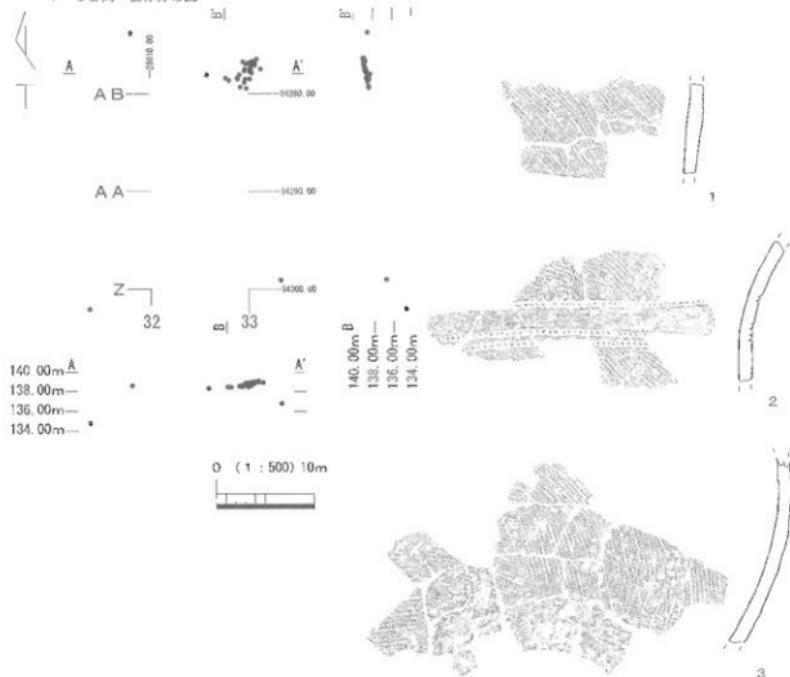


第82図 3区出土縄文土器 1

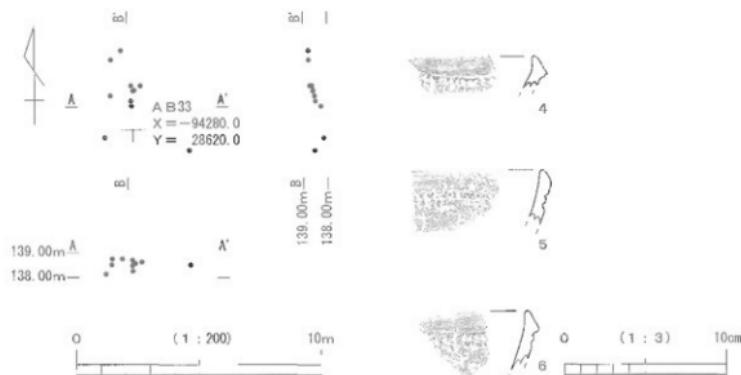


第83図 3区出土縄文土器2

1 ~ 3 同一個体分布図

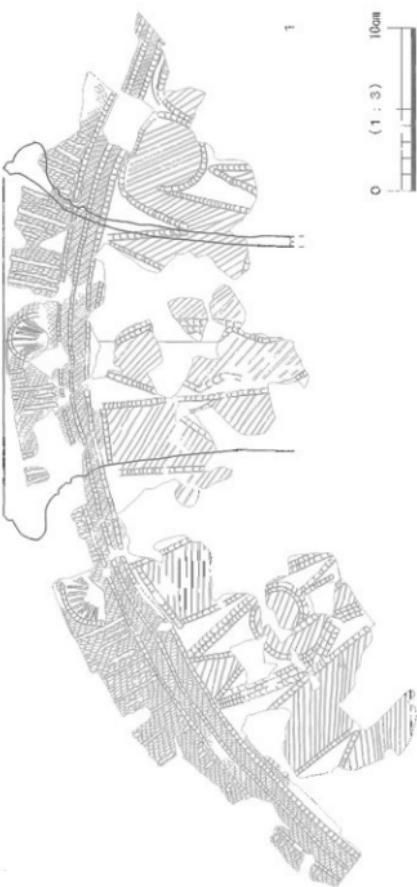


4 ~ 6 同一個体分布図



第84図 3区出土継文土器3

第85圖 3區出土陶文土器



区画ができたところで、縦長の長方形の区画と藤手形の区画に竹管文を入れる。この文様は、竹管を使わずに棒状工具でも付けることができるが、竹管文と判断した理由は下記のとおりである。

・条間はすべて半円形に盛り上がっており、盛り上がった部分には微細な筋が観察できる。これは半円形の施文原体が当たらなければ付かない痕跡である。

・結節浮線文を作るには半裁竹管を用意する必要があり、同じ道具でこの文様を付けることができるのに、この文様を付けるために別の道具を用意するのは非効率である。

・並行した沈線を多く引くには、1本の棒状工具よりも半裁竹管を使った方が有利である。

最後に竹管文を入れていない区画を丁寧にならべる。このなでは細かい部分まで及んでいることから、細長い工具を使っていると思われる。そして、結節竹管文の一部が磨り消されていることから、ながが最後の工程であることがわかる。

なお、くびれから下に縄文が付いていたかどうかははっきりしないが、縄文の痕跡はまったく観察できないことから、縄文が付けられていたのは、くびれから上の部分だけだったと思われる。

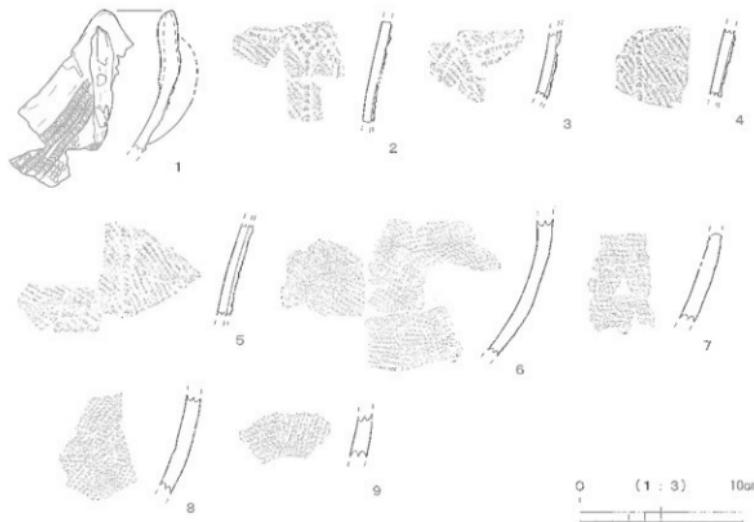
これとは別に同一個体と思われる十三菩提式土器が出上している（第86図）。1は波状口縁の突起部分である。口縁の内外面に粘土を貼り付け、無文帯を作っている。突起上には、縦方向に粘土を貼り付け突出部を作っている。そして、突出部から斜めに結節浮線文が3列付けられている。結節浮線文の下には、わずかに地文のRL縄文が見える。

2～5は胴部の破片で、RLの縄文の上に「Y」字形の結節浮線文を付けてある。いずれも竹管の動きは図面上で上から下に向かっている。

#### 前期の土器

以上他のに、時期の特定は難しいが、前期と思われる同一個体の土器が出土している（第86図）。

6～9は、雲母を含んだ胎土でRLの縄文が見られる。縄文の回転方向は縦回転と斜め回転の両方が見られる。



第86図 3区出土縄文土器5

## 第4節 8区の遺構と遺物

この調査区の北側に隣接する3区、東側の11区、南側にある14区との間に、遺構、遺物の空白域があるため、この調査区内を遺構、遺物の分布域として設定する。第87図にトーンで示したように、中央部の丘陵上は削平を受けて遺跡がなくなってしまっており、遺構と遺物はその両脇にある深い谷の中に分布している。このことから、分布域は丘陵を挟んで西と東に分けることができる。遺構は、土坑が7基検出されしており、落とし穴と思われる土坑が多いのが特徴である。石器は散在しており、集中する所はない。出土している土器は十三音提式と曾利式である。量は曾利I式が最も多く、曾利II式がこれに続く。

### (1) 土坑7

この区域で唯一、丘陵上で検出した遺構である（第88図）。深さが2.2mあるが、上部を削平されているため、本来はもっと深かったと思われる。埋土は黒っぽい土が主体のため、分層が難しいが、16層に分けることができる。このことから、時間をかけて自然に埋没したと考えられる。深さから考えて落とし穴の可能性が高い。土坑内からは遺物は出土していない上に、周囲でも遺物は出土していない。

### (2) 土坑8

谷の中で検出した遺構で、土坑の中に大きな礫が入っている（第89図上段）。流れ込みではなく、土坑中に掘えた状態なので、その点を評価すれば集石と同じ性格の遺構になるが、礫が1点では「集石」とは呼びにくい。ここでは土坑として報告する。

浅い土坑だが、上部を削平されているため、本来はもっと深かったと考えられる。土坑内からは遺物は出土していないうえに、土坑の周囲でも遺物は出土していない。

### (3) 土坑9

谷の中で検出した遺構で、上部を削平されているため、本来はもっと深かったと考えられる（第89図下段）。これも落とし穴と思われる。土坑内からは遺物は出土していないうえに、土坑の周囲でも遺物は出土していない。

### (4) 土坑10

谷の中で検出した遺構で、上部を削平されている（第90図）。B-B'の断面図に表れているように、傾斜地に掘られている。検出できた深さは1m程度だが、本来はもっと深かったと考えられ、立地から考えても落とし穴の可能性が高い。土坑内からは遺物は出土していないうえに、土坑の周囲でも遺物は出土していない。

### (5) 土坑11

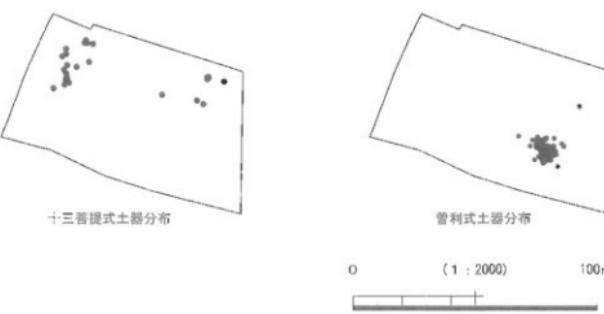
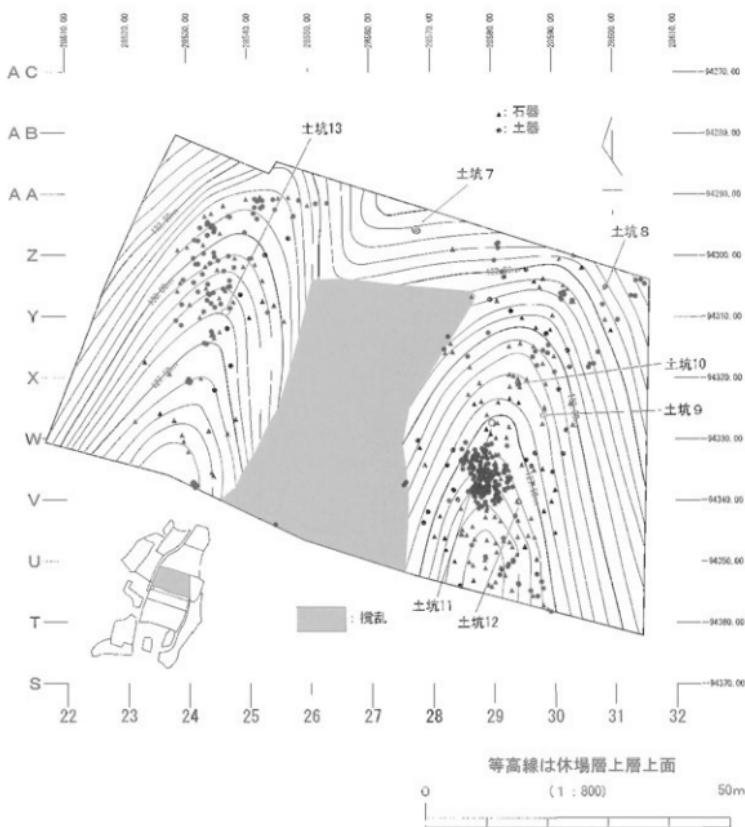
谷の中で検出した遺構である（第91図）。B-B'の断面図に表れているように、傾斜地に掘られている。このような立地から考えると落とし穴の可能性が高い。土坑内からは遺物は出土していない。第87図では、この土坑の南側で曾利I式土器がまとまって出土しているが、出土レベルが違うため、この土坑の周囲でも土坑の時期を決定できる遺物は出土していないことになる。

### (6) 土坑12

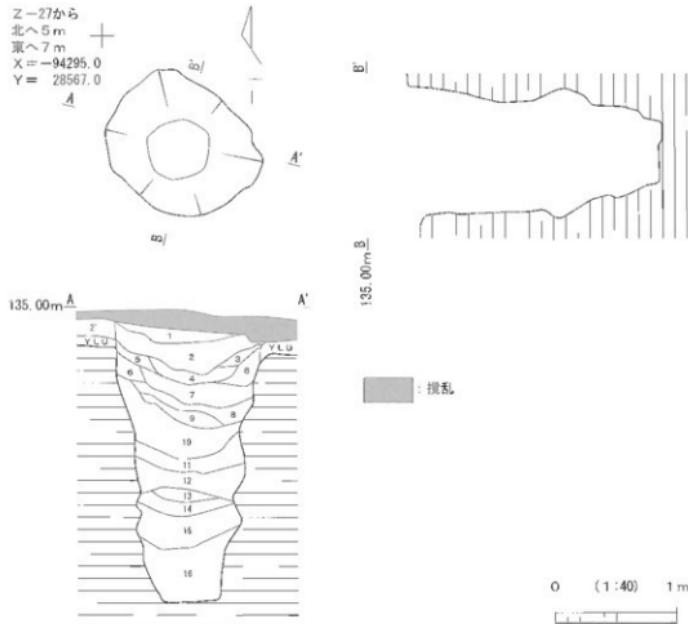
谷の中で検出した浅い遺構である（第92図上段）。埋土は1層で遺物は出土していない。本来の深さは不明であるが、上部が大きく削平されている状況ではないため、落とし穴のような深い土坑であったとは考えにくい。

### (7) 土坑13

この調査区では唯一西側の谷で検出した遺構である（第92図下段）。浅い土坑で、土器片が1点出土しているが、時期は不明である。上部を削平された落とし穴の可能性があるが、本来の深さは不明である。第87図の分布図上では周囲に遺物が散在しているように見えるが、出土レベルが違う。

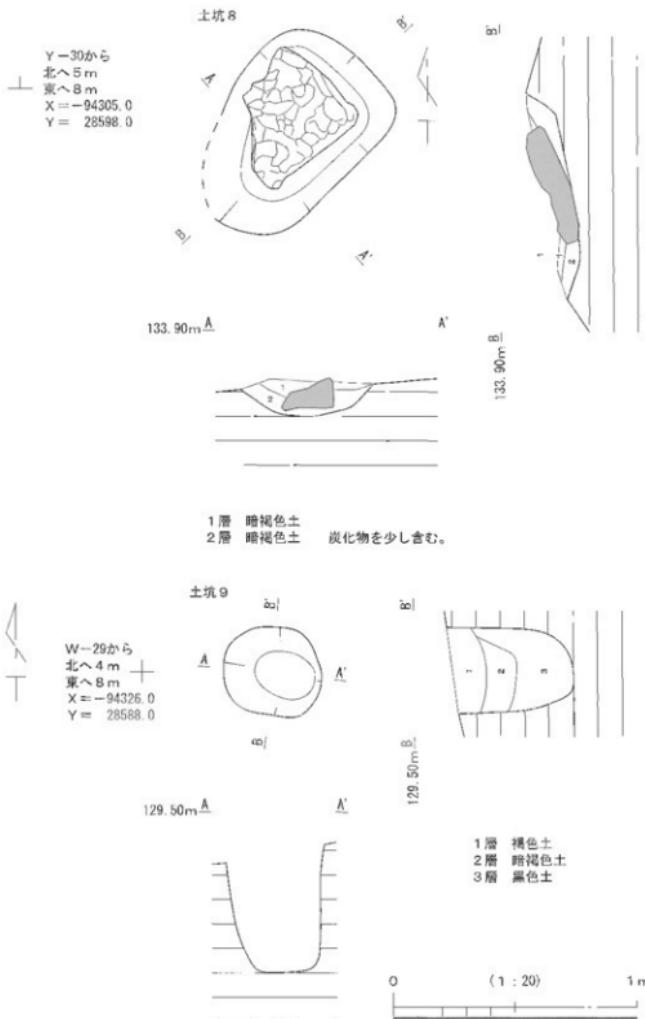


第87図 8区縄文時代遺構、遺物分布図



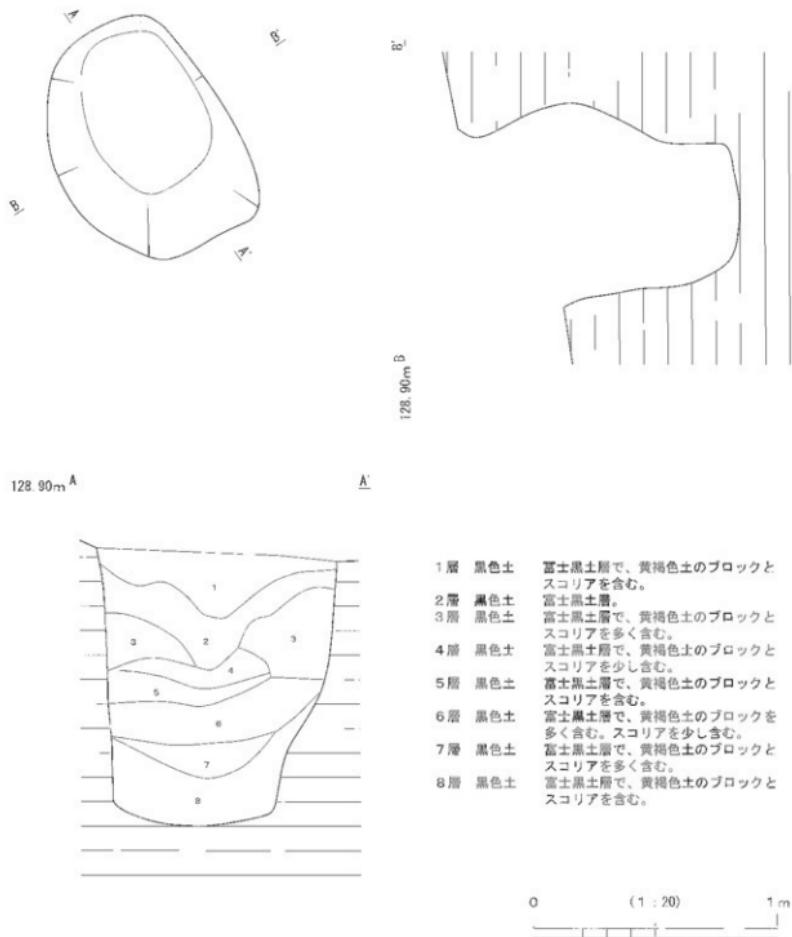
- 1層 暗褐色土  
2層 黒褐色土  
2'層 黒褐色土  
3層 暗褐色土  
4層 黒褐色土  
5層 褐色土  
6層 黒褐色土  
7層 黒褐色土  
8層 黒褐色土  
9層 黒褐色土  
10層 黑色土  
11層 暗褐色土  
12層 黒色土  
13層 黒褐色土  
14層 黒褐色土  
15層 黒褐色土  
16層 黑褐色土
- よく縋まっている。2~3mm大のローム粒を多く含む。  
よく縋まっている。2~3mm大のローム粒を多く含む。  
2層と同質で、2~3mm大の暗色スコリア粒を少し含む。  
粗く、縋まっていない。2~3mm大のローム粒を非常に多く含む。  
2層より薄い色調。粗く、縋まていない。2~3mm大のローム粒を多く含む。  
やや粗く、縋まっていない。2~3mm大のローム粒を多く含む。  
2層より濃い色。非常に粗く、縋まっていない。2~3mm大のローム粒を含む。  
6層と同質。6層より2~3mm大のローム粒の量は少ない。  
4層と同じ色調。非常に粗く、縋まっていない。7層よりローム粒を多く含む。  
8層と同じ色調。8層より細かい。あまり縋まっていない。2~3mm大のローム粒を含む。  
粗く柔らかい。よく縋まっている。2~3mm大のローム粒を少し含む。  
粗く柔らかい。よく縋まっている。砂粒状のロームを多く含む。  
粗く、縋まっていない。砂粒状のロームを多く含む。  
粗く、柔らかい。あまり縋まていない。砂粒状のロームを多く含む。  
7層と同じ色調。13層より濃い色調。非常に粗く、縋まっていない。2~3mm大のローム粒を少し含む。  
14層より薄い色調。粗く縋まっていない。砂粒状のロームを少し含む。  
粗く、縋まていない。強い粘性がある。水分を含む。

第88図 土坑7実測図



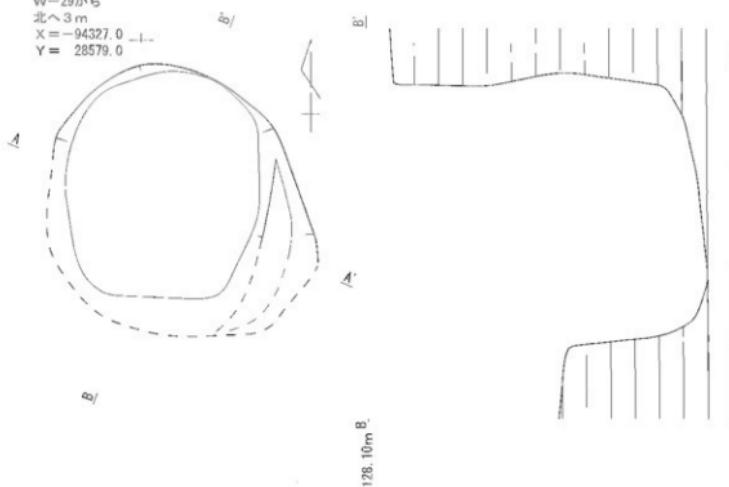
第89図 土坑8、9実測図

X-29から  
東へ5m  
X=-94320.0  
Y= 28585.0

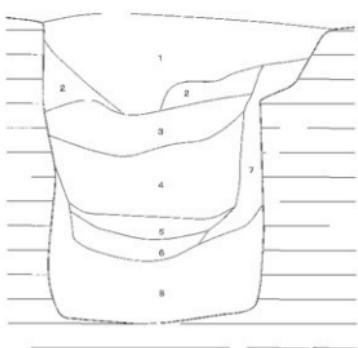


第90図 土坑10実測図

W-29から  
北へ3m  
X = -94327.0  
Y = 28579.0



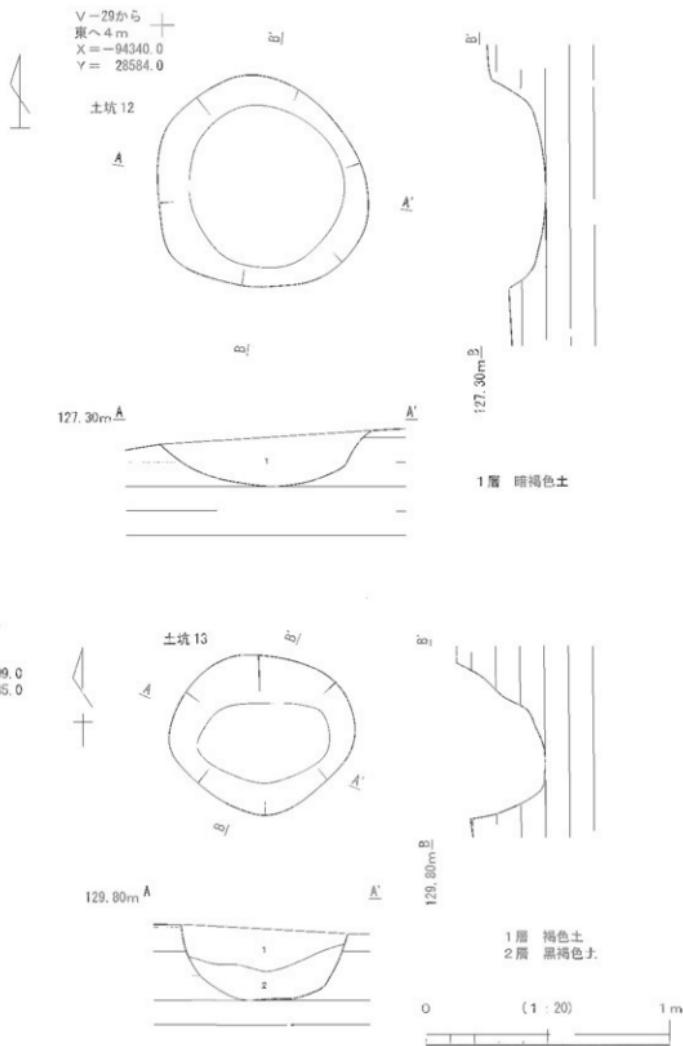
128.10m A



- |   |                |  |
|---|----------------|--|
| A | <b>1層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>黄褐色土のブロックを多く含む。                 |
|   | <b>2層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>2~3mmの炭化物を含む。                   |
|   | <b>3層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>5mm程度の炭化物を含む。赤褐色の<br>スコリアを少し含む。 |
|   | <b>4層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>赤褐色のスコリアを少し含む。                  |
|   | <b>5層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>赤褐色のスコリアをわずかに含む。                |
|   | <b>6層 黒色土</b>  | 富士黒土層で、<br>赤褐色のスコリアを多く含む。                  |
|   | <b>7層 黑褐色土</b> | 漸移層の流れ込みか。黄褐色の<br>スコリアと赤褐色のスコリアを含む。        |
|   | <b>8層 黒色土</b>  | 富士黒土層の流れ込み。                                |

0 (1 : 20) 1m

第91図 土坑11実測図



第92図 土坑12、13実測図

## (8) 出土土器

### 十三菩提式土器

V24グリッド付近で、同一個体の土器がまとまって出土した（第93図上段）。1は口縁部の破片で、波状口縁に近い形状である。突出する部分に、棒状工具による刺突がある。そして口縁直下には結節浮線文を貼っている。

2は深鉢で、口縁部から頸部にかけて3本の結節浮線文を貼っている。1本は口縁部直下に貼り、2本は頸部のくびれ部に貼っている。そして、3本目の結節浮線文からは「U」字形の懸垂文が見られる。土器の内部は板状の工具によるなでが観察できる。

### 曾利式土器

V29グリッド付近では曾利式土器がまとまって出土した。第93図-3は無文の浅鉢で、内外面とも丁寧になでてある。口縁部は内側に屈曲させてある。

### 曾利I式土器

胴部中央に派手な装飾を持つ深鉢で、第94図に分布を図示した破片はほとんどが接合する。器壁は厚く、どっしりとした重量感がある。内外面とも丁寧になでてあり、特に口縁頂部は何度もなでて面取りをしてある。また、底部は平らにならしてある。

装飾は胴部中央に見られ、5箇所にドーム型に突出した中空の文様が付く（第94図、第95図）。そして、ドーム型の文様の間にも粘土紐を蛇行させた文様が付いている。ドーム型の文様は、粘土紐を蛇行させた複雑なもので、文様のパターンを把握するのが難しいが、施文方法を復元してみよう。

### 施文方法

土器の表面は丁寧になでてあるが、突起Iを付ける部分だけ条痕が残っている。したがって、土器の表面をなでて調整する段階で、すでに最初に突起Iを付ける位置を決めていたか、あるいは、なでて調整する段階で、すでに突起Iは付けられていたと考えられる。いずれにしても、突起Iが最初に付けられた文様と考えられる。

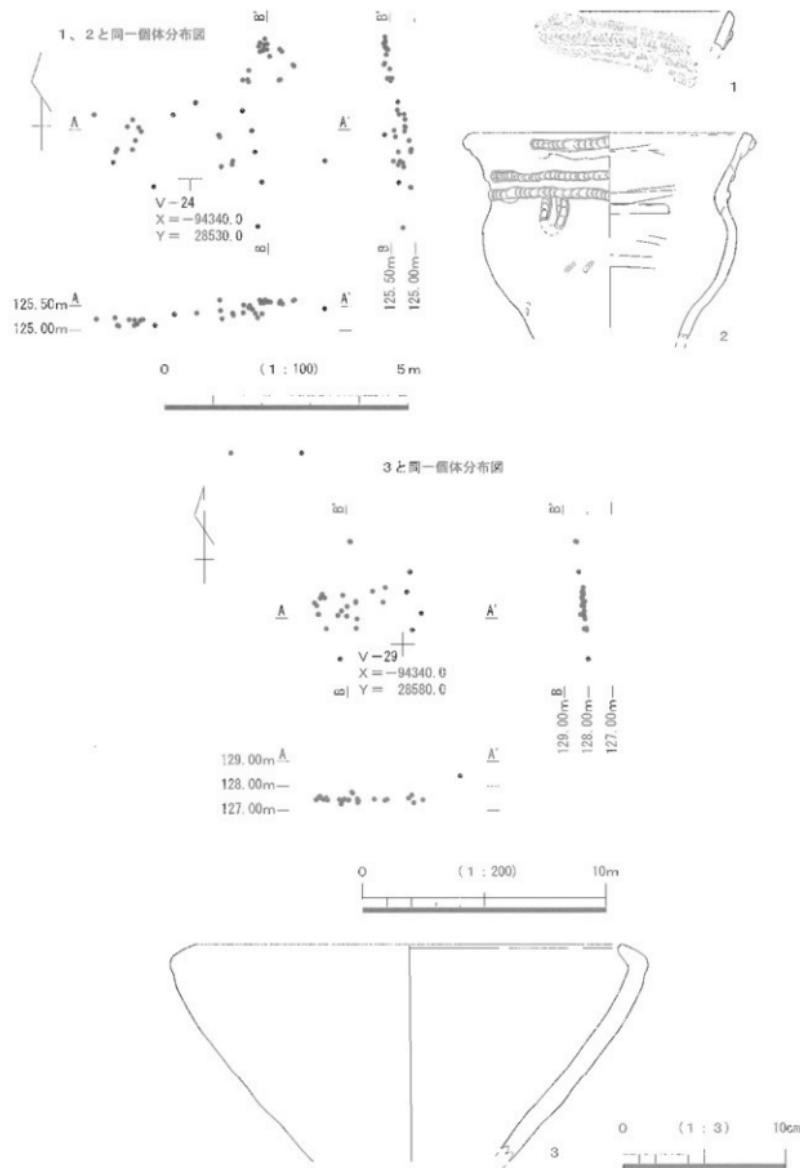
突起Iを観察すると、ドーム状突起の両端が欠けて、ジョッキの取っ手のようになっている。欠けた部分を観察すると粘土をつないだ痕跡が認められる。ということは、最初からドーム状の突起を被せるようにして付けているのではなく、最初はジョッキの取っ手のようなアーチ状の突起を付けて、その後で粘土を継ぎ足してドーム状にしていることになる。

アーチ状の突起を付けた後、その両側に粘土を継ぎ足し、この段階で突起はドーム状に作られる。この時、粘土でアーチ状突起の両側をふさいでしまうのではなく、指が入る程度の穴を空けておく。この穴は装飾の意味もあるが、この穴がないと、アーチ状突起の両側に粘土を継ぎ足した時に、指を入れて内側をなでて粘土を接着させることができない。実際にドーム状突起の内側を観察すると、丁寧になでてある。これはドーム状突起の側面に穴がないとできないことである。この穴は、突起I～3、5は両サイドに空けてあるが、突起4は片側だけに空けてある。

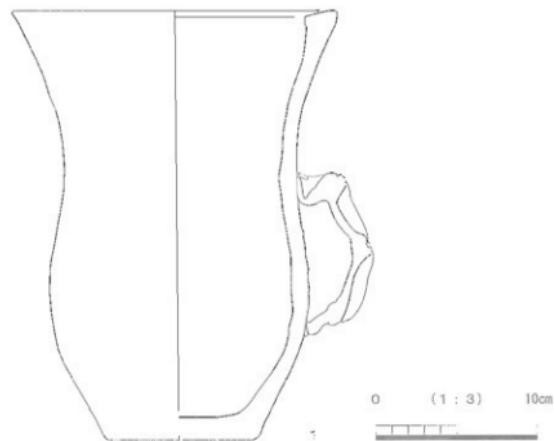
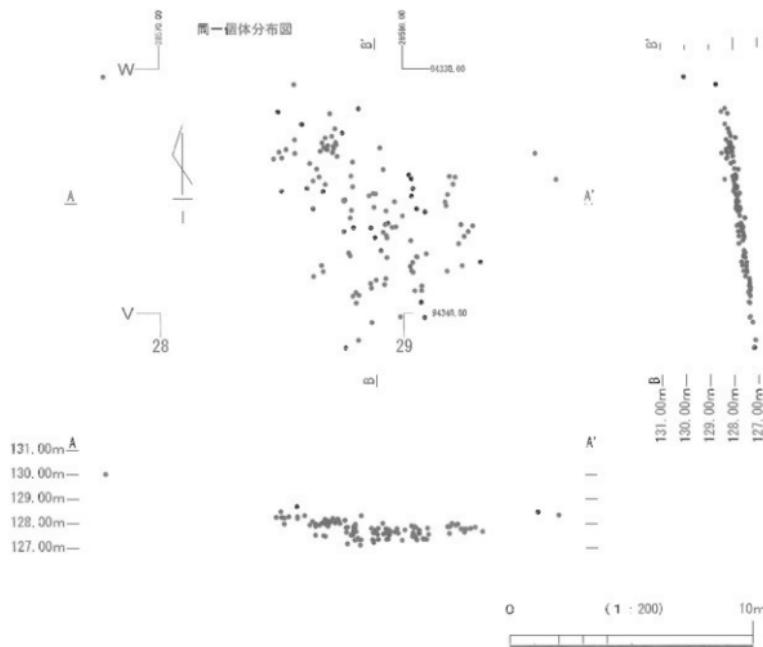
突起がドーム状になったところで、ドームの頂部に粘土紐を蛇行させた浮線文を貼り付け、突起3の正面に見られるような文様を作る。この時、蛇行する浮線文の中央を棒状工具で抉るように削り取っている。これは粘土紐をドーム状突起に接着させると同時に、蛇行する浮線文の中央を深く抉ることによって、蛇行文が立体的に浮き出して見える効果を生んでいる。

蛇行する浮線文を作った後は、ドーム状突起のサイドに空いている穴の周りに、円形に粘土紐を付ける。穴の内側を観察すると、この時、穴に指を入れて粘土紐を接着させた痕跡が観察できる。

穴の周りに円形に粘土紐を付けた後は、この円形の浮線文の周りに蛇行する浮線文を巡らせ、「太陽マーク」のような文様を作る。

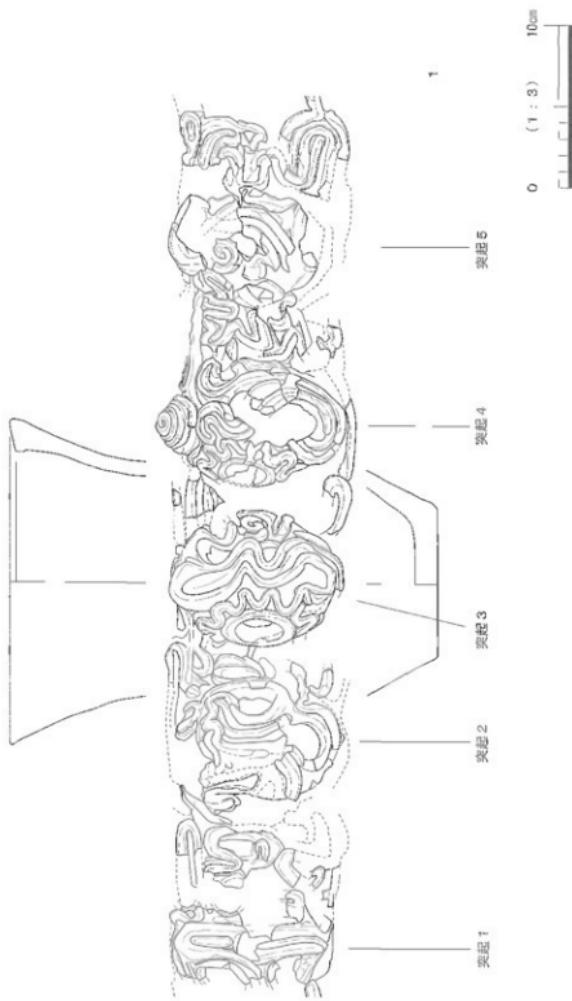


第93図 8区出土縄文土器1



第94図 8区出土縄文土器2

第95圖 8區出土繩文土器2文様展開図



突起4の頂部に付いている螺旋状の文様は最後に載せたものである。突起5の頂部にも螺旋状の粘土紐の一部が残っている。このような螺旋状の文様が確認できるのは突起4と突起5だけである。突起1～3には螺旋状の文様を乗せてあった痕跡はない。

ドーム状の突起が完成したら、ドーム状突起の間に粘土紐を蛇行させた浮線文を付ける。この時、浮線文が並行する部分では、浮線文の間を抉るように削り取って、浮線文が浮き出して見えるようにしている。これが最後の工程である。

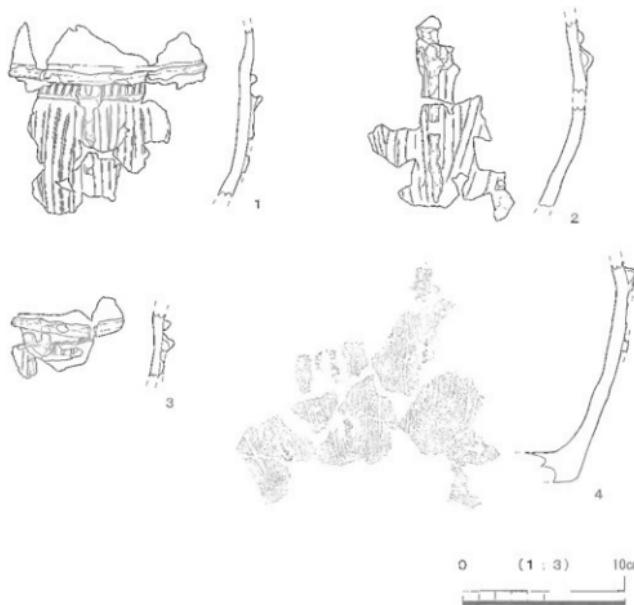
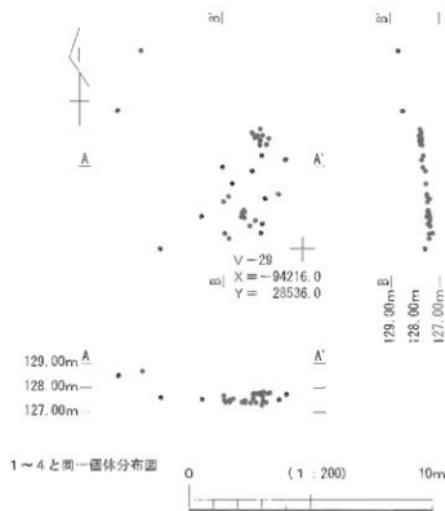
一見複雑に見え、5箇所の文様がそれぞれ別の文様のように見えるが、ジョッキの取っ手のようなアーチ形の粘土を受けた後、アーチの両側に粘土を縦ぎ足してドーム状の文様を作り、ドームの上面を蛇行する粘土紐で飾るという施文方法は一致している。

#### 曾利Ⅱ式土器

これも同一個体と思われるものがまとまって出土した（第96図）。1は胴部の破片で、横方向に隆起帯を貼り、その下に太い粘土紐を貼り付け、その上に縦方向の短い沈線を連続して入れている。また、この粘土紐の上に、さらに粘土紐で「Y」字形の隆起帯を付けている。そして、その下の胴部には条線文が見られる。

2も胴部の破片で、「Y」字形の隆起帯と条線文が見られる。3も1、2と同様の施文が見られ、横方向に隆起帯を付け、その下に太い粘土紐を貼り付け、その上に縦方向に短い沈線を入れ、さらにその上に「Y」字形の隆起体を貼り付けている。

4は底部に近い破片で、縦方向の隆起帯と条線文が見られる。



第96図 8区出土縄文土器3

## 第5節 11区の遺構と遺物

11区は丘陵に当たっている（第97図）。隣接する3区と8区との間には、遺構と遺物の空白域があるため、この調査区内を独立した遺構と遺物の分布域として設定した。

遺構と遺物は丘陵の頂部付近に分布している。丘陵は南北に延び、東西両脇には谷が入っている。西側の谷に降りていくと、8区の遺構、遺物の分布域がある。一方、東側には大きな谷が入っている。この谷では、遺跡は確認されていない。

この分布域で出土した土器は、打越式土器と諸磯b式土器が主体で、特に打越式土器が多い。打越式土器と諸磯b式土器の分布は一部で重複している。石器は散在しており、集中する所はない。

### （1）集石29

丘陵から谷に向かう緩斜面で検出した（第98図）。浅い土坑に礫が入った状態であるが、土坑の上面は削平を受けており、検出できたのは底に近い部分だけである。

5点の礫が出土しており、完形の礫はない。割れ面が赤化した礫が3点、割れ面が赤化していない礫が2点ある。土坑内からは遺物は出土していないうえに、周囲でも、土坑の時期を推定できる遺物は出土していない。

### （2）集石30

丘陵上の休場層上層の上面で検出した土坑を伴う集石である（第99図上段）。土坑の中に礫を敷き詰めたような状態である。39点の礫が出土しており、完形の礫は3点で、いずれも赤化している。割れ面が赤化している礫が20点、割れ面が赤化していない礫が14点ある。土坑内から遺物は出土していないが、周辺で打越式土器が出土している。

### （3）集石31

丘陵上の休場層上層の上面で検出した土坑を伴わない集石である（第99図下段）。22点の礫が散在している状態で、完形の礫が7点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫が11点、割れ面が赤化していない礫が4点ある。遺物は出土していない。

### （4）集石32

丘陵上の富士黒土層で検出した土坑を伴わない集石である（第100図）。43点の礫からなっているが、近接して1号墳の周溝が入っているため、この周溝掘削時に失われた礫があると思われる。

完形の礫は9点ありすべて赤化している。割れ面が赤化した礫は32点、割れ面が赤化していない礫は2点ある。

下記に示す土器が集石の範囲内と集石に隣接した所で出土している。

#### 上ノ山式土器

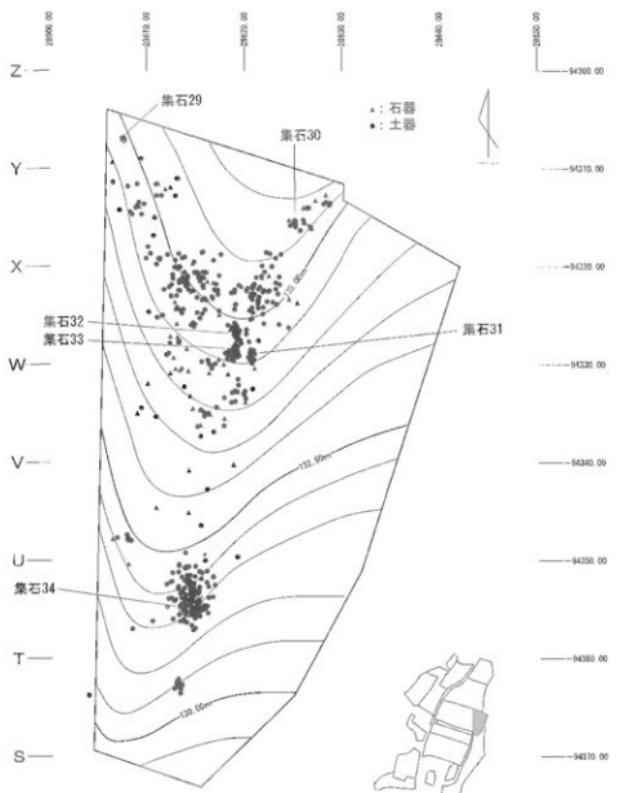
口縁部の破片が1点だけ出土した（第100図-1）。白っぽい胎土に特徴がある。口縁直下に2本の隆起帯を貼り、その上に棒状の工具を横向きに押し当てている。隆起帯を付ける部分は器壁が薄くなっていることから、隆起帯を貼る前にこの部分をなでて隆起帯を接着しやすくしているようである。

#### 打越式土器

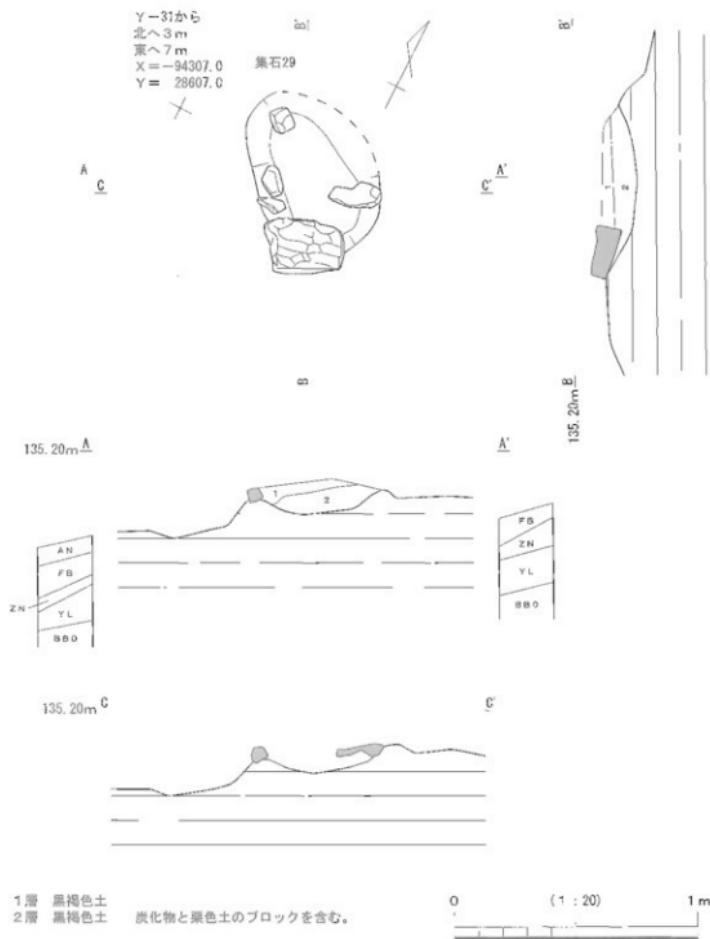
2点の破片が近接して出土し、接合している（第100図-2）。内外面とも条痕による調整が見られる。文様は見られないが、独特の赤褐色の胎土と器壁の薄さから打越式と思われる。

#### 鶴ヶ島台式土器

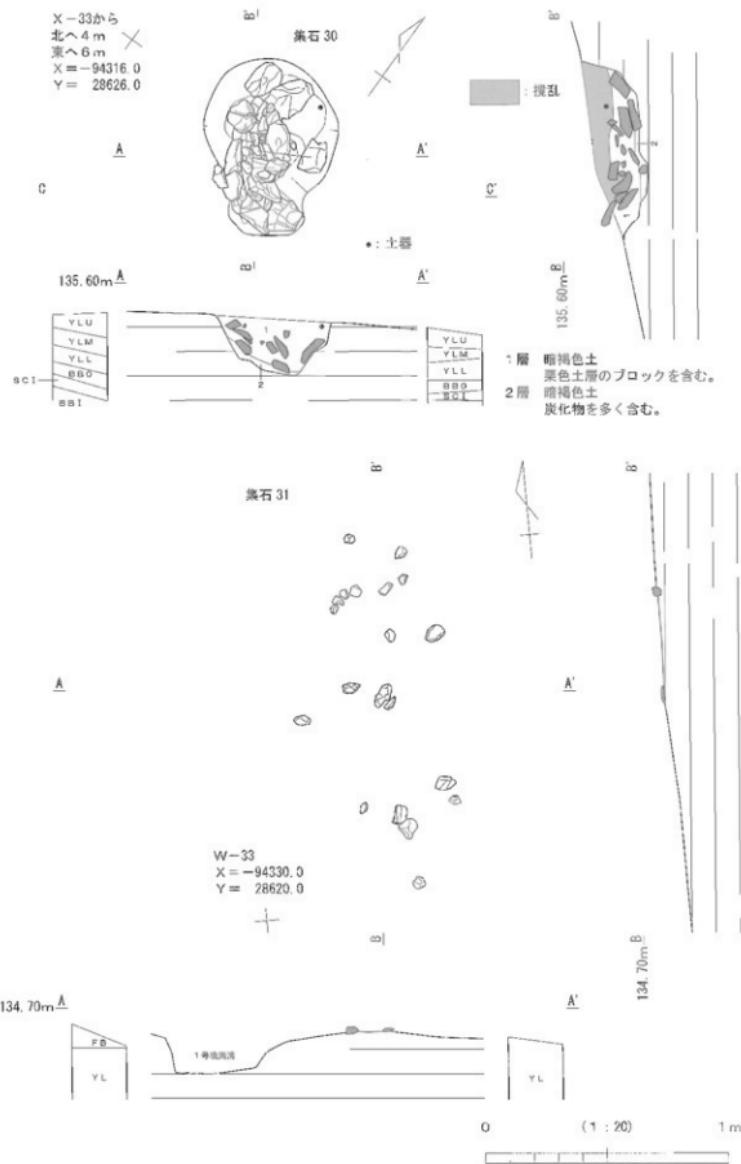
波状口縁を持つ深鉢で、胎土と文様に特徴がある（第101図）。胎土は赤褐色で、砂粒を多く含む粗い胎土である。器壁は分厚く、重量感がある。文様は後述するように、指で凹線状の沈線を引くなど、大胆な印象を受け、非常に無骨な感じのする土器である。それ故に個体識別は容易である。



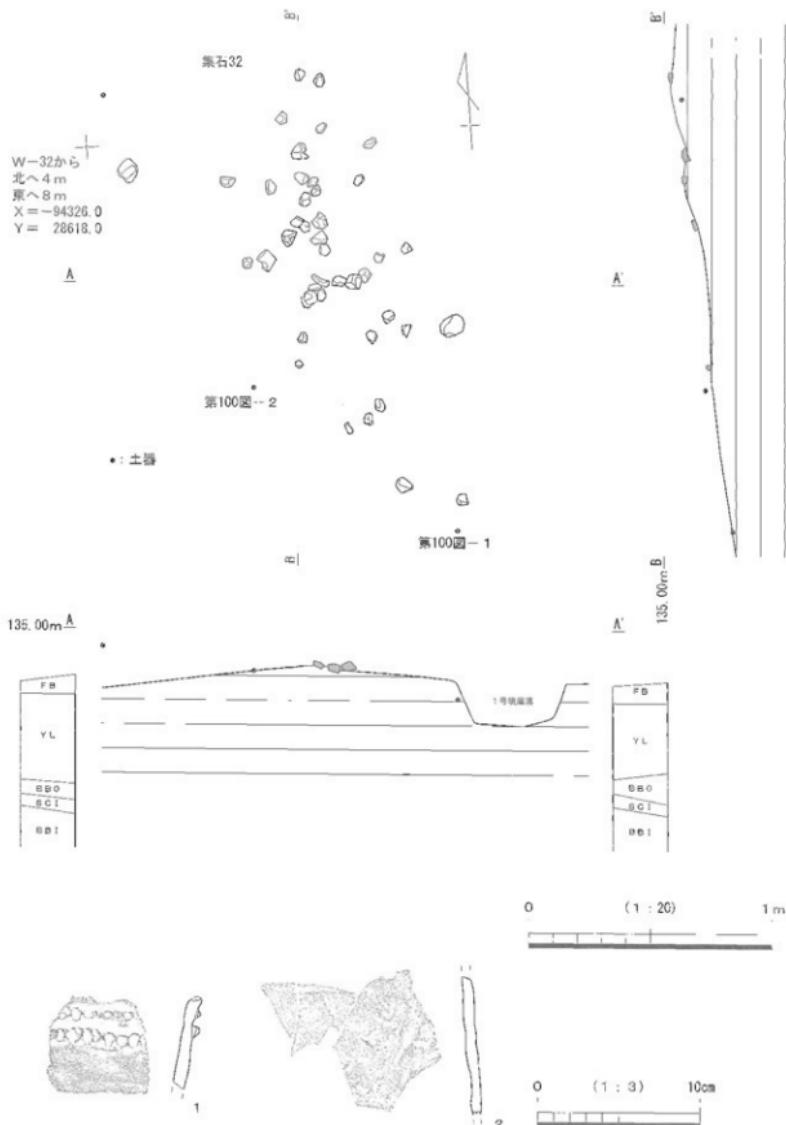
第97図 11区縄文時代遺構、遺物分布図



第98図 集石29実測図



第99図 集石30、31実測図



第100図 集石32実測図と出土繩文土器



第101回 11区出土繩文土器

第101図-1が集石32に近接して出土しており、これと同一個体の土器片が周辺に分布している。

1には、口縁部に棒状の工具による連続した刺突が見られる。そして、その下に太い沈線を引いてある。この沈線は指で引いていると思われ、特に頸部のくびれ部分に引いてある沈線は、沈線というよりも四線に近い印象である。

胴部には2箇所の屈曲する部分があり、屈曲部には粘土が貼り付けられ、隆起帶のようになっている。文様とは呼びにくいことから、隆起帶のような文様効果を狙ったものではなく、文様帯を区画する日印として付けたのであろう。

文様は頸部の上半に入っている。頸部のくびれ部分よりも上は、沈線で横長の菱形を作り、その中央を縦の沈線で分断している。そして、縦と斜めの沈線が交差する辺りに棒状工具による刺突を入れている。この幾何学的な文様構成と沈線が交差する部分の刺突は、鶴ヶ島台式に通常見られるものだが、沈線が交差する部分ではなく、沈線が交差する部分の脇を刺突しており、他にも沈線とは関係のない部分を刺突するなど、典型的な鶴ヶ島台式とは異なる点が見られる。また、沈線と沈線の間には「C」字型のスタンプ文のような沈線が描かれている。この「C」の字は、色々な方向を向いており、例えて言えば、視力検査の記号のような印象である。

くびれ部分には、横向に四線と言っても良い太い沈線を入れ、その下には斜め方向と縦方向の沈線で、くびれ部よりも上と同じ文様を描いている。しかし、胴部下半は条痕による調整だけが見られ、横に長い菱形の文様は、菱形の上半分だけで途切れている。沈線の間には、くびれ部の上と同じように「C」字形の沈線が入っている。文様が途切れている理由は、胴部に設けた段のうち、1段目と2段目に文様を入れるという、鶴ヶ島台式の施方法に従っているためであろう。

2～5は同一個体の土器片で、2～4には1と同様の文様が見られる。5は胴部下半の無文部分で、条痕だけが見られる。

#### (5) 集石33

富士黒上層で検出した集石で、41点の礫からなる(第102図)。完形の礫は8点あり、いずれも赤化している。割れ面が赤化した礫は31点あり、割れ面が赤化していない礫は2点ある。第102図-1に示した無文土器が1点共伴している。薄手の土器で、灰白色の胎土である点は大歳山式土器に似ていることから、大歳山式土器、もししくは大歳山式土器に並行するものであろう。

#### (6) 集石34

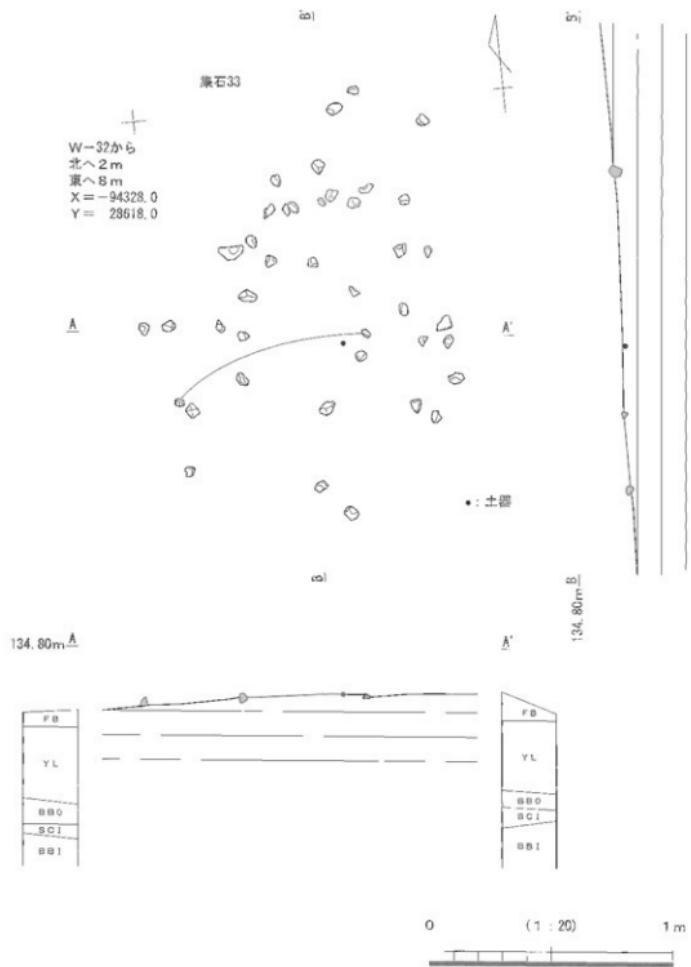
休場層の上面で検出した浅い土坑を伴う集石である(第103図)。土坑の中とその周辺から295点の礫が出土している。完形の礫は68点あり、67点は赤化している。割れ面が赤化している礫は177点あり、割れ面が赤化していない礫は38点ある。集石の直上まで削平されているため、土坑の上部と多くの礫がなくなっていると思われる。

撚糸文土器が共伴しており、集石の周りにも同一個体の土器片が分布している(第104図)。器壁が分厚く、胎七も粗いため、無骨な感じを受ける。1と2は口縁を含む破片で、口縁直下から縦方向に細かい撚糸文が見られる。3は底部の破片で、底部周辺には撚糸文が見られないが、胴部に向かって屈曲する部分には撚糸文が付けられている。内側には指頭圧痕が残っている。4にはLRの罫文がある。

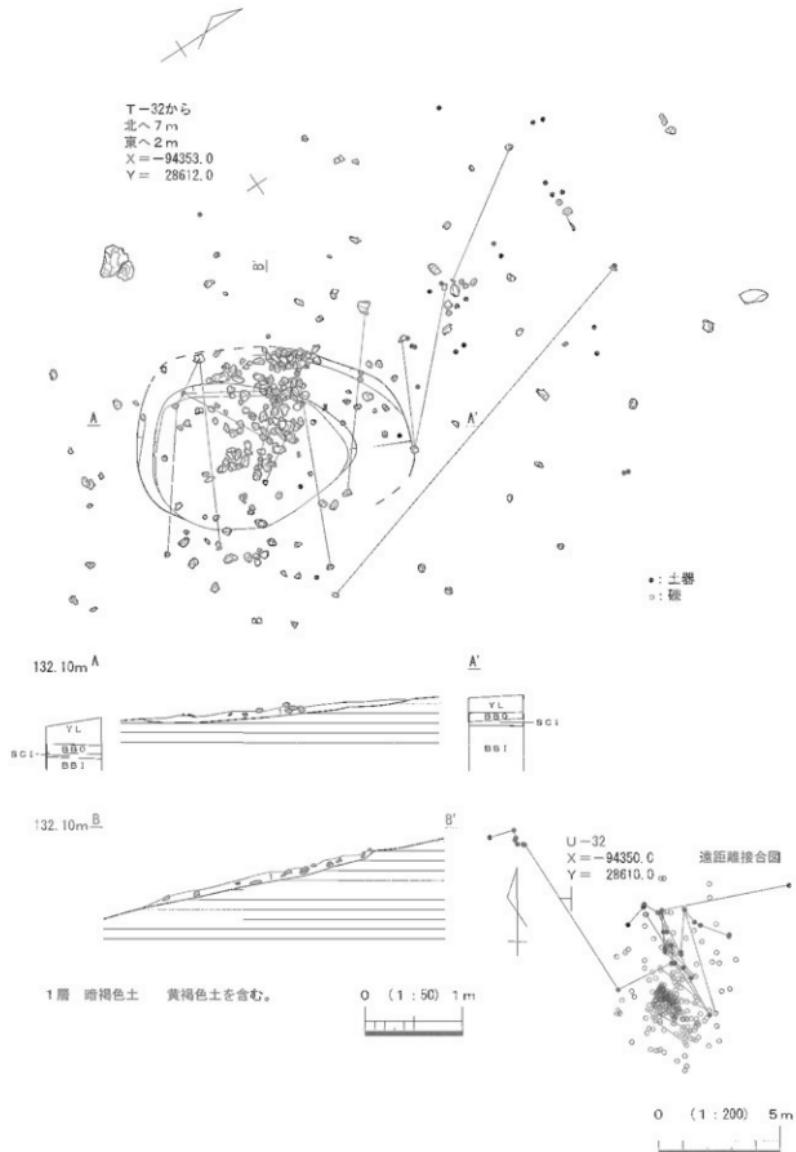
#### 出土土器

##### 野鳥式土器

同一個体と思われる土器片が散在して出土した(第105図)。1は口縁部の破片で、縦方向の隆起帶を貼り、隆起帶の左側は無文で、右側には条線を入れている。内面は条痕調整である。2と3には細い隆起帶が2本見られ、無文の部分と条線を入れる部分を区画している。3には、隆起帶に並行した条線が見られる。4は円形に巡る細い隆起帶があり、円の外側が無文、内側に条線文を入れている。



第102図 集石33実測図と出土縄文土器



第103図 集石34実測図

U-32

[m]

周一個体分布図

[m]

[m]

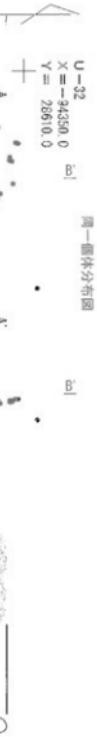
X = -34350.0

[m]

Y =

26610.0

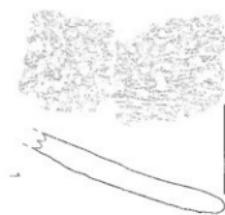
[m]



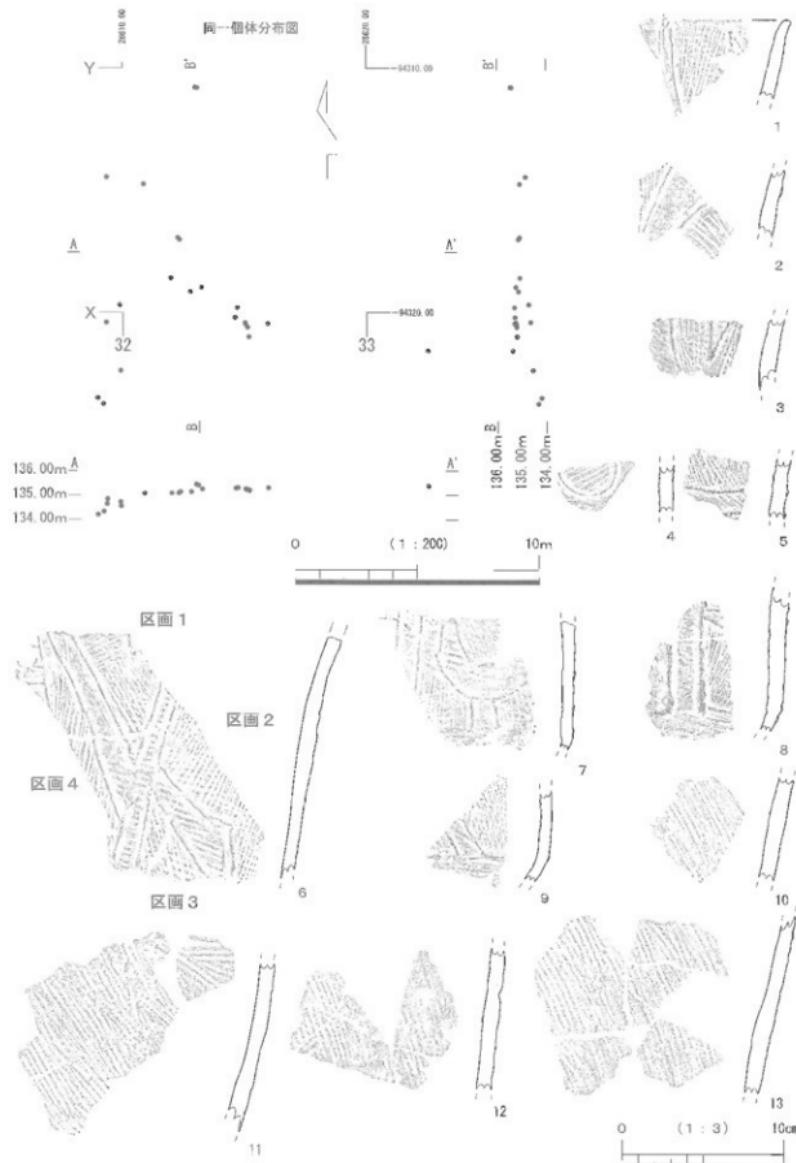
132.50m A  
0 (1 : 200) 5 m

132.50m B  
0 (1 : 200) 5 m

0 (1 : 200) 5 m



第104図 集石34出土縄文土器



第105図 11区出土縄文土器2

5は細い隆起帯が2本あり、その間が無文になっているが、条痕の一部が消えずに残っている。条線を入れた部分では条線が交差している。

6は胴部の大きな破片で、細い隆起線を2本引いて、無文部分と条線を入れる部分を区画している。無文部分は条痕を磨り消しているが、完全には消えずに幅の広い条痕が残っている部分がある。条線を入れた部分では、文様帶によって条線の入れ方に違いがある。図示したように、区画1～4に分けて記載する。区画1では、隆起帯に並行する条線と直交する条線を書き分けている。区画2では、斜め方向に条線を入れた後、それに直行する方向で、わずかに条線を入れているが、施文原体の当たりがかなり弱く、先に引いた条線の条間の高まりをわずかに削る程度になっている。区画3では、交差する条線が見られる。区画4では斜め方向の条線が並行せずに切り合っている状況が見える。

7は隆起帯で無文部分と文様帶を区画しているが、無文部分には、条痕が残っている部分がある。文様帶には細い条線を、間隔を広げて入れている。8は底部に向かって屈曲する部分の破片で、文様帶には細くまばらな条線が入っている。9は、無文帶に消えかかった条痕が残っており、文様帶には格子目状に交差する条線が見られる。

10～13は野島式土器の文様が入らない部分の破片で、条痕による器面調整が見られる。条痕の幅は揃っており、異条は見られない。条間の高まりに、施文原体を押し引いた時の粘土のはみ出しが見られないのは、条間にも施文原体が当たっているからであって、このことから考えると施文原体は貝殻か板を想定できる。他にも考えられる道具があるかもしれないが、簡単に作れるものか、身近で採集できるものであろう。

#### 打戦式上器

調査区の北側で集中して出土したもので、複数の個体が見られる（第106図）。

1は波状口縁の深鉢で、口縁頂部に貝殻腹縁文を入れ、口縁直下に、波状に貝殻腹縁文を3列入れている。拓本の左端だけ4列目の貝殻腹縁文が見える。これは3列目の貝殻腹縁文を入れる時、施文が一周してきた時に、施文がずれて、文様がつながらなかった部分と思われる。

2は独特の赤褐色の胎土で、表面は丁寧になんである。内面は条痕調整である。3は、口縁頂部と口縁直下に貝殻腹縁文を付けてあり、口縁直下の貝殻腹縁文は波状に2列見られる。内外面とも条痕による調整が見られる。

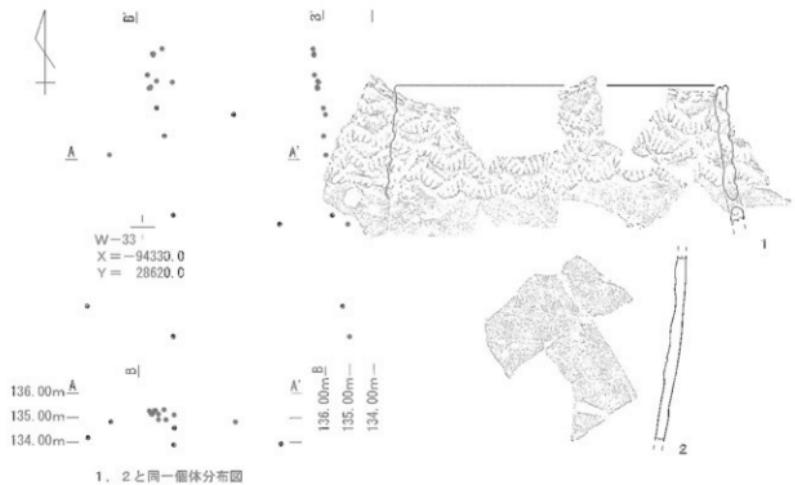
4は口縁頂部に貝殻腹縁文を入れ、胴部の文様は、口縁からやや下がったところに貝殻腹縁文を入れている。器面には条痕が残っている。5は綾杉状に貝殻腹縁文を入れる特徴がある。6は4、5と同一個体と思われる破片で、条痕が見られる。

#### 諸職b式土器

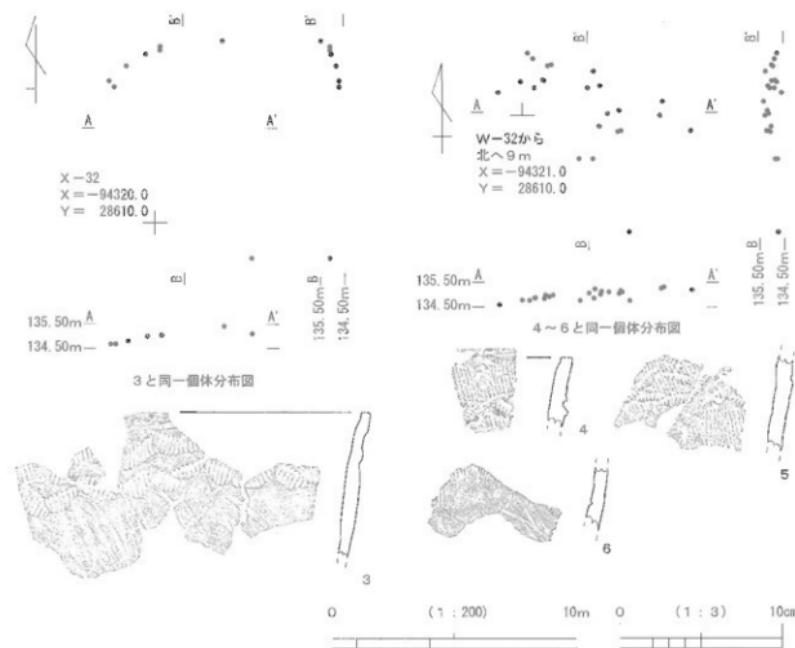
調査区の北側でまとまって出土した（第107図）。1～3は口縁に近い破片で、並行する竹管文が見られる。2と3には、竹管文の間にRLと思われる縄文が残っている。4は並行する竹管文の下に斜め方向の竹管文がある。また、地文のRL縄文がわずかに残っている部分がある。5は並行する竹管文を引いてあり、地文のRL縄文がわずかに残っている。

6は口縁頂部に「C」字形のスタンプ文を付けてある。口縁直下には、レンズ状に引かれた深い竹管文がある。7は口縁に近い破片で、6と同様にレンズ状に引かれた深い竹管文が見られる。また、地文の縄文がわずかに見えるが、風化のため、燃りの方向は不明である。

8は口縁に近い部分の破片で、円形に巡る深い竹管文がある。レンズ状文に類するものであろう。内の中には、地文を消すためにへら状の工具を擦り当てたような痕跡が見られる。9は胴部下半の破片と思われ、浅い並行する竹管文がある。10と11は並行する竹管文の間に地文の縄文がわずかに残っているが、風化のため、燃りの方向は不明である。

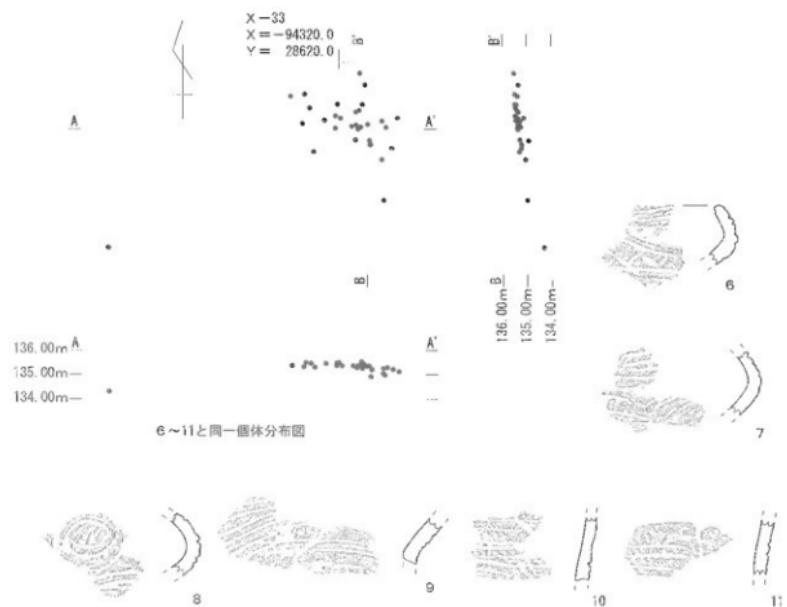
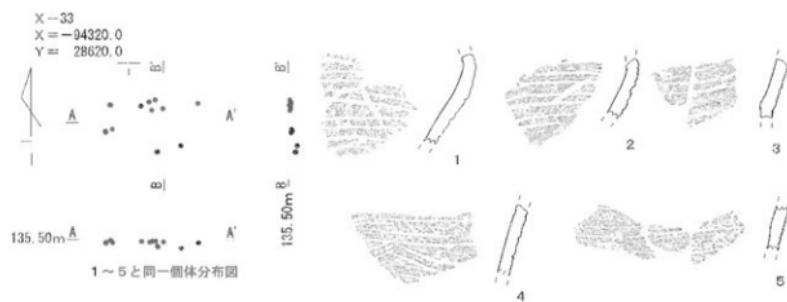


1, 2と同一個体分布図



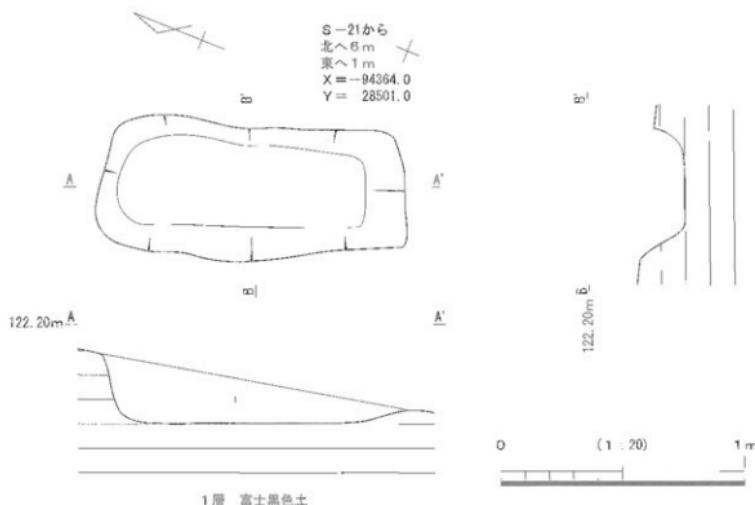
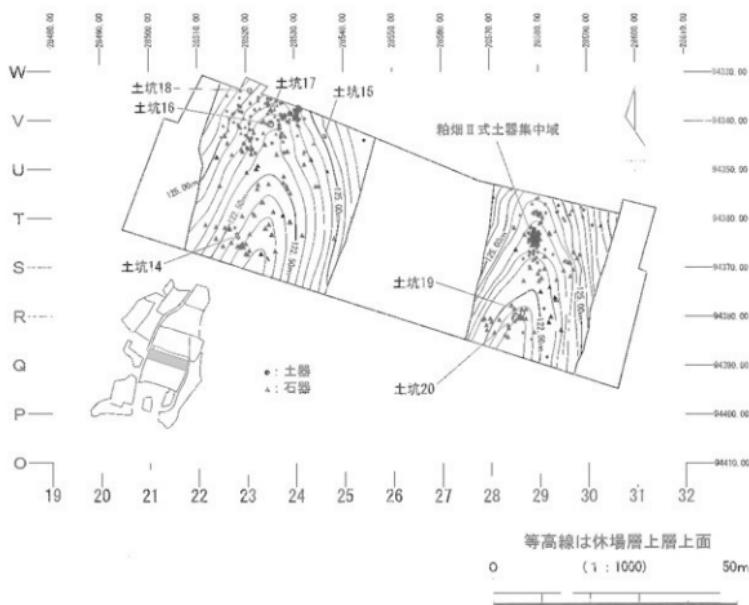
3と同一個体分布図

第106図 11区出土縄文土器3



0 (1 : 200) 5m      0 (1 : 3) 10cm

第107図 11区出土縄文土器4



第108図 14区縄文時代遺構・遺物分布図、土坑14実測図

## 第6節 14区の遺構と遺物

第108図上段に示すように、中央の丘陵は削平されていて遺跡は残っていないが、その両脇の谷に遺構と遺物が残っていた。ともに、隣接する調査区との間に遺構と遺物の空白域があり、この調査区内を遺構、遺物の分布域として設定できる。遺物は散在しており、粕畠II式土器の同一個体の破片が集中して出土した以外に遺物がまとまる範囲はない。

### (1) 土坑14

谷の中で検出した長方形の土坑である（第108図下段）。上部を大きく削平されている。遺物は出土していない。

### (2) 土坑15

谷に向かう斜面で検出した（第109図左上）。上部をかなり削平されており、残っている部分は少なかった。遺物は出土していない。

### (3) 土坑16

谷に向かう斜面で検出した（第109図右上）。これも上部を削平されている。遺物は出土していない。

### (4) 土坑17

谷に向かう斜面で検出した不定形の土坑である（第109図左下）。検出面での形状も不定形だが、底面の形も不定形である。壁の一部はオーバーハングしている部分もある。遺物は出土していない。

### (5) 土坑18

谷に向かう斜面で検出した（第109図右下）。上部を大きく削平されており、検出できた部分は底面に近い部分だけである。遺物は出土していない。

### (6) 土坑19

谷の中で検出した長方形の土坑である（第110図）。削平を受けており、本来の規模は不明である。遺物は出土していない。

### (7) 土坑20

谷の中で検出した不定形の土坑である（第111図）。検出した形状も不定形だが、底の形も不定形である。内部は袋状になっている特徴がある。遺物は出土していない。

### (8) 出土土器

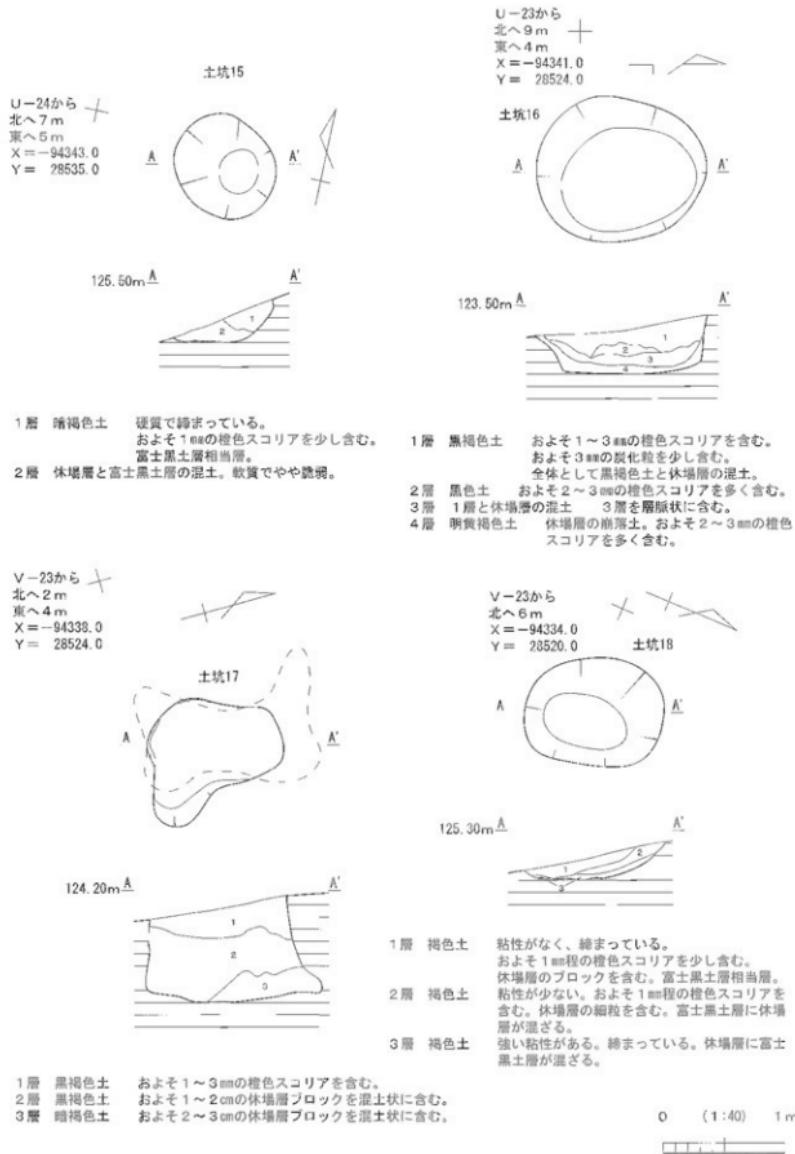
#### 粕畠II式

同一個体の破片がまとめて出土し、ほぼ全点が接合した（第112図上段）。口縁に皿状の突起が付いている。そして、口縁頂部と皿状突起に角のある棒状工具を使って連続した押圧を加えている。口縁直下には、爪形文がある。これは角のある工具を押しつけて、土器の表面をすくいあげるようにして施文している。内面は指押さえの後、条痕による調整が見られる。

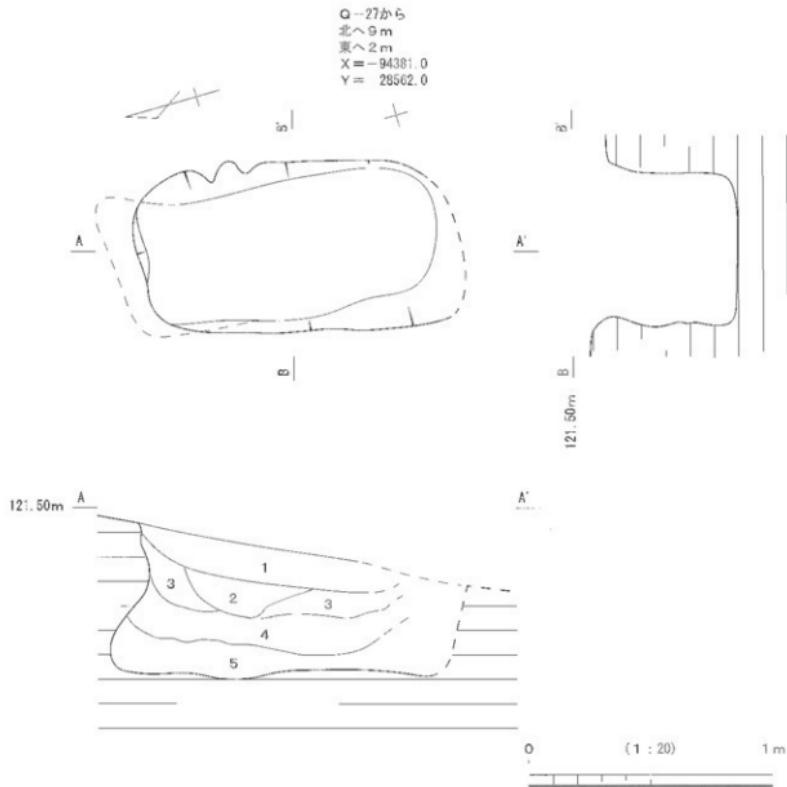
#### 五領ヶ台II式土器

U23グリッド付近で破片が散在して出土した（第112図下段）。2は口縁部の破片で、口縁外面に粘土を貼り付けて、口縁部を肥大させている。口縁頂部に、粘土を貼り付けた時のつなぎ目が観察できる。そして、肥大させた口縁部に、筋の細かいRLの縄文を付けている。その下には、太い工具か指による凹線状の沈線が見られ、その下に棒状工具による細い沈線が引かれている。

3は口縁部の破片で、口縁外面に指か太い工具による押圧が見られる。また、RLの縄文も観察できる。4は、細い粘土紐を貼り付けた隆起帶の上下に沈線を引いてある。5も細い粘土紐を貼り付けた隆起帶の上に2本、下に1本の沈線を引いてある。また、地文のRL縄文も見られる。6は2本の並行する沈線とRLの縄文がある。7は3本の沈線を湾曲するように引いてある。

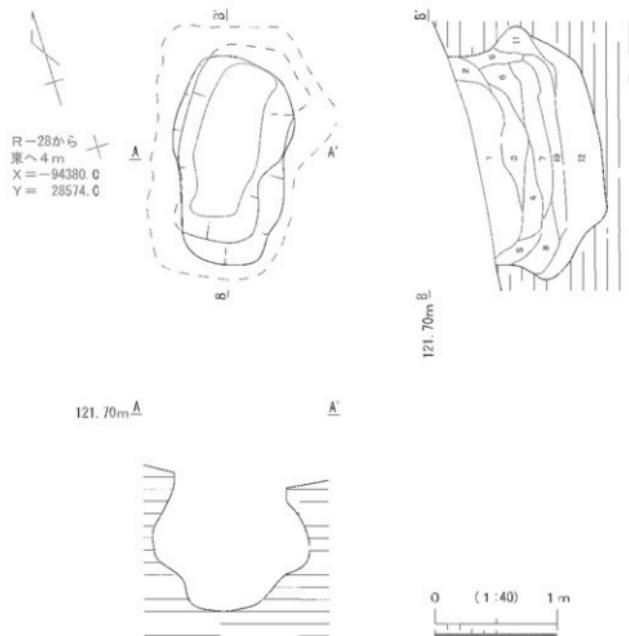


第109図 土坑15~18実測図



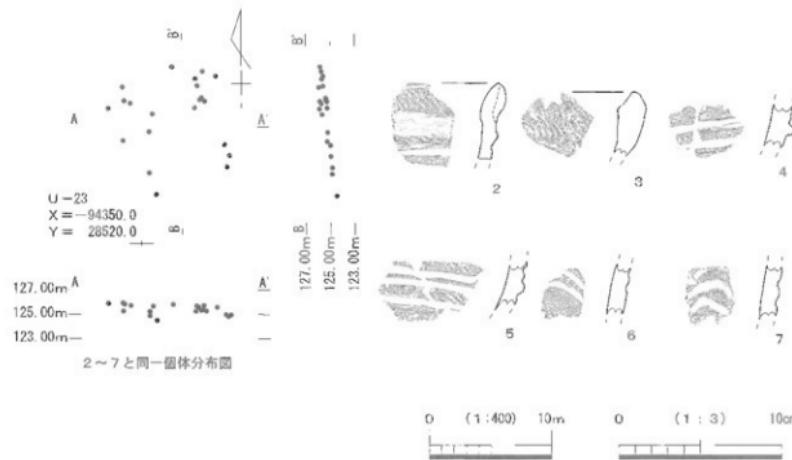
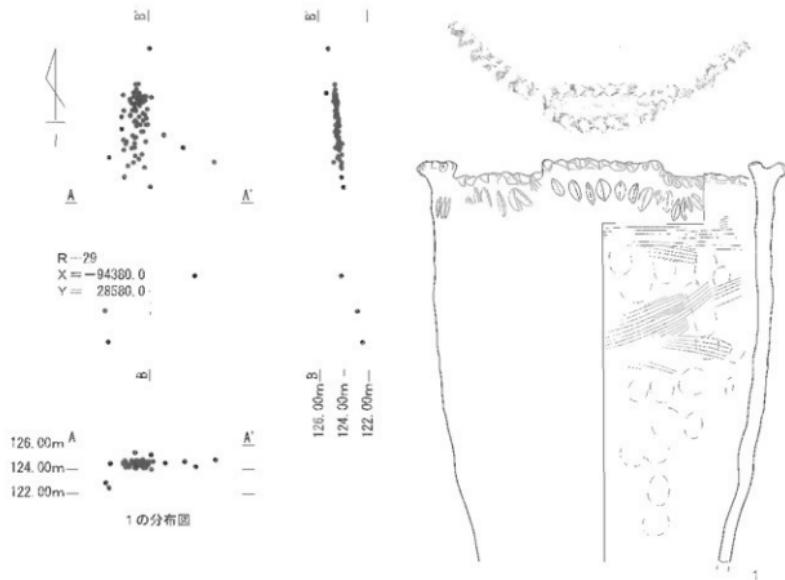
- 1層 暗褐色土 富士黒土層と同色。非常に粗く、縛まっていない。粘性がわざかにある。およそ2~3mmの橙色スコリアを少し含む。およそ5mmの炭化物を少し含む。およそ5cm大の同質の明褐色土がブロック状に入る。
- 2層 暗褐色土 富士黒土層と同色。粗く、縛まっていない。強い粘性がある。軟質。およそ2~3mmの橙色スコリアを少し含む。およそ5mmの炭化物を少し含む。
- 3層 暗褐色土 富士黒土層と同色。粗く、縛まっていない。粘性がわざかにある。およそ2~3mmの橙色スコリアを少し含む。およそ5mmの炭化物を少し含む。1層と同大、同質の明褐色土がブロック状に入る。
- 4層 暗褐色土 富士黒土層と同色。やや粗く、よく縛っている。粘性がわざかにある。およそ2~3mmの橙色スコリア、およそ5mmの炭化物をわざかに含む。
- 5層 暗褐色土 富士黒土層と同色。細かく、よく縛っている。粘性がある。やや軟質。およそ5mmの炭化物を少し含む。

第110図 土坑19実測図

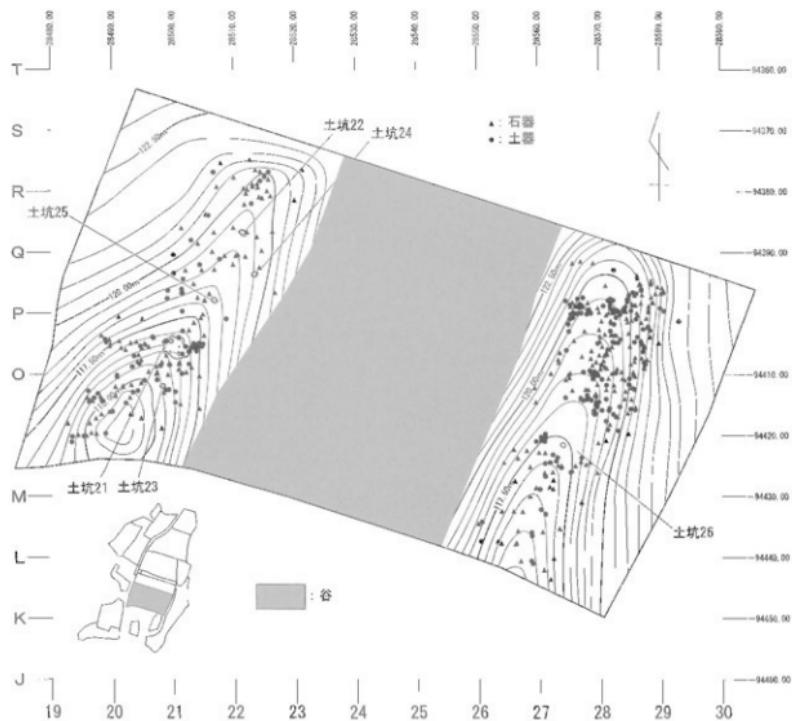


1層	暗褐色土	非常に粗く、緋まっていない。2~3mmの橙色スコリア、5mm程度の炭化物を含む。
2層	暗褐色土	やや粗く、緋まっていない。2~3mmの橙色スコリアを含む。
3層	暗褐色土	1層よりやや色が薄い。非常に粗く、緋まっていない。2~3mmの橙色スコリアをわずかに含む。
4層	褐色土	粗く、緋まていない。2~3mmの橙色スコリアを含む。
5層	褐色土	4層より色が濃い。2~3mmの橙色スコリアを含む。
6層	褐色土	非常に粗く、緋まっていない。2~3mmの橙色スコリアを含む。
7層	褐色土	やや粗く、緋まっている。2~3mmの橙色スコリアを含む。
8層	暗褐色土	やや粗く、緋まていない。2~3mmの橙色スコリアを含む。
9層	褐色土と漸移層の混合層	
10層	褐色土	細かく、緋まっている。2~3mmの橙色スコリアを含む。
11層	淡褐色土	やや粗く、緋まっている。2~3mmの橙色スコリアを含む。
12層	淡褐色土	細かく、緋まっている。2~3mmの橙色スコリアを含む。

第111図 土坑20実測図

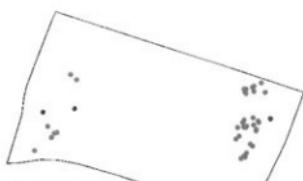


第112図 14区出土縄文土器



等高線は休場層上層上面

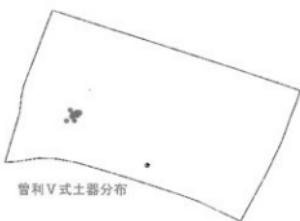
0 (1 : 800) 50m



横円文土器分布



大歳山式土器分布



曾利V式土器分布

0 (1 : 2000) 100m

第113図 4区縄文時代遺構、遺物分布図

## 第7節 4区の遺構と遺物

第113図に示すように、中央の丘陵は削平を受けて遺跡は残っていないが、その両脇の谷に遺構と遺物が分布している。北側に隣接する14区と南側に隣接する1区との間に、遺構と遺物の空白域があるため、ここを遺構、遺物の分布域として設定する。遺物は散在しており、特に集中する範囲はない。

出土した土器は、押型文土器が最も多く、大歳山式、曾利V式がこれに次ぐ。

### (1) 土坑21

谷の中で検出した土坑で、多量の遺物が出土した(第114図)。形は不整形であるが、内部から多量の石器が出土したことから、性格を特定しやすい土坑である。時期は、五領ヶ台II式土器が出土していることから、中期初頭と考えられる。底面に浅い土坑があり、ここには焼土が入っている。

出土した遺物は、石器678点、土器19点である。石器は678点中675点が黒曜石で、石鎌が8点と尖頭器が1点含まれている。石鎌はすべて未完成品である。あとは剥片81点と碎片が576点出土している。剥片と碎片を観察すると、薄く、縦断面が湾曲するものが多いことから、押圧剥離によって、石器の表面を薄く剥がす平坦剥離が行われていたことがわかる。このことは石鎌と尖頭器の出土と整合することで、石鎌と尖頭器を作った跡と考えて良い。小さな石核が1点出土していることから、ここで剥片を剥離して、石鎌や尖頭器の材料にしていたと思われる。遺物は土坑内で3箇所に分かれて集中している。また、底面に焼けた部分があることから、石鎌製作に際して黒曜石に加熱処理をしたことを示唆している。さらに、土坑内から台行のような礫も出土している。

このような状況から、この土坑は、石核を持ち込んで剥片を剥離し、その剥片を加工して石鎌や尖頭器を作った場所で、その際、黒曜石を加熱処理した可能性が考えられる。

この土坑から出土した遺物は次のとおりである。第114図-1は口縁部の破片で、LRの縄文を付けた後、口縁頂部と内部の口縁直下に「Σ」形の結節竹管文を付けている。また、外面の口縁直下には「Σ」形の結節浮縁文が見られる。灰白色の胎土を使っていることからも大歳山式である。

2は口縁部付近の破片で、断面の屈曲が著しい。口縁頂部はなでて面取りをした後でLRの縄文を施している。内側の口縁直下にもLRの縄文が見られる。外面には、LRの縄文を施した上に結節竹管文を貼っている。3も2と同一個体と考えられる。底部に近い部分で、指による大きな押圧が見られる。LRの縄文を地文として、横方向の結節竹管文を貼り、そこから縦方向に結節竹管文を垂下させている。2、3ともに十三菩提式である。

4と5は五領ヶ台I式の同一個体と思われ、5は底に近い部分である。ともに縦方向に結節縄文が見られる。縄文の擦りはRLである。6は口縁部の破片で、端部を内側に折り返してある。口縁直下には節の細かいLRの縄文が見られ、その下は竹管文で区画した中を条線文で充填してある。7は、竹管文で横方向に区画した中に右下がりの条線文を充填し、その後、左下がりの条線文を不規則に入れて格子目状にしている。横方向の区画の下にはジグザグの竹管文が見られる。6、7も五領ヶ台I式である。

8～11は黒曜石製の石鎌である。8は先端部を残して折れている。9は未完成品で先端が形成されていない。10も未完成品で先端が折れている。11は尖頭器の基部で、先端は見つかっていない。

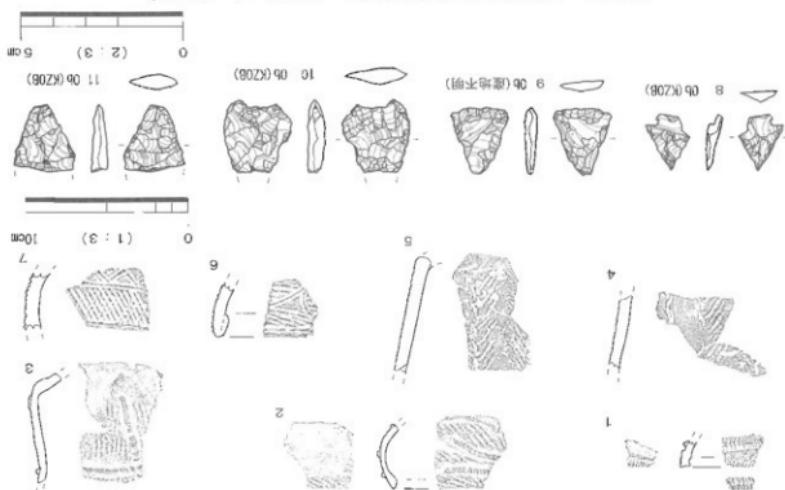
### (2) 土坑22

谷の中で検出した不定形の土坑である(第115図上段)。遺物は出土していない。上部を削平された落とし穴のようである。

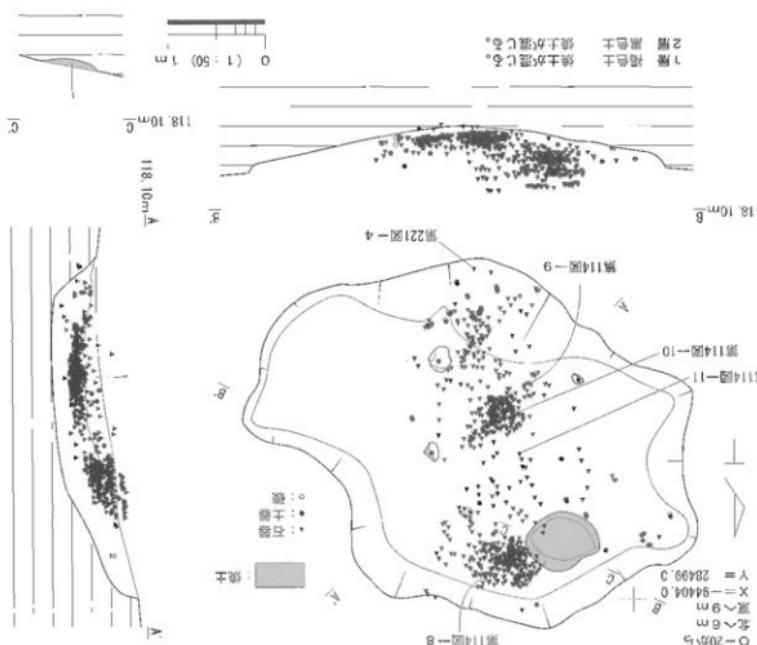
### (3) 土坑23

谷の中で検出した円形の土坑である(第115図下段)。これも上部を削平された落とし穴のようである。土坑内から採集した炭化物から、測定値で $4,490 \pm 40$ yrB.P.の年代が得られている。

第114図 土坑21実測図と出土遺物 (1~7 : 1/3、8~11 : 2/3)



1層 黄褐色土 總土厚25cm。



第114図-9

第114図-8

118.10m-6

第114図-10

第114図-11

X=-3440.0  
Y=28490.0  
Z=6m

第114図-8

第114図-9

第114図-10

第114図-11

#### (4) 土坑24

谷の中で検出した深い土坑である（第116図）。上面は円形であるが、底面は方形になる特徴がある。深さから考えて落とし穴と思われる。壁の一部にオーバーハングする部分があるが、これは壁が崩落した痕跡であろう。遺物は出土していない。

#### (5) 土坑25

谷の中で検出した深い土坑である（第117図上段）。埋土のうち、4層と7層は壁の崩落である。これも深さから考えて落とし穴であろう。遺物は出土していない。

#### (6) 土坑26

埋土中に礫を含む土坑である（第117図下段）。集石と言う程には礫を含んでいない。12点の礫が出土している。完形の礫は11点あり、すべて赤化している。残りの1点の礫は割れ面が赤化している。礫以外に遺物は出土していない。

#### (7) 出土土器

##### 沈線文土器

P28グリッド付近で、同一個体と思われる破片が散在して出土した（第118図）。第118図-1と2は、横方向の沈線と縦方向の沈線で構成されている。田戸下層式に似ているが、田戸下層式よりも沈線の間隔が広いことと、斜め方向の沈線が見られない点が異なる。縦方向の沈線は、角のある棒状工具を使っており、沈線の中に微細な条線が見えるのに対して、横方向の沈線は、丸みのある棒状工具を使っており、沈線の中に微細な条線は見えない。このことから、縦方向の沈線と横方向の沈線では、施文原体が異なっている可能性が高い。3も1、2と同一個体の土器で、横方向の沈線が見られる。

##### 条痕文土器

同一個体の破片がまとまって出土し、ほとんどが接合した（第119図）。淡い黄褐色の胎土に特徴がある。外面に条痕が見られるが、規則的なパターンを示す条痕ではなく、条間に粘土の盛り上がりが見られることから、少なくとも貝殻ではないと思われる。また、一部には5mm程のへら状工具を使ってなでている部分もある。内面は、このへら状工具を使った調整である。器形から見て石山式に並行する条痕文土器と思われる。

##### 曾利V式土器

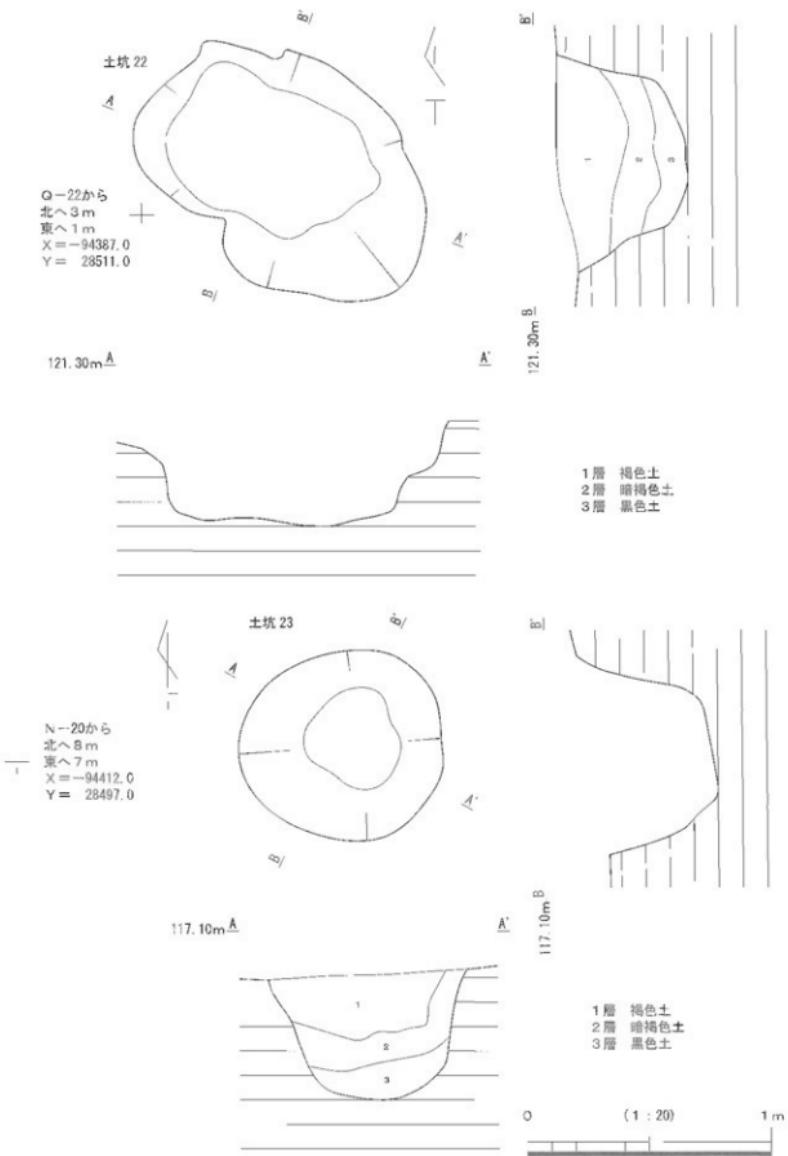
独特の黄褐色の胎土で、同一個体と思われる破片がまとまって出土した（第120図）。全体的に厚みのある土器片である。

1は2本の沈線で区画した中に斜行する沈線が見える。おそらく綾杉状の沈線文であろう。2も同様で、2本の沈線と斜行する沈線が見られる。3は小さな破片で沈線が確認できるだけである。4は、綾杉状の沈線文が見えるが、一部に交差する沈線もある。5は2本の沈線の間に斜行する沈線を「ハ」の字状に引いてある。6は縦方向の沈線がある。7と8は、沈線で区画した中に「ハ」の字状の沈線を引いてある。9は2本の沈線と斜行する沈線の一部が確認できる。

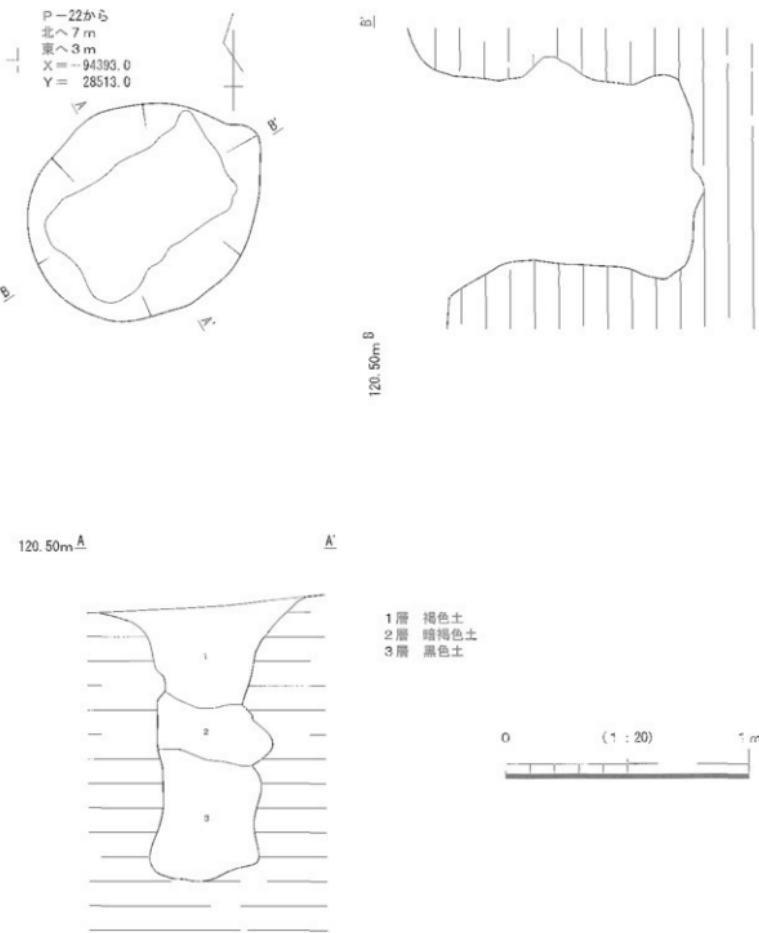
##### 堀之内I式土器

同一個体と思われる破片がまとめて出土した（第121図）。濃い赤褐色の胎土である。1は脇部の破片で、並行する3本の沈線で逆三角形の文様を作り、その後で逆三角形で区画した中にLRの縄文を入れている。これは、縄文が沈線を切っていることから、縄文の施文が後であることがわかる。

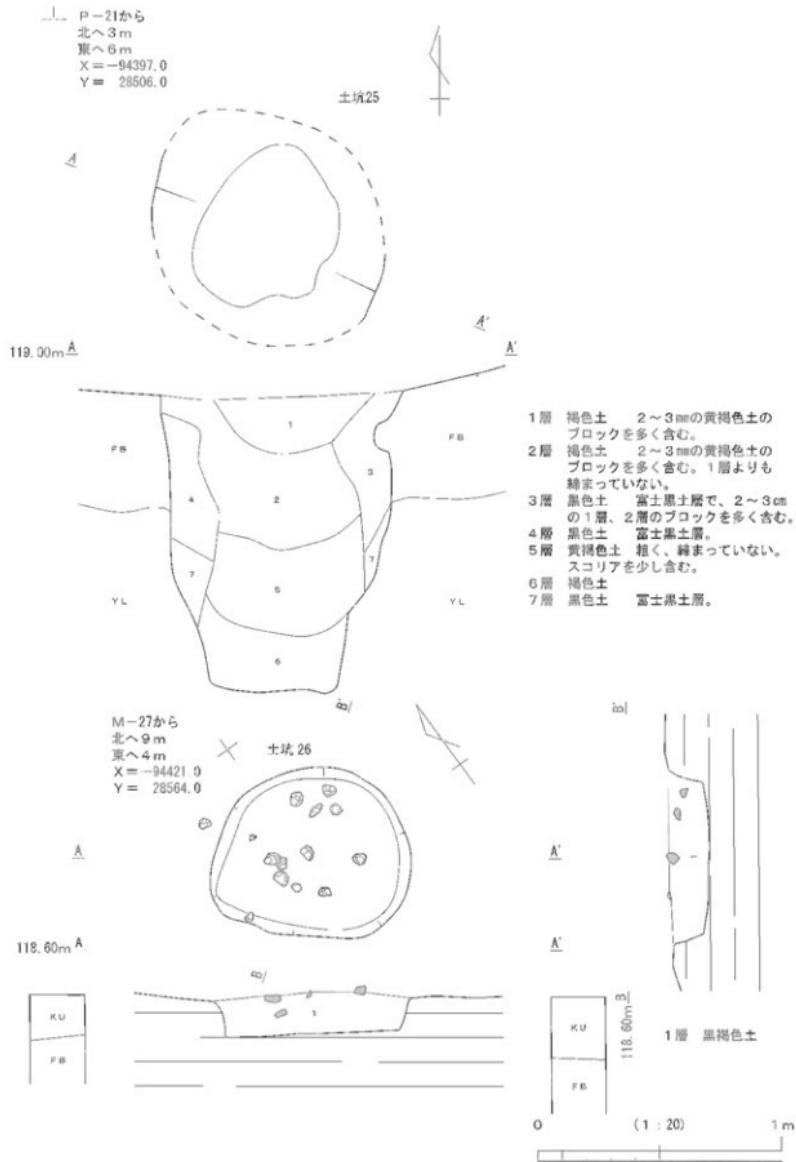
2は脇部から底部にかけて残っている。文様が見られるのは脇部の上半である。脇部の張り出した部分に横方向の沈線を入れ、その後、その下に3本の沈線で逆三角形の区画を作っている。そして、逆三角形の区画内にLRの縄文を付けている。脇部下半は丁寧になでてある。



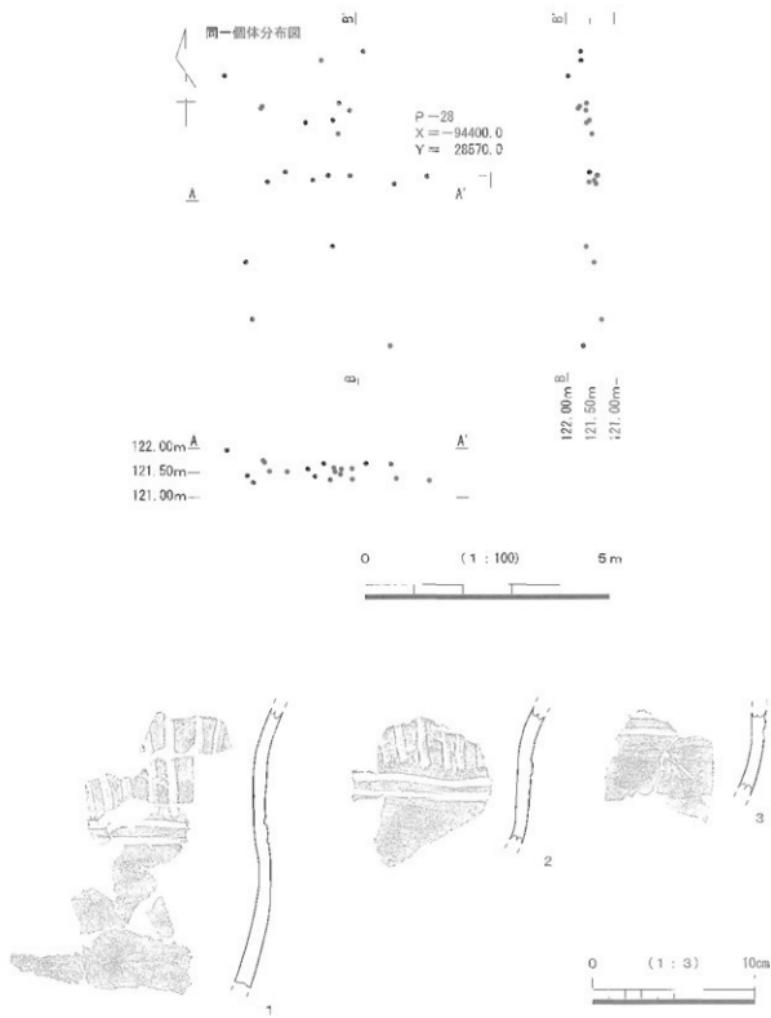
第115図 土坑22、23実測図



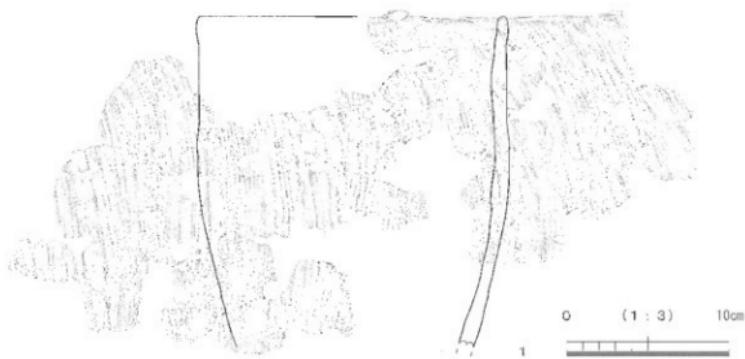
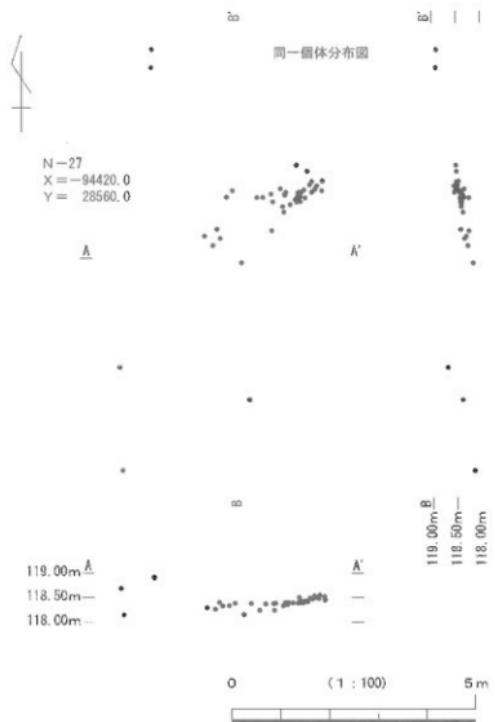
第116図 土坑24実測図



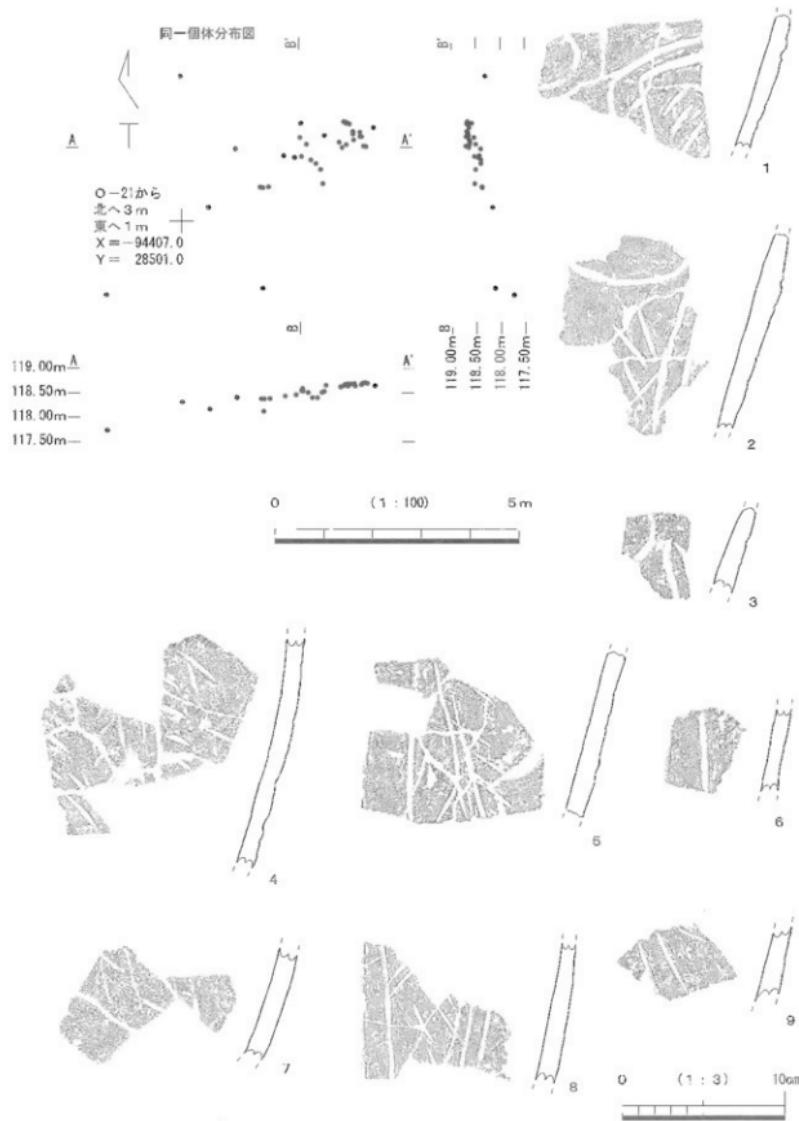
第117図 土坑25、26実測図



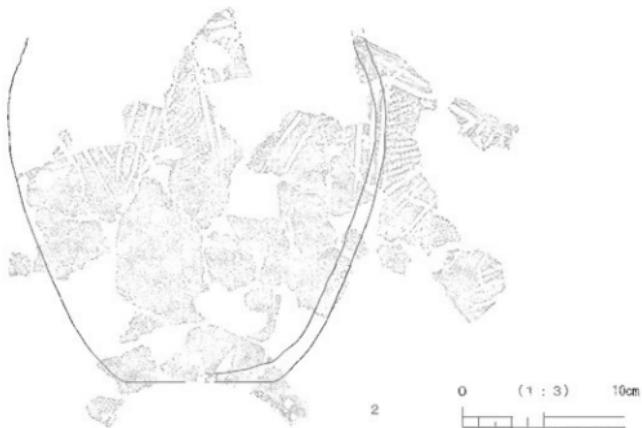
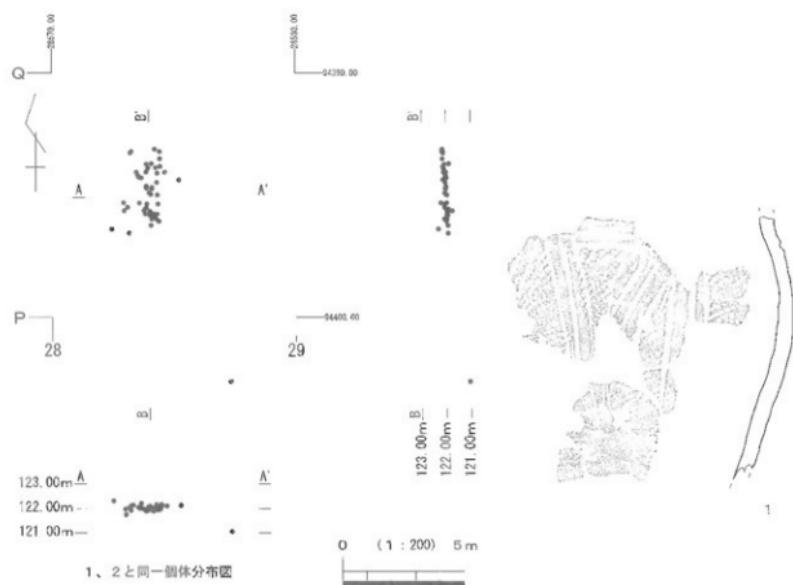
第118図 4区出土縄文土器 1



第119図 4区出土繩文土器2



第120図 4区出土縄文土器3



第121図 4区出土縄文土器4

## 第8節 5区の遺構と遺物

丘陵に当たっている（第122図）。東に隣接する4区との間に遺構、遺物の空白域があること、調査区の西側と南北には遺跡が残っていないことから、独立した分布域に設定した。遺物と遺構の分布は、北側と南側に分かれ、北側に早期の条痕文土器、南側に梢円文土器が集まる傾向がある。

### (1) 焼土土坑6

炭化物を含んだ焼土が詰まった土坑である（第123図上段）。周辺で早期の条痕文土器が出土している。

### (2) 焼土土坑7

赤褐色の焼土が詰まった土坑で、形は不定形である（第123図下段）。遺物は出土していない。

### (3) 焼土土坑8

焼土の多い橙褐色の土が詰まった土坑である（第124図上段）。黒曜石の剥片が1点出土している。

### (4) 焼土土坑9

焼土と炭化物を多く含んだ赤褐色土が堆積した土坑で、底部に焼土の塊がある（第124図下段）。

### (5) 焼土土坑10

半分ほどを削平で尖われている。底面には焼土が堆積し、その上に焼土と炭化物を多く含んだ褐色土が堆積している（第125図上段）。遺物は出土していない。

### (6) 焼土土坑11

半分近くを削平で尖っている（第125図下段）。底面に焼土が堆積し、その上に焼土と炭化物を多く含んだ土が堆積している。

### (7) 集石35

土坑を伴う集石で、43点の礫が出土している（第126図上段）。土坑の検出は難しく、礫がまとまって出土し始めてから少し掘り下げたところでようやく土坑を検出できた。完形の礫は16点出土しており、11点は赤化している。割れ面が赤化している礫は15点あり、割れ面が赤化していない礫は2点ある。

### (8) 集石36

富士黒土層の上面直上で検出した集石である（第126図下段）。15点の礫からなる。完形の礫は9点あり、8点は赤化している。割れ面が赤化した礫は1点で、割れ面が赤化していない礫は2点ある。

### (9) 集石37

富士黒土層の上面で検出した土坑を伴う集石である（第127図）。礫のほとんどは土坑の検出面付近から出土した。107点の礫からなり、完形の礫は8点で、うち7点が赤化している。割れ面が赤化している礫は71点あり、割れ面が赤化していない礫は19点ある。5mほど離れた集石38の礫と接合する。

### (10) 集石38

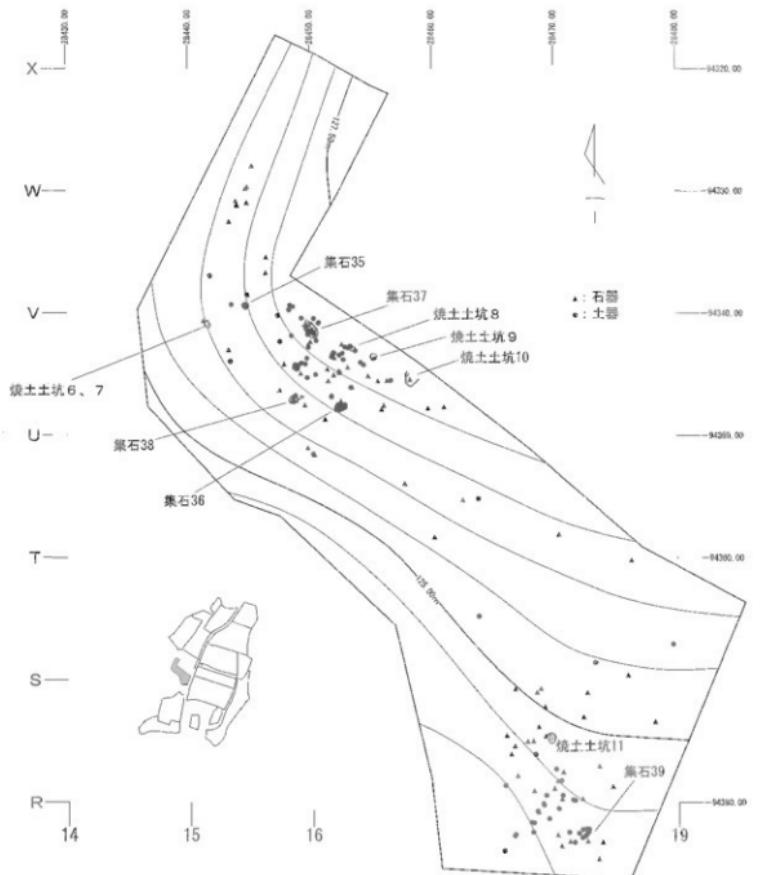
富士黒土層で検出した土坑を伴う集石である（第128図）。土坑の周辺にも礫が分布している。51点の礫が出土している。完形の礫は5点あり、うち3点が赤化している。割れ面が赤化した礫は25点あり、割れ面が赤化していない礫は15点ある。集石37と5mの距離で接合する以外に、集石24とは183mの距離を隔てて接合する礫がある。

### (11) 集石39

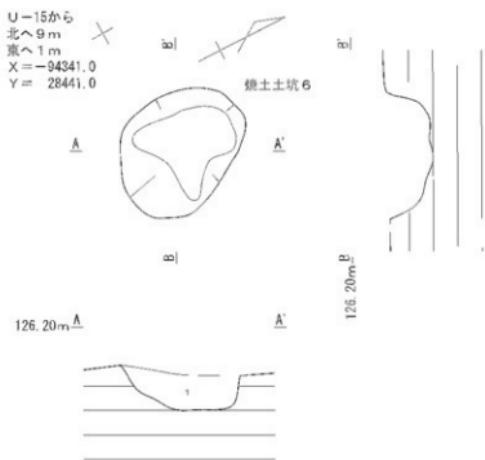
栗色土層中から10点の礫が散在して出土したものである（第129図上段）。完形の礫は7点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫と割れ面が赤化していない礫が1点ずつある。

### (12) 出土土器

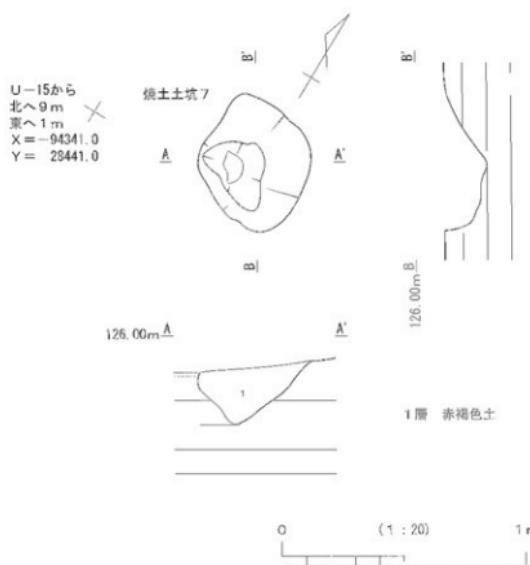
早期の条痕文土器が出土している（第129図下段）。内外面とも幅の広い条痕が付いている。粘土のつなぎ目で割れており、鋭い縁のようになっている。



第122図 5区縄文時代遺構、遺物分布図



1層 赤褐色土 焼土で、炭化物を含む。



第123図 焼土土坑6、7実測図

U-15から  
北へ8m  
東へ3m  
 $X = -94342.0$   
 $Y = 28453.0$

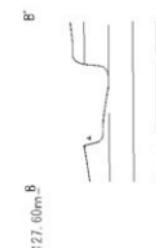
焼土坑8

\*: 石器



127.60m A

A'



1層 橙褐色土 焼土を含む。

U-16から  
北へ7m  
東へ5m  
 $X = -94343.0$   
 $Y = 28455.0$

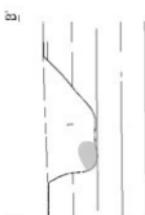
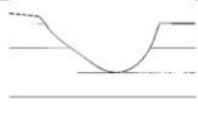
焼土坑9

: 焼土塊

soil

127.50m A

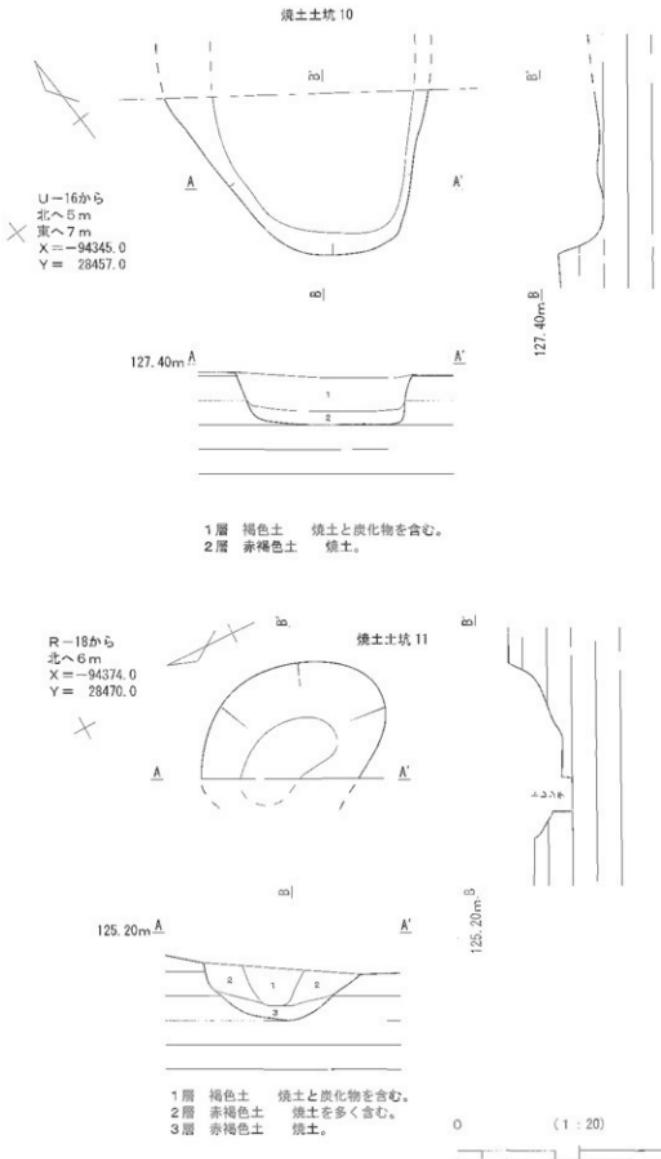
A'



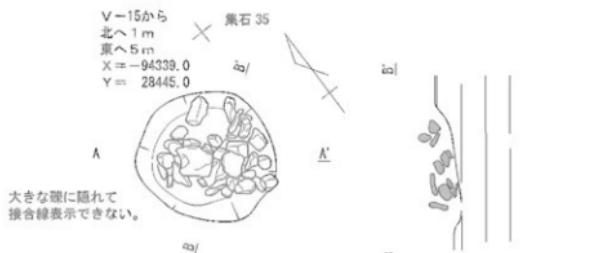
1層 赤褐色土 焼土と炭化物を含む。

0 (1 : 20) 1m

第124図 焼土坑8、9実測図



第125図 燃土土坑10、11実測図

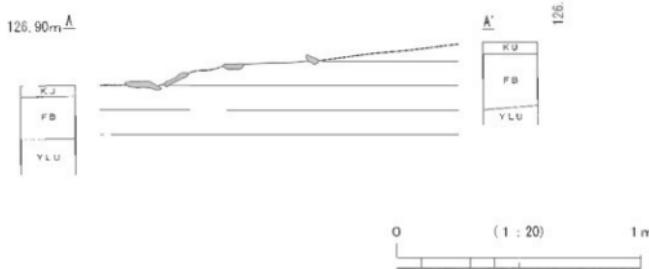
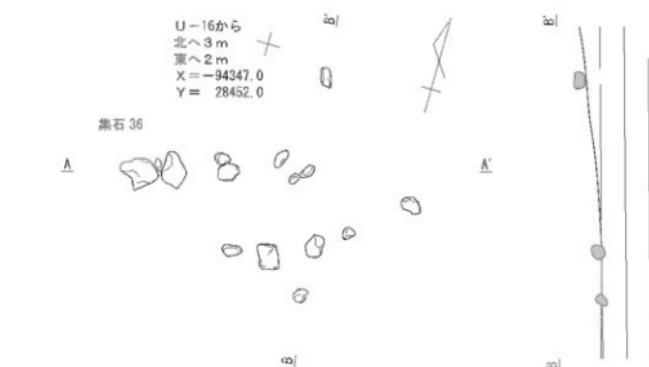


1層 黒色土層の流れ込み  
富士巣土層、炭化物が混じる。

126.80m B

$\text{a/a}'$

B'



第126図 集石35、36実測図

V = 16  
X = -94340.0  
Y = 28450.0

X

zo

A

A'

集石38の1点と接合

o

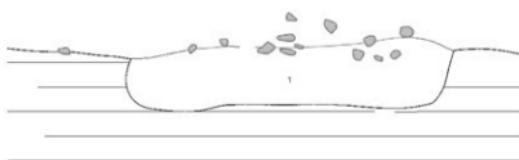
o

127.30m A

A'

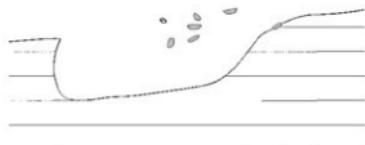
KU  
FB

KU  
FB



127.30m B

B'



V = 16  
X = -94340.0  
Y = 28450.0



遠距離接合図

○: 磨

1層 黒褐色土

0 (1 : 20)

1 m

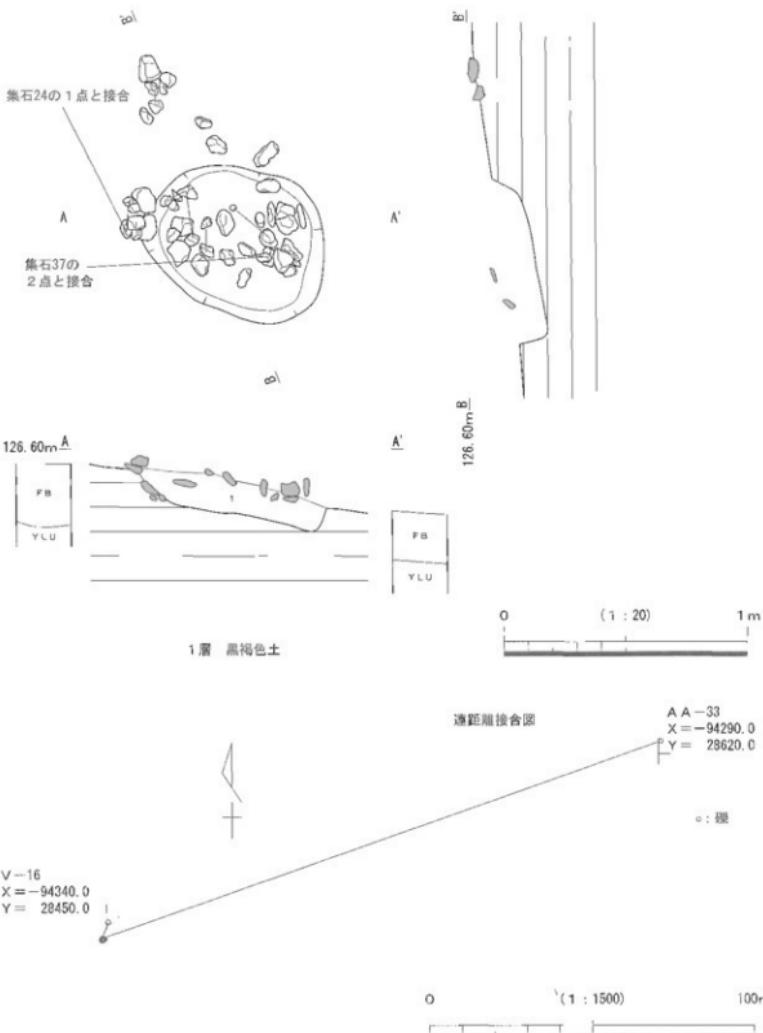


0 (1 : 200) 5m

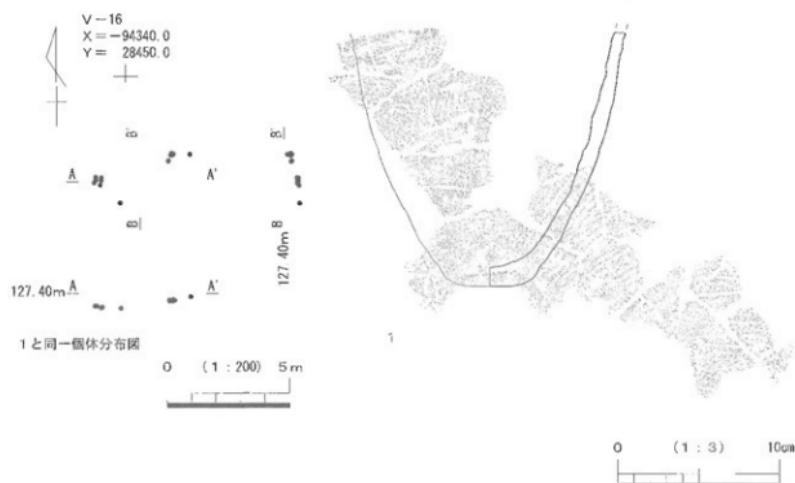
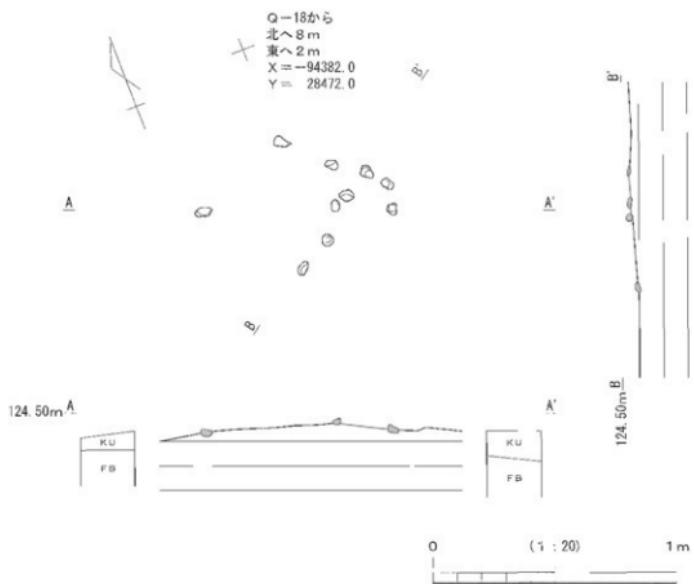


第127図 集石37実測図

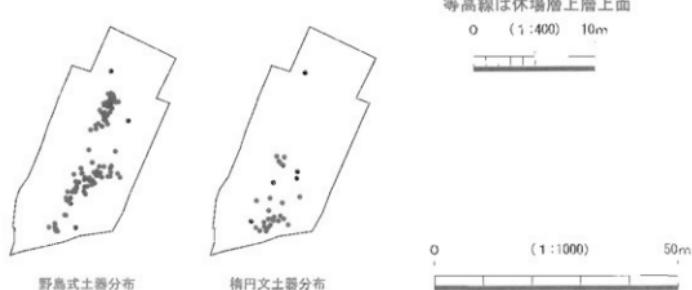
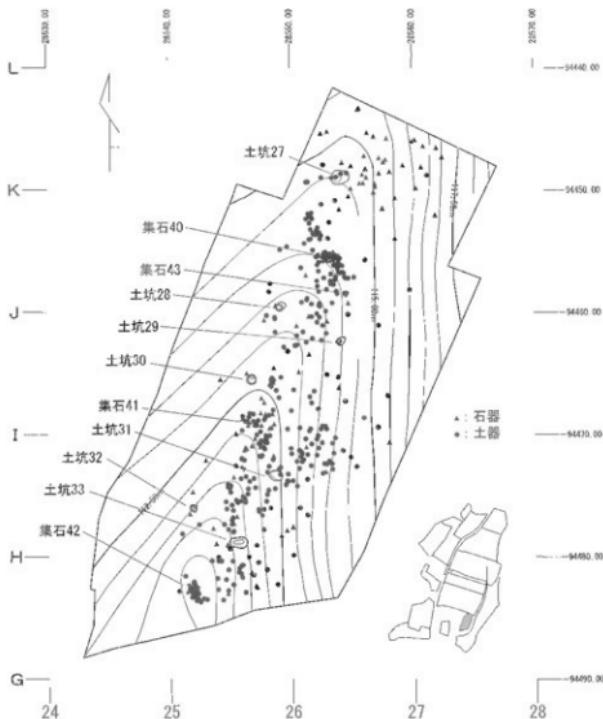
U-16から  
北へ3m  
X = -94347.0  
Y = 28450.0



第128図 集石38実測図



第129図 集石39寒測図、5区出土縄文土器



第130図 1区縄文時代遺構、遺物分布図

## 第9節 1区の遺構と遺物

1区は浅い谷の中に当たる（第130図）。そして、谷底に並ぶように遺構と遺物が分布しているが、集石以外に遺物が集中する状況は見られない。出土した土器は、野島式土器が最も多く、楕円文土器、早期の条痕文土器がこれに次ぐ。

### (1) 集石40

栗色土層中で検出した遺構で、111点の礫が密集した状態で出土した（第131図）。礫の出土レベルに差がないため、礫を敷き詰めたような状況である。完形の礫は8点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は69点あり、割れ面が赤化していない礫は30点ある。

早期後半の条痕文土器の破片が1点出土している（第131図-1）。そして、これと同一個体の破片が遺構外で出土しており、南北9m×東西4mの範囲に散在している。

1は胴部の破片で、器壁は厚く、幅の広い条痕が見られる。条痕は、貝殻条痕に見られるような規則的なパターンのあるものではない。板のようなもので、擦ったような印象を受ける。2は底部に近い破片で、1と同様に幅の広い条痕が見られる。

### (2) 集石41

栗色土層中で検出したもので、11点礫が集まった小規模な集石である（第132図上段）。完形礫は7点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は2点あり、割れ面が赤化していない礫も2点ある。

### (3) 集石42

栗色土層中で検出した、42点の礫で構成される集石である（第132図下段）。完形の礫は20点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は11点あり、割れ面が赤化していない礫も11点ある。第132図-1の野島式土器が共伴している。

### (4) 集石43

栗色土層で検出した集石で、浅い土坑を伴う（第133図上段）。19点の礫が出土しており、完形礫は2点あり、いずれも赤化している。割れ面が赤化した礫は13点、割れ面が赤化していない礫が3点ある。

### (5) 土坑27

栗色土層中で検出した不整形の土坑である（第133図下段）。遺物は出土していない。

### (6) 土坑28

栗色土層中で検出した楕円形の土坑で、埋土にも栗色土層が見られる（第134図上段）。

### (7) 土坑29

栗色土層中で検出した楕円形の土坑で、埋土にも栗色土層が見られる（第134図下段）。

### (8) 土坑30

栗色土層中で検出した土坑だが、埋土には栗色土層は見られない（第135図上段）。

### (9) 土坑31

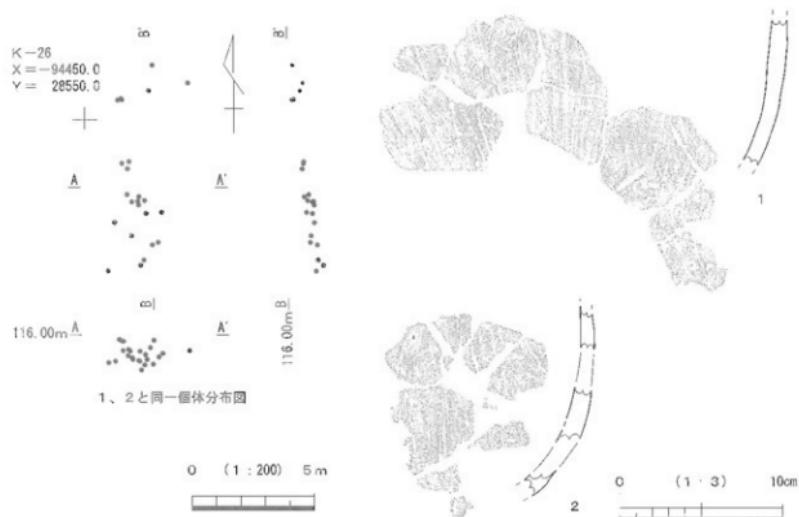
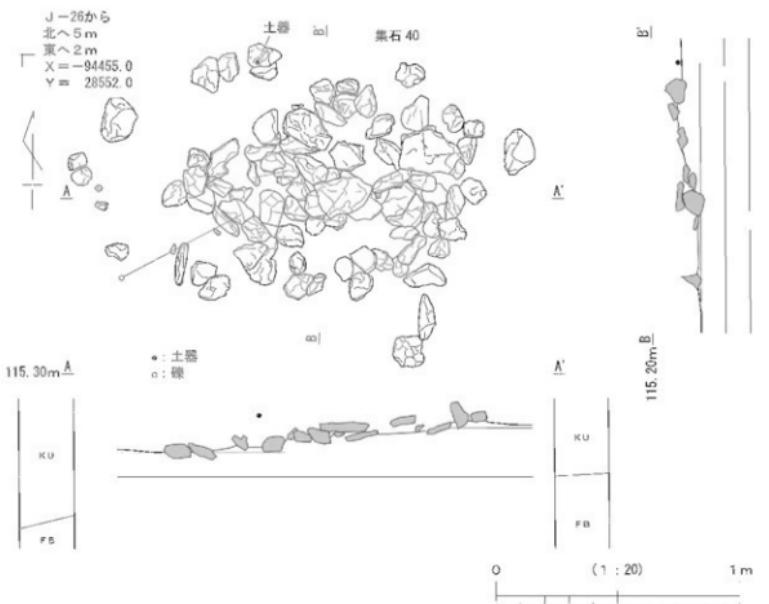
栗色土層中で検出した土坑で、埋土にも栗色土層が見られる（第135図下段）。野島式土器の小片が3点、底面に近い場所で出土している。土坑埋没の初期の段階で流れ込んだと思われる。

### (10) 土坑32

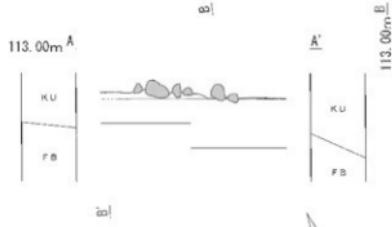
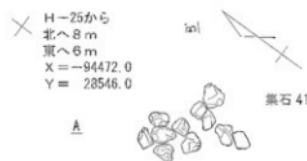
深さは1m弱の不定形の土坑である（第136図上段）。深さから考えて落とし穴のようである。遺物は出土していない。

### (11) 土坑33

長径140cm、短径90cmの楕円形の土坑である（第136図下段）。遺物は出土していない。埋土は自然堆積で、黒褐色土と栗色土の混層が主体である。

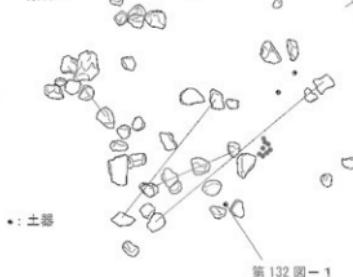


第131図 集石40実測図と出土縄文土器



G-25から  
 北へ8m  
 東へ1m  
 X = -94482.0  
 Y = 28541.0

集石 42



第132図-1

112.00m A



112.00m E

A'

112.00m E

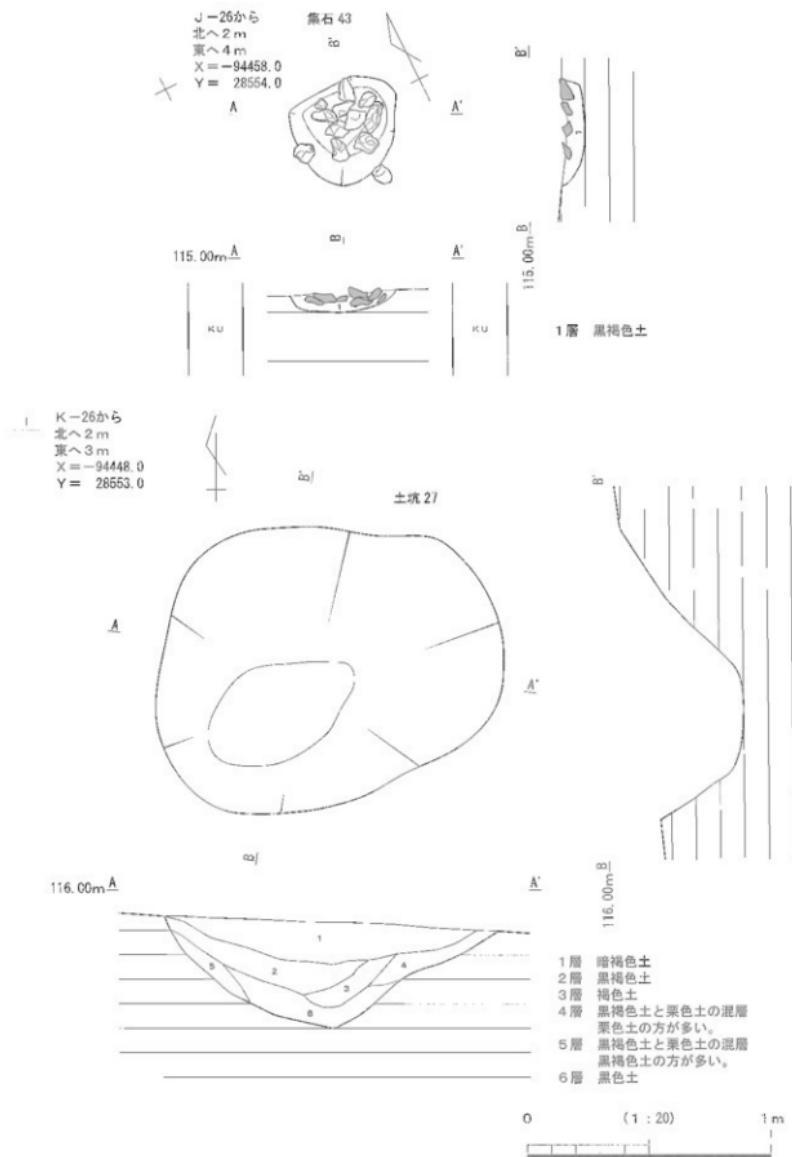
(1 : 20)

1m

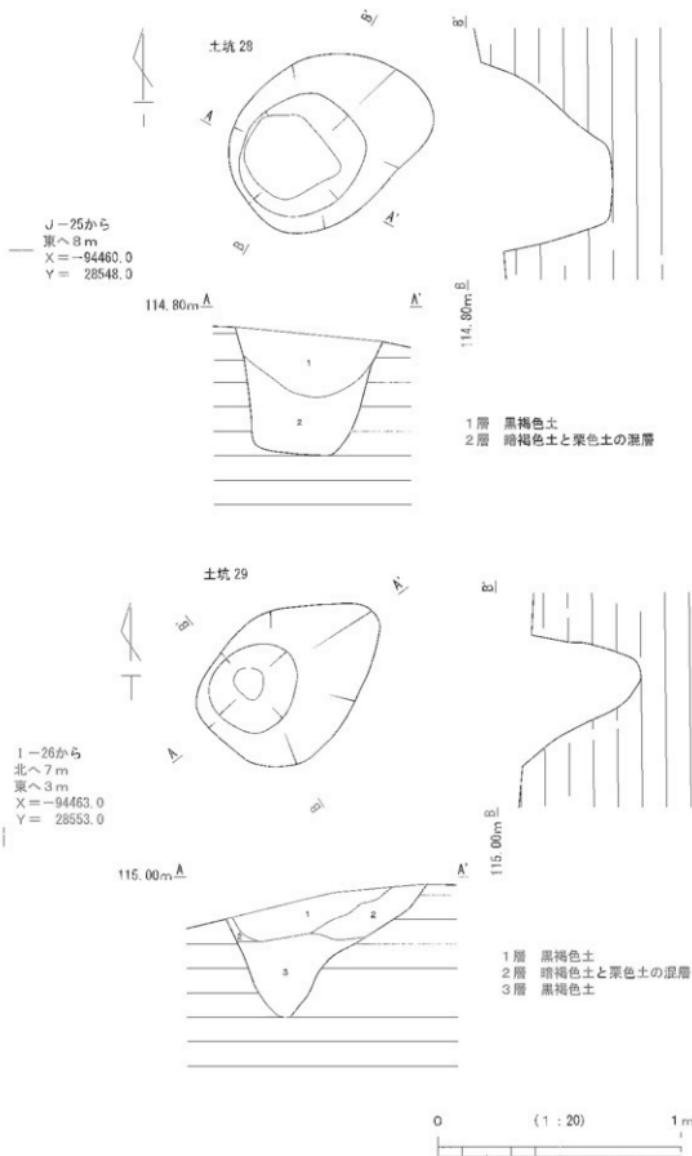


0 (1 : 3) 10cm

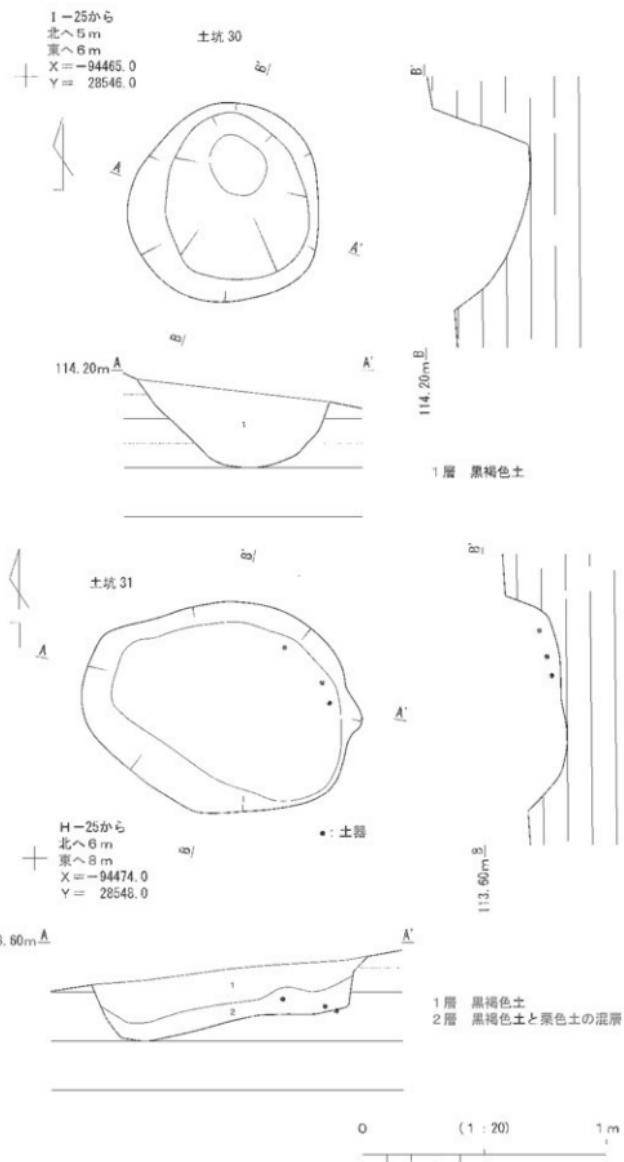
第132図 集石41、42実測図と出土縄文土器



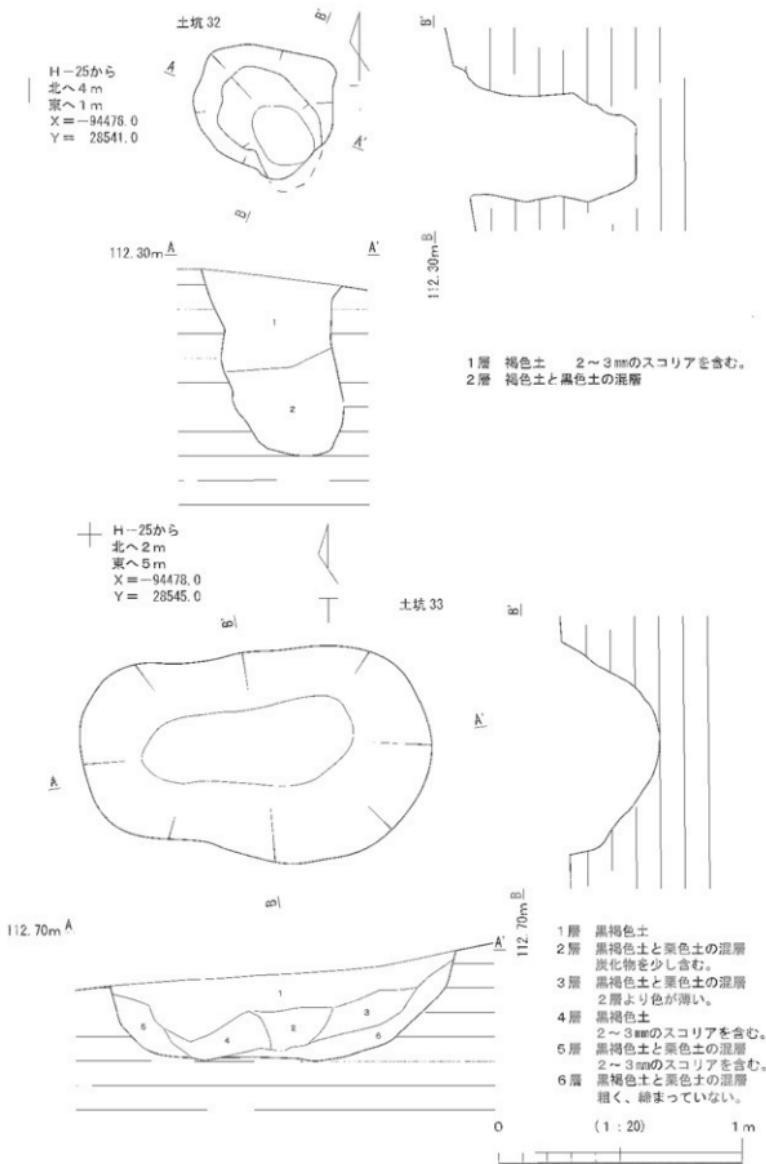
第133図 集石43、土坑27実測図



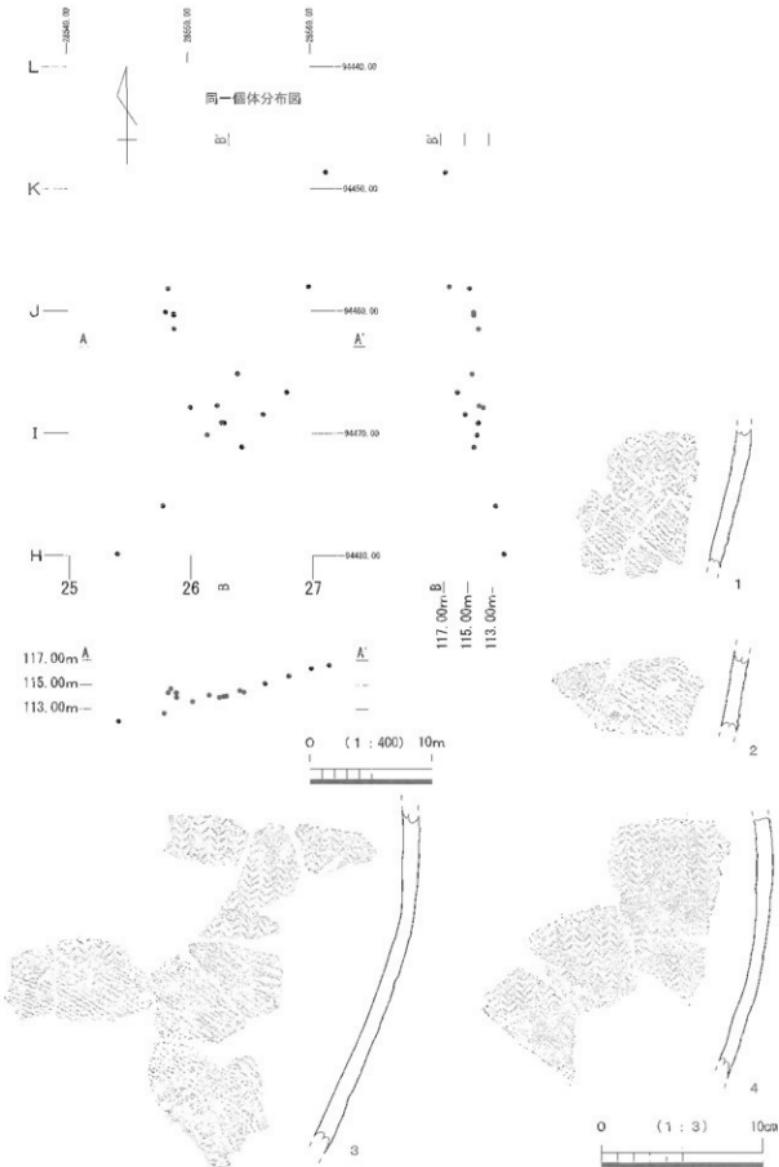
第134図 土坑28、29実測図



第135図 土坑30、31実測図



第136図 土坑32、33実測図



第137図 1区出土縄文土器 1

## (12) 出土土器

### 山形文・撚糸文土器

同一の土器に山形文と撚糸文が見られる土器である（第137図）。1～4はいずれも同一個体で、胸部の上半に山形文、下半にRの撚糸文が見られる。撚糸文の間隔は狭く、斜め方向に施文してある。4では山形文が途切れる部分があるが、これは施文原体の当たりが浅い部分である。1と3では山形文の直下に撚糸文が見られるが、4では山形文の下に無文の部分がある。

### 野島式土器

同一個体と思われる破片がまとまって出土した（第138図上段）。いずれも焼したような黒っぽい胎土である。1～5はいずれも細い隆起帯を引き、斜めの沈線を充填する部分と地文の条痕を磨り消して無文にする部分を区画している。無文帶には、消えきらなかった条痕が残っている部分もある。

6は、隆起帯で方形に区画した部分が見られ、区画内に沈線を引き、区画の外は条痕を消して無文にしている。7は、屈曲する隆起帯の上に沈線を引き隆起帯の下が無文になっている。8は横方向の隆起帯があり、そこから縱方向の隆起帯が2本伸びている。横方向の隆起帯の上の文様帶には沈線が充填され、縱方向の隆起帯の間は無文になっている。また、横方向の隆起帯には、細く丸い棒のような工具による連続押圧が見られる。9は隆起帯が曲線を描いており、その上に沈線が引かれ、隆起帯の下は無文になっている。これも沈線の中に微細な条線が見える。

### 鵜ヶ島台式土器

J 26グリッド付近で一個体分が出土した（第138図下段、第139図）。胸部に屈曲部分のある深鉢で、器体が梢円形で、長軸方向と短軸方向で文様構成が異なるため、第139図には長軸方向と短軸方向の両方の実調図を示してある。

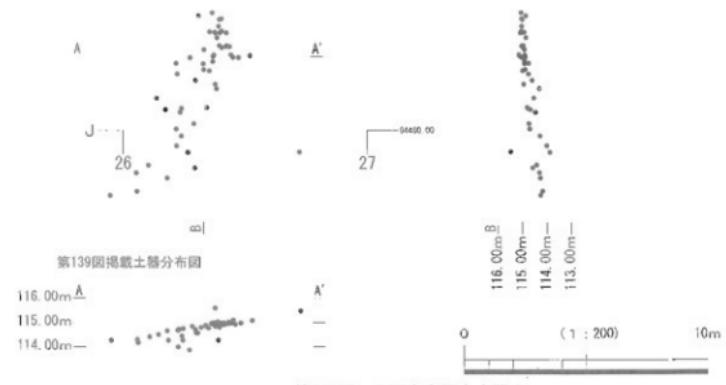
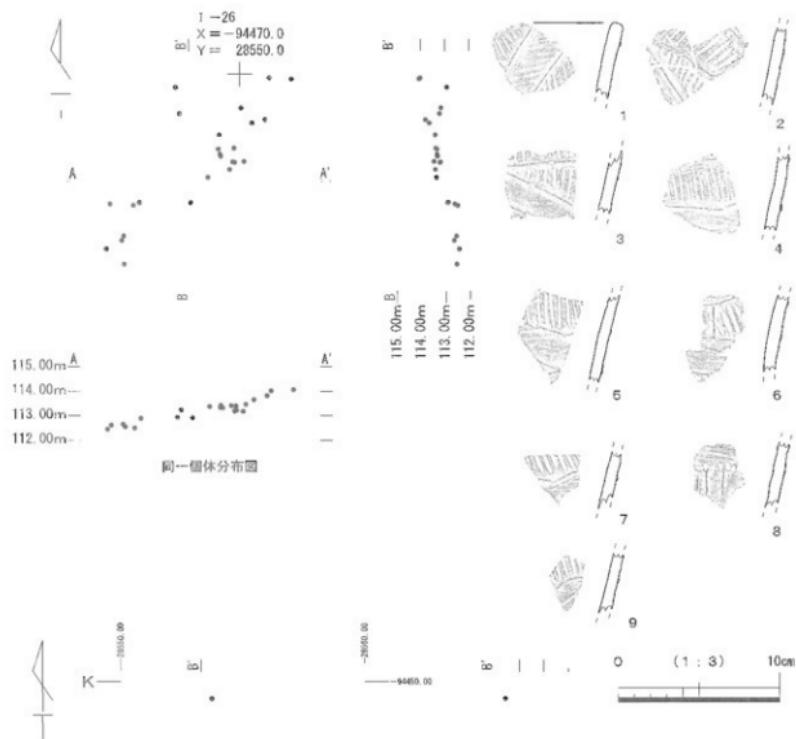
口縁は波状口縁で、突起が8箇所ある。胸部の屈曲部分の上が文様帶で、下は無文帶で条痕による調整が見られる。施文方法は次のとおりである。

まず、1縁に連続した刻み目を入れる。次に8箇所の突起から2本の沈線を垂下させる。これによつて8箇所の文様帶が区画される。これを第139図に示したように、文様帶1～8とする。文様帶4～7は風化のため、文様がわかりにくいか、文様帶1は、縱方向に並行する2本の沈線で区画した中を、横方向に並行する2本一組の沈線を3組入れて、文様帶の中を横方向に区画している。次に区画された中を縱と斜めの沈線で充填する。そして、各区画の中央に横方向の短い沈線を縦に連続して入れる。最後に文様帶の両脇を区画した縦方向の沈線上に、連続する刻み目を入れている。文様帶1と長軸方向で対角線に来る文様帶5は、風化で文様がわかりにくいか、文様帶1と同じ施文方法と思われる。

文様帶2は、文様帶1との境界を縦方向の並行沈線で区画し、文様帶3との境界を斜め方向の並行沈線で区画している。この中をさらに斜め方向の沈線で区画し、その区画内をさらに沈線で埋めている。文様帶4、6、8が、風化でわかりにくいか、これと同じ施文方法をとっているようである。

文様帶3は、斜めの並行沈線によって「V」の字形に区画され、その中を2本一組の沈線を横方向に入れて上下二段に区画する。上段の区画には縦方向の沈線、下段の区画には、斜め方向の沈線を「へ」の字になるように入れた後、「へ」の字の頂点に刻み目を入れている。文様帶7が、風化のため文様がわかりにくいか、これと同じ施文をしているようである。

以上のように、この土器の文様帶は8箇所に分かれ、長軸方向で対称の位置にある文様帶1と文様帶5、短軸方向で対称の位置にある文様帶3と文様帶7、斜め方向で対称の位置にある文様帶2と文様帶4、文様帶6、文様帶8がそれぞれセットになって同じ文様構成をとっていると考えられる。こう考えると、3組の文様帶を対称の位置に配置するために、この土器を意図的に梢円形に作ったように見える。

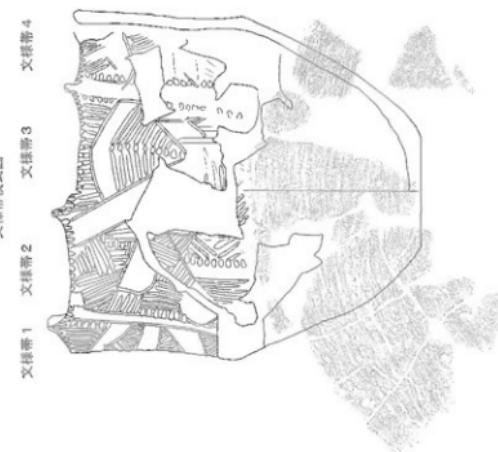
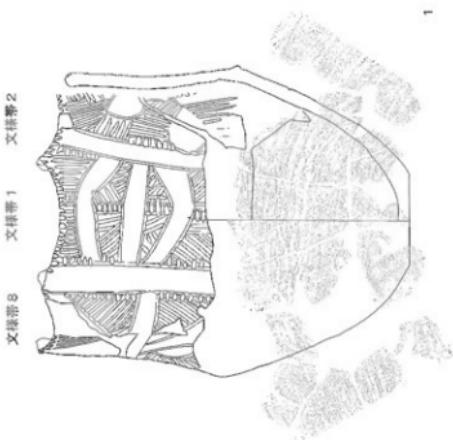


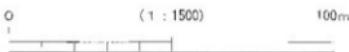
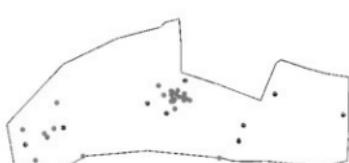
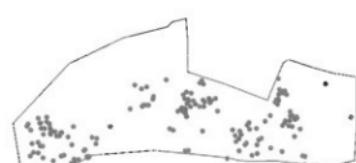
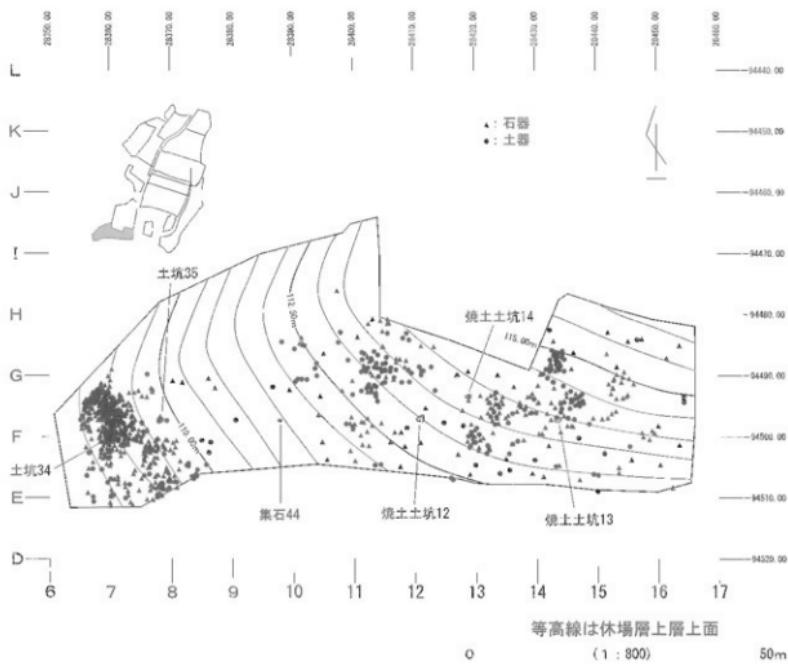
第138圖 1區出土繩文土器 2

第139圖 1區出土繩文土器 3

圖

0 (1 : 3) 10cm





第140図 12区縄文時代遺構、遺物分布図

## 第10節 12区の遺構と遺物

地形は南西に向かう緩斜面で、特に南西端の方で石器が集中して出土した（第140図）。遺物の分布を見るといくつかの分布域に分けられる可能性がある。これを明確にするために、石器など完成品の分布を示すと、第140図の下段に示したように、3つの分布域が浮かび上がってくる。また、12区で出土した土器は十三菩提式と大歳山式がほとんどで、第140図下段に示したように、それぞれの分布もこの3つの分布域に重なる。

以上の検討から、この調査区で出土した遺物は、縄文時代前期のまとまった一群として、3つの分布域に分けて報告する。

ここで、各遺物分布域に帰属させる遺物の選定にあたって、数はごく少ないものの、明らかに休場層からの浮き上がりと考えられるナイフ形石器などを排除する資料操作を行っているが、尖頭器やスクレイパーなどは縄文時代と旧石器時代の区別がつかないため、そのまま残してある。したがって、少数であると思われるが、各遺物分布域の石器には、旧石器時代の石器が混ざっていることを断わっておく。

### （1）遺物分布域1

12区の南西端にあり、第141図に示したように、濃密に遺物が分布しており、南側の谷に向かってやや流れ出しているような状況である。出土層は暗褐色土、栗色土層、富士灰土層に渡っており、出土のレベル差は50cm程ある。

土器は十三菩提式と大歳山式が主体である。石器は795点出土していて、その内734点が黒曜石である。器種別に見ると、黒曜石の石鏃と碎片、剥片が主体を占めている。剥片を見ると、薄く湾曲しているものが目立つことから、押圧剥離による平坦剥離を行っていたことがわかる。これは石器や尖頭器の出土と整合するもので、黒曜石の石核も出土していることから、ここで黒曜石の剥片を剥離して石器や尖頭器を作る作業を行っていたと思われる。前期末と言う時期を考えると、2点出土した尖頭器をこの遺物分布域に入れるかどうか迷うところだが、もし、尖頭器を休場層からの浮き上がりと考えて、この遺物分布域から外すとなると、本来ならば、同時に尖頭器の調整剥片も外さなければならぬ。しかし、石器の調整剥片と尖頭器の調整剥片は区別がつかないため、ここで出土した尖頭器は、遺物分布域に伴うものとして入れてある。

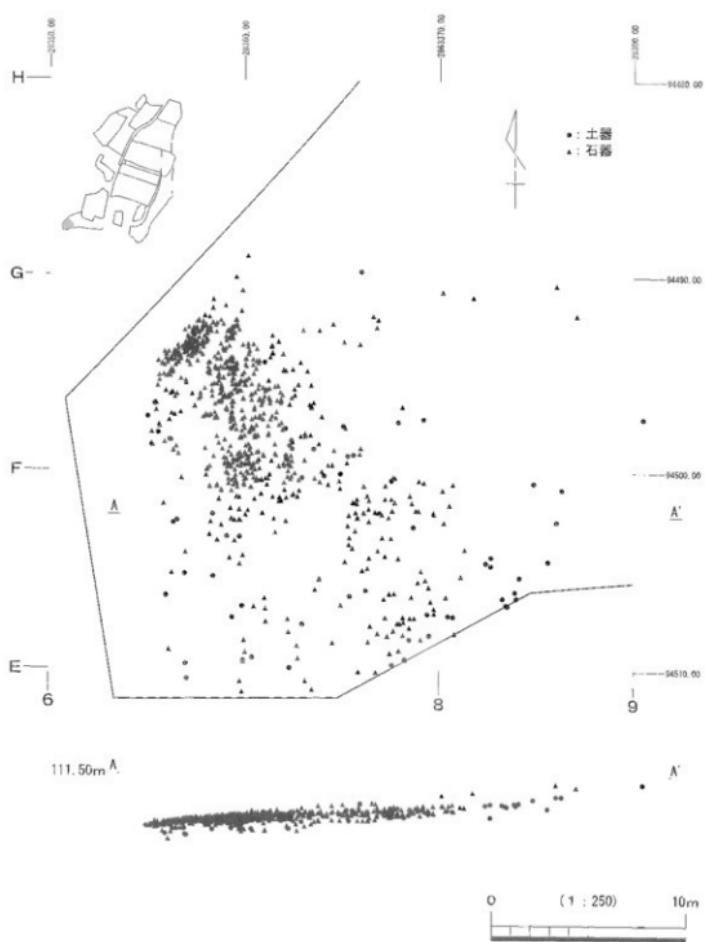
#### 出土土器

第142図-1～16は十三菩提式、および同型式と思われる土器である。1は深鉢と思われる。地文はなく、外面に結節竹管文と浮線文が見られる。結節竹管文は器面に沿って直線的に貼ったものと蛇行するものがある。口縁直下から2本が直線、その下が蛇行、そして、その下2本が直線、その下が蛇行、さらにその下2本が直線と言うパターンになっている。この内、蛇行する1本は粘土紐を貼り付けただけで、結節がない浮線文になっている。内面には煤が付着しており、この煤から、測定値で5,140±40yrB.P.の年代が得られている。

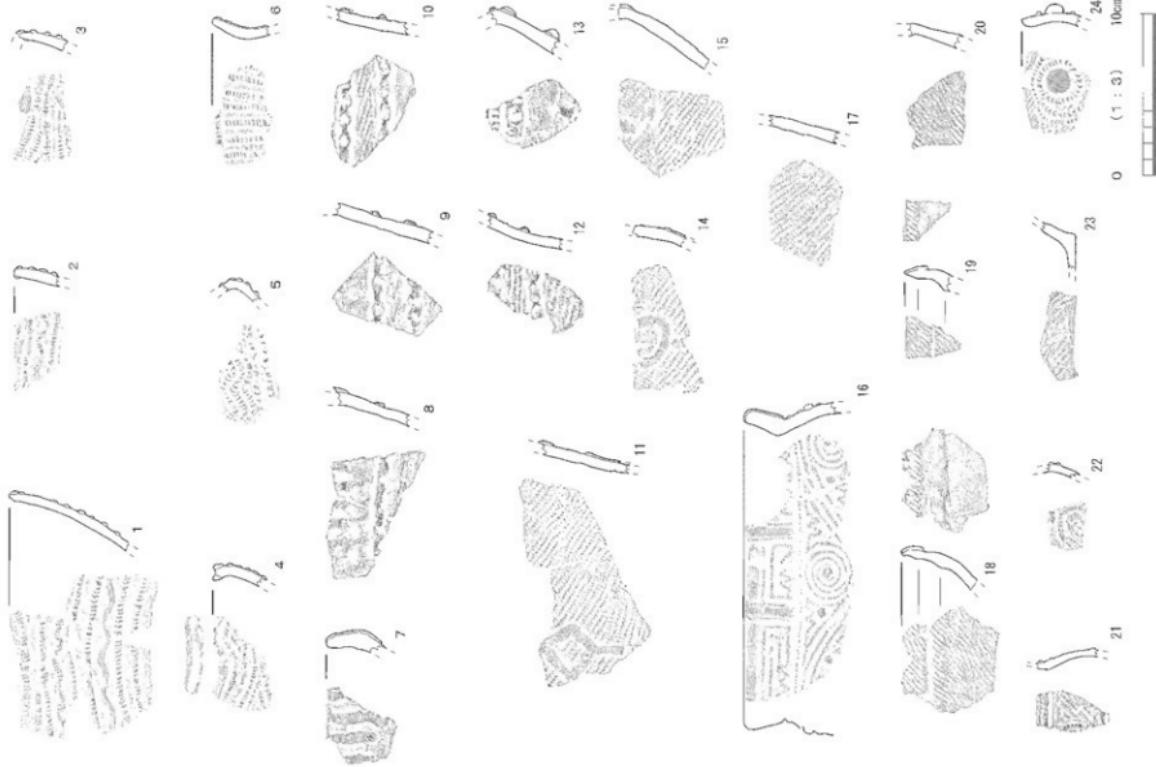
2は、1と胎土が良く似ているうえに、口縁直下に貼られた結節竹管文のうち、上2本が直線、その下に蛇行するのが1本と言う施文方法が1と同じである。2は口縁頂部をなでて面取りしてあるのにに対して、1の口縁頂部は、面取りをせずに、内面の口縁直下をなでている点で違いはあるが、実物を見た感じでは同一個体のように見える。

3は口縁部に近い破片で、1、2と良く似た胎土だが、外面の結節竹管文の付け方で、口縁直下から3本目が蛇行していない点で1、2の施文方法と違いがある。

4は、口縁部に弧状に粘土紐を貼り付けている。口縁直下には蛇行する結節竹管文が見られる。5は胸部から口縁部に向かって屈曲する部分で、複数の結節竹管文が蛇行して貼られている。



第141図 12区遺物分布域 1



第142図 12区遺物分布域1出土縄文土器

6は口縁部がわずかに残っており、口縁直下に結節竹管文を貼り、その下に縦方向に密接した結節竹管文を貼っている。地文は見られない。

7は、地文はなく、口縁部から縦方向に太い浮線文を貼り付けている。そして、浮線文の末端だけ指で押圧して、粘土紐を固定している。8も7と同一個体と思われる。縦方向に浮線文を貼り付け、末端だけ指で押圧して、粘土紐を固定している。縦方向の浮線文を貼った下には、横方向の浮線文が見られる。そして、横方向の浮線文には、棒状工具による押圧が見られる。これも文様効果と同時に浮線文を固定するために行つたのであろう。

9は、土器表面を丁寧になでた後に浮線文を貼り、棒状工具で押圧している。7、8と同一個体と思われる。10も7～9と同一個体と思われる土器である。2本の浮線文が見られ、その間にRLの縄文が見えるが、なでによって消えかかっている。同一個体と思われる7～9も表面をなでてあるが、地文に縄文があったのかもしれない。浮線文には棒状工具による押圧が見られる。

11は、地文にRLの斜め回転の縄文が見られ、その上に浮線文を貼り、棒状工具で押圧している。12は、地文を施さずにへら切り浮線文が2本見られる。

13はRLの縄文を施した後で、粘土紐を貼り付けて懸垂文を作っている。14も13と同一個体で、RLの縄文を施した後、粘土紐による懸垂文を貼り付けている。15も13、14と同一個体で、施文方法も同じであるが、懸垂文が剥がれています。

16は深鉢で、非常に細かい結節浮線文を貼り付けている。施文は、結節浮線文を貼る前と結節浮線文を巡らせる段階に分けることができる。

まず、口縁直下に縦方向に太い浮線文を貼る。この浮線文は2本で一組になっているようである。脣部にはボタン文を付ける。ボタン文も2個で一組になっていると思われる。

次に結節浮線文でモチーフを作る。口縁直下の浮線文の両脇に縦方向に結節浮線文を貼り、その結節浮線文の間は、方形に結節浮線文を巡らせる。脣部では、2個一単位のボタン文の間を繋うように、3本の結節浮線文を蛇行させる。この時、2個一単位のボタン文の片方と、蛇行する結節浮線文の間に隙間ができるため、その隙間に螺旋状の結節浮線文を充填している。

17は、RLの縄文を施した後、一部をなでている。

18～24は大歳山式である。18は口縁部外面に粘土を貼った後、外面全体と口縁内側にLの無節縄文を付けている。内側には煤が付いており、この煤から測定値で $4,830 \pm 40$ yrB.P.の年代が得られている。19も同様の施文が見られ、18と胎土が似ていることから、18と19は同一個体と思われる。20は脣部の破片にLの無節縄文が見られる。胎土の状況から18、19と同一個体と思われる。

21は大歳山式独特の、「Σ」の形をした結節浮線文が見られる。横方向の結節浮線文の下を強くなめてあるため、図示した拓本では、横方向の結節浮線文の下に沈線のように見える部分がある。

22も「Σ」形の結節浮線文が円形にめぐっている。18～20は灰白色の胎土であるが、21と22は同一個体と思われ、明褐色の胎土である。18～20のような灰白色の胎土が大歳山式本来の胎土と思われるが、これに対して、21と22は地元の土器に一般に見られる胎土であることから、地元の胎土を使った大歳山式土器ということになる。

23は底部で、RLの縄文が見られる。18～22と同様に器壁が薄い。24は口縁部で口縁頂部をなでて面取りをしてある。口縁部外面に細かいRLの縄文が見られる。口縁直下にはボタン文が見られ、その周囲に螺旋状の結節浮線文を付文してある。胎土は、大歳山式土器に見られる灰白色のものだが、大歳山式に見られる「Σ」形の結節は見られず、共伴した十三菩提式に見られる結節浮線文である。また、ボタン文の周囲に螺旋状に結節浮線文を巡らせる施文方法も、18の十三菩提式と同様である。23、24の土器と同様に、十三菩提式と大歳山式の密接な関係をうかがわせる土器である。

## 出土石器

第143図-1は黒曜石製の石鎌で、片面に素材になった剥片の石の刃が残っている。2と3は、基部に深い弧状の抉りが入っているため、脚部末端が尖っている。4はかなり小さな剥片を素材にしており、石鎌としてもかなり小型である。剥片の縁辺に微細な剥離を入れただけで石鎌の形を作っている。このため、両面に素材面が残っている。5も石鎌としては小さなもので、基部に弧状の抉りが入っている。脚の形は左右非対称である。6は基部に弧状の深い抉りがあり、脚の末端が尖るようになっている。7は細長い剥離が並行して入っていることから、規則的な加工をうかがわせる。8は、裏面に黒曜石の石の刃が残っている。脚の片方を欠損しているが、欠損後の剥離が見られることから、再加工しているようである。9は基部に浅い抉りが入っている。加工は正面に据えた面の方が細かい。10は小さな剥片を使っているようで、裏面に素材面が残っている。

## 異形石器

第143図-11と12は、石鎌に似た形だが、「Y」の字を逆にしたような特徴のある形をした石器である。ともに素材になった剥片の面が残っていることから、剥片を使っていることがわかる。加工は、縁辺から平坦な剥離を入れている点で石鎌の加工と同じである。この時、縁辺の3箇所に抉りを入れることで、「Y」の字に似た形を作っている。抉りの入れ方は、11では、抉りの1箇所は弧を描くように入れ、他の2箇所は「V」の字を描くように入れている。このため、弧状の抉りを入れた部分が基部に見え、「V」の字状の抉りを入れた部分が、先端を作り出しているように見える。この結果、石鎌に似た形態になっている。

12は、3箇所の抉りが弧状に入っているが、1箇所は浅く、他の2箇所が深く入っているため、深い抉りの入った部分が基部に見え、深い抉りが入った部分が、先端を作り出しているように見える。この結果、石鎌に似た形態に仕上がっている。

## スクレイパー

第143図-13は、左側縁に、裏面から60度程の角度で剥離を入れている。14は、実測図で裏面にした面に、表面から平坦剥離が入っている。15は右側縁に、裏面から連続した剥離が入っている。16は、断面が三角形になる厚みのある剥片を使い、三角形の頂点に当たる部分に剥離を入れている。このことから、稜付きの剥片のようにも見えるが、この剥片は、もともと表面中央にはっきりした稜線があるため、わざわざ稜線を作る目的でここに剥離を入れる必要はない。したがって、稜線に入れた剥離は、刃部形成の目的であったと考えられる。

## 石錐

第143図-17は風化が進んでいるが、細く作り出した部分があるため、石錐と判断できる。18は剥片の両側縁から表面に急角度の剥離を入れ、裏面には両側縁から平坦剥離を入れて先端を作っている。

## 微細な剥離のある剥片

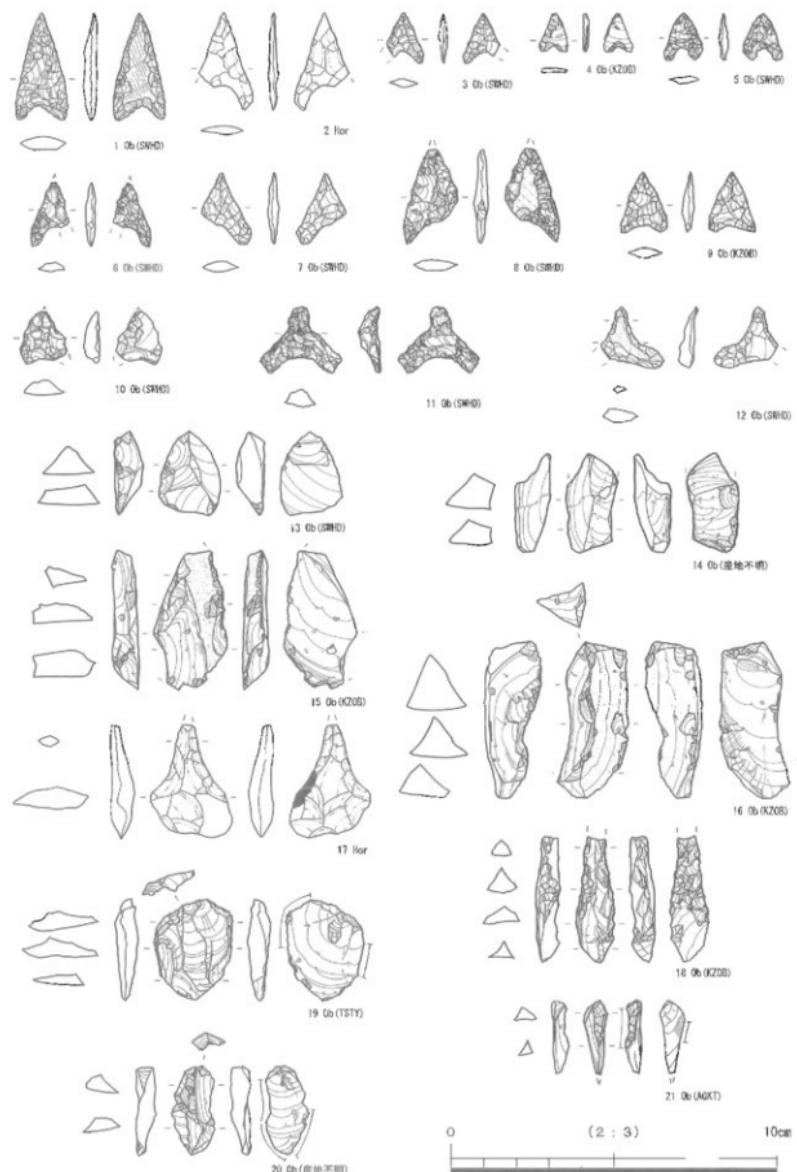
第143図-19~21は、剥片の側縁に微細な剥離が入っている。

## 石核

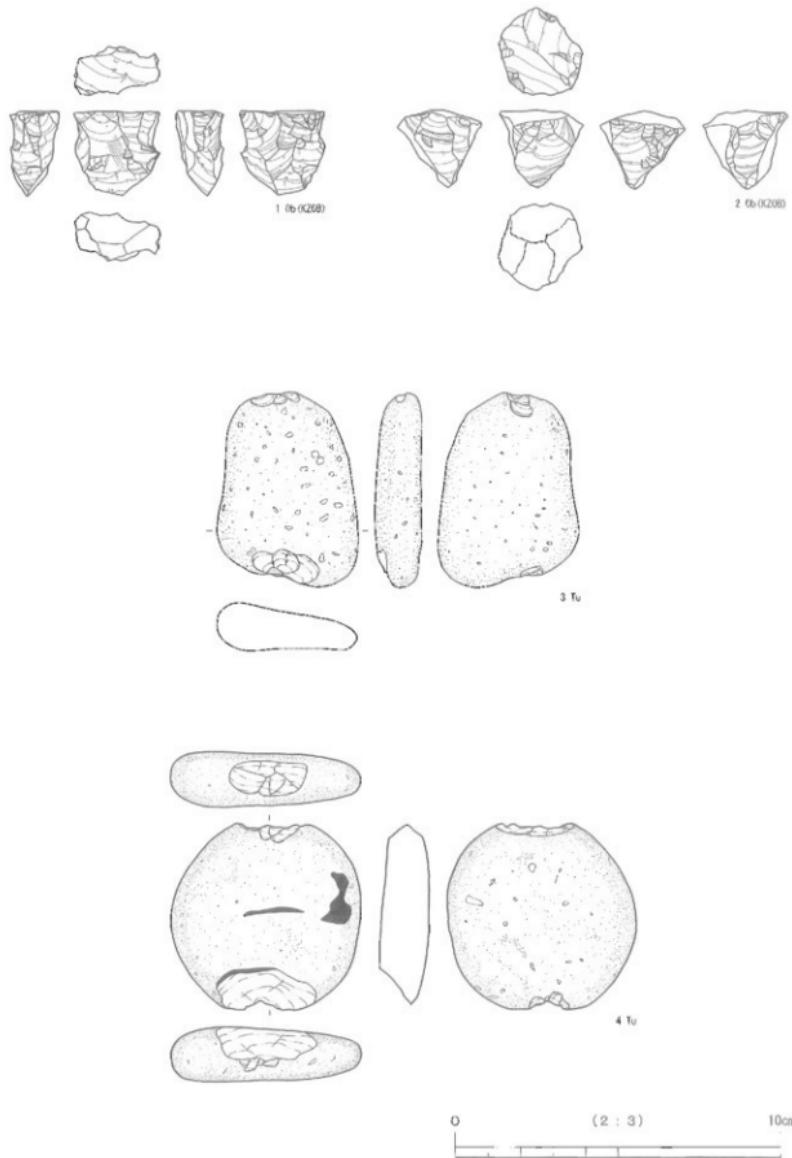
第144図-1は、平坦打面から不定形の剥片を剥離した石核で、石核の外周がすべて作業面になっている。2も石核の外周がすべて作業面の石核で、不定形の剥片を剥離している。打面は2枚の剥離面からなっており、一部に細部調整と思われる微細な剥離が入っている。

## 石鍬

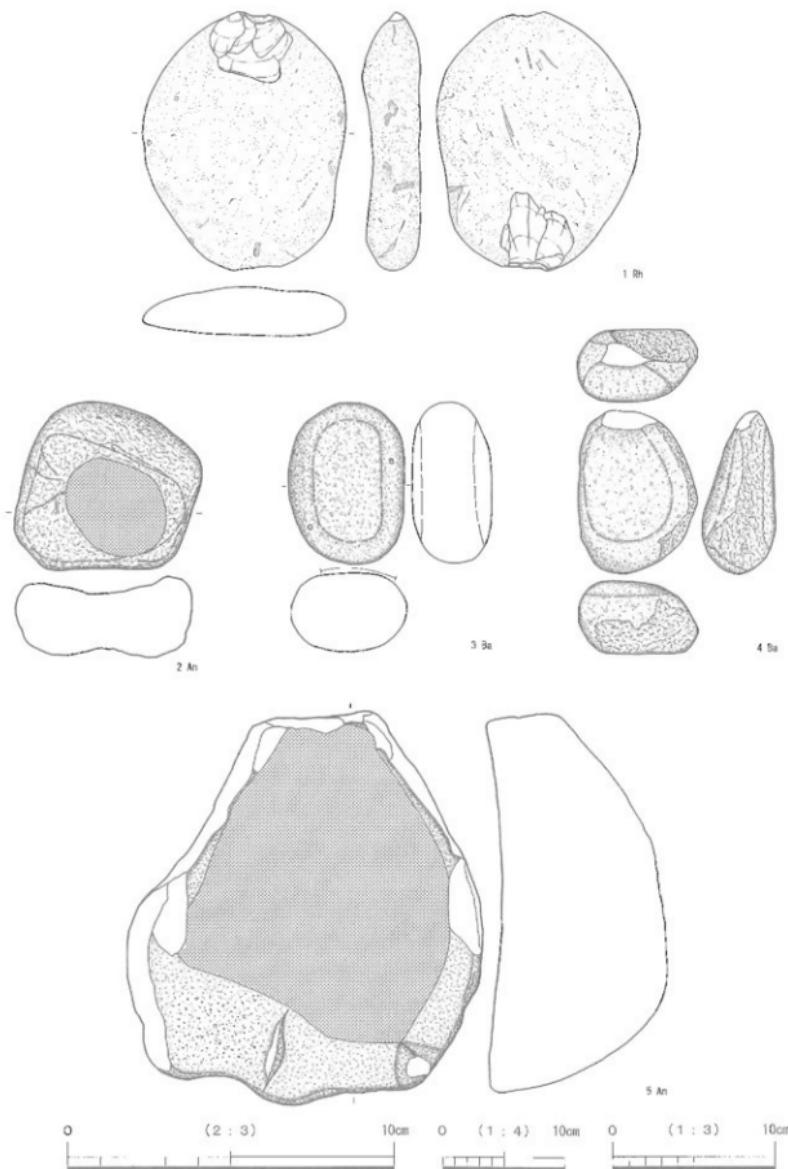
第144図-3、4、第145図-1は扁平な円盤の両端に剥離を入れて紐掛けを作っている。第144図-3、4は円盤の両側に剥離を入れているのに対して、第145図-1は、錯交剥離になっているため、片面ずつ剥離が入っている。



第143図 12区遺物分布域1出土石器1



第144図 12区遺物分布域1出土石器2



第145図 12区遺物分布域1出土石器3 (1 : 2/3, 2 + 5 : 1/4, 3 + 4 : 1/3)

### 石皿

第145図-2、5は円碟の一面が磨滅して窪んでいる。特に5は相当使い込んだ印象である。

### 磨滅痕のある碟

第145図-3は、円碟の一面に磨減が認められる。

### 敲打痕のある碟

第145図-4は円碟の側面に敲打痕が見られる。

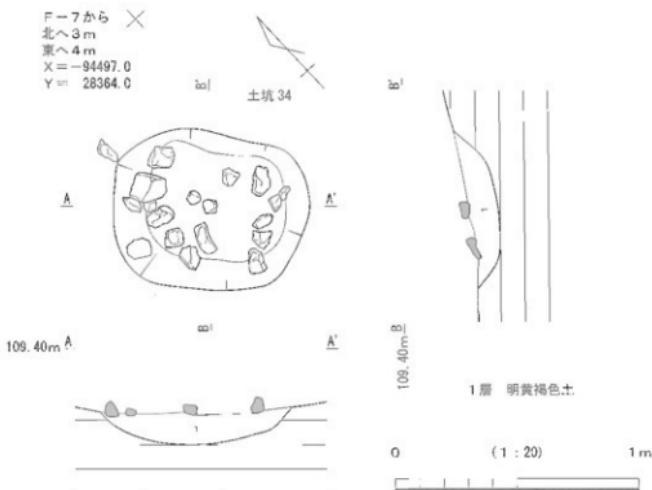
### 土坑34

浅い上坑で、19点の碟が出土している（第146図）。完形の碟は3点あり、2点が赤化している。割れ面が赤化した碟は12点あり、割れ面が赤化していない碟は1点ある。

### 土坑35

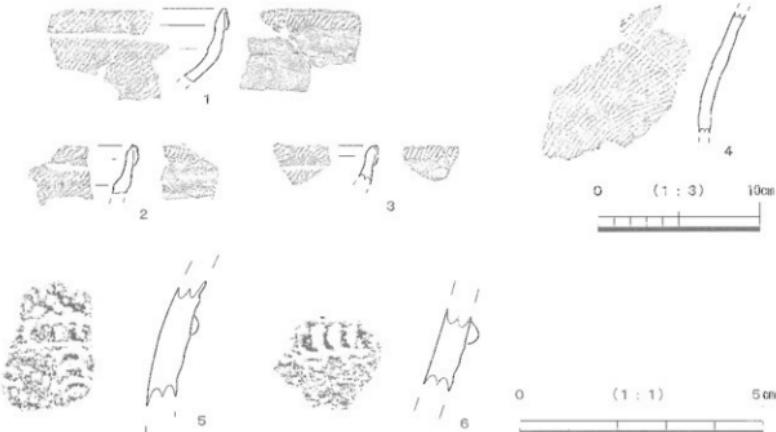
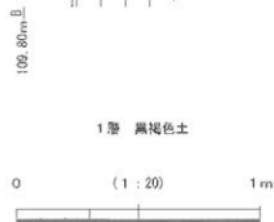
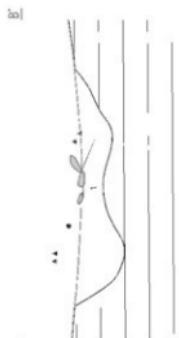
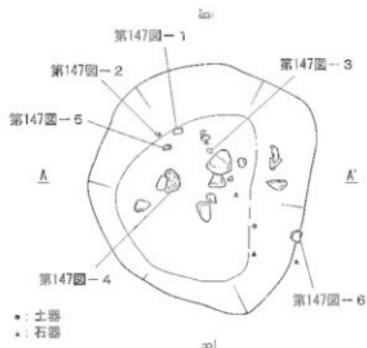
遺物分布域1の東側で検出した土坑で、碟12点と土器が出土した（第147図）。1～4は大歳山式土器である。1は口縁外面に粘土を貼り付け、その後、外面全体と口縁内側にLの無節繩文を入れている。内側には細かい条痕が見られる。2と3は1と同一個体と思われる土器で、口縁外部に粘土を貼り付けた後、外面と内面の口縁直下にLの無節繩文を入れている。4は胴部の破片で、外面全体にLの無節繩文が見られる。内側には細かい条痕が入っている。1～4は、灰白色の胎土や口縁部の作り、施文方法の点で、遺物分布域1で出土した第142図-18～20と酷似していることから、同一個体と思われる。

5と6は小片であるが、RLの地文に結節浮線文が見られ、十三菩提式と思われる。同一遺構から十三菩提式土器と大歳山式土器が共伴している点は特記できる。



第146図 土坑34実測図

X F - 7 から  
 北へ 3m  
 東へ 7m  
 x = -94497.0  
 y = 28367.0



第147図 土坑35実測図と出土縄文土器 (1~4:1/3, 5・6:1/1)

## (2) 遺物分布域2

12区の中央付近にあり、遺物が散在している（第148図）。出土した土器は、十三菩提式と大歳山式がほとんどで、その他の時期の土器はほとんど出土していないことから、この遺物分布域の時期を縄文時代前期末と判断できる。出土した石器は75点で、その内44点が黒曜石である。器種は、石鎌と打製石斧が主体であるが、遺物分布域1のように、調整剥片が集中するような状況ではないため、石鎌や打製石斧の製作跡とは言えない。

### 出土土器

#### 十三菩提式土器

第149図-1～4は、条線文でレンズ状の文様を描き、その中を削り取っている。削り取りを想定して作っているためか、器壁は厚い。

5は屈曲する部分の破片で、横方向にへら切り沈線文を2条入れ、その上に、4～5本で一組になるへら切り沈線文を縦方向と斜め方向に入れている。斜め方向のへら切り沈線文は、「V」字のように交差している。横方向のへら切り沈線文の下にはLRの縄文がわずかに残っている。

6は口縁部の破片で、口縁頂部はなでて面取りをし、内部につまみだすように引き出している。口縁部外面には粘土紐を貼り付け、口縁直下に結節浮線文を3条入れている。

7は底部に近い破片と思われ、粘土のつなぎ目で割れている。結節浮線文が4条見られ、そのうち2本は蛇行している。8は、横方向に細い結節浮線文が4条見られる。一番上の結節浮線文は蛇行しているようである。9と10は、RLの縄文を地文として、縦方向の結節浮線文を付けている。

11は口縁部を含む破片で、口縁頂部はなでて面取りをした上に、内部に向かってつまみだしている。地文はRLの縄文で、その一部をなでて消した後、口縁直下に2本の密接した結節浮線文を貼り、その下に間隔をあけて3本の結節浮線文を貼っている。12も同様で、RLの縄文を地文として、その一部をなでて消してから結節浮線文を貼っている。

13は横方向の浮線文があり、浮線文のつなぎ目で浮線文がずれている様子を観察できる。14は口縁部の破片で、口縁頂部に、棒状工具による刺突文があり、口縁直下に浮線文を貼り、さらにその下にも浮線文を貼っている。15は胸部の破片で、横方向の浮線文が見られる。

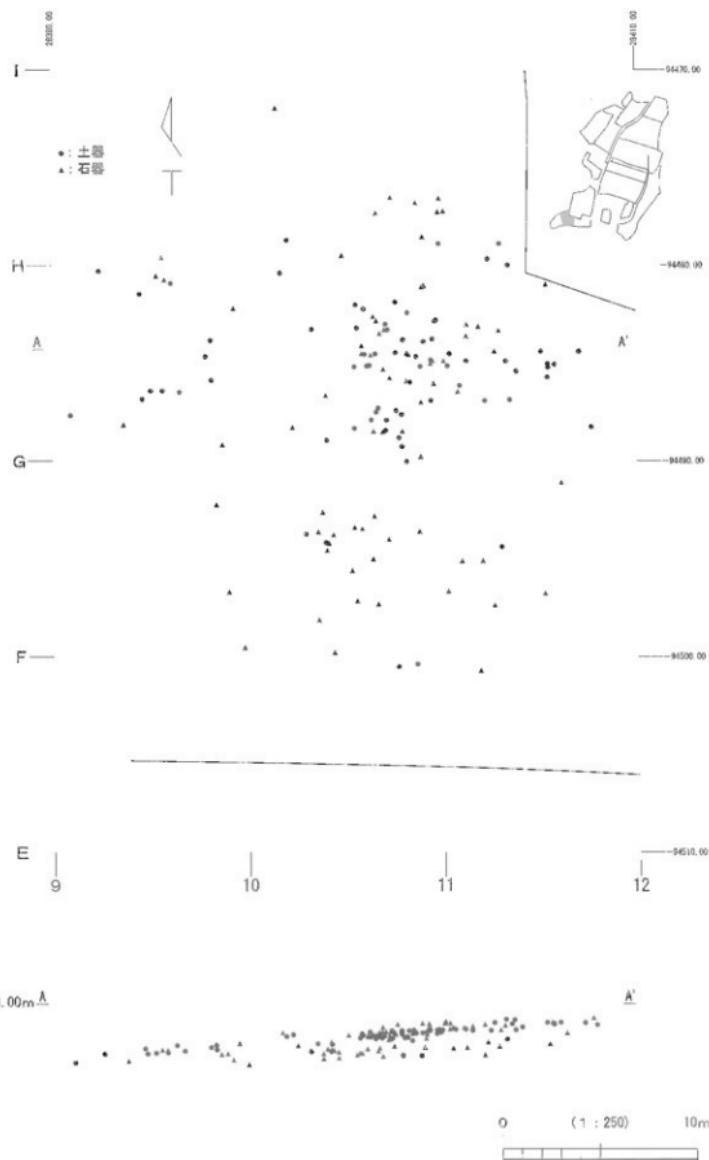
#### 大歳山式土器

16は口縁部の破片で、口縁直下で大きく屈曲している。口縁頂部に粘土を貼り付け、その上に「Σ」形の竹管文を入れている。そして、口縁直下の屈曲部にも「Σ」形の結節浮線文を貼り付けている。内面は、屈曲部よりも下を強くなっているため、屈曲部に明瞭な稜線ができる。

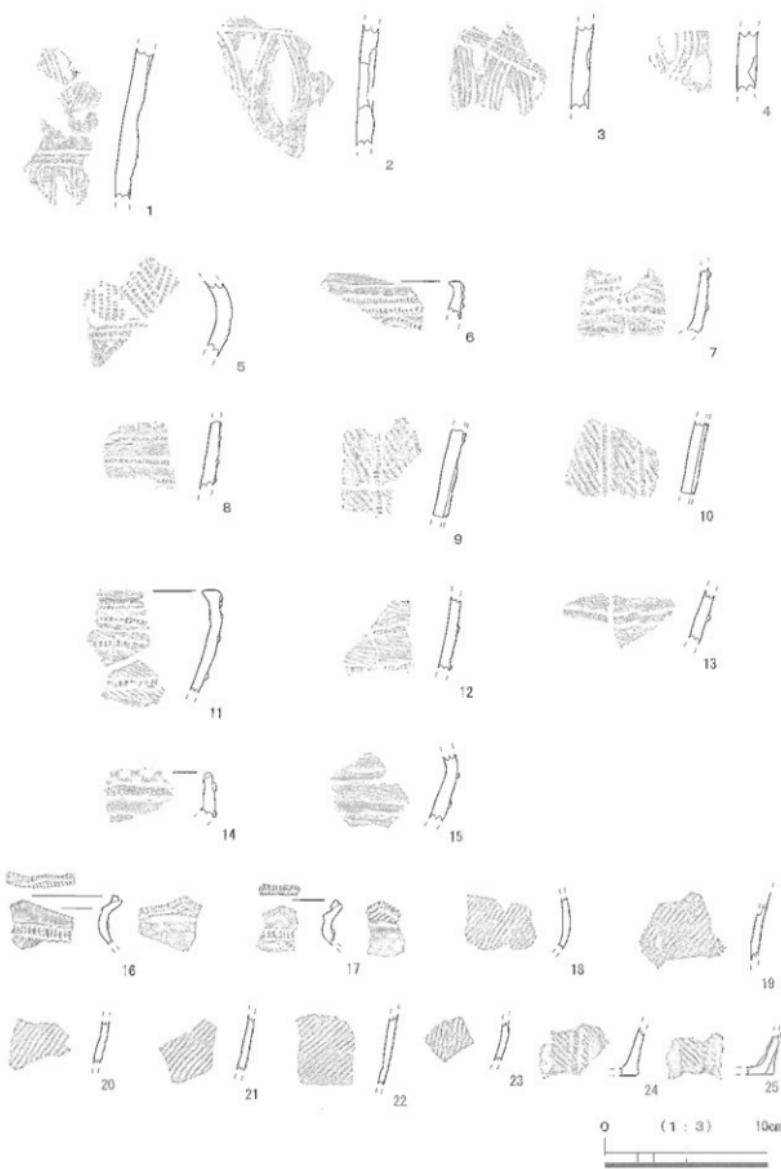
17は口縁部の破片で、口縁内部にRLの縄文を付けた後、「Σ」形の結節浮線文を貼り付けている。縄文を付けた部分よりも下を強くなっているため、なでの境に明瞭な稜線ができる。外面には屈曲部直下に「Σ」形の結節浮線文が見られる。16と17は、胎十や施文方法、内面に稜線ができるほど強くなっている点で良く似ていることから、同一個体と思われる。

18～23には、LRの細かい縄文が見られる。薄い器壁と白っぽい胎土に特徴があり、同一の縄文原体を使っていることから、同一個体の可能性が高い。これらのうち、19には煤が付いており、この煤の放射性炭素年代を測定したところ、測定値で $4,720 \pm 40$ yr B.P.の年代が得られている。

24、25は底部の破片で、縦方向に結節浮線文を付けてある。24と25は、白っぽい胎土や底部に見られる大きな押圧、薄い器壁と言った点で大歳山式に見られる特徴を持っているが、浮線文に見られる結節が大歳山式に見られる独特の「Σ」形の結節ではなく、半円形の結節であるうえに、縦方向の結節浮線文というのも、大歳山式としては異質である。形式としては確かに大歳山式であるが、十三菩提式の影響を受けているように思える。



第148図 12区遺物分布域2



第149図 12区遺物分布域2出土縄文土器

## 出土石器

### 石鎌

第150図-1は有茎の石鎌で、先端をわずかに欠損している。2は石鎌としては小型である。小さい剥片を使っていると思われ、両面に素材面が残っている。裏面の加工は側縁から小さな剥離を入れるにとどめている。3と4は、器体中央で細長い剥離が切り合っていることから、器体を薄くしようとしている意図が良くうかがえる。

### 石錐

第150図-5は、一部を細長く作り出す加工が見られることから、石錐と判断した。

### スクリーパー

第150図-6は、剥片の打削以外の縁辺をすべて加工している。加工は、裏面から60度程の角度で剥離を入れている。

### 打製石斧

第150図-7は円礫面が残っていることから、円礫から剥離した剥片か、分割した円礫を素材にしていると思われる。表面の加工は両側縁から平坦剥離を入れているが、器体中央まで及ぶ剥離が少ないため、自然面が大きく残っている。裏面も両側縁から平坦剥離を入れて加工しているが、裏面の左側縁からの剥離が大きく、右側縁からの剥離は小さいという偏りがある。

第151図-1は分割した円礫を素材にして、自然面を取り除くように側縁から剥離を入れている。正面の右側縁と下端からの剥離が多い。このうち下端からの剥離は刃部を作ろうとしているのであろう。この遺跡で出土した打製石斧では、刃部付近をあまり加工しないものが多いが、これは刃部付近の加工が多い、素材が厚いため、刃部付近も加工量を多くしないと刃部を形成できないからであろう。

### 焼上土坑12

不定形の土坑で、炭化物を含んだ焼土が入っている（第152図上段）。遺物は、底面近くで黒曜石の碎片が1点出土しているだけである。

### 集石44

砾5点からなる（第152図下段）。うち4点の砾が焼けていて、一部にはひび割れも見られる。

### （3）遺物分布域3

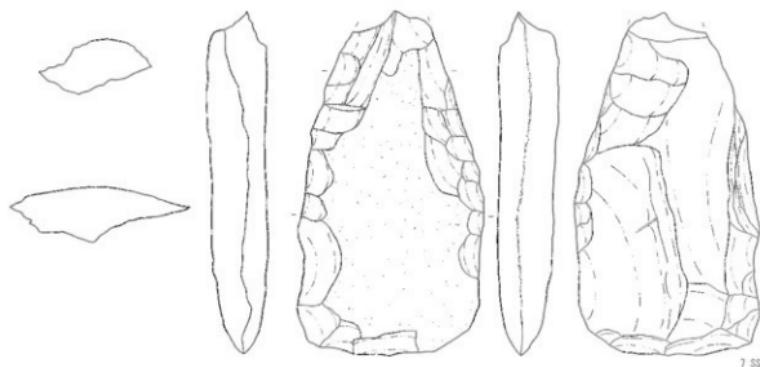
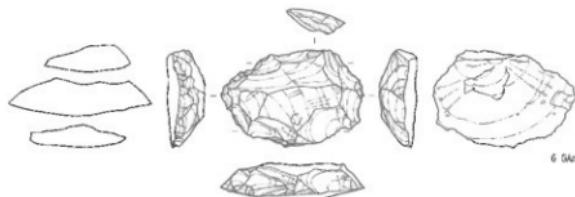
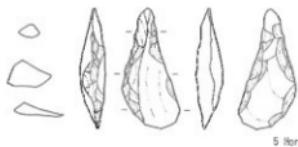
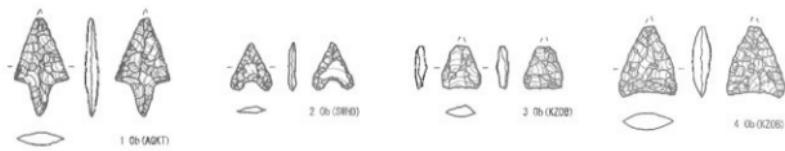
石器は150点出土している（第153図）。77点が黒曜石で、その他にホルンフェルスや珪質頁岩などがある。遺物分布域1、2は黒曜石以外の石材は少なかったのに対して、この遺物分布域では、石材の種類が多い特徴がある。器種は石鎌の他に尖頭器、スクリーパー、打製石斧、石皿などが出土しており、器種も多いのが特徴である。遺物分布域1が、黒曜石を使った石器製作跡だったのに対して、遺物分布域3は様々な石材の石器を持ち込んだ場所のようである。

### 出土土器

### 十三菩提式土器

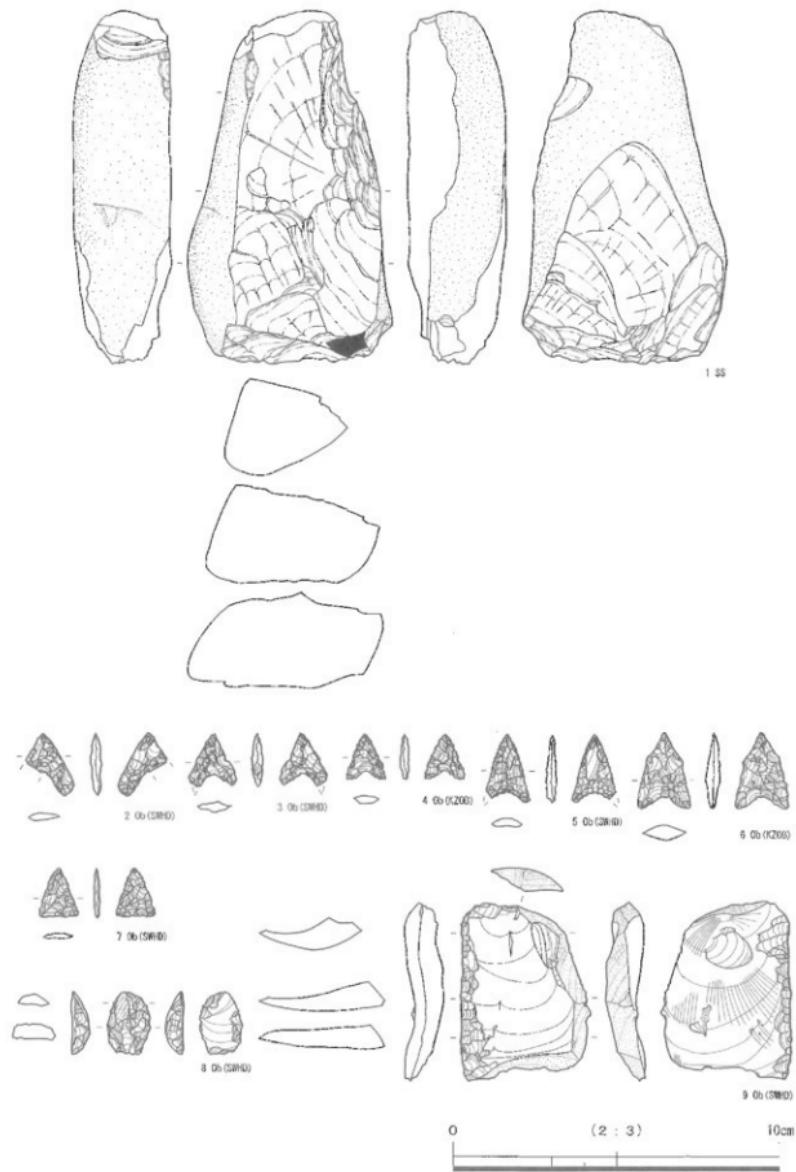
第154図-1は口縁部の破片で、波状口縁の内側に結節浮線文が見られる。これに対して外面の仕上げは粗雑なままになっている。頸部が著しく屈曲して口縁が反り返る土器で、口縁の内側が見えるようになっているのに対して、口縁外面は裏返しになって見えないため、このような仕上げになっていると思われる。

2は口縁部の破片で、口縁頂部をなでて面取りをしたうえに、内部に向かって口縁部をつまみだしている。外面には、RLの地文の上に結節浮線文を貼っている。3はRLの縄文を地文として横方向にへら切り竹管文を入れている。4はRLの縄文を地文として、円形に巡る結節浮線文と斜め方向に並行する2本の浮線文を貼ってある。浮線文の向脇は、浮線文を固定するためになでてある。

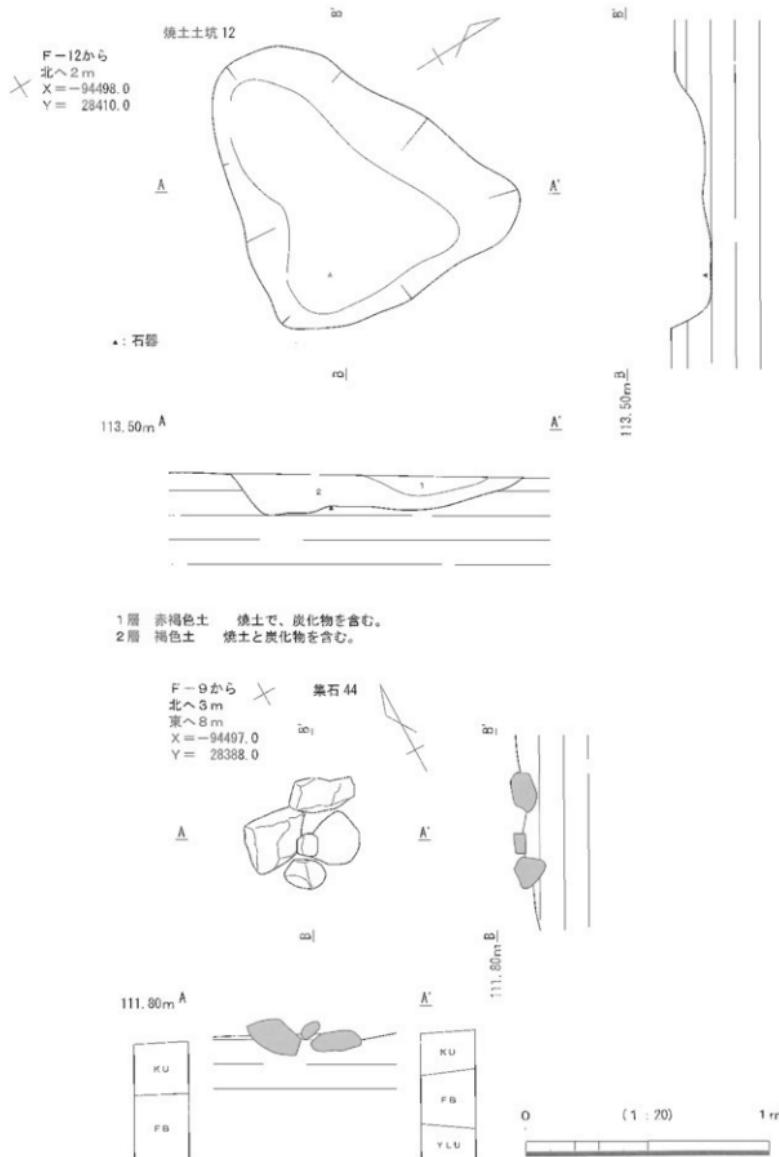


0 (2 : 3) 10cm

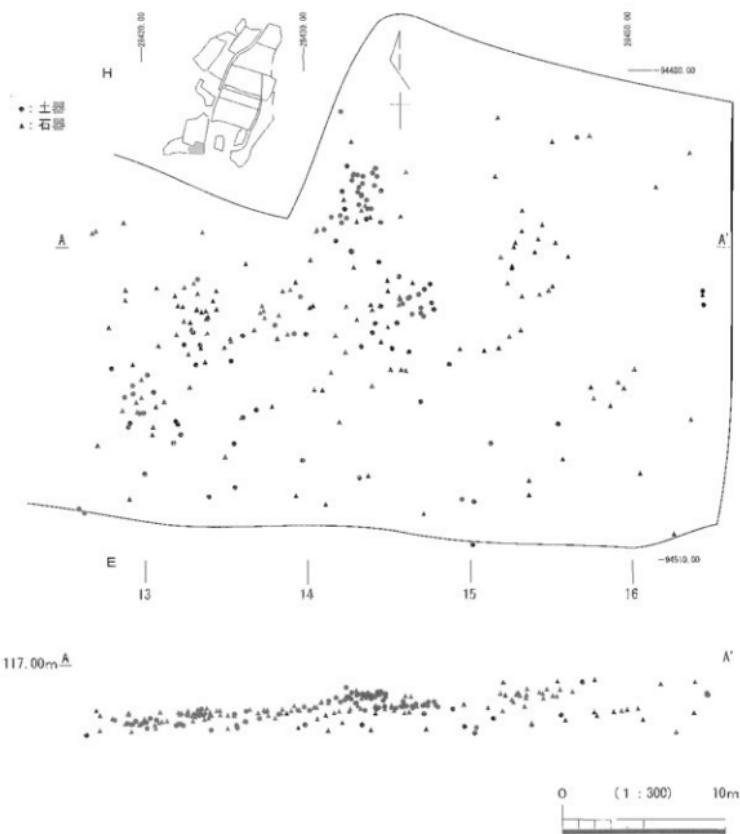
第150図 12区遺物分布域2出土石器



第151図 12区遺物分布域2、3出土石器



第152図 焼土土坑12、集石44実測図



第153図 12区遺物分布域3

5は、RLの縄文を付けた後でへら切り竹管文を入れている。6は、RLの縄文を地文として横方向に結節浮線文を貼り付けている。7は彎曲部のある胸部の破片で、地文にRLと思われる縄文が見える。そして、その上にへら切り浮線文を貼っている。8は底部に近い破片で、細かいRLの縄文を付けた後、縦方向に結節浮線文を貼っている。

10は浅鉢と思われる。口縁部は内部に向かって彎曲しており、外面の口縁直下には粘土を貼り付けている。そして、その直下にへら切り浮線文を貼り付け、胴部にもRLの縄文を地文として、へら切り浮線文を横方向に貼り付けている。

11は口縁部の破片で、粘土を繼ぎ足して二重口縁のようにしている。口縁直下から胴部にかけて3本の浮線文を貼っている。浮線文の上には弱い押圧のような痕跡が見える。

12は口縁に近い破片で、LRの縄文を付けた後、太い浮線文を付けている。浮線文の上には、棒状工具による押圧が見られる。

13はRLの縄文を地文として、横方向の浮線文を貼り、そこから縦方向に浮線文を降ろしている。そして、浮線文の両脇をなでて、浮線文を固定している。14も同様で、RLの縄文を付けた後で、縦方向に浮線文を貼り、その両脇をなでて固定している。

15は口縁部の破片で、口縁部に粘土を繼ぎ足して二重口縁のようにしている。そして、Lの無節縄文を付けた後、口縁の彎曲する部分に隆起帯を貼り、その上に棒状工具で連続する押圧を加えている。口縁外面には地文を付けずに浮線文を格子状に貼っている。16も同様で口縁部外面に格子状に浮線文を貼っている。17も口縁の破片で、口縁外面に浮線文を斜めに貼っている。浮線文の一部が剥がれているが、格子状に貼っていたと思われる。15～17は同一個体と思われる。

18は口縁部の破片で、口縁外面に粘土を貼りつけた後、口縁頂部に2列の連続押圧文を入れている。口縁直下は、RLの縄文を地文として3本の浮線文を波状に付けた後、浮線文の間に細い棒状の工具を入れて浮線文の間をなでて浮線文を固定している。

19は口縁部の破片で、口縁外部に粘土を貼り付けて無文帶にしている。口縁直下にはRLの縄文を地文として、その上に浮線文を貼り付けている。

20と21は、細かいRLの縄文を付けた後、円形に浮線文を付け、円の中をなでて仕上げている。

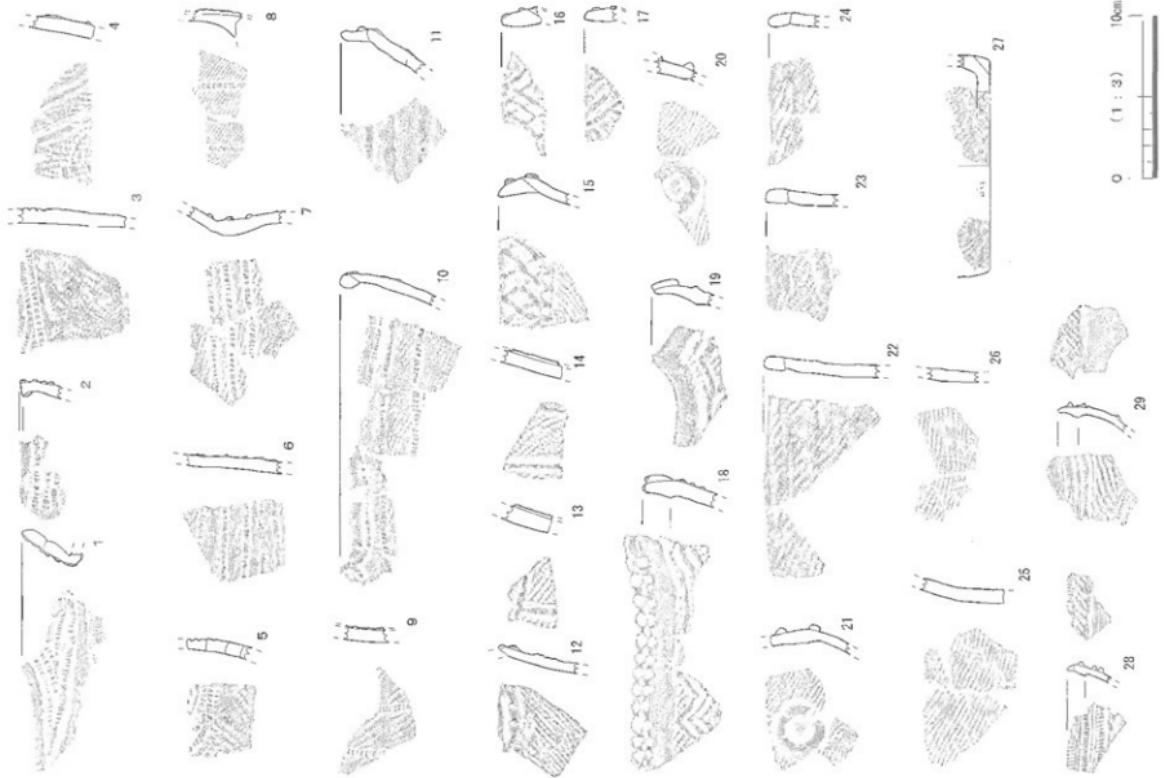
22はRLの縄文を施した後、横方向になでて縄文が消えかかっている部分がある。23は口縁直下に無文の部分があり、その下にRLの縄文が見られる。これも横方向になでて縄文が消えかかっている部分があり、22と同じ特徴を持っているが、口縁直下に無文の部分があるため、22とは別個体であろう。24は口縁部の破片で、外面に縄文を付けた後、一部をなでて消している。25と26もRLの縄文を付けた後、一部をなでて消すため、縄文が消えかかっている部分がある。23～26は胴部の破片で、縄文を付けた後に一部をなでて消す特徴がある。

27は底部の破片で、RLの縄文を付けた後、一部をなでて消している。

大歳山式土器

28は、口縁内部と外面にRLの細かい縄文を入れた後、口縁頂部に「Σ」形の竹管文を入れている。このため、口縁頂部は三角形に尖っている。そして、口縁直下にも「Σ」形の結節浮線文を2条貼り付けている。内面は、口縁部縄文帶の下を強くなれており、縄文帶との間の明瞭な稜線ができている。

29は口縁内部と外面にLRの縄文を付けた後、口縁頂部に「Σ」形の竹管文を入れている。このため、28と同様に、口縁頂部は三角形に尖っている。口縁外面には2本の「Σ」形の結節浮線文が見られ、胴部にも曲線を描く「Σ」形の結節浮線文が見られる。内面は、口縁部の縄文帶の下を強くなでていているため、文様帶などでの境に明瞭な稜線ができている。



第154圖 12區遺物分布域3出土闢文土器

## 出土石器

### 石鐵

第151図-2は、基部に深い抉りが入っている。脚部の末端は丸くなるように仕上げてある。3は基部に弧状の抉りが入っている。片方の脚部を欠損しているが、欠損部に微細な剥離があることから、再加工しているかもしれない。4は基部に浅い抉りを入れ、縁辺を鋸歯状に仕上げてある。5は基部に弧状の抉りを入れ、脚部の末端は尖るように仕上げてある。全体に細長い剥離が並行して入っているため、丁寧な加工を思わせる。6は、先端を細く作り出してあるため、縁辺に屈曲部ができる。7は基部が平坦になっている。細長い剥離が並行して入っているため、形態が整った印象を受ける。

### スクリペイバー

第151図-8は剥片の縁辺に裏面から剥離を入れて刃部を作っている。加工は、縁辺をほぼ一周している。9は黒曜石の大型の剥片を使い、正面の左側縁全体に、画面から平坦剥離を入れている。

### 第155図-1は、円礫から剥離した剥片の縁辺に、表面から平坦剥離を入れている。

### 石核

第155図-2は平坦打面を持つ石核で、正面に据えた面とその裏面で、不定形の剥片を剥離している。

### 打製石斧

第155図-3は、円礫面が残っていることから、円礫から剥離した剥片か、分割した円礫を素材にしていると思われる。基部を両面から加工して刃部にしているため、刃部が広がる形態になっている。

第156図-1は、円礫から剥離した剥片を使い、裏面だけ加工しているため、表面は全面自然面である。胸部中央の幅を狭くするような加工をしているため、刃部の幅がやや広くなる形態になっている。2は基部と先端を欠損しているため、上下を判断しにくいか、やや幅が広くなっている側に刃部があつたと推定した。加工は両側縁から平坦剥離を入れている。3も刃部と基部を欠損しているため、上下を判断しにくいか、他の打製石斧の観察から、刃部側の幅が広くなるものが多いことと、刃部側に自然面が残っているものが多いことから、やや幅が広くなつて、自然面が残っている側に刃部があつたと推定した。加工は、両側縁から平坦剥離を入れていて、表面の基部側には器体中央まで及ぶ大きな剥離が入っているが、刃部側の剥離は、縁辺付近にとどまっている。裏面の加工は、器体中央に及ぶ剥離を入れた後、縁辺付近に小さな剥離を入れている。側縁に見られる敲打痕は、加工の際に付いたものである。

### 石核

第157図-3は、円礫の平坦な自然面を打面にして、細長い円礫を切断するように不定形の剥片を剥離している。実測図の上からの見通し図でわかるように、石核の作業面は、正面の左半分が抉られたように片減りしている。この石核には、第157図-1と2の剥片が接合している。ともに不定形の剥片で、やや厚みがある。剥離の順番は1の剥片が剥離された後に2の剥片が剥離されている。接合資料の実測図、上からの見通しでわかるように、1の剥片に厚みがあるため、作業面が大きく後退して、作業面の右半分が突出してしまっている。これを修正するために2の剥片を剥離して、この突出部分を除去しようとしているが、2の剥片を剥離しただけでは除去しきれていない。

### 石皿

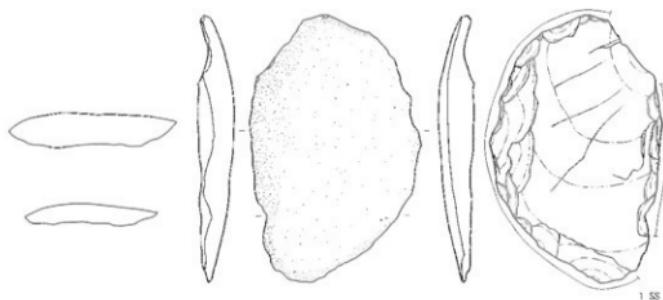
第158図-1～3は、扁平な円礫の片面、もしくは両面が磨滅している。

### 焼土土坑13

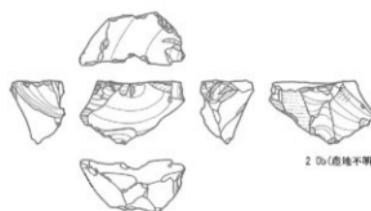
炭化物を含んだ焼土が詰まった土坑で、遺物は出土していない（第159図上段）。

### 焼土土坑14

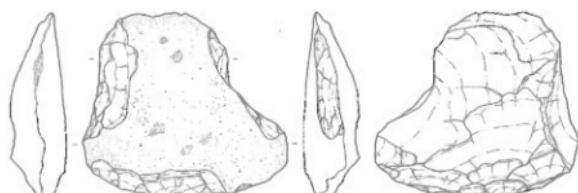
炭化物を含んだ焼土が詰まった土坑である（第159図下段）。早期の沈線文土器の小片が出土しているが、埋土の上層であることから、流れ込みであろう。



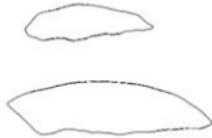
1. 1a



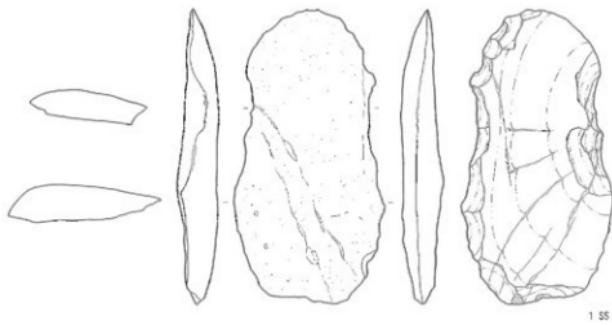
2. (产地不明)



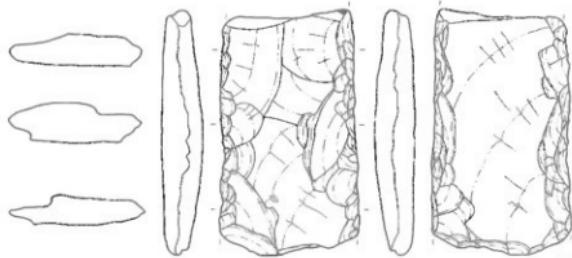
3. 1a



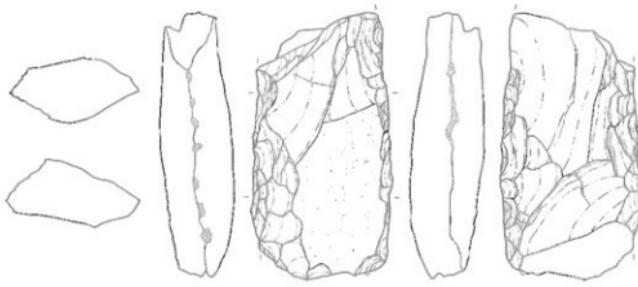
第155図 12区遺物分布域3出土石器1



1 ss



2 ss



3 ss

0

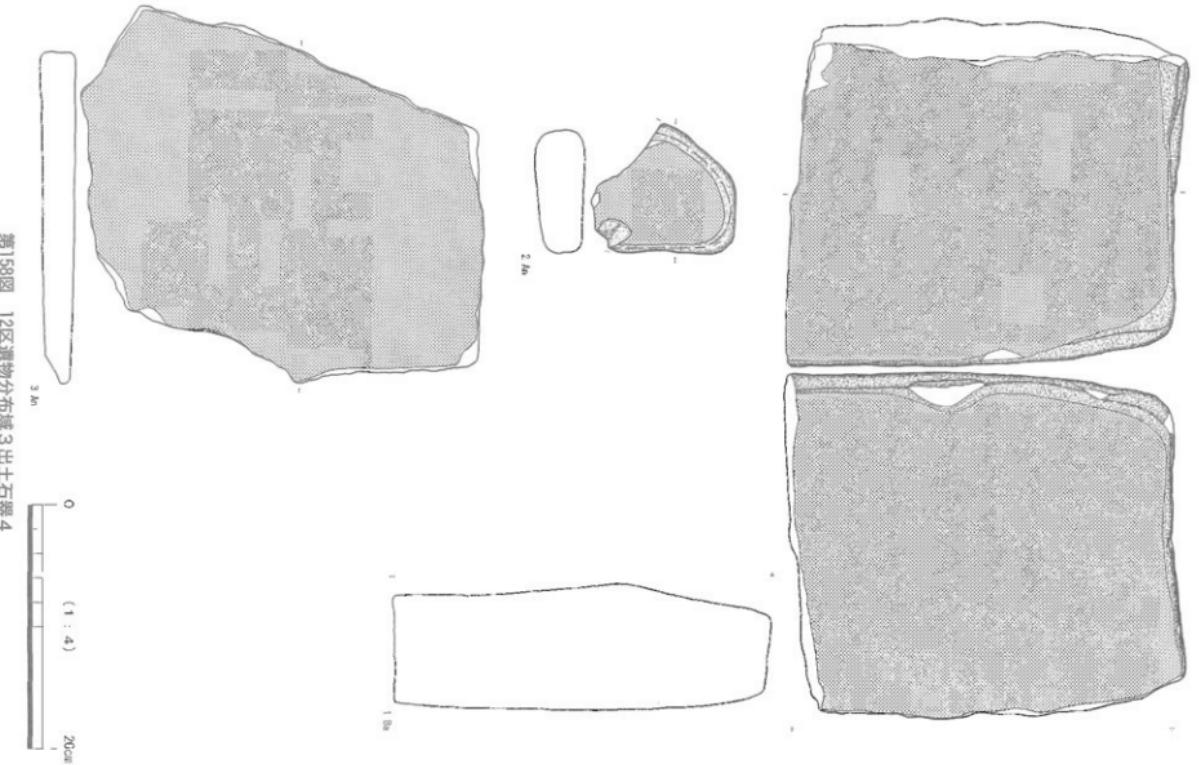
(2 : 3)

10cm

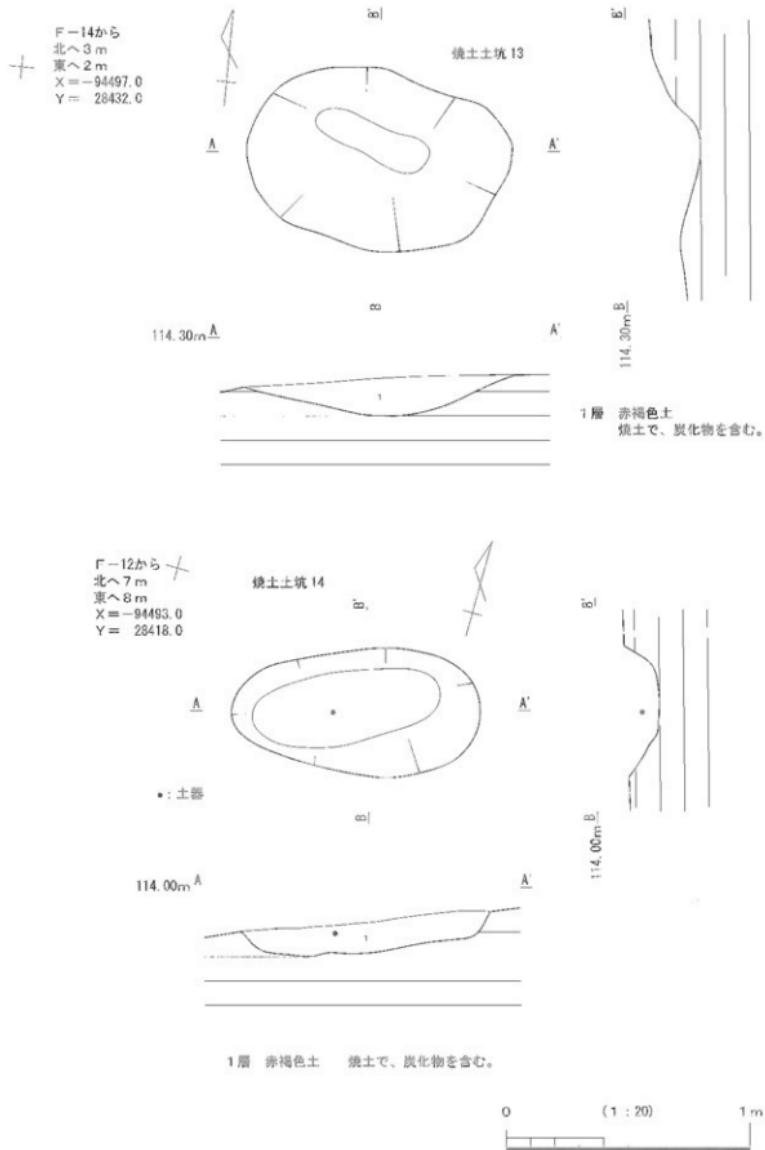
第156図 12区遺物分布域3出土石器2



第157図 12区遺物分布域3出土石器3



第158図 12区遺物分布域3出土石器4



第159図 燃土土坑13、14実測図

## 第11節 包含層出土の縄文土器

まとまって出土した縄文土器は、各調査区で報告してきたが、それ以外の縄文土器を報告する。ここで、第160図に主要な土器の分布図を示す。時期ごとに見ると、早期の撫糸文、押型文、野島式、鶴ヶ島台式、打越式は、北から、丘陵に当たる10区、3区、11区と、8区、4区の東側の谷と1区に分布している。前期の諸職式は、丘陵に当たる10区、3区、11区に分布している。前期末の十三菩提式と大歳山式は、丘陵に当たる2区、3区、12区と、8区、14区、4区の西側の谷に分布している。中期の曾利式は、丘陵に当たる10区と8区の東側の谷に集中している。

調査区ごとに見ると、丘陵に当たる10区では、早期から中期を通じて、ほぼ全時期の遺物が見られる。中でも撫糸文、押型文、曾利式が集中しているのに対して、前期の土器は乏しい。10区では、土器だけでなく石器も多く出土していることから、早期～中期を通じて主要な活用域の1つであったことは間違いない。確実な竪穴住居跡は中期のものが1軒と竪穴住居の可能性がある遺構が1基だけだが、集石と焼上土坑が集まっていたことから、主要な居住域からは外れていたと思われるが、焼け土の詰まった土坑が検出されていることと、集石から出土した礫の多くが焼けていることから、火を焚く活動を行った場所であったと想定される。

火を使った活動を具体的に復元できるデータはないが、乾燥した丘陵や微高地上に、火の使用に係る遺構がまとまっていることは良くあることで、例えば、住居内の炉ではまかないきれない規模の調理活動、もっと言えば、住居単位ではなく、集団規模の調理活動のようなことを行った場所と想定できる。そのような活動を想定できれば、住居を伴わない場合でも土器や石器がまとまって出土することは説明がつくであろう。

同様な状況は3区の東側と11区でも見られる。ここでは早期～中期の土器がまとめて出土しており、石器も濃密に分布していた上に、3区では石器や尖頭器の製作跡も検出された。遺構では、集石が集中して検出された。縄文時代早期～中期を通じて火を使った活動域として利用されてきたと考えられる。

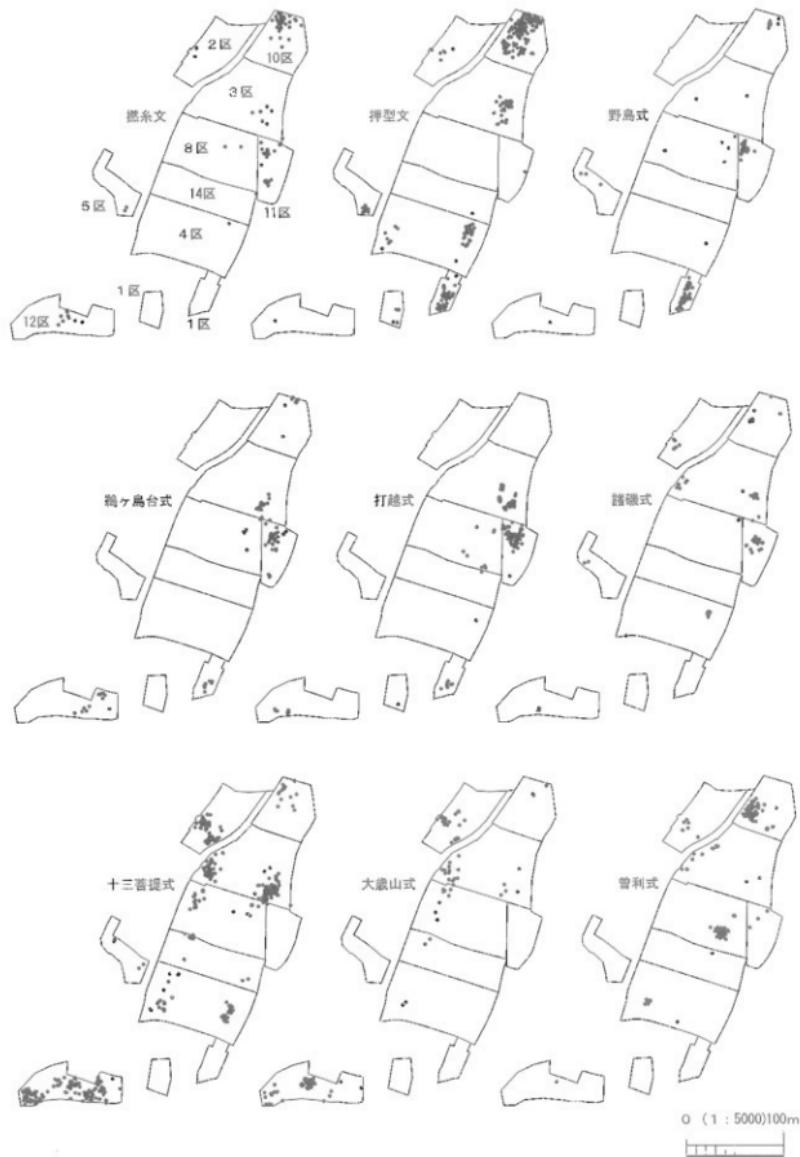
12区は丘陵に当たっているが、出土した土器は、前期末の十三菩提式と大歳山式が主体であった。遺構は焼上土坑と集石があり、石器や尖頭器の製作跡も確認された。このことから、時期は前期末に限定されるものの、石器製作や火を使った活動域と考えられる。

一方、谷に当たる2区と、8区、14区、4区の西側を貫く谷では、前期末の十三菩提式と大歳山式が濃密に分布している。遺構は、4区で検出した石器製作跡の土坑21がある以外は、落とし穴と思われる土坑が分布していた。丘陵に比べると生活の痕跡に乏しいことから、遺物のまとまった出土は、流れ込みの可能性を考えることになる。

8区、14区、4区の中央部には丘陵がある。すでに削平されて遺跡が残っていないため、本来の状況がわからないが、8区、14区、4区の出土遺物に、装饰品や祭祀用品が見られないことから、集落があったとは考えにくい。おそらく、十三菩提式と大歳山式段階で、10区、3区、11区と似たような状況、すなわち、焼上土坑や集石が分布し、土器や石器が濃密に分布する状況が広がっていたと想定される。そして、8区、14区、4区の西側を貫く谷から出土した遺物は、この丘陵から流れ込んだものであろう。

総じて見ると、早期の土器が調査区の北～東側の丘陵と谷、前期末の十三菩提式と大歳山式が西側の丘陵と谷に集中する傾向がある。中期の曾利式は、北側の丘陵と東側の谷に分かれている。検出した遺構から、丘陵上で行っていた活動は、早期～中期を通じて大きな変化はなかったと考えられるが、長期的な視野で見ると早期～中期で活動域が移動していることがうかがえる。

以上その他に、十三菩提式と大歳山式の分布が一致することは、後述するように、両型式の折衷土器とも言える資料が出土していることもあって、両型式の密接な関係を表している。



第160図 繩文土器分布図

### (1) 摳糸文土器

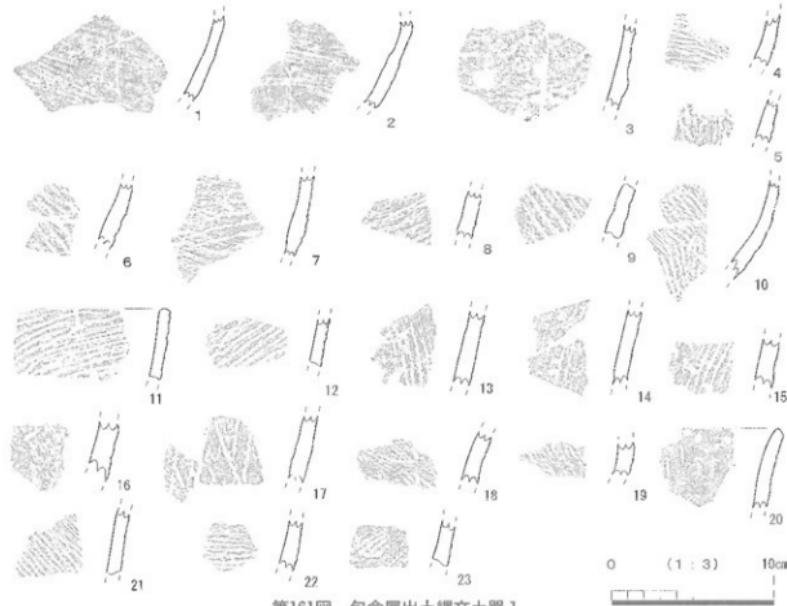
第161図-1と2は斜め方向にLの捺糸文が見られ、内面は条痕による調整が見られる。3は金色の雲母が目立つ胎土で、横方向と斜め方向にLの捺糸文が見られる。また、補修孔も見られる。4は斜め方向に交差するLの捺糸文を施文している。判ノ木山西式並行と思われる。5は縦方向にLの捺糸文を施文しているが、風化が進んでいる。

6、8、9はRの太い捺糸文を斜め方向に入れている。7は、捺糸文を斜め方向に交差させている。10は、密接したRの捺糸文が斜め方向で交差している。内側はなでて仕上げてある。11は口縁部の破片で、口縁直下から斜め方向で、やや角度を変えながら、複数の方向に捺糸文を入れている。判ノ木山西式に並行するものであろう。12も斜め方向に交差する太めの捺糸文を施文している。捺り糸の捺りの方向はRである。大きさの割に軽く、手触りがすべすべする特徴的な胎土である。この手触りは、滑石の原石に触った時の感触に似ている。11と同様に判ノ木山西式に並行するものである。

13~15はRの捺糸文が縦方向に入っている。いずれも早期前半と考えられる。胎土は、大きさの割に軽く、滑るような独特の感触がある。これも滑石の原石に触った時の感触に似ている。

16は捺糸文が入っていることはわかるが風化のため、捺りの方向はわからない。17はRの捺糸文が「X」字状に交差している。18はRの捺糸文が斜め方向に入っている。19はRの捺糸文が斜め方向に入っているが、複数の方向に施文しているようである。20は口縁の破片で、Rの捺糸文が縦方向にまばらに入っている。大きさの割に軽く、手触りがすべすべする特徴的な胎土である。

21はRの捺糸文が斜め方向に密に入っている。22はRの捺糸文が横方向に密に入っている。小片のため、角度がわかりにくかったが、21と同様に斜め方向の捺糸文かもしれない。23はRの捺糸文が斜め方向に入っている。判ノ木山西式に並行するものと思われる。



第161図 包含層出土繩文土器1

## (2) 楕円文土器（撫糸文並行）

第162図-1は口縁を含む破片で、はっきりした楕円文を横方向に施文している。施文原体の縁辺が当たっている痕跡を確認でき、施文原体の幅が3cm程度と推定できる。内面はなでてある。

2は口縁部の破片で縦方向に施文してある。3は底部に近い破片と思われ、縦方向に小さめの楕円文を施文してある。4は大きめの楕円文を入れている。施文方向は縦方向と思われる。5と6は大きめの楕円文を入れてある。7は底部に近い破片と思われ、大きめの楕円文を縦方向に入れている。8も大きめの楕円文だが、複数方向に施文された楕円文が入り混じっている。

9～11は胎土に金色に光る雲母が入っている。楕円文は明瞭ではないのが特徴である。12は複数方向の楕円文が入り混じっているが、楕円を観察すると、菱形に近い楕円文と卵形の楕円文が見られることから、少なくとも2種類の原体を使っていることがわかる。13も同様で、複数方向に施文した楕円文があり、楕円の形から、少なくとも2種類の原体を使っていると思われる。

14と15は雲母と砂粒が多い粘土を使っている。菱形に近い大きめの楕円文である。この2つは同一個体の可能性が高い。16は楕円文の粒がはっきりしている。17は雲母と砂粒の多い粘土を使っている。風化のため、楕円文は不明瞭である。18は小片ではあるが、厚みがある。小片ながら、複数方向の楕円文が混じっているのを観察できる。

19は底部に近い破片で、横方向と斜め方向の楕円文が見られる。原体の当たりが弱く、楕円文が明瞭でない部分がある。

20は円形に近い楕円文で、原体の楕円が大きく突出していたよう、楕円と楕円の間の彫りが深い。21は縦方向に施文してあるが、楕円が不明瞭である。22は横方向にはっきりした楕円文を施文してあり、原体端部の当たりも確認できる。23は底部に近い破片で、粘土のつなぎ目で割れている。横方向に楕円文を付けているが、不明瞭である。

24は口縁部の破片で、薄くつぶれたような楕円文である。口縁に近い部分は横方向に施文し、その下は斜め方向に施文しているのが見える。25は口縁部に近い破片で、横方向に施文している。口縁直下には施文していない部分が見える。

26は横方向に施文してある。楕円の粒は小さい。27は楕円がかなり不明瞭である。28は縦方向にはっきりした楕円文を施文してある。

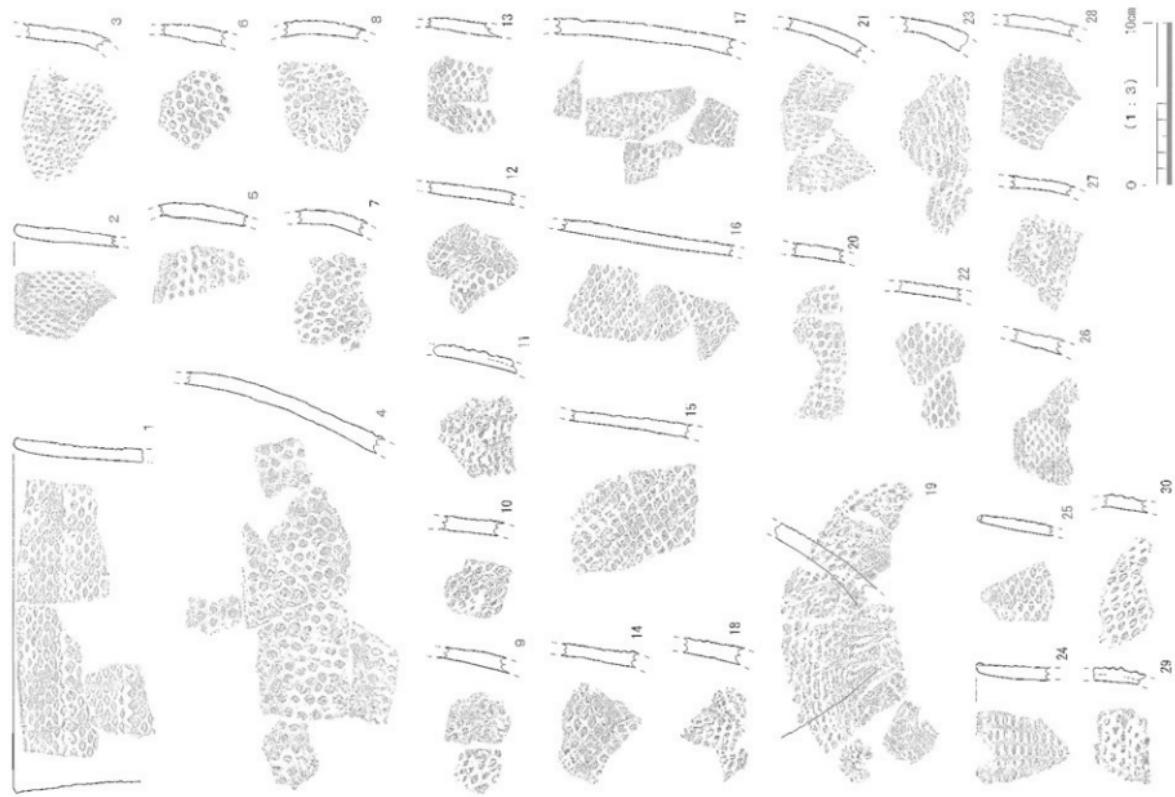
29は横方向に施文してあるが、楕円の大きさや形が不揃いである。30は彫りの深い楕円文を斜め方向に施文してある。楕円頂部のへこみも確認できることから、施文原体を強く押し当てたと思われる。

## (3) 楕円文土器（細久保式、田戸下層式並行ほか）

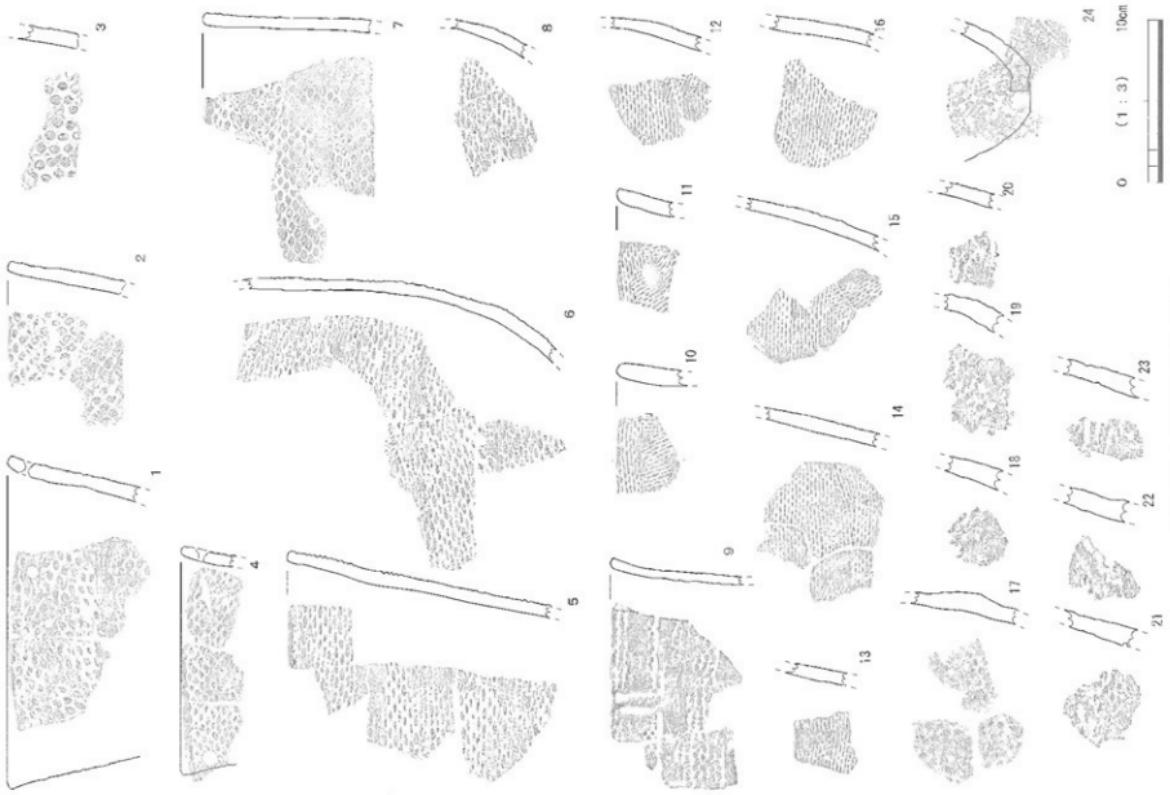
第163図-1は口縁を含む破片で、雲母の多い胎土である。補修孔が見られる。楕円文の施文方向は、複数の方向で、細久保式と考えられる。2は口縁部を含む破片で、雲母の多い胎土である。口縁部から楕円文を施文している。これも施文方向が複数方向で、細久保式と考えられる。3は雲母の多い胎土で、大きめの楕円文を複数方向に施文している。これも細久保式であろう。

4は口縁部を含む破片で、補修孔が見られる。口縁部直下から横方向に施文してあり、走行単位がはっきりしている。田戸下層式に並行するものであろう。5は口縁部から胴部にかけての破片で、横方向に施文している。走行単位が明確で、施文単位ごとに無文部を作る特徴がある。6は胴部から底部附近に至る部分で、胎土に雲母を多く含む。施文方向は横方向で、走行単位が明確である。7は口縁を含む破片で、横方向に施文しているが、原体の当たりが弱い部分がある。8は雲母を多く含む胎土で、横方向に施文している。5、6、8は同一個体の可能性が高い。

9は口縁部直下に、縦方向に粘土を貼り付けた突起が見られる。口縁部はやや外反する。施文方向は横で、無文に見える部分があるが、これは施文原体の当たりが浅いため文様が付かなかつた部分である。



第162圖 包含層出土繩文土器 2



第163圖 包含層出土編文土器 3

10～16は細かい梢円文で、異方向に施文する特徴がある。10は口縁部の破片で、口縁直下だけ横方向に施文し、その下は斜め方向に施文している。11は角度を変えて斜めに施文している。12は胸部の破片で、上半は横方向にやや角度を変えながら施文し、一部に大きく角度を変えて斜めに施文している部分がある。13もやや角度を変えて複数の方向に施文している。14は角度を変えながら施文しているが、一部に施文原体の当たりが弱く文様が付いていない部分がある。15は横方向の施文と45度程度角度を変えた施文が見られる。16は大方同じ方向に施文しているが、やや角度を変えた部分が見られる。

17～24は、梢円文が不明瞭な一群である。特に18～24は拓本によってかろうじて梢円文が確認できる程度で、土器自体は無文に見えるほどである。

#### (4) 山形文土器

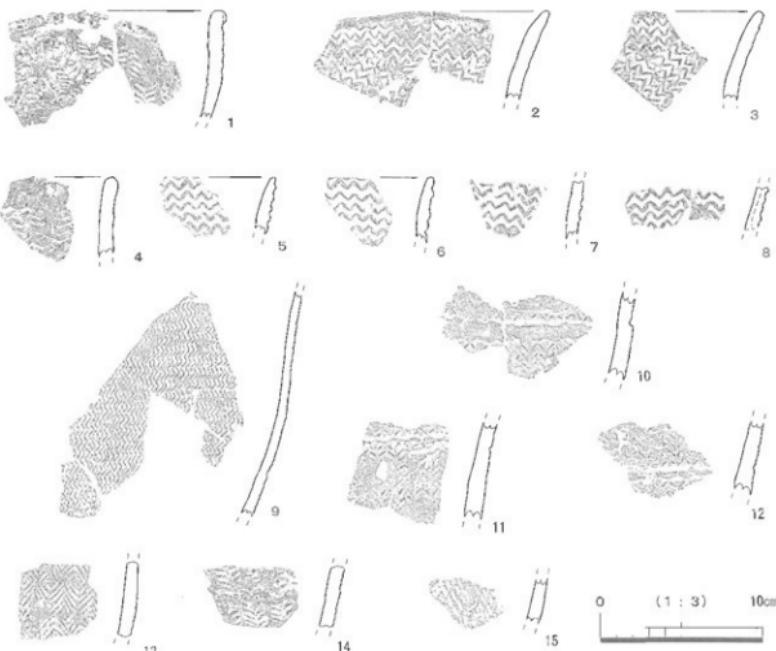
第164図-1は口縁を含む破片で、口縁端部を外側に折り返している。山形文は、原体の当たりが浅いためか不明瞭である。2は口縁直下に横方向に施文し、その下は斜め方向に施文している。3も同様に、口縁直下に横方向の山形文を入れ、その後で斜め方向に施文している。

4はやや幅の広い山形文を入れている。5～8は原体の影りが深いらしく、明瞭な山形文が付いている。9は雲母を多く含んだ胎土で、密接した山形文を縱方向に施文する特徴がある。10～12は「ハ」の字形が連続する山形文で、無文の部分を残している。

13は綾杉状の特徴的な山形文を横方向に付けている。14の山形文は不明瞭である。

#### (5) 格子目文土器

15の1点だけ出土している。文様は不明瞭である。



第164図 包含層出土縄文土器4

## (6) 田戸下層式土器

第165図－1と2は同じ場所で出土したもので、1の土器の中に2の土器が入った状態で出土した。1は尖底の鉢で、口縁部を下にして作らしく、底部は一端が飛び出している。文様は、胴の上部に並行する2本の沈線文を入れ、その上に斜め方向の沈線文を入れて、さらに一部には貝殻腹縁文を組み合わせて梢円文を意識したような文様が見られる。並行する沈線文の下は、縦方向の沈線文を入れている。沈線の構成から見て田戸下層式である。

2は尖底の鉢で、全面に梢円文が入っている。施文の方向は複数方向が入り混じっている。また、口縁に近い部分では、梢円文以外に沈線文も見られる。梢円文が主体ながら、沈線文が入っている点で興味を引く土器である。

2の土器が1の土器の中に入った状態で出土したことから、田戸下層式と梢円文土器が並行していることを証明する資料である。1は沈線が主体であるが、一部に貝殻腹縁文を組み合わせて梢円文を作ったように見える部分があり、2は梢円文主体で、一部に沈線文が入っているように、この2つの土器には、異系統の文様が同一土器に描かれている点で、興味を引く資料である。

第166図－1は雲母を多く含んだ胎土で、口縁頂部はなでて面取りをしてある。横方向と斜め方向の沈線文を組み合わせている。沈線の切り合いを見ると、横方向の沈線文を引いた後で斜め方向の沈線文を引いている。また、補修孔が見られる。

2も雲母を多く含む胎土で、1と同一個体の可能性が高い土器である。口縁頂部は！と同じくなれて面取りをしてある。施文方法は、縦方向と横方向の沈線文で方形の区画を作り、その中を斜め方向や横方向の沈線文で充填している。この土器にも補修孔が見られる。

3も1、2と同一個体と思われる土器である。胎土に雲母を多く含み、口縁頂部はなでて面取りをしてある。縦方向と斜め方向の沈線が見られる。

4は、胎土に雲母を多く含んでいる。口縁頂部をなでてあるが、1～3のように平らになるような面取りはしていない。口縁直下に横方向の沈線を引き、その下に円形を描く沈線文を2本組み合わせている。そして、沈線を引いた後で、表面をなでているため、沈線の中に表面の粘土がはみ出している。

5は胴部の破片で、右下がりの方向に条痕文のような文様を入れ、それに交差する方向で別の工具を使って沈線を入れている。条痕文のような文様は、長く連続するもので、器面調整ではなく、文様として描いたと思われる。また、条痕のような文様に並行して、角のある工具を使い、角の部分を押し当たる刺突文がある。横方向に区画する意図が見られないことから、田戸下層式ではないと思われるが、田戸下層式並行～上層式のいずれかに位置づけられるであろう。

6～8は田戸下層式の同一個体と思われるものである。いずれも横方向の沈線文が見られる。

## (7) その他の沈線文土器

第166図－9は屈曲部のある破片で、屈曲する辺りに連続する刺突文を入れ、その下に斜め方向の沈線文を入れ、さらにその下にも刺突文を入れ、その下に蛇行する沈線文を入れている。この蛇行する沈線文は見方によっては山形文にも見える。田戸上層式であろうか。

10～14は早期の沈線文土器で、同一個体と思われるものである。10は斜めの沈線文とこれに並行する刺突文が見られる。文様構成は5の土器と良く似ており、早期の沈線文七器と思われる。11は斜め方向に沈線とそれに並行する刺突文が見られる。10と同一個体であろう。12～14は縦方向の沈線と斜め方向の沈線を引いてある。

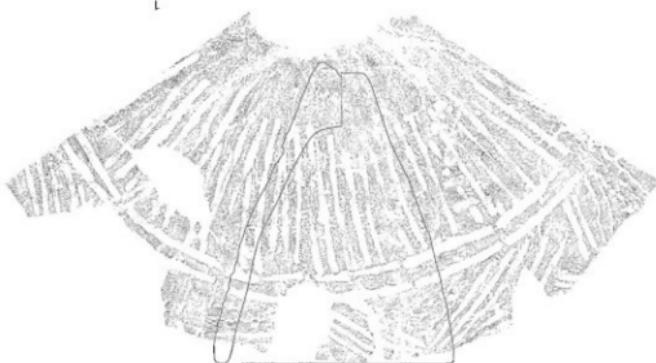
15は同一個体の破片がややまとまって出土したもので、粗い条痕文を付けてある。条痕の付け方は口縁部の下は横方向に条痕を付けた後、斜め方向の条痕を付けている。この条痕の付け方は、田戸下層式の沈線の引き方と同様であり、条痕文で出戸下層式の文様を表現していると考えられる。

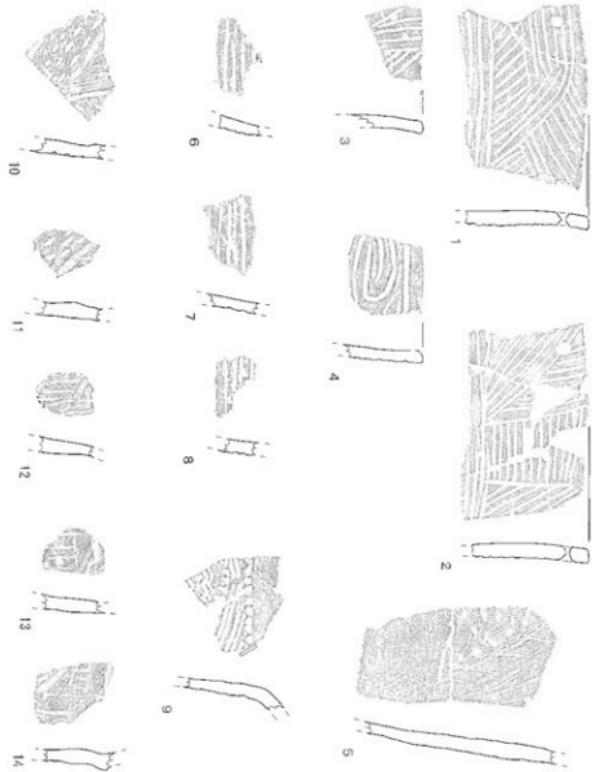
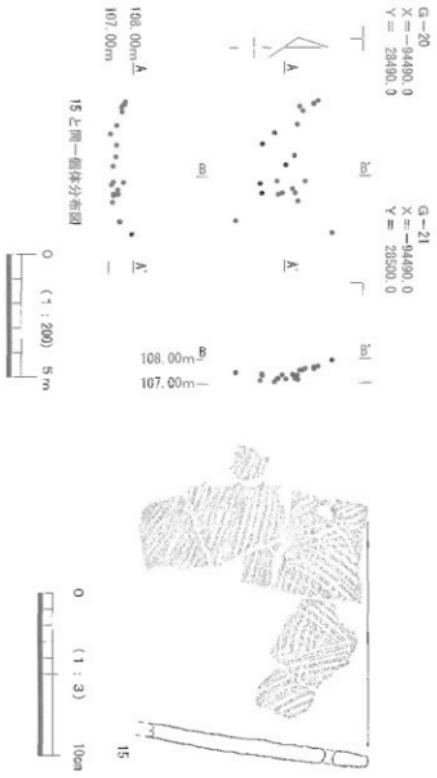
第165圖 包金環出土韁文土器5

0 (1 : 2) 10cm



1





第166圖 包含層出土繩文土器6

#### (8) 野島式土器

第167図-1は縦方向に沈線を入れているが、沈線は浅く凹線のようになっている。2は縦方向と横方向に沈線を入れている。沈線の中央には粘土の盛り上がりが見られることから、施文原体は、先割れになった棒状工具を想定できる。3は指によるなでと思われる凹線状の沈線を横方向に入れ、その下に縦方向に2本の並行する浅い沈線を入れている。この沈線で、縦方向に文様帯を区画していると思われる。この2本の沈線の間は無文になっており、その両側、文様帯と思われる中に、棒状工具による横方向の沈線を入れている。

4は縦横に浅い凹線状の沈線を入れている。5は、指によると思われる横方向の凹線状の沈線を入れ、その下に縦方向の沈線を入れ、さらにその下に横方向の沈線を入れている。6は縦方向に浅い凹線状の沈線を入れ、その両脇に縦方向の沈線を入れている。7は斜めに2本の並行する沈線があり、その間は無文になっている。そして、並行する沈線の両脇に沈線を入れている。

8は右上がりの沈線が見られ、その上は無文で、下は沈線を充填してある。9は右下がりの沈線があり、その左側は無文、右側には浅い沈線を入れてある。10はかなり浅い沈線を縦方向に入れている。

以上の土器は、胎土が似ていることと、縦方向、もしくは斜め方向に並行する沈線を入れ、その両脇を沈線で充填する施文方法が共通していることと、横方向に凹線状の沈線が入っている個体があることから、同一個体と思われる。

11は縦方向と斜め方向にはっきりした沈線を入れている。一部に無文の部分が見える。12は、屈曲する部分のある胴部の破片で、眉曲部よりも上が文様帯になっている。文様帯には、縦方向と斜め方向に沈線を入れて文様帯を区画した後、区画内に斜めの沈線を入れている。眉曲部よりも下は無文帯で、条痕が残っている。13は野島式の無文の部分の破片と見られ、表裏に条痕が付いている。

14は、器面を微細な隆起帯で方形に区画し、地文の条痕を残す区画となでて条痕を消す区画に分けている。15は微細な隆起帯を円形に貼り、その中を無文にして、外側に沈線を引いている。沈線の原体は、角のある棒状工具である。16は縦に2本の微細な隆起帯を貼っており、地文の条痕が残っている。17は斜めに並行する細い隆起帯を貼り、その後で縦方向に並行する沈線を入れている。18は縦と横に細い隆起帯を貼り、文様帯を区画している。そして、縦の隆起帯の左側に横方向の沈線を入れ、右側には斜め方向の沈線を入れている。

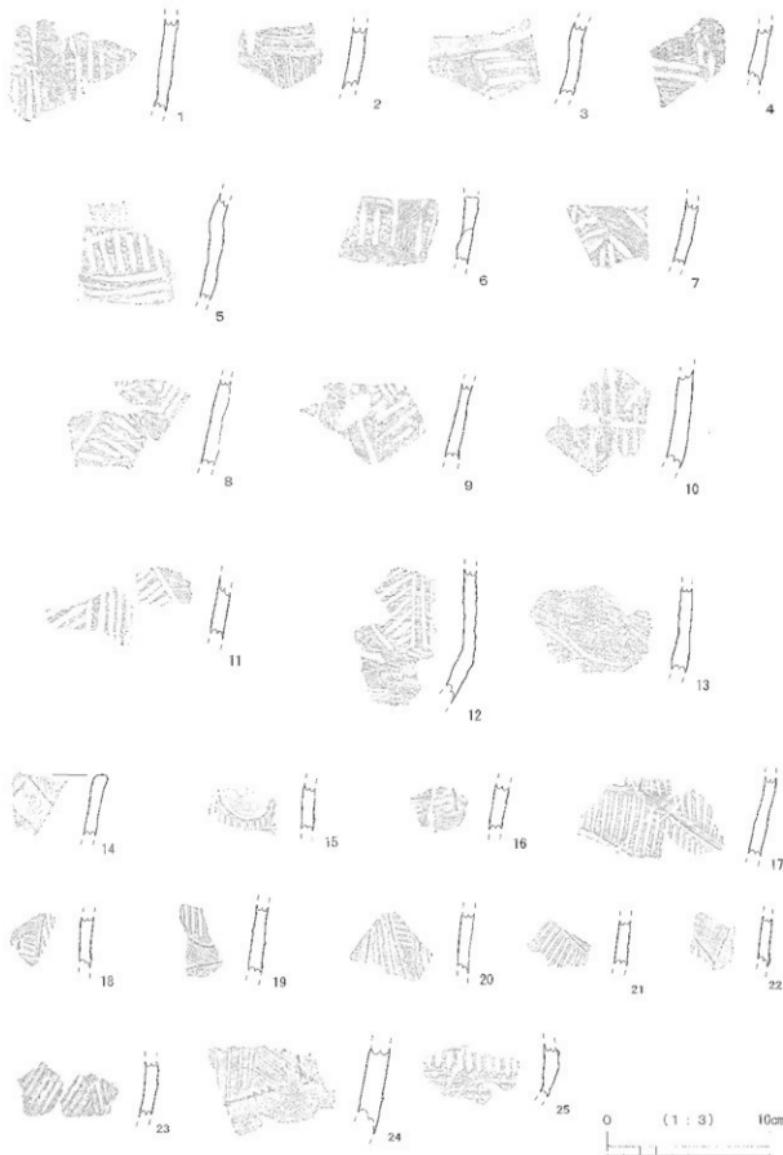
19は微細な隆起帯を円形に貼り、その中に沈線を入れている。また、左下がりの隆起帯も見られ、円形に巡る隆起帯との間は無文として、その下には斜め方向に並行する沈線を入れている。20は縦方向にほぼ並行する細い隆起帯を貼り、その間を沈線で充填している。この時、縦方向の隆起帯に並行する沈線を入れる区画と直交する方向に沈線を入れる区画が見られる。21は斜め方向に並行する沈線が見られる。22は「V」の字状に交差する隆起帯が見られる。これで文様帯を区画しているようで、「V」の上と右下は、器面をなでて無文として、左下は沈線を入れているのが見える。

14~22は、胎土が似ている点と、微細な隆起帯で文様帯を区画している点、文様帯を沈線で充填する点で共通する施文方法をとっている点、そして、内面に同じような条痕が見られる点から、同一個体と思われる。

23は右上がりの沈線と右下がりの沈線が交差している状況が観察できる。

24は厚みのある破片である。微細な隆起帯を縦と横に貼り、文様帯を区画した後、区画内に、斜め方向の沈線を入れている。この時、右下がりの沈線を並行に数本入れ、その後に右上がりの沈線を並行に数本入れている。また、隆起帯上には絡状体の圧痕が見られることから、野島式と清水柳式の中間に位置づけられる資料である。

25は縦方向に並行する沈線があり、その下は無文である。文様帯と無文帯の境界の破片であろう。



第167図 包含層出土縄文土器 7

#### (9) 鶴ヶ島台式土器

12区のH15グリッド付近で、同一個体と思われる鶴ヶ島台式土器がやまとまって出土した(第168図)。出土した場所は、12区で報告した遺物分布域3に隣接しているが、遺物分布域3は、縄文時代前期末、十三菩提式土器と大歳山式土器に伴う一括資料として抽出したため、この鶴ヶ島台式土器は、まとめて出土したものではあるが、遺物分布域3からは除外した。

第168図-1は口縁部を含む破片で、波状口縁になっている。波状口縁から縦に細い隆起帯を貼り付け、これによって縦方向に文様帯を区画し、次に横方向に2本の並行する隆起帯を貼り付け、これによって方形の文様帯を区画している。次に方形の文様帯内に斜め方向に2本の並行する隆起帯を貼り付け、文様帯の中をさらに区画している。そして、並行する隆起帯の間を無文として、並行する隆起帯で区画した内部を太い沈線で充填している。また、縦方向と横方向の隆起帯には円形の刺突文が連続して見られる。内面は条痕による調整である。

2も波状口縁を含む破片であるが、施文方法が1と異なる。波状口縁から縦方向に細い隆起帯を貼り、次に横方向の隆起帯を貼ることで、方形の文様帯を作る。方形の文様帯内部は、さらに横方向の隆起帯で区画する部分と、斜め方向に1本の隆起帯を入れて区画する部分が見られる。区画した文様帯内部には無文の部分と沈線を充填した部分が交互に配置される。沈線には、同心円状に円形を描くものが見られる。そして、鶴ヶ島台式の特徴として、隆起帶上に円形の刺突文が見られる。

3は口縁の一部が残っているが、波状口縁になるかどうかは不明である。縦方向に並行する2本の隆起帯があり、その間は無文になっている。これで縦方向に文様帯を区画しているようで、その両脇には斜め方向に2本の隆起帯を入れてさらに文様帯を区画している。そして、無文部分と沈線を入れる部分が交互に配置している。

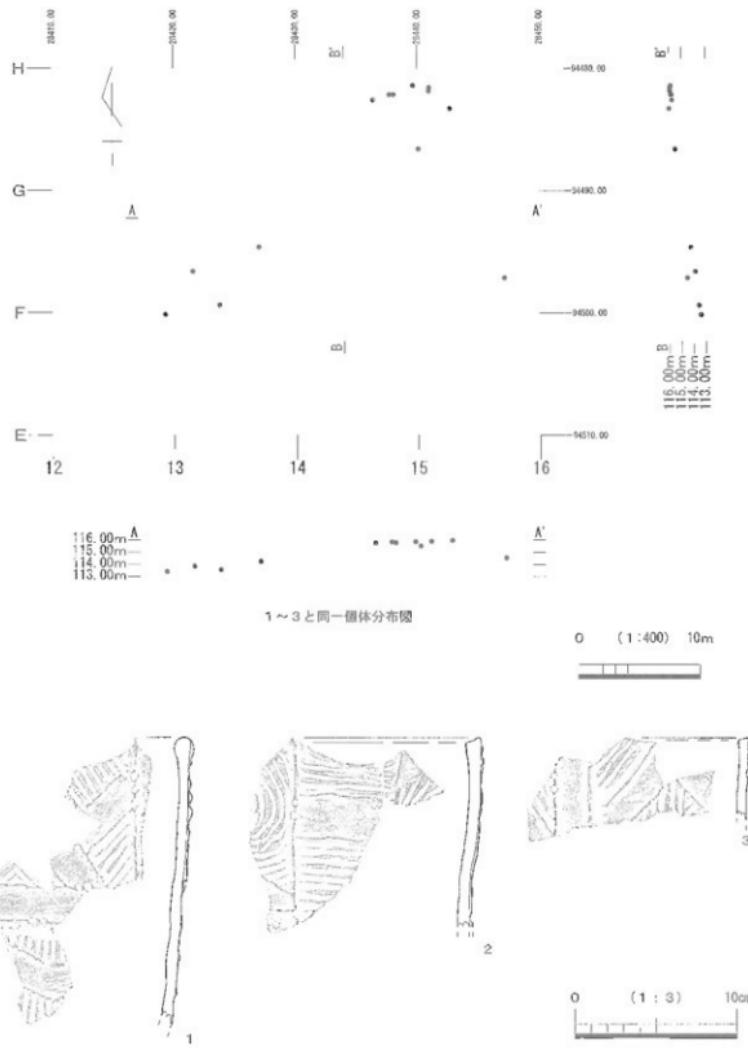
第169図-1は口縁部を含む破片で、口縁頂部には棒状工具による押圧が連続して見られる。胴部には縦方向と斜め方向に隆起帯を貼り、隆起帯で区画した中に、斜め方向の細い沈線を入れている。斜め方向の沈線は、右下がりで並行する沈線と右上がりで並行する沈線がある。これらの沈線は、分けて施文してあるため、右下がりの沈線と右上がりの沈線が交差することはない。この特徴は下記の土器にも共通して見られるため、以下ではこの特徴が見られる場合「二方向の斜め沈線」と表記する。隆起帯の交点と隆起帯の上には棒状工具による刺突が見られる。内面は条痕調整である。

2は口縁部の破片で、口縁頂部には棒状工具による押圧が連続している。口縁直下をなでて無文の部分を作りその下に細い隆起帯を横方向に貼っている。隆起帯上には棒状工具で刺突し、隆起帯の下に、二方向の斜め沈線を入れている。3は、細い隆起帯を貼り、隆起帯上には、棒状工具による刺突が見られる。そして、隆起帯で区画した中に二方向の斜め沈線が見られる。4は縦方向の隆起帯と斜め方向の隆起帯が交差する部分に、棒状工具による刺突が見られる。そして、隆起帯で区画した中には斜めの沈線を引いてある。

5は補修孔のある破片で、横方向に並行する細い隆起帯があり、その間は無文になっている。その下には右下がりと左下がりに、それぞれ並行する2本の隆起帯が伸び、それらの隆起帯の間は、やはり無文になっている。そして、隆起帯で区画された中には二方向の斜め沈線が見られ、隆起帯が交差する部分には、棒状工具による刺突が入っている。

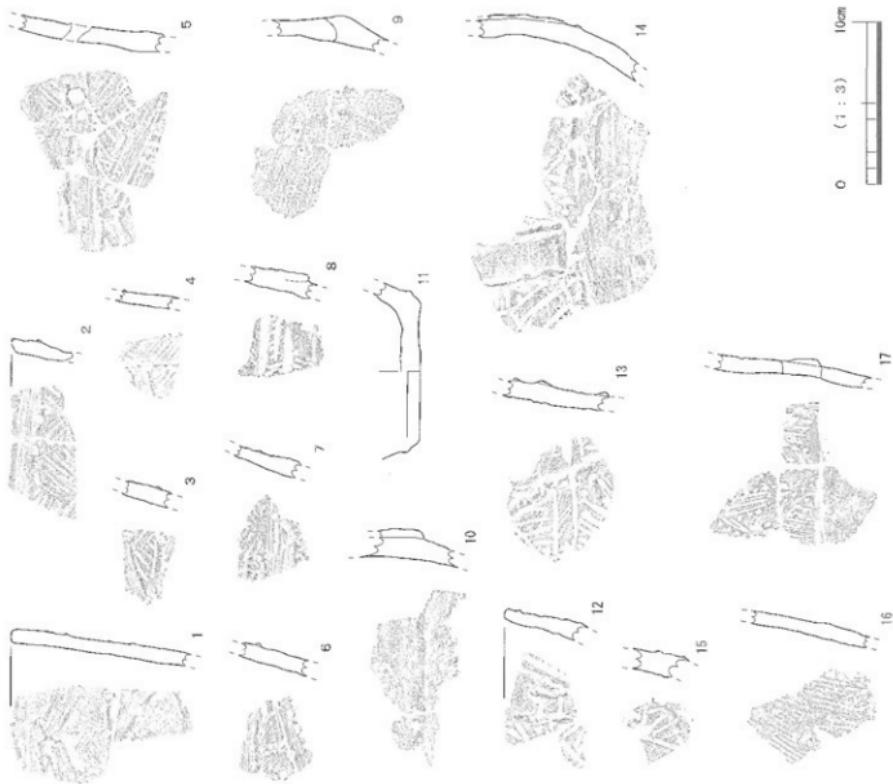
6は横方向の隆起帯があり、その上は無文で、条痕調整が残っている。左下がりの隆起帯も見られ、その隆起帯と横方向の隆起帯の間に、右下がりの細い沈線を充填している。左下がりの隆起帯には、隆起帯上に刺突ではなく、その下のすれた部分に2箇所の刺突がある。

7は横方向に2本の並行する隆起帯があり、その間は無文になっている。この隆起帯の上下は文様帯になっていて、二方向の斜め沈線が見られる。



第168図 包含層出土縄文土器8

第169圖 包含層出土繩文土器 9



8は、横方向に並行する太い沈線を入れ、沈線の間で盛り上がった部分に棒状工具を斜めに突き刺すようにして連続する刺突文を入れている。9は胸部の屈曲部分の破片で、条痕による調整が残っている。10も胸部の屈曲する部分で、太い粘土を貼り付けて屈曲を強調したようになっている。11は底部の破片である。8~11は同一個体と思われる。

12は、縦方向に細い隆起帯を貼り、隆起帯上には連続する刺突が見られる。縦方向に並行する隆起帯の間を無文にする土器が多いが、この土器では、この部分に横方向に2本の沈線を入れている。また、縦の隆起帯の左側は、斜めに並行する沈線を充填する土器が多いが、この土器では、斜め方向の沈線は入っているものの、方向の揃わない沈線を充填している。鶴ヶ島台式としては異質であろう。

13は右下がりの隆起帯があり、その隆起帯上に刺突が見られる。隆起帯の両側には、横方向に並行する2本の沈線を入れ、その間に無文にして、その上下に斜め方向で並行する沈線を入れている。

14は文様帶と無文帶の境界に当たる破片である。中央付近に横方向の隆起帯を貼り、これが文様帶と無文帶を区画している。文様帶には縦に並行する2本の隆起帯があり、その間は無文にしてある。縦の隆起帯の左側には、横に並行する沈線を數本引き、それを左上がりに並行する沈線で分断する施文が見られる。また、縦の隆起帯の右側には、「へ」の字に沈線を引き、その中に縦方向の沈線を入れるという施文も見られる。無文帶は条痕による調整が残っている。

16は無文部の破片で、条痕による調整が残っている。17は、文様帶と無文帶の境界に当たる破片である。文様帶の下限には粘土を貼って盛り上げ、無文帶との間に段差を作つて境界にしている。この土器に特徴的なのは、文様帶の区画に隆起帯を貼らずに、代わりに2列で並行する連続刺突文を入れていることである。そして、連続刺突文で区画した中を沈線で充填している。文様帶の区画と施文方法から、鶴ヶ島台式で良いと思われるが、変わった施文方法である。

#### (10) 打越式土器、打越式並行

第170図-1は、口縁部直下に貝殻腹縁文を入れ、その下に波状の貝殻腹縁文を付けている。原体の当たりは深い。2は縦方向に交差する条痕文が見られる。3は文様が見られないが、独特の赤褐色の胎土から打越式と考えた。4は厚みのある土器で、交差する条痕が見られる。5は条痕調整の上に、貝殻腹縁文で綾状の文様を作っている。これも原体の当たりが深い。

6~8は交差する沈線が見られる土器で、打越式に特徴的に見られる交差する条痕を表現していると思われることから、打越式に並行するものと考えられる。

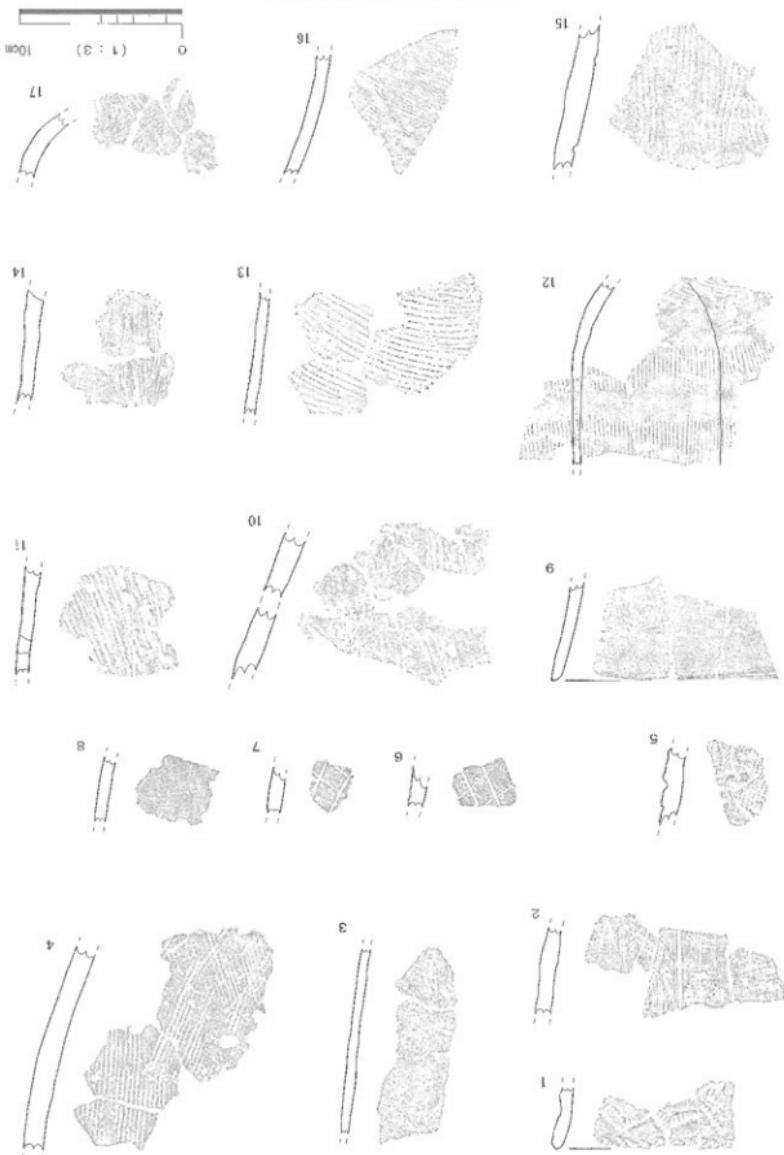
#### (11) 条痕文土器

第170図-9は表裏両面に条痕が見られる。10は厚みのある破片で、表裏に条間の広い条痕が付いている。11は2箇所の補修孔のある破片で、粗い条痕が見られる。

12は、縦方向にはつきりした条痕が付いている。底部には斜め方向の条痕が見られる。底部の条痕は器面調整と考えられるが、胸部の条痕は、器面調整ではなく文様であろう。条痕を観察すると、条間で粘土が盛り上っていることから、条間には施文原体が当たっていないとわかる。このことは、条痕端部で施文原体が強く当たっている部分でも、条溝は深いものの、条間に施文原体の痕跡が全く付いていないことからもわかる。また、原体の当たりが浅い部分は細く、当たりが深い部分は太くなっていることから、施文原体は、先端が尖っていることになる。このことから、施文原体は櫛状のものを想定できる。

13は斜め方向に粗い条痕が入っている。これは条間に施文原体が当たっていることから、貝殻が板状の工具を想定できる。14は縦方向に細かい条痕が入っている。条痕一単位の幅は狭い。同様の条痕は、二枚貝の頂部を使えば再現できる。15は縦方向に粗い条痕が見られる。16は斜め方向に細い条痕が入っている。施文原体の幅は1cm程度で、条がはつきりしないことから、施文原体は、はつきりと凹凸のついたものではなさそうである。17は底部に近い破片で、風化のため条痕ははつきりしない。

第170図 包含層出土縄文土器10



#### (12) 清水柳E類土器

第171図-1は口縁部の破片で、器壁は、口縁部から胴部にかけて急に厚くなる。口縁頂部をなでて面取りをしており、胴部には粗い絡状体の圧痕がある。

2は口縁部に近い破片で、これも急に厚みが増している。器面には粗い絡状体の圧痕がある。1と同一個体であろう。

3は口縁を含む破片で、緩い波状口縁になっている。口縁直下から細かい絡状体の圧痕が見られる。胎土に、独特的の滑るような感触がある。滑石の原石に触った感じに似ている。同様な胎土は、第161図-12~15、20や第171図-16~19の縄文土器にも見られる。

#### (13) 上ノ山式土器

第171図-4は口縁部の破片で、口縁直下に太い隆起帯を貼り、斜めに棒状の工具を押し当てた後、縱方向に連続する刻み目、もしくは、棒状工具による縱方向の押圧を入れている。太い隆起帯を貼ったというよりも、押圧の結果、隆起帯がつぶれて太くなつたと言つた方が適切である。

#### (14) 入海I式土器

第171図-5~9は隆起帯がはつきりしていることから、上ノ山式との区別が難しいが、隆起帯が1条ではなく2条入っていることから、入海式と考えた。5は口縁部の破片で、緩い波状口縁になっている。そして、口縁直下に棒状工具で連続する刻み目を入れている。口縁の下には2列の隆起帯を貼り、その上を棒状工具で押圧している。

6は口縁頂部に連続する押圧を入れ、口縁直下に2列の隆起帯を貼り、その上を棒状工具で押圧している。施文方法は5と同じだが、5は波状口縁であるのに対して、この土器は平縁の口縁である。

7は口縁頂部に連続する押圧が見られる。口縁直下には2列の隆起帯があり、その上に棒状工具による押圧が見られる。これも5、6と同じ施文方法であるが、別個体である。

8は、隆起帯を貼った上に隙間のない押圧文が見られる。4~7に比べると隆起帯が退化した印象を受ける。

9は口縁部の破片で、口縁頂部に棒状工具による連続する押圧がある。そして、口縁直下に隆起帯を貼り、その上にも連続する押圧が見られる。

#### (15) 入海II式土器

第171図-10と11は口縁に近い破片と思われる。低い隆起帯を貼り、その上に綾杉状の刻み目を入れている。連続する刻み目によって、隆起帯はほとんどつぶれている。

#### (16) 型式不明の土器

第171図-12~15は、早期末と思われる土器である。いざれにも共通した特徴がある。

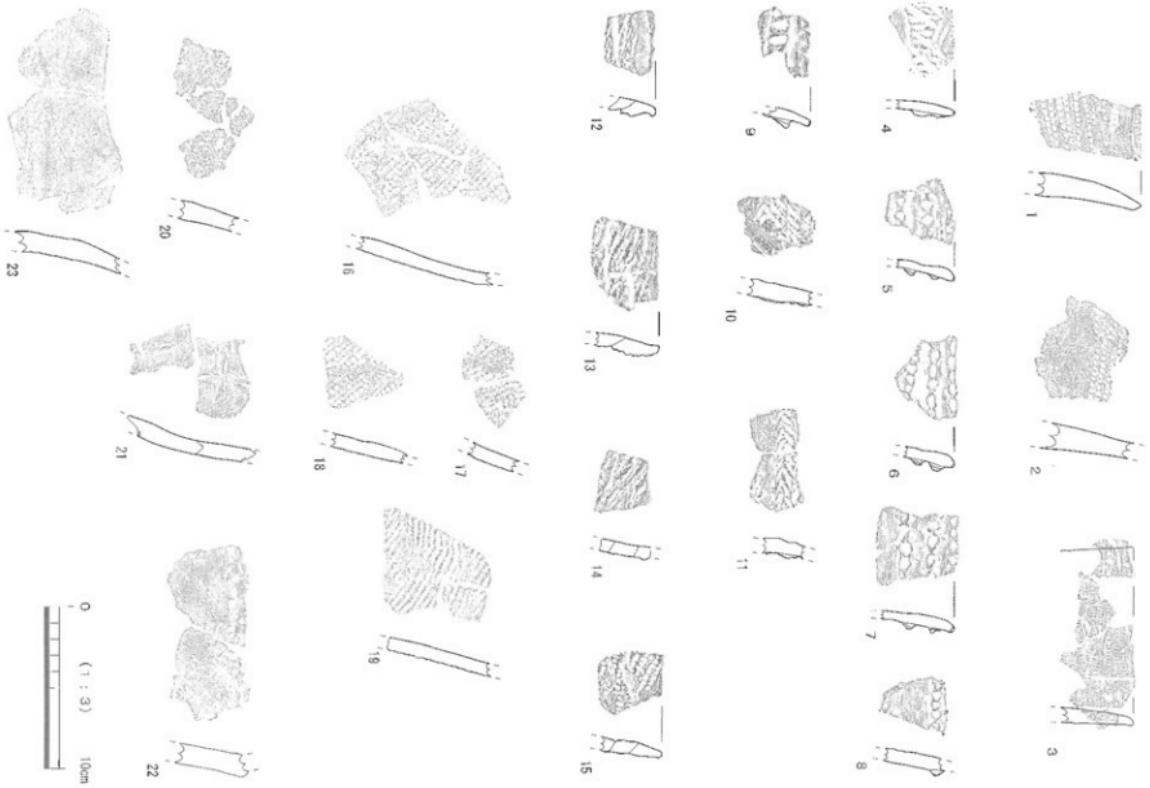
粘土のつなぎ目をなでて消すことなく、意図的に残し、それを沈線状の文様にしている。これによつて、粘土のつなぎ目の間が隆起帯を貼ったように盛り上がりつて見える。そして、12~14は、その盛り上がつた部分に撚糸文のような文様を付けており、15はRLの縄文を付けている。このように、隆起帯を貼り、その上に様々な文様を施文する方法は、早期末の塙屋式に見られることから、塙屋式に並行する土器と考えられる。

#### (17) 早期の縄文土器

第171図-16~18は同一個体と思われる土器で、LRの縄文を入れている。胎土は大きさの割に軽く、すべすべした独特の手触りで、滑石の感触に似ている。酷似した胎土が、第161図-12~15、20の撚糸文土器や第171図-3の清水柳E式に見られる。19はRLの縄文を入れている。

#### (18) 無文土器

第171図-20~23は早期と思われる無文土器である。



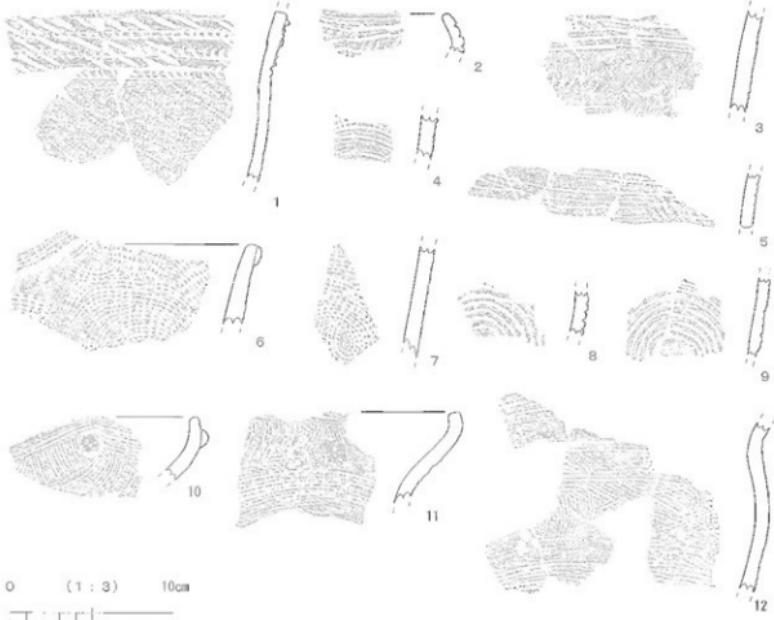
第171図 包含層出土埴文土器11

(19) 諸磯式土器

第172図-1は諸磯a式である。竹管文を3本並行して入れ、その上に「C」字形のスタンプ文を押し、さらに斜めの沈線を連続して入れている。その下には縄文の押圧が見られる。

2～5は諸磯b式である。2は口縁部の破片で、口縁直下に竹管文を引き、その後で棒状工具による押圧が見られる。3はLRの縄文を地文として、それを磨り消してから並行竹管文を引いている。竹管文がないところでは、地文の縄文が消えきらずにわずかに残っている。4は円形に巡る竹管文と結節竹管文が一部観察できる。5は竹管文を付けた後でRLの縄文を付けている。

6～12は諸磯c式である。6は口縁部を含む破片で、口縁部を折り返して隆起帯のようにして、その上に密接した結節竹管文を入れている。胸部にも密接した結節竹管文を同心円状に巡らせている。7は6と同一個体と思われるもので、密接した結節竹管文を螺旋状に巡らせている。8と9は同一個体と思われる土器で、竹管文で同心円状の文様を描いている。10は波状口縁の破片で、口縁直下に、口縁に並行して竹管文を入れている。そして、口縁直下にボタン文を貼り、ボタン文から密接した竹管文を斜め方向、同心円、螺旋状に展開させている。11は10と同一個体と思われる口縁部を含む破片で、口縁外縁は口縁部に沿って竹管文を入れ、その下には縦方向に弧を描く密接した竹管文を入れている。胸部に至るくびれ部には横方向に並行する密接した竹管文を入れている。12は10、11と同一個体と思われる。頸部のくびれから胸部に至る破片である。11で見たように、くびれ部分には横方向に密接した並行竹管文を入れ、その下に無文帶をはさんで並行竹管文を引き、さらに無文帶をはさんで並行竹管文を引いている。無文帶には地文のRL縄文が消えきらずに残っている部分がある。並行竹管文の下は胸部で、斜め方向や弧を描く密接した竹管文が入り組んでいる。そして、その下には再び並行竹管文が現れる。



第172図 包含層出土縄文土器12

## (20) 十三菩提式土器

文様の種類が多いため、特徴的な文様によって分類する。まずは浮線文の有無によって分ける。次に、浮線文を持つものを、押圧、結節、交差貼付、縦位貼付といった、浮線文の貼付方法で分ける。

### ①浮線文を持たない一群

#### 集合条線文

第173図-1は条線文でレンズ状の文様を書き、その中を削り取っている。削り取ることを想定して作っているため、器壁が分厚い。

#### 竹管文・条線文

2~11は諸巣c式の系譜を引くものと思われる。2は、斜め方向の竹管文を組み合わせて波状の文様を作り、その上に並行竹管文を施文しており、その下は無文になっている。無文部分はなでてあるが、その前に施文したRLの縄文が消えきらずに残っている。3はRLの縄文を施文した後、竹管文で文様帯を区画している。区画した中は、無文の部分と条線文を充填する部分がある。4は底部の破片で、縦方向と斜め方向に集合条線文が見られる。

5~11は縄文と竹管文を入れており、5~7、8と9、10と11が同一個体と思われる。5は、LRの縄文を施文した後、波状の竹管文とその下に曲線を描く竹管文を入れている。6はLRの縄文を施文した後、竹管文を入れている。竹管文には、曲線を描くものと波状を描くものが見られる。7はLRの縄文を施文した後、波状の竹管文と緩く曲線を描く竹管文を入れている。

8は、RLの縄文を施文した後、縦方向に3本の竹管文を入れている。竹管文を並行して引いた場合、偶数の本数になるが、この資料では、3本ある竹管文の中央の1本が重複しているため3本になっている。9は、RLの縄文を施文した後、縦方向に竹管文を入れている。竹管文は2回に分けて入れている部分があり、竹管文の交差が見られる。10はRLの縄文を入れた後、縦方向に竹管文を入れている。11は、RLの縄文を入れた後、縦方向に直線的な竹管文と蛇行する竹管文を入れている。蛇行する竹管文は、方向が違う斜めの竹管文を組み合わせて蛇行した文様を作っている。

### ②浮線文を持つ一群

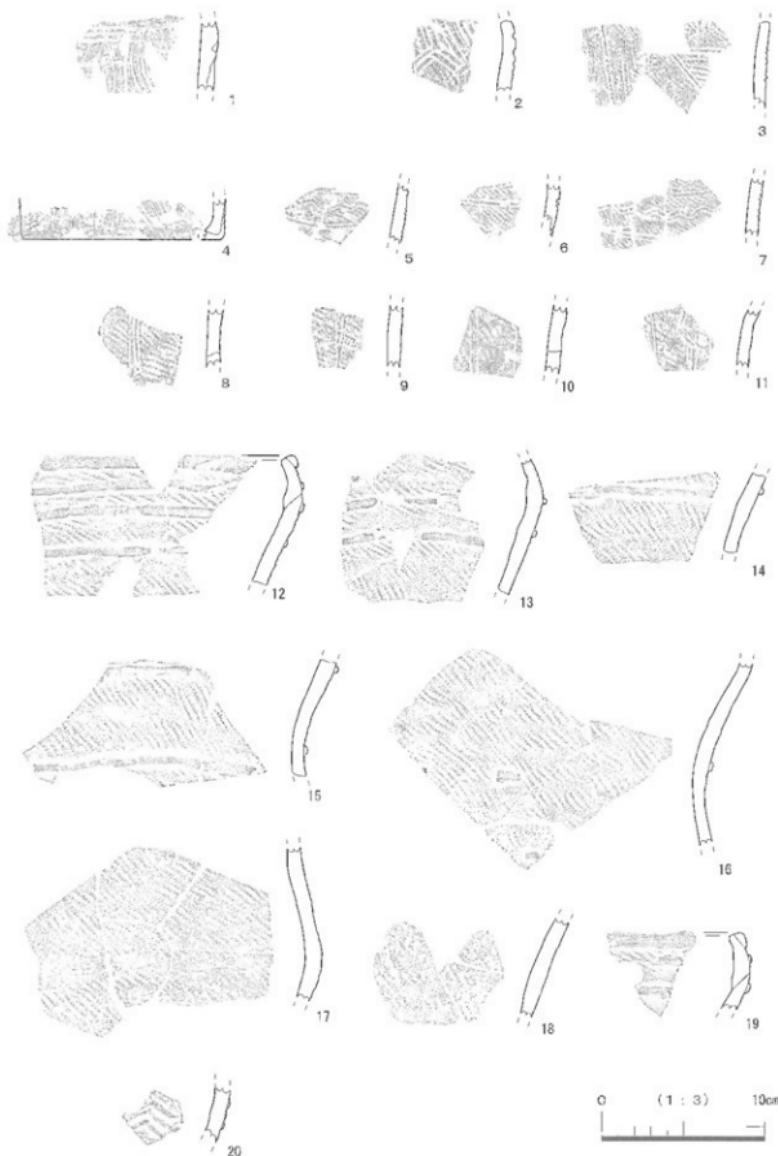
#### 押圧、結節のない浮線文

第173図-12~20は浮線文を貼っている。12~19は同一個体と思われ、RLの縄文を地文としてその上に横方向に並行する浮線文を貼っている。12は口縁頂部をなでて面取りをしてある。そして、口縁直下に1本の浮線文を貼り、その下に3本の浮線文を貼っている。13は、地文の縄文を一部なでて消した後、浮線文を貼っているが、一部の浮線文が剥がれている。14と15も、縄文の一部をなでて消した後、浮線文を貼っている。14では浮線文のつなぎ目が観察できる。16~18では浮線文のほとんどが剥がれており、浮線文を受けた痕跡を確認できる。拓本で、横方向に薄い縞模様のように見える部分が浮線文の痕跡である。浮線文が剥がれた跡には地文の縄文が残っていることから、浮線文の接着が弱かったことがわかる。また、縄文の一部をなでて消す特徴も見られる。19は口縁部の破片で、口縁部外面に浮線文を貼り付けて、その下に2本の浮線文を貼っている。そして、この2本の浮線文の間をなでて、地文の縄文を消している。

20は、3本の浮線文を波状に貼り、浮線文の間に細い棒のようなものを入れてなでることで浮線文を固定している。地文の縄文がわずかに確認できる。

#### 押圧浮線文

第174図-1~6は、LRの縄文を地文として、縄文の一部をなでて消した後に浮線文を貼り、浮線文を棒状工具か指で押圧している。1~5は、浮線文の上半分だけを押圧する特徴が見られる。胎土も似ていることから同一個体であろう。6は浮線文の中央を押しつぶすように押圧している。



第173図 包含層出土縄文土器13

### 交差浮線文

第174図-7と8は口縁部の破片で、口縁直下に交差する浮線文を入れている。7には地文にLの無節繩文が確認できるが、8には地文は見えない。

### 縦区画浮線文

第174図-9はRLの繩文を入れた後、縦方向に浮線文を貼っている。そして、縦方向に区画した中の繩文をなでて消している部分がある。

### 浮線文貼り付け後に繩文施文

第174図-10と11は、細い浮線文を貼り付けた後に、RLの繩文を入れている。繩文施文と浮線文施文が逆になる資料である。施文の順番は、地文の繩文を付けた後、浮線文を貼り、さらに浮線文の上だけ繩文を付けている。12と13は浮線文がない部分の破片であるが、胎土からみて、10、11と同一個体と思われる。両方とも繩文の一部をなでて消す特徴がある。

### 結節浮線文

第174図-14は口縁部の破片で、口縁直下に浮線文を貼り、その下はLRの繩文を地文として結節浮線文を1本横方向に貼り、さらにその下から斜め方向の結節浮線文を垂下させている。15は横方向の結節浮線文とその下に斜め方向の結節浮線文が見られる。地文は確認できない。16はRLの繩文を地文として、横方向に結節竹管文を貼っている。厚みのある方を下と考えたが、結節の方向が右から左のため、上下が逆になるか、左利きによる施文かもしれない。17は、横方向の結節浮線文の間をつなぐように縦方向の結節浮線文を貼っている。18はRLの繩文を地文として、横方向に2本の結節浮線文を貼っている。そして、2本の結節浮線文の間は、繩文をなでて消しているが、一部に消えきらずに繩文が残っている。19は胴部のくびれた部分の破片で、RLの繩文を地文として、くびれ部の下に横方向に2本の浮線文を貼り、くびれ部の上には斜め方向の結節浮線文を貼っている。20は、LRの繩文を施文した後、横方向に2本の結節浮線文を貼り、さらにその下に1本、浮線文を貼っている。21はLRの繩文を施文した後、横方向に結節浮線文を貼っている。20と21は同一個体と思われる。厚みのある方を下と考えたが、結節の方向が右から左になっているため、上下が逆になるか、左利きによる施文かもしれない。

### 細密浮線文

第174図-22は、細かい無節繩文を施文した後、一部を磨り消し、細い浮線文を縦方向に貼っている。そして、一部では縦方向の浮線文の間に、波状に浮線文を貼っている。さらに、一部の浮線文には結節も見られる。竹管を使っていていると思われるが、かなり細い竹管であろう。23は、非常に細い浮線文で、連続する円形の文様を作り、その上下に細い浮線文を貼っている。22、23とも、非常に細い浮線文を貼っているため、剥がれている部分もある。

### 繩文

第174図-24~30、32は繩文の一部を消してある。これだけでは十三菩提式と判断できないが、第173図-12~19のように、繩文施文の後、一部をなでているのだが、磨り消す程には消しきっていない。むしろ、繩文が消えかかる程度に弱くなる点に特徴がある。このことから、これらの土器も十三菩提式の浮線文などがない部分の破片と考えた。

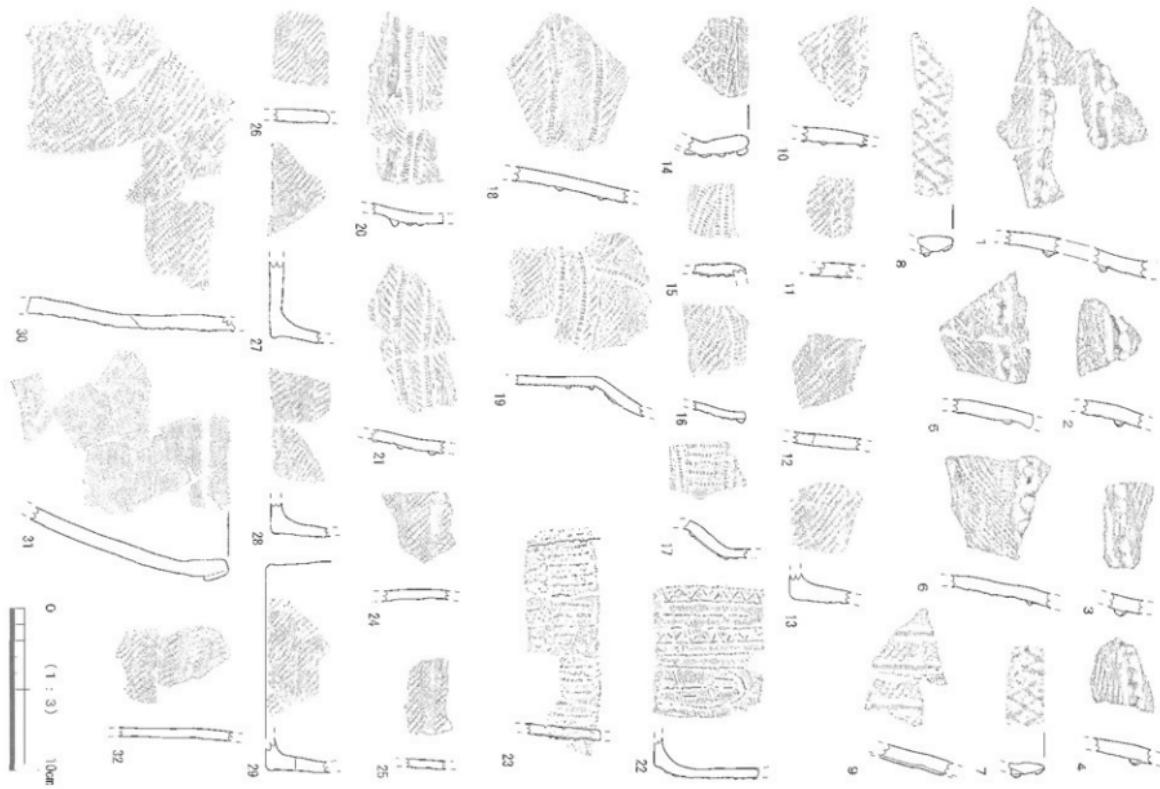
### 無文

第174図-31は口縁部を折り返してあり、外面は丁寧になでてある。十三菩提式並行であろう。

十三菩提式は文様のバリエーションが多く、時期細分が可能であろう。詳しい検討は今後の課題とするが、第173図-1~11は、浮線文を貼っていない点で、十三菩提式の中では初期の段階に位置づけられる。2~11は竹管文を施文している点で、前段階の諸職式に含める考え方もあるかもしれない。

これに対して第174図-22と23の細密浮線文を施すものは新しい段階と考えられる。

第114圖 包含層出土陶文土器



## (21) 大歳山式上器

灰白色の胎土に薄い器壁、「 $\Sigma$ 」字形の結節浮線文、無節繩文と言った特徴を持つ一群で、他の型式の土器は、褐色系の胎土で厚い器壁の土器が多い中で目立つ存在である。

第175図-1～9は同一個体と思われる土器で、文様の構成と口縁部が大きく聞く器形から見ると大歳山式だが、浮線文の結節は、大歳山式に特徴的な「 $\Sigma$ 」形ではなく、半円形の結節である。胎土は、大歳山式に見られる灰白色ではなく赤褐色である。この点では、大歳山式と同時期の十三菩提式の特徴を持っている。のことから、型式は大歳山式だが、製作者は十三菩提式七器を作る知識と技術を持っていたことになる。異なる型式の特徴を併せ持った興味を引く土器である。

1は波状口縁に沿って結節浮線文を貼り、その下に横向方向の結節浮線文を貼っている。そして、口縁の内側にも結節浮線文で同じ文様を描いている。この結節浮線文は、断面図でわかるとおり表と裏で同じ場所に付けている。内面は屈曲部から下を強くなれており、なでの境は角ができる。この点も、この遺跡で出土した大歳山式に良く見られる特徴である。外面はLRの細かい繩文を地文として、結節浮線文で文様を描いている。

2と3も口縁部内外面の同じ場所に結節浮線文を貼っている。2の内面には、くびれ部分から下を強くなれているため、なでの境に角ができる。4は胴部の破片で、くびれ部に付けた結節浮線文から、弧を描きながら垂下する結節浮線文が見られる。5は胴部の張り出し部分の破片で、曲線を描く結節浮線文が見られる。6～8は縦方向の結節浮線文が見られる。9は底部の破片で、縦方向の結節浮線文と底部に独特の大きな押圧がある。

10は口縁部直下に浮線文を貼り、その上に列点文を入れている。その下にも浮線文があり、その浮線文の上には「C」字形のスタンプ文を押してある。胎土が灰白色で、器壁が薄い点で大歳山式を意識していると思われるが、施文方法が通常の大歳山式と異なるようである。11は口縁部に棒状工具を斜めに押圧した文様が見られる。口縁部から少し下がった部分には浮線文を貼り、その上にも同様の押圧が見られる。これも灰白色の胎土と薄い器壁から大歳山式を意識した土器と思われるが、施文方法が通常の大歳山式と異なるようである。

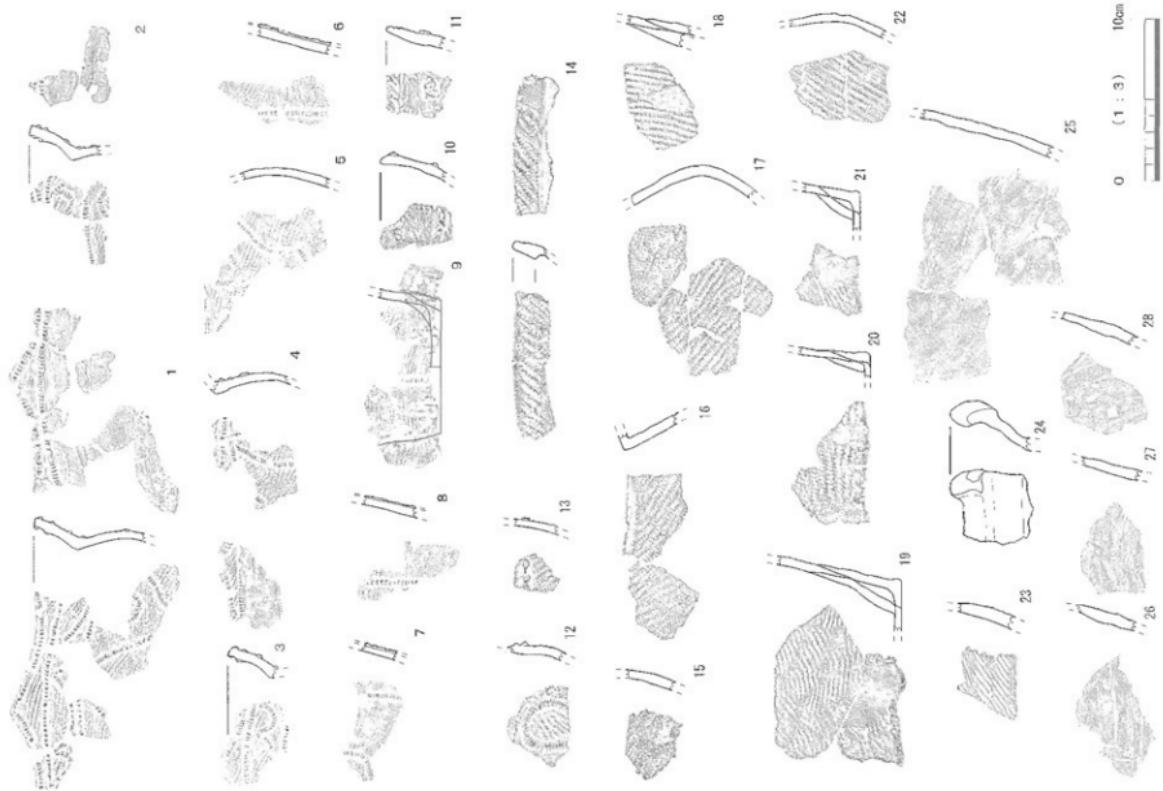
12はLRの繩文の上に「 $\Sigma$ 」字形の結節浮線文を円形に巡らせている。13はLRの繩文の上に浮線文を貼り、その上に円形の押圧が連続して見られる。

14は口縁部の破片で、口縁の表裏両面にLRの繩文を入れている。内面は、口縁直下を削り取るよう調整して文様帶が浮き出るようにしている。

15はRLの繩文が見られるだけだが、灰白色の胎土と薄い器壁から大歳山式と考えられる。16は口縁に向かって強く屈曲する部分の破片で、RLの繩文が入っている。これも胎土の特徴から大歳山式と考えられる。17は大きく膨らむ胴部の破片で、RLの繩文が入っている。灰白色の胎土と薄い器壁から大歳山式であろう。18は底部付近の破片で、指による特徴的な深い押圧が見られる。繩回転のRL繩文が見られる。繩文の節は細かい。

19は底部の破片で、L捺りの無節繩文がみられる。底部には独特の大きな押圧がある。煤が付いており、この煤から、測定値で4,730±40yrB.P.の年代が得られている。20も底部の破片で、LR繩文を縦に回転させている。また、底部に独特の押圧が見られる。21は底部の破片で、L捺りの無節繩文が見られ、底部を大きく押圧している。22は胴部の破片で、節が細かいものの節の単位がはつきりしたLRの繩文を付けている。内面に煤が付いており、この煤から測定値で、4,940±40yrB.P.の年代が得られている。

23は非常に細い無節しの繩文を付けている。24は口縁部の破片で、口縁部に大きな突起を付けている。無文土器であるが、灰白色の胎土であることと、器壁が薄いことから大歳山式に並行するものであろう。25～28も無文土器であるが、灰白色の帶と薄い器壁から、大歳山式に並行するものであろう。



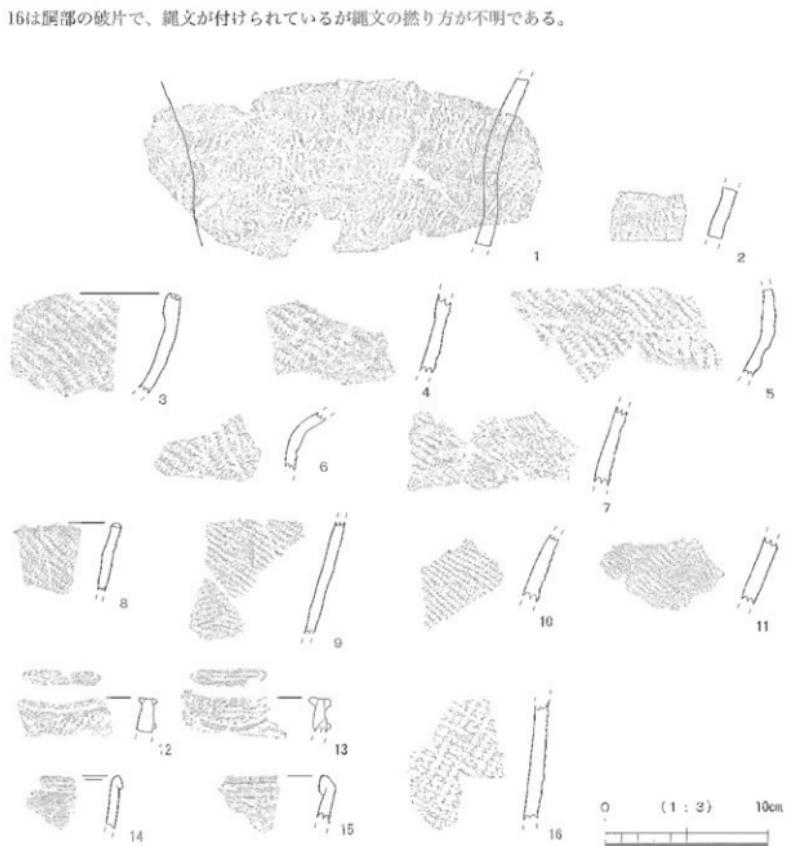
第175圖 包含層出土編文土器

(22) 前期の縄文土器

その他、前期と思われる土器を第176図にまとめた。1、2は同一個体と思われる胸部の破片で、原体不明の文様が付けられている。3～7は同一個体と思われる土器である。3は口縁部の破片で、内面の口縁下を削るように調整して口縁部を肥大させている。外面には節の大きなRLの縄文を付けている。4は口縁部に近い破片で、RLの縄文が見られる。5はRLの縄文を付けており、粘土の接合痕が表面に残っている。6と7は胸部破片で、RLの縄文が見られる。

8は口縁部の破片で、口縁頂部を棒状工具で押圧して、口縁が波打つようにしている。9～11は胸部の破片でRLの縄文が見られる。11は縄文に一部をなでて消している。

12、13は型式不明である。ともに口縁部の破片で、口縁頂部に粘土紐で皿状の突起を付けている。13の口縁直下には緩く曲線を描く隆起帯を貼っており、12にも同様の隆起帯の一部が確認できる。地文は縄文だが、捺りの方向は不明である。14は口縁部を外側に折り返している。文様は見られない。15は11縁を内側に折り返している。これも文様は見られない。



第176図 包含層出土縄文土器16

### (23) 五領ヶ台 I 式土器

第177図-1は、上部に押圧浮線文が見られ、その下に半隆起線文を施している。施文方法は、縦方向に区画した後、斜めの半隆起線を入れて方形の文様を描いている。2と3も1と同一個体で、同様の施文が見られる。4と5は底部の破片で、横方向に条線文が見られる。5は横方向の条線文の上に斜め方向の条線文が見える。5に付いた煤から、測定値で $4,730 \pm 40$ yrB.P.の年代が得られている。

6は口縁部の破片で、口縁部を内側に大きく折り返しており、折り返した中は空洞になっている。そして、口縁頂部に条線文を入れている。口縁直下には横方向に条線文を入れ、その下に斜めの条線文を入れている。7は「X」字に交差する条線文が見られる。

8~11は同一個体と思われ、半隆起線文が入っている。8と9は横方向の半隆起線文の下に大きく弧を描く半隆起線文を入れている。10は縦方向の半隆起線文、11はその上の破片のよう、横方向に半隆起線文が入っている。

12~14は同一個体と思われる口縁部の破片で、RLの縄文を地文として、口縁部直下は無文にして、その下に横方向の並行沈線を入れ、その下に並行沈線で波形の文様を描いている。12には波形の並行沈線の下に円形を描く沈線が見られる。15は口縁部の破片で、口縁内面には強いなでによる面取りがある。口縁外面には三角形の印刻文がある。そして、その下に1本の沈線を横に引き、その下に集合沈線文がある。16は15と同一個体の破片で、口縁部に近い部分である。15と同じ施文が見られる。

17は斜めに集合沈線を引いた後、横方向にまばらな沈線を入れている。さらに一部を三角形に削り取っている。18は17と同一個体と思われる。交差する条線文とその上に無文の部分がある。19は17、18と同一個体で、円形に区画した中を交差する条線文で埋めている。20は文様帶と無文帶があり、文様帶には右下がりの条線文を入れた後、これに交差するようにまばらな条線を入れている。21は20と同一個体の破片で、右下がりの条線文を入れた後、これに交差するようにまばらで細い条線を入れている。

22は底部の破片で、斜め方向の条線文が見られる。23も底部の破片で、斜め方向の条線文とそれを切る縦方向の条線文が見られる。22と23は白っぽい胎土に特徴がある。

24は口縁部の破片で、粘土を貼り付けて口縁部を肥大させて、この部分を無文にしている。そしてその下に「X」字状の交差する条線文を入れている。25は口縁部の破片で、口縁部に粘土を貼り付けて肥大させている。そして、口縁直下には大きな突起を付け、その両側に、口縁に沿って並行する沈線を入れている。26は口縁部を含む破片で、口縁頂部をなでて面取りしてある。口縁直下には沈線を1本入れ、その下に左下がりの条線文を入れ、これを切る右下がりの条線文をまばらに入れている。

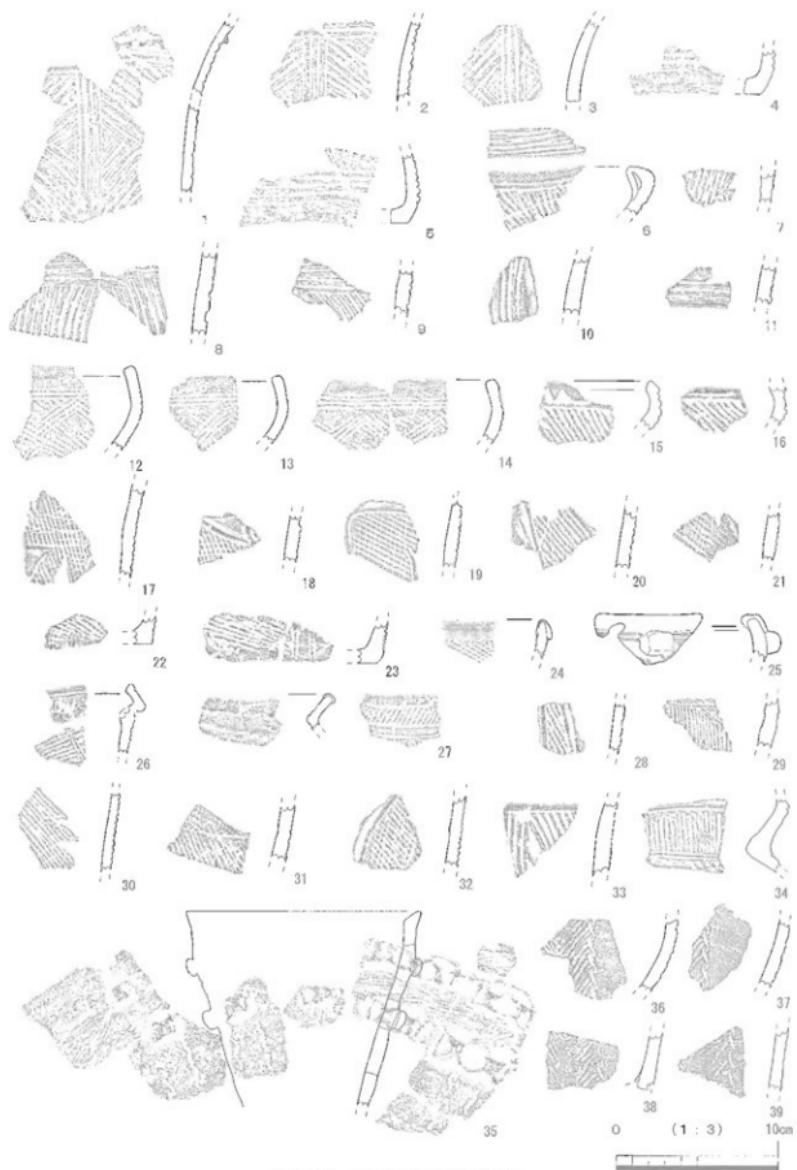
27は口縁が大きく外反しているため、土器の外面が無文で、内面を沈線で横方向に区画し、その間を斜めの条線文で埋めている。28は縦方向の区画があり、その中を斜めの条線文で埋めている。29は、縦方向に条線文を入れた後で、横と斜めに条線を入れている。

30は右下がりの条線文を入れ、その後で、左下がりに細い条線をまばらに入れている。31は右下がりの条線文を入れた後で、左下がりの条線を不規則に入れて交差させている。32は円形の区画があり、その中に右下がりで規則的な条線を入れ、その後で左下がりの条線を不規則に入れて交差させている。

33は半隆起線でレンズ状の文様を描き、その中を削り取っている。34は口縁部に近い破片と思われ、横方向に区画した中に縦方向の条線文を入れている。

第177図-35は口縁頂部をなでて面取りをしてある。胸部には2本の大きな隆起帯を付けてあり、その上に大きな押圧が見られる。隆起帯の下には縦回転の結節縄文が見られる。また、2本の隆起帯の間は、地文の縄文が残っている部分となでて消えている部分がある。

36~39は同一個体の破片と思われ、縦方向に結節縄文を付けてあり、結節部分を挟んで文様帶と無文帶を分けている。無文の部分にも縄文があつたらしく、わずかに縄文が残っている部分がある。



第177図 包含層出土縄文土器17

#### (24) 曾利式土器

第178図-1～6は曾利I式である。1は胴部の破片で、底部に近いと思われる。施文方法は、胴部のすばまた部分に、横方向の太い浮線文を2本貼り、その下から胴部全体を縦方向の条線文で埋める。その後、横方向の浮線文の下から、縦方向の浮線文を垂下させる。縦方向の浮線文には2種類あり、1つ目は、逆「U」字型の浮線文を貼った後、その中にもう1本の浮線文を入れて三叉のフォーク状にしている。そして、浮線文に押圧を加えて固定している。2つ目は、1本の浮線文を蛇行させたものである。施文の最後は、縦に垂下させた浮線文の間に、横方向に蛇行する浮線文を貼っている。

2は蛇行する浮線文と縦方向に垂下する3本の浮線文が見られる。この垂下する3本の浮線文は、3本が独立したもので、1に見られるような三叉の浮線文ではない。地文は条線文である。3は条線文の上に縦と横に蛇行する浮線文を貼っている。4は縦方向に蛇行する浮線文が見られる。5は底部に近い破片で、条線文と縦方向に2本の浮線文があり、浮線文には押圧が見られる。6は底部の破片で、条線文と縦方向の浮線文がある。底部に近い部分は無文である。

7～15は曾利II式である。7はRLの罫文を地文にして、その上に蛇行する浮線文を貼っている。8は7と同一個体と思われる。RLの罫文を施文した後、3列の蛇行する浮線文を貼っている。9は7、8と同一個体と思われる。表面の剥落が目立つが、RLの罫文が残っている。

10は口縁部の破片で、口縁部内面に粘土を貼て内側に突出させている。そして、表裏を丁寧になでて仕上げている。11も口縁部の破片で、浅鉢と思われる。両面とも丁寧になでてある。

12は、蛇行する浮線文を貼り、浮線文を上と下から交互に押圧して固定している。地文は罫文だが、風化のため、擦りの方向ははっきりしないが、13が同一個体と思われ、こちらではRLの罫文が確認できる。13は、RLの罫文を施文した後、蛇行する浮線文を2列貼っている。そして、浮線文を上と下から交互に押圧して固定している。

14は蛇行する浮線文があり、これも上と下から交互に押圧して貼り付けてある。12～14に見られる、浮線文を上と下から交互に押圧する方法は、浮線文を器面に接着させると同時に、蛇行を強調させる効果を狙ったようである。15は胴部の破片で、縦方向に深い条線文がある。

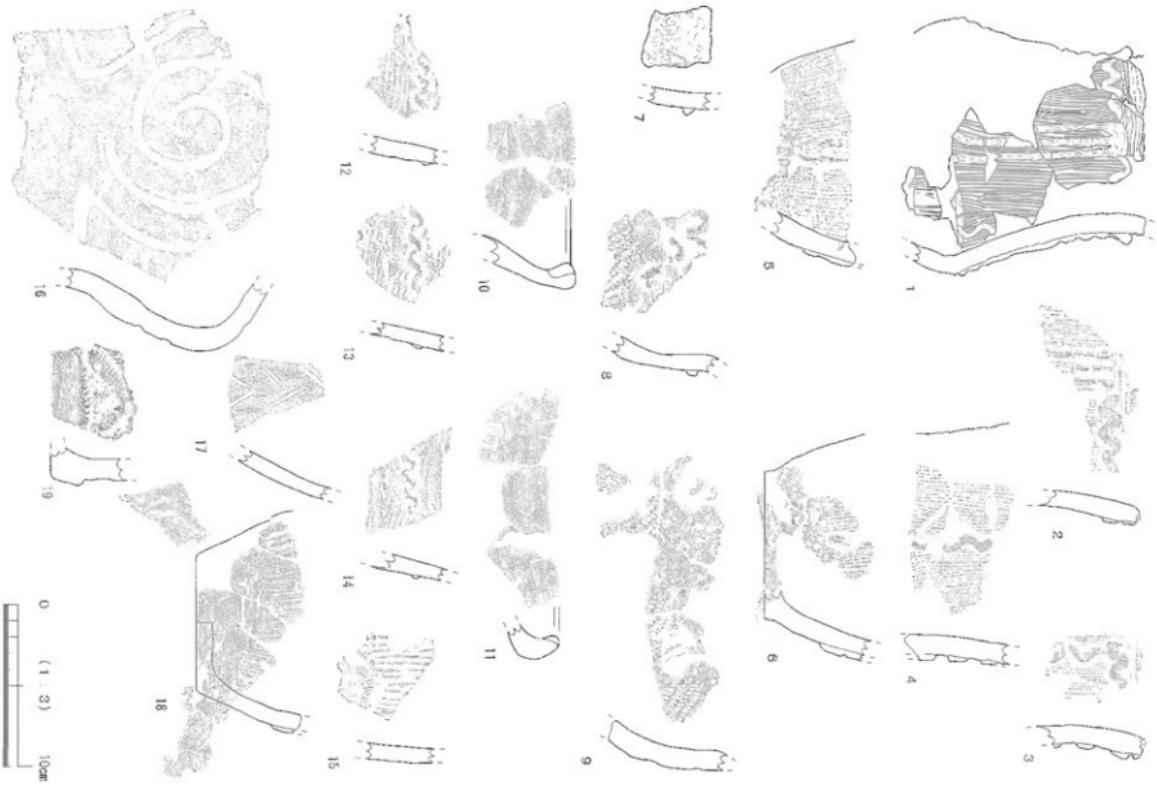
16は曾利IV式である。胴部の一部分の破片であるが、分厚く重量がある。完形だったらかなりの重さだったと思われる。外面に、沈線で渦巻き状の文様を描いている。

17は曾利V式である。「ハ」の字に似た文様を描いている。拓本の左端に文様帯を区画する縦方向の沈線がわずかに見える。

18は底部の破片で、縦方向に細い条線文が入っている。曾利式と思われるが、細分型式は不明である。

#### (25) 勝坂式土器

第178図-19に示した1点だけ出土している底部の破片で、三角形のキャタピラ文が見える。



第178圖 包含層出土陶土器 18

## 第12節 包含層出土の石器

2区と12区で出土した石器は、共伴した土器が前期末の十三菩提式と大歳山式にほぼ限られたため、それぞれ縄文時代前期末で、十三菩提式及び大歳山式並行期の一括遺物として、調査区単位で報告した。

これに対して他の調査区で出土した石器は、共伴した土器の時期幅が広く、遺構出土でない限り時期を限定することができなかった。そのため、一括遺物とはせずに、包含層出土として報告する。

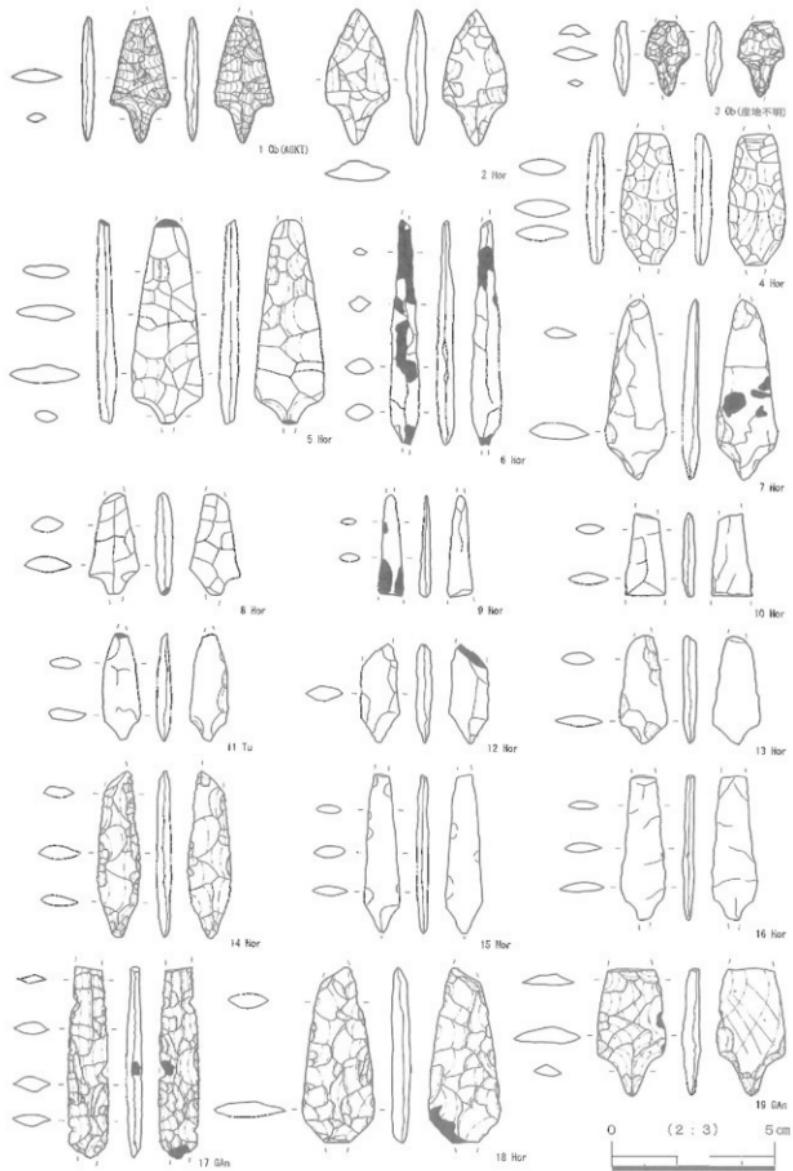
### 尖頭器

第179図はすべて有茎尖頭器、もしくは有茎の可能性が高い尖頭器である。1は先端が折れているが、明確な茎部が残っている。2は寸詰まりの印象を受ける尖頭器である。3は先端が折れしており、基部もわずかに欠損している。4は先端と基部が折れているが、基部の形態から考えて、茎部を作つてあることは間違いない。5は大型で、長さに比べて幅が広い尖頭器である。大きさの割に茎部が小さい。6は細長い尖頭器で、風化と表面の剥落のため、剥離面の観察は困難である。断面図に表されているように、器体が薄くなっているため、棒状の印象を受ける。7も風化が進み、一部で表面が剥落している。5と同様、長さの割に幅のある尖頭器である。8も風化が進んでおり、形から有茎尖頭器とわかるが、剥離面の観察はできない。9と10は風化が激しく、形から尖頭器とわかるだけである。6と同様に細長い尖頭器で、有茎になると思われる。11~13は茎部が残っていることから有茎尖頭器とわかる。14は、先端が石の目に沿つて折れている。茎部の作り出しは明確ではない。15と16は細長い有茎尖頭器であるが、風化のため剥離面の観察はできない。17は細長い有茎尖頭器で、先端と茎部を欠損している。18は長さの割に幅のある有茎尖頭器で、茎部は小さい。19は、薄い剥片を素材にしていると思われ、裏面に素材の剥離面が大きく残っている。器体の薄さから考えて、これで完成品なのであろう。

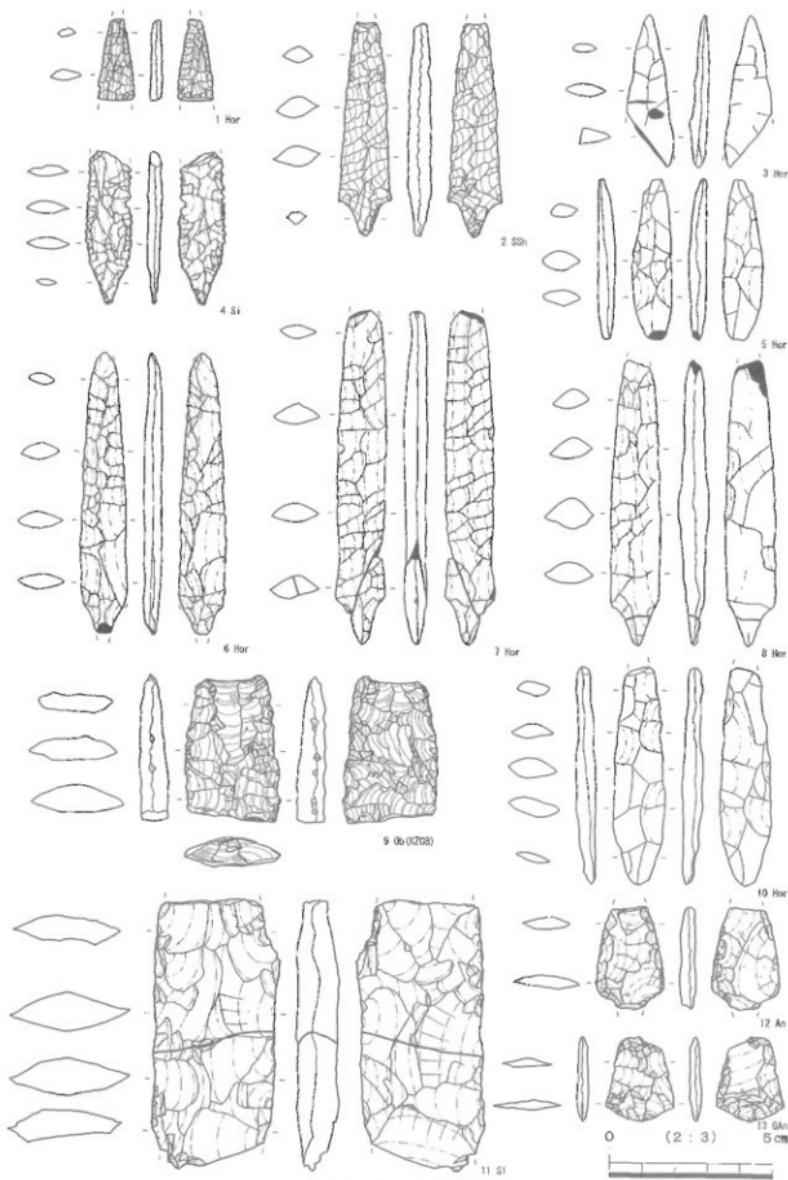
第180図-1~8は有茎尖頭器である。1は細長い尖頭器で、基部を欠損しているが、2と同じような尖頭器で茎部が付くと考えられる。縁辺に対して直角方向の平坦剥離が並行して入っているため、精緻な印象を受ける。2は両側縁から平坦剥離が並行して入っており、精緻な作りになっている。3は有茎尖頭器の先端と思われる。4は両側縁を鋸歯状に仕上げている。茎部の抉りは見られない。5は風化が進んでいるため、形しか分からず状態であるが、基部の幅が急激に狭まっていることから、有茎になると思われる。6は、実測図左面の上半では、縁辺に対して直角方向の平坦剥離が並行して入っている。これに対して実測図左面の下半では大きな剥離面が入っている。実測図右面では大きな剥離面だけが見られる。このことから、この尖頭器は製作途上のもので、実測図左面の上半まで仕上げの加工をしていると思われる。7は先端付近が欠けているが、復元するとかなり細長い尖頭器を想定できる。加工は、側縁に対してほぼ直角の方向で平坦剥離が並行して入っている。8は風化のため剥離面の観察が困難だが、大きな剥離面が見られることと、幅の割に厚みがあることから、製作途中のように思えるが、最終段階で作ると思われる基部が形成されていることから、これで完成品なのであろう。

9は黒曜石製の尖頭器で、完形だったら優美な尖頭器だったと想像できる。先端と基部ともに折れているが、先端からの剥離が見られることから、折れた後に再加工をしていると思われる。10は、茎部の形状がはっきりしないが、基部の幅が急激に狭まっていることから、茎部を意識した作りになっていると思われる。11は、完形ならば、長さ20cmを超えるような、大型の尖頭器であったと想像できる。実測図右面の左側縁上部に再加工を意図したような剥離が入っている。

12は加工が粗いが、平面形が整っていることや器体が薄くなっていることから、これで完成していると思われる。13は2区で出土したものだが、形態から見て縄文時代草創期の可能性が高いため、2区では報告せずにここに掲載した。先端を欠損しているが、先端から細かい剥離が入っていることから、先端欠損後に再加工していると思われる。



第179図 包含層出土石器 1



第180図 包含層出土石器2

第181図は茎部がない尖頭器である。茎部がない尖頭器の場合、縄文時代の尖頭器と旧石器時代の尖頭器の区別が難しいため、ここでは休場層よりも上の層から出土したものを縄文時代の尖頭器としている。しかし、休場層よりも上の層からナイフ形石器や細石器が出土することは珍しくないため、ここに掲載した尖頭器にも、旧石器時代の尖頭器が含まれている可能性はある。

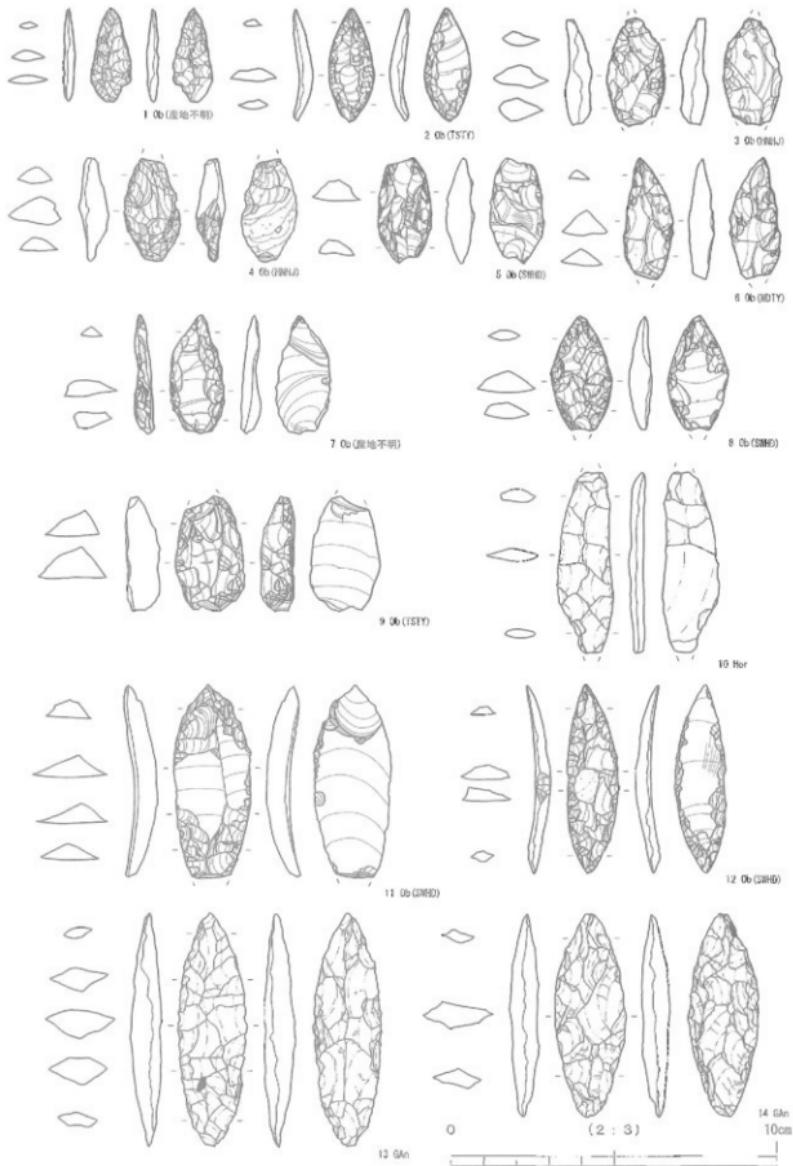
1は、実測図左面の右側縁下部に抉れたような部分がある。茎部を作ろうとしている可能性と、加工途中で欠損した部分を修復している可能性の両方が考えられる。2は両面加工だが、実測図右面に素材面が残っている。また、側面形に見られるように、素材剥片が大きく反っており、それが尖頭器の器形に表れている。3は加工の剥離面が粗い上に、器体の厚みもあることから、未完成品と思われる。4は、剥片を素材にしており、裏面に打瘤を除去した平坦剥離が見られる。加工は表面だけで、実測図左面の右側縁下半の加工のほとんどは階段状剥離を起こしているため、平面形は整っているものの、素材剥片の厚みが残っている。階段状剥離を起こした場合、以降の剥離はすべて階段状剥離を起こした部分で止まることが多いため、階段状剥離を起こした部分を大きく除去しなければならないが、この資料の場合、加工が進んでおり、ここで階段状剥離を起こした部分を除去すると、全体の形を損なう恐れがある。そこで、この時点で失敗品と判断して製作を中止したか、これで完成品としたかのいずれかであろう。5は縦長の剥片を加工しているが、器体中央部で加工が階段状剥離を起こしているため、器体が薄くなつていない。6は両面を加工痕が覆っているが、断面が三角形になっていることから、剥片を使っていると思われる。左右非対称である上に、剥片の厚みも残っていることから、未完成品と思われる。7は、薄い剥片の周縁を、裏面から加工しており、裏面には素材面がそのまま残っている。8も剥片を素材にして、表面は加工による剥離が覆っており、裏面は周縁だけ加工している。

9は剥片を素材にして片面だけ加工している。加工の剥離が器体の中央部を越えていないため、剥片の厚みが残って断面が三角形になっている。10は風化が進んでいる。薄い剥片を使っているようで、表面は加工による剥離が全面を覆っているが、裏面は部分的な加工にとどまっている。11は縦長剥片を使っており、縦断面に剥片の反りが表れている。裏面は部分的な加工にとどめている。表面は、先端と基部を集中的に加工している。12は縦長剥片を使っており、縦断面に剥片の反りが見られる。表面は加工による剥離がほぼ全面を覆っているが、中央に自然面が一部残っている。裏面は周縁だけ加工している。13は両面を加工しているが、裏面の加工による剥離が、器体中央部を越していないため、器体が薄くなつっていない。14は両面加工の尖頭器で、断面が平行四辺形になっていることからもわかるように錯交剥離によって加工している。

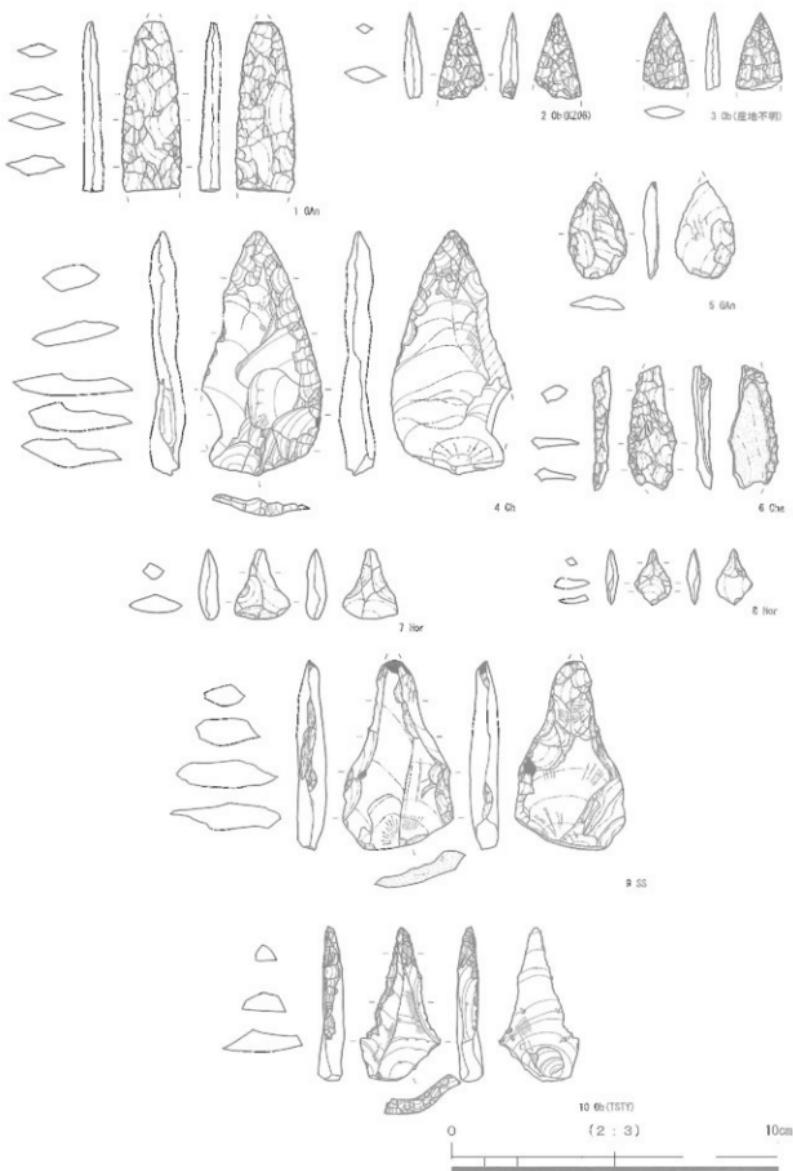
第182図-1は先端と基部を欠損しているが、本来は長さが10cm程あったと推定できる。両面を丁寧に加工している。2と3は先端部の破片で、いずれも丁寧に両面を加工している。4は尖頭器の未完成品で、幅の広い剥片を素材にしている。両面から加工して先端を作り、さらに実測図の右側縁を、両面から加工している。基部は未加工のため、剥片の打瘤が残っている。5は丸みのある剥片を使っていると思われ、基部は剥片の形を活かして丸く仕上げてある。裏面に見られる平坦剥離は、剥片の打瘤を除去する目的であろう。6は両面加工の尖頭器と思われるが、実測図の右面に大きな剥落が見られる。赤く変色していることから、加熱によって表面が剥落したと思われる。

#### 石錐

第182図-7は、石錐の可能性もあるが、基部が大きく広がって全体が扁形になっていること、先端に厚みがあることなどから、石錐と考えた。8も同様で、石錐の可能性もあるが、先端を細く作りだしていることから石錐と考えた。9は、尖頭器の未完成品の可能性もあるが、先端部を集中的に加工し、尖らせるような意図がうかがえるため石錐と考えた。10は、剥片の末端を加工して尖らせてある。石錐の下端には、素材剥片の細かく調整された打面が残っている。



第181図 包含層出土石器3



第182図 包含層出土石器 4

## 石鎚

第183図は、有茎、または基部の抉りが深い石鎚を示した。抉りが深いか浅いかは、判断に迷うものも多い。抉りの深さを数値化して基準を作ることもできるが、脚部を欠損している場合は適用できない。ここでは、的場遺跡で出土した石鎚全体の比較を通じて、相対的に深いか浅いかを判断した。したがって、観察者の主觀も入っていることを断わっておく。

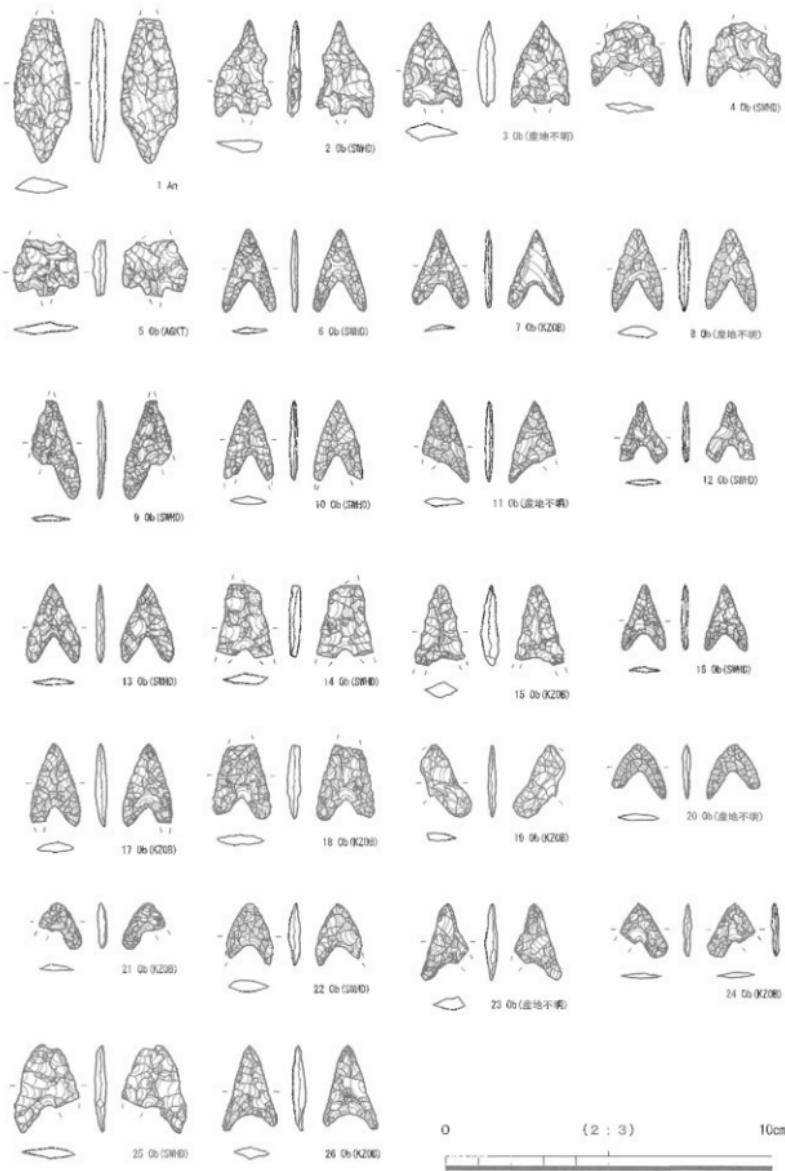
第183図-1は、尖頭器か石鎚か判断に迷うが、的場遺跡で出土した他の尖頭器に比べると、小型であることから石鎚に分類した。

2は細い茎部を作り出した石鎚で、欠損により左右が非対称になっているが、欠損した部分に欠損後に加工した痕跡があることから、欠損後に再加工していると思われる。3は基部を欠損している。4と5は基部と先端を欠損しているが、2、3と同じ形態の有茎の石鎚である。

6～26は基部の抉りが深い石鎚である。6は薄い剥片を使っており、裏面の一部に剥片の素材面が見える。7は両面に剥片の素材面が残っていることから、厚さ2mm程度の剥片を使ってることがわかる。8は両側縁が丸みを持っているのに対して、基部の抉りは直線的で「V」字形になっている。9は加工が細かく、大きさの割に非常に薄い印象を受ける。10は両脚部の末端を欠損している。両側縁から細長い剥離が並行して入っている。11は脚部を欠損してから欠損部分を打面にして再加工している可能性がある。12は基部の抉りが「V」字形ではなく、丸い抉りになっている。13は基部に「V」字形の深い抉りが入っている。14は先端と基部を欠損しているが、復元すれば、長さが5cm近くなる大型品である。15は両側縁からの加工が、器体中央を越えていないため、器体中央の棱線ができ、器体が薄くなっている。16は小型で整った形態である。17は一部に自然面が残っている。18は先端を欠損しているが、復元すると長さが5cm近くなると思われる。19～21は長さの割に基部の抉りが深いため、平面形が横長的印象を受ける。特に20はブーメランのような形であるうえに、細長い剥離が並行して規則的に並んでいることから、「車」な作りを思わせる。22は、基部の抉りが丸く入っている。23は加工が粗い印象を受け、中央部に剥片の厚みが残っていることから、未完成品と思われる。脚部を欠損した時点で製作をやめたのであろう。24は抉りが「V」字形に入っているが、小さいため、脚部が大きい印象を受ける。25は加工が粗く、先端も形成されていないため、未完成品のようであるが、厚さは完成品に近い程度まで薄くなっている。26は基部に弧状の抉りが入って、基部末端が尖るようになっている。

第184図-1は、脚部の長さが異なっているが、欠損している訳ではないため、これで完成品なのであろう。2は脚部を両方とも欠損している。3は脚部の大きさが左右で大きく異なっているが、厚さがかなり薄くなっていることから、未完成とは考えにくい。4は加工が進んでいるが、中央部に剥片の厚さが少しだけ残っている。5は、大きさの割に加工による剥離面が大きいため、加工が粗い印象を受ける。中央部に厚みが残っていることから、全体の大きさは小さくなっているが、未完成なのかもしれない。6は、先端部を細く作り出すような意図がうかがえ、縁辺に屈曲部ができる。7は裏面に剥片の素材面が残っている。脚部を欠損しているが、裏面に矢印で示した剥離によって脚部が欠損したと思われる。8も裏面に剥片の素材面が残っている。9は、平基の石鎚を作った後、基部に小さな「V」字形の抉りを入れている。10も基部に小さな「V」字形の抉りを入れている。

11は加工が細かいが、個々の剥離面が細長い剥離が並行しているのではなく、扇形に広がる剥離面が切り合っているため、剥離面が入り組んだ印象を受ける。12は細長い石鎚で、器面には細長い剥離面が並行して入っている。13は脚部を片方欠損しているが、基部の抉りが小さいため、欠損した部分は太い脚部であったと思われる。14は裏面に剥片の素材面が残っている。先端を欠損しているが、本来は細長い石鎚だったと思われる。15も細長い石鎚で、器面には細長い剥離が並行して入っている。16と17は風化が進んでいる。18は細長い石鎚で、脚部を欠損している。これも風化が進んでいる。



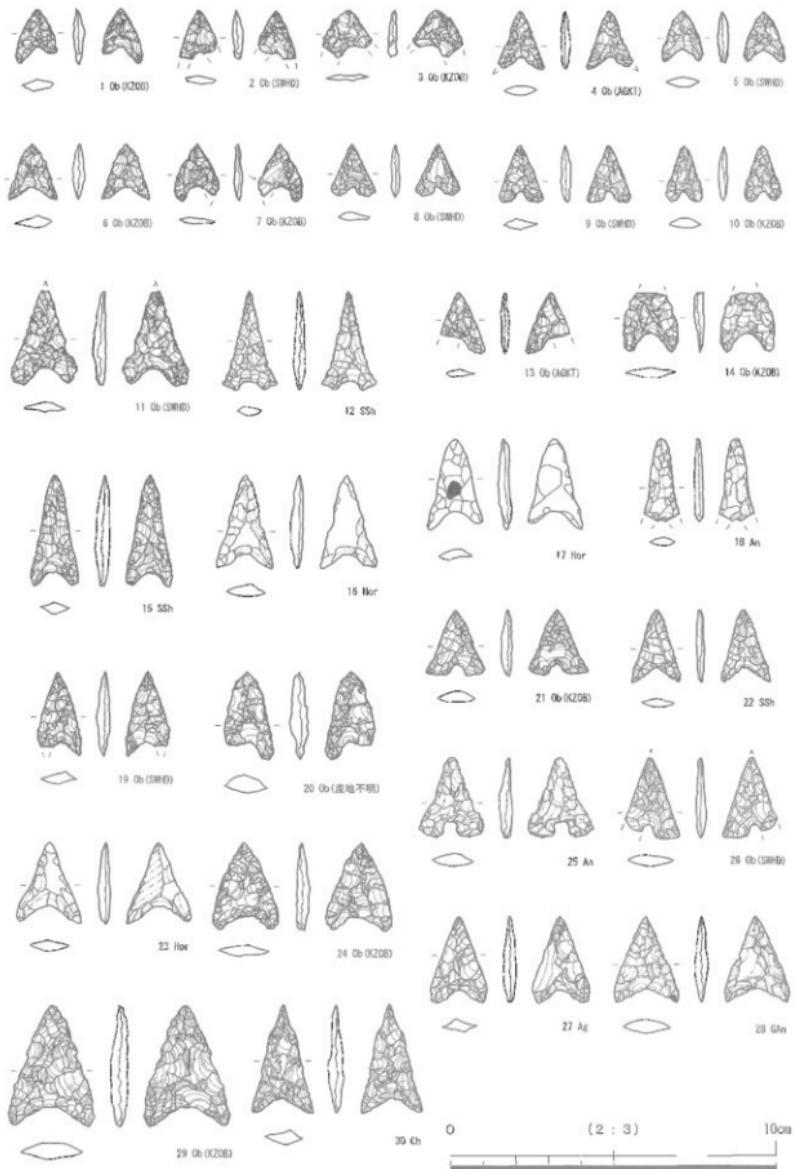
第183圖 包含層出土石器5

20は脚部を欠損したと思われるが、再加工したようで、折れ面は残っていない。この状態で完成品なのであろう。21は、抉りのない半基の石鎧を作つてから基部の中央に抉りを入れたことが良くわかる資料である。23は、器面に石の目が残っている。25は半基の石鎧を作つてから基部の中央に抉りを入れた工程がわかる資料である。26も同様で、平基の石鎧を作つてから基部中央に抉りを入れている。27は裏面に剥片の素材面が大きく残っている。29は、他の石鎧に比べて大きな石鎧で、厚さや加工の細かさから見て完成品と思われる。30は先端を細く作り出している。先端を欠損した後の内加工かもしれない。

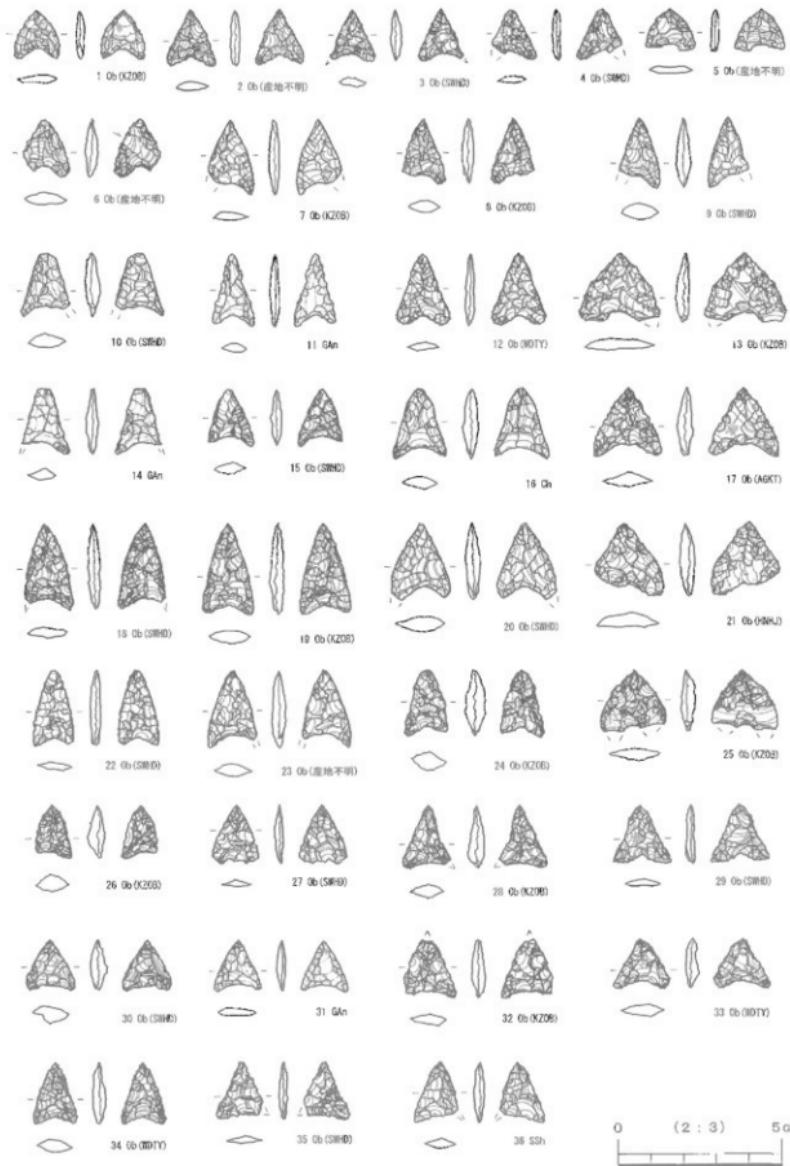
第185図は、基部の抉りが浅い石鎧である。1と4は剥片の素材面が残っており、薄い剥片を使つていていることがわかる。5は脚部を欠損しているようだが、欠損と思われる部分に剥離が入っていることから、欠損後に再加工していると思われる。6は細長い剥離が日立つ。矢印の剥離が器体を突き抜けたことによって、脚部を欠損したと思われるが、折れてから再加工しているようで、折れ面は残っていない。7は、脚部を欠損しているが、欠損部に細かい剥離が見られることから、再加工していると思われる。8も脚部を片方欠損しているようだが、折れてから再加工しているようで、折れ面は残っていない。

9は完成品と思われるが、厚みが残っている印象を受ける。10は先端を欠損しているようだが、先端からの剥離が見られることから、再加工していると思われる。11は、側縁を鋸歯状にしている。12も側縁が鋸歯状になっている。13は長さよりも幅があるため、横長になっている。15は脚部を欠損したようで、左右非対称形だが、脚部欠損後に再加工したと思われ、折れ面は残っていない。16は、平坦剥離が器体中央で切り合っていることから、平坦剥離は順調に進んでいることがうかがえる。17は素材剥片の形を反映してか、横に長くなっている。18は加工が細かいが、平坦剥離が切り合っているため、剥離面が入り組んでいるように見える。19と20は、細長い剥離面が並行しているため、整った印象を受ける。21は左右非対称形のため、脚部を片方欠損しているようだが、折れ面は残っていない。最初から左右非対称形にしたのか、脚部欠損後に再加工したかのどちらかであろう。22は、先端からの剥離が見られる。加工なのか、使用による衝撃剥離なのかは定かでないが、珍しい例である。24は、大きさは小さくなっているが、厚さが薄くなっている。器面には階段状剥離が多く、平坦剥離がうまくいっていないことがわかる。25は両面に剥片の素材面が残っていることから、厚さ4mm程度の剥片を使つていることがわかる。剥片の打面側に先端を形成しており、先端部を集中的に加工している。先端部形成と打瘤除去を兼ねていたのであろう。26は小型であるが、平坦剥離がうまくいっていないようで、厚みが残っている。27はかなり薄くなっている。28は、右側縁の加工が、側縁を抉るようになつていているため、左右非対称形になっている。29は、平基の石鎧を作つた後、基部の中央に抉りを入れたことがわかる資料である。30～36の基部は、特に浅く弧状に窪む程度である。32は左右非対称形で、一部を欠損したようだが、欠損後に再加工したようで、折れ面は残っていない。34は細長い剥離が並行して入つており、整った印象を受ける。

第186図ー1～20は、基部の抉りが浅い石鎧である。第186図ー1は、全体の形が整っていないことから、未完成品に見えるが、大きさから考えて、これ以上の加工は無理と思われる。先端は形成されていることから、これで完成品なのであろう。2は、側縁の一部に抉つたような剥離が入つていて、これはアクシデントであろう。3は、正面の右側基部を欠損しているが、欠損後に細かい剥離を入れて再加工している。7は素材剥片の影響であろうか、横長になっている。また、器体中央に高まりがある。この高まりは平坦剥離の末端が階段状剥離を起こしているために形成されたもので、本来は除去しなければならない部分である。8は厚みがある上に加工が粗い印象を受ける。未完成品であろうか。9は剥離が細かく、丁寧な作りを思わせる。10は、側縁が内湾し、先端が主頭状になっている。11は細長い剥離が並行して入つており、整った形状である。12は薄くなっていることと先端が形成されているため、完成品に近いと思われるが、左右非対称である。13は、基部をわずかに欠損している。



第184図 包含層出土石器 6



第185図 包含層出土石器7

14は10と同様、側縁が内湾して、先端が圭頭状になっている。15は長さに比べて幅がある。16は基部が左右非対称であるが、厚さから考えて、これで完成品であろう。17は完成に近いか完成品と思われるが、基部の形が整っていない。18は10、14に似て、先端が圭頭状の印象を受ける。19は細長い剥離が並行して入っている。表面の一部に自然面が残っている。この自然面を除去しようとした剥離が見られるが、残っている自然面の手前で階段状剥離を起こしており、自然面を除去できていない。

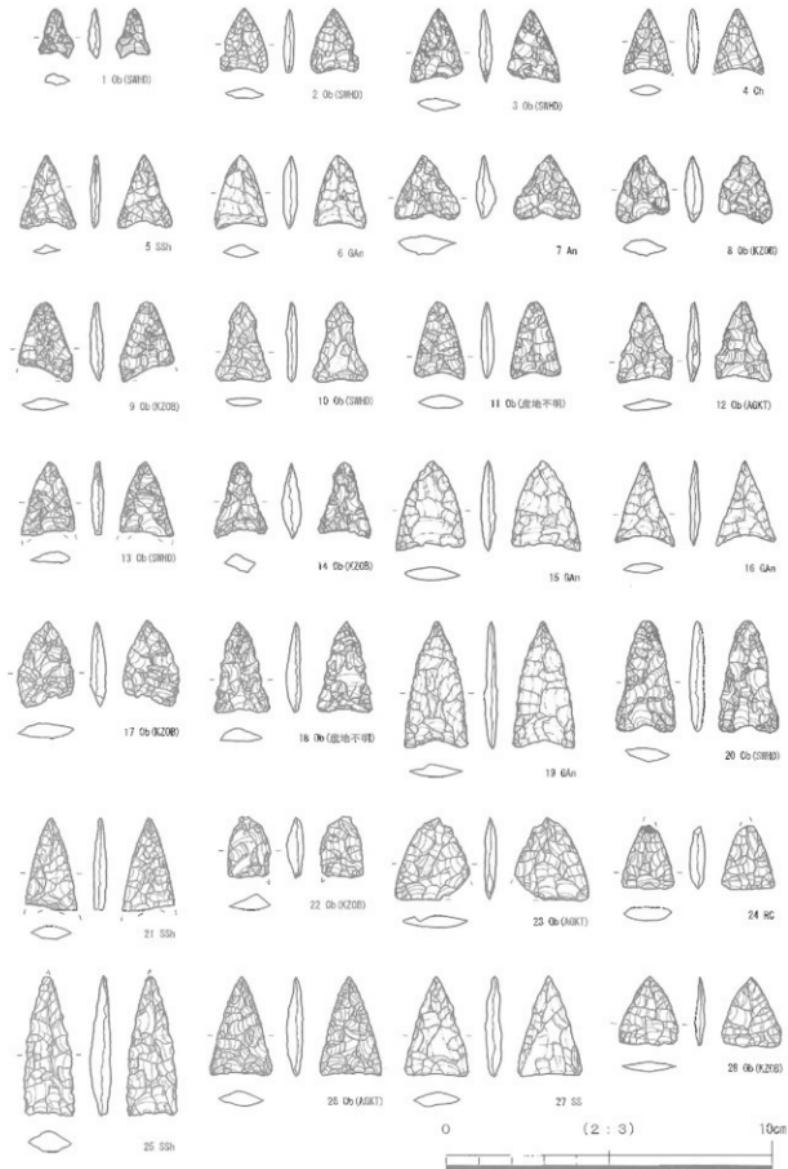
20は先端が丸いままであるが、細長い平坦剥離が並行して入っており、器面は順調に薄くなっていると思われる。完成直前の状態であろう。21は、尖頭器の破片に見えるが、基部側からの加工が入っていることと、折れ面に2本の脚部が折れた痕跡が確認できることから、基部に抉りの入った石鎧であることがわかる。ただ、抉りの深さははつきりしない。

22～28は、基部に抉りが入らず、平坦になる平基の石鎧である。22は厚みが残っており未完成品と思われるが、大きさから考えてこれ以上の加工は無理と判断して製作を中止したのであろう。23は、正三角形に近い形状で、細長い平坦剥離が並行して入っていることから、形態が整って見える。24は先端を欠損しているものの、整った二等辺三角形を呈しており、加工も、平坦剥離が並行して入っていることからも整った形態である。25は平基で細長い石鎧である。厚みが残っているうえに、側縁も不規則なギザギザになっていることから、完成品ではないと思われる。26は二等辺三角形を呈し、加工も一部に剥片の素材面を残すものの、平坦剥離が並行して入っており、整った形態である。27は両面に剥片の素材面が残っていることから、薄い剥片を使っていることがわかる。素材面が残っているものの、形状は二等辺三角形で整っている。28は正三角形に近い形状で、細長い平坦剥離が並行して入っているため、整った印象を受ける。

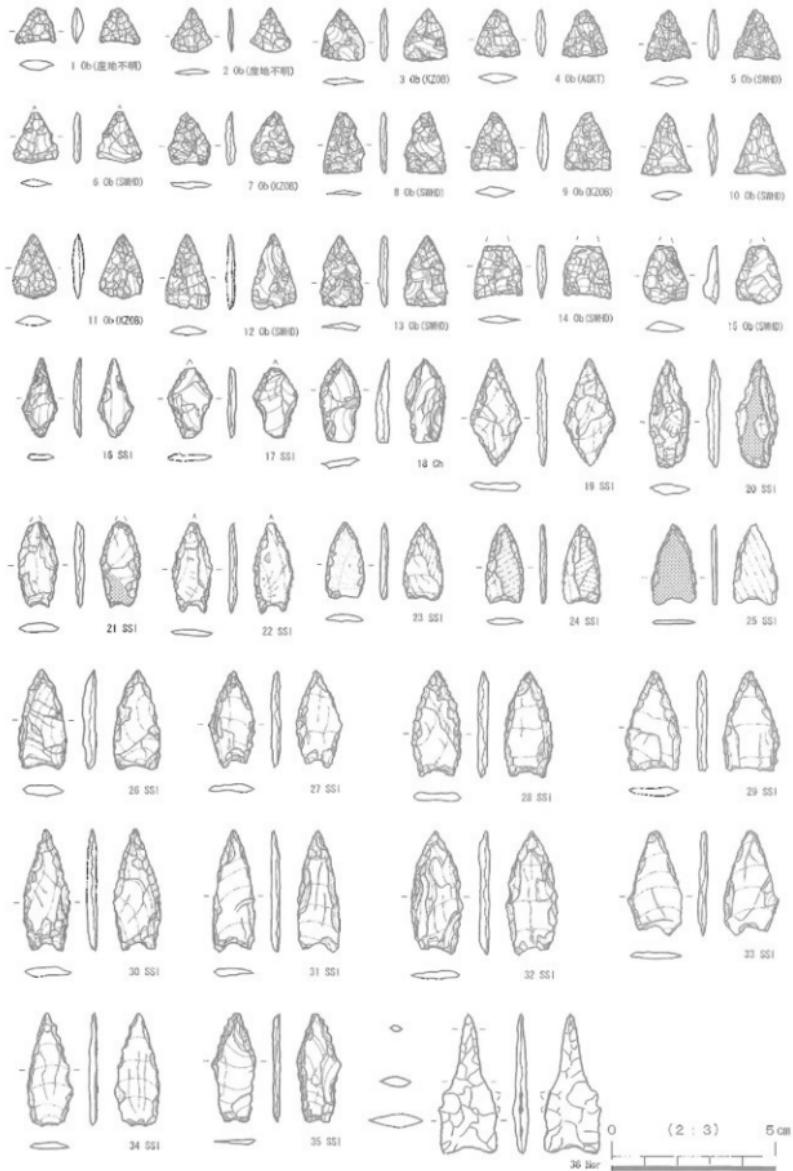
第187図－1～15は平基、もしくは基部の形状が安定しないものである。1は大きさから考えて完成品と思われるが、先端が尖っていないうえに、器体中央に厚みが残っている。2は基部を丸く上げている。3は表裏両面に剥片の素材面が残っていることから、厚さ3mm程度の剥片を使っていていることがわかる。加工による剥離面も少ないが、形状は整っていることから、これで完成品なのであろう。5は平基だが、基部が平坦ではなく、2箇所に浅い抉りが入っていることから、有茎石鎧の茎部が欠損したものを再加工して平基にしているかもしれない。6は平基を意図しているようだが、基部は平坦にならずにやや外湾している。7と8は平面形がやや歪んでいる。大きさや厚さから考えると、完成直前の状態と思われる。9と10は形状が整っており、これで完成していると思われる。11も完成品と思われるが、基部が外湾している。12も厚さや平坦剥離の状況などから、完成品と思われるが、基部の形状が安定しない。13は、側縁にやや内湾する部分があるため、先端が圭頭状に見える。14は基部がわずかに内湾している。15は裏面に剥片の素材面が残っている。基部も加工してあるが、形状は安定していない。

16～35は結晶片岩製の石鎧である。結晶片岩特有の薄く剥がれる性質を利用して剥離した剥片の周縁を加工して形態を整えた一群である。加工が器体中央付近まで及ぶものはない。基部は抉りの入っているものが多いが、34、35のように平基のものも見られる。これらの石鎧の素材剥片を剥離した石核は出土していない。25はトーンを入れた部分が磨滅していることから、石斧の刃部片を利用していることがわかる。これを手掛かりに考えると、これらの石鎧の素材になる剥片は、石核から剥離したものではなく、打製石斧を作る際に出た剥片を利用していると考えられる。結晶片岩は、これらの石鎧以外には打製石斧にしか使用していないため、石鎧専用に石核を用意するよりも、打製石斧を製作する際に剥離される多量の剥片を利用した方が効率的である。

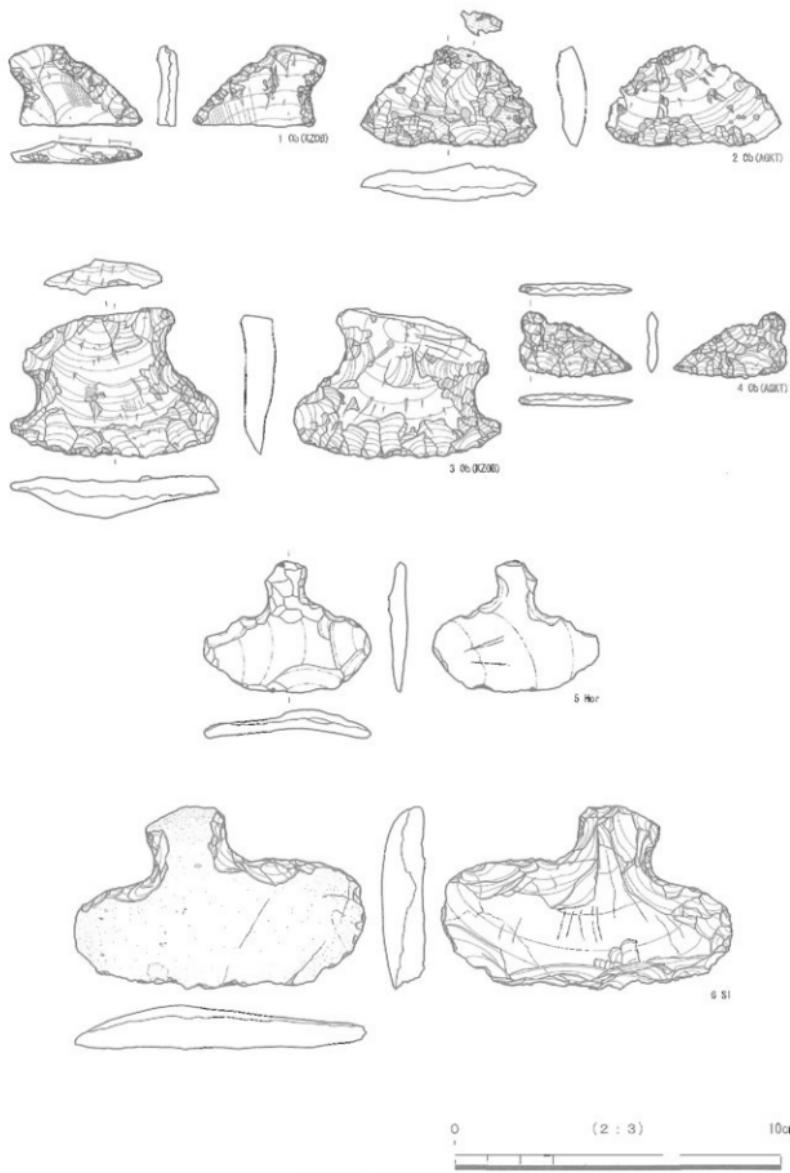
36はホルンフェルス製で風化が進んでいる。先端を特に細長く作りだした石鎧である。石錐の可能性もあるが、基部に浅い抉りを入れていることや、全体の形状を左右対称形に整えているといった、石錐には見られない特徴があることから石鎧と判断した。



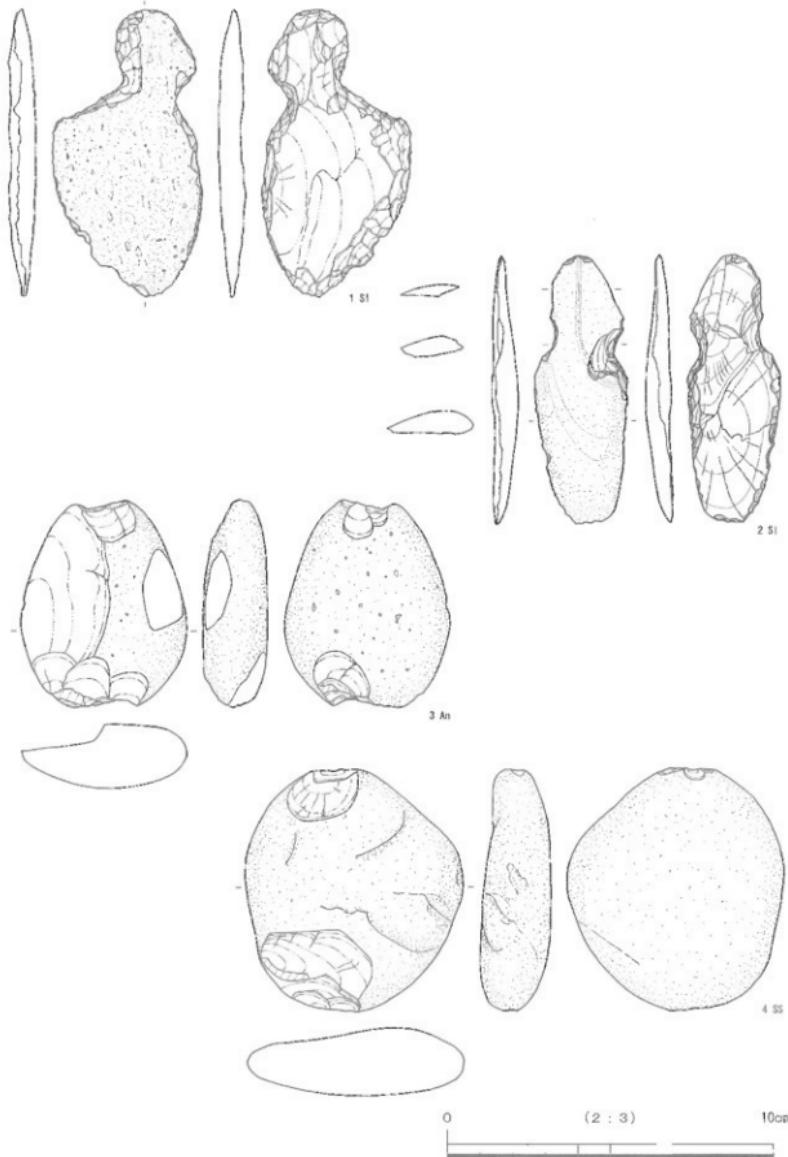
第186図 包含層出土石器8



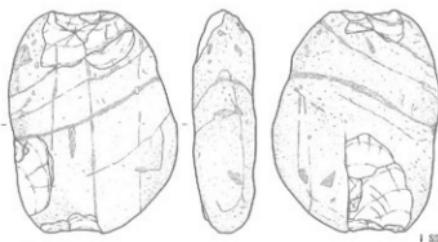
第187図 包含層出土石器9



第188図 包含層出土石器10



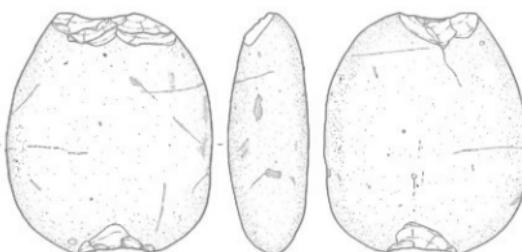
第189図 包含層出土石器11



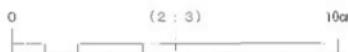
1 ss



2 sh



3 ss



(2 : 3)

10cm

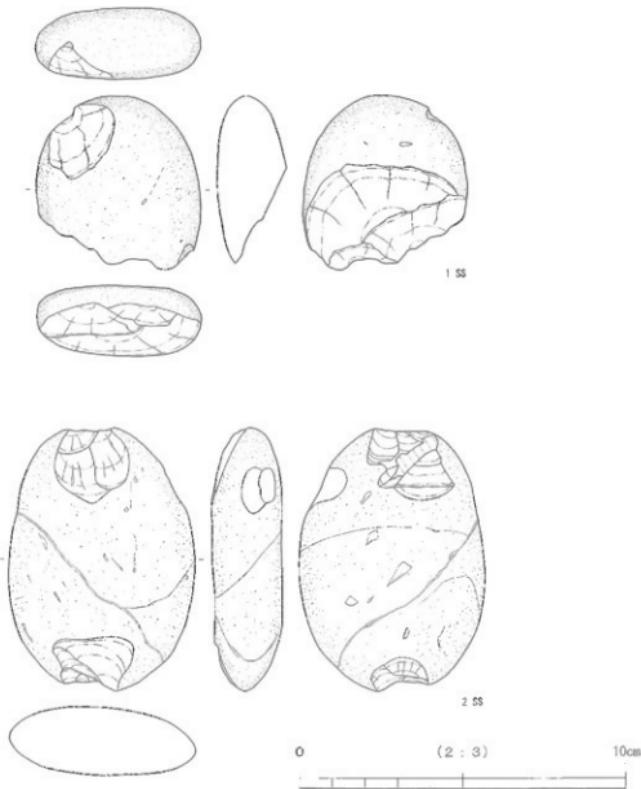
第190図 包含層出土石器12

### 石匙

第188図-1は黒曜石の剥片を使い、周縁に両面から平坦剥離を入れて形を整えている。刃部を欠損しているが、折れた面に再加工を意図したような剥離が入っている。2は、つまみと剣部の境界に石の目が入っており、ここで欠損してつまみがなくなっている。3は黒曜石の剥片を使い、周縁に両面から平坦剥離を入れて刃部とつまみ部分を作りだしている。4は一見して明らかのように、石鎌を石匙に作り直したものである。石鎌の基部を再加工してつまみを作り、石鎌の側縁を刃部にしている。5は剥片の周縁を加工しているが、加工量が少ないうえに、加工による剥離が大きいため、粗い印象を受ける。6は片面が自然面に覆われた剥片を使い、周縁に平坦剥離を入れて形を整えている。つまみを作り出す部分は両面から加工しているが、刃部は片面から加工して作っている。第189図-1、2は綫長の石匙である。ともに片面が自然面に覆われた剥片を使い、両面から加工してつまみを作り出している。

### 石錐

第189図-3、4、第190図、第191図は円錐の両端を打ち欠いた石錐である。第191図-1は一端が大きく欠けている。

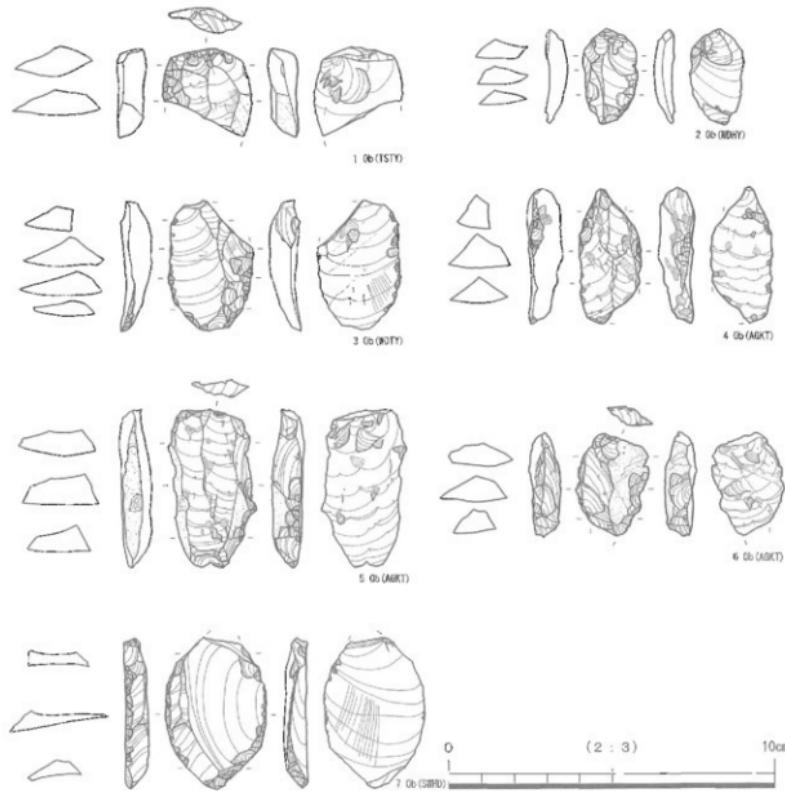


第191図 包含層出土石器13

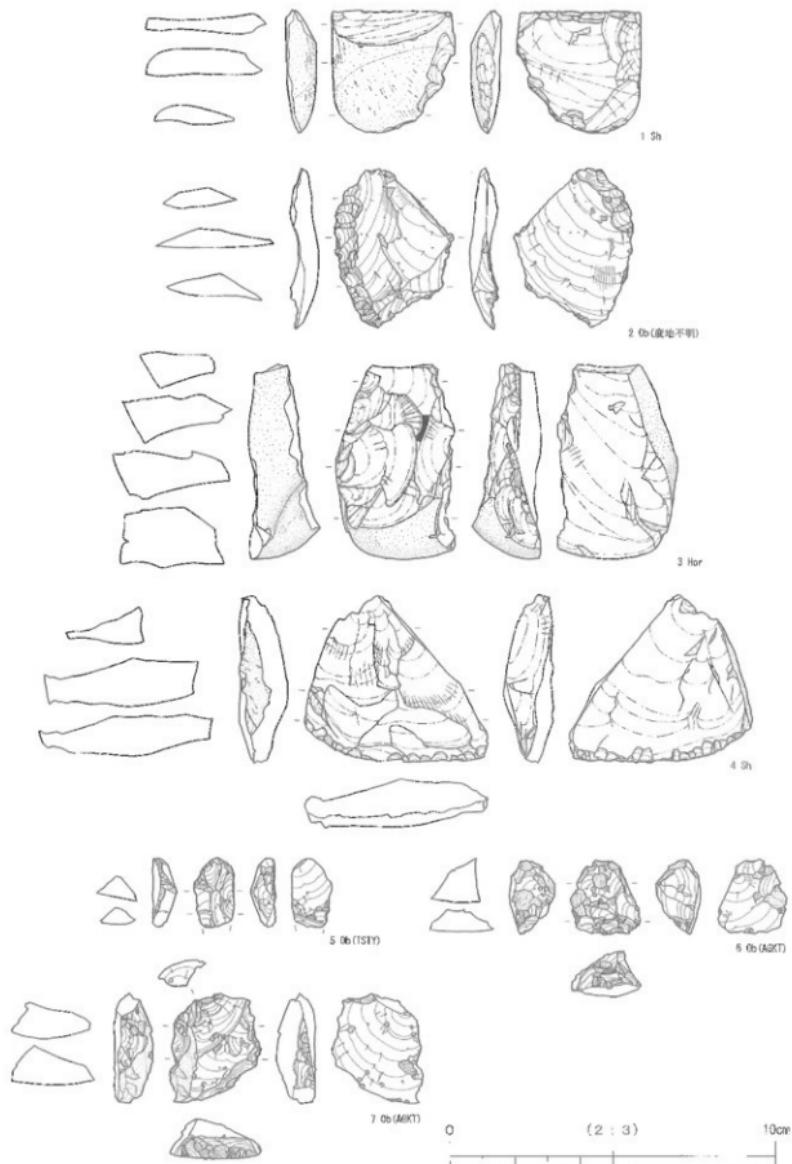
### スクレイバー

スクレイバーも旧石器時代と縄文時代の区別をつけにくい器種であるため、形態で区別せずに、休場層よりも上の層から出土したものと縄文時代のスクレイバーとしたが、尖頭器と同様に、旧石器時代のものが含まれている可能性は十分にある。

第192図-1は半分程度を欠損しているが、黒曜石の剥片の側縁に裏面から平坦剥離を入れている。2は右側縁を裏面から加工している。加工は平坦剥離に近い低い角度で入っている。また、右側縁上部には、裏面に平坦な剥離が入っている。3は、右側縁に裏面から平坦な剥離を入れて刃部を作っている。その他の縁辺にも両面から小さな剥離が入っているが、不規則な剥離の印象を受ける。加工と言うよりも使用による剥離に見える。4は左側縁上部と右側縁中央部に、裏面から高い角度で剥離を入れて刃部を作っている。5は縦長の剥片を使っており、右側縁と末端に、裏面から急角度で加工している。上端には剥片の平坦打面が残っている。6は、右側縁と末端に、裏面から急角度の剥離を入れている。上端には剥片の平坦剥離が残っている。7は剥片の一部を欠損しているが、残っている縁辺のほぼ全周を裏面から加工している。



第192図 包含層出土石器14



第193図 包含層出土石器15

第193図-1は、赤褐色の頁岩製で、表面に大きく自然面を残す剥片の側縁に、裏面から加工して刃部を作っている。2は黒曜石の剥片を使い、側縁に裏面から連続した平坦剥離を入れて刃部を作っている。3は石核の転用である。分厚い剥片を使っており、実測図正面が作業面で、左側見通し図に残っている自然面が打面になっている。作業面では不定形の剥片を剥離している。剥片剥離を終えた後、石核の下面（実測図の右側面）に裏面から加工して刃部を作っている。

4は剥片の末端に両面から平坦剥離を入れて刃部を作っている。全体の形から考えて、石匙の未完成品の可能性もある。5は剥片の両側縁に急角度の剥離を入れて刃部を作っている。6は分厚い剥片の末端に急角度の剥離を入れて刃部を作っている。7は剥片の末端と側縁に急角度の剥離を入れている。特に剥片の末端に入れた剥離は、末端を切断するような急角度の加工である。

第194図-1は大型の分厚い剥片の片側縁と末端に急角度の剥離を入れて刃部を作っている。

2は、ガラス質黒色安山岩の大型剥片を使っており、剥片の縁辺に平坦剥離を入れて加工している。この資料は表面採集されたもので、旧石器時代のガラス質黒色安山岩製の遺物に比べると風化が進んでいないため、縄文時代の遺物と言う印象を受けるが、実測図で正面にした面を石核の作業面、実測図で上面にした面を石核の打面と考えると、板状の剥片の小口面を山形に成形した石核で、横長剥片、それも翼状剥片を剥離した石核ということになる。そう考えると、これは旧石器時代の遺物になる。スクレイパーに再加工した時の剥離面が観察を困難にしているが、安山岩を使っている点を考え合わせても、旧石器時代の翼状剥片石核の可能性が高い。

#### 微細な剥離のある剥片

微細な剥離とは、加工痕、使用痕、自然の欠損などを含んでいる。剥離が微細な場合、加工、使用、自然の欠損のいずれなのか、あるいは他の原因によるものなのか判断できない場合が多い。縁辺に微細な剥離があるという事実だけを捉えて分類した石器である。したがって、一部にはスクレイパーや自然に縁辺が欠損した剥片を含んでいる。また、これも縄文時代のものと旧石器時代のものが区別できないため、休場層よりも上の層から出土したものを縄文時代に帰属させてある。したがって、下記で報告する遺物に、旧石器時代のものが混ざっている可能性はある。

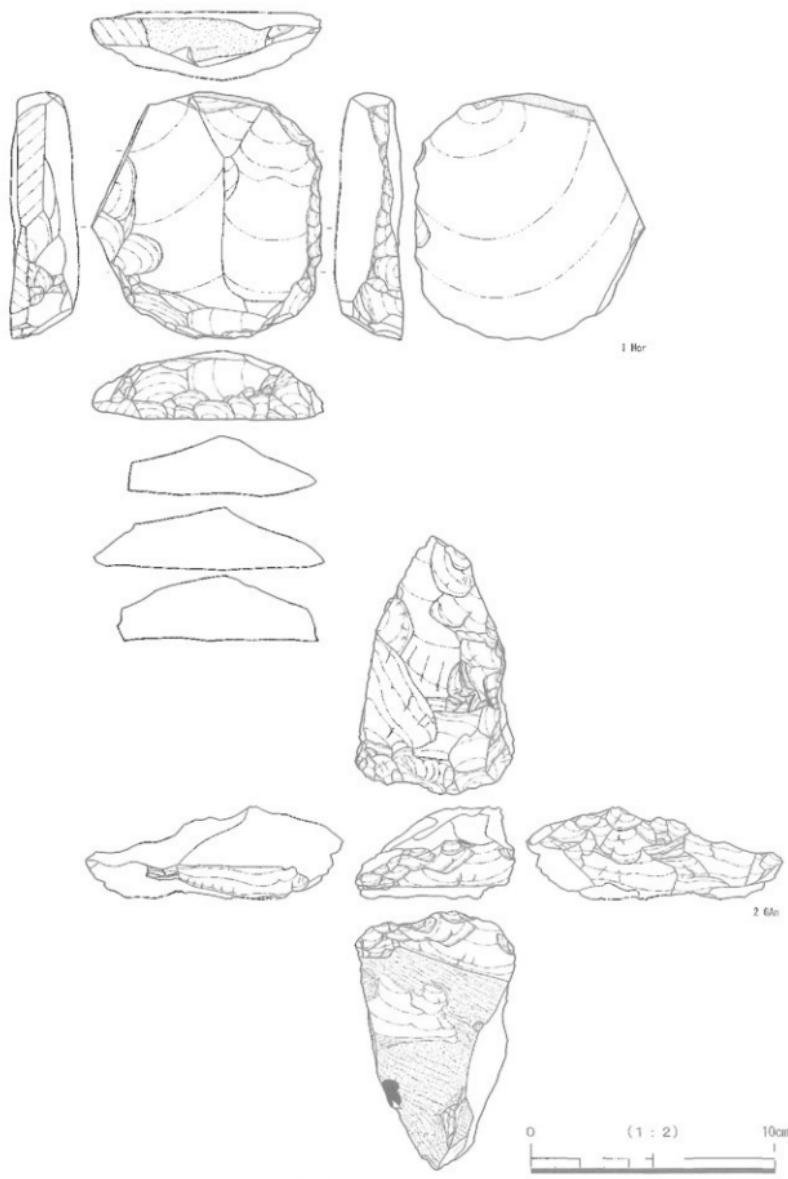
第195図-1～3は、縁辺一部に剥離が入っている。4は剥片の両側縁に、裏面から連続した剥離が入っている。スクレイパーでも良いかもしれない。5は、剥片の側縁の一部と末端の一部に微細な剥離がある。末端の剥離は表面から入っており、側縁の剥離は表面に入っている。

第196図-1と2は、側縁の一部に微細な剥離が並んでいる。3～11は、剥片の縁辺に不規則な剥離が入っている。

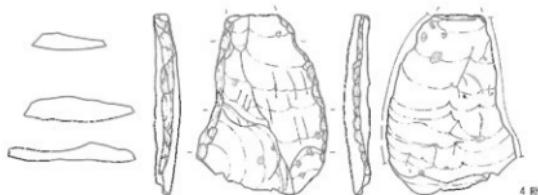
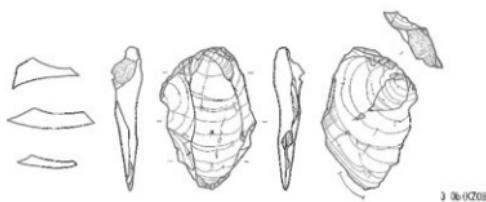
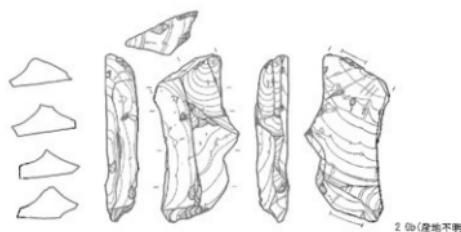
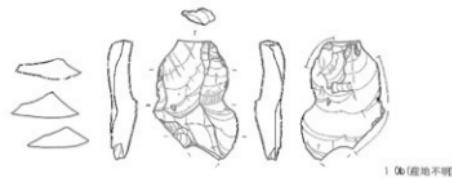
第197図-1と2は、左側縁の一部に微細な剥離がある。3は、向きを変えれば平基の石鏃にも見えるが、他の石鏃と比較すると、結晶片岩製の石鏃以外では、周縁に微細な加工を入れただけの石鏃は例がないこと、表面にこれ程の自然面を残す石鏃も見当たらないことから、微細な剥離のある剥片に分類した。6～24は縦長剥片の縁辺に微細な剥離が見られる。

第198図～第200図は、片面がすべて自然面に覆われた剥片で、縁辺に微細な剥離があるものを掲載した。いずれも円礫から剥離されており、石材はほとんどが砂岩である。同様の剥片は、他にも多く出土しているため、詳細に観察すれば、資料はさらに増えると思われる。

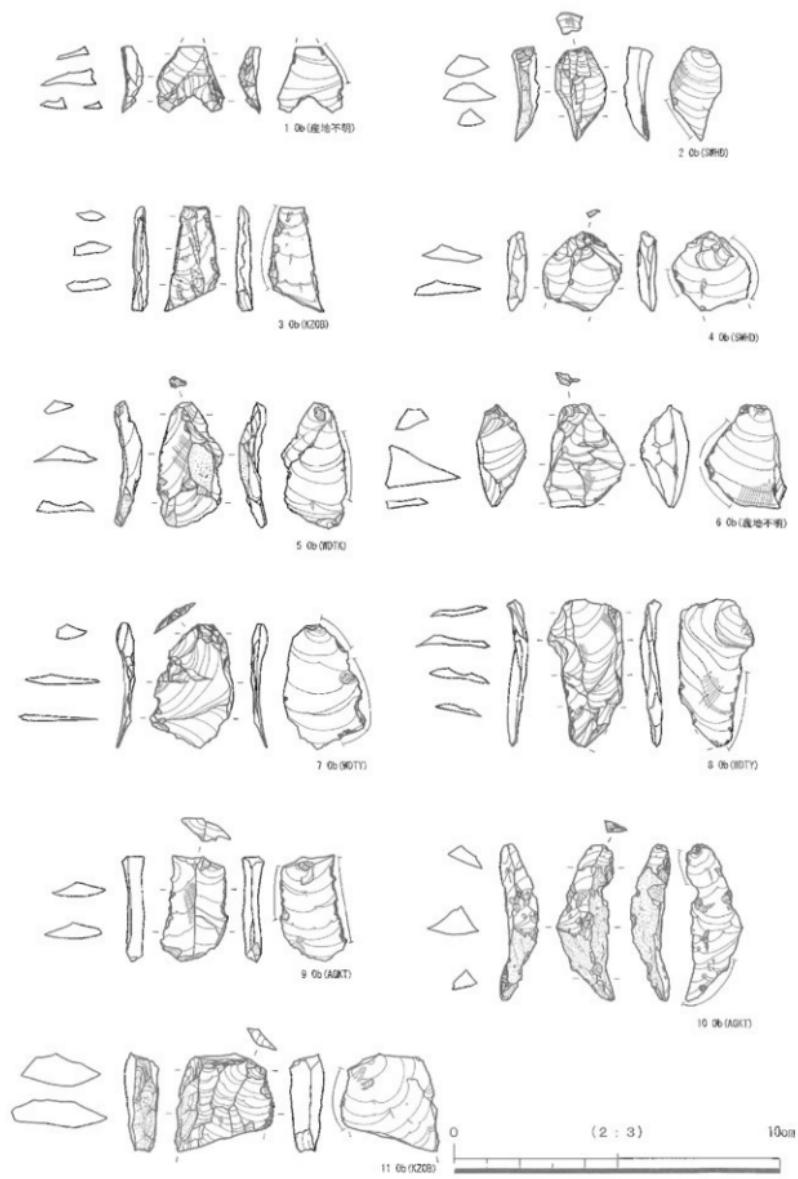
これらの剥片の共通した特徴は、片面がすべて自然面で、先行剥離が見られないことである。先行剥離が見られないということは、円礫から最初に剥離した剥片と言うことになる。これらの剥片を剥離した石核が出土していないことから、他の器種から剥離された剥片と考えた方が良い。砂岩製の石器は、他には打製石斧しか出土していない。後に報告するが、打製石斧の多くは扁平な円礫を素材にしていることから、これらの剥片は、打製石斧製作の初期工程で剥離された剥片と考えるのが妥当である。



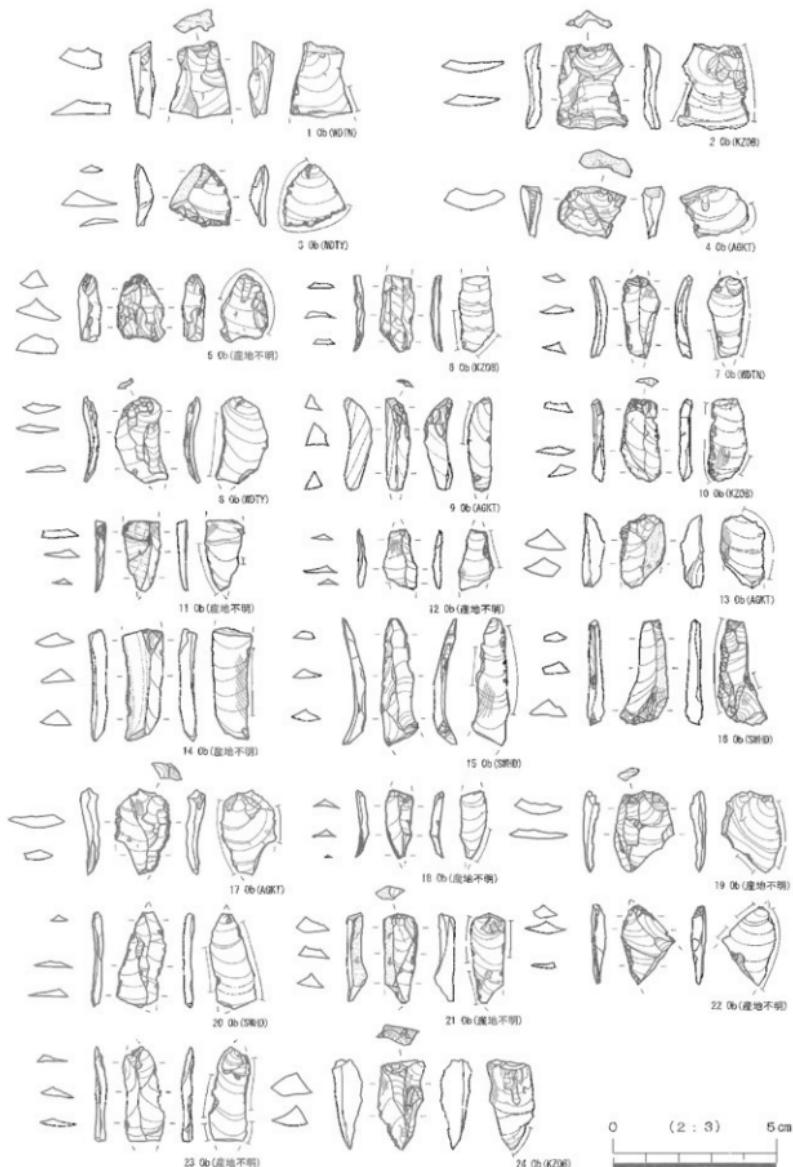
第194図 包含層出土石器16



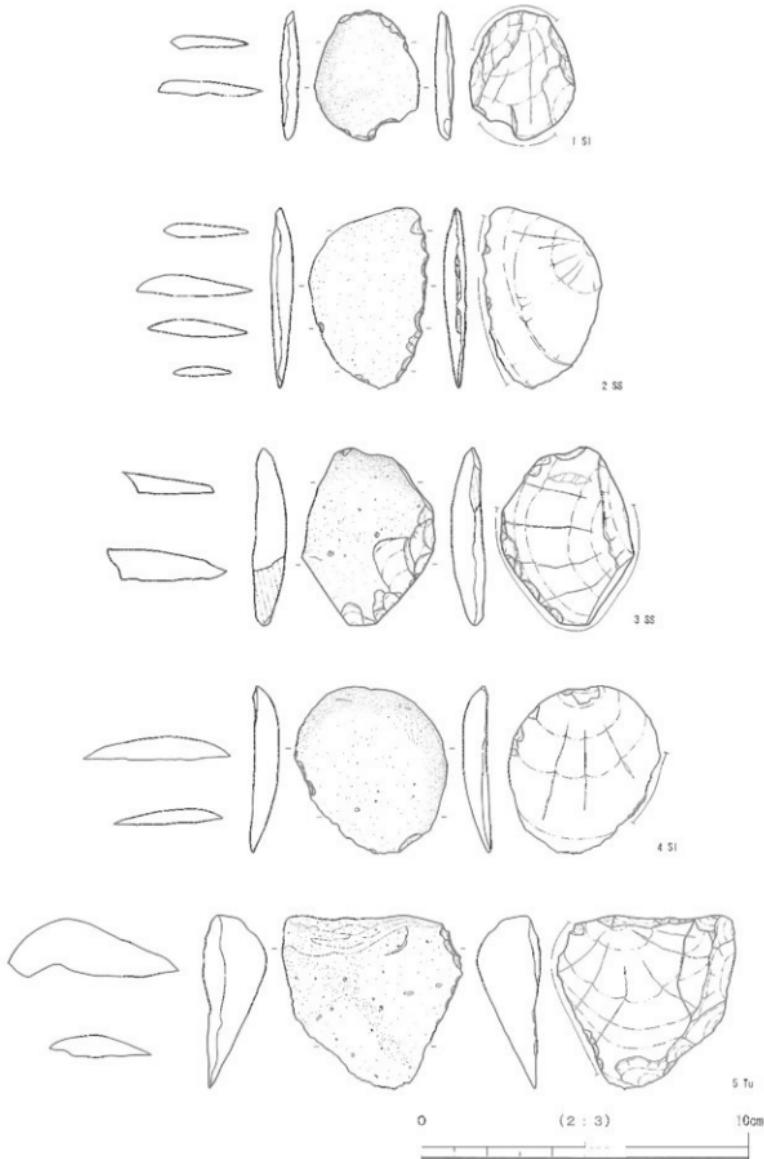
第195図 包含層出土石器17



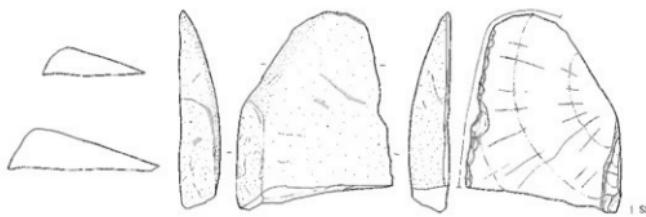
第196圖 包含層出土石器18



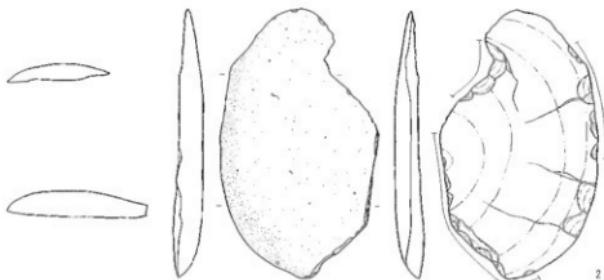
第197図 包含層出土石器19



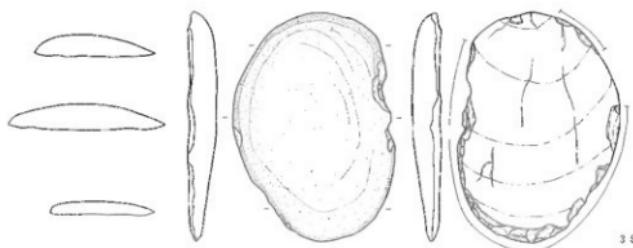
第198図 包含層出土石器20



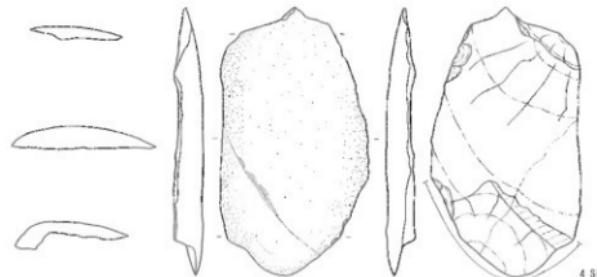
1 ss



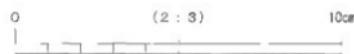
2 si



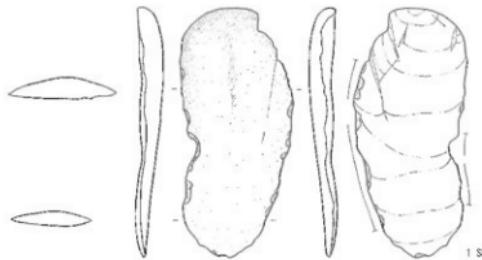
3 si



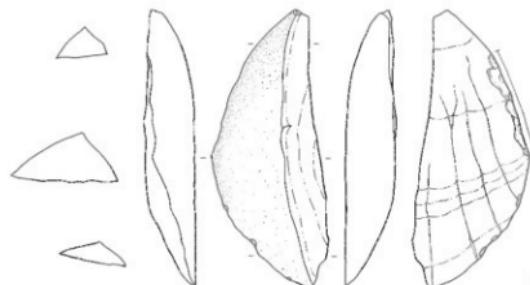
4 si



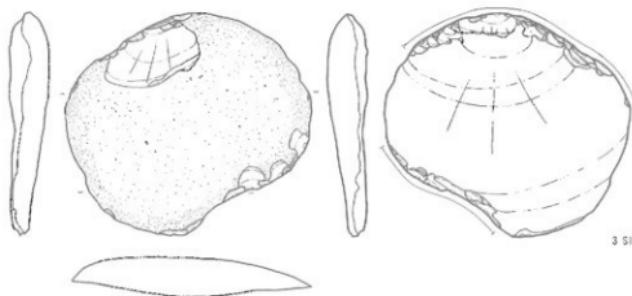
第199図 包含層出土石器21



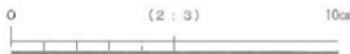
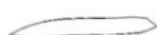
1 ss



2 si



3 si



第200図 包含層出土石器22

## 刃部磨製石斧

第201図-1は、胸部の大半を欠損しており、刃部付近だけが残っている。残っている胸部には研磨痕がないため、刃部だけを磨いていると思われる。研磨は細かく、方向を変えながら研磨している状況がうかがえる。

2は、刃部にわずかに研磨痕が見られるが、磨滅痕かもしれない。3は刃部が撥形に広がる形態で、片面に自然面が残る剥片を使っている。そして、自然面が残っている面を集中的に磨いて刃部を作っている。裏面は刃部の先端付近を磨く程度にとどめている。

## 打製石斧

第202図は、刃部が撥形に広がるものである。1は、扁平な円礫を縦に分割して素材にしていると思われる。刃部に自然面が残っている。2も扁平な礫を縦に分割して使っていると思われる。縁辺を加工しているが、器体中央までは加工が及んでいないため、両面に大きく素材面が残っており、表面には自然面が大きく残っている。3は刃部が大きく広がっている。風化が進んでいるため、剥離面の観察をしにくいが、器体中央まで加工が及んでいるようで、自然面は器体中央にわずかに残るのみである。

第203図-1は刃部が撥形に広がる形態である。扁平な円礫を分割した剥片を加工しており、周縁から平坦剥離を入れて形を作っている。表面の加工は、器体中央を集中的に加工しているのに対して、刃部は裏面からの加工だけにとどめ、表面には自然面が大きく残っている。器体中央部と刃部の加工量の違いから、器体中央部の幅が狭くなり、刃部が撥形に広がる形態を作り出している。

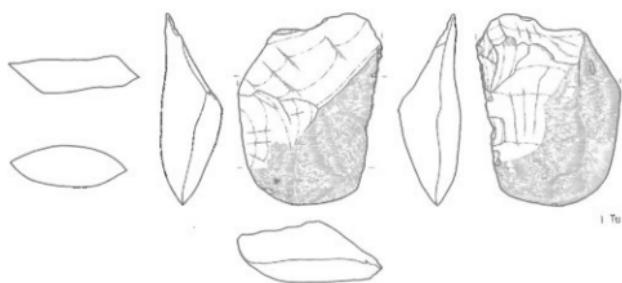
2は縦に分割した円礫を使っている。素材の平面形は細長い橢円形に近かったと思われ、厚さは両端での倍近く違っていたと推定される。そして、薄い方を刃部にして、厚い方を基部にしている。基部側は厚みをとるために集中的に加工しているが、断面形に表れているように、まだ相当な厚さが残っている。そのため、未完成品のように思えるが、刃部には磨滅が見られることから、この状態で使っていったことになる。

第204図-1は、表面が全面自然面に覆われた、縦長の剥片を素材にしている。扁平な円礫から剥離したものと思われる。縁辺を敲打して形を整えており、この時縁辺から小さな剥離が入っている。器体中央部から基部にかけて集中的に敲打し、刃部は敲打していない。このため、器体中央部の幅が狭くなり、刃部が広がる形態になっている。

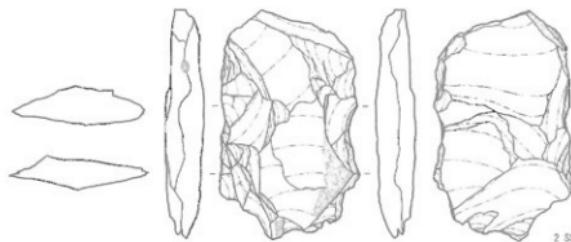
2は、刃部に自然面が残っていることと、裏面に素材の剥離面が残っていることから、円礫から剥離した剥片か、分割した円礫を使っていると思われる。加工は両縁辺から平坦剥離を入れているが、基部に近い部分を集中的に加工している。このため、基部近くにくびれた部分ができる、刃部が広がる形態になっている。薄く剥がれる性質のある石材のため、平坦な剥離面や階段状剥離が目立つ。

第205図-1は円礫から剥離した大型の剥片か、扁平な円礫を分割したものを素材にしていると思われる。加工は、平坦剥離を入れて全体の形を整えながら、器体を薄くしていく、同時に自然面を除去している。その後、縁辺を敲打して細かい整形をしている。器体中央部を集中的に敲打しているため、この部分の幅が狭くなり、これによって、刃部がやや幅広になる形態となっている。加工による剥離の一部は、大きな階段状剥離を起こしている。

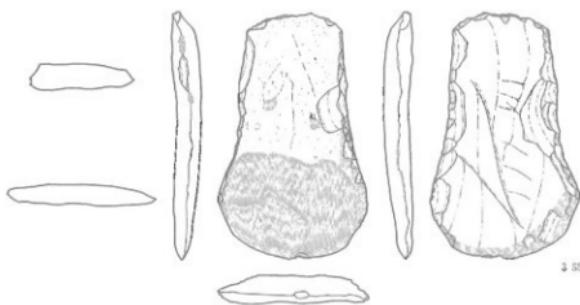
2は扁平な円礫を分割したものか、円礫から剥離した剥片を素材にしている。加工は、両側縁から平坦剥離を入れて形を整えた後、縁辺を敲打して細かい整形をしている。平坦剥離は器体中央までは及んでいないため、表面には大きく自然面が残っている。また、刃部は、端部に小さな剥離を入れる以外、ほとんど加工せず、素材の縁辺が薄くなった部分を活かして刃部にしている。このため、器体中央から基部にかけては、加工によって幅が狭くなっているのに対し、刃部は幅が狭くなっていない。これによって刃部が撥形に広がる形態になっている。



1 Tu



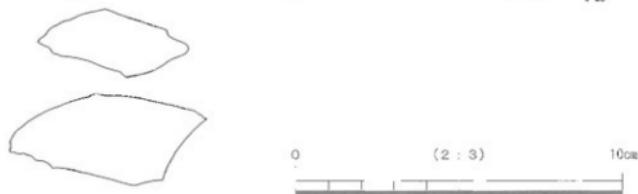
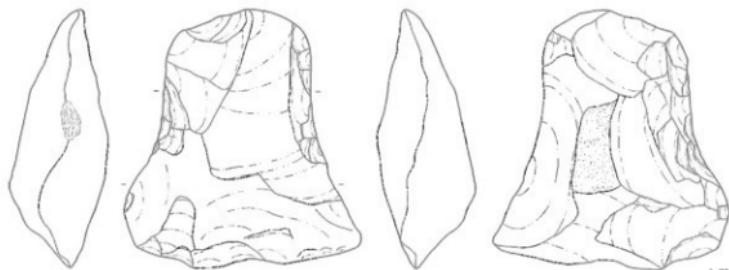
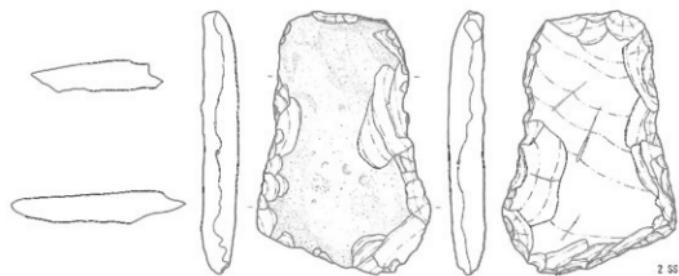
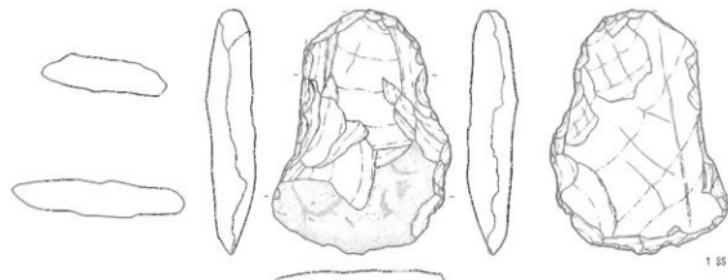
2 ss



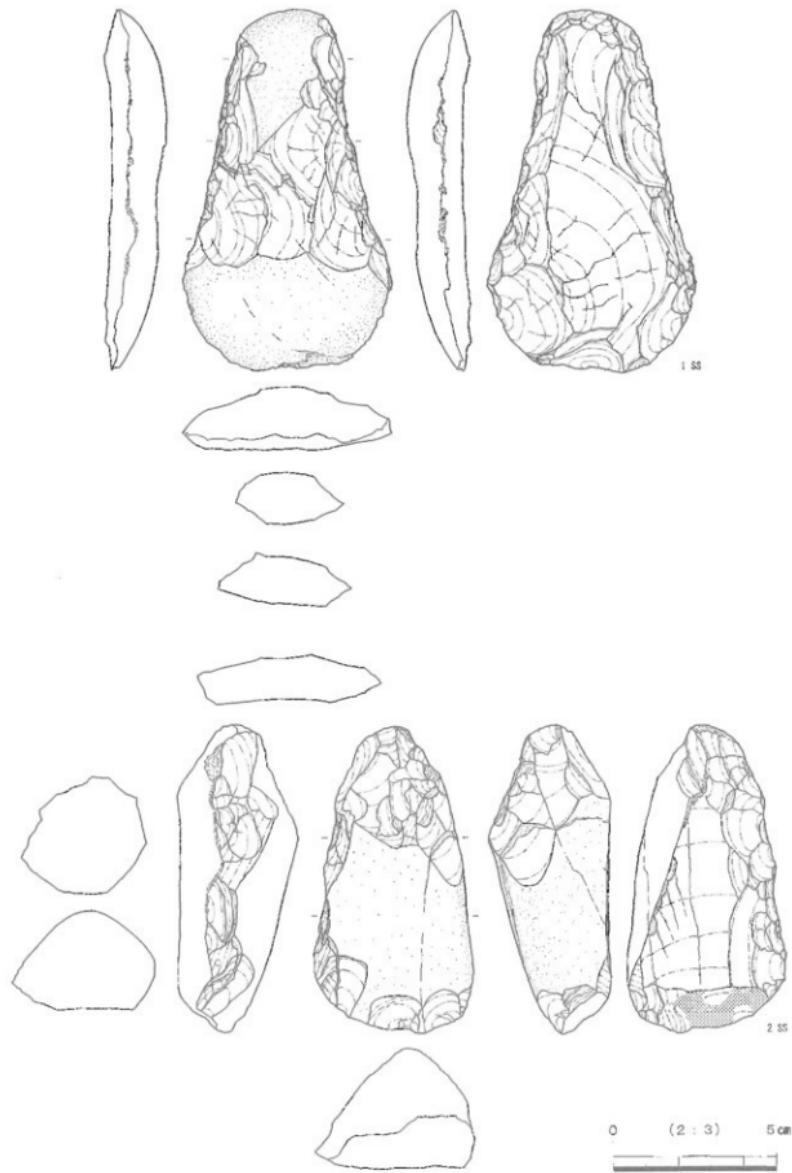
3 ss

0 (2 : 3) 10cm

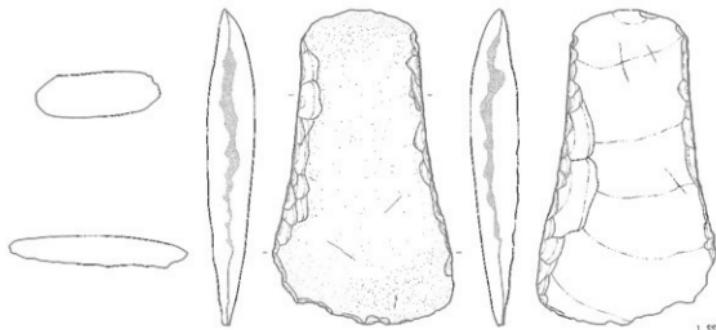
第201図 包含層出土石器23



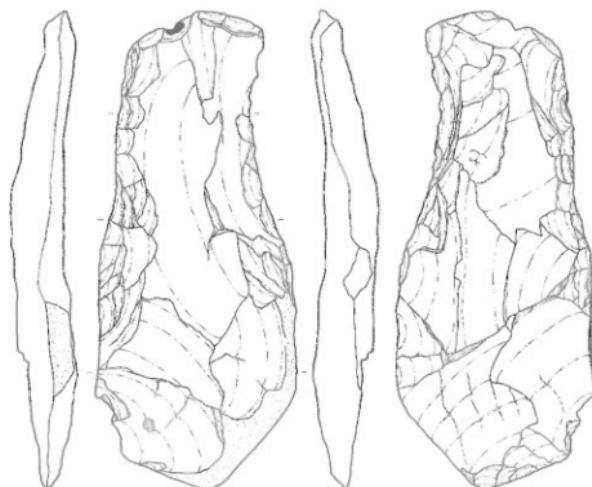
第202図 包含層出土石器24



第203図 包含層出土石器25



1. 155



2. 255

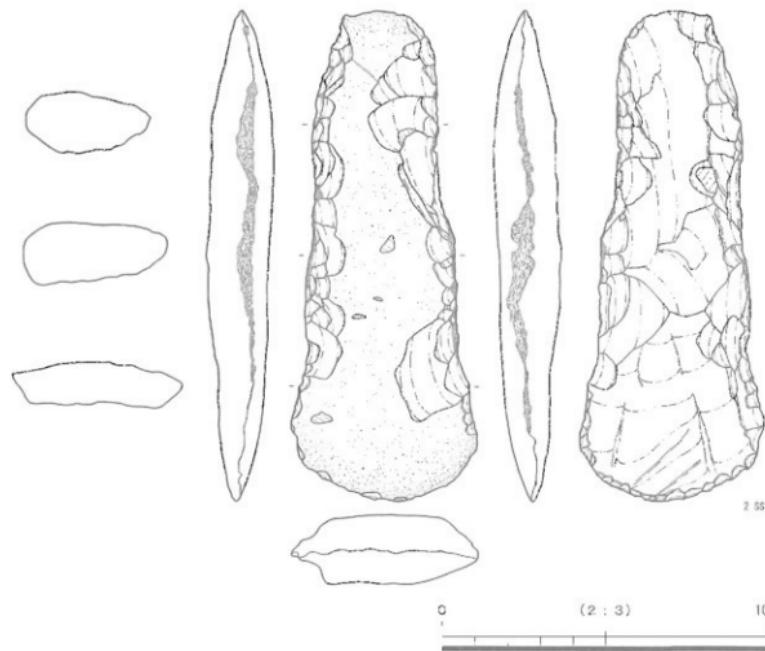
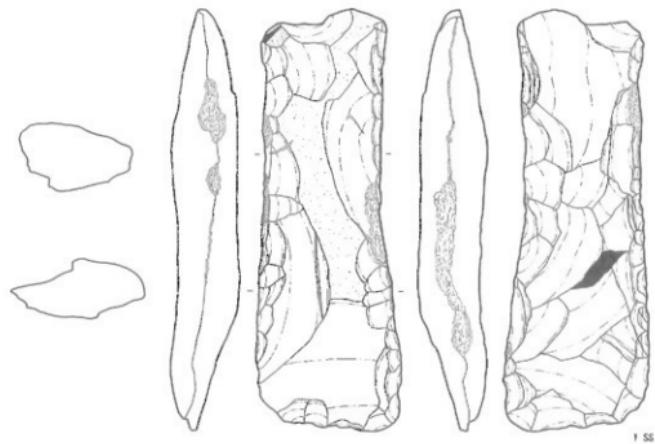


0

(2 : 3)

10cm

第204図 包含層出土石器26



第205図 包含層出土石器27

第206図-1は両面に自然面が残っていることから、扁平な円盤を素材にしていることがわかる。加工は、両端から平坦剥離を入れている。加工量は、胴部中央～基部が多く、刃部に近い部分は、表面には自然面が大きく残っており、裏面には、両側縁に小さな平坦剥離を入れるにとどめている。このため、器体中央～基部の幅が狭くなり、刃部側の幅がやや幅広くなる形態に仕上がっている。

2は両側縁から平坦剥離を入れている。基部に近い部分に浅いくびれができる。器体中央～基部に比べて、刃部の加工量は少なく、刃部の表面には自然面が残っている。

第207図-1は、扁平な円盤から剥離した剥片、もしくは扁平な円盤を分割したものを素材にしている。加工は、両側縁から平坦剥離を入れているが、剥離は小さく、縁辺付近にとどまっている。表面には大きく自然面が残っている。特に刃部の加工量は少ない。もともと素材が薄いため、器体中央付近まで及ぶような剥離を入れる必要がなかったのであろう。

2は風化が進んでいるため、剥離面の観察が困難だが、両側縁から器体中央に向かって平坦な剥離が入っている。加工は、器体中央～基部に集まっており、刃部付近の加工は少ない。このため、器体中央～基部よりも刃部の幅が広くなる形態になっている。

3は、両面に自然面が残っていることから、扁平な円盤を素材にしていることがわかる。加工は両側縁から平坦な剥離を入れている。敲打痕は、平坦剥離に伴うものだが、表面の基部に見られる敲打は、平坦剥離の後で入れている。加工、敲打とともに器体中央～基部を中心に行っており、刃部の加工は少ない。このため、器体中央～基部の幅が狭くなり、刃部側がやや幅広になる形態に仕上がっている。

第208図-1は大型の剥片を素材にしていると思われる。加工は両側縁から平坦剥離を入れているが、剥離はすべて縁辺付近にとどまっている。素材が薄いため、器体中央付近まで及ぶ剥離を入れる必要がなかったのであろう。両側縁の敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。

2は、両側縁から器体中央まで及ぶ平坦剥離を入れている。厚さを減じる加工をしていることがうかがえる。両側縁の敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。

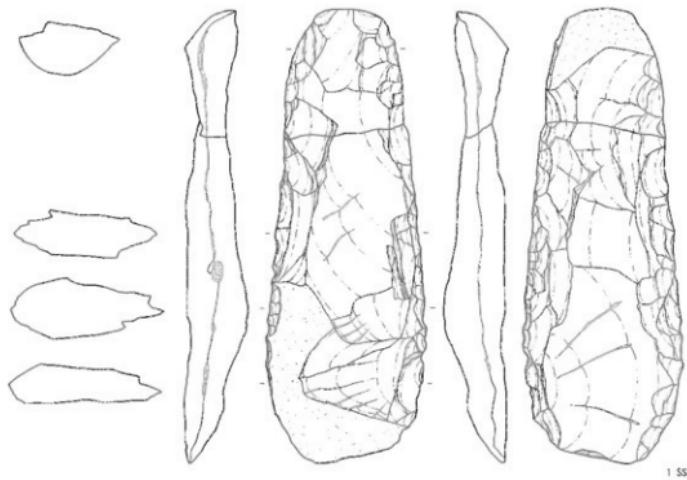
3は、表面に大きく自然面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、分割した円盤を素材にしていると思われる。加工は両側縁から平坦剥離を入れているが、基部、器体中央、刃部で加工量に差はない。そのため、幅も均一になっている。側縁に見られる敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。

第209図-1は、裏面に剥片の主剥離面が残っていることから、大型の剥片を素材にしていることがわかる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れている。表面の加工は、器体中央付近まで及ぶ剥離が見られるのに対して、裏面の加工による剥離は、縁辺付近にとどまっている。敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。刃部先端は加工せずに素材の縁辺をそのまま刃部にしている。

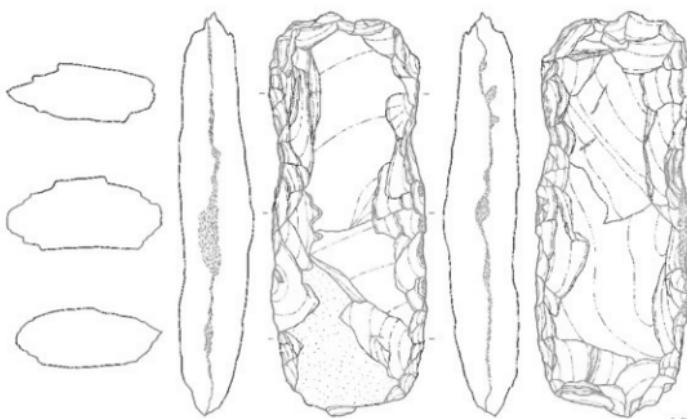
2は、裏面に剥片の主剥離面が残っていることから、大型の剥片を素材にしていることがわかる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れているが、表面の加工は、器体中央まで及ぶ剥離が見られるのに対して、裏面の加工による剥離は、縁辺付近にとどまっている。左側縁に大きな敲打痕が見られるが、平坦剥離の後に敲打しているかもしれない。刃部の形成は、表面に刃部先端側から大きな剥離を入れた後、裏面に刃部先端から平坦剥離を入れて作っている。

第210図-1は、両面に自然面が残っていることから、扁平な円盤を使っていることがわかる。そして、両側縁から平坦剥離を入れている。加工による剥離は、自然面を除去するために、器体中央を越えて反対側まで突き抜けるようなものが見られる。側縁の敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。

2は円盤から剥離した剥片、もしくは扁平な円盤を分割したものを素材にしている。そして、両側縁から平坦剥離を入れている。表面の平坦剥離は器体中央まで及んでいないため、表面には自然面が大きく残っている。裏面の平坦剥離は、器体中央まで及んでいるものがあり、これによって素材剥片の主剥離面が除去されている。側縁に見られる敲打痕は、平坦剥離を入れた時にできたものである。



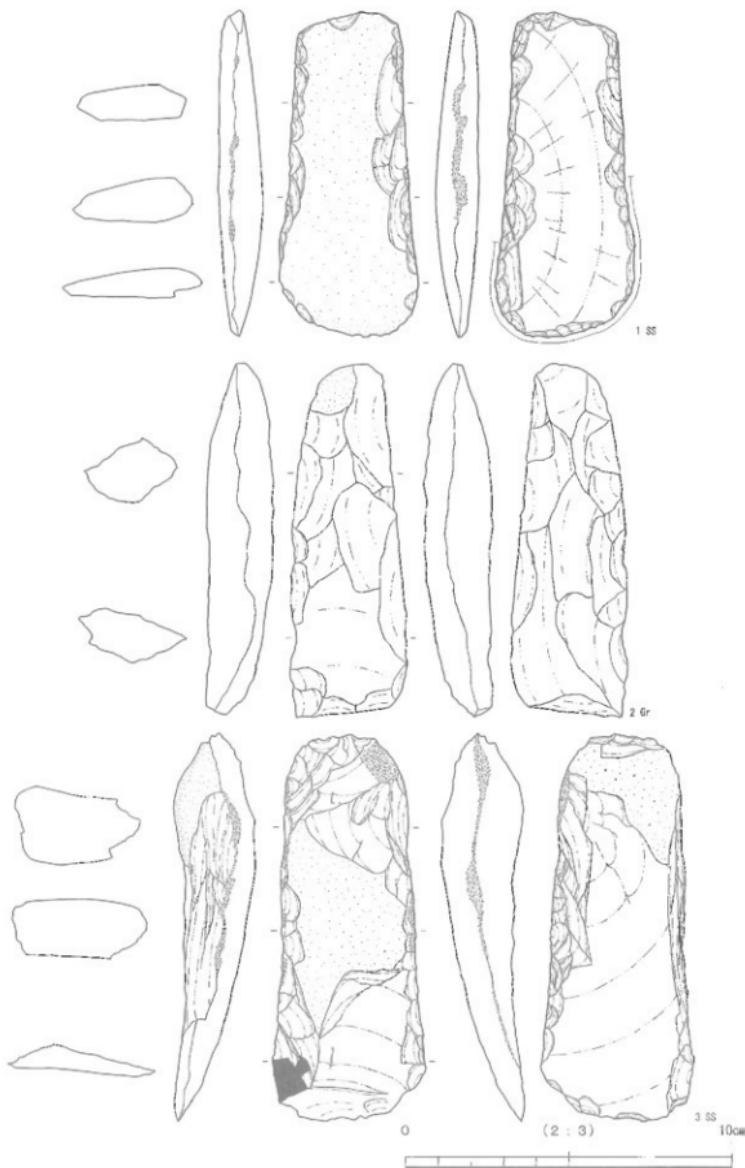
1 ss



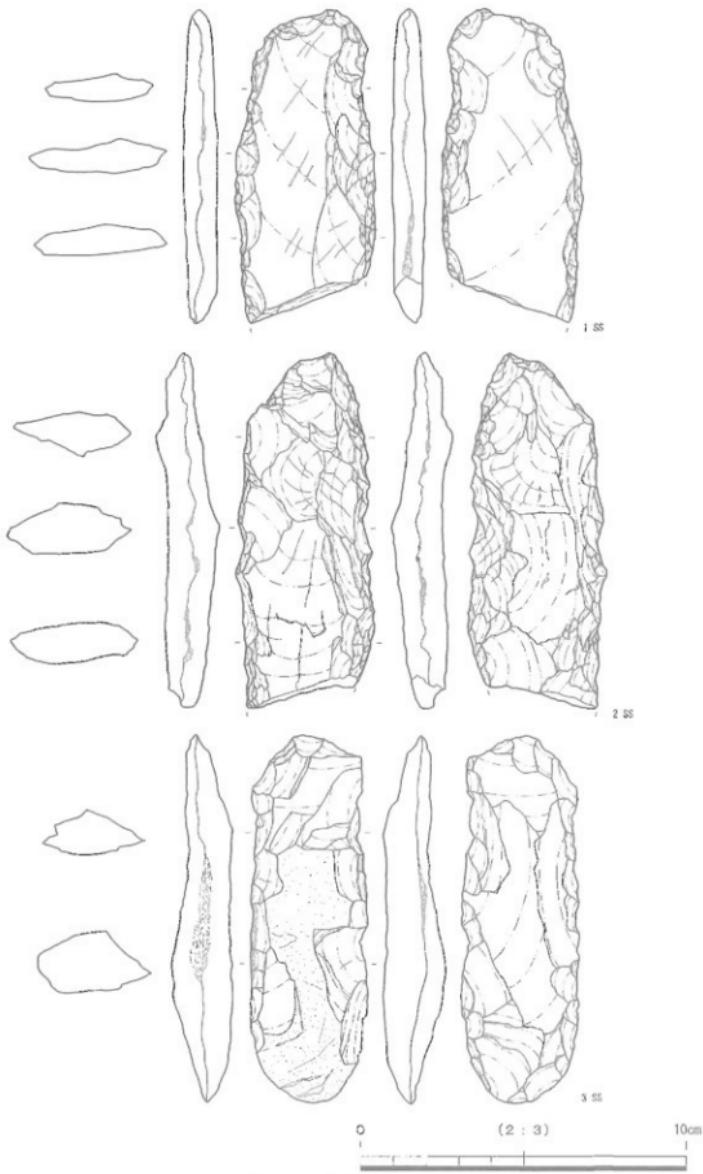
2 ss



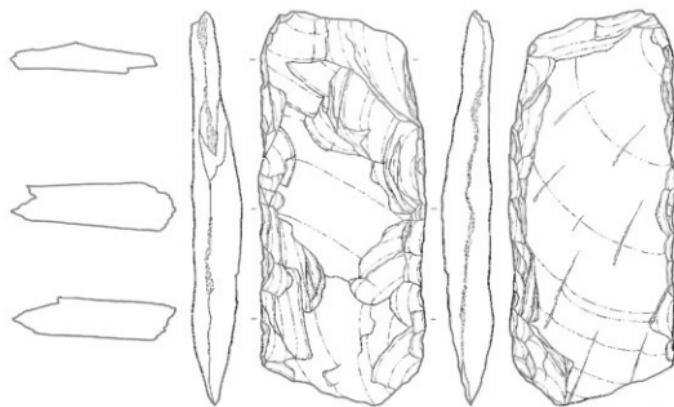
第206図 包含層出土石器28



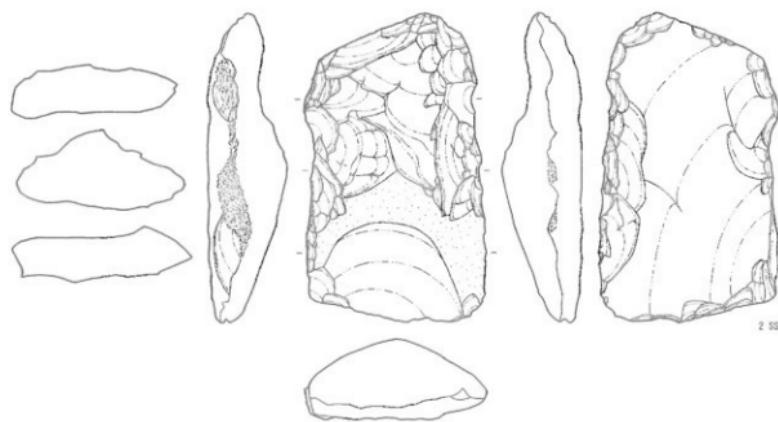
第207図 包含層出土石器29



第208図 包含層出土石器30



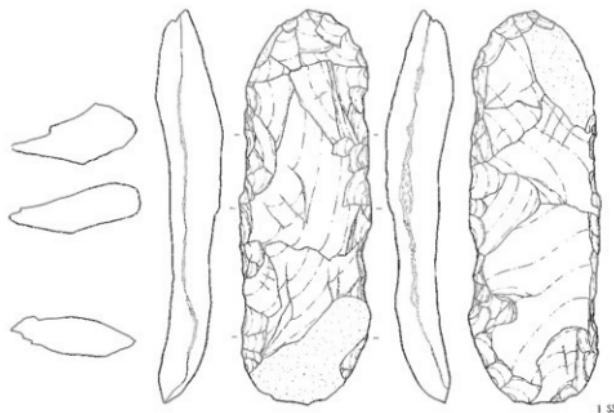
1.55



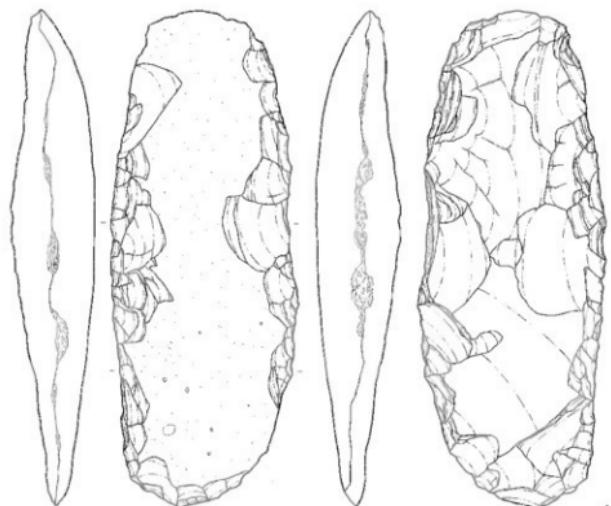
2.55

0 (2 : 3) 10cm

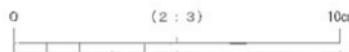
第209図 包含層出土石器31



1 ss



2 ss



第210図 包含層出土石器32

第211図-1は、剥片を素材にして側縁から平坦剥離を入れたもので、楔形石器にも見えるが、砂岩を使った楔形石器は他に例がないことと、楔形石器には大きいことから、打製石斧にした。

2は、刃部を石の目で欠損、側部は平坦剥離の途中で折れている。3は加工が進んでいるらしく、自然面は残っていない。加工は基部～刃部で差ではなく、両側縁が並行する形態になっている。刃部も両面に平坦剥離が入っている。

第212図-1は、円盤から剥離した剥片、もしくは扁平な円盤を分割したものを素材にしている。加工は両側縁から平坦剥離を入れているが、器体中央付近まで及ぶような剥離はほとんど見られない。刃部は、表面は未加工で自然面が残り、裏面は、先端から平坦剥離を入れて刃部を作っている。

2は、表面に平坦に近い自然面が残り、裏面には大きな縦方向の剥離が見られる。この縦方向の剥離面が、素材になった剥片の主剥離面である。上端にも平坦な自然面が見られる。これらのことから、素材になった剥片は、円盤ではなく、角盤から剥離されたと思われる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れているが、器体中央まで及ぶ剥離ではなく両面とも素材面が残っている。素材の段階で必要な厚さになっているため、器体を薄くする加工が必要がなかったのであろう。刃部には、両面から平坦剥離を入れている。

第213図-1は一部に自然面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、分割した円盤を使っていることがわかる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れているが、薄く剥がれる性質の石材のため、階段状剥離が目立つ。中央付近で欠損しているが、欠損後に欠損した面を打面にした剥離が見られるところから、欠損後に再加工していることがわかる。

2も同様に中央付近で折れているが、折れてから折れた面を打面にした剥離面が見られる。これも折れた後に再加工していると思われる。

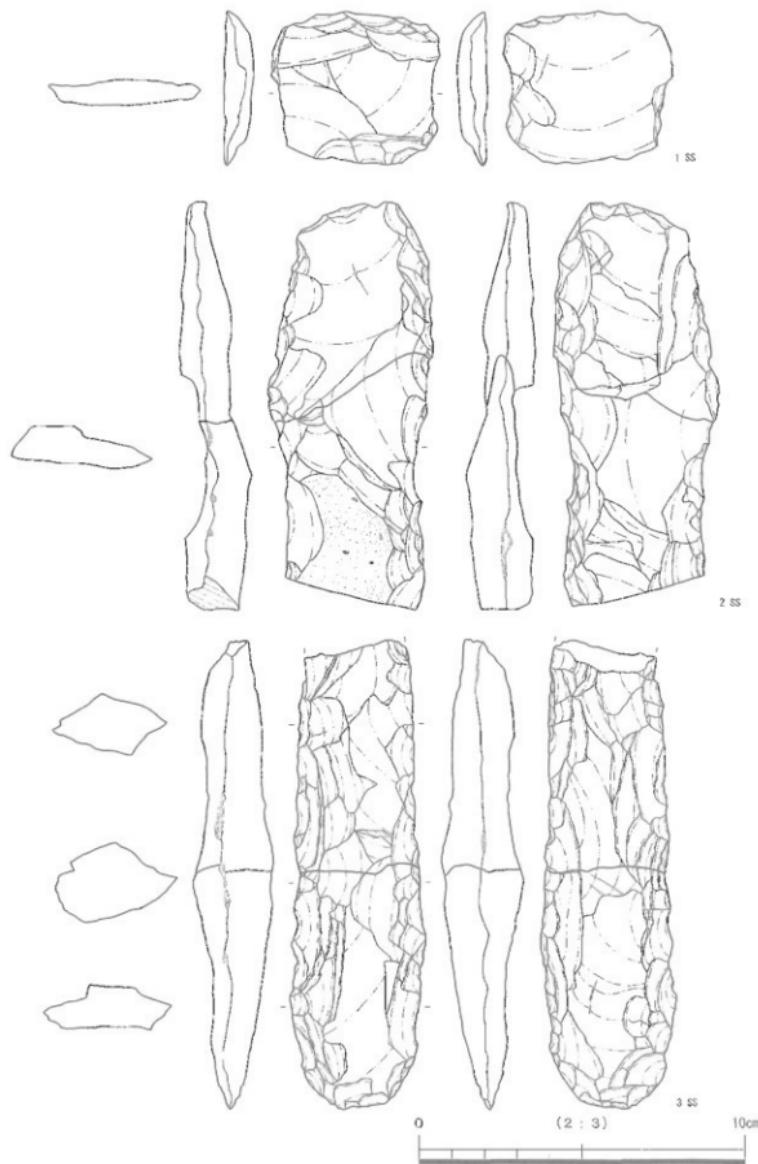
3は自然面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、分割した円盤を素材にしていると思われる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れている。平坦剥離は器体中央まで及ぶものがあり、素材面を除去するとともに、器体を薄くする意図がうかがえる。

第214図-1は剥片を素材にして側縁から平坦剥離を入れている。加工の量は多くなく、器体中央付近まで及ぶ加工もないことから、素材の形はあまり変わっていないと思われる。

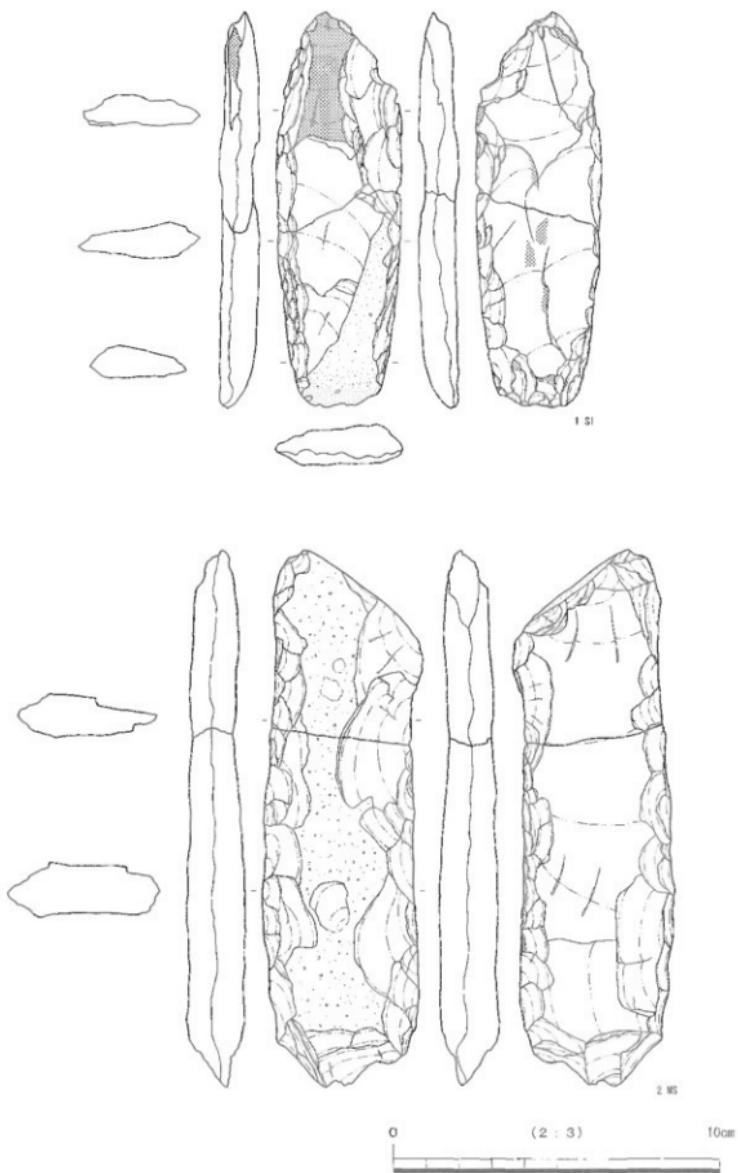
2も剥片を素材にして、両側縁から平坦剥離を入れて加工している。器体中央まで及ぶ剥離ではなく、素材の幅や厚さはあまり変わっていないと思われる。図中に実線で示した範囲の側縁に磨滅が見られる。3は、自然面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、分割した円盤を使っていると思われる。加工は両側縁から平坦剥離を入れているが、器体中央まで及ぶような剥離がないことから、素材の幅や厚さはあまり変わっていないと思われる。刃部は、裏面だけ加工している。表面には加工が見られず、自然面が残っている。

4は、剥片を素材にして、両側縁から平坦剥離を入れて加工している。器体の薄い方を刃部と考えたが、器体の中心軸に対して刃部が斜めに作られていることになる。側縁の敲打痕は平坦剥離を入れた時のつぶれである。

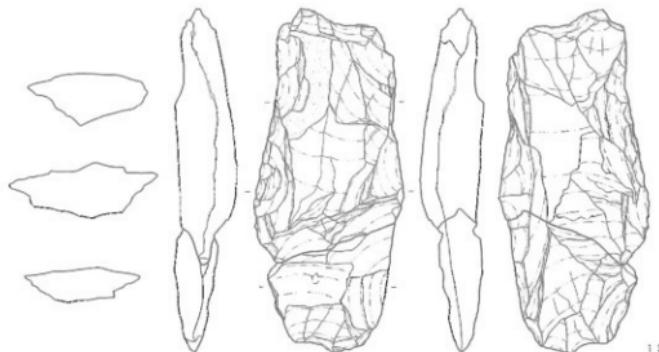
第215図-1は、表面に円盤面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、扁平な円盤を分割したものを素材にしていることがわかる。加工は両側縁から両面に平坦剥離を入れている。表面の加工は器体中央まで及ぶものがないため、表面には大きく自然面が残っている。裏面の加工は、中央付近で器体中央まで及ぶ平坦剥離が入っている以外は、縁辺付近にとどまる剥離を入れて形を整えている。また、器体中央～基部に加工が集中しており、これに対して刃部に近い部分は加工が少ないと、器体中央～基部の幅が狭くなり、刃部側の幅が広くなる形態になっている。側縁部の敲打痕は、平坦剥離に伴うものである。



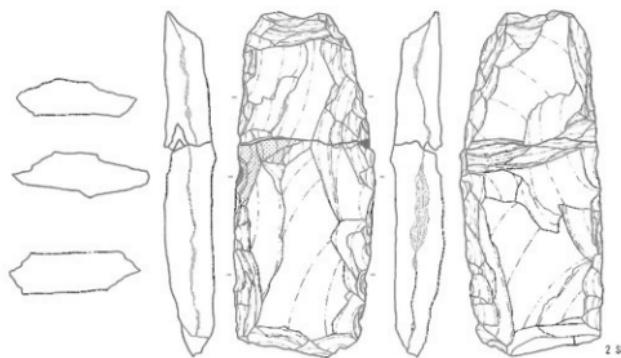
第211図 包含層出土石器33



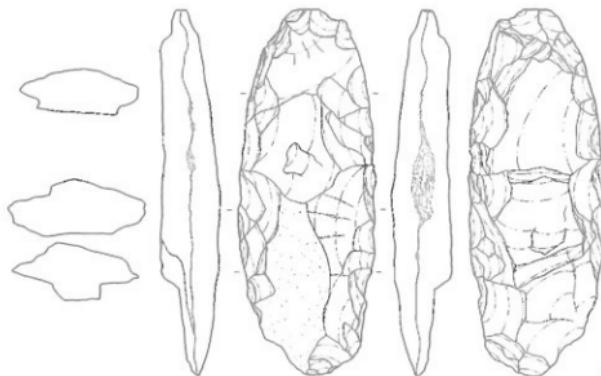
第212図 包含層出土石器34



1-31



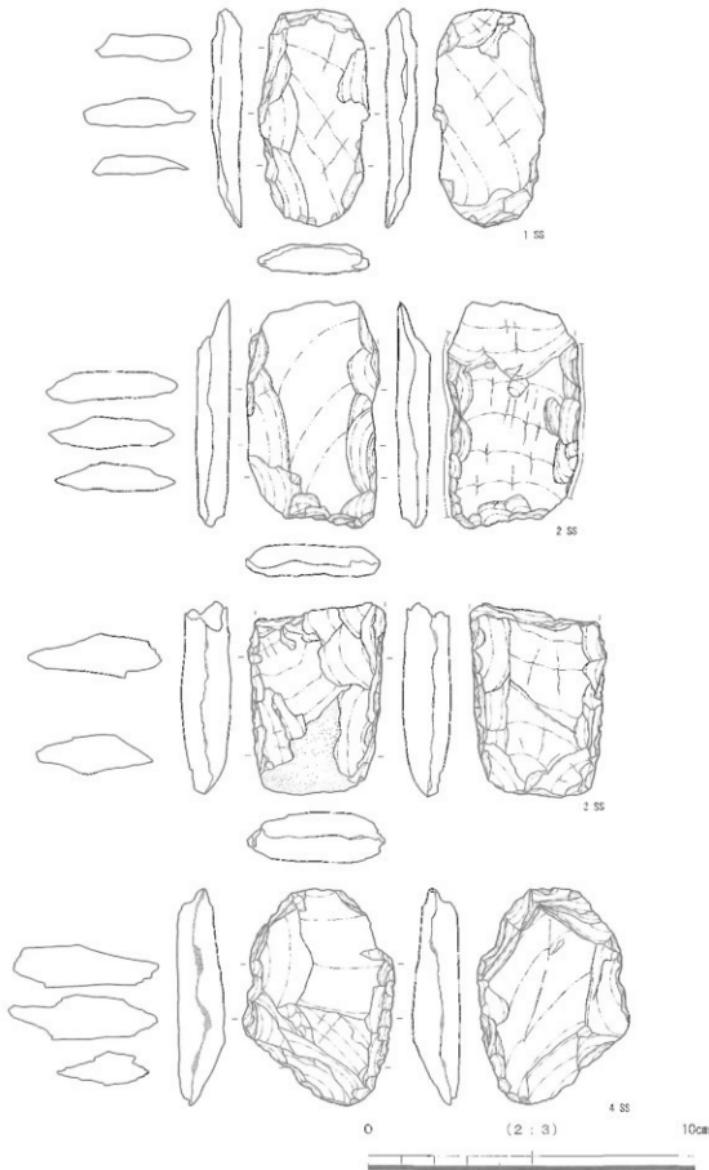
2-32



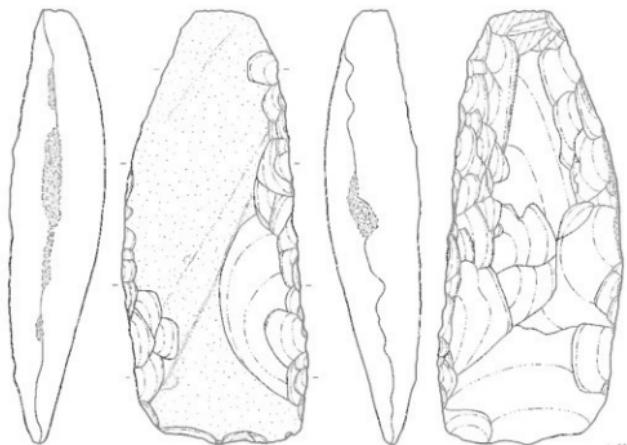
3-33

0 (2 : 3) 10cm

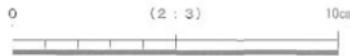
第213図 包含層出土石器35



第214図 包含層出土石器36



1-4



第215図 包含層出土石器37

第216図-1は自然面が残っていることから、円盤から剥離した剥片か、分割した円盤を使っていると思われる。表面の加工は、器体中央付近まで及ぶ剥離がないため、自然面が大きく残っている。裏面の加工は、器体中央を越えて反対側まで抜ける剥離を入れた後、両側縁から小さな剥離を入れている。

2は表面に自然面、裏面に素材剥片の主剥離面が大きく残っている。加工による剥離は、縁辺付近にとどまっている。加工量は、刃部よりも器体中央～基部の方が多いため、基部側の幅が狭くなり、刃部の幅が広がる形態になっている。刃部にも両面から平坦剥離が入っている。

3も表面に自然面、裏面に素材剥片の主剥離面が大きく残っていることから、円盤から剥離した剥片か、扁平な円盤を分割したものを素材にしている。表面は器体中央～基部を加工しており、刃部はほとんど加工していない。器体中央～基部の加工も小さな剥離のため、表面には自然面が大きく残っている。裏面の加工も器体中央～基部に集まっている、刃部はほとんど加工していない。このため、器体中央～基部の幅が狭くなり、刃部が広がる形態になっている。

第217図-1は表面が全面自然面で加工による剥離がない。裏面は側縁から平坦剥離を入れているが、器体中央まで及ぶ剥離がないため、中央付近に素材となった剥片の主剥離面が残っている。未完成品のためか、縁辺が鋸歯状になっている。

2は円盤から剥離した剥片を素材にしている。表面の加工は、器体中央の右側縁に加工がある以外は、下部に小さな剥離が3枚見られるだけで、他は自然面に覆われている。裏面は両側縁から加工しているが、素材剥片の主剥離面が大きく残っている。加工が進んでいないこともあり、上下のどちらが刃部か判断に迷う資料である。

3は表面が全面自然面に覆われている。裏面の加工は、実測図に示したように、片側縁に集中している。石材に薄く剥がれる性質があるため、階段状剥離が目立つ。

第218図-1は円盤から剥離した剥片を素材にしている。表面は器体中央～基部を加工しており、刃部には加工が見られない。器体中央付近まで及ぶ剥離がないため、自然面が大きく残っている。裏面は側縁から加工しているが、表面と同様、大きな剥離がないため、素材剥片の主剥離面が大きく残っている。素材剥片の末端を刃部にしており、末端から小さな剥離を入れて刃部を作っている。

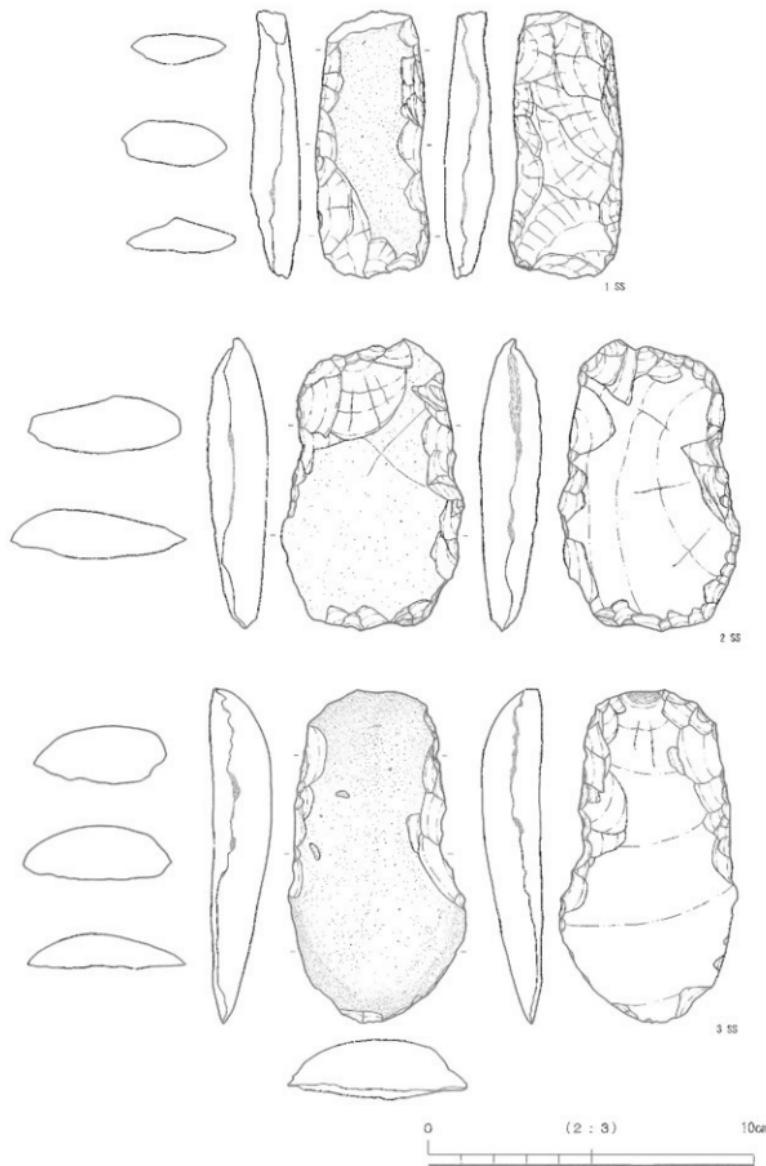
2は表面が自然面に覆われている。裏面は、縁辺から器体中央に達する剥離を入れた後、小さな平坦剥離を入れている。これも刃部がどこになるのか判断しにくいが、加工が集中して薄くなっている部分を刃部と考えた。

3は胴部中央付近にくびれのある打製石斧である。一部に自然面が残っているが、他は加工による剥離が全面を覆っている。多くの剥離が器体中央を越えて反対側まで抜ける剥離であることから、素材の変形の度合いは、他の石斧に比べて大きいと思われる。

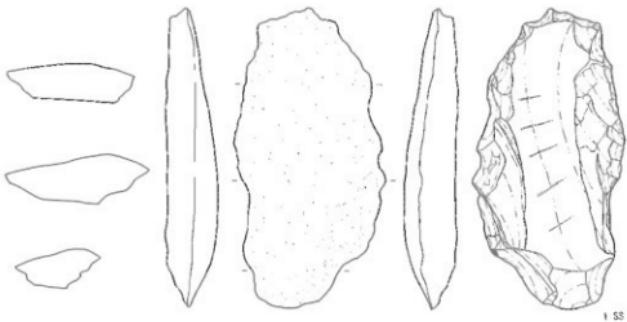
第219図は、打製石斧の再生を示す接合資料である。1～4の4つが接合している。当初の状態をうかがえるのが1である。1の表面に自然面が残っていることと、その裏面に素材剥片の主剥離面が残っていることから、円盤から剥離した剥片を素材にしていることがわかる。1の表面には自然面が大きく残り、縁辺からの加工は小さな剥離が見られるだけである。ただし、他の打製石斧に見られるように、刃部付近は加工が少ないものが多いため、胴部～基部も加工が少なかったかどうかはわからない。

1と2～4は石の目で折れている。折れた後、側縁から再加工して2～4の石斧を作っている。2～4だけを見ると、両側縁を均等に加工しているようだが、1と接合した状態を見れば、加工が片側縁に偏ったため、幅の減少が左右で異なることがわかる。

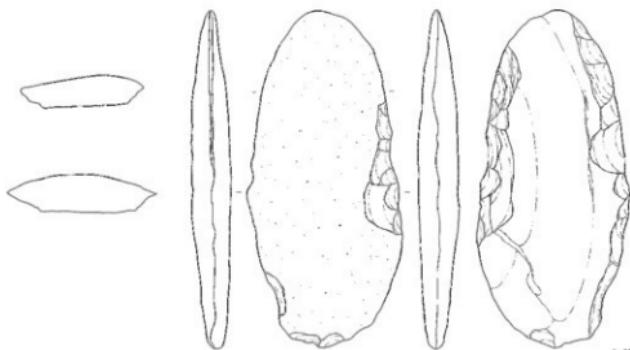
1と2～4が分離して2～4を再加工する途中で3が大きく剥離する。そして、3をさらに加工して小型の打製石斧にしている。その後、2と4だけになった石斧を加工し続けるが、これも折れて2と4に分かれたところで加工を中止している。



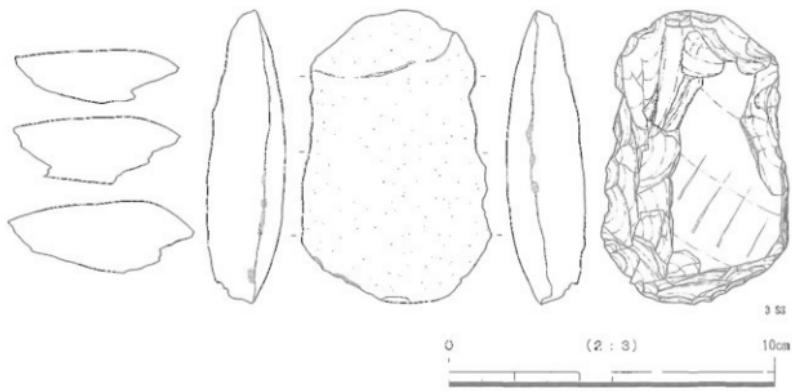
第216図 包含層出土石器38



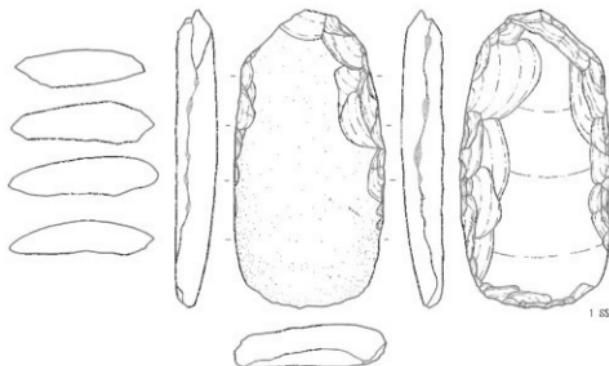
1 SS



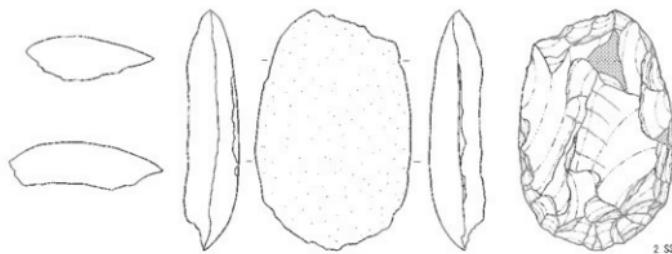
2 SS



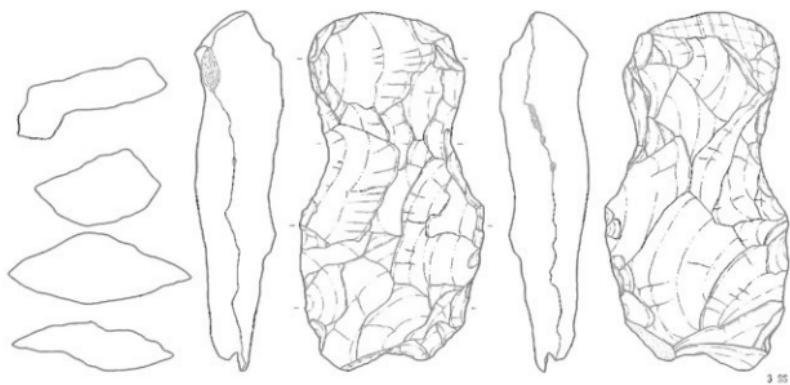
第217図 包含層出土石器39



1 ss



2 ss



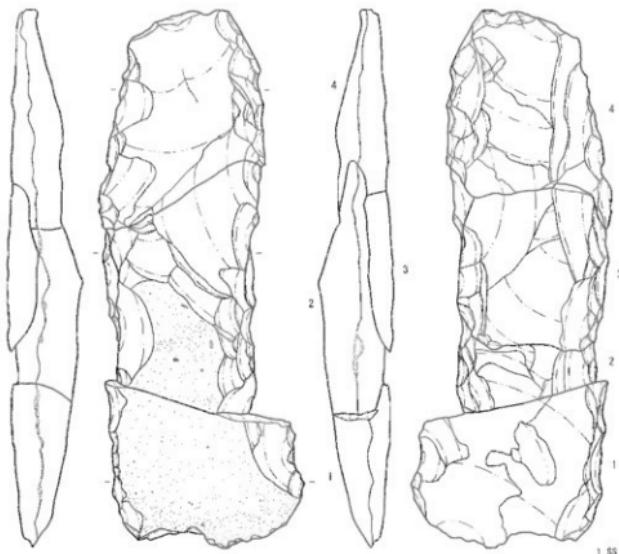
3 ss

0

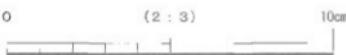
(2 : 3)

10cm

第218図 包含層出土石器40



1 ss



第219図 包含層出土石器41

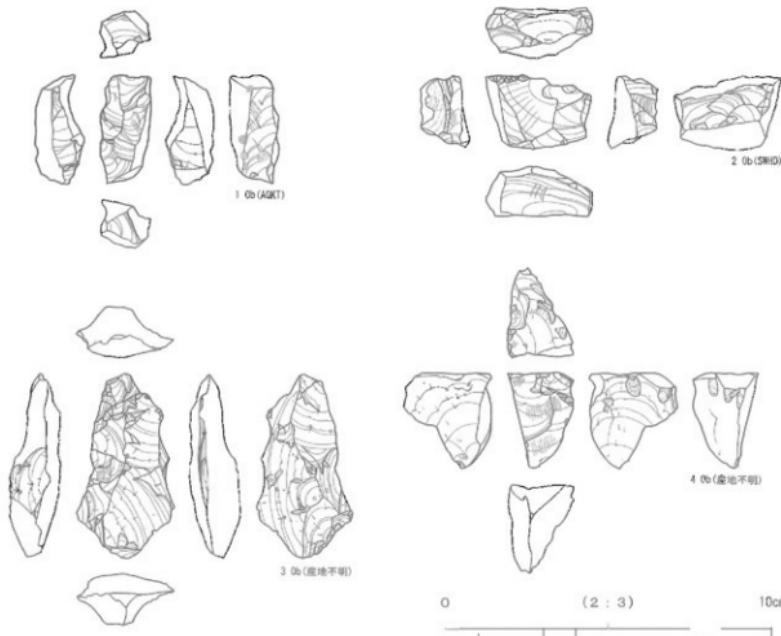
## 石核

休場層よりも上から出土した石核を縄文時代の石核にしたが、これもナイフ形石器や尖頭器と同様に、旧石器時代の石核を含んでいる可能性は十分にある。

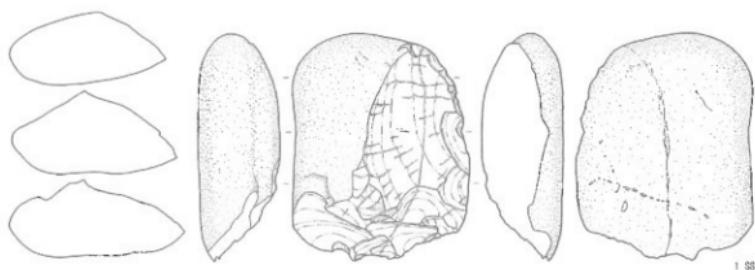
第220図は、黒曜石製の石核である。1は、平坦打面から縦長の剥片を剥離している。2は、調整打面から不定形の剥片を剥離している。3は、両側線で交互剥離によって、不定形の剥片を剥離している。4は、平坦打面から不定形の剥片を剥離している。1～4は、これ以上の剥片剥離は無理と思われる。

第221図-1は扁平な円盤の側線から不定形の剥片を剥離している。打面は自然面をそのまま利用している。2は、裏面に素材になった剥片の主剥離面が残っていることから、大型の剥片が分割した砾を使っていると思われる。そして、側線で交互剥離によって不定形の剥片を剥離している。加工による剥離面が大きいことから石核と考えたが、先端を作り出し、全体を木の葉形にしているように見えることから、尖頭器の未完成品、もしくは砾器の可能性もある。

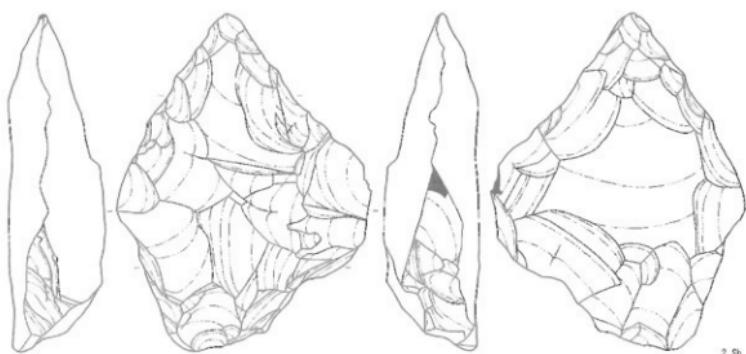
第222図-1は、扁平な円盤の平坦な面を自然面のまま打面として、円盤の両端で不定形の剥片を剥離している。作業面が横長のため、横に長い剥片が剥離されている。2は円盤面が残っていることから、円盤を素材にしていることはわかるが、円盤のまま剥片剥離を始めたのか、円盤を分割してから剥片を剥離し始めたのかはわからない。実測図の正面にした面と裏面にした面は剥片剥離の作業面で、いずれも上面にある平坦面を打面にして不整形の剥片を剥離している。これらの剥離の後に、側面を作業面にして小型の剥片を剥離している。



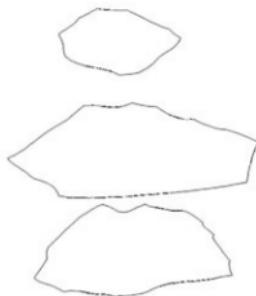
第220図 包含層出土石器4



1. Sh



2. Sh



第221図 包含層出土石器43

第223図-1は細長い円礫の一端で、打面と作業面を入れ替えながら不定形の剥片を剥離している。2は円礫を石の目で分割して三角柱のような形にして素材にしている。そして、石の目を打面にして側面で不定形の剥片を剥離している。

第224図-1は円礫を半分に分割して、円礫面を打面、分割面を作業面にして不定形の剥片を剥離している。作業面には分割面が残っていることから、剥片剥離の初期の段階と思われる。2は扁平な円礫の平坦な自然面を打面にして、小口面で不定形の剥片を剥離している。

第225図-1は分割した円礫を素材にして、分割面で不定形の剥片を剥離している。打面は分割面の周りを周回しており、すべて自然面打面である。作業面に分割面が残っていることから、剥片剥離の初期の段階と思われる。

2は、分割した円礫を素材にして分割面を作業面にして不定形の剥片を剥離している。打面は自然面である。正面の作業面で剥片を剥離した後、実測図下面に示した石の目に、小さな剥離が入っている。この部分には、別の方向に石の目が入っていることから、剥片剥離の前に、石の目で割れる部分を先に割っておこうという意図がうかがえる。

第226図-1は、扁平な円礫の平坦な自然面を打面にして、側面で不定形の剥片を剥離している。これは礫器の可能性もある。2は、分割した円礫の分割面を作業面にして不定形の剥片を剥離している。打面は円礫面である。作業面に分割面が残っていることから、剥片剥離の初期の段階と思われるが、側面形からわかるように、これ以上剥片剥離を続けると、作業面の高さが急激に小さくなっていくため、この段階で剥片剥離を諦めたようである。

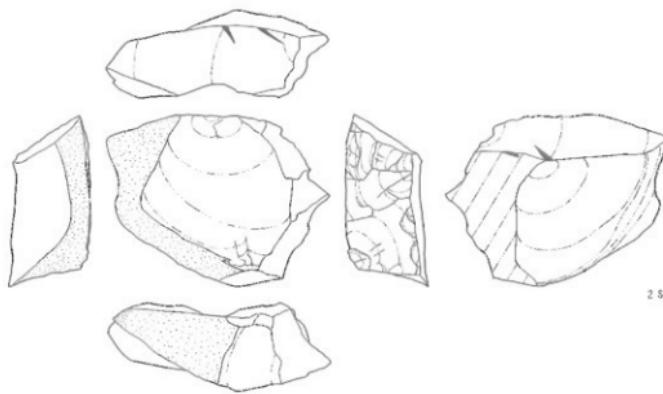
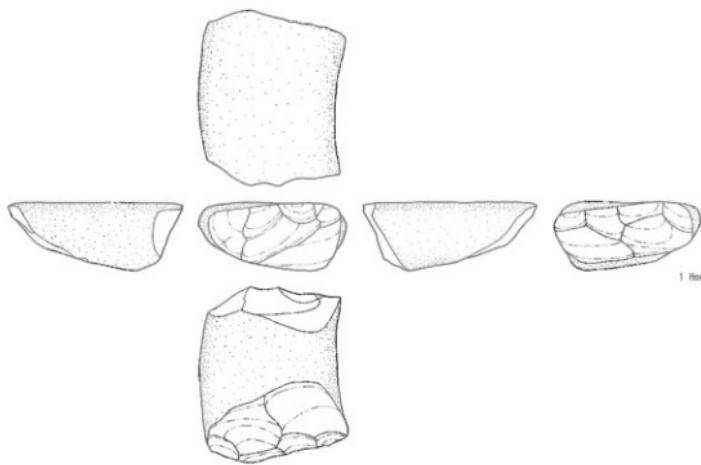
第227図-1は、円礫の平坦になっている面を自然面のまま打面にして剥片を剥離している。剥片剥離を始めて間もない石核だが、中央付近に石の目が入っており、作業面での最後の剥離は、この石の目を境に末端が階段状剥離を起こしている。このことから、この石の目を越えて剥離しても、同じように階段状剥離を起こすか、うまく剥離した場合でも石の目で剥片が折れる可能性が高い。その判断から剥片剥離初期の状態だが、この石核を放棄したと考えられる。

2は、円礫の平坦になっている面を自然面のまま打面にして、やや縦長の剥片を剥離している。まだ剥片剥離が可能な状態と思われる。

第228図-1は、円礫の平坦な自然面を打面にして、やや縦長の剥片を剥離している。側面形でわかるように、これ以上剥片を剥離すると、作業面の高さが急激に低くなっていくため、ここで剥片剥離を中止したと思われる。

第229図-1は、円礫の平坦な自然面を打面にして不定形の剥片を剥離している。作業面に残っている自然面の大きさから、剥片剥離の初期段階と思われるが、作業面中央付近の剥離が末端で階段状剥離を起こしている。この場合、別の方向から剥離を入れて、この階段状剥離を除去しない限り、続行する剥片剥離の障害になる。階段状剥離を起こした部分を除去する1つの手段として、180度の打面転移をして、反対側から剥離を入れる手段が考えられるが、下面是円礫面になっており、おそらく、そのままでは打面にならない。円礫面を除去して平坦な打面を作る必要があるが、他の石核を見ても、自然面打面か石の目を打面にする場合がほとんどで、剥離を入れて打面を作るということをしないようである。したがって、この石核の場合、階段状剥離を起こした部分を除去する手段はないことになる。剥片剥離初期の段階でこの石核を放棄した理由はこれであろう。

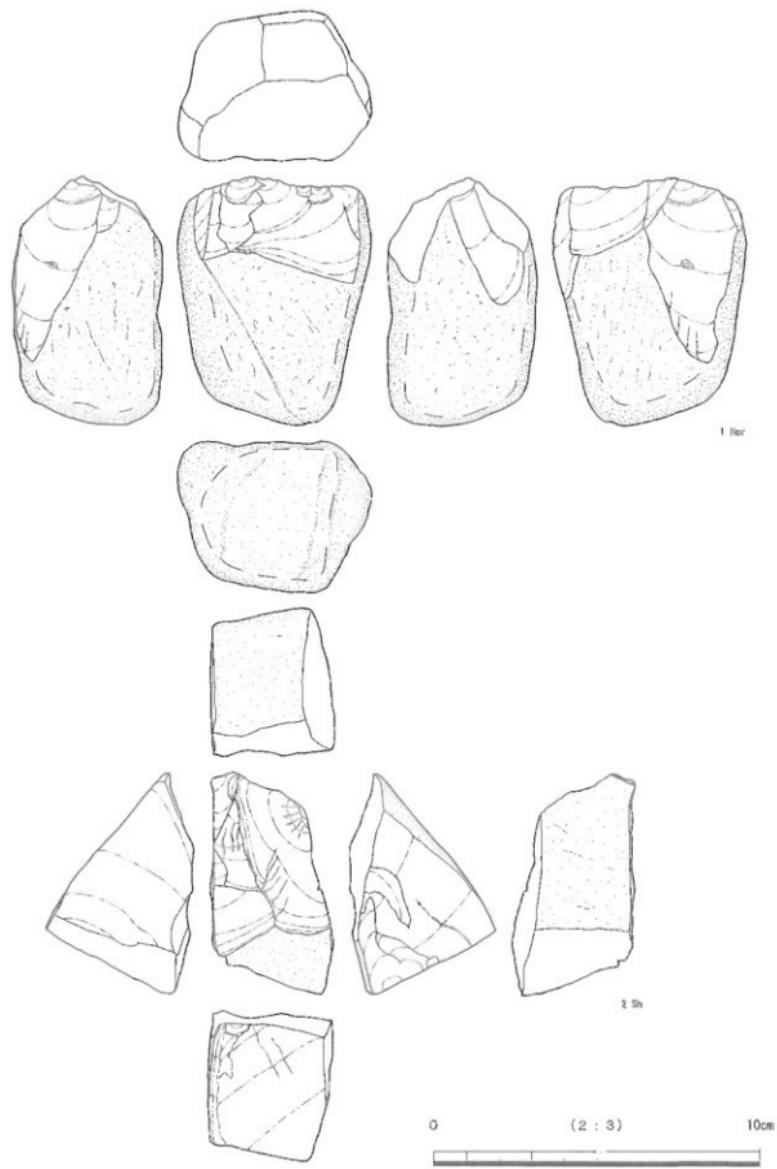
第230図-1は石の目で分割した円礫を使った石核で、小口面を作業面にしている。打面は石の目で分割した面で、この面に1枚だけ剥離が入っている。この剥離は、正面の作業面で剥片をとった後の剥離である。打面調整の必要なない平坦面に入っていることと、縦長の剥片をとっていることから、打面調整と言ふよりも、この面も作業面にしているのであろう。



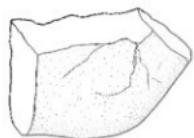
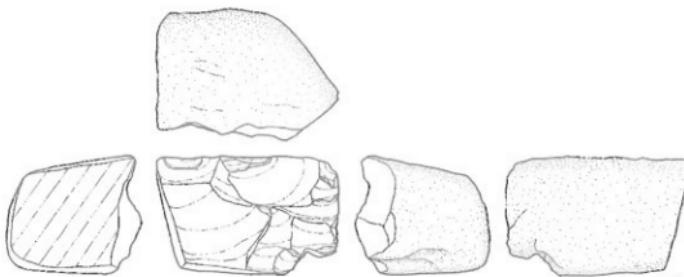
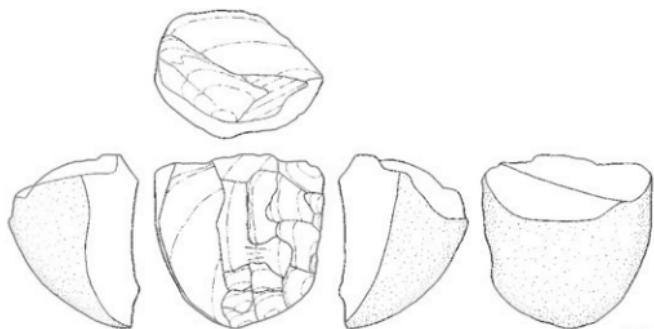
255



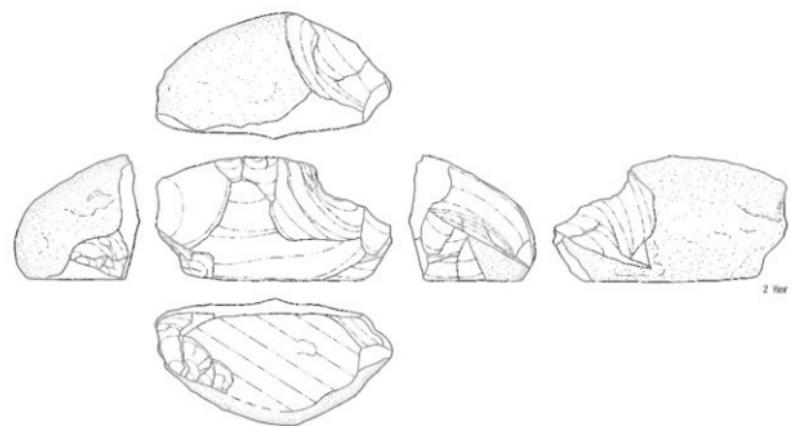
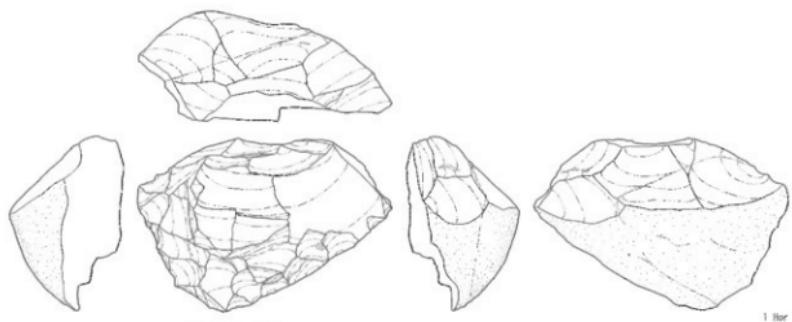
第222図 包含層出土石器44



第223図 包含層出土石器45

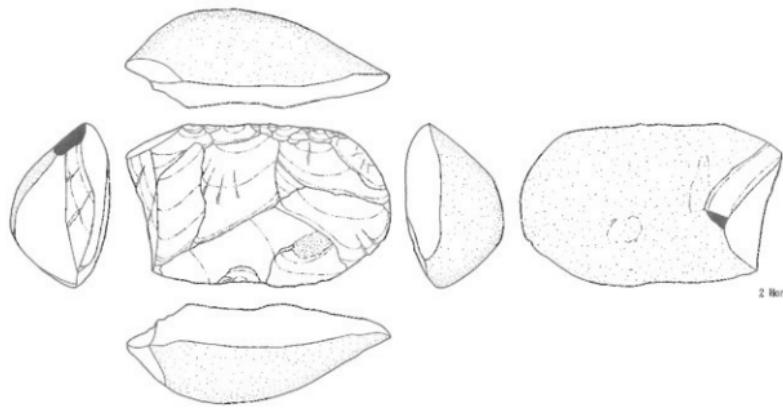


第224図 包含層出土石器46



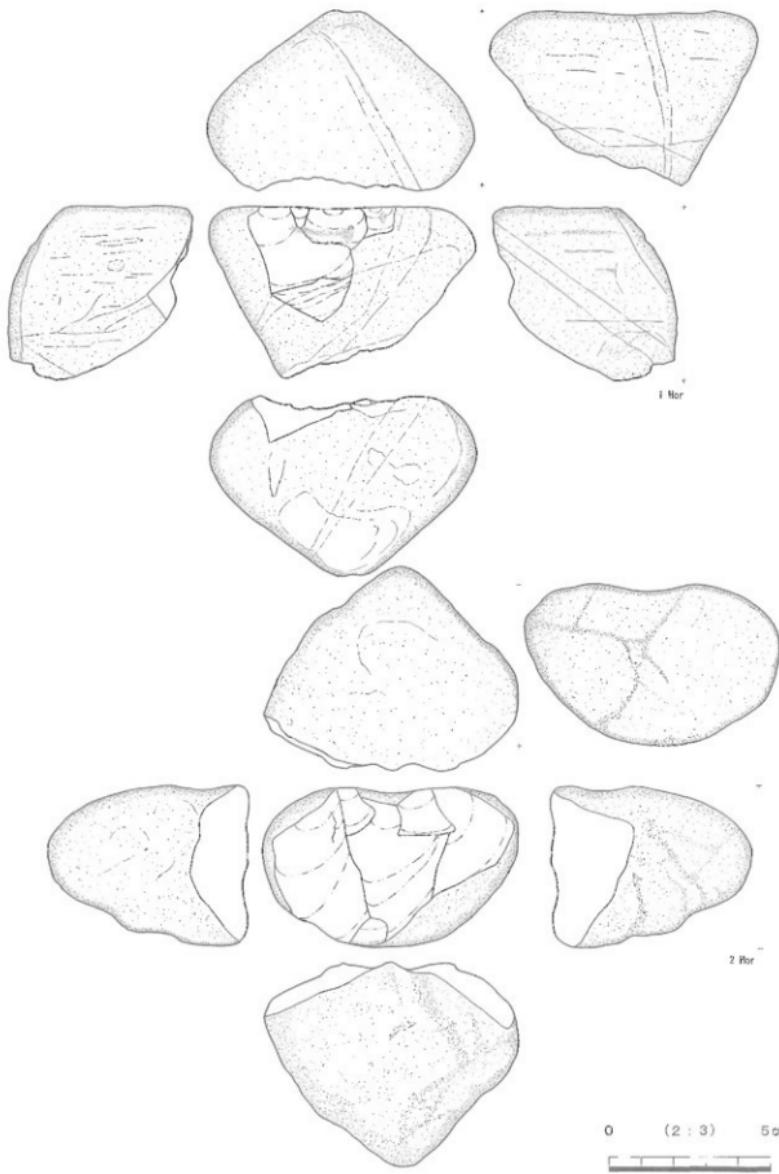
0 (2 : 3) 10cm

第225図 包含層出土石器47

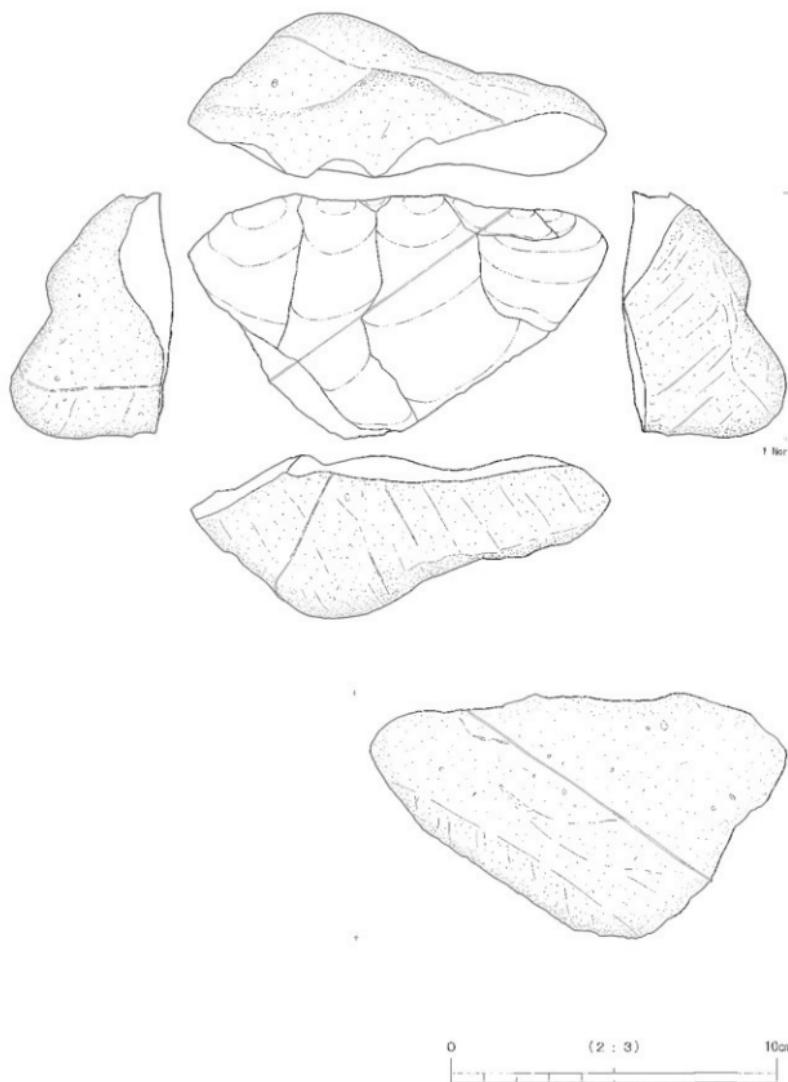


0 (2 : 3) 10cm

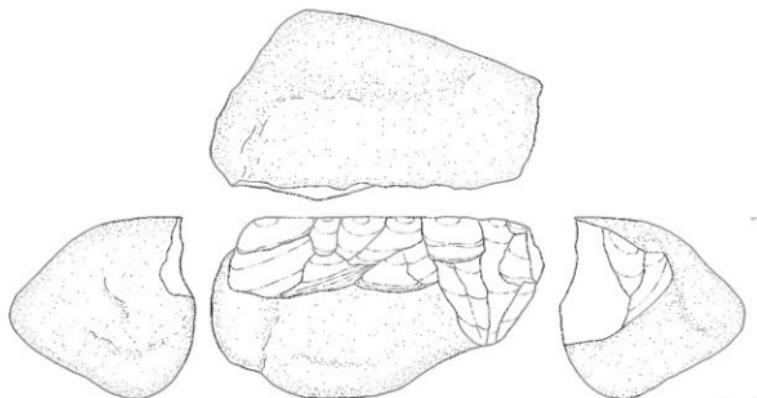
第226図 包含層出土石器48



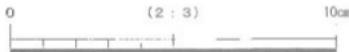
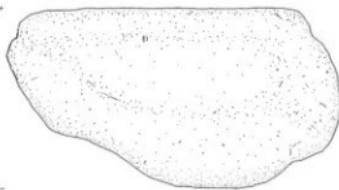
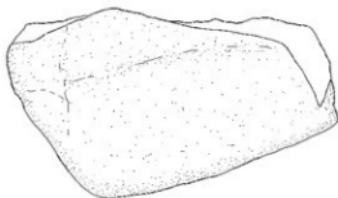
第227図 包含層出土石器49



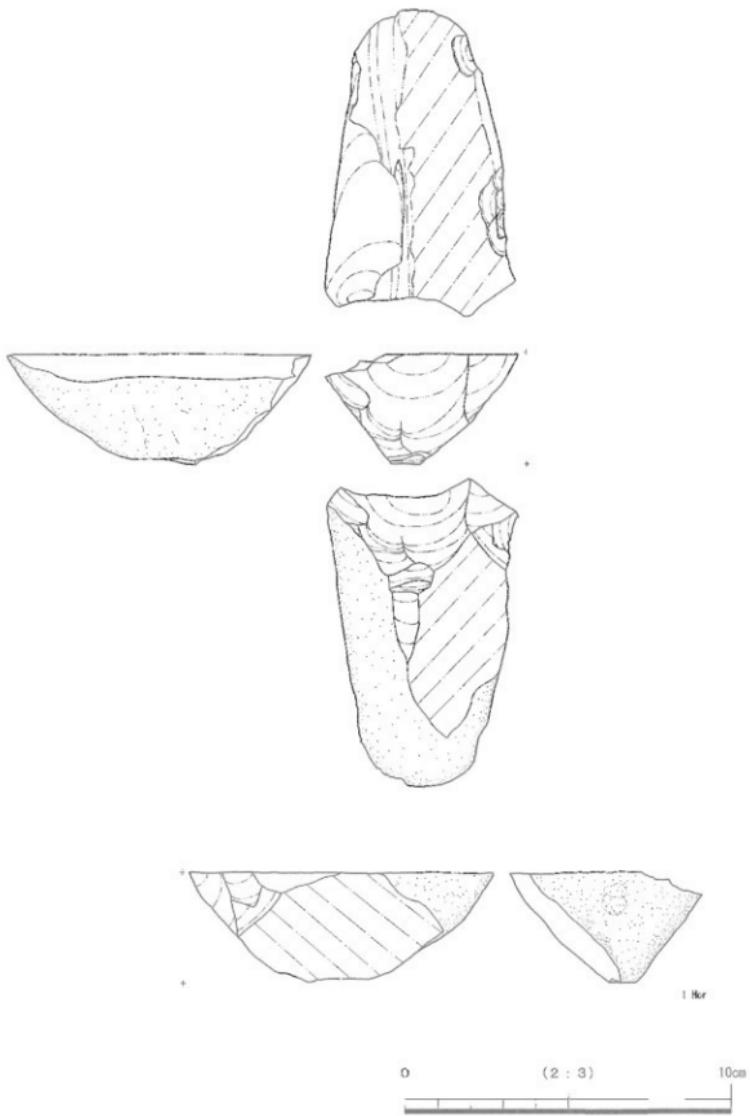
第228図 包含層出土石器50



1 Hor



第229図 包含層出土石器51



第230図 包含層出土石器52

第231図-1は円礫を素材にした石核で、平坦な自然面を打面にして、不定形の剥片を剥離している。第232図-1は、円礫面は残っていないが、実測図裏面に平坦な分割面が残っていることから、円礫を分割して素材にしていると思われる。縁辺で打面と作業面を入れ替えながら、交互剥離によって不定形の剥片を剥離している。このような剥離は、尖頭器製作の初期工程でも見られることと、尖った部分を作ろうとしているように見えることから、尖頭器の未完成品か礫器の可能性もある。

2は、円礫を分割して扁平な素材を作り、その側面を打面にして、打点を側面に沿って周回させながら不定形の剥片を剥離している。作業面は実測図の正面と右側面である。

第233図-1は、分割した円礫の分割面を作業面にして不定形の剥片を剥離している。打面は素材の側面を周回している。剥離の末端が階段状剥離になっているものが見られ、これを除去しないと剥片剥離を続行しにくいくことと、石核の厚さもなくなってきていていることから、剥片剥離を断念したのであろう。

2は、扁平な円礫の平坦な自然面を打面にして、扁平な礫を一方向に切断するように不定形の剥片を剥離している。実測図の右側見通し図にも剥離が見られる。これは正面の剥離面を打面にした剥離で、この面も作業面になっているのであろう。

第234図-1は円礫の自然面を打面にして、不定形の剥片を剥離している。実測図の側面見通し図でわかるように、これ以上剥片をとると、石核の高さが急激に低くなっていく。したがって、ここで剥片剥離を中止したのであろう。

2は分割した円礫を素材にしており、分割した面を打面にして不定形の剥片を剥離した後、側面の自然面を打面にして不定形の剥片を剥離している。

第235図-1は、円礫の平坦に近い自然面を打面にして不定形の剥片を剥離している。2は扁平な円礫を使い、自然面を打面にして、円礫を切断するように不定形の剥片を剥離している。剥離の途中で石核を破損しており、このため剥片剥離を中止したのであろう。

#### 垂飾り

第235図-3は、翡翠製の垂飾りである。全体を非常に細かい砥石で磨いているため、光沢がある。

敲打痕・磨滅痕のある礫

この2つの石器は、使用によると思われる痕跡をもとに、敲石と磨石に分けるべきであるが、実際にには1つの石器に敲打痕と磨滅の両方が見られる場合があるため、ここでは両者を分けずに報告する。

第236図～第237図-3は、敲打痕のある円礫を示した。扁平な円礫を使っている点は共通しているが、敲打痕の付いている場所は、下記の3箇所である。

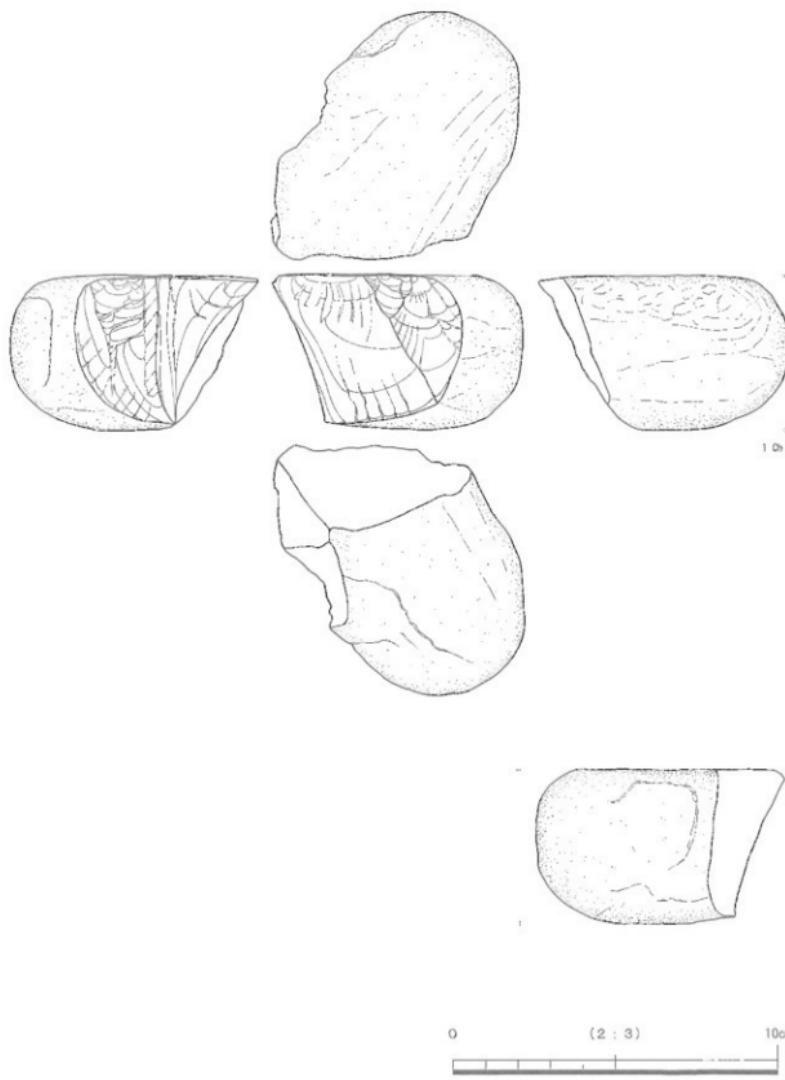
- ・長軸方向の端部
- ・短軸方向の側縁の広い範囲
- ・表面

上記の敲打された場所が、1つの敲石で複数見られる場合もある。敲石を、手に持ってそれを振り下ろすような行為で使ったと想定すると、長軸方向の端部を使う場合と、短軸方向の側面を使う場合、表面を使う場合で、持ち方や振り下ろす動作が異なると予想される。こう考えると、敲打痕の場所の違いは、使い方の違いを表していると思われる。

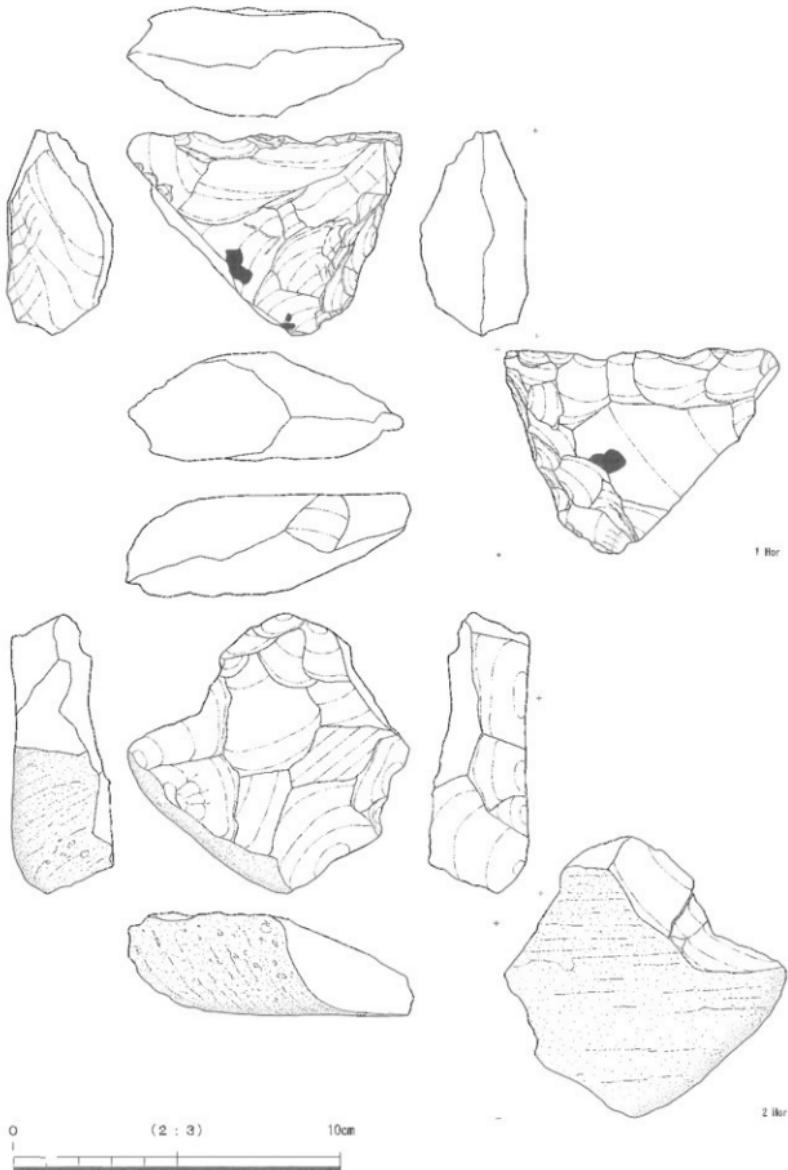
第237図-4～7、第238図は磨滅痕のある礫である。磨滅痕が付いている部分は、円礫の表面に限られる。第237図-8は敲打痕と磨滅痕のある礫で、扁平な円礫の片面に敲打痕、もう片面に磨滅痕が付いている。9は敲打による擦みがある礫で、凹石とも言われる石器である。

#### 石皿

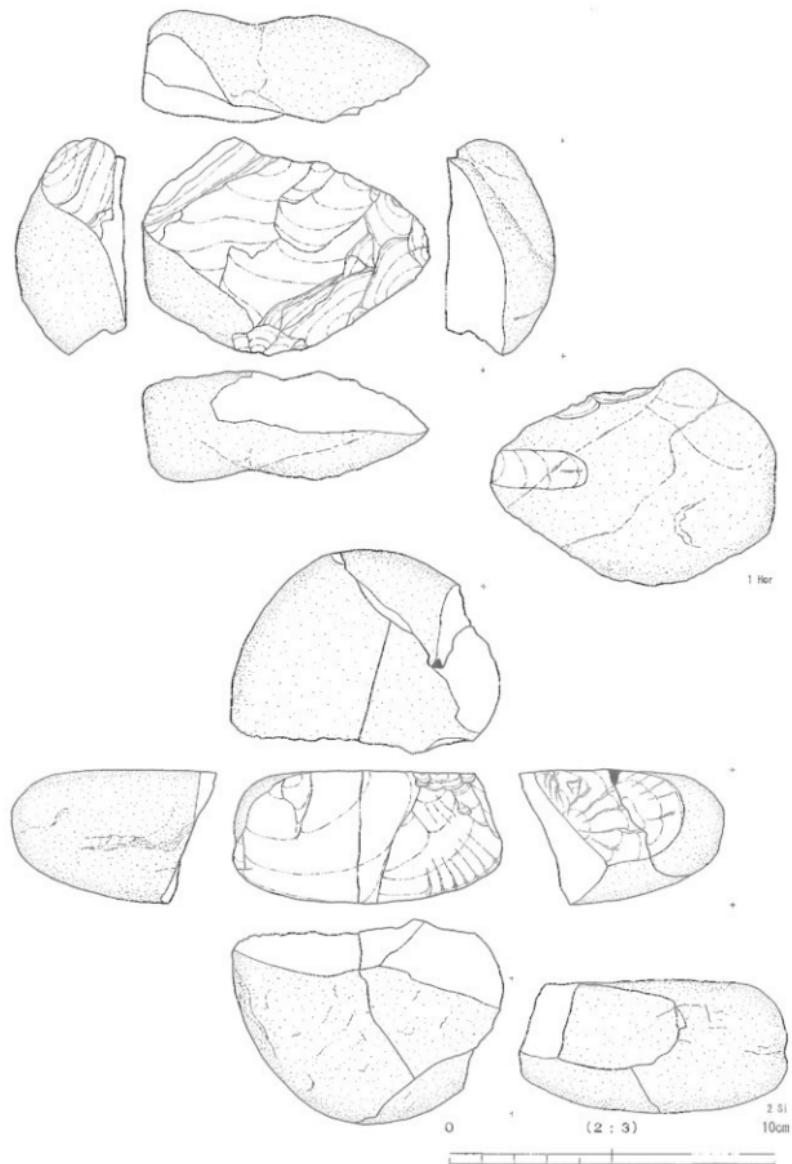
第239図～第245図は、円礫、もしくは亜角礫に磨滅痕が見られるもので、磨石のように、手に持って使ったとは考えられないものを、石皿とした。



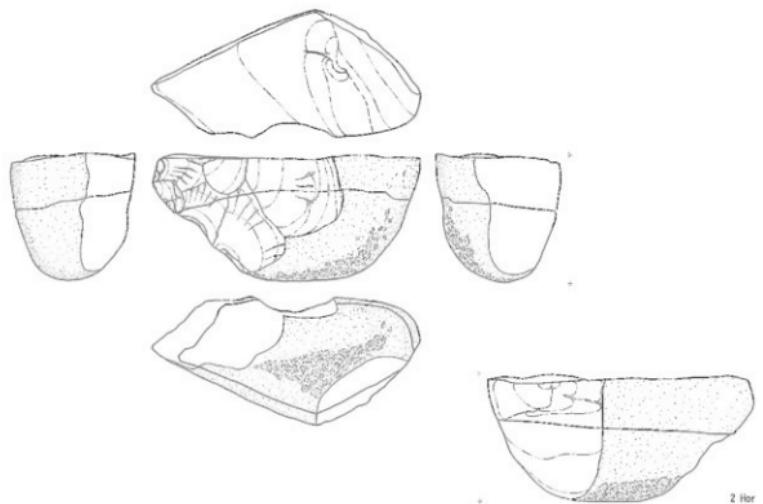
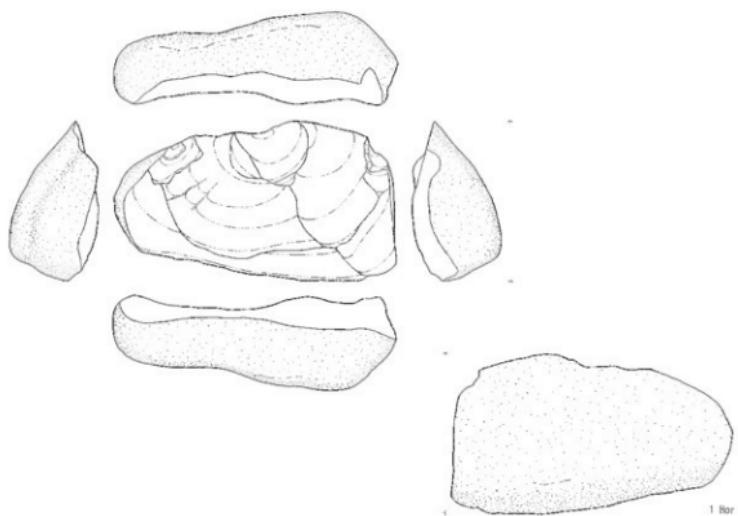
第231図 包含層出土石器53



第232図 包含層出土石器54

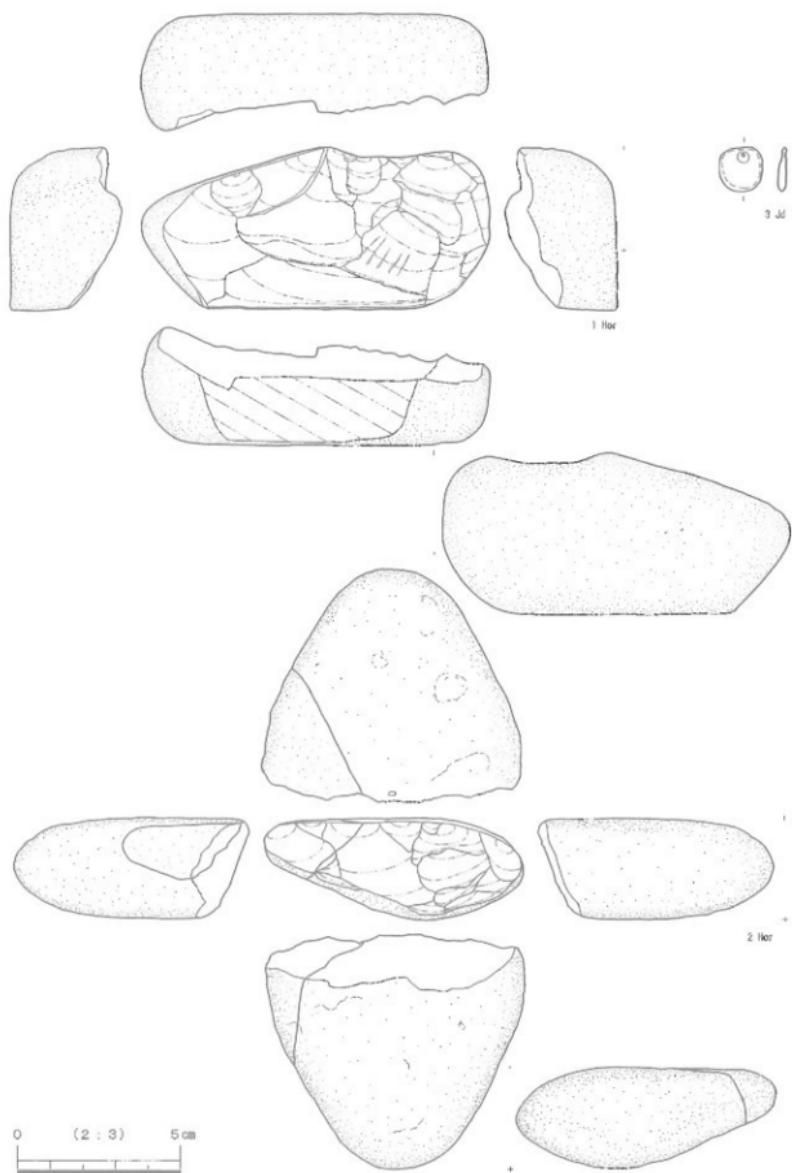


第233図 包含層出土石器55

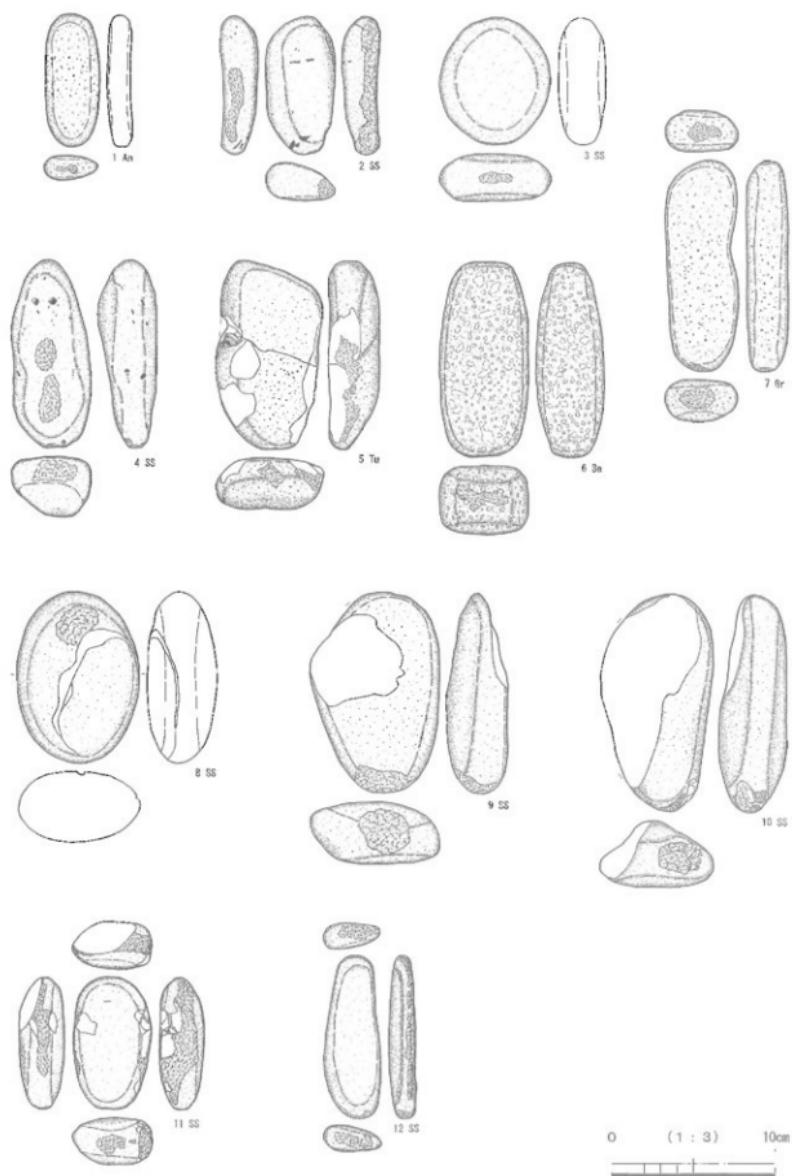


第234図 包含層出土石器56

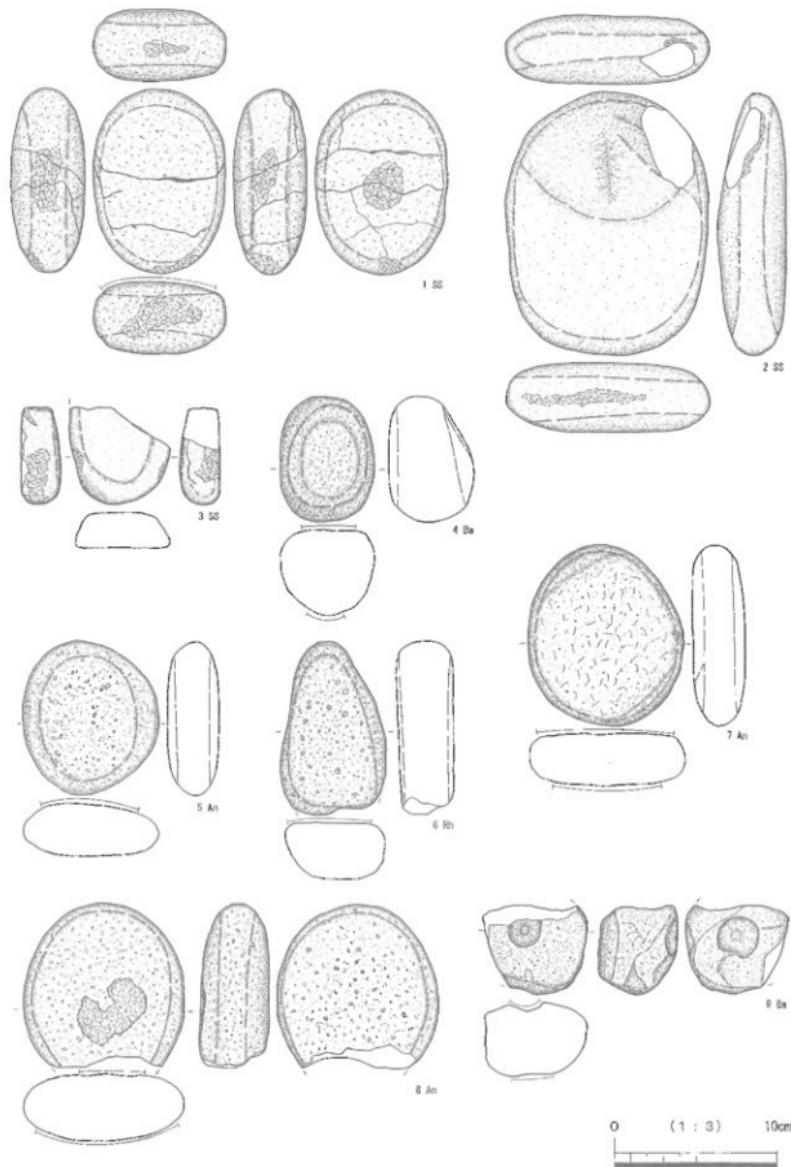
0 (2 : 3) 10cm



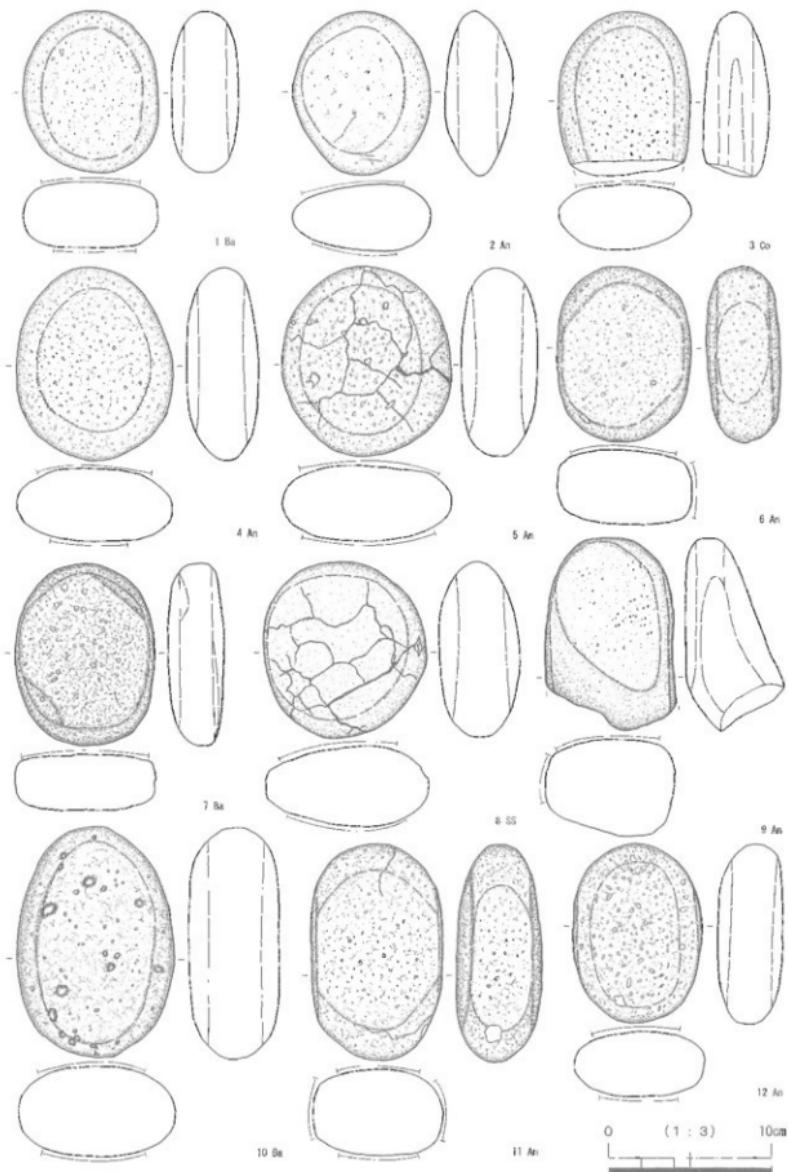
第235図 包含層出土石器57



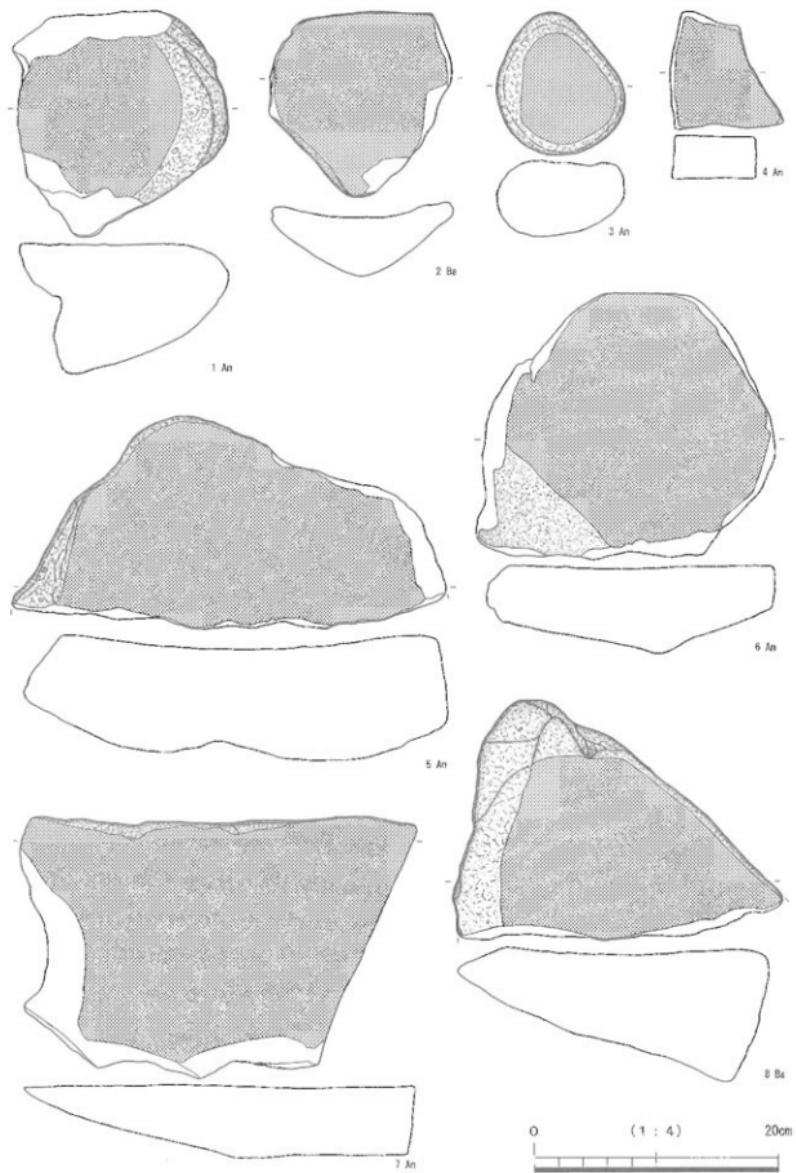
第236図 包含層出土石器58



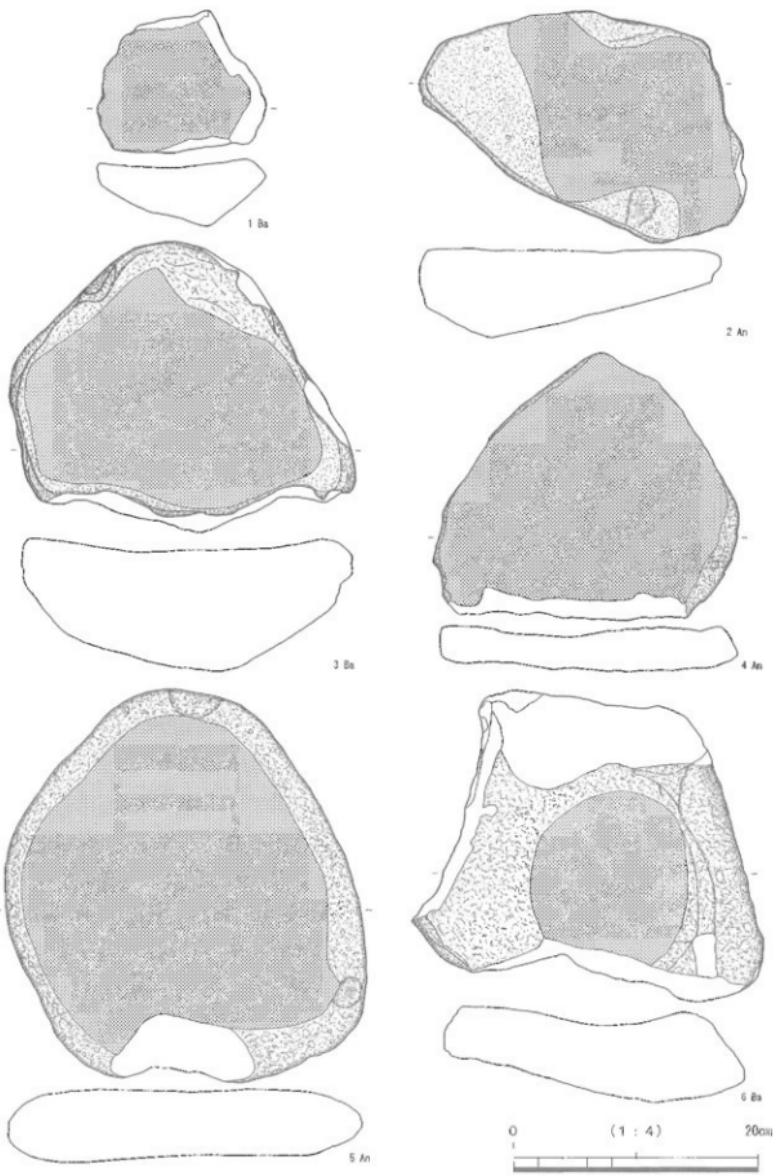
第237図 包含層出土石器59



第238図 包含層出土石器60

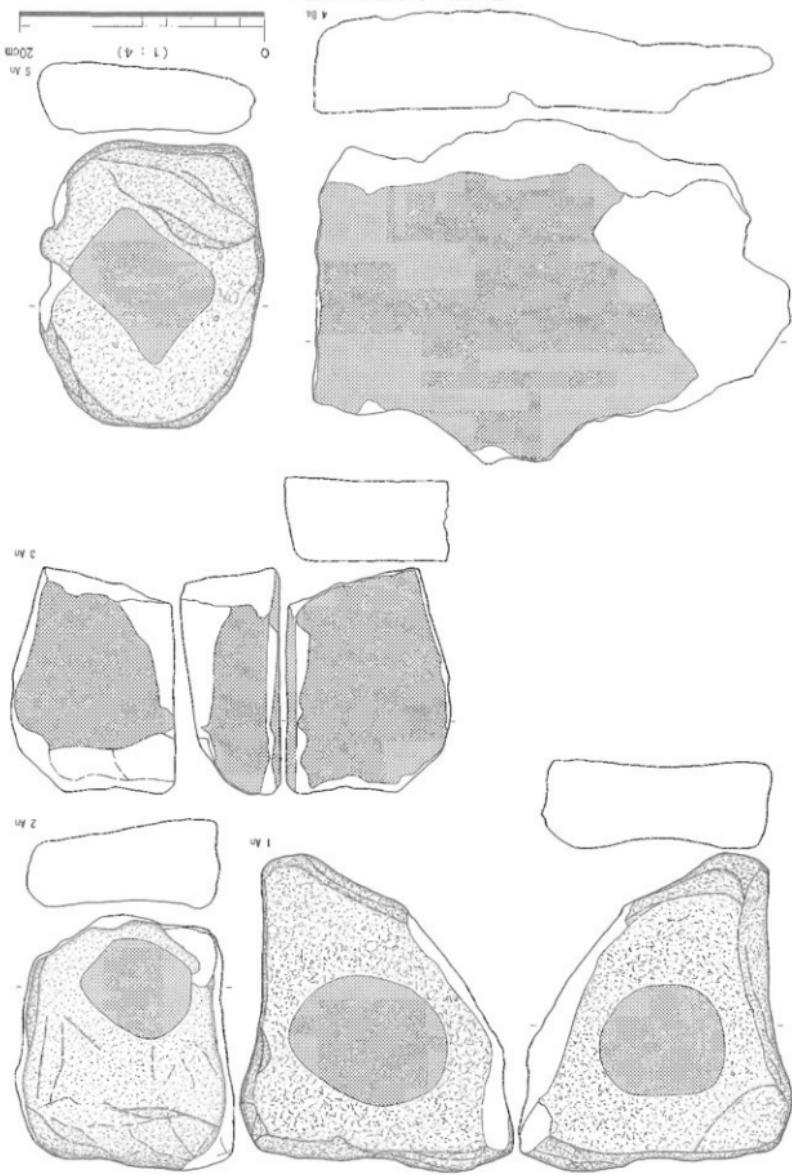


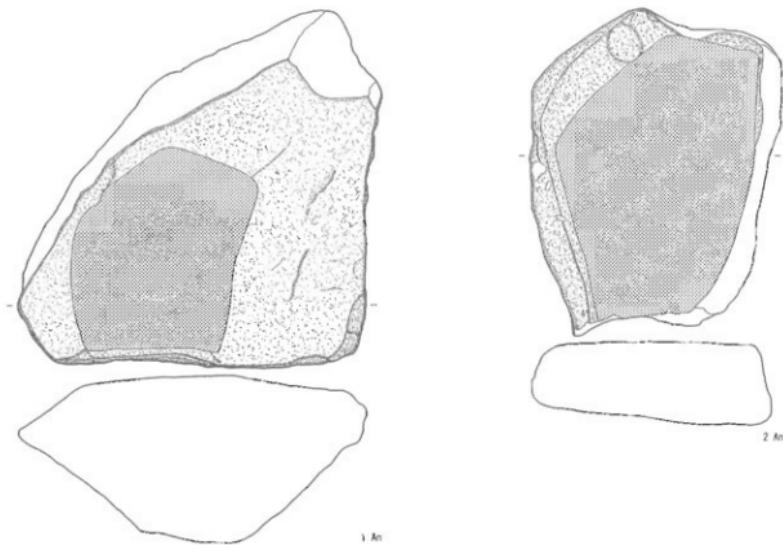
第239図 包含層出土石器61



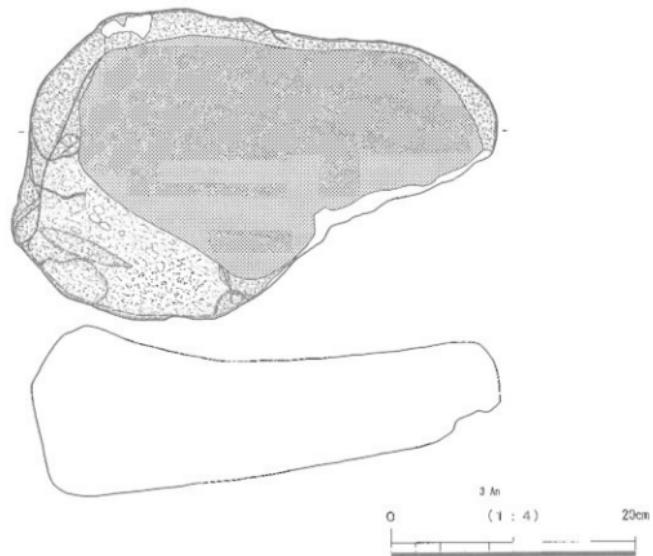
第240図 包含層出土石器62

第241図 包含層出土石器63

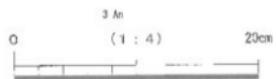




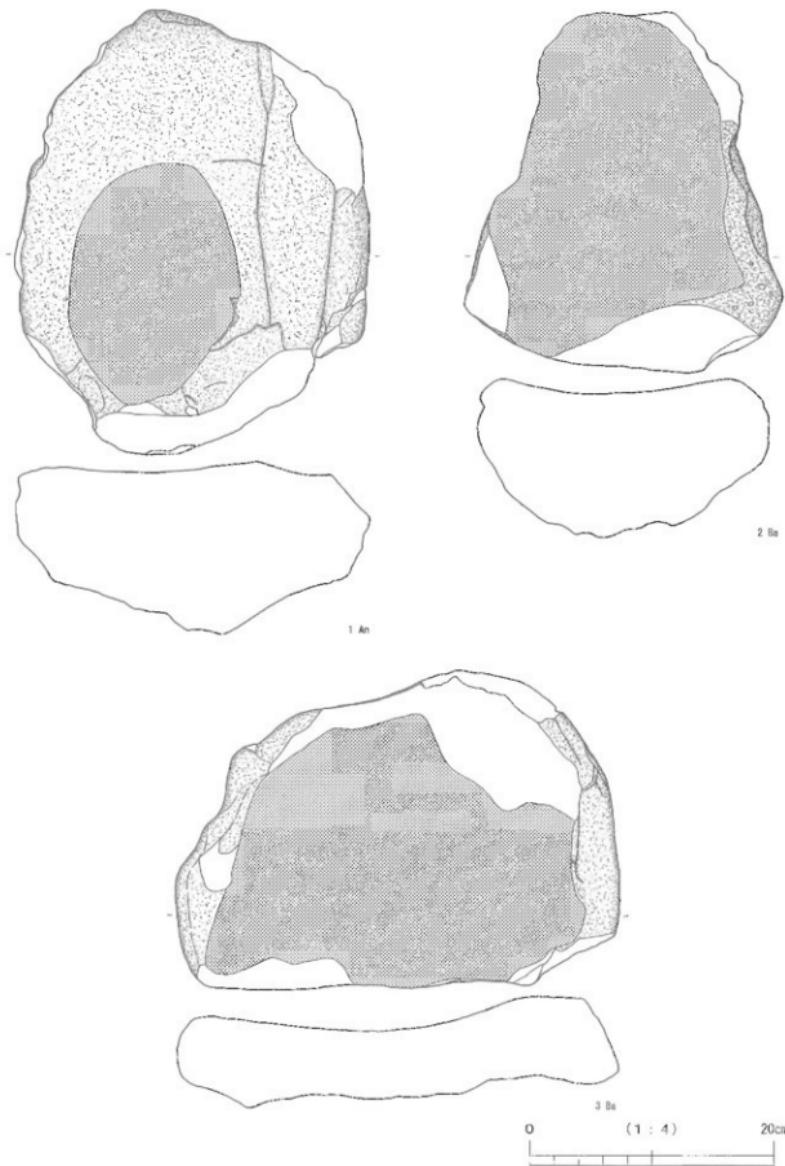
1 An



2 An



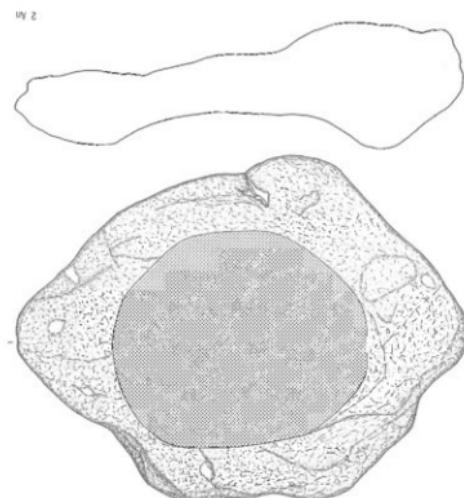
第242図 包含層出土石器64



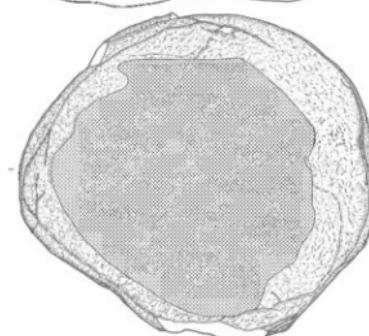
第243図 包含層出土石器65

圖244 包金器  
器66

20cm  
0 (1 : 4)

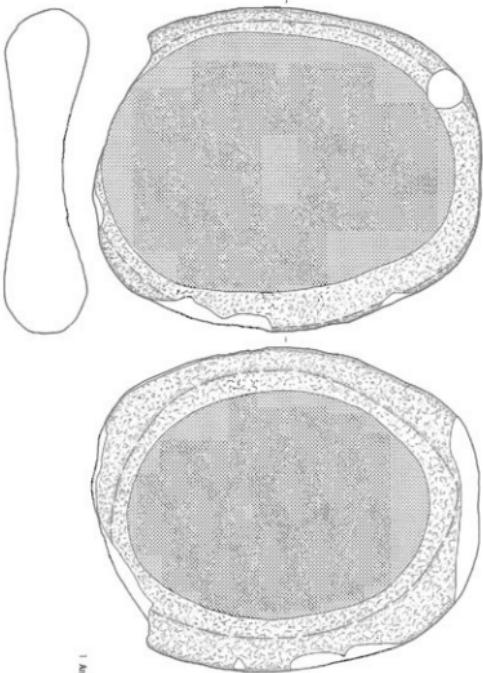
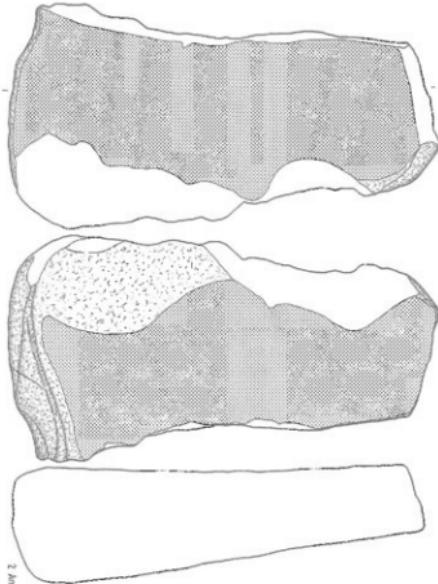


1/4



第245圖 包含層出土石器67

0  
(1 : 4)  
20mm



# 第6章 旧石器時代の調査

## 第1節 ホルンフェルス製石器の個体別分類

ホルンフェルスの原色は、黒色か黒色に近い褐色である。变成によって黒雲母が生成している場合はわずかにピンク色がかかる場合もあるが、黒色に近いことに違いはない。しかし、風化すると白くなるのが通例である。一様に白く風化した石材の個体別分類は非常に困難な上に、特に風化が進んでいる遺物については、表面の剥落防止のために、現地で樹脂を浸透させ強化処理をした。そして、これによつて半数近くのホルンフェルス製石器は色が変わることとなった。

接合作業を通して、樹脂の浸透によって色が変わった石器と強化処理をしていない白い石器の接合が相次ぐ中で、個体別の分類は不可能と判断した。

## 第2節 文化層の設定

### (1) 休場層上層～中層

休場層は、上層、中層、下層に分かれるが、これが文化層にそのまま対応するかどうかは別途検討が必要である。まず、遺物の出土レベルから、休場層中層と下層にはレベル差が認められたため、これらを別の文化層とした。次に休場層中層と上層が分離できるか検討したところ、同一遺構で、休場層上層から中層にかけて遺物が分布するものが多く認められたため、休場層上層と中層を同一の文化層とした。

ナイフ形石器文化期の遺物と細石器文化期の遺物も本来は分離すべきであるが、ともに同一産地の黒曜石を使用している例が多いため、分離はできなかった。したがって、休場層上層～中層文化層には、ナイフ形石器文化期の遺物と細石器文化期の遺物が混在していることになる。

### (2) 休場層下層～第Ⅰスコリア帶層

同一遺構で、休場層下層、第0黒色帯、第Ⅰスコリア帶に遺物がまたがって出土しているものがあり、遺構外遺物でも休場層下層と第Ⅰスコリア帶の間に接合するものがあったため、休場層下層、第0黒色帯、第Ⅰスコリア帶同じ文化層とした。

### (3) 第Ⅰ黒色帯

5区で認められたもので、第Ⅰ黒色帶上面で出土した遺物が多く、この面に文化層があると判断した。

### (4) 第Ⅱ黒色帯

この層から遺物が出土したのは、K12グリッドとL12グリッドの間にある試掘坑1箇所だけである。上下の層からは遺物が出土していないため、第Ⅱ黒色帯出土遺物で文化層を形成していると判断した。

### (5) 第Ⅲ黒色帯

II区で認められたもので、上下の層からはほとんど遺物が出土していないため、II区の第Ⅲ黒色帯出土遺物で1つの文化層とした。

### (6) 第V黒色帯

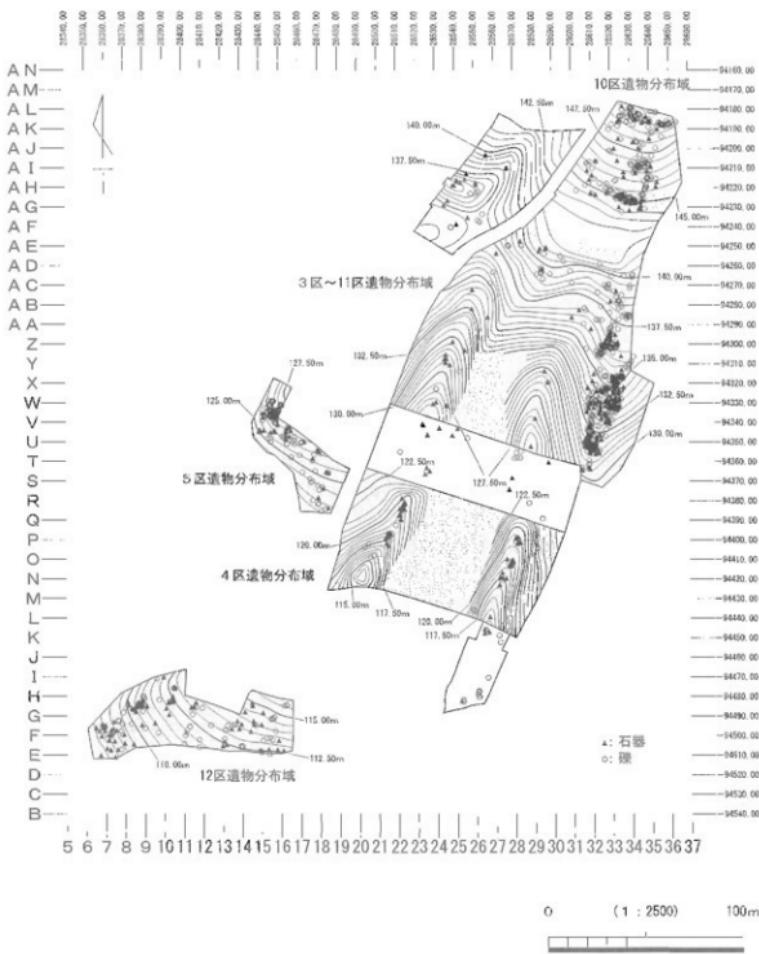
3区ではこの層から一括遺物が出土した。上下の層からは遺物が出土していないため、これを1つの文化層とした。

### (7) 第VII黒色帯

石器が2点出土しただけであるが、上下の層からは遺物が出土していないため、1つの文化層とした。

### (8) 中部ローム層

遺物とは断定できないものの、本来は礫が含まれない中部ローム層から礫が数点出土した。ここでは文化層を設定しないが、中部ローム層にも文化層が存在する可能性を指摘しておく。



第246図 休場層上層～中層遺物分布図

### 第3節 休場層上層～中層の遺構と遺物

第246図に示したように、北から10区、3区～8区～11区、5区、4区の東側の谷、4区の西側の谷、12区に遺物が分布している。縄文時代の遺物分布と重なるところが多いことから、特に休場層上層の遺物は、縄文時代の遺物と旧石器時代の遺物を分離しきれていないことがうかがえるが、ナイフ形石器や細石器、彫器、石鏃といった時代の明確な遺物はともかく、スクレイパーや石核、その他の剥片類は、時代の区別ができないうえに、主要石材である黒曜石とホルンフェルスは、個体別分類ができないため、詰まる所、出土層以外で時代を分けることはできない。

したがって、休場層よりも上の層から出土した石器のうち、ナイフ形石器と細石器といった旧石器時代であることか明確な石器以外は、縄文時代に帰属させたように、ここでは、休場層上層から出土した石鏃や石錐といった、縄文時代であること明らかな遺物以外は、旧石器時代に帰属させた。

このような資料操作によって、各石器の帰属文化層を決めたため、この文化層の休場層上層から出土した遺物では、休場層よりも上の層で出土した石器群と同様、縄文時代の石器と旧石器時代の石器が混在している可能性が十分にあることに留意されたい。

#### (1) 10区遺物分布域

南西に向かう緩斜面に遺物が分布している(第247図)。土坑を3基検出しているが、いずれも休場層中で検出したもので、埋土に縄文時代以降に堆積した土を含まず、ローム層や黑色帶起源と思われる土を含む特徴がある。このことから旧石器時代、あるいは新しいとしても縄文時代草創期の可能性が高いと考え、この節で報告する。

##### 土坑36

休場層上層で検出した土坑で、埋土は縄文時代以降に堆積した黒色の土ではなく、第0黑色帶起源と思われる褐色土で、第0黑色帶が流れ込んだ土坑37、38と酷似している(第248図上段)。

##### 土坑37

休場層上層で検出した土坑で、埋土に縄文時代以降に堆積した土を含まず、第0黑色帶の流れ込みを含んでいる(第248図下段)。遺物は出土していない。

##### 土坑38

休場層中で検出した土坑で、埋土に縄文時代以降に堆積した土を含まず、第0黑色帶の流れ込みを含んでいる(第249図上段)。遺物は出土していない。

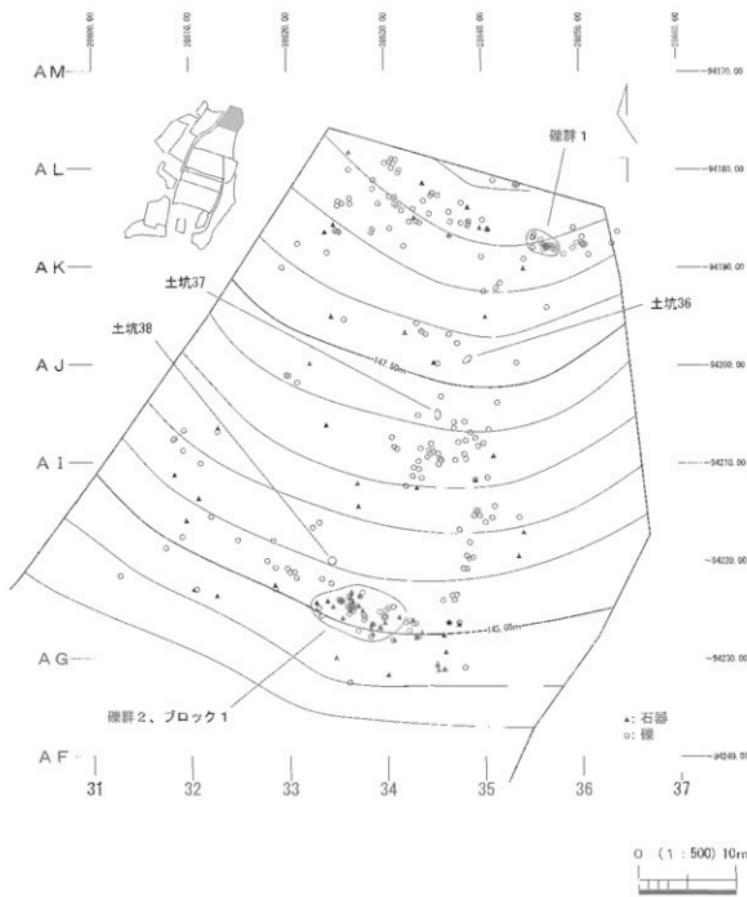
##### 礫群1

休場層中層上面で検出した、21点の礫からなる小規模な礫群で、礫は面を揃えて出土している(第249図下段)。完形礫は3点すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は14点あり、割れ面が赤化していない礫は1点である。

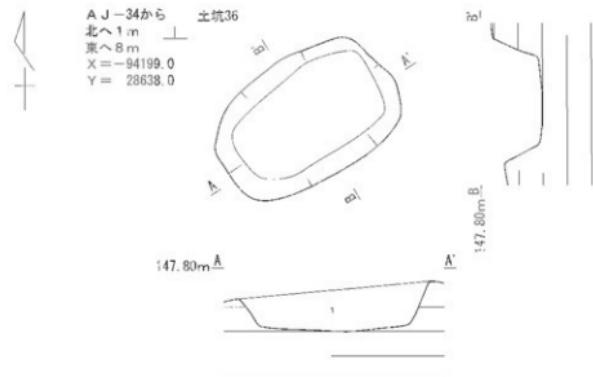
##### 礫群2、ブロック1

同一の場所で礫と石器が共伴して出土したもので、礫を礫群、石器をブロックとして記載する(第250図)。礫は面をそろえて出土しているが、石器は上下に40cm近いレベル差がある。礫と石器では、礫の方が、レベルが安定していることを示している。礫群は38点の礫からなり、完形の礫は7点あり、すべて赤化している。割れ面が赤化した礫は29点、割れ面が赤化していない礫は1点ある。

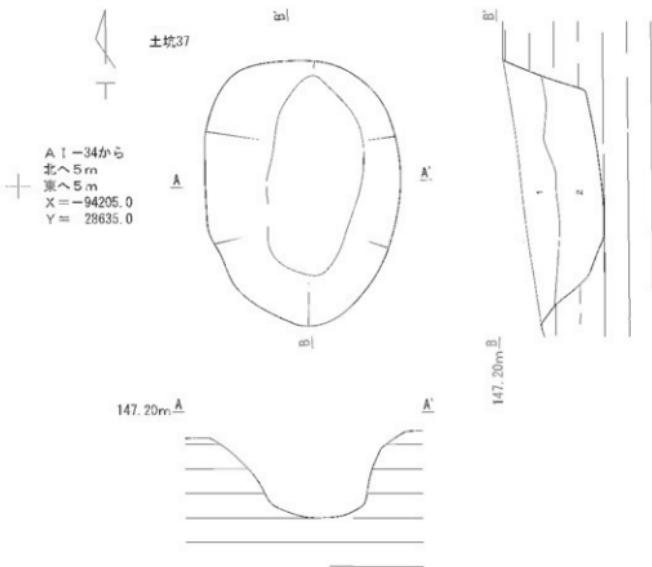
ブロック1では、26点の石器が出土している。第251図-1は両面加工の尖頭器である。表裏両面に素材剥片の主剥離面が残っていることから、素材剥片の厚さがわかる。加工は、両側縁から平坦剥離を入れているが、裏面の左側縁と末端は未加工で、全体の形も整っていないことから、未完成品と考えられる。2は彫器で、縦長剥片の打面から、側縁に向かって樋状の剥離が入っている。



第247図 10区休場層上層～中層遺構、遺物分布図



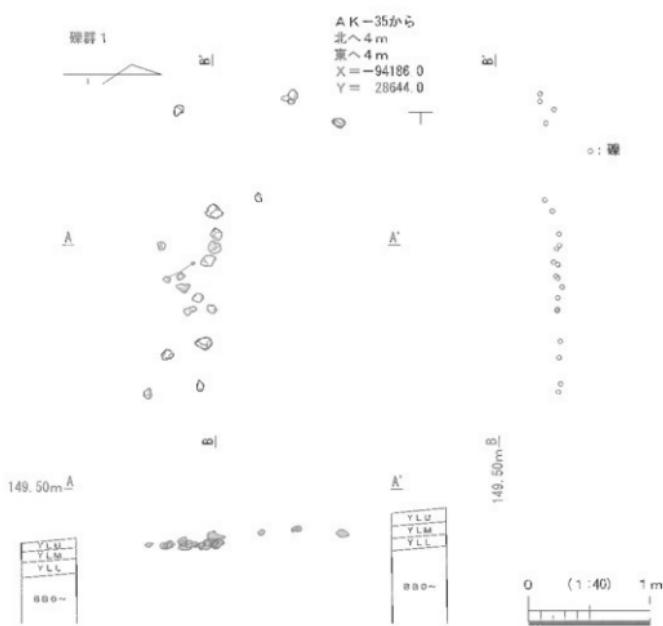
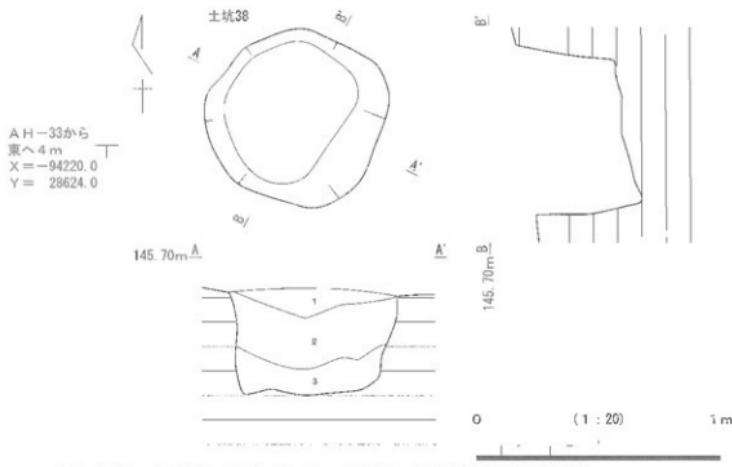
1層 棕色土 よく結まっている。5mm大の炭化物を少し含む。  
2~3mmの橙色のスコリアを少し含む。



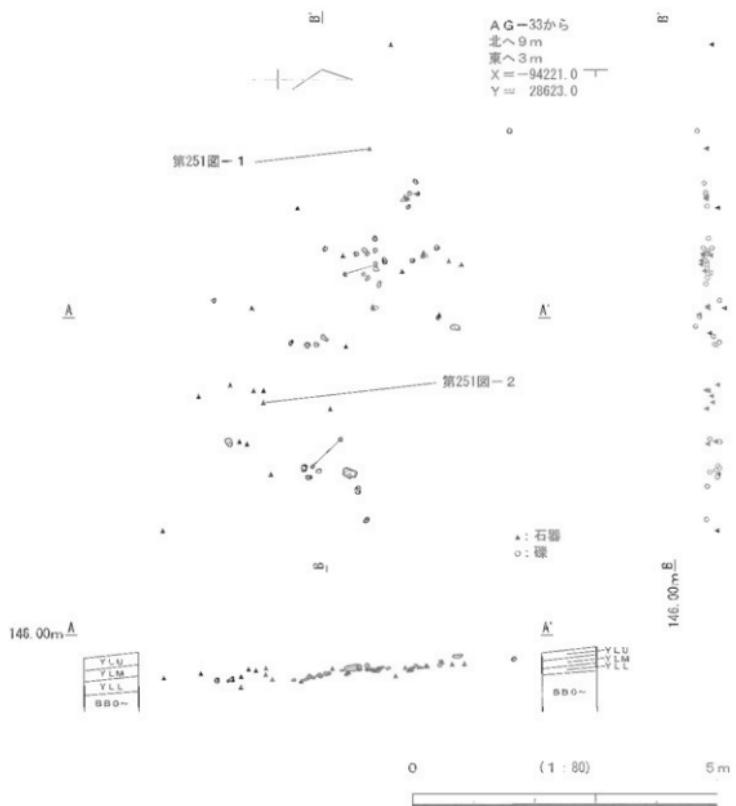
1層 棕色土 粗く、結まっていない。第0黒色帯の土が混じる。2~3mmの炭化物を含む。  
また、2~3mmの橙色スコリアをわずかに含む。  
2層 棕色土 粗く、結まっていない。粘性がある。2~3mmの第0黒色帯の土を含む。  
橙色スコリアを少し含む。

0 (1 : 20) 1m

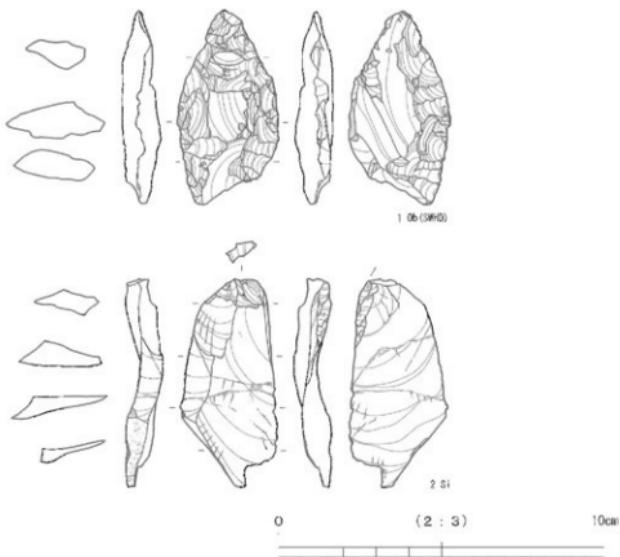
第248図 土坑36、37実測図



第249図 土坑38、砾群1実測図



第250図 磯群2、ブロック1実測図



第251図 ブロック1出土石器

#### 10区の遺構外出土遺物

##### 尖頭器

第252図-1は両面加工の尖頭器である。休場層上層で出土しているため、縄文時代の可能性もある。2は休場層中層で出土したもので、長さが10cm程あったと推定できる。表面は、剥離面の切り合いから、左側縁を先に加工した後、右側縁を加工している。裏面は、右側縁を加工した後に、両側縁の縁辺部に小さな剥離を入れている。このことから、錯交剥離によって作っていることがわかる。3は、休場層中層から出土していることと、休場層中層からは縄文時代の遺物はほとんど出土していないため、旧石器時代の尖頭器と考えた。

##### ナイフ形石器

第252図-4は基部と先端に近い部分を加工している。5は半分近くを欠損しているが、左側縁に加工が見られることから、二側縁加工のナイフ形石器であったことがわかる。

##### 微細な剥離のある剥片

第252図-6は黒曜石の細長い剥片の末端に近い部分に、微細な剥離が見られる。7は黒曜石の幅のある剥片の縁辺に不規則な剥離が入っている。

##### スクレイパー

第252図-8は、厚みのある剥片の縁辺に、器面を薄く剥がすような剥離が連続して入っている。

##### 石皿

第252図-9は円碟の一面が磨滅している。休場層中層から出土していることと、休場層中層からは、縄文時代の遺物はほとんど出土していないことから、旧石器時代の可能性がある。しかし、旧石器時代の石皿と言う判断は慎重にすべきであるため、休場層中層から出土したという事実報告にとどめる。

## (2) 2区出土遺物

2区では遺物が散発的に出土しているだけのため、分布域としてとらえることは難しいが、ナイフ形石器などが出土しているため、ここで報告する。

### ナイフ形石器

第252図-10は風化が進んでいて、剥離面の観察はできないが、残っている稜線からナイフ形石器と判断できる。素材になっている剥片の形態は明らかでないが、剥片の打面を下に持ってきてていると思われる。IIは上下を欠損しているが、傾縁に急角度の加工が見られる。I2は二側縁加工で、左側縁から基部を経て右側縁まで加工が連続していて、これによって、基部が丸く仕上がっている。また、裏面下端には素材剥片の厚みを除去するための平坦剥離が見られる。I3も二側縁加工だが、左側縁の加工は、基部に近い部分だけ加工してある。

14に示した接合図は、I2とI3のナイフ形石器が接合した状態である。両方とも長野県の星ヶ台産黒曜石を使っている。

### 石核

第253図-1は、扁平な円礫の一端から幅の広い剥片を1枚だけ剥離している。休場層上層から出土したため、旧石器時代の石核として報告するが、休場層よりも上の層からも円礫を使った石核は多く出土しているため、これも縄文時代の可能性はある。

## (3) 3区、8区、11区遺構遺物分布域

地形は南西に向かう丘陵と谷になっており、調査区中央付近の丘陵は削平され、遺跡は残っていない(第254図)。調査区の東にある丘陵上で遺物が出土した。ブロック1基と礫群1基を検出した。分布図上では遺物の集中地点が他にもあるように見えるが、上下のレベル差が大きかったり、小砾が散在するだけであったりするものが多いのが実情である。

### 礫群3

土坑を伴う礫群で、休場層中層で検出した(第255図上段)。縄文時代の集石に見えるが、検出面が休場層中であることや、土坑の埋土が黒色帯起源と思われる褐色土で、休場層上層よりも上の層の堆積が見られないことから、縄文時代前期以降という根拠はない。したがって、旧石器時代か縄文時代草創期の遺構と考えられる。

礫は17点出土しており、完形の礫は10点あり、すべて赤化している。割れている礫7点は、すべて割れ面が赤化している。

### ブロック2

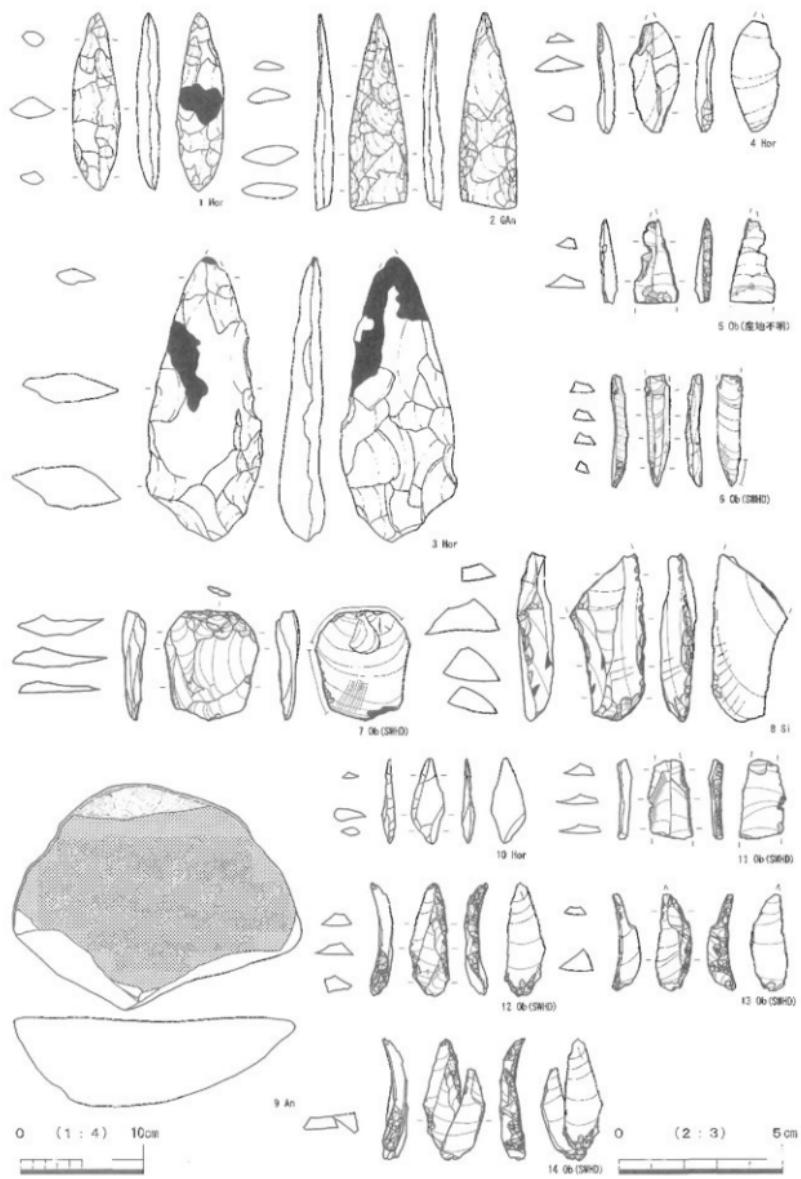
休場層中層で検出したブロックで、整理作業の過程で追加したブロックである(第255図下段)。ナイフ形石器とスクレイパーを1点ずつ含んでいる。ナイフ形石器は小さな破片である。

第256図-1はスクレイパーで、厚みのある剥片の縁辺を鋸歯状に加工している。2は微細な剥離のある剥片で、打面が線状になっていることと、薄く湾曲した剥片であることから、薄く剥がすことを意図した剥片であると思われる。表面の剥離面構成は、剥片の周囲から器体中央に向かって剥離している。これらのことから、この剥片は、尖頭器か細石核を製作する際に剥離された剥片と思われる。

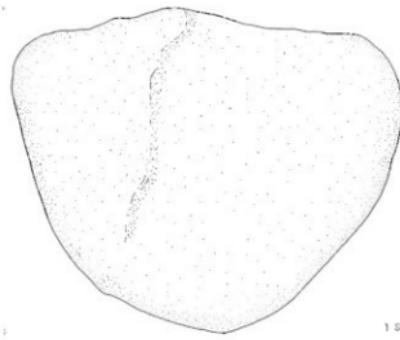
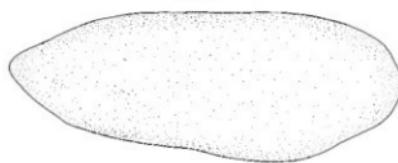
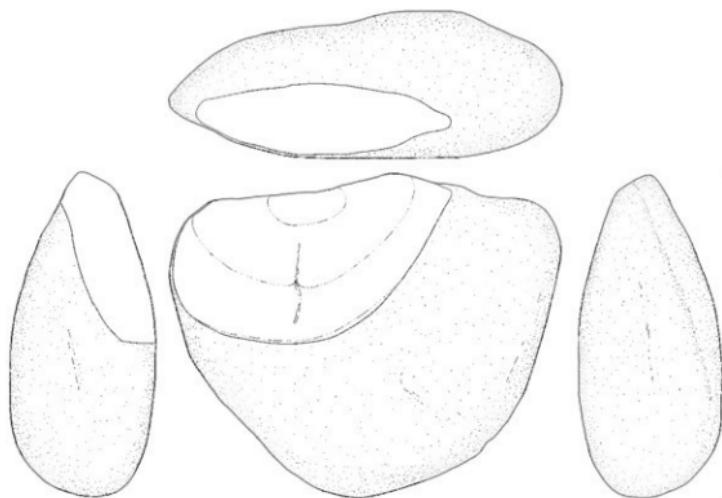
### 3区の遺構外出土遺物(東側谷出土遺物)

### ナイフ形石器

3区にある東側の谷では、第256図-3のナイフ形石器が出土している。これは二側縁加工で、左側縁は先端から末端まで加工してあるが、末端に近い部分は、加工による剥離が小さく、角度も低くなっている。裏面には打瘤を除去した大きな剥離が入っている。基部には素材剥片の打面が残っているため、平坦になっている。

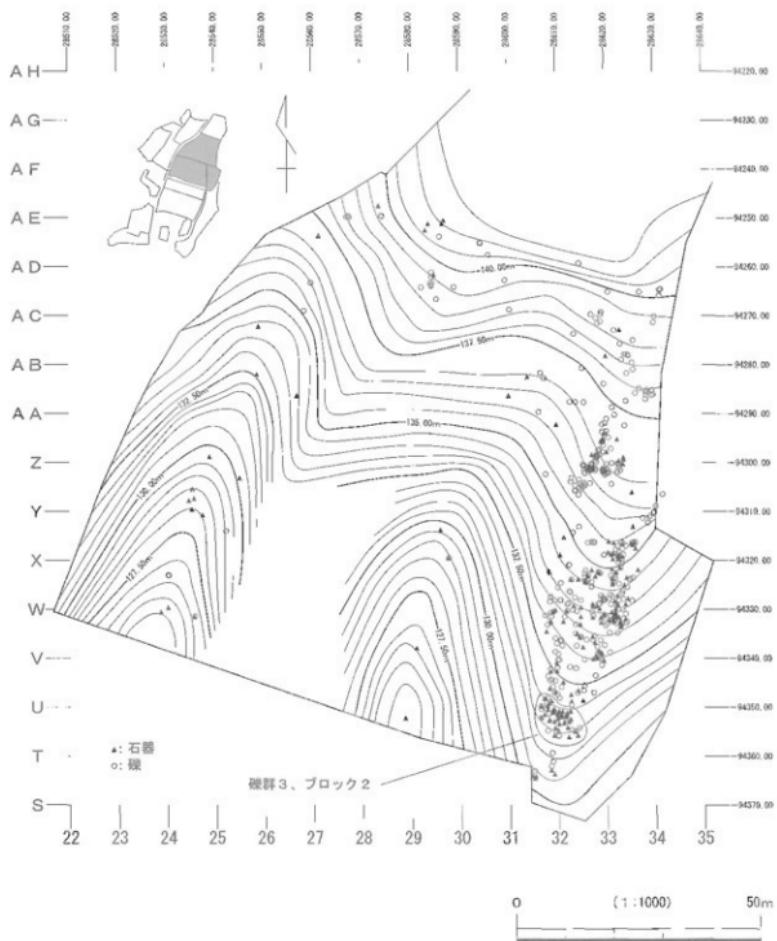


第252図 10区遺構外、2区出土石器 (1~8・10~14:2/3、9:1/4)

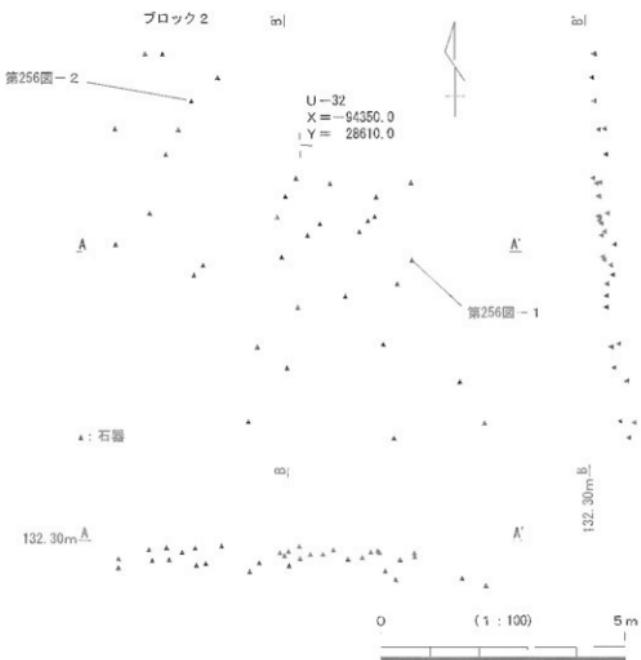
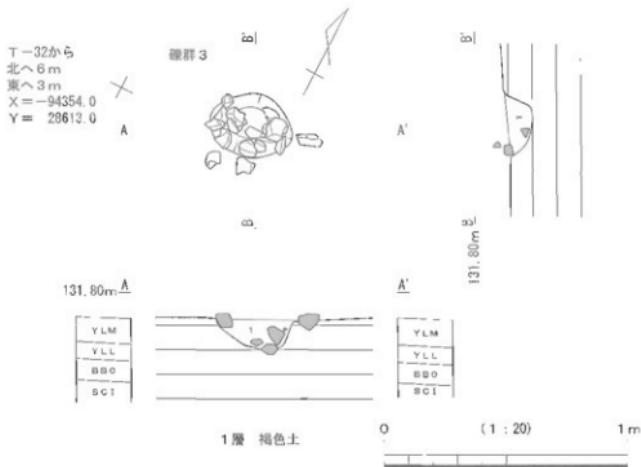


0 1.50  
(2 : 3) 10cm

第253図 2区出土石器



第254図 3、8、11区休場層上層～中層遺構、遺物分布図



第255図 磚群3、ブロック2実測図

### 3区の遺構外出土遺物（西側谷出土遺物）

#### 尖頭器

第256図－4は横長剥片を使っていると思われ、裏面にその主剥離面が残っている。両端を欠損しているため、上下の判断がしにくいが、実測図が上下逆になるかもしれない。6は両面加工で、半分以上を欠損している。復元すると長さ10cmを超えると思われる。実測図で表面にした面の加工は、左側縁からの加工が先で、右側縁からの加工が後である。裏面の加工は、右側縁からの加工が先で、左側縁からの加工が後である。このことから、錯交剥離によって作られていることがわかる。7は尖頭器だが、厚みが残っていることや、三段目の断面図が平行四辺形になっていることからうかがえるように、錯交剥離を始めた直後の段階と思われる。このことから、これは未完成品と考えられる。

#### ナイフ形石器

第256図－5は二側縁加工のナイフ形石器である。左側縁には自然面が残っている。この自然面と裏面の角度は60度程で、ナイフ形石器の刃潰し加工の角度とだいたい一致することから、この部分は加工せずに残したものであろう。右側縁は、先端から基部まで加工してある。先端に近い方は、素材剥片の打面を切断するようにして除去している。これに対して基部に近い方は、剥片の縁辺を数mm除去しただけにとどめている。

#### 11区の遺構外出土石器

#### 尖頭器

第256図－8は裏面に剥片の素材面が残っており、打瘤を除去したと思われる剥離が見られる。10は両面加工で、裏面に素材になった剥片の主剥離面が残っている。

#### ナイフ形石器

第256図－9は二側縁加工で、左側縁は下半分を裏面から加工しており、右側縁は縁辺全部を加工している。基部には素材剥片の打面が残っており、裏面に打瘤を除去したと思われる平坦剥離が見られる。11は、縦長剥片を使ったやや大型のナイフ形石器で、基部には剥片の打面が残っている。基部を丸く仕上げてある。12はやや厚みのある剥片を使っており、実測図左側縁は両面から加工している。基部には折れ面が見られる。素材剥片の打面を折り取ったと思われる。13は二側縁加工で、右側縁の加工で、素材剥片の打面を除去している。両側縁の加工は途切れることなく連続しており、これによって、基部を丸く仕上げてある。14は縦長剥片を使った一側縁加工で、左側縁を裏面から加工している。右側縁は折れ面が残っている。

#### スクレイパー

第257図－1は丸みのある剥片を使い、打面以外の縁辺を加工して刃部を作っている。2は石核を転用したスクレイパーで、正面と裏面に剥片を剥離した作業面が残っている。そして、上端以外の縁辺を加工して刃部を作っている。

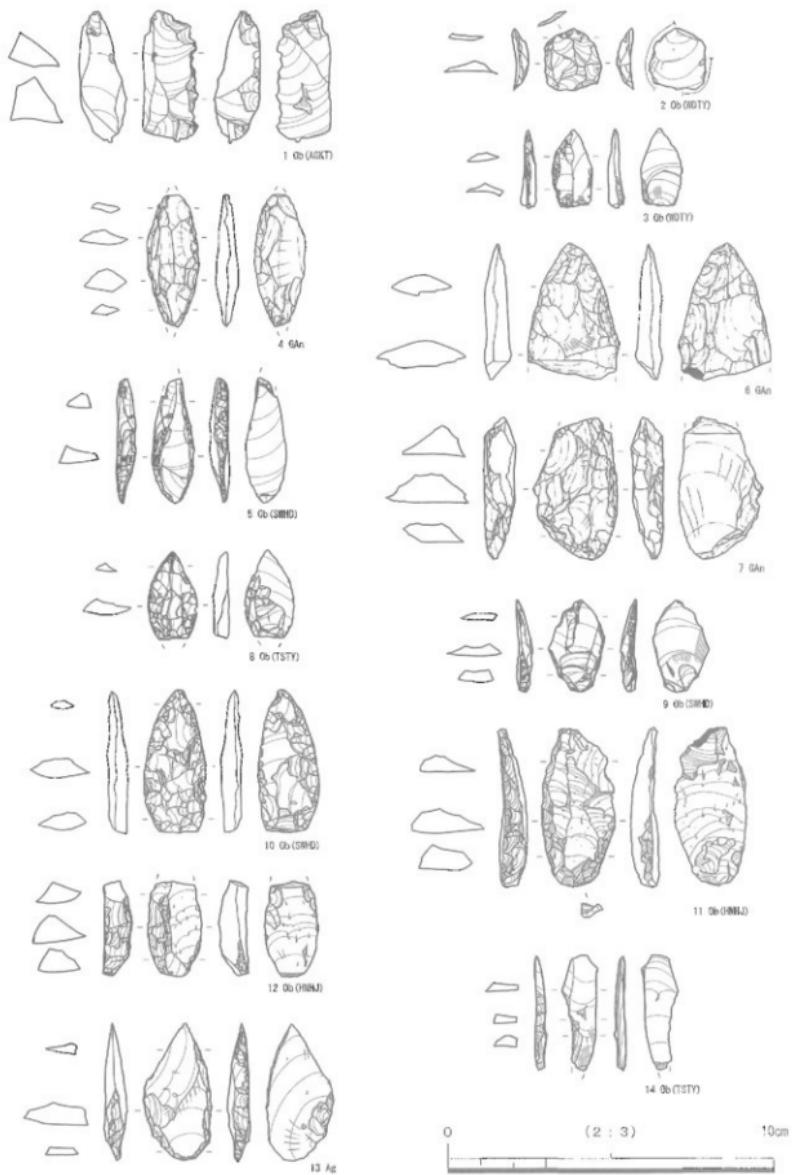
#### 石核

第257図－3は分割した円碟を使っていて、分割した平坦面を打面にして剥片を剥離している。第258図－1は、扁平な円碟の平坦な面を打面にして、円碟を分断するように剥片を剥離している。これは休場層上層から出土したため、旧石器時代の石核としたが、同様の石核は縄文時代の層から多く出土しているため、これも縄文時代になる可能性もある。

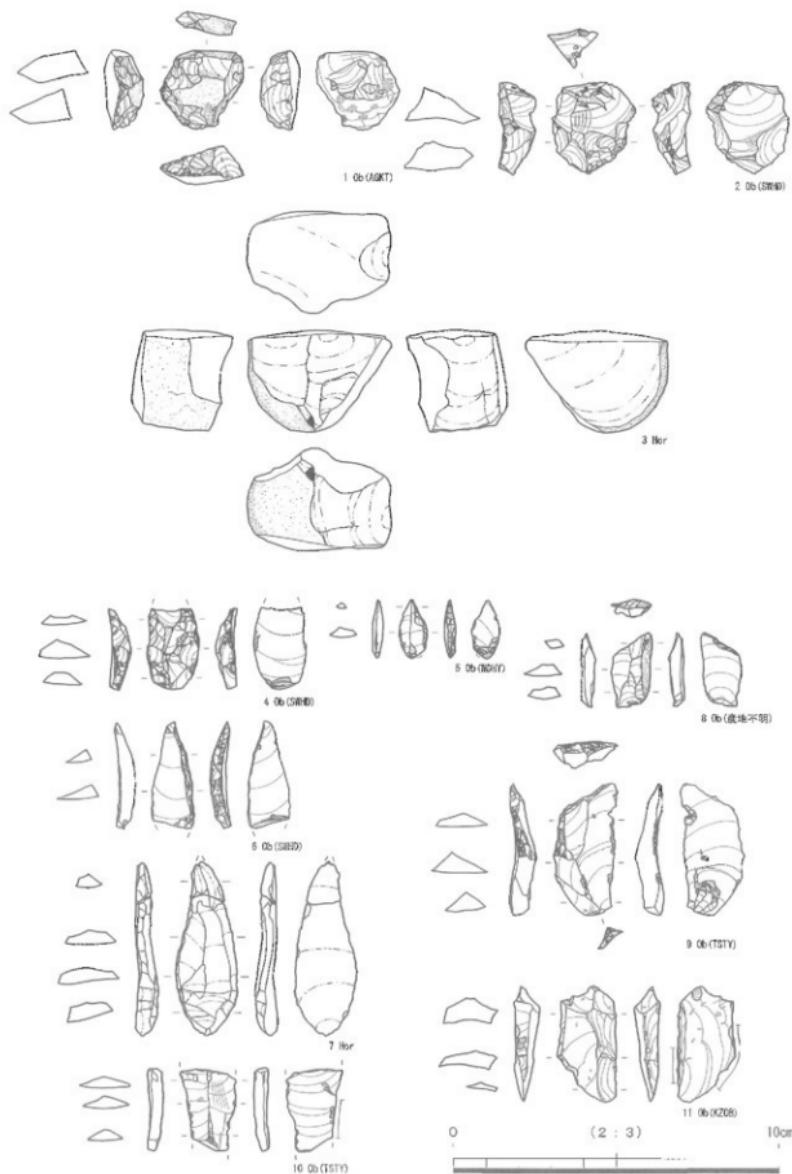
#### 8区の遺構外出土遺物

#### 尖頭器

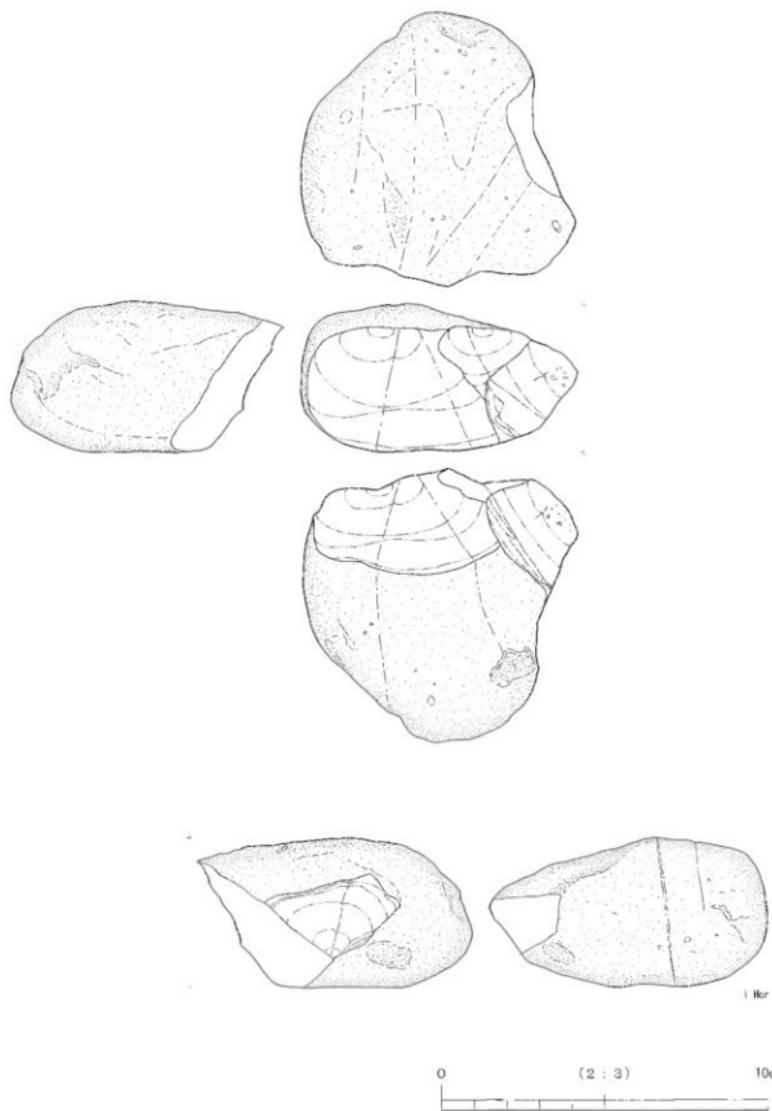
第257図－4は、正面に平坦剥離が入っており、その裏面は素材剥片の主剥離面が残っていて未加工である。表面にも素材面が残っていることから、素材剥片の厚さがわかる。



第256図 ブロック2、3・8・11区遺構外出土石器



第257図 11、8区出土石器



第258図 11区出土石器

## ナイフ形石器

第257図-5は二側縁加工で、左側縁には微細な加工が入っている。裏面には打痕を除去するための平坦剥離が入っている。6は縦長の剥片を使った二側縁加工である。右側縁は両面から細かく加工している。左側縁には微細な剥離が入っている。7は縦長の剥片を使った二側縁加工で、素材剥片の打面を下にして、打面を除去し、基部を丸く仕上げてある。8は、縦長剥片の末端を斜めに切断するように加工している。9は、縦長剥片の末端を斜めに切断するように加工し、左側縁にも裏面から加工している。

## 微細な剥離のある剥片

第257図-10、11ともに、剥片の縁辺に、微細で不規則な剥離が見られる。

## (4) 5区遺物分布域

南西に向かう緩斜面で、丘陵に当たっている(第259図)。砾群がまとまって出土した。

### 土坑39

休場層中層で検出した土坑で、休場層中層が流れ込んでいるが、休場層よりも上層の土は流れ込んでいないため、旧石器時代の土坑と判断した(第260図)。8点の砾があり、全点が赤化している。完形の砾は1点だけである。割れ面が赤化した砾は5点あり、割れ面が赤化していない砾が2点ある。

### 砾群4

休場層中層で検出した。分布をみると2つの砾群のようにも見えるが、近接していることから1つの砾群として扱った(第261図上段)。10点の砾からなり、すべて割れて割れ面も赤化している。

### 砾群5

休場層中層で検出した(第261図下段)。7点の砾からなり、すべての砾が割れている。5点の砾は割れ面が赤化しており、残りの2点は全体が赤化していない。

### 砾群6

休場層の上層で検出した(第262図上段)。12点の砾からなり、非赤化完形砾が1点ある。

### 砾群7

休場層の中層で検出した(第262図下段)。19点の砾からなり、16点が割れている。

### 砾群8

休場層中層で検出した45点の砾からなる(第263図下段)。この遺跡で出土した砾群の中では砾の多い方である。32点は割れた面が赤化している。

### 砾群9

砾群4~7は近接していたのに対して、この砾群は離れた場所で出土した(第263図上段)。周囲では遺物の分布も少なく、孤立したような存在である。8点の砾からなる、小規模な砾群である。

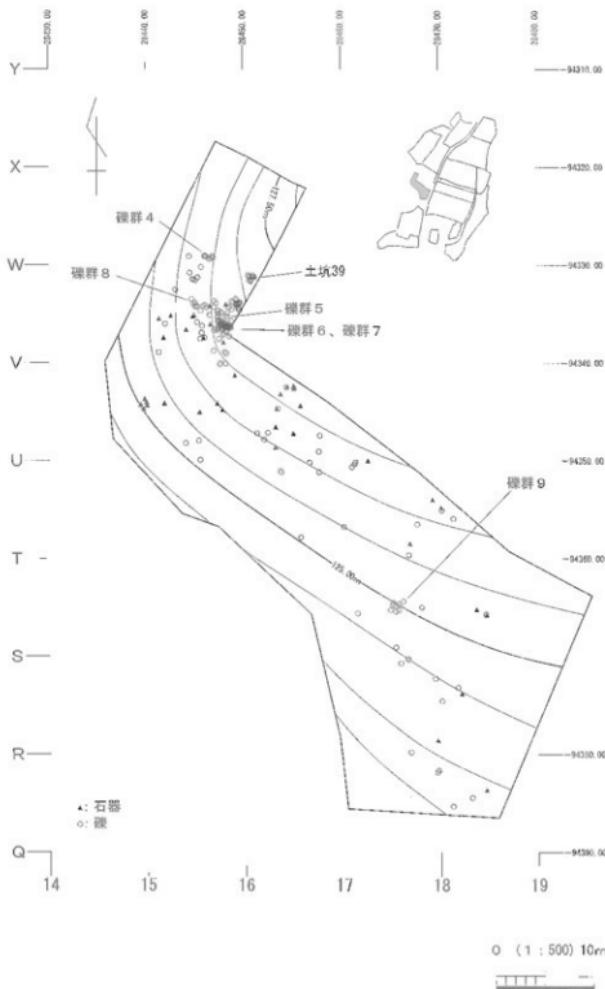
## 5区の遺構外出土遺物

## ナイフ形石器

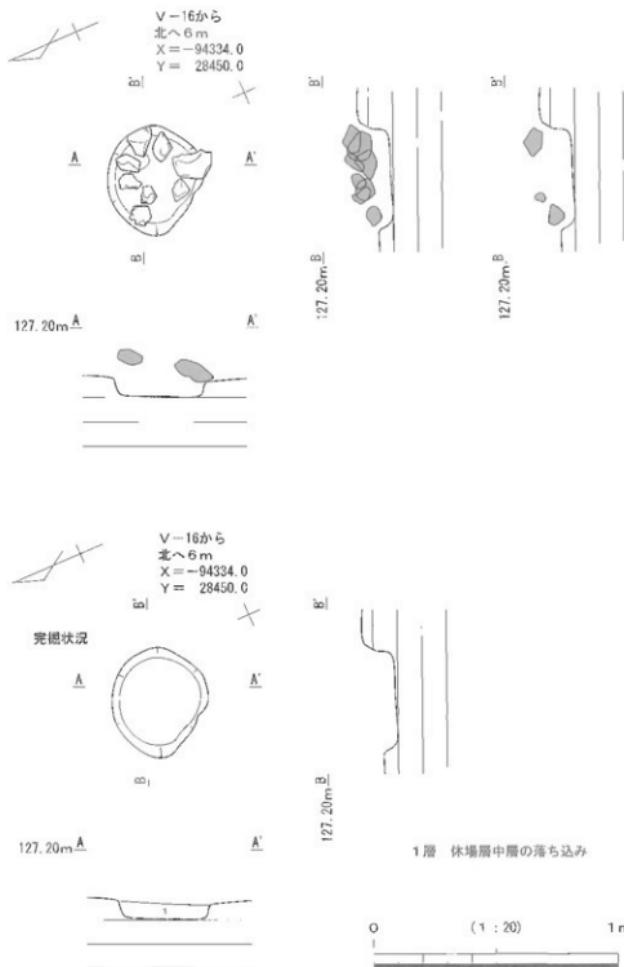
第264図-1は縦長剥片を使った二側縁加工で、先端を欠損している。刃部にも使用痕と思われる剥離が入っている。2は縦長剥片を使った二側縁加工で、両側縁とも加工による剥離が細かい。3は横長の剥片を使った二側縁加工で、刃部が水平に近い切り出し形である。加工による剥離は大きく、縁辺は鋸齒状になっている。素材剥片も厚みがあり、一見、角錐状石器にも見える。

4は縦長剥片を使った二側縁加工で、ナイフ形石器の中では大型である。左側縁の加工は、器面を薄く剥ぎ取るような加工になっている。右側縁は、先端に近い縁辺は裏面から加工し、器体中央付近の縁辺は表面から加工している。右側縁の下半は未加工であるが、未加工部分と裏面の角度は60度程度で、刃溝と加工の角度と近似した角度のため、加工せずに残したと思われる。

5は、剥片の末端を分断するように加工している。両側縁には、抉るような剥離が見られる。

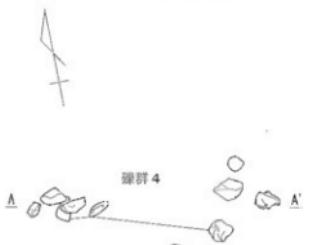


第259図 5区休場層上層～中層遺構、遺物分布図



第260図 土坑39実測図

W-15から +  
 北へ2m  
 東へ7m  
 X = -94328.0  
 Y = 28447.0



126.70m A

A'



V-15から X  
 北へ7m  
 東へ5m  
 X = -94333.0  
 Y = 28445.0



砾群5

126.40m A

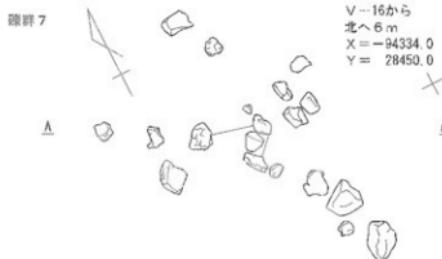
A'



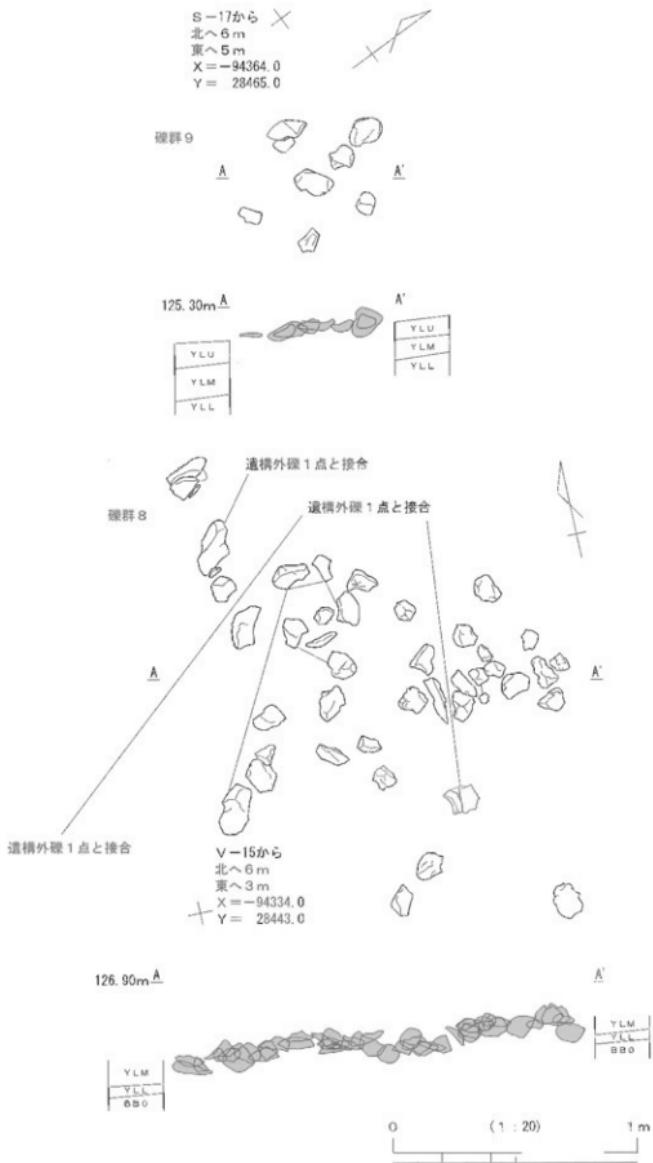
0 (1 : 20) 1m

第261図 砾群4、5実測図

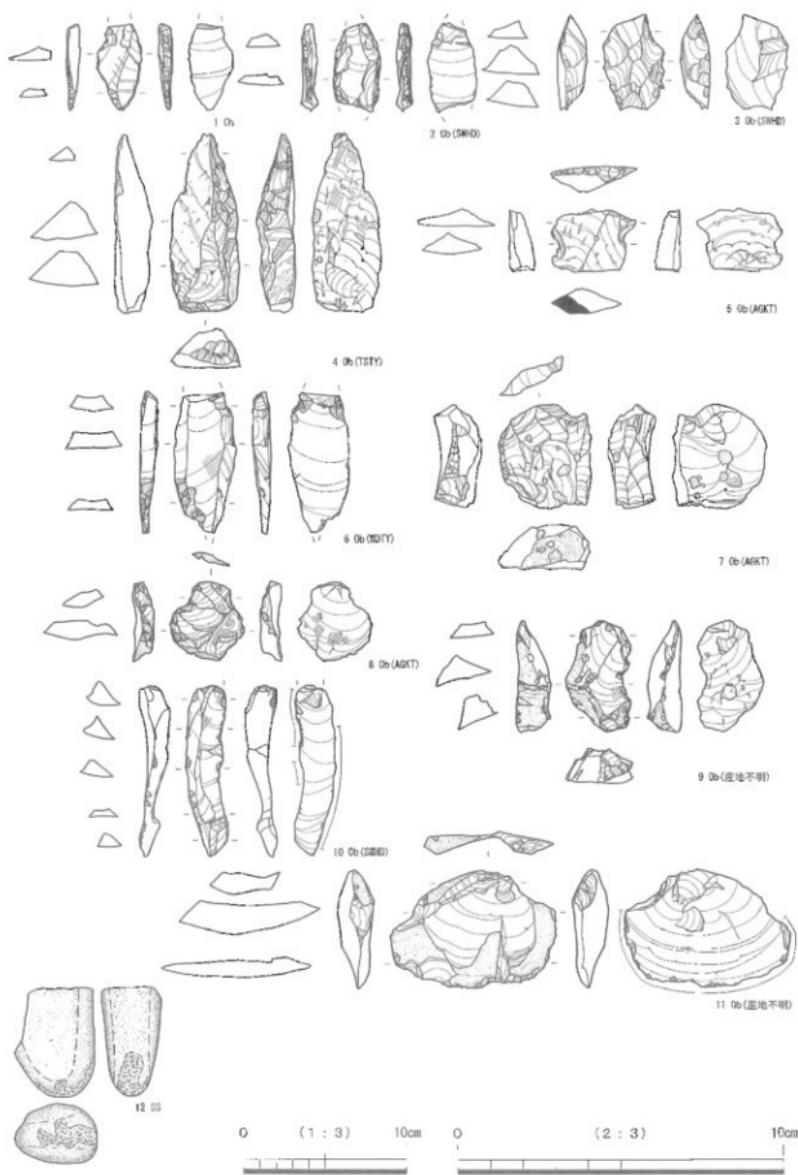
W-16  
 X = -94330.0  
 Y = 28450.0  
 砥群6



第262図 砥群6、7実測図



第263図 砾群8、9実測図



第264図 5区遺構外出土石器 (1~11:2/3, 12:1/3)

### スクレイパー

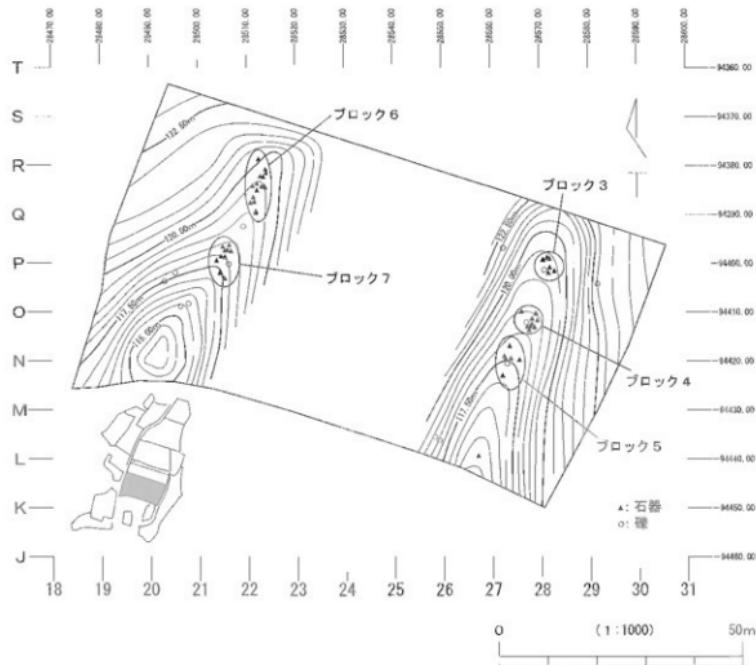
第264図-6は、縦長剥片の末端に近い縁辺を加工している。7は丸みのある剥片の縁辺に角度の高い剥離を入れて刃部を作っている。実測図の右側見通し図に、剥片を剥離した痕があることから、剥片の小口面から剥片を剥離する石核を転用していると思われる。8も丸みのある剥片の縁辺を加工して刃部を作っている。9は、厚みのある剥片の末端を加工している。

### 微細な剥離のある剥片

第264図-10は縦長剥片の側縁に不規則な剥離が見られる。11は打面が広く、横に長い剥片の末端に剥離が見られる。スクレイパーにしても良いかもしれないが、剥離がやや不規則であることと、微細な剥離を入れただけの縁辺もあることから、微細な剥離のある剥片とした。

### 敲打痕のある縫

第264図-12は細長い円碟の端部に敲打痕が付いている。



第265図 4区休場層上層～中層遺構・遺物分布図

## (5) 4区遺物分布域

調査区の中央は丘陵に当たっていると思われるが、その部分は削平によって失われている（第265図）。調査区の東と西に谷があり、その中で小規模ながらブロックが5箇所検出されている。いずれも整理作業の過程で追加したブロックである。

### ブロック3

東側の谷で検出した、石器11点からなる小規模なブロックである（第266図上段）。ナイフ形石器と細石刃を含んでいる。第269図-2は縦長の剥片を使った二側縁加工のナイフ形石器である。右側縁上半の加工は、素材剥片を斜めに切断するように加工しながら、素材剥片の打面も除去している。下半の加工は、素材剥片の縁辺を数mm除去するにとどめている。そして、加工は基部をめぐり、左側縁の加工に続いている。これによって、ナイフ形石器の基部が丸みを帯びるように仕上がっている。4は縦長剥片を使った二側縁加工のナイフ形石器であるが、基部に素材剥片の打面を残している点と、素材剥片をほとんど傾けずに使っている特徴がある。

### ブロック4

東側の谷で検出した、石器10点からなる小規模なブロックである（第266図中段）。細石刃と微細な剥離のある剥片を含んでいる。第269図-6は、折れ面を持つ剥片の側縁に微細な剥離が並んでいる。

### ブロック5

東側の谷で検出した、石器6点からなる小規模なブロックである（第266図下段）。尖頭器と微細な剥離のある剥片を含んでいる。第269図-1は両面加工の尖頭器である。風化が進んでいるうえに表面が剥落した部分もあるため、剥離面を観察しにくいが、両側縁からの平坦剥離が器体中央で切り合っていることと、全体の形がやや歪んでいることから、全体の形を整えながら、器体を薄くしている途中の未完成品と思われる。5は、縦長剥片の縁辺に微細な剥離が見られる。

### ブロック6

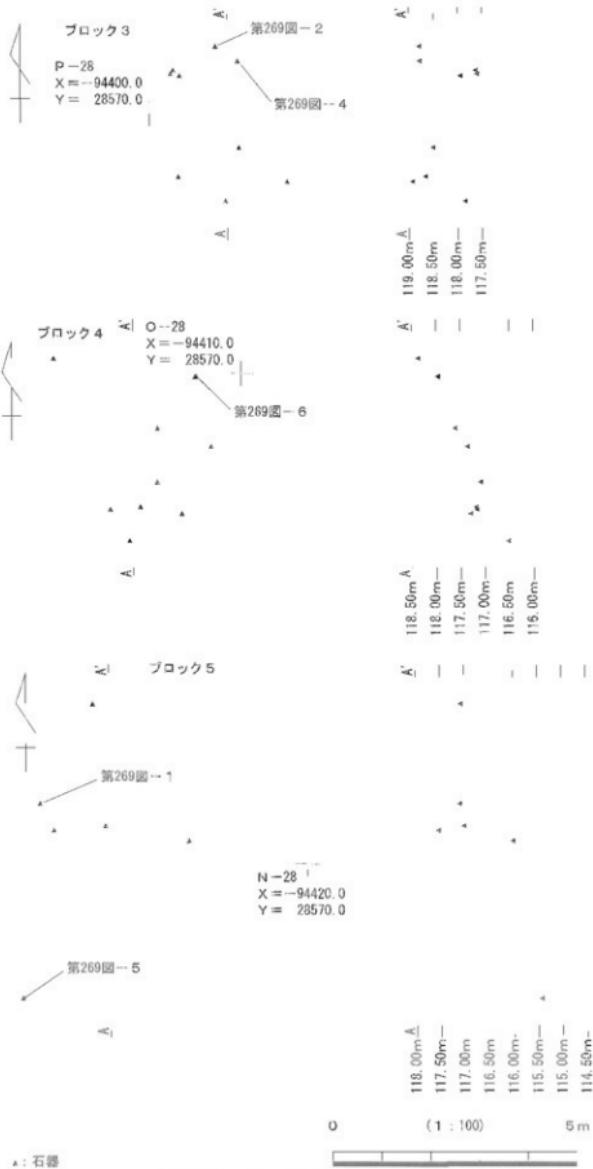
西側の谷で検出した、石器16点からなる小規模なブロックである（第267図上段）。尖頭器、ナイフ形石器、細石刃を含んでいる。第269図-7は両面加工の尖頭器で、きれいな木葉形をしている。石材はシルト岩で、砂質が強い部分とシルト質が強い部分がある。基部を見ると、茎部を意識しているように見えることから、縄文時代の尖頭器の可能性もあるが、体場層中層から出土したもので、体場層中層からは縄文時代の遺物はほとんど出土していないことから、旧石器時代の遺物とした。

10は、二側縁加工のナイフ形石器で、基部は折れ面が残っている。おそらく素材剥片の打面を折り取ったのであろう。11は微細な剥離のある剥片で、縦長剥片の打面を除去するように、微細な剥離が連続して入っている。

### ブロック7

4区の谷の中で検出した、石器10点からなる小規模なブロックである（第267図下段）。尖頭器が3点出土しているが、いずれも黒曜石、ガラス質黒色安山岩、安山岩と石材が異なるため、外部からの搬入品と思われる。黒曜石製以外の尖頭器は小さな破片である。第269図-8は、黒曜石製の両面加工尖頭器である。両側縁から平坦剥離を入れており、その剥離面が器体中央で切り合っている状況が観察できる。加工は、実測図で裏面にした方が進んでいる。器体に厚みが残っていることと、全体の形も整っているとは言い難いことから、平坦剥離を入れて、器体を薄くしながら全体の形を整えている途中の未完成品と思われる。12は微細な剥離のある剥片で、縁辺に微細な剥離が見られる。

第268図-1は円礫を使った石核である。分割した円礫を使い、分割した面を作業面にして、その周縁に残っている円礫面を打面にしている。そして、作業面の周囲を巡るように打点を移動しながら、不定形の剥片を剥離している。



第266図 ブロック 3～5 遺物分布図

ブロック 6

R-22  
X = -94380.0  
Y = 28510.0

第269図-7

第269図-11

第269図-10

▲: 石器

Q-22

X = -94390.0  
Y = 28510.0

ブロック 7

119.50m—  
119.00m—  
118.50m—  
118.00m—  
117.50m—

P-22  
X = -94400.0  
Y = 28510.0

第269図-12

P-21  
X = -94400.0  
Y = 28500.0

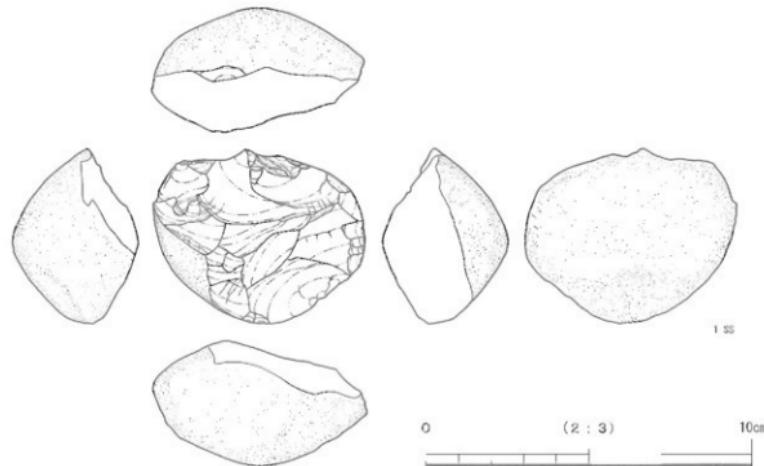
第267図 ブロック 6、7 遺物分布図

#### 4区の遺構外出土遺物

この調査区では、遺物は少ないが、5つのブロックにまとまっており、遺構外出土の遺物は少ない。第269図-3は、東側の谷で出土した二側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片の打面を下にして、主として右側縁の加工によって打面を除去している。そして、裏面に打痕を除去したと思われる平坦剥離が入っている。右側縁が緩やかな弧を描き、平面形は左右対称形に近いため、整った形態と言う印象を受ける。

9は西側の谷で出土した二側縁加工のナイフ形石器で、細長い印象を受ける。左側縁の加工で、剥片の打面を分断するように除去している。この加工と右側縁下部の未加工部分が直線的に交わるため、基部が尖っている。右側縁の加工は先端付近に集中しており、右側縁の中央から基部にかけてはほとんど未加工である。この未加工部分には、石の目が残っており、1枚だけ剥離が入っている。この未加工部分と裏面の角度は70度前後で、刃溝し加工に見られる剥離角と大差ないことから、この部分を加工せずに残したと思われる。

13は西側の谷で出土した微細な剥離のある剥片で、縁辺に微細で不規則な剥離が見られる。



第268図 ブロック7出土石器

## (6) 12区遺物分布域

南西に向かって緩やかに傾斜した丘陵に当たっている(第270図上段)。遺構や遺物は多くないが、土坑やブロックを検出している。

### 土坑40

休場層中層で検出した浅い土坑である(第270図下段)。埋土は休場層下層で、休場層よりも上層の土は見られないことから、旧石器時代の土坑と考えた。

### 土坑41

休場層中層で検出した土坑である(第271図)。縄文時代の落とし穴のように見えるが、埋土は休場層や第0黒色帯の流れ込みで、休場層よりも上層の土は見られないことから、旧石器時代の土坑と考えた。

### 土坑42

休場層中層で検出した土坑である(第272図)。縄文時代の落とし穴のように見えるが、埋土は休場層や第0黒色帯、第II黒色帯、第III黒色帯の流れ込みで、休場層よりも上層の土は見られないことから、旧石器時代の土坑と考えた。深さから考えて落とし穴以外には考えにくい。

### ブロック8

休場層上層～中層で検出したブロックで、21点の石器からなる(第273図上段)。主要石材はホルンフェルスであるが、ホルンフェルス製の石器は剥片がほとんどで、ナイフ形石器や尖頭器、細石刃はいずれも墨壘石製である。また、ナイフ形石器と細石刃が出土していることから、時期の違う遺物が混ざっていることは明らかである。

第274図-1は両面加工の尖頭器の先端部の破片で、裏面には素材剥片の主剥離面が残っている。表面の加工は器体中央に向かって平坦剥離を入れているが、裏面の加工は、縁辺に微細な加工を入れるにとどまっている。表面の平坦剥離は、45度程度の角度で入っており、通常の平坦剥離よりは高い角度である。これは素材になった剥片に厚みがあるためであろう。2は細石刃である。側縁に微細な剥離が見られる。3は敲打痕のある礫で、円礫の端部に敲打痕が見られる。

### ブロック9

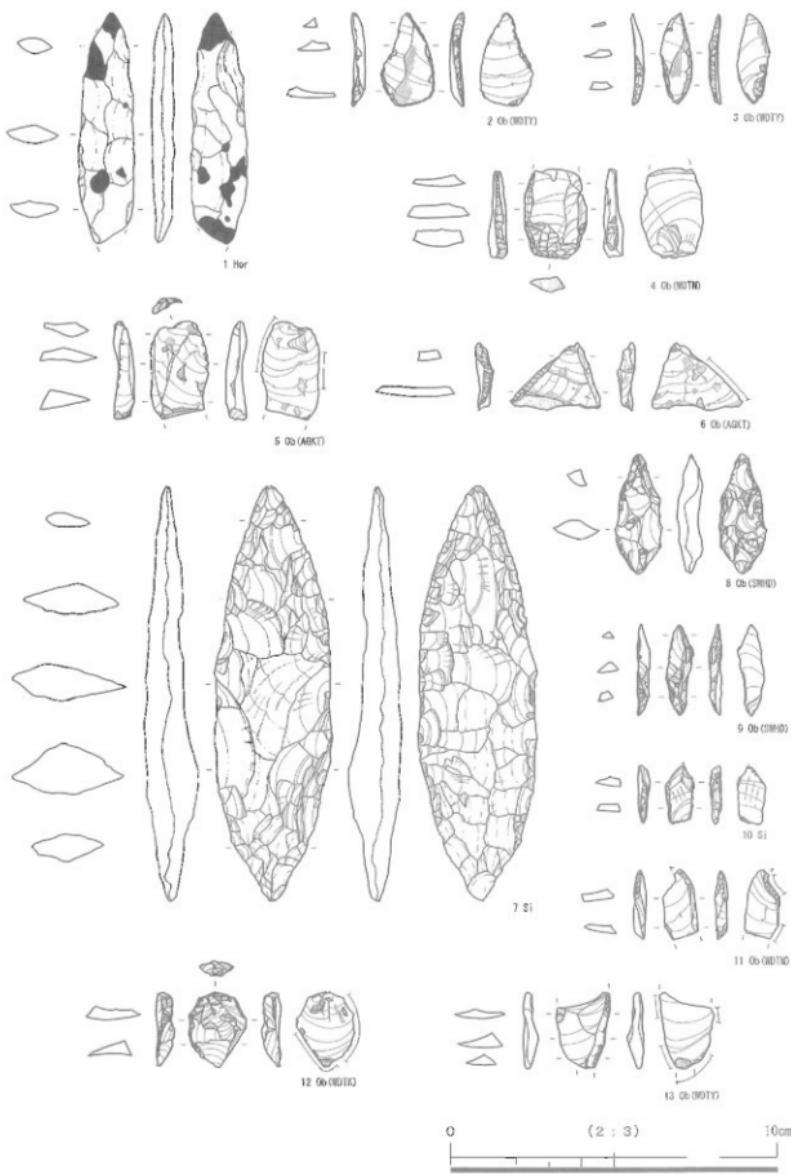
14点の石器からなるブロックで、玄武岩製の礫器が1点出土している以外は、すべてホルンフェルス製である(第273図下段)。内容は石核1点と剥片で、接合例はないが、石核を持ち込んで剥片剥離を行ったと思われる。

### 遺構外出土遺物

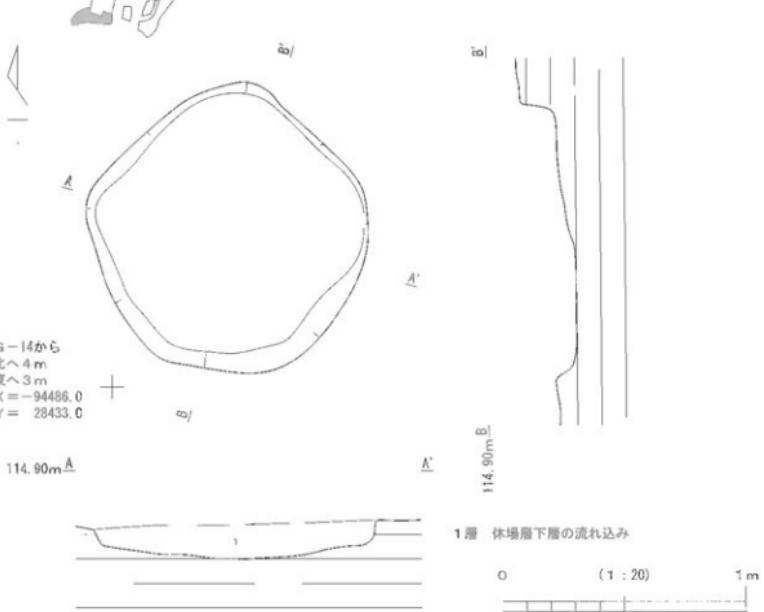
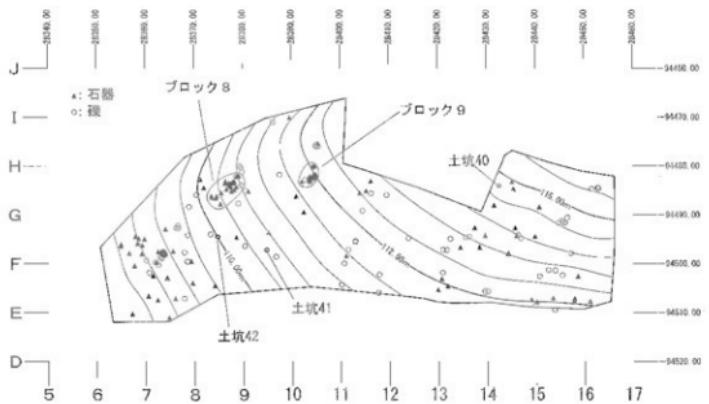
#### 尖頭器

第275図-1は片面加工と思われるが、かなり風化が進んでいる。4つに折れているが、これは風化による劣化で折れたものである。2は両面加工で、裏面中央に素材剥片の主剥離面が残っている。加工が進んでおり、平面的な形は整って見えるが、器体の厚みが残っていることから、器体を薄くする加工の途中で折れたものと考えられる。3は周縁加工で、左側縁の加工はナイフ形石器に見られる加工のような角度の高い剥離である。これに対して右側縁の先端に近い部分は、角度の低い平坦剥離であるが、基部に向かうに従って、次第に角度が高くなり、基部付近では、ナイフ形石器に見られるような、角度の高い剥離になっている。

4は両面加工の尖頭器で、風化が進み、表面も剥落した部分があるが、全体的な形は整っており、器体も薄くなっていることから、完成品か完成に近いと思われる。5は周縁加工で、縱長剥片を使い、基部に打面を残したまま縁辺を加工している。右側縁の加工は、ナイフ形石器の加工に見られるような角度の高い剥離である。これに対して、左側縁の加工は角度の低い平坦な剥離である。6は片面加工で、表面は平坦剥離に覆い尽くされているが、裏面は素材剥片の主剥離面が未加工のまま残っている。

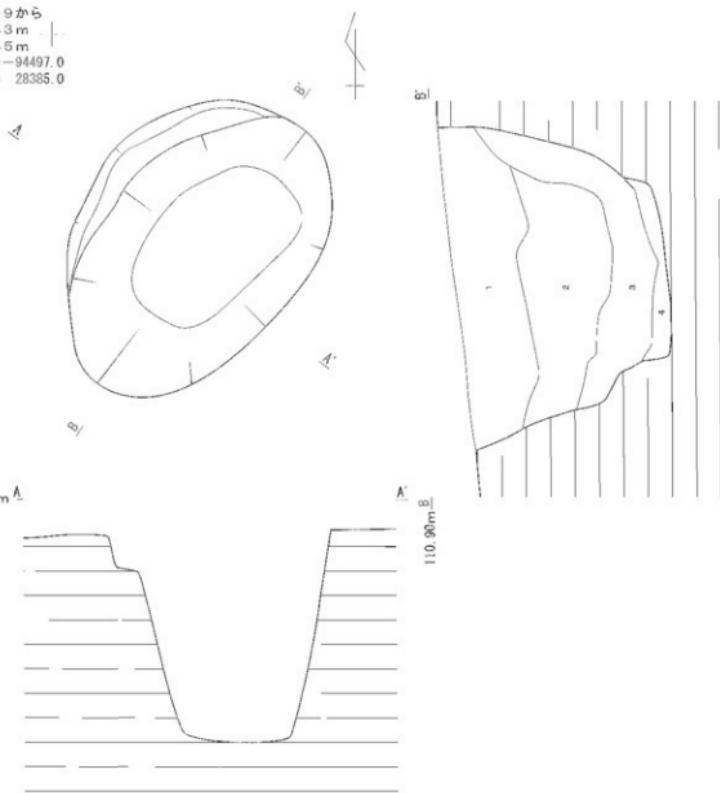


第269図 ブロック3~7、4区遺構外出土石器



第270図 12区休場層上層～中層遺構・遺物分布図、土坑40実測図

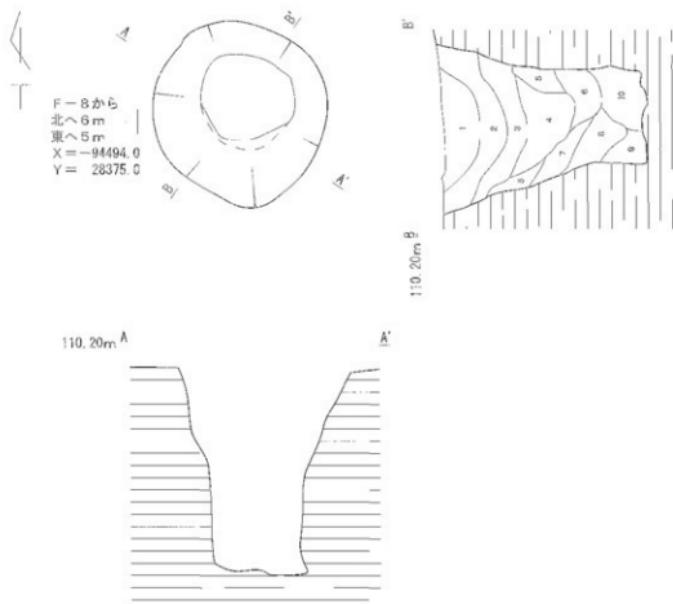
F - 9 から  
北へ 3 m  
東へ 5 m  
X = -94497.0  
Y = 28385.0



- 1 層 休場層の流れ込み 粗く、締まっていない。2~3mm大の橙色スコリアを少し含む。  
 2 層 休場層の流れ込み 1層より細かく、よく締まっている。やや硬質。2~3mm大の橙色スコリアを少し含む。  
 3 層 第〇層黒色帯の流れ込み 細いが、よく締まっている。2~3mm大の橙色スコリア、黒色スコリアを少し含む。  
 4 層 黄褐色土 1層と同じ色調。強い粘性がある。粗く、締まっていない。



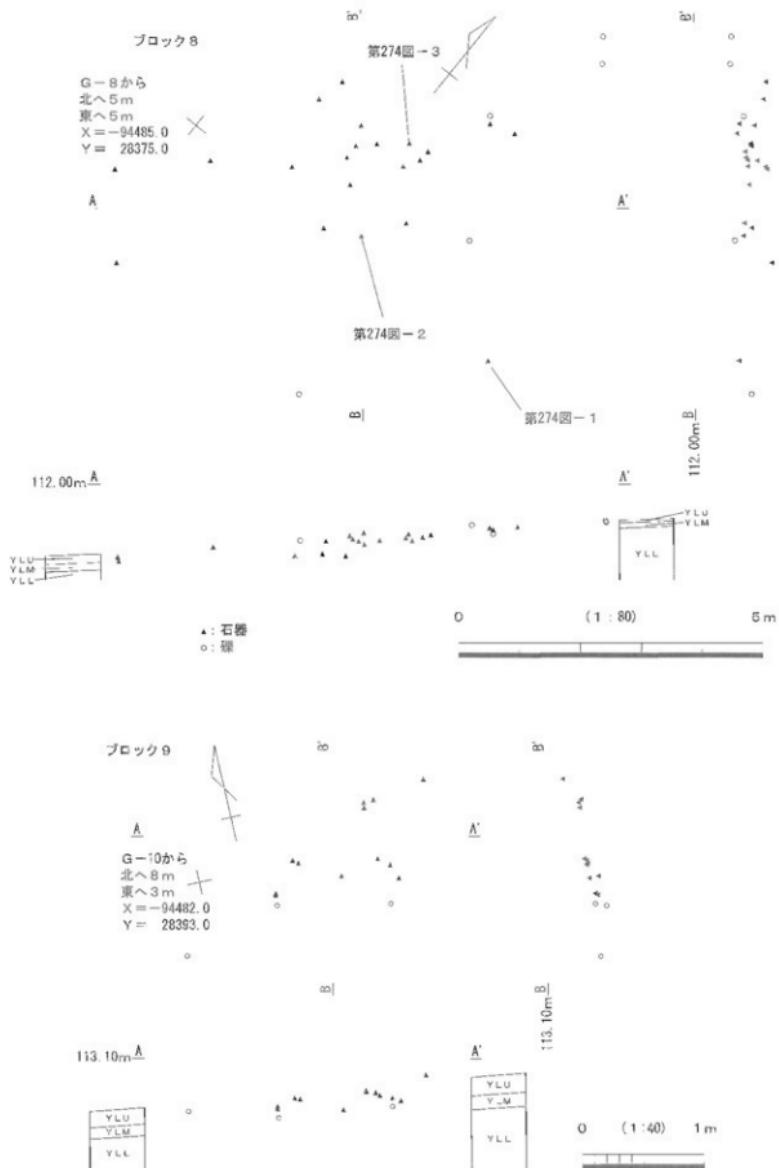
第271図 土坑41実測図



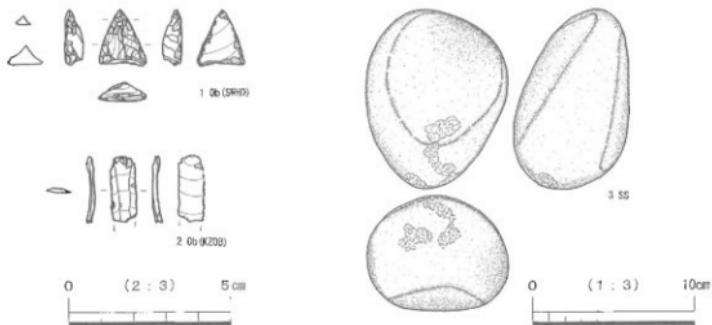
- |     |                   |                                    |
|-----|-------------------|------------------------------------|
| 1層  | 休場層の流れ込み          | 粗い。4~5mmの橙色スコリアが非常に多い。             |
| 2層  | 休場層の流れ込み          | 粗く締まっていない。4~5mmの橙色スコリアを少し含む。       |
| 3層  | 休場層の流れ込み          | 粗く締まっていない。粘性が強い。4~5mmの橙色スコリアを少し含む。 |
| 4層  | 休場層の流れ込み          | 粗く、締まっていない。4~5mmの橙色スコリアを少し含む。      |
| 5層  | 休場層と第II黒色帯の混合土    |                                    |
| 6層  | 第O黒色帯の流れ込み        |                                    |
| 7層  | 第O黒色帯と第II黒色帯の混合土  |                                    |
| 8層  | 第O黒色帯の流れ込み        |                                    |
| 9層  | 第O黒色帯の流れ込み        | 10cm大的第III黒色帯のブロックを含む。             |
| 10層 | 第O黒色帯と第III黒色帯の混合土 |                                    |

0 (1:40) 1m

第272図 土坑42実測図



第273図 ブロック 8、9 遺物分布図



第274図 ブロック8出土石器 (1・2:2/3、3:1/3)

#### ナイフ形石器

第275図-7は二側縁加工で、素材剥片の打面を基部にして、加工によって打面を取り除き、さらに裏面に平坦剥離を入れて打瘤を除去している。8は縦長剥片を使った二側縁加工で、左側縁上半の加工は、素材剥片の縁辺を斜めに切断するように除去して、先端が尖るようしている。下半は、一部に未加工部分が見られるように、剥片の縁辺を1~2mm除去しただけである。9は二側縁加工で、右側縁には、細かい加工が見られる。また、裏面には打瘤を除去したと思われる平坦剥離が入っている。

10は縦長剥片を使った二側縁加工で、平面形は整って見えるが、左側縁の加工は断続的である。先端に近い部分には、ナイフ形石器によく見られる角度の高い剥離が入っている。左側縁中央付近には、角度の低い剥離が4枚見られ、それ以外の部分は未加工で残してある。そして、基部付近には再び、角度の高い剥離が入っている。断続的な加工にも関わらず整った形態に見えるのは、素材剥片の段階で、左側縁の形が完成形に近かったため、加工量を必要最小限に抑えたのであろう。右側縁は、素材剥片の縁辺を斜めに切断するように加工している。この加工は基部にも回り込み、素材剥片の打面を除去し、基部を丸く仕上げている。

11は二側縁加工で、基部は素材剥片を折り取った折れ面が残っていて、裏面には打瘤を除去した平坦剥離が見られる。12は一側縁加工で、基部には打面を折り取った折れ面が残っているため、基部は平坦になっている。左側縁を加工しており、縁辺は、加工による剥離か間隔を揃えて並んでいるため、鋸歯状になっている。素材剥片の末端が刃部になっているため、刃部は水平に近くになっている。13は、縦長剥片を使った二側縁加工で、基部には素材剥片の打面が残っている。左側縁は、途中で屈曲する部分があり、その屈曲部よりも先端側は加工が粗く、屈曲部を挟んで基部側は加工が細かい。右側縁は、縁辺中央付近には角度の低い平坦剥離に近い剥離が入っており、基部に近い縁辺には、細かい剥離が入っている。全体の形状は整って見えるが、加工は粗い印象を受ける。

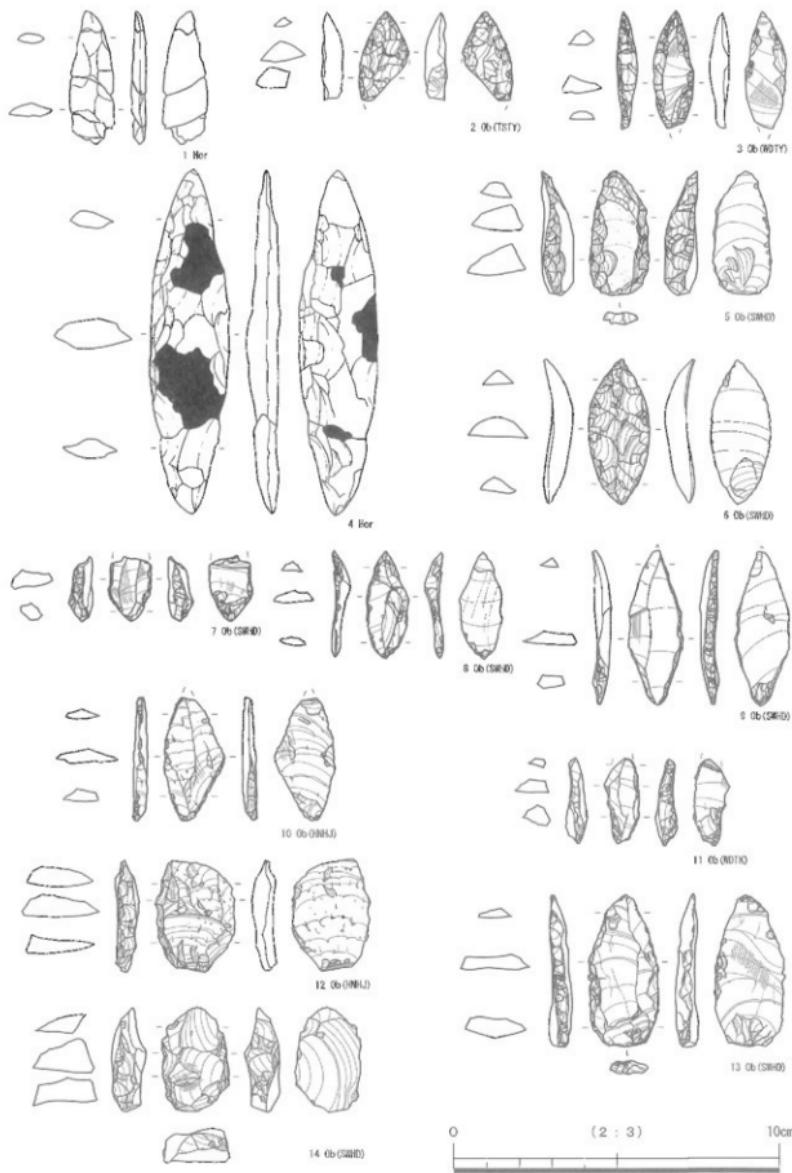
14は、横長剥片を使った二側縁加工で、右側縁の加工によって素材剥片の打面を除去している。左側縁の加工は、素材剥片の末端を除去している。基部には素材剥片の縁辺が未加工のまま残っている。素材剥片の丸みを帯びた縁辺を刃部にしているため、刃部が丸く飛び出して見える。

#### 石核

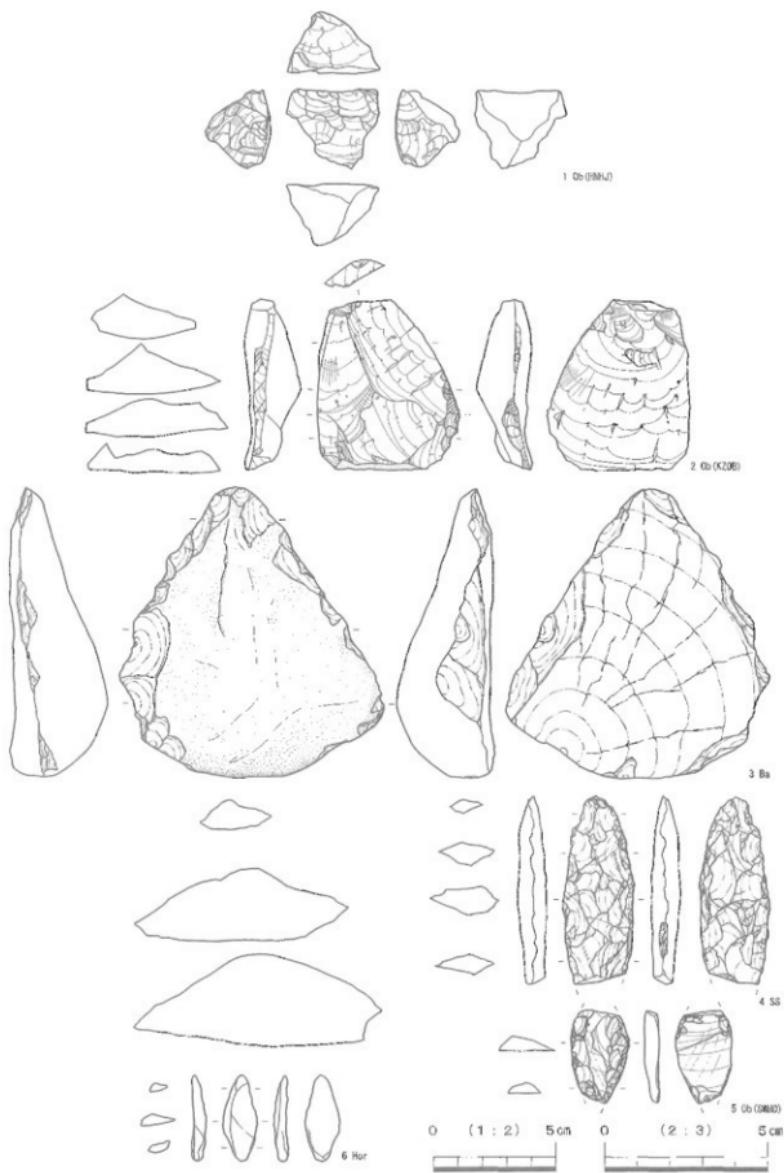
第276図-1は平坦打面を持つ石核で、正面で不定形の剥片を剥離している。実測図の左側見通し図と右側見通し図にも剥片を剥離した作業面があり、これらの作業面は、正面の作業面を打面にしている。

#### スクレイパー

第276図-2は幅の広い剥片の縁辺の一部を加工して刃部を作っている。



第275図 12区休場層上層～中層遺構外出土石器



第276図 休場層上層～中層遺構外出土石器 1 (1・2・4～6 : 2/3、3 : 1/2)

## (7) その他の石器

確認調査や上記以外の調査区で断片的に出土した石器を、包含層出土の遺物として報告する。

### 礫器

第270図-3は、円礫から剥離した大型の剥片を使い、側縁に粗い剥離を入れて一端を尖らせてある。尖頭器

第276図-4は両面加工の尖頭器で、加工は進んでいると思われるが、厚さが残っている。平坦剥離が器体中央で切り合っている状況から、器体を薄くする工程の途中と思われる。5は剥片を使った尖頭器で、裏面には素材になった剥片の主剥離面が残っている。表面には平坦剥離が入っているが、器体中央まで及ぶ剥離が少ないため、器体中央に素材面が残っている。

### ナイフ形石器

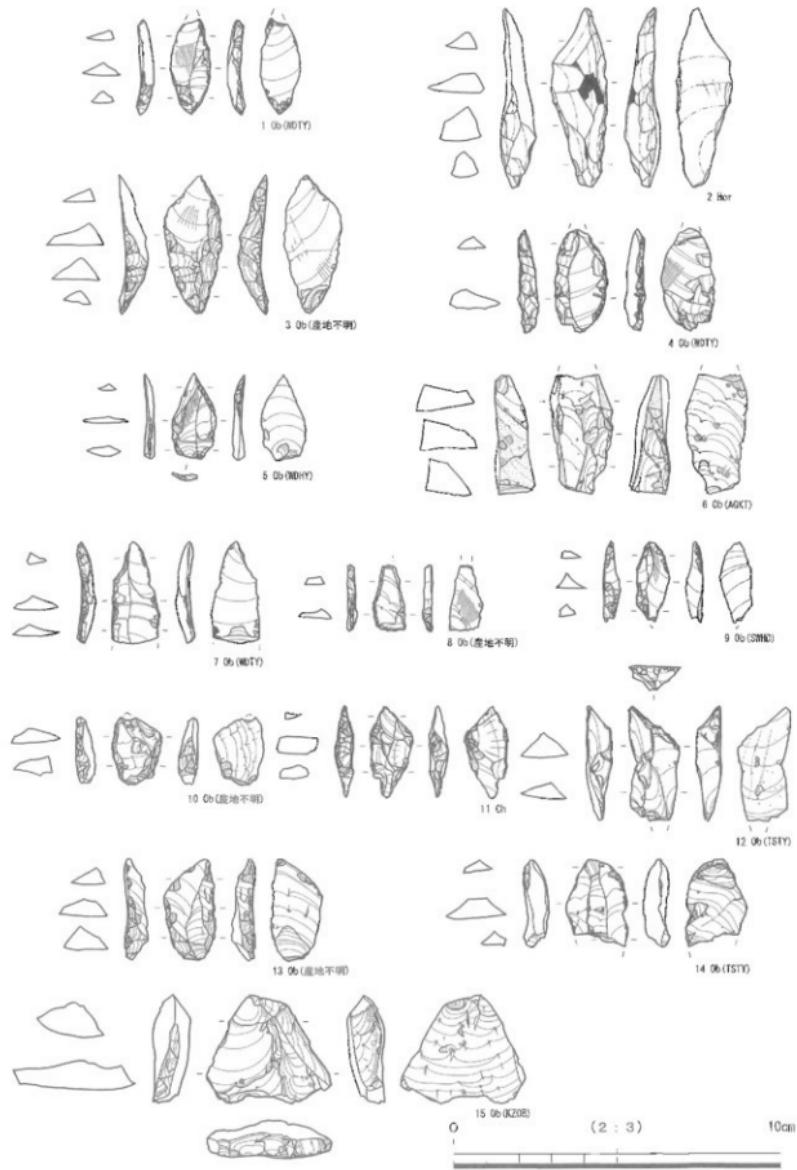
第276図-6はかなり風化が進んでおり、かろうじて二側縁加工とわかる。第277図-1は縦長剥片を使った二側縁加工で、正面の左側縁の加工は、角度が低いため、平坦剥離に近い。右側縁の加工は、先端付近から中央付近にかけて加工による剥離が小さくなってしまい、基部に近い部分は未加工である。先端に近い部分は、素材剥片の打面を除去する目的もあって、加工量が多くなったと思われるが、中央部から基部に行くにつれて、素材剥片の形状を活かすために加工量を減らしていくのであろう。また、裏面基部には、素材剥片の厚みを除去したと思われる平坦剥離が見られる。

2は、厚みのある横長の剥片を使った二側縁加工である。左側縁の加工で打面を除去している。右側縁の加工は、上半は加工量が多く、素材剥片の幅を数mm程度狭めていると思われる。これに対して、下半の加工量は少なく、素材剥片の幅を数mm程度狭めているだけと思われる。3は二側縁加工で、加工に特徴がある。右側縁の加工は、先端に近い部分は、他のナイフ形石器に見られるような角度の高い加工だが、縁辺の中央付近から基部にかけての部分は、剥離角度が低くなり、基部に近い部分では、両側縁とも尖頭器の平坦剥離に近い剥離になっている。このため、上下を逆にすれば尖頭器にも見える。

4は二側縁加工で、左側縁の加工は、ナイフ形石器に見られる加工にしては角度が低い剥離である。右側縁の加工は、縁辺に小さな剥離を入れるにとどめている。基部は折れ面である。5は、基部に素材剥片の打面が残っている。正面の左側縁は、下半を加工してあり、右側縁は上半を加工してある。6は厚みのある剥片を使った一側縁加工で、基部は素材剥片の打面を除去したと思われる折れ面が残っている。右側縁に、素材剥片の縁辺を分断するような加工が見られる。左側縁には自然面が残っている。この自然面と裏面の角度は80度程度あり、縁辺を加工した場合と同じ程度の角度になっていることから、加工せずに残したものであろう。7は二側縁加工で、左側縁の先端に近い部分は素材剥片の打面を除去した部分で、高い角度の加工だが、縁辺の中央付近は、やや角度が低くなっている。8は二側縁加工で、左側縁に屈曲部があり、屈曲部よりも基部側の加工が細かくなっている。この加工は基部にも回り込み、平坦な基部を作っている。9は一側縁加工で、左側縁下半は、画面から加工している。これは実測図が上下逆になるかもしれない。10は横長の剥片を使った二側縁加工で、右側縁の加工は、素材剥片の打面を除去している。左側縁の加工は、素材剥片の末端を加工している。ナイフ形石器の末端は加工ではなく、折れ面になっている。素材剥片の縁辺を折り取ったのであろう。11は横長の剥片を使った二側縁加工で、左側縁の基部は加工時に欠損している。12は縦長剥片の打面側を斜めに分断するように加工している。13は二側縁加工だが、両側縁の加工は不規則で粗い。基部は、素材剥片の打面を折り取った折れ面が残っている。

### スクレイパー

第277図-14は、半分ほどを欠損した縦長剥片の両側縁に加工が見られる。15は扇形に広がる剥片の末端と左側縁に急角度の剥離を入れている。



第277図 休場層上層～中層遺構外出土石器 2

## 石核

第278図-1は、板状の剥片を使った石核である。実測図の上面にした面が板状剥片の主剥離面で、下面が先行剥離面である。作業面は小口に設定されている。作業面を正面から見ると、打面が山形になるように加工されている。そして、山形の頂点を打点にして横長の剥片を剥離している。瀬戸内技法に似た剥片剥離技術である。瀬戸内技法との違いは、板状剥片の先行剥離面側を石核の底面にしている点、先行剥離面に複数方向からの剥離が見られることから、素材になっている剥片は、板状剥片の剥離を意图して剥離されたものではないらしいという点である。

第279図-1は扁平な円礫を使っており、交互剥離によって不定形の剥片を剥離している。2は、分割した円礫を使っている。1枚の剥離面からなる平坦打面から不定形剥片を剥離している。この石核には、第280図に示したように、不定形の剥片が3点接合している。4の剥片は右の目で割れている。

第281図-1は扁平な円礫を使っており、平坦な円礫面を打面にして不定形の剥片を剥離している。同様の石核は縄文時代の石核にも見られるが、休場層中層から出土したため、旧石器時代の石核とした。

## 細石核と細石刃

休場層上層からは、縄石核と細石刃が出土したが、ナイフ形石器などと同一産地の黒曜石を使っているのが多いため、縄石核と細石刃以外は、細石器文化に属する遺物を抽出することはできなかった。そこで、ここでは細石核と細石刃だけを抜き出して報告する。

## 細石核の作業面再生剥片

第282図-1は剥片で、先行剥離面に細い縦長の剥片を剥離した面が残っている。末端には石核の底角が残っている。左側面には細長い縦長の剥片を剥離した痕跡がある。右側面には、石核を細かく調整したと思われる剥離痕が残っている。これらのことから、石核の大きさは、高さ1.8cm、幅1.3cmであったと推定される。この大きさから考えると、この剥片を剥離したのは細石核と考えるのが妥当である。したがって、この剥片は細石核の作業面を再生した際に剥離された剥片と考えられる。

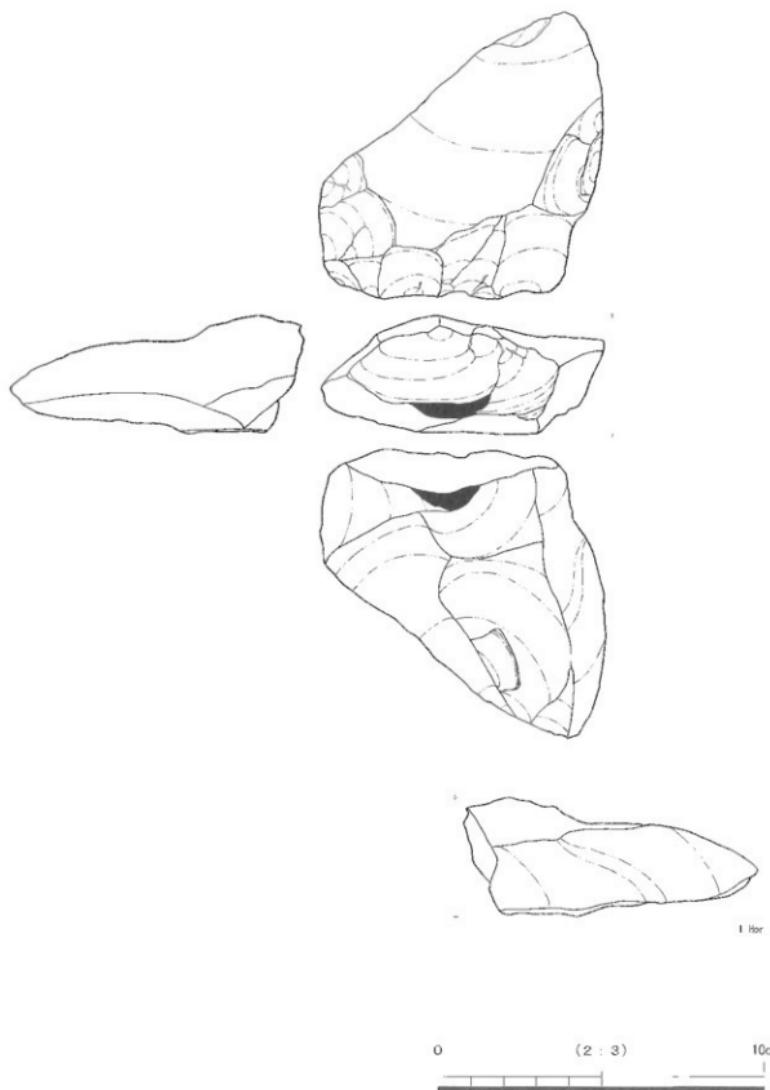
## 細石核

第282図-2は、円柱状の細石核で、細石刃の剥離が石核の全周をめぐっている。打面は1枚の剥離面からなっている。3は船底のような形をした石核で、舳先に当たる部分で細石刃を剥離している。打面は1枚の剥離からなる平坦打面である。4も船底のような形をしており、舳先に当たる部分でも細石刃を剥離しているが、主要な作業面は側面に設定されている。打面は、周囲から剥離を入れて調整している。5は下端に円礫面が残っていることから、円礫を使っていると思われる。この円礫面を打面とする剥離が見られるが、これは石核の調整剥離であろう。細石刃は、細石核の側面を巡るように剥離しているため、細石核は円柱状になっている。打面は1枚の剥離面からなる平坦打面である。6は船底のような形をした石核で、舳先に当たる部分で細石刃を剥離している。打面は、1枚の剥離面からなる平坦打面である。側面に円礫面が残っていることから、円礫を使っていると思われる。

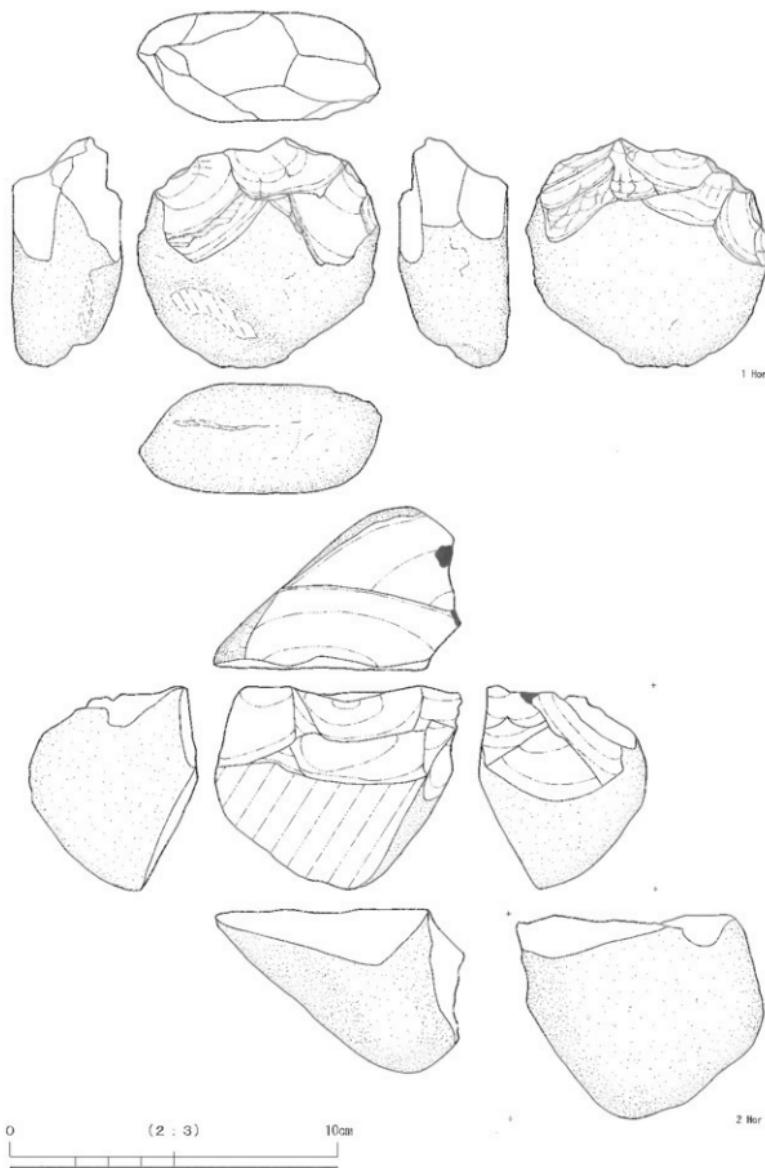
7は、右側面に見られる調整剥離から、船底形の細石核に見えるが、細石刃を剥離した作業面は、左側面にあり、甲板面からではなく、側面から細石刃を剥離している。この作業面は、途中で階段状剥離を起こしており、これ以上の細石刃剥離是不可能になっている。そして、上面に示した大きな剥離面が、この作業面を切っており、さらに、正面に示した剥離面は、上面の剥離面を打面にして剥離されている。また、右側面に見られる調整剥離は、上面の剥離面に切られている。このことから、作業面で階段状剥離を起こし、細石刃剥離が不可能になった細石核を分割して、分割面を打面にした小型の石核として再利用しているものと思われる。

## 細石刃

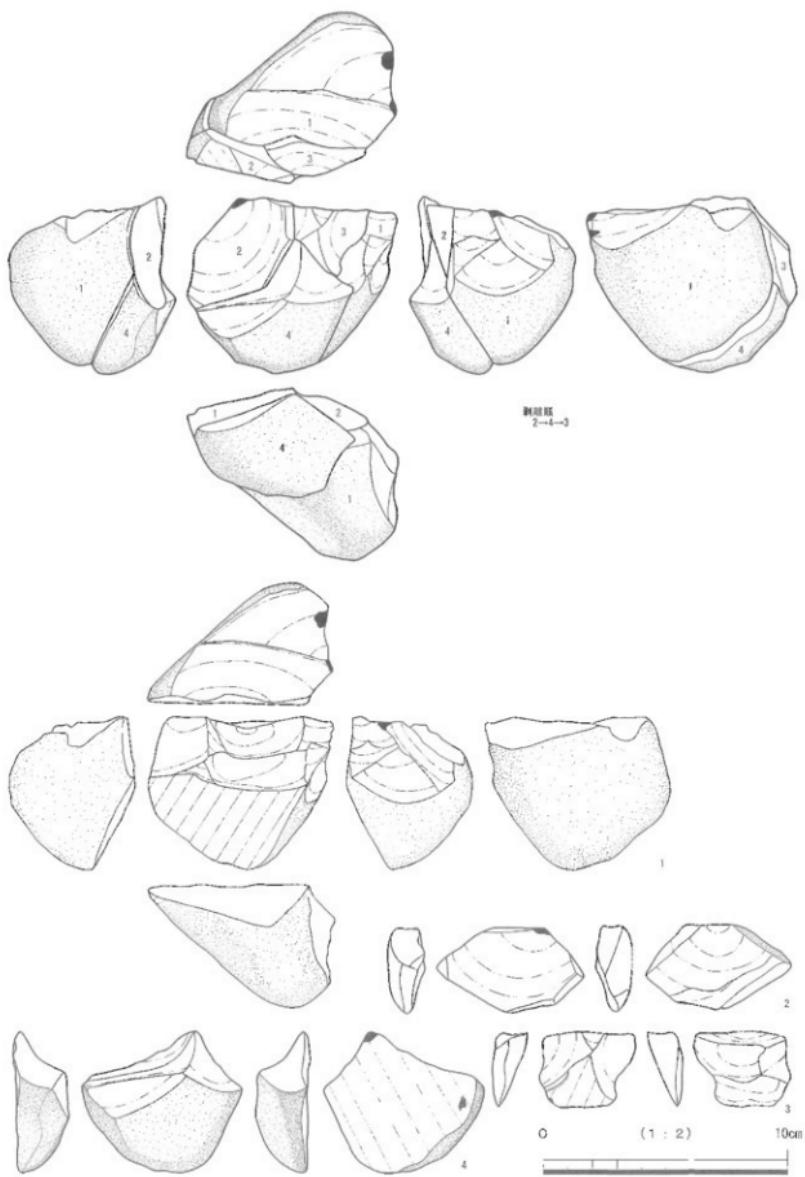
第283図に細石刃を示す。1は中央後線から微細な剥離が見られ稜付きの細石刃である。



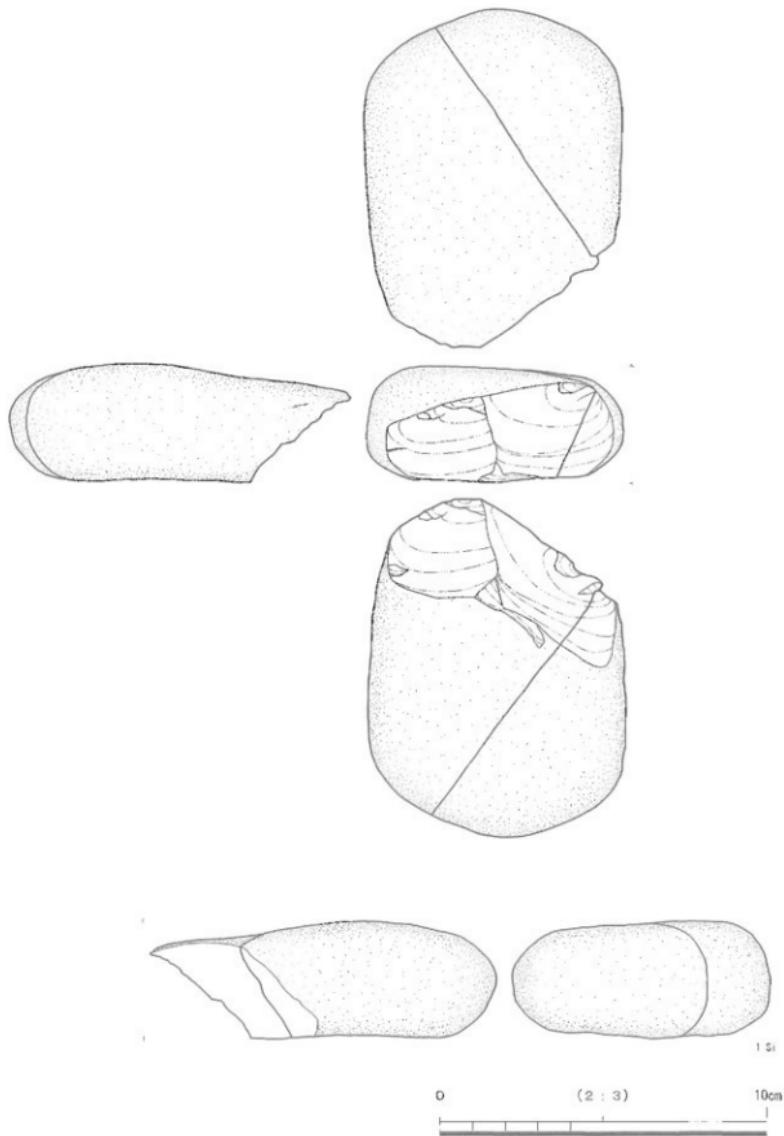
第278図 休場層上層～中層遺構外出土石器 3



第279図 休場層上層～中層遺構外出土石器 4



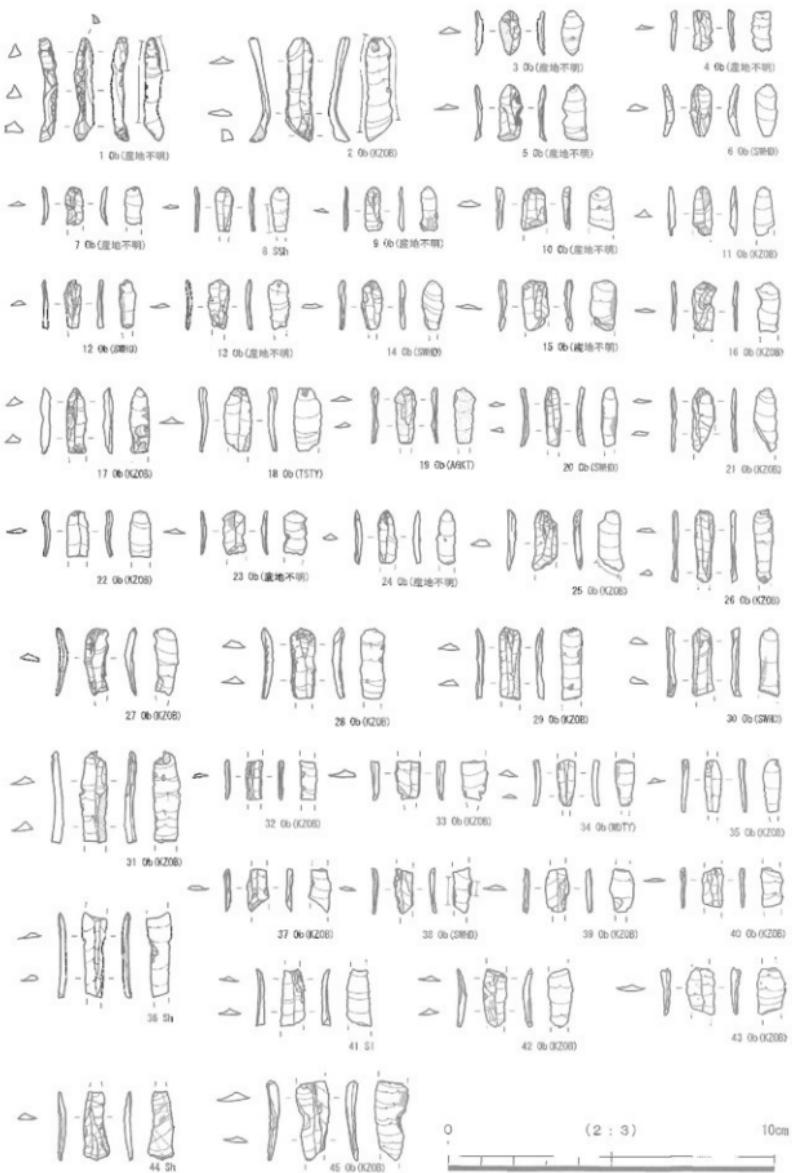
第280図 休場層上層～中層出土接合資料



第281図 休場層上層～中層遺構外出土石器 5



第282図 休場層出土細石核



第283図 休場層出土細石刃

## 第4節 休場層下層～第Ⅰスコリア帯の遺構と遺物

休場層上層～中層に比べると、遺構、遺物の数は減っているが、3区、5区、10区、11区、12区から遺構、遺物が出土している。11区は南北に細長い丘陵で、広い範囲ではないが、特に遺構と遺物が集中している（第284図）。11区では、休場層上層～中層文化層の遺物分布とこの文化層の遺物分布が重なるが、休場層中層と休場層下層の遺物出土レベルに差があることと、休場層下層で出土した礫群の出土レベルが揺っていることから、両文化層の分離は容易であった。

遺物の分布域と調査区の区画が必ずしも対応するものではないが、この節では、3区、5区、10区、11区、12区をそれぞれ遺物の分布域として報告する。

### （1）3区遺物分布域

3区で、休場層下層～第Ⅰスコリア帯を調査した範囲は狭く、礫群を1基検出しただけである。

#### 礫群10

確認調査で検出した遺構で、場所は3区の中である（第285図）。105点の礫からなり、そのうち95点の礫が割れており、92点の礫は割れ面も赤化している。礫群10に伴って第286図-1の石核が出土している。分割した円礫を使っており、平坦打面から実測図の正面を作業面にして、不定形の剥片を剥離している。階段状剥離が著しく、この面での、これ以上の剥片剥離は無理であろう。

この石核には、剥片が4点接合しているため、接合状態を第287図に示す。2と3の剥片は、作業面調整と思われる。5を剥離した時の作業面は、1の石核よりも5mm程度低くなっている。

### （2）10区遺物分布域

丘陵に当たっており、南西に向かう緩斜面になっている（第288図）。遺物の分布はまばらだが、礫群3基とブロックを1基検出している。

#### 礫群11

調査区の北端で検出した遺構で、13点の礫からなる（第289図上段）。平均重量が52.23gと軽いのが特徴である。13点中、11点が割れた上に割れ面が赤化している。第286図-2と3の尖頭器が伴っている。2は両面加工で、左右非対称形である。3も両面加工で風化が進んでいる。

#### 礫群12

14点の礫がまとまって出土している（第289図下段）。礫の分布から見ると2つの礫群に分けられそうだが、近接しているため、1つの礫群として扱った。ホルンフェルス製の剥片が1点伴っている。

#### 礫群13、ブロック10

礫と石器のまとまりが同時に出土したもので、礫群とブロックに分けた（第290図）。礫群は、礫が散在しており、すべての礫が赤化している。

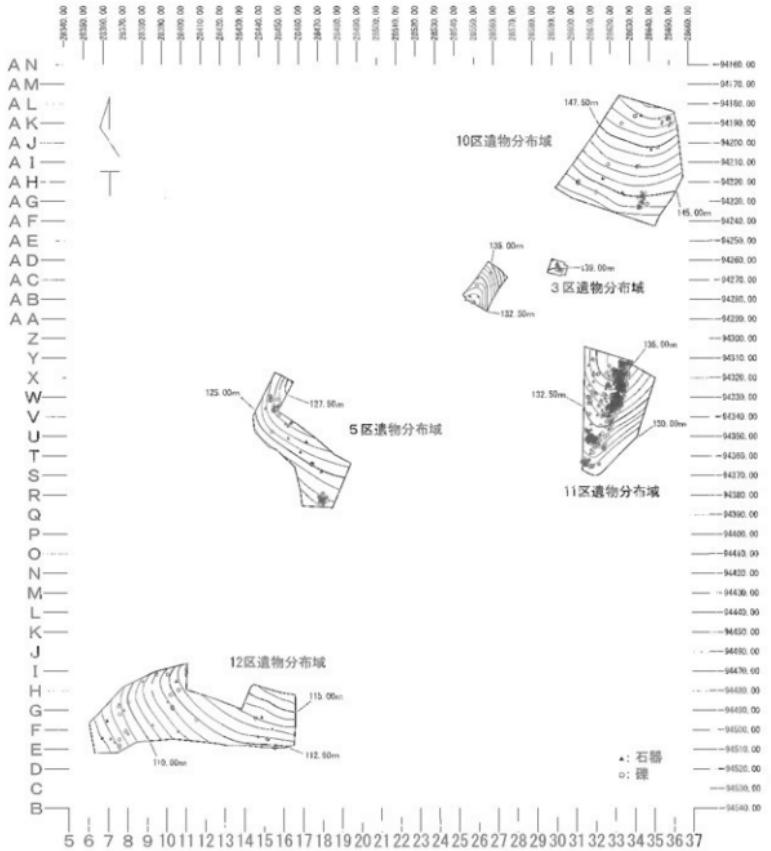
ブロック10は30点の石器からなり、ガラス質黒色安山岩とシルト岩の剥片を1点ずつ含む以外はホルンフェルス製の剥片、碎片である（第290図）。一部の石器は休場層中層まで浮き上がっている。完成品としての石器はない。ホルンフェルス製石器で接合例が見られるところから、ここで剥片剥離を行ったと思われるが、石核は搬出されたようで、共伴していない。

### （3）11区遺物分布域

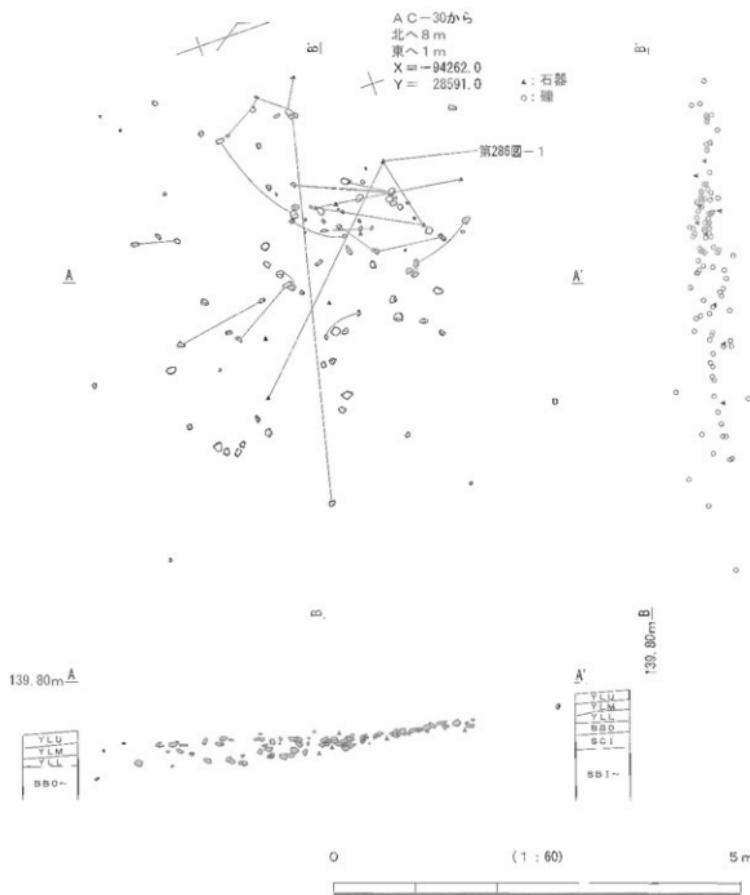
休場層下層～第Ⅰスコリア帯の遺物が最も集中する調査区である（第291図）。南に面し、南北に細長い丘陵に当たっている。遺物は丘陵の頂部で、南北方向に分布している。

#### 礫群14

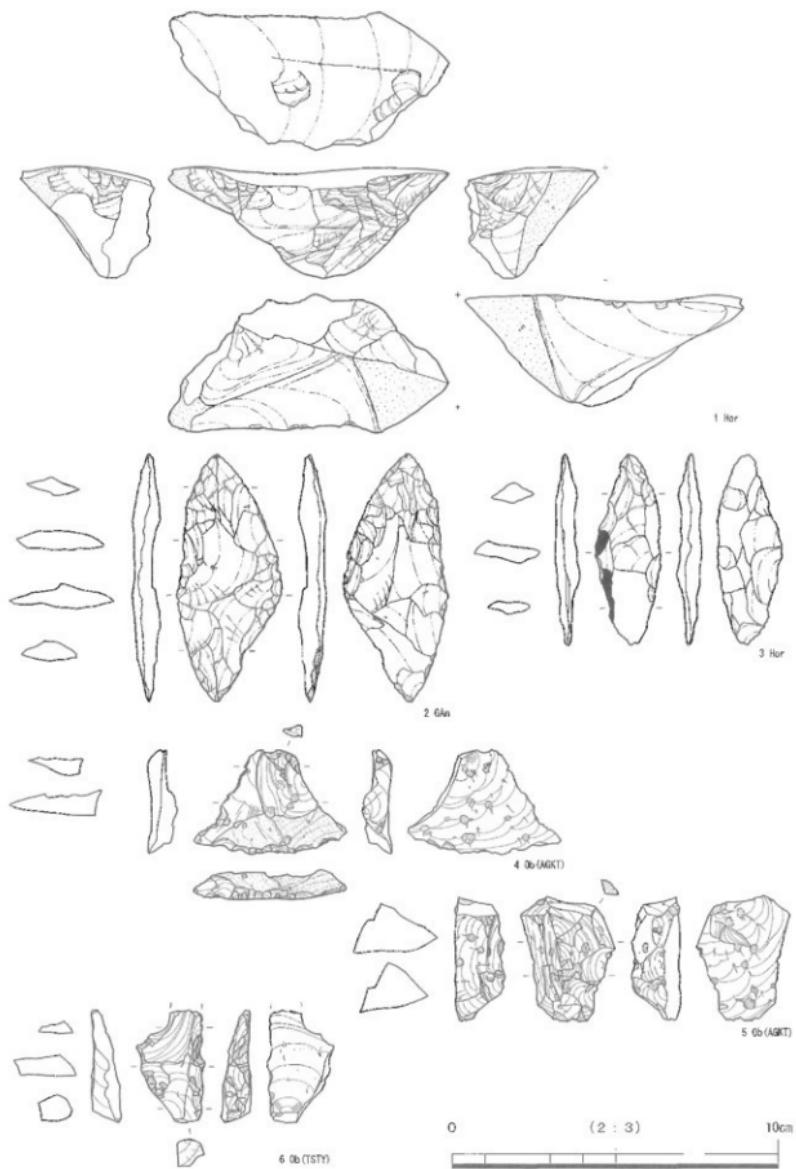
51点の礫がややまとめて出土した（第292図）。42点の礫が割れた上に割れ面が赤化している。礫群の中で接合する例があり、10m離れた礫群17の礫とも接合する。



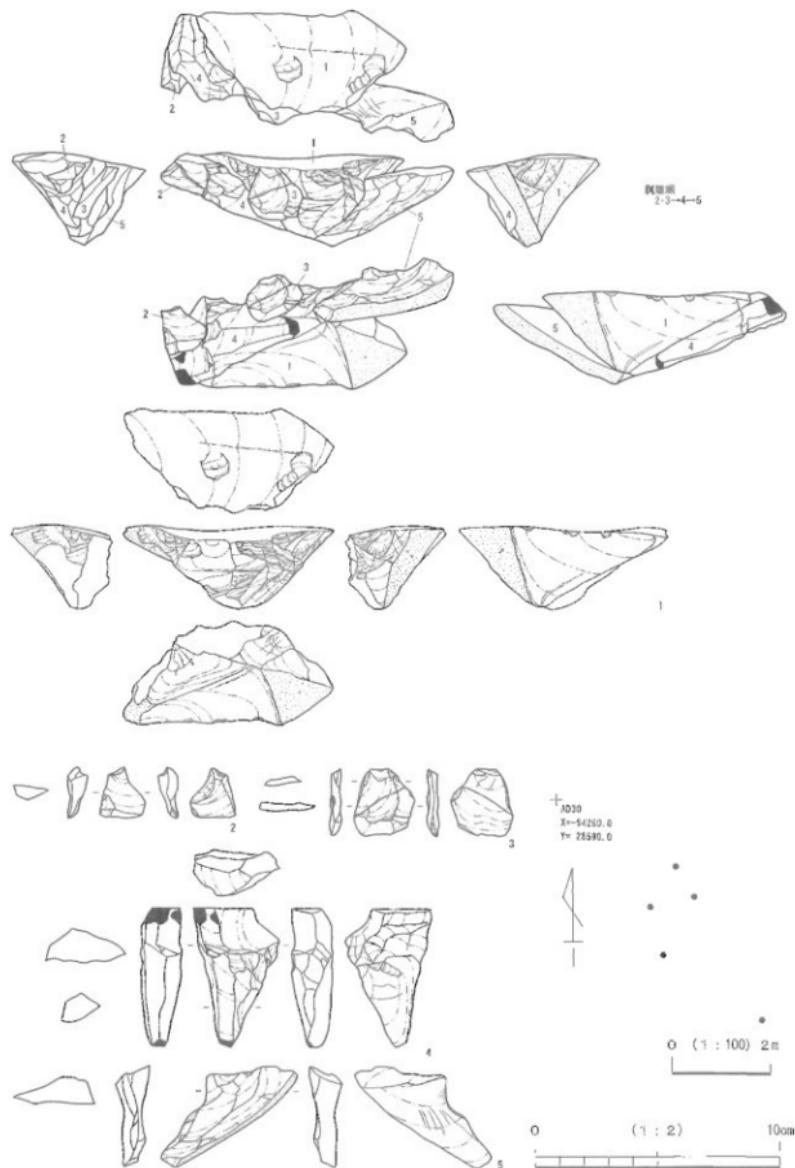
第284図 休場層下層～第1スコリア帯遺物分布図



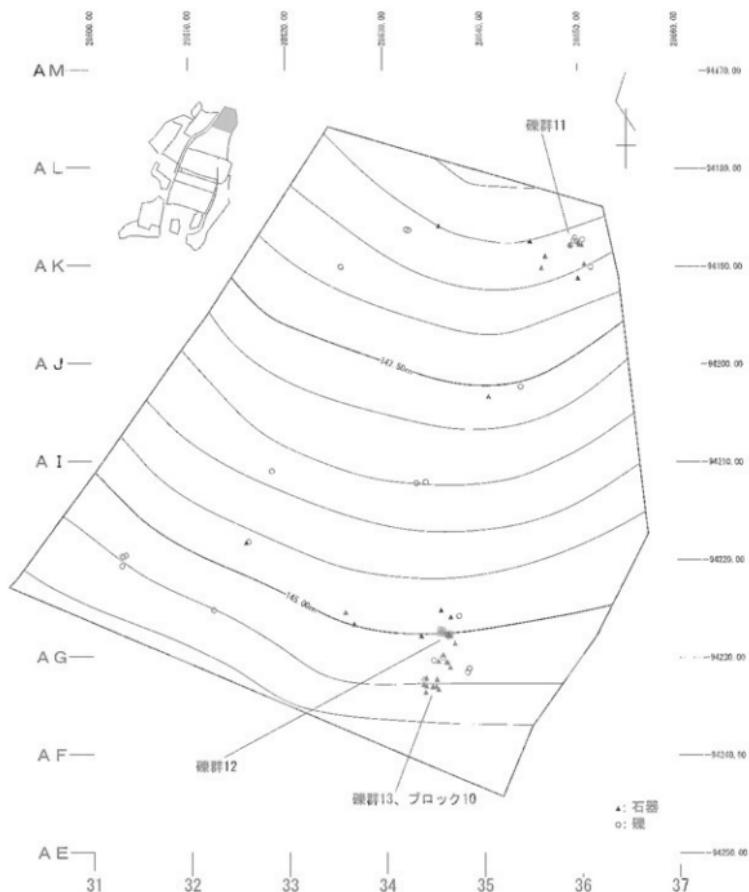
第285図 磷群10実測図



第286図 休場層下層～第1スコリア帶遺構内出土石器



第287図 休場層下層～第Ⅰスコリア帶出土接合資料 1

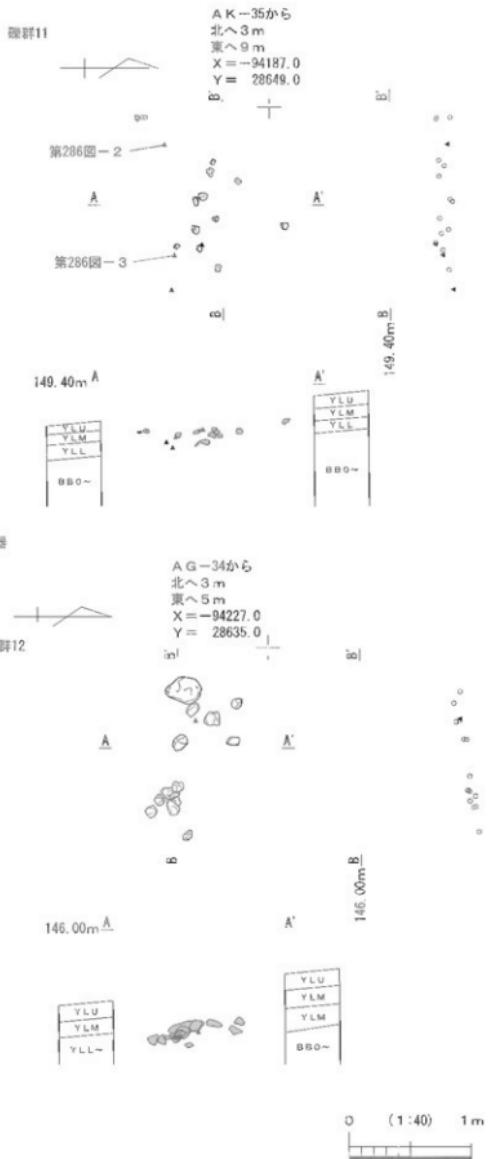


等高線は第〇黑色帶上面

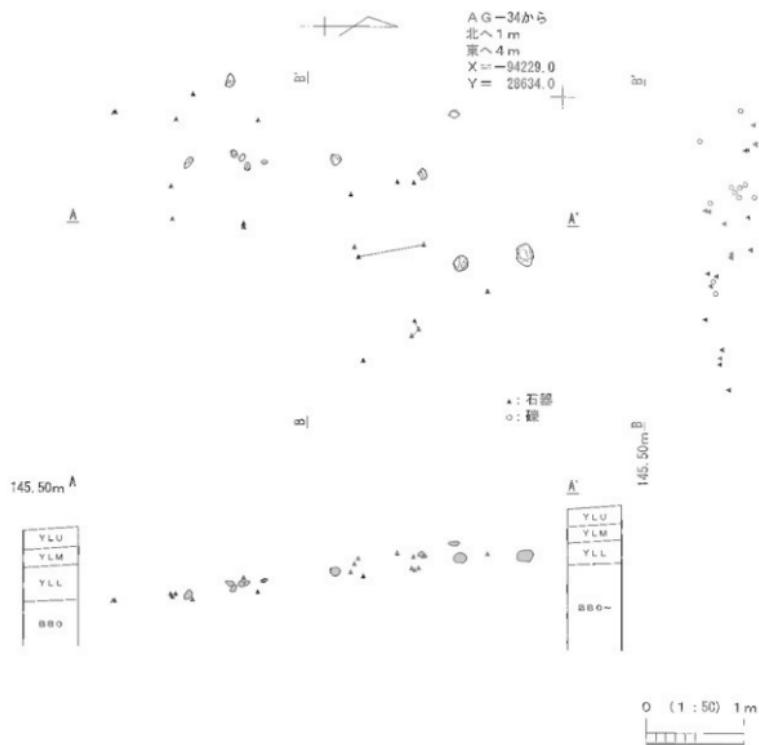
0 (1 : 500) 10m



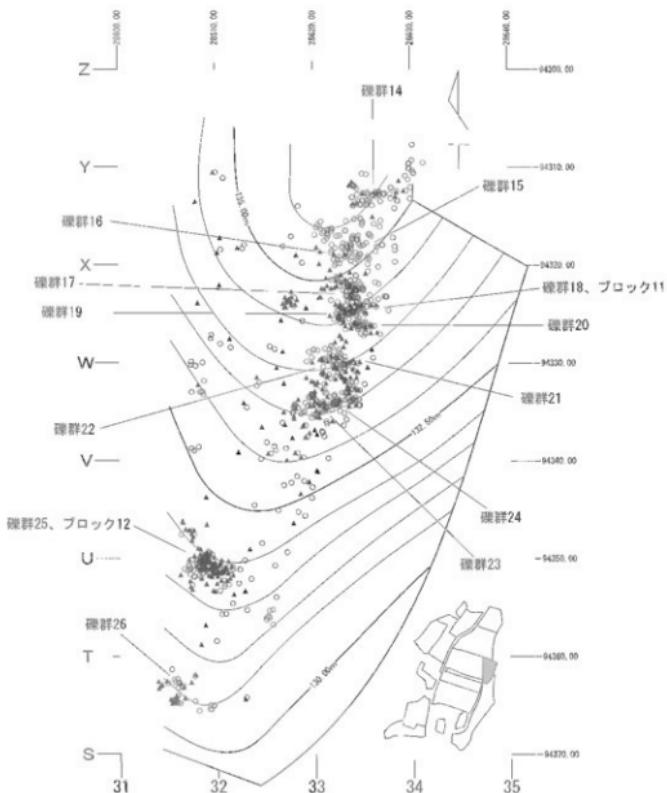
第288図 10区休場層下層～第1スコリア帯遺物分布図



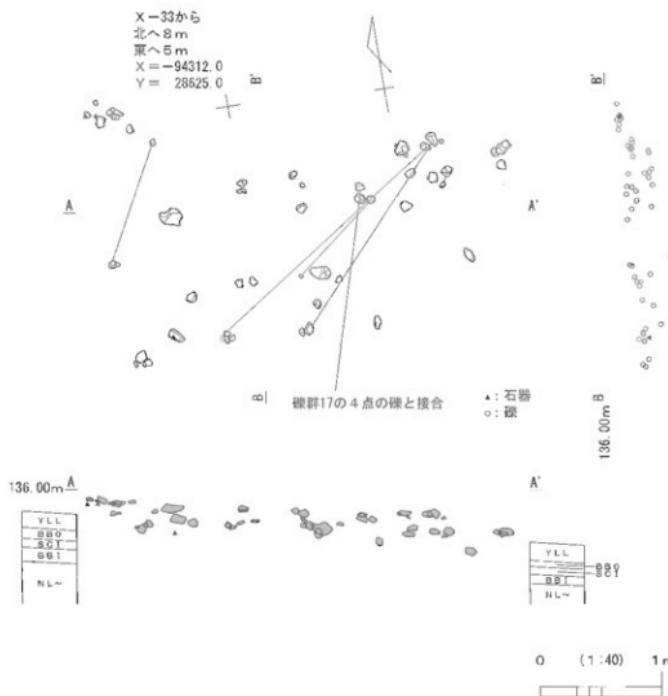
第289図 磬群11、12実測図



第290図 踏群13、ブロック10実測図



第291図 11区休場層下層～第1スコリア帯遺構、遺物分布図



第292図 砂群14実測図

### 砾群15

40点の砾が散在している（第293図上段）。37点の砾が割れており、そのうち35点の砾は割れ面も赤化している。

### 砾群16

41点の砾からなる（第293図下段）。41点の砾からなり、39点の砾は割れており、そのうち31点は割れ面も赤化している。

### 砾群17

46点の砾が集中して出土した（第294図）。37点の砾が割れた上に赤化しており、そのうち35点は割れ面も赤化している。遺構内で砾が接合するほか、10mの距離を隔てて砾群14の砾とも接合する。

### 砾群18、ブロック11

砾と石器が共存して出土したもので、砾を砾群、石器をブロックとした（第295図上段）。砾も石器も、面を揃えて出土している。砾は107点の砾が散在する状態で出土した。93点の砾が割れた上に赤化しており、そのうち90点は割れ面も赤化している。遺構内で砾が接合する以外に、隣接する砾群20と接合する例がある。

ブロックは9点の石器からなり、ホルンフェルス製の石核2点と剥片7点である。接合例は一例しかないが、ここで剥片剥離を行ったと思われる。第296図-1は円砾を使った石核で、平坦打面から不定形の剥片を剥離している。実測図の正面以外に、裏面も作業面になっており、この面でも不定形の剥片を剥離している。

2は円砾を使った石核で、砾面を除去した剥片が1点接合している。この剥片は分厚く、大きな階段状剥離を起こしており、最初の剥離にして作業面に大きな損傷を与えている。その後も不定形の剥片を剥離しているが、やはり、階段状剥離を起こした剥離面があり、作業面を再生しない限り、これ以上の剥片剥離は無理になった状態で放棄されている。

これに剥片が3点接合しているため、接合状態を第297図に示す。接合した剥片は、いずれも打面を作り出した剥片で、石核の高さを1/3近く減じている。

### 砾群19

11点の砾がまとまって出土した（第295図下段）。すべての砾が割れているが、そのうち6点の砾は割れ面が赤化していない。割れ面が赤化していない砾の割合が高い砾群である。

### 砾群20

41点の砾が集中して出土した（第298図）。31点の砾が割れた上に赤化しており、そのうち23点は割れ面も赤化している。7m程の距離を経て、砾群18の砾と接合する例がある。

### 砾群21

15点の砾からなる（第299図上段）。10点の砾は割れた上に割れ面も赤化している。

### 砾群22

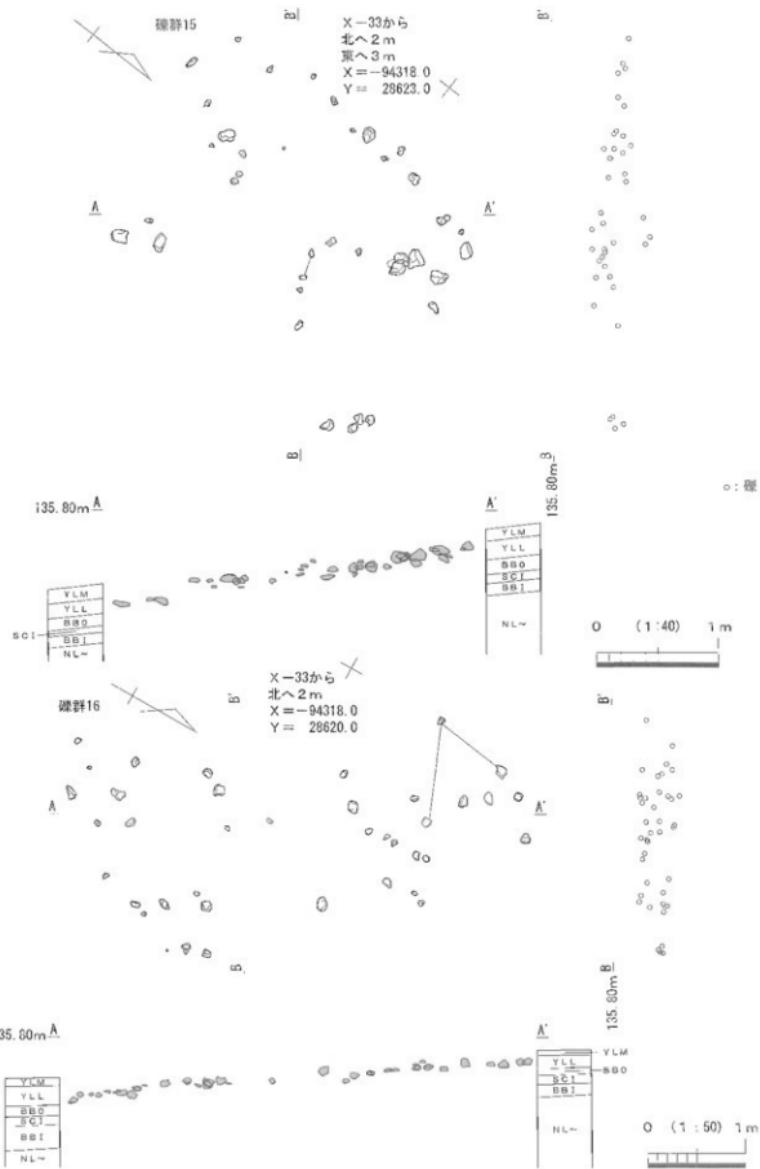
6点の砾からなる小規模な砾群である（第299図下段）。このうち2つは接合するため、5点になり、砾群としては最小規模である。

### 砾群23

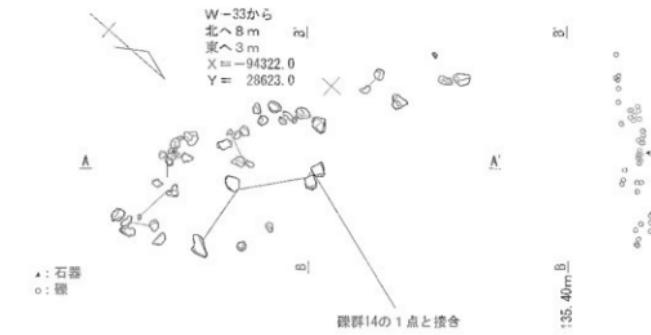
34点の砾からなる（第300図上段）。砾の分布から見ると、いくつかの砾群に分かれそうだが、近接しているため、1つの砾群とした。25点の砾は割れた上に割れ面も赤化している。

### 砾群24

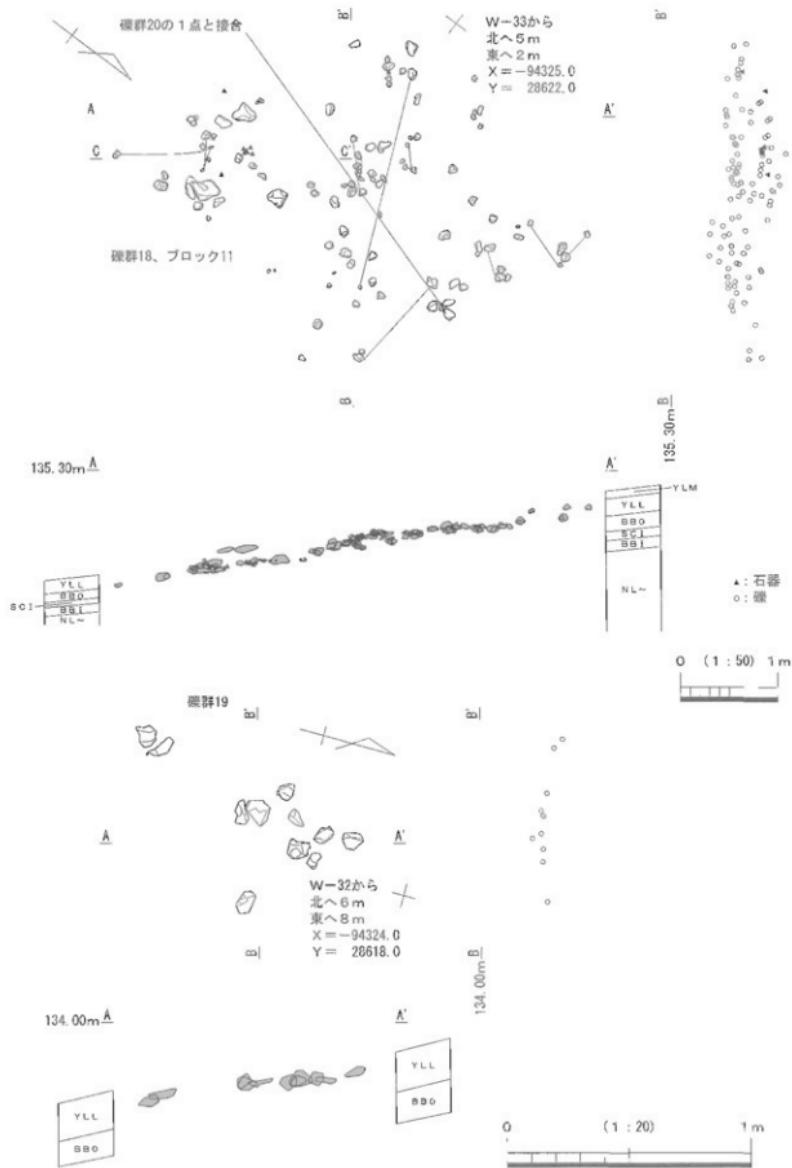
24点の砾がまとまって出土した（第300図下段）。23点の砾が割れた上に赤化しており、そのうち22点は割れ面も赤化している。



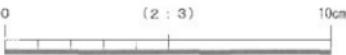
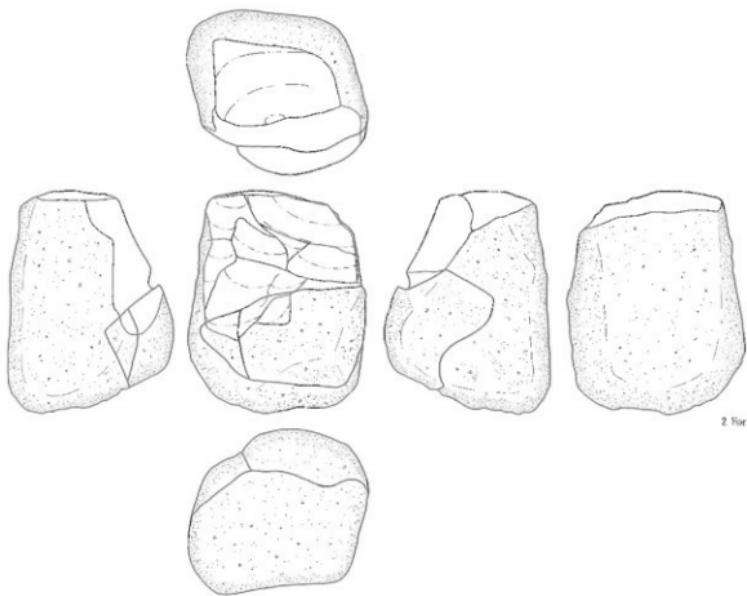
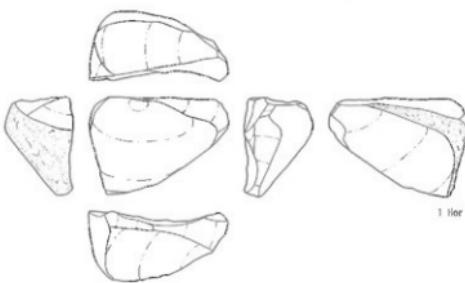
第293図 碳群15、16実測図



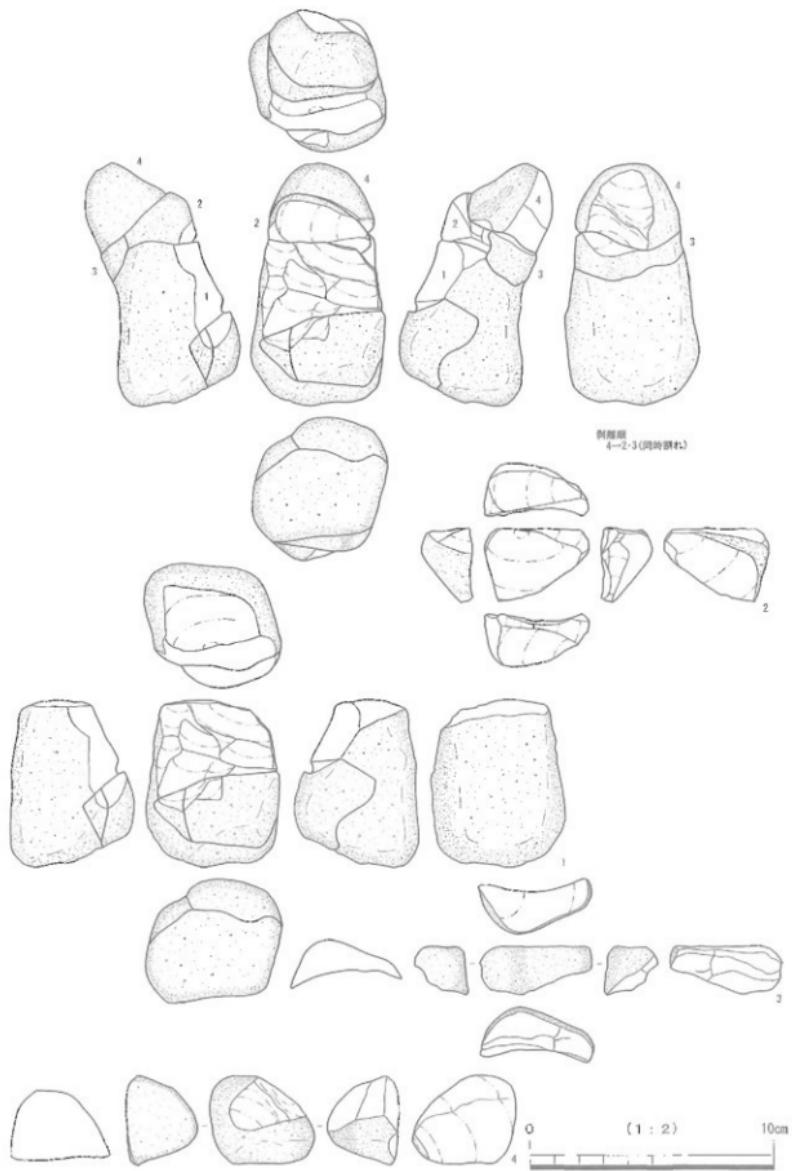
第294図 縄群17実測図



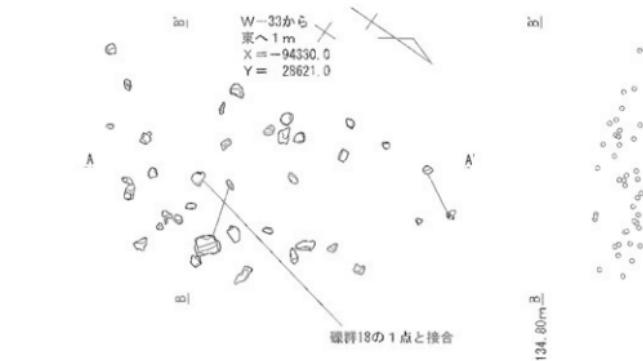
第295図 砾群18・19、ブロック11実測図



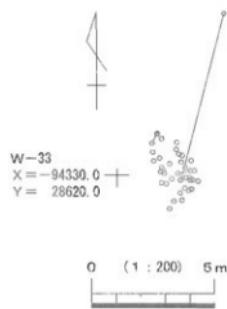
第296図 ブロック11出土石器



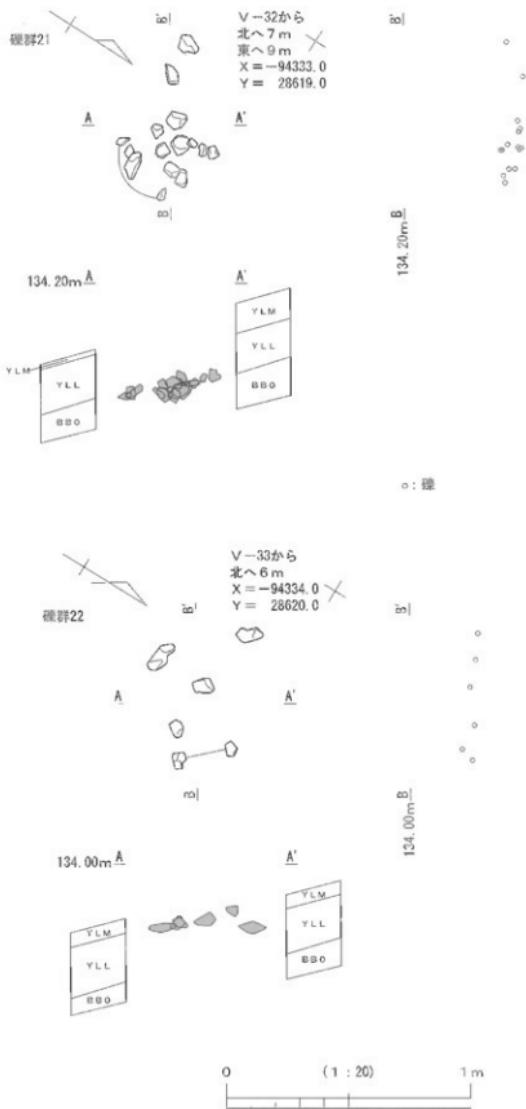
第297図 ブロック11出土接合資料



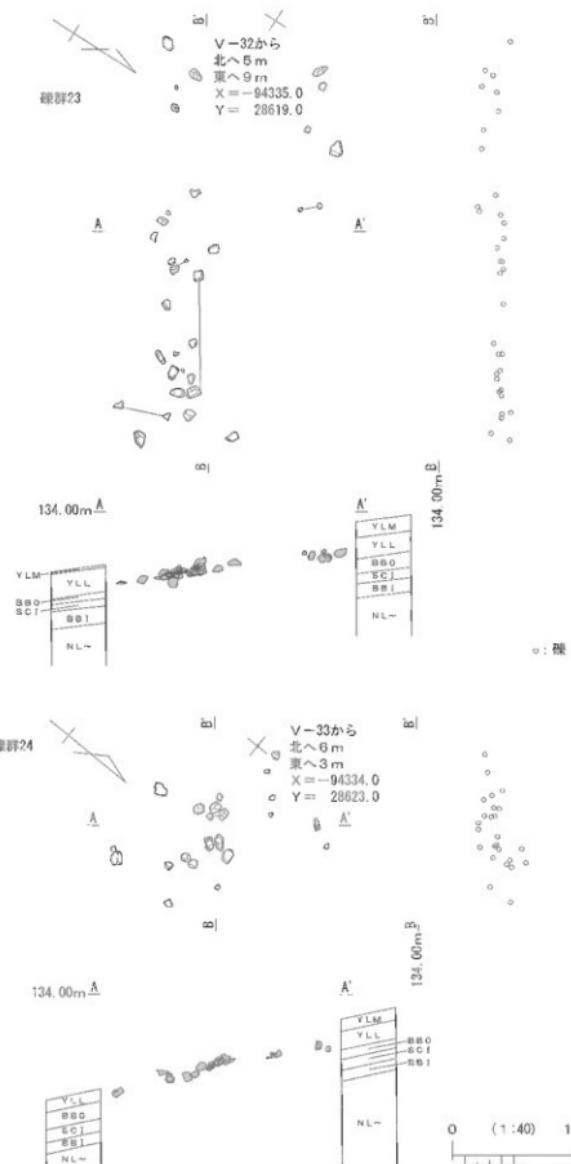
遠距離接合図



第298図 碓群20実測図



第299図 碟群21、22実測図



第300図 破群23、24実測図

### 礫群25

73点の礫がまとまって出土している（第301図上段）。63点の礫は割れ面も赤化している。礫群内の接合例と、近距離ではあるが、周辺の遺構外の礫とも接合するものがある。

### 礫群26

10点の礫が固まって出土している。すべての礫が割れた上に赤化しており、割れた面も赤化している（第301図下段）。扁平な礫が面をそろえた状態で出土している。

### ブロック12

75点の石器がまとまって出土した（第302図）。ホルンフェルスと黒曜石が、ほぼ半分ずつである。器種は、黒曜石のスクレイパーと微細な剥離のある剥片がある以外は、剥片と碎片である。

第286図-4はスクレイパーで、剥片の末端を加工している。5は、分厚い剥片の側縁に大きな剥離を入れて加工している。稜付き剥片を使っていると思われる。

### （4）5区遺物分布域

地形は丘陵に当たっており、南に面する緩斜面になっている（第303図）。遺物の分布はまだらだが、調査区の南端に遺物が集中する場所がある。

### 礫群27

13点の礫からなる小規模な礫群である（第304図上段）。すべての礫が赤化しており、12点の礫は割れた上に割れ面も赤化している。

### 礫群28、ブロック13

礫と石器が共伴したもので、礫を礫群、石器をブロックにした（第304図下段）。礫群は、18点の礫が散在して出土している。うち13点は割れ面も赤化している。

ブロック13は、11点の石器からなる小規模なブロックである。ナイフ形石器が1点ある以外は剥片と碎片である。接合例はないが、若干の剥片剥離をやっていると思われる。第286図-6はナイフ形石器で、縱長剥片を使い、基部に打面を残している。平面的な形は二側縁加工のナイフ形石器に見える。右側縁は加工しており、二側縁加工のナイフ形石器とすると、左側縁の下半も加工する部分に当たるが、ここは剥片の折れ面が残っている。この折れ面と裏面の角度が直角に近い角度で、ナイフ形石器を加工した時の角度とだいたい一致するため、加工せずに済ませたのであろう。

### （5）12区遺物分布域

丘陵に当たっており、南西に向かう緩斜面である（第305図上段）。遺物の分布は少ないが、礫群を1基検出している。

### 礫群29

7点の礫からなる小さな礫群である（第305図下段）。2点が完形で赤化している。残りの5点は赤化して割れていって、割れ面も赤化している。

### （6）遺構外出土遺物

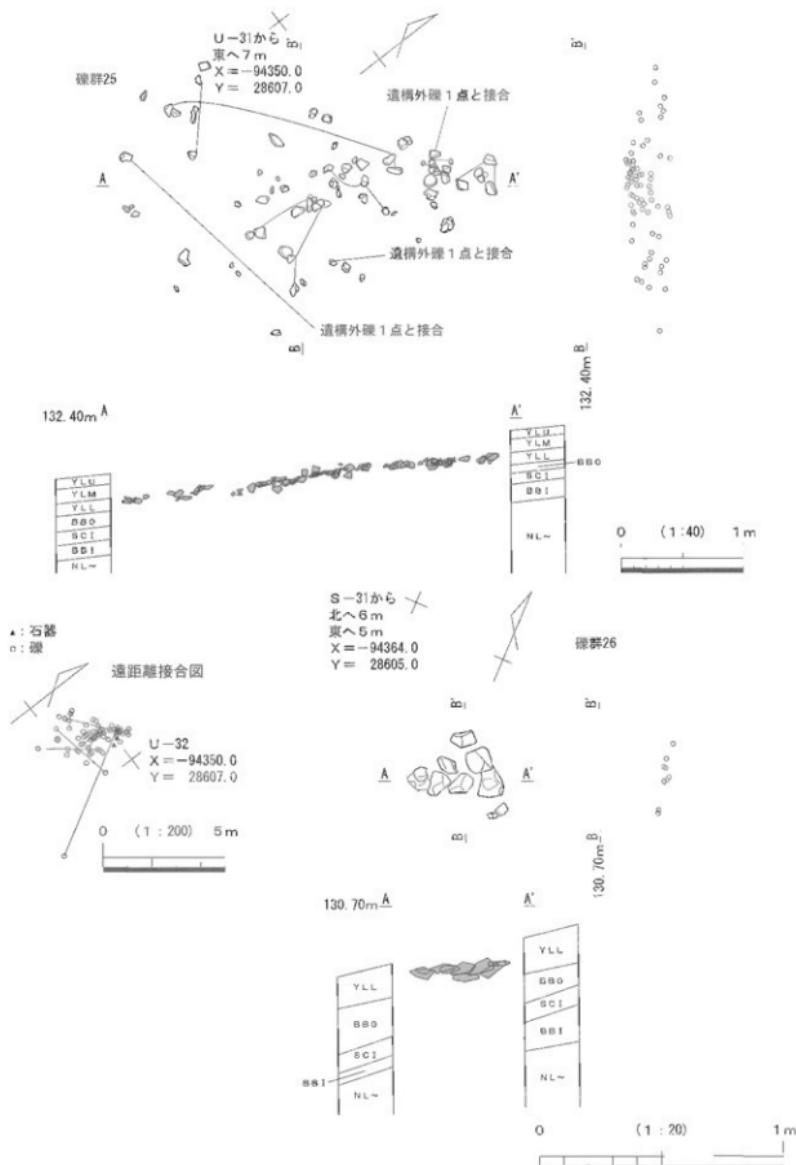
#### 10区遺構外出土遺物

##### 黒曜石の原石

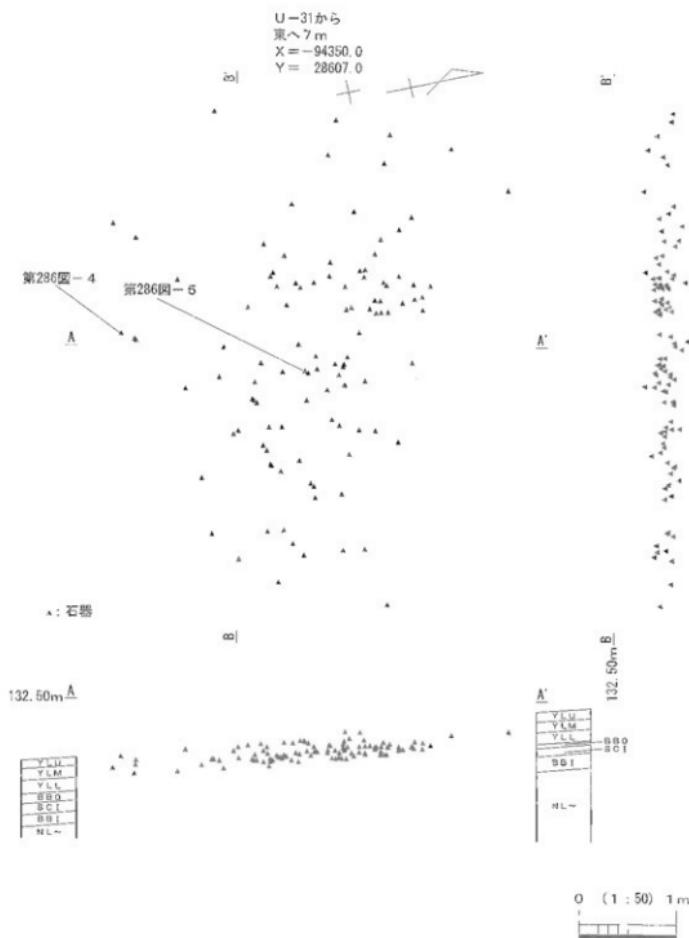
第306図-1は長野県産黒曜石の原石である。黒曜石の搬入形態を知る上で貴重な資料である。

##### ナイフ形石器

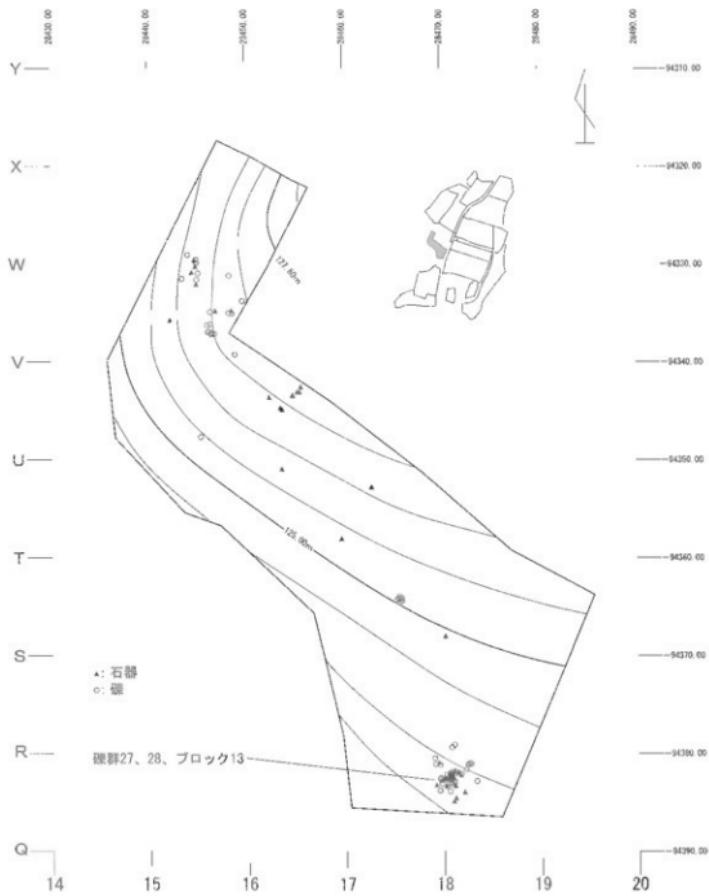
第306図-2は横長の剥片を使った二側縁加工で、左側縁は、素材剥片の末端を加工しており、右側縁は、素材剥片の打面を除去している。打面部分に厚みのある剥片のため、加工による剥離は、細長い剥離が連続して入っており、最も厚みのある部分では、表面からの剥離も見られる。厚みがあるだけに、加工と言うよりも、剥片剥離に近い印象を受ける。基部には折れ面が残っている。



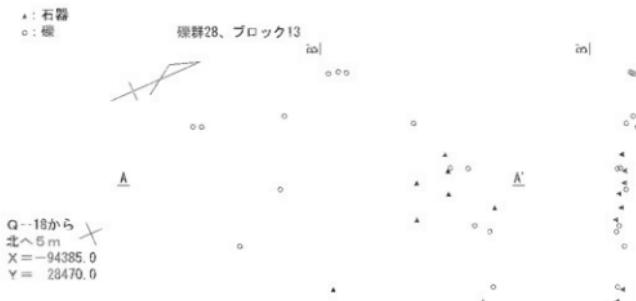
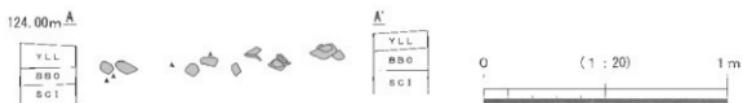
第301図 碓群25、26実測図



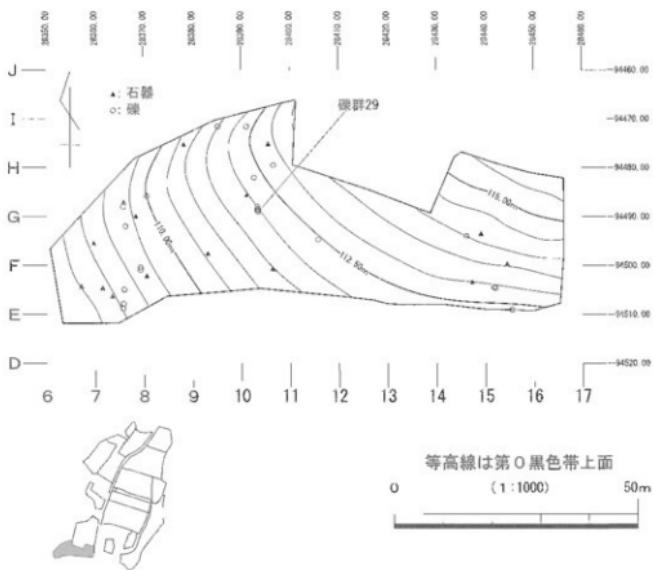
第302図 ブロック12遺物分布図



第303図 5区休場層下層～第Ⅰスコリア帶遺構、遺物分布図



第304図 砾群27・28、ブロック13実測図



G-10から  
北へ1m  
東へ3m  
 $X = -94449.0$   
 $Y = 28393.0$

砾群29

A



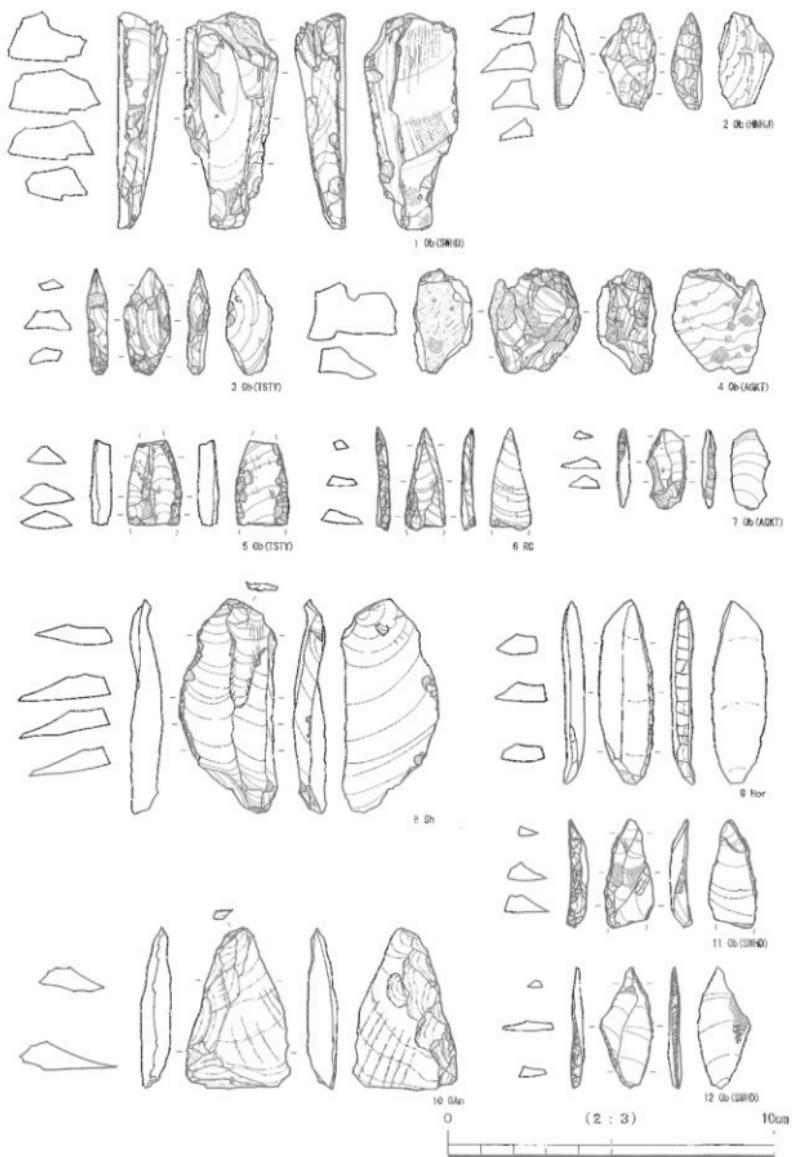
A'

112.30m A



0 (1:20) 1m

第305図 12区休場層下層～第1スコリア帯遺構・遺物分布図、砾群29実測図



第306図 休場層下層～第Ⅰスコリア帶遺構外出土石器 1

## 5区遺構外出土石器

### ナイフ形石器

第306図－3は横長剥片を使っている。左側縁の加工は、素材剥片の末端を2mm程度除去している。この加工は基部にも回り込み、基部を丸く仕上げている。右側縁の加工は、素材剥片の打面を除去しており、1枚の大きな剥離を入れて打面を折り取るように除去した後、縁辺に細かい剥離を入れて形を整えている状況がうかがえる。また、右側縁の下半分は、素材剥片の縁辺に当たっており、この部分は未加工のまま残してある。

### スクリエイバー

第306図－4は分厚い剥片の縁辺を加工している。剥片に厚みがあるだけに、裏面からの剥離角度も90度近くになっている部分もある。

## 12区遺構外出土石器

### 尖頭器

第306図－5は、縦長剥片の周縁に平坦剥離を入れているが、加工は縁辺付近にとどまる。

### ナイフ形石器

第306図－6は透明な水晶製で、左側縁を細かく加工してある。7は、左側縁には内湾する未加工部分があり、先端からの加工は、この内湾部分で止まっている。突出部分があれば、除去できるが、内湾部分は加工できないため、未加工で残したのであろう。9は風化が進んでいる。

### スクリエイバー

第306図－8は、幅の広い剥片の左側縁を加工している。

### 石核

第307図－1は円礫を使っている。上面の平坦面が打面で、自然面を打面にしている部分と剥離を入れて打面を作った部分がある。作業面は実測図正面で、不定形の剥片を剥離している。

## 3区遺構外出土石器

### 尖頭器

第306図－10は両面加工尖頭器の未完成品である。先端には素材剥片の打面が除去されずに残っている。加工は、左側縁から両面に平坦剥離を入れている。器体の途中で折れたため、製作をやめたのであろう。

### ナイフ形石器

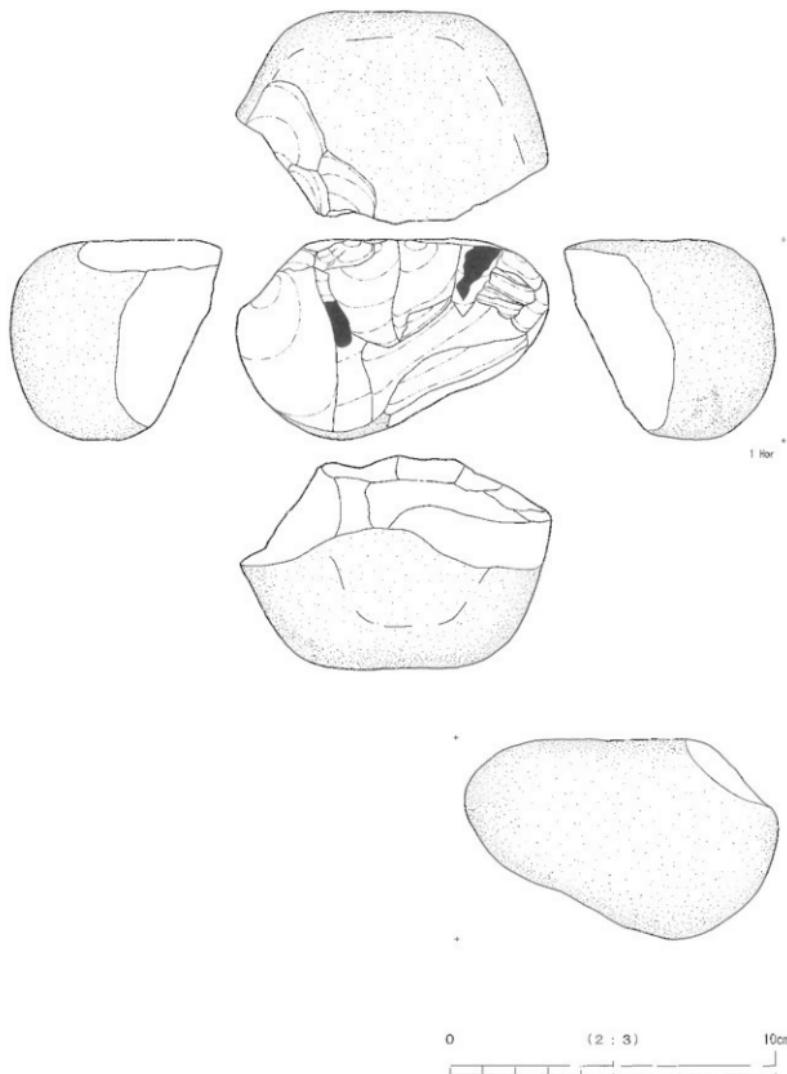
第306図－11は、縦長剥片を使った二側縁加工であるが、右側縁に見られる加工は、微細な剥離である。12は、縦長剥片を使った二側縁加工である。両側縁の加工とも、素材剥片の打面と打面からなる縁辺を除去している。右側縁の加工は、素材剥片が薄いこともあって、剥離が細かい。両側縁の加工が基部で交わることで、基部が尖るように仕上がっている。

## 11区遺構外出土石器

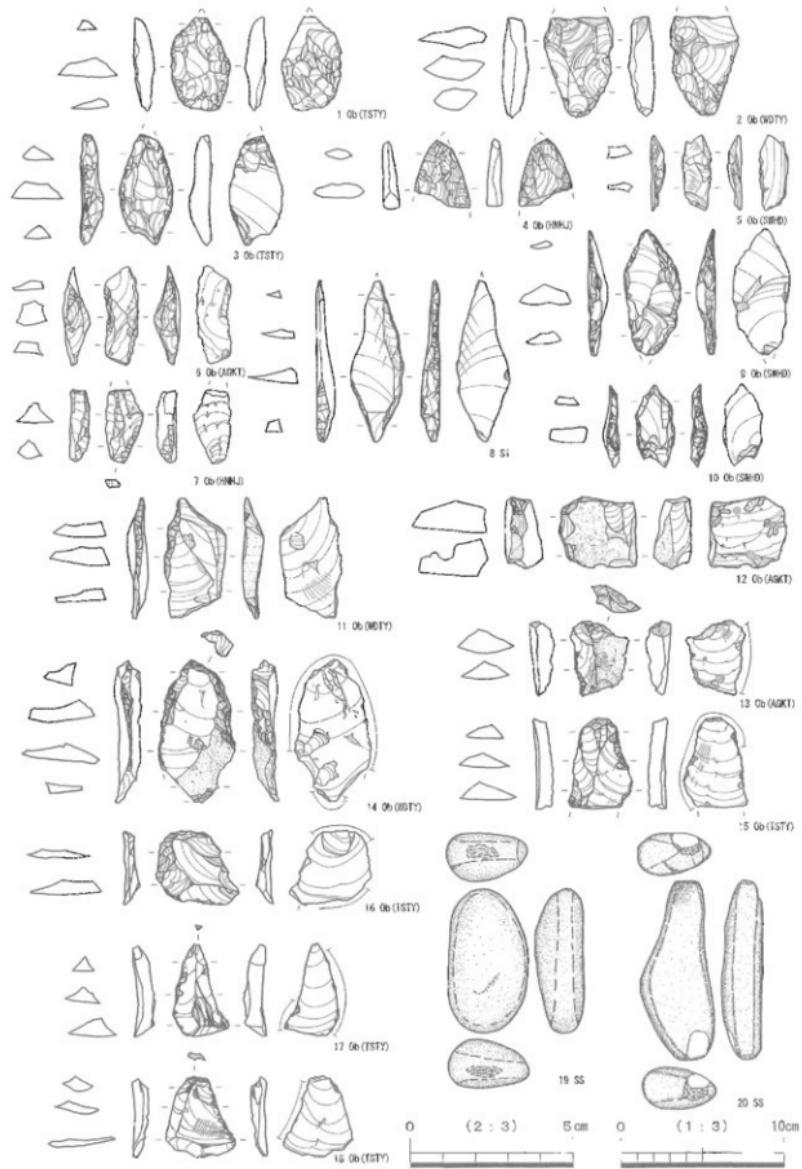
### 尖頭器

第308図－1は両面加工で、裏面に素材になった剥片の主剥離面が残っている。裏面には、器体中央まで及ぶ平坦剥離が執拗に入っているが、素材剥片の打瘤を除去したのであろう。

2は両面加工尖頭器の基部である。正面は左側縁から加工した後に、右側縁から加工してある。したがって、左側縁下部に残っている未加工部分は、最初から加工せずに残していることになる。すると、実測図で基部にした側が先端になり、素材剥片の縁辺を残した尖頭器になることも考えられるが、基部とした部分には、小さな剥離が入っており、尖らすのではなく丸く加工する意図がうかがえることから、やはり図示した通り、こちらが基部である。裏面は、右側縁から加工した後、左側縁から加工している。



第307図 休場層下層～第Ⅰスコリア帯遺構外出土石器2



第308図 休場層下層～第1スコリア帯遺構出土石器3 (1～18: 2/3, 19・20: 1/3)

3は、剥片を使用した両面加工の尖頭器で、裏面には素材になった剥片の主剥離面が大きく残っている。左側縁の加工は角度の高い剥離が入っている。右側縁の加工は平坦剥離で、剥離は器体中央付近まで及んでいる。先端は折れているが、裏面に、この折れ面を打面にした剥離が入っていることから、再加工をしていると思われる。基部に尖った部分が見られるが、この部分は両面から小さな剥離を入れて尖らせるように加工をしていることから、尖頭器の先端が折れた後、石錐に再加工していると思われる。

4は両面加工の尖頭器で、正面は、右側縁から加工した後、左側縁から加工している。裏面は右側縁から加工した後、左側縁から加工している。のことから錯交剥離によって加工していることがわかる。

9は当初、ナイフ形石器に分類していたが、左側縁の中央の未加工部分以外には、すべて微細な剥離が入っている。同じような大きさと角度の剥離が連続していることから、加工の可能性が高いと判断し、周縁加工の尖頭器に分類した。

#### ナイフ形石器

第308図-5は、横長剥片を使った一側縁加工で、右側縁には素材剥片の打面を折り取った面がそのまま残っている。6も横長剥片を使っている。左側縁の加工で素材剥片の打面を除去し、右側縁の加工で、素材剥片の末端を加工している。基部には自然面が残っている。7は、縦長剥片を使った一側縁加工で、基部に素材剥片の打面が残っている。加工は右側縁の基部付近に見られる。8は、縦長剥片を使った二側縁加工で、右側縁の加工は、中央から先端寄りが細かく、中央よりも基部寄りが粗くなっている。一部では表面からの剥離も見られる。このことから右側縁では、側縁中央を挟んで先端寄りと基部寄りで加工の方法が異なっていたことになる。右側縁に見られる屈曲部はその境界である。左側縁の加工は剥片の縁辺を直線的に切断するように加工している。右側縁の基部側の加工も、剥片の縁辺を直線的に切断するように加工しているため、この両側縁が交わる基部は尖るように仕上がっていている。

#### 石錐

第308図-10は、剥片の側縁に急角度の剥離を入れている。周縁加工の尖頭器にも見えるが、先端を細く作り出していることから、石錐と判断した。

#### スクレイパー

第308図-11は縦長剥片の左側縁に40度程の角度で連続した剥離を入れている。12も剥片の左側縁を加工している。

#### 微細な剥離のある剥片

第308図-13～18は剥片の縁辺に微細な剥離が見られる。13～15には、加工と思われる剥離もある。

#### 敲打痕のある礫

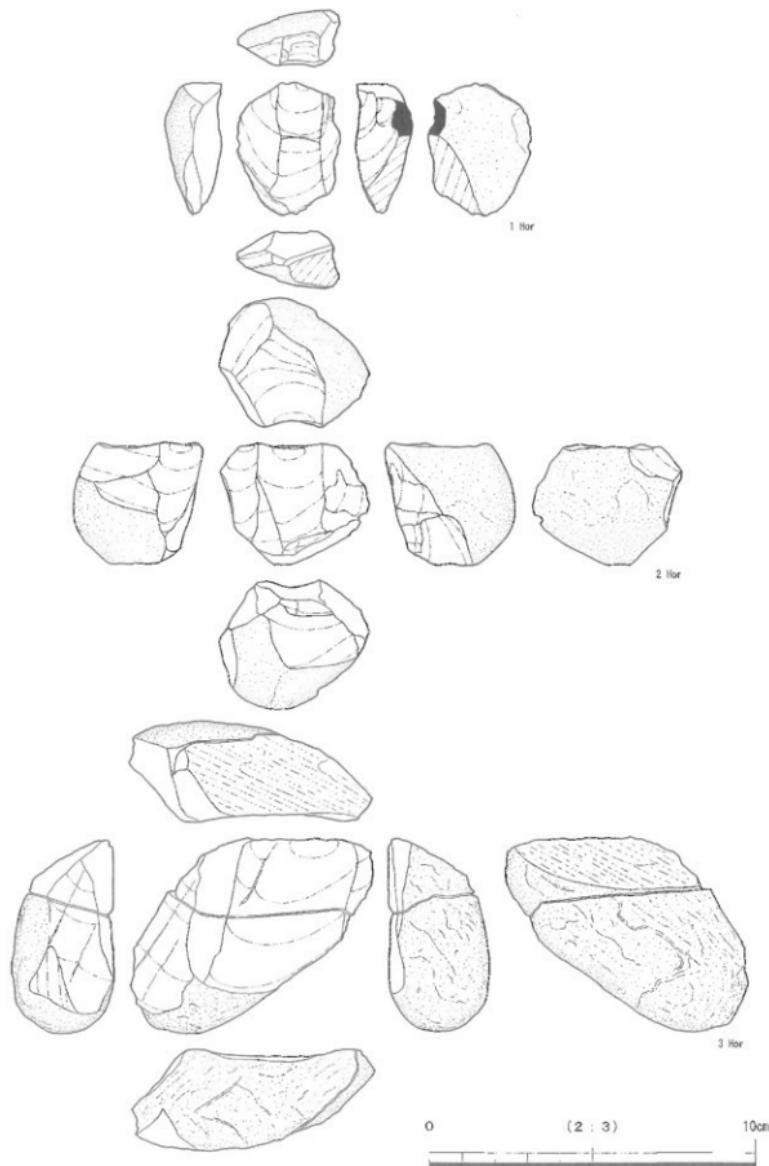
第308図-19と20は円礫の両端に敲打痕がある。

#### 石核

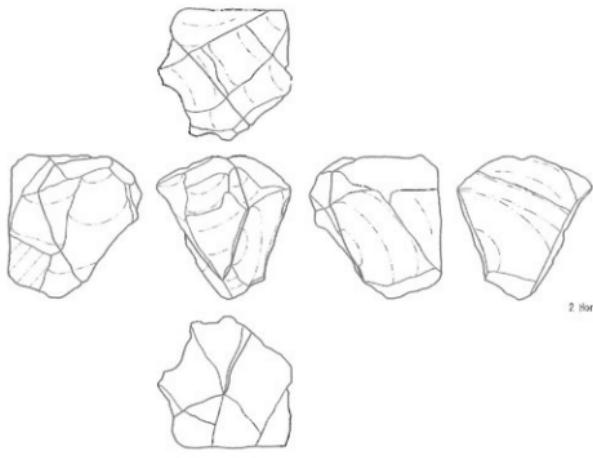
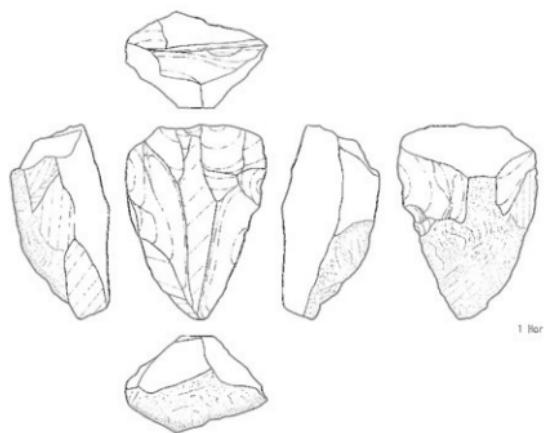
第309図-1は円礫を使った石核である。上面が打面である。円礫の一端を断ち切るように剥離を入れて打面を作っている。正面が作業面で、縦長の剥片を剥離している。2も円礫を使っている。上面が打面で、円礫を分割するように1枚の剥離を入れて打面にしている。そして、正面が作業面で、幅の広い剥片を剥離している。下面にも剥離が入っており、下設打面に見えるが、この面からの剥離はない。

3は、石の目で割れた円礫を使っている。実測図の上面見通し図に石の目があり、これが打面になっている。そして、実測図の正面が作業面で、不定形の剥片を剥離している。

第310図-1は分割した円礫を使っている。実測図正面の中央付近に石の目があり、これが分割面であると思われる。実測図正面が作業面で、上設打面からの剥離以外に、側面からの剥離も見られる。また、裏面にも剥離が見られることから、この石核では、打点が円礫の側面を周回しながら、石核の表裏両面で剥片を剥離していることになる。



第309図 休場層下層～第1スコリア帯遺構出土石器4



0 (2 : 3) 10cm

第310図 休場層下層～第Ⅰスコリア帶遺構外出土石器5

2は多面体の石核である。作業面は、実測図の左側面、正面、右側面、裏面、そして、上面にある。そして、それぞれの面が作業面であると同時に隣接する作業面の打面にもなっている。

第311図-1は円盤を使っている。上面が打面で、複数の剥離面からなっている。そして、ここを打面として、正面で剥片を剥離している。左の剥離面は、打面を作った際の剥離面に切られてしまっているため、上設の打面が作られる以前の打面から剥離されていることになる。したがって、この石核では少なくとも1回、打面を作り直していることがわかる。一方、右側の剥離面は、上設の打面から剥離されている。

2は、扁平な円盤の側面で、打面と作業面を入れ替えながら不定形の剥片を剥離している。これに4点の剥片が接合しているため、その状態を第312図に示す。石核の一端から不定形の剥片を剥離していることを示している。2と4は同時剥離で、剥離と同時に割れたと思われる。2と4を剥離した後、3を剥離するまでの間に、石核の長さが2cm近く短くなっていることから、2、4と3の間で数枚の剥片を剥離していると思われる。

#### (6) 4区出土石器

礫群やブロックと言った造形はないが、ここで出土した石器を包含層出土遺物として報告する。

##### 尖頭器

第313図-1は剥片を使った両面加工で、裏面に素材剥片の主剥離面が残っている。加工は表面に集中しており、表面は平坦剥離に覆い尽くされている。裏面の加工は基部に集中している。

2は剥片を使った両面加工だが、加工は表面に集中しており、裏面の加工は、縁辺をわずかに加工しただけである。表面の平坦剥離は、器体中央まで及んでいないため、器体中央に素材面が残っている。

##### ナイフ形石器

第313図-3は縦長剥片を使った二側縁加工で、右側縁の加工は、素材剥片の打面を除去しながら、打面から続く縁辺を加工しているが、加工は器体中央付近で止まっている。

##### スクレイバー

第313図-4は幅の広い剥片の縁辺を、表面から加工している。5も幅の広い剥片を使っており、側縁と末端に、ナイフ形石器の加工に見られるような急角度の剥離を入れている。7は大型の剥片を使つており、右側縁の打面に近い部分と末端を加工している。

##### 石核

第313図-6は、残っている自然面の状態から、黒曜石の小さな角盤を使っている。上面に残る自然面を打面にして、実測図正面で不定形の剥片を剥離している。

#### (7) その他の石器

確認調査やその他の調査区で出土した資料を、包含層出土遺物として報告する。

##### 休場層下層出土石器

##### ナイフ形石器

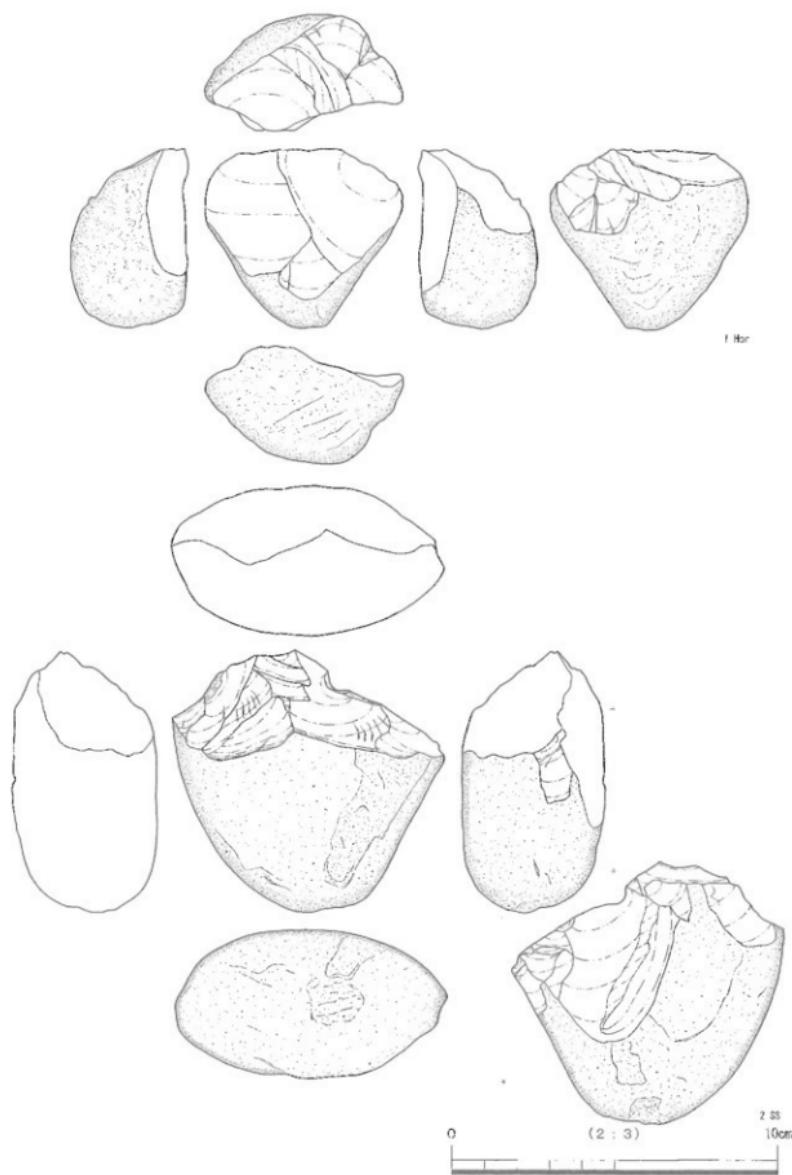
第313図-8は縦長剥片を使った二側縁加工で、左側縁は表裏両面から加工している。加工は基部にも回り込み、基部を丸く仕上げている。裏面基部には剥片の厚みを除去するための平坦剥離が見られる。

##### スクレイバー

第313図-9は縦長剥片の左側縁を加工している。上下両端が折れていって、これらの折れ面が、左側縁の加工による剥離を切っていることと、裏面上部には、折れ面を打面にした剥離が見られることから、折れた後で再加工していることがわかる。

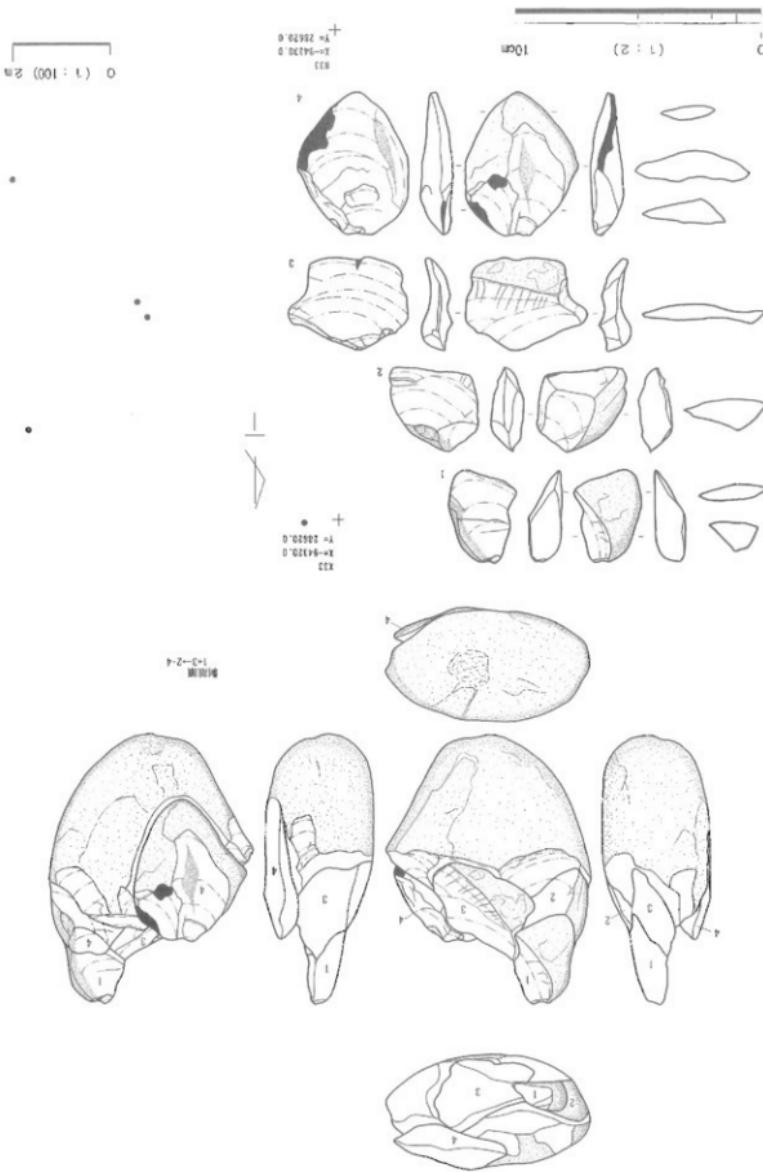
##### 尖頭器

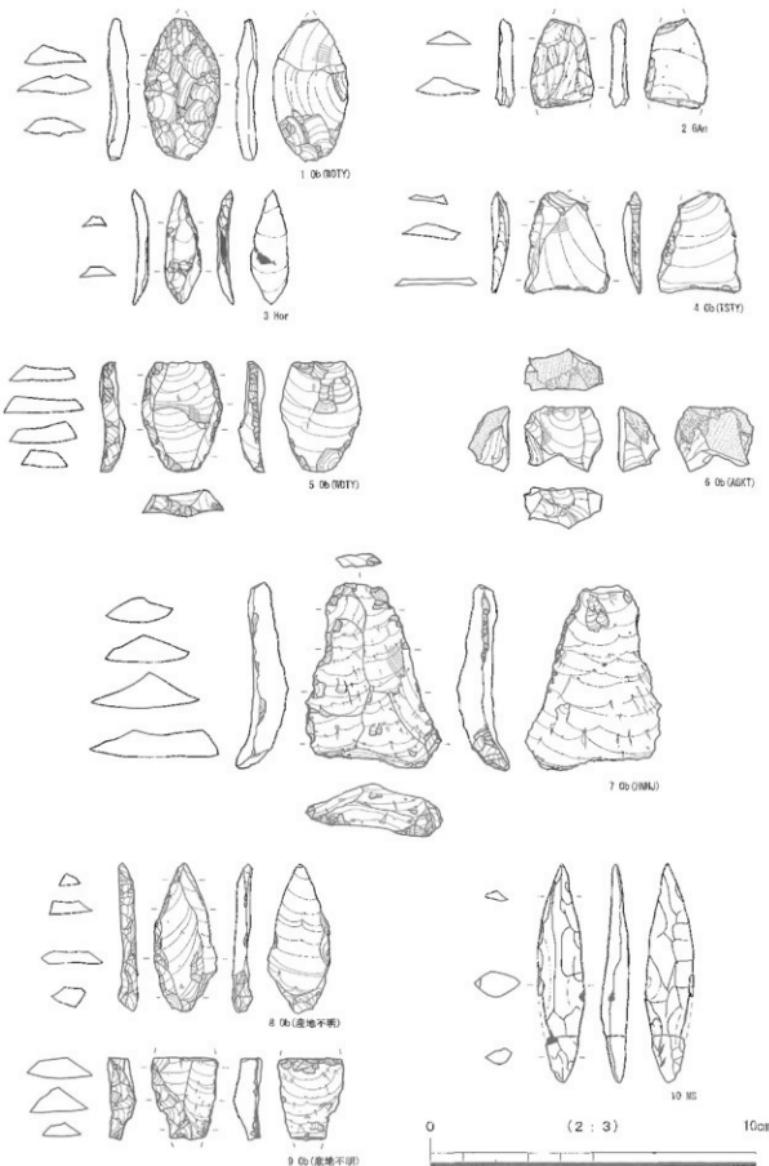
第313図-10は両面加工だが、風化が進んでいるため、剥離面の観察はできない。平面的な形は整っているが、器体に厚みが残っている。



第311図 休場層下層～第Ⅰスコリア帯遺構外出土石器6

第312圖 特魯門丁園～第1文化層出土複合資料2





第313図 休場層下層～第1スコリア帶遺構外出土石器 7

#### (8) 第0黒色帯出土石器

今回は、休場層下層～第Iスコリア帯と同じ文化層としたが、第Iスコリア帯から角錐状石器が出土していることなどから、休場層下層、第0黒色帯、第Iスコリア帯を別文化層に分ける可能性もある。そこで、第0黒色帯と第Iスコリア帯から出土した遺物を、休場層下層とは分けて報告する。

##### ナイフ形石器

第314図-1は、左側縁に素材剥片の折れ面が残っている。2の右側縁の加工は、剥片の打面～縁辺を、弧状に加工している。左側縁の加工は、素材剥片の末端を直線的に分断している。これによって、基部は尖っている。3は、左側縁上半の加工は、高い角度の剥離になっているが、下半の加工は、低い角度になっていることから、左側縁は上半と下半で加工が異なっていることになる。加工が周縁をめぐっているため、周縁加工尖頭器でも良いが、左側縁上半の加工が、他の縁辺に比べて低い角度であることと、微細な剥離であることから、刃部に加工か使用による剥離が入ったナイフ形石器と考えた。

##### スクレイパー

4は自然面打面の残る剥片の左側縁を加工している。5は剥片の打面を除去するように加工している。

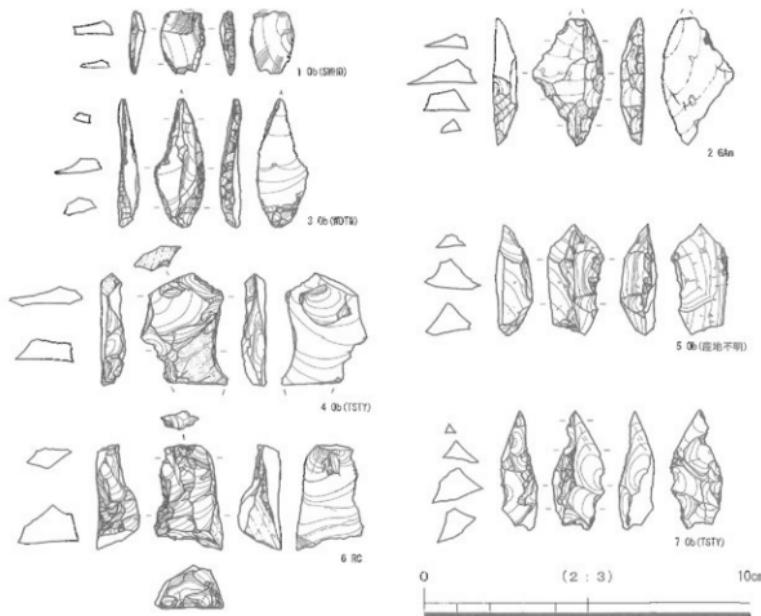
#### (9) 第Iスコリア帯出土石器

##### スクレイバー

6は、厚みのある剥片の両側縁と末端を加工している。

##### 角錐状石器

7は、断面が三角形になる剥片の三面を加工している。左側縁と右側縁に、裏面から剥離を入れた後、正面にある後縁から左側面に剥離を入れている。裏面は両側縁から平坦剥離を入れている。



第314図 第0黒色帯、第Iスコリア帯出土石器

## 第5節 第I黒色帶～ニセローム層の遺構と遺物

この層で遺物がまとまって出土したのは5区である（第315図）。丘陵に当たっており、南西に向かう緩斜面である。この調査区では、石器は少ないため、ブロックは1基だけだったが、特に第I黒色帶上面で、礫群がまとまって出土した。この調査区のように、礫群が主体で石器が少ない場合、礫群を正当に評価しないと、集落の評価もできないことになる。

### 礫群30

4点の礫からなるもので、礫群にすべきか迷うが4点の礫が密接して出土したため、遺構としてまとめた（第316図上段）。4点とも割れていて、2点は割れ面も赤化している。

### 礫群31

10点の礫からなり、8点の礫が赤化して割れている。5点は割れ面も赤化している（第316図下段）。

### 礫群32

43点の礫が密集して出土した（第317図上段）。41点の礫が赤化して割れており、そのうち39点は割れ面も赤化している。黒曜石の剥片など5点が共伴している。

### 礫群33

10点の礫が散在している（第317図下段）。すべての礫が赤化して割れており、4点は割れ面も赤化している。礫群31の礫と接合する例があり、遺構外の礫も接合する。

### 礫群34

11点の礫がやまとまって出土した（第318図上段）。9点の礫が赤化した上に割れており、このうち6点は割れ面が赤化していない。構成礫数は少ないが、割れ面赤化率が低い例である。

### 礫群35

16点の礫が散在した状況で出土しており、5.4kgの礫が伴っている（第318図下段）。この礫以外はすべて割れており、14点が赤化している。このうち7点は割れ面も赤化している。

石器が2点共伴している。第323図-1はナイフ形石器である。縦長剥片を使っていて、基部に打面が残っている。刃部に当たる部分には自然面が残っている。左側縁の加工は、下半は大きな剥離を入れているのに対して、上半は小さな剥離を入れている。上半には裏面と60度程の角度をなす剥離面があるため、大きな剥離を入れずに済ませたのであろう。右側縁の加工は、先端から中央付近までは、途中未加工の部分を挟んで裏面から加工しているのに対して、基部に近い部分は表面から加工している。2は縦長剥片を使った二側縁加工で、欠損のため、左側縁の加工は、一部しか確認できない。

### 礫群36

16点の礫が散在している（第319図）。このうち12点が赤化したうえに割れており、割れ面も赤化している。礫群34の礫と、5mの距離を隔てて接合するものがある。

### 礫群37

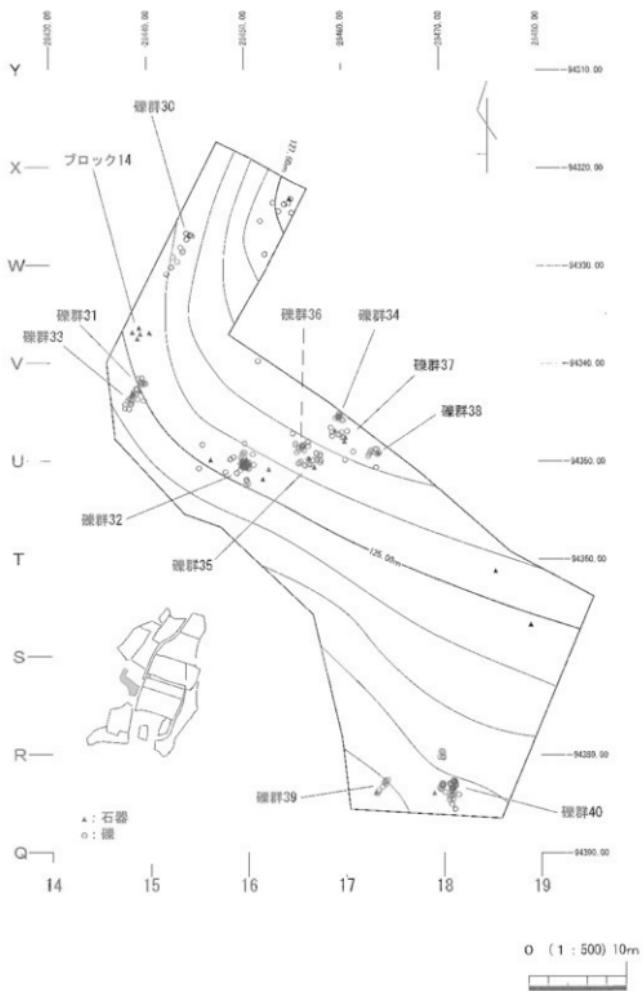
9点の礫が散在しており、6.1kgの礫が伴っている（第320図）。礫はすべて赤化した上に割れており、割れ面も赤化している。3点の石器が共伴しており、そのうち1点が礫群38に伴う石器と接合する。

### 礫群38

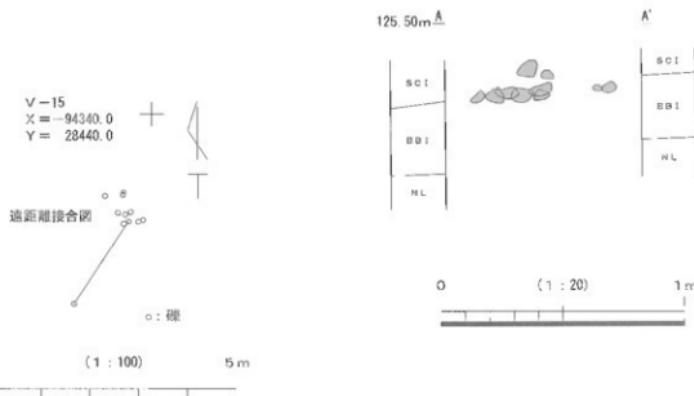
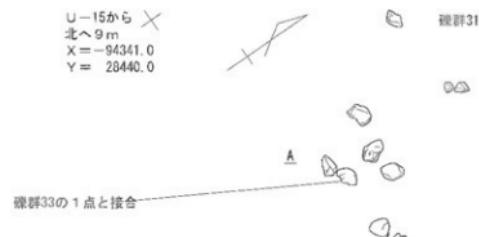
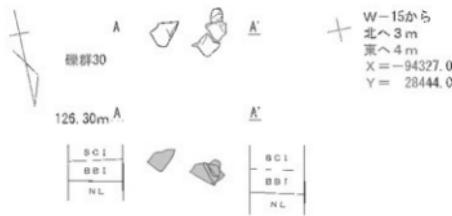
9点の礫が散在する小規模な礫群である（第321図上段）。6点が赤化した上に割れており、そのうち5点は割れ面も赤化している。石器が1点共伴しており、これが礫群37に共伴した石器と接合する。

### 礫群39

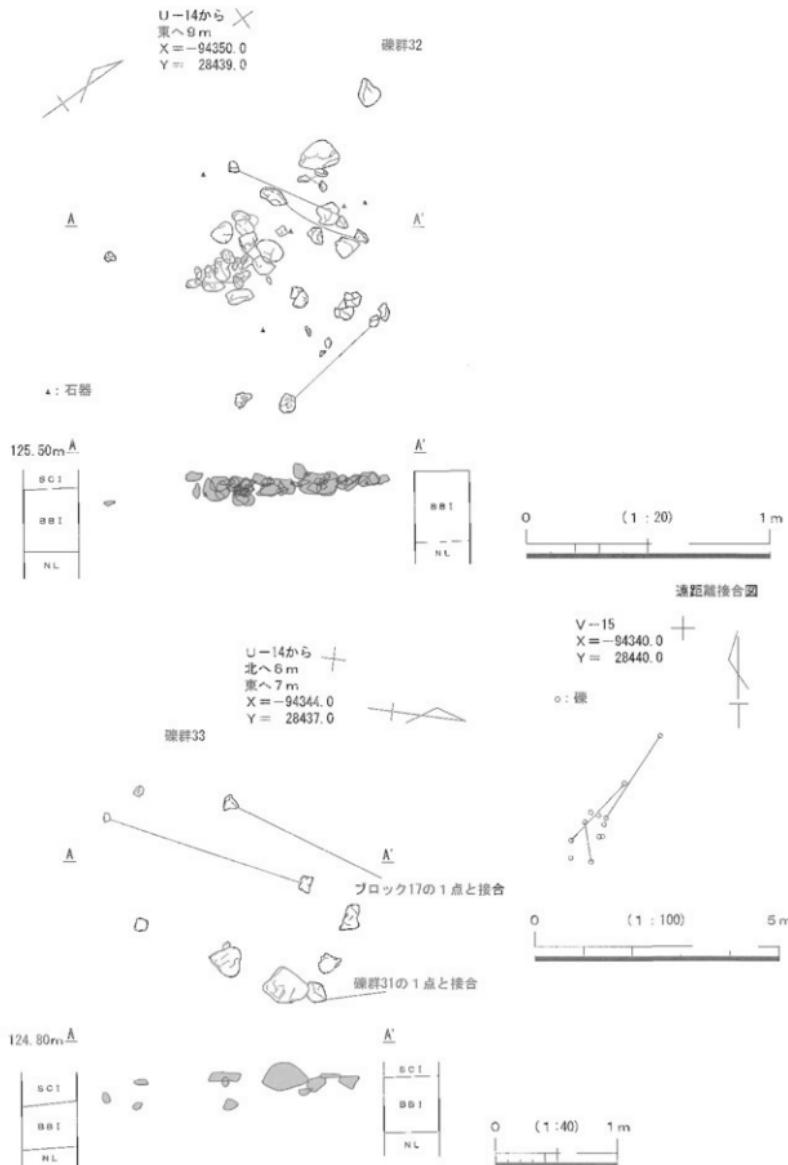
7点の礫が散在する小規模な礫群である（第321図下段）。6点が赤化した上に割れており、そのうち3点は割れ面も赤化している。遺構外の礫と接合するものがある。



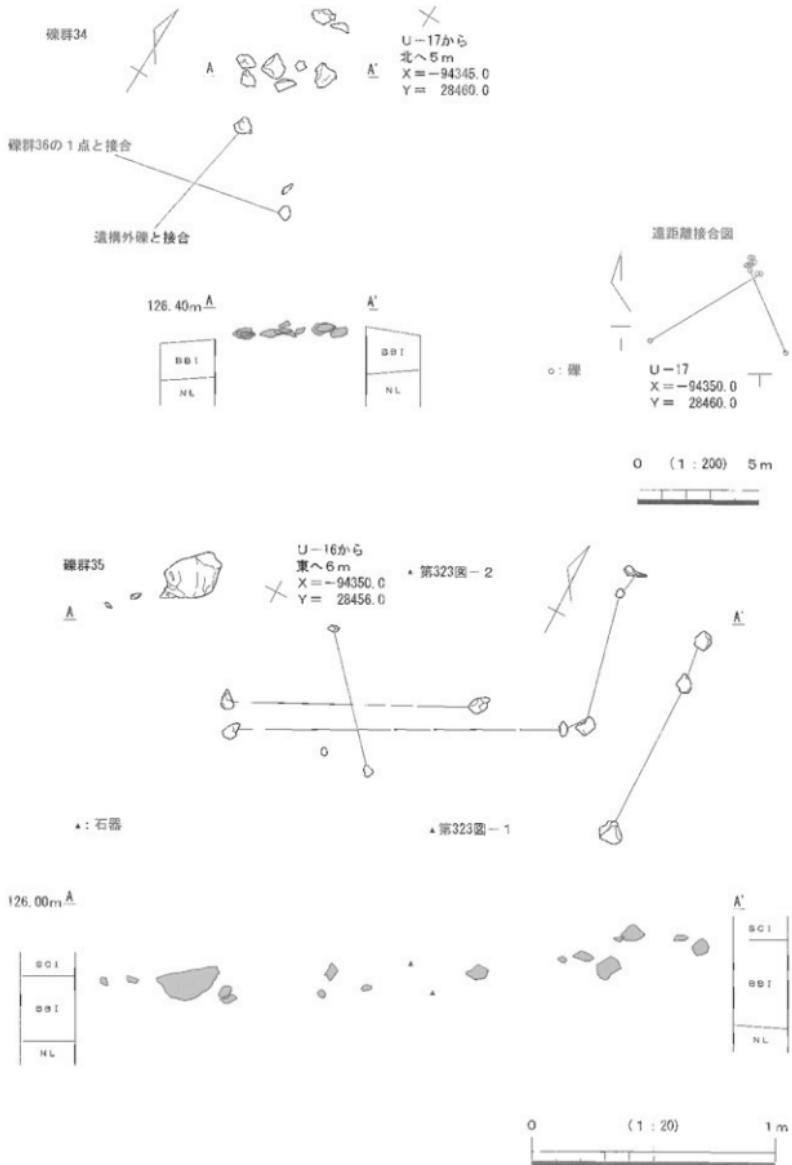
第315図 5区第Ⅰ黒色帯～ニセローム層遺構、遺物分布図



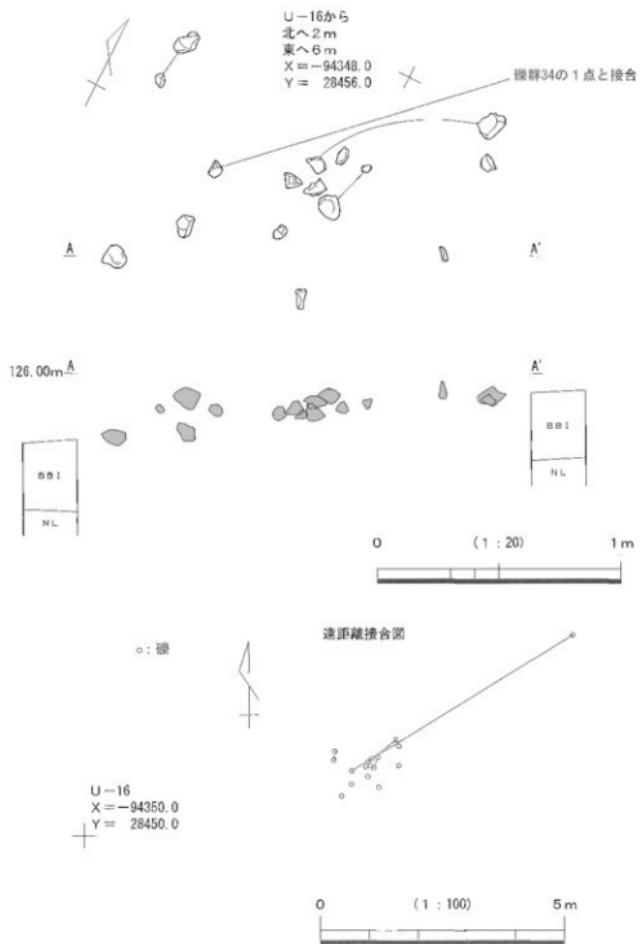
第316図 碓群30、31実測図



第317図 磯群32、33実測図



第318図 縄群34、35実測図



第319図 碓群36実測図

U-16から  
 北へ3m  
 東へ8m  
 X = -94347.0  
 Y = 28456.0



A



A'



縞群38の1点と接合

126.40m A



0 (1 : 20) 1 m

▲: 石器  
○: 縞

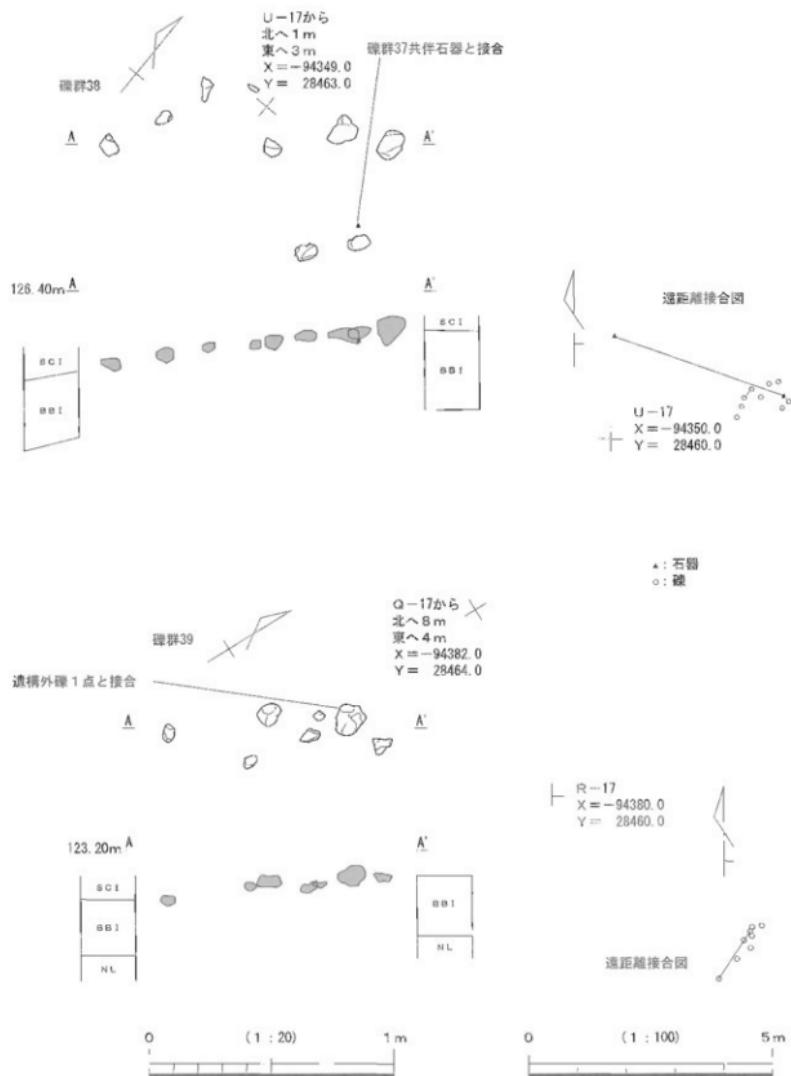
遠距離接合図



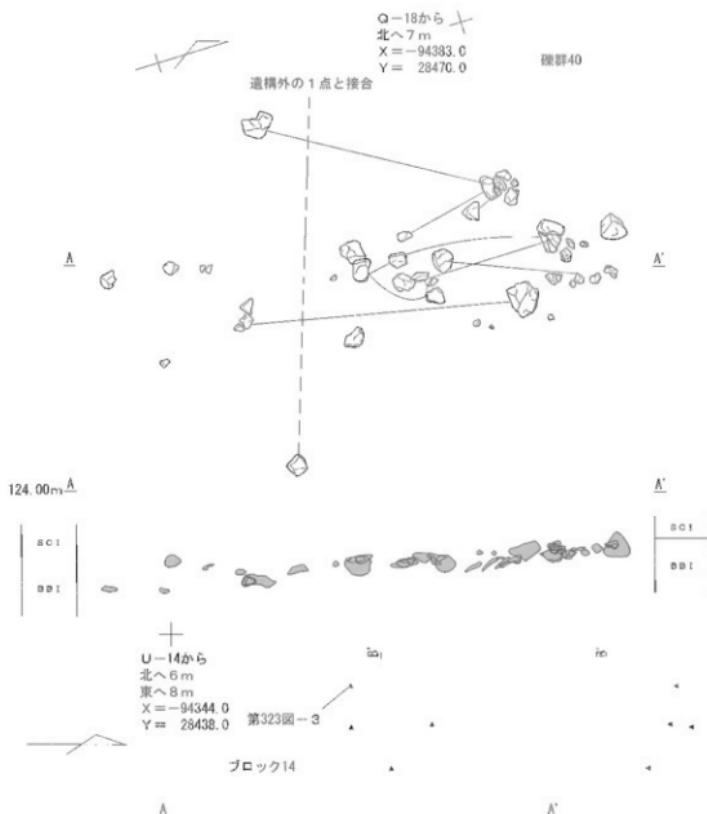
U-17  
 X = -94350.0  
 Y = 28460.0

0 (1 : 100) 5 m

第320図 縞群37実測図



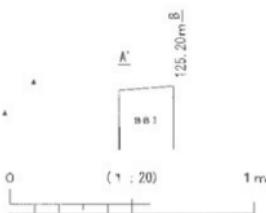
第321図 砾群38、39実測図



▲: 石器

125.20m B-B'

BBI



第322図 砾群40、ブロック14実測図

### 礫群40

48点の礫からなり、この調査区では最大の数である（第322図上段）。赤化しているが割れていない礫が3点あり、逆に赤化していないが割れている礫が3点ある。42点の礫は赤化した上に割れしており、そのうち13点は割れ面も赤化している。遺構内での接合例が多く、1点は遺構外の礫と接合している。

### ブロック14

この調査区で検出した唯一のブロックである（第322図下段）。礫群の礫はすべて第Ⅰ黒色帯の上面で面を揃えて出土したのに対して、ブロックの石器は、第Ⅰ黒色帯上面から下に40cm程の上下幅を持っている。剥片とスクレイバーで、合計6点からなる小規模なブロックである。

第323図-3はスクレイバーで、剥片の基部に近い縁辺を加工している。4は微細な剥離のある剥片で、自然面を残した剥片の縁辺に微細な剥離が不規則に入っている。

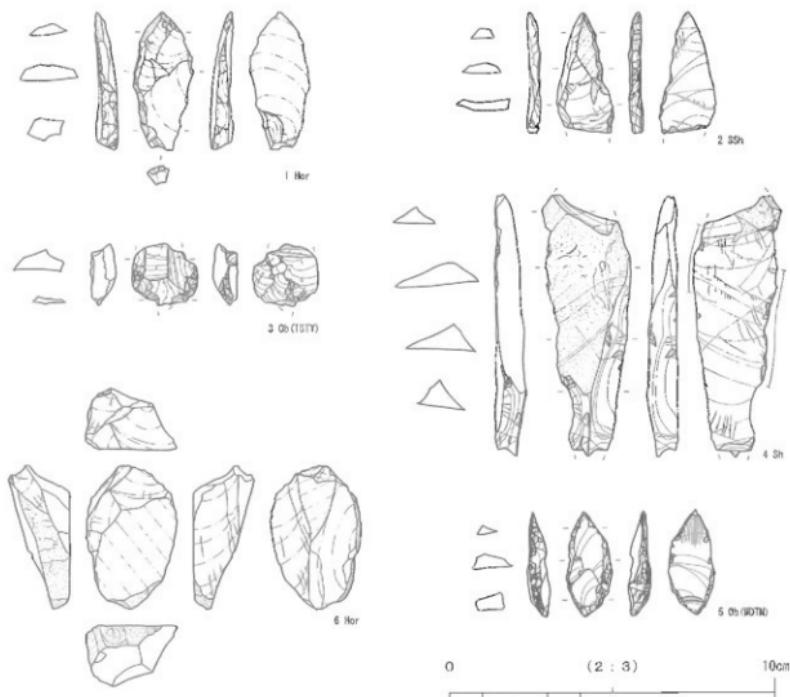
### 遺構外出土石器

#### ナイフ形石器

第323図-5は縦長剥片を使った二側縁加工で、基部は尖るように仕上がっている。

#### 石核

第323図-6は石の目で割れた剥片を使った石核で、石の目と自然面以外の剥離面はすべて作業面で、不定形の剥片を剥離している。最終剥離面は、実測図の上面見通し図に示した剥離面である。



第323図 第Ⅰ黒色帯～ニセローム層出土石器

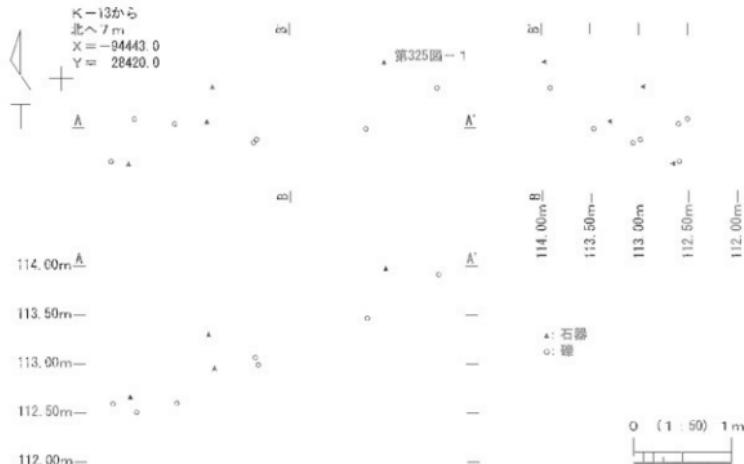
## 第6節 第II黒色帶の遺物

13区で行った確認調査のうち1箇所の調査坑で、第II黒色帶から遺物が出土した(第324図)。隣接する調査坑では、この層からの出土遺物は認められなかつたため、局所的に遺物がまとまつていたと思われる。

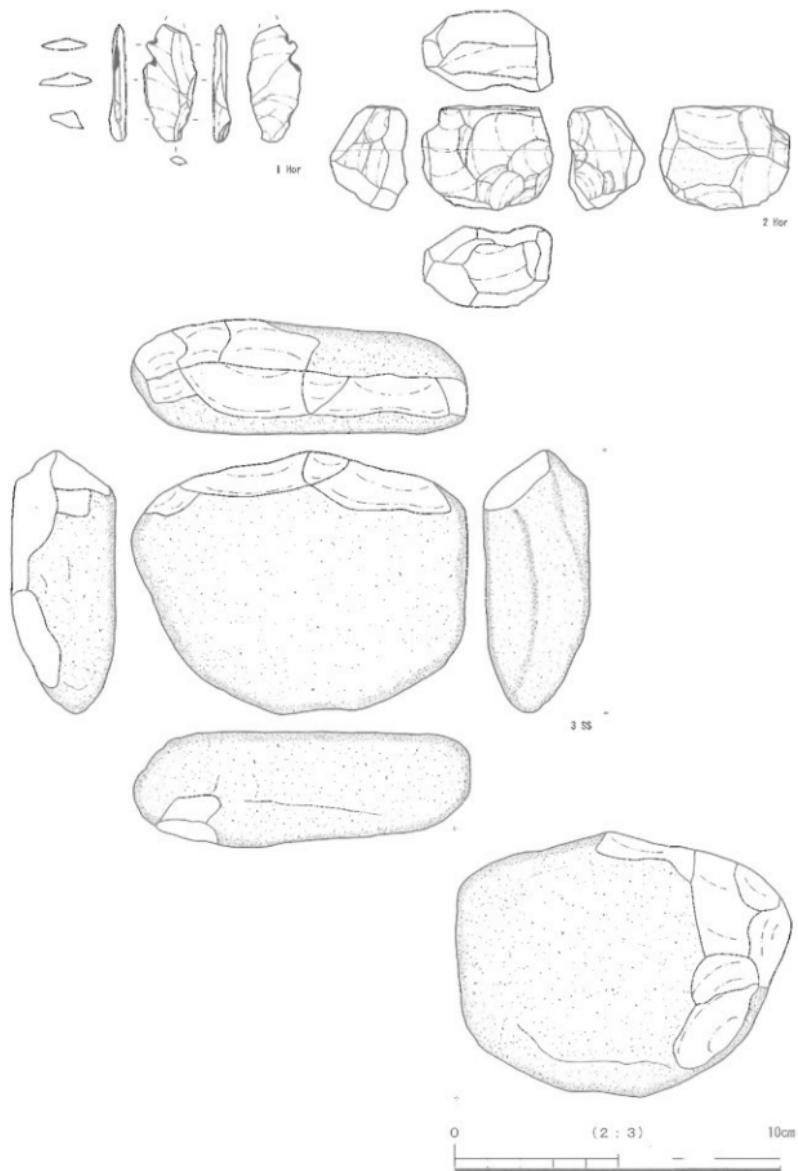
出土遺物の内容は、礫9点とホルンフェルス製のナイフ形石器1点とホルンフェルス製の剥片3点である。石器の点数が少ないため、ブロックとは呼びにくいか、局所的にまとまつていることは、おそらく間違いないと思われる。

第325図-1は部分加工のナイフ形石器である。縦長剥片を使っており、基部に剥片の打面が残っている。加工は右側縁基部に見られるが、急角度の剥離が2枚見られるだけである。

この他には、11区で第II黒色帶から礫が1点出土している。



第324図 第II黒色帶遺物分布図



第325図 第II黒色帯、第III黒色帯出土石器

## 第7節 第III黒色帶の遺構と遺物

この層からまとまって遺物が出土したのは、11区だけである（第326図）。11区は丘陵に当たっており、南に向かう緩斜面になっている。ここでは礫群とブロックを1基ずつ検出した。全体的に遺物の分布はまばらである。

### 礫群4!

7点の礫からなる小規模な礫群である（第327図上段）。3点の礫は赤化しているが、割れていない。2点の礫は割れ面も赤化している。

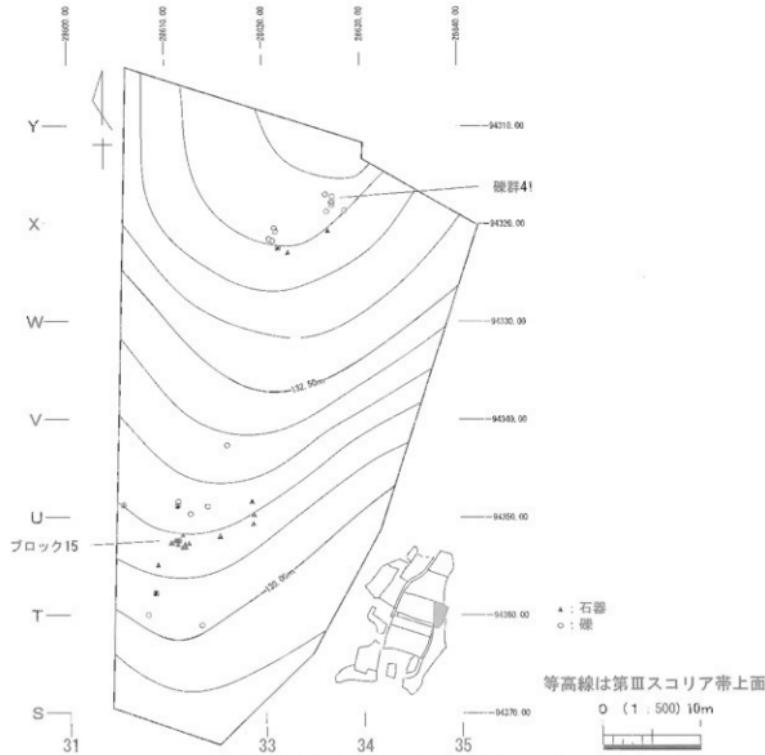
### ブロック15

19点のブロックで、ホルンフェルス製の剥片と碎片からなる（第327図下段）。

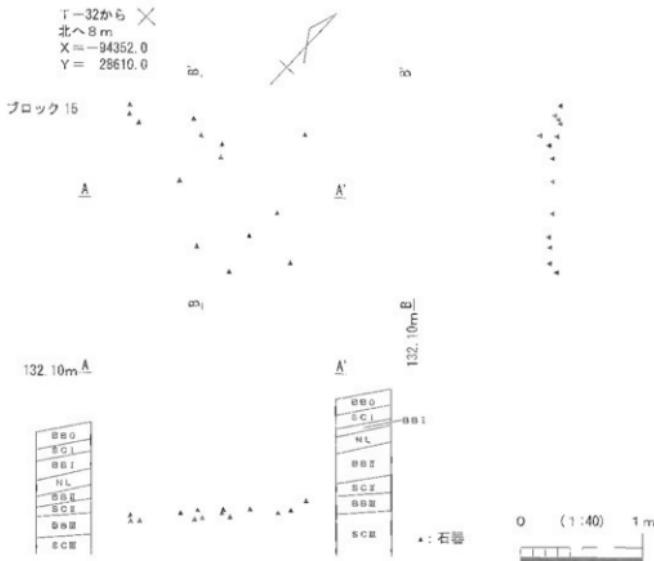
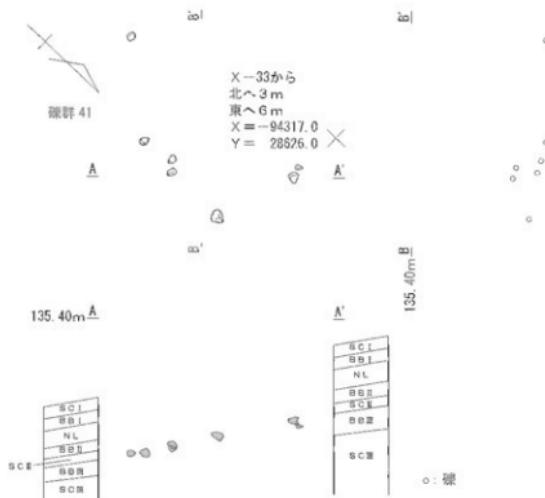
### 遺構外出土遺物

#### 石核

第325図-2は円礫を使っており、上面と右側面が打面になっている。作業面は正面で、上設の打面と右側面の打面から不定形の剥片を剥離している。また、裏面にも作業面があり、石核の側面を打面にして剥片を剥離している。3は扁平な円礫を使っており、不定形の剥片を剥離している。



第326図 11区第III黒色帶遺構、遺物分布図



第327図 碠群41、ブロック15実測図

## 第8節 第V黒色帶の遺構と遺物

3区でまとめた資料が出土している(第328図)。南向きの緩斜面で丘陵に当たっている。そして、調査区の中央付近で5つのブロックがまとまって出土した。ここでは多数の石器が接合し、良好な接合資料を得ることができた。ブロック内だけなく、ブロックをまたいだ接合も多く認められ、これら5つのブロックが近接した時期に形成されたことがわかる。

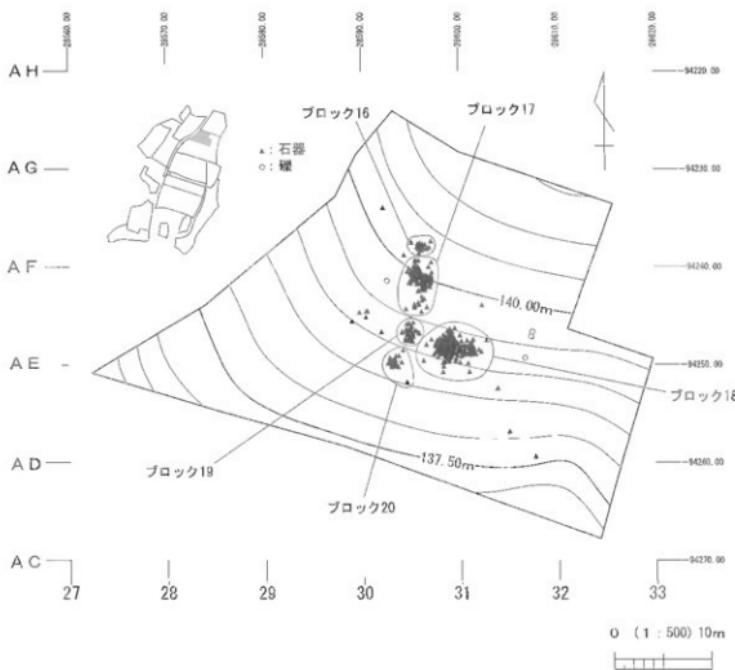
各ブロックと共に通することは、ホルンフェルスを主要石材とすることと、ナイフ形石器など完成品としての石器が少ないとある。また、ブロック外の遺物も少ないので特徴である。このことも、これらのブロックが近接した時期に残されたことを示している。

ブロックごとに見ると下記の特徴がある。

- 多くの石器が出土し、ブロック内外で多数の接合資料が分布しているブロック。
- 石器の数が少なく、接合資料の数も少ないブロック。

接合資料の詳細は後述するが、下記を示す接合資料が得られている。

- 原石の搬入から剥片剥離、石器の使用と廃棄までの全工程が完結している個体がある。
- 原石を搬入して剥片剥離を行っているが、石核を搬出している個体がある。
- 石核を搬入して剥片剥離を行い、石器の使用と廃棄までの工程を終えている個体がある。
- 石斧は出土していないものの、その製作を示す接合資料がある。



第328図 3区第V黒色帶遺構、遺物分布図

### ブロック16

23点の石器からなる（第329図）。そのうち20点はホルンフェルス製である。剥片と碎片だけから構成されている。ブロック内接合は1例のみだが、ブロック17と多くの接合例がある。

### ブロック17

189点の石器からなる（第330図）。ホルンフェルス製石器が102点、安山岩製石器が79点である。これだけの点数がありながら、完成品はスクレイパーが1点だけである。微細な剥離のある剥片が1点あるが、ホルンフェルス製の石器は風化のため、微細な剥離が確認できないだけで、本来は剥片のまま使ったり、剥片をわざかに加工しただけで利器として使つたりした石器がもっとあるのだろう。

出土石器を第331図、第332図に示す。第331図-1は分割した円盤、もしくは円盤から剥離した剥片を使った石核である。側面を打面にして、求心状に剥片を剥離している。2は、打面再生剥片に見えるが、後述する接合資料に示すように石核で、上面と下面で剥片を剥離している。上面に接合する剥片は、円盤面を除去した剥片である。3はスクレイパーで、円盤面を除去した剥片の一端を加工している。

第332図-1は円盤を使った多面体の石核である。作業面は、実測図の正面、左側面、右側面、下面である。正面の作業面は、上面の円盤面を打面として剥片を剥離している。左側面と右側面、下面の作業面では、正面作業面を打面にして不定形の剥片を剥離している。

### ブロック18

この調査区最大のブロックで、411点の石器が出土している（第333図）。そのうち8割近くがホルンフェルスである。これだけの石器がありながら、完成品はスクレイパーが1点だけである。ブロック18と同様、本来は、微細な剥離のある剥片がもっとあるのだろう。

このブロックでは、多くの石器が接合し、ブロック内だけでなく、ブロック17やブロック19との間でも多くの石器が接合した。接合資料については後述する。

このブロック内で採集した炭化物から、測定値で $30,830 \pm 190$ yrB.P.の年代が得られている。

第332図-2がこのブロックから出土している。円盤を使った石核で、作業面は正面と左側面である。正面の作業面は、上面の円盤面を打面にして、不定形の剥片を剥離している。左側面の作業面は、右側面にある平坦面を打面にしているが、この作業面で剥片を剥離した時に、石核が破損している。

第334図-1はスクレイパーである。円盤を除去した剥片を使い、裏面にある石の目を打面にして、側縁に高い角度で剥離を入れている。2もスクレイパーで、石核を転用している。剥片剥離が終わった後に、上面見通し図に示した縁辺を加工している。これに剥片が接合したことで、加工した部分が、かつて剥片剥離をした作業面で、この作業面を除去するようにして刃部を作っていることがわかる。

### ブロック19

45点の石器からなる（第335図）。ほとんどがホルンフェルス製の剥片と碎片である。ブロック内接合以外に、ブロック17、ブロック18と接合関係がある。

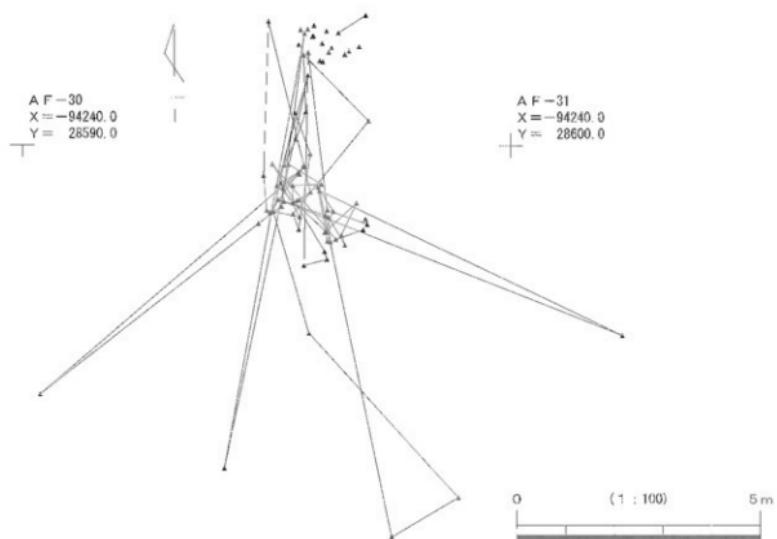
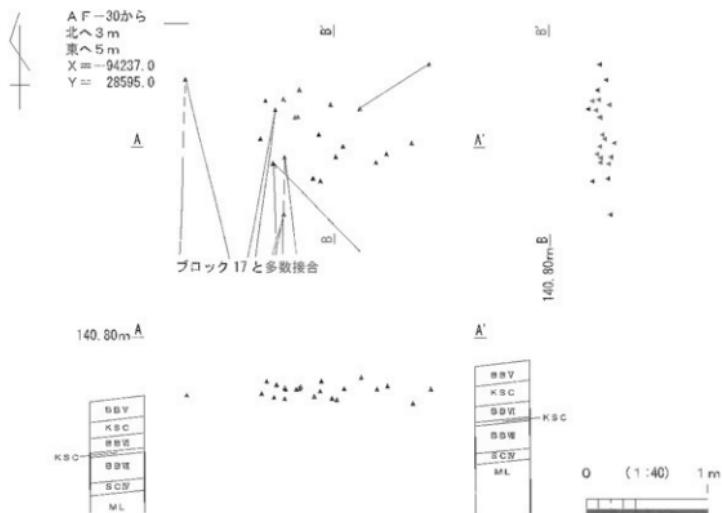
第334図-3は、刃部磨製石斧である。緑色凝灰岩を使っており、これを作った際の剥片が2点接合している。実測図で下にした側が刃部と思われ、研磨痕がある。刃の細かい砥石を使ったと思われ、研磨痕が付いた部分は光沢が出ている。

### ブロック20

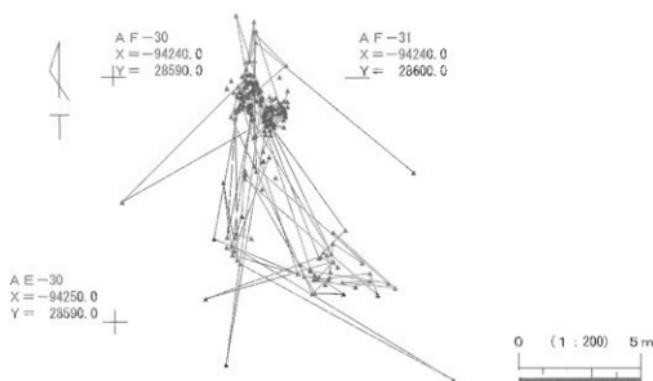
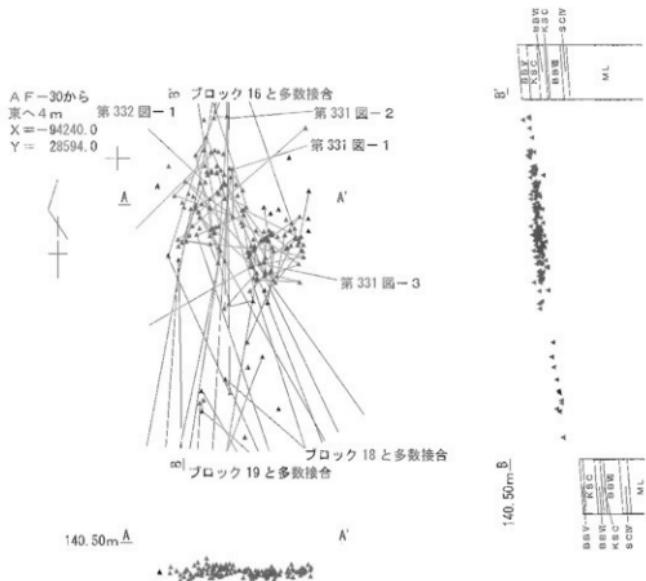
43点の石器からなる（第336図）。頁岩の剥片が1点ある以外は、ホルンフェルスの剥片と碎片である。ブロック内接合以外に、ブロック18、19と接合関係がある。

### 遺構外出土遺物

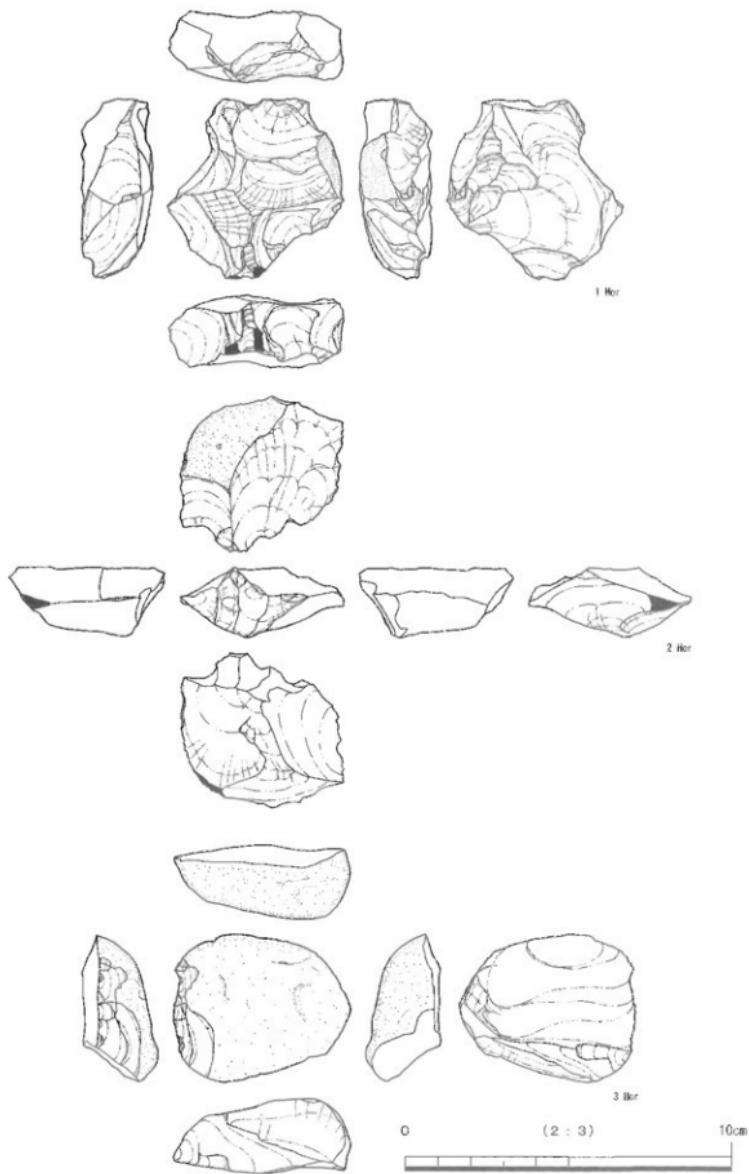
この遺物分布域では、ブロックに属さない石器は少ない。第334図-4は微細な剥離のある剥片で、黒曜石の縦長剥片の縁辺に微細な剥離が見られる。



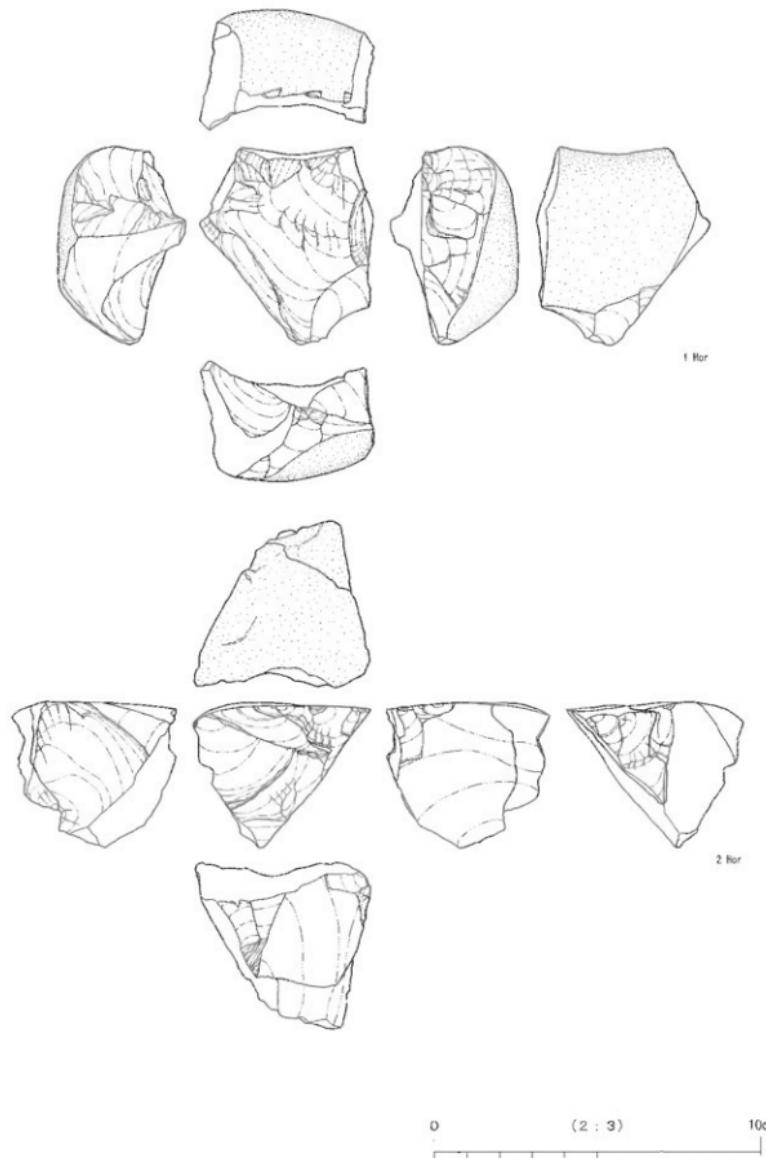
第329図 ブロック16遺物分布、接合図



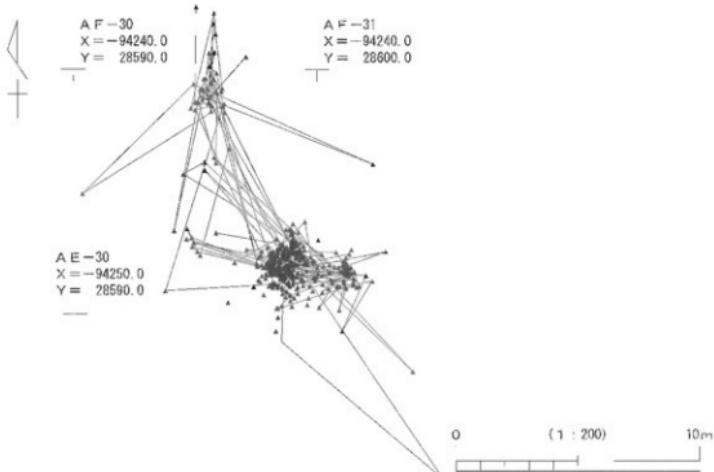
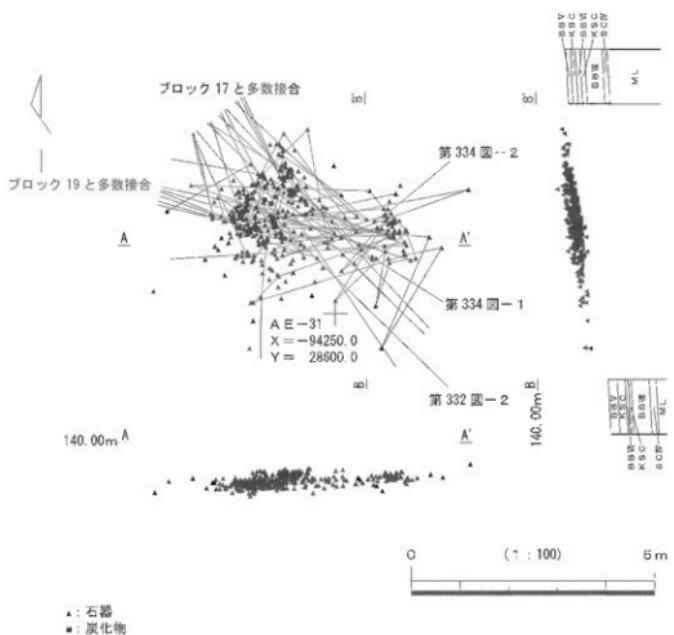
第330図 ブロック17遺物分布、接合図

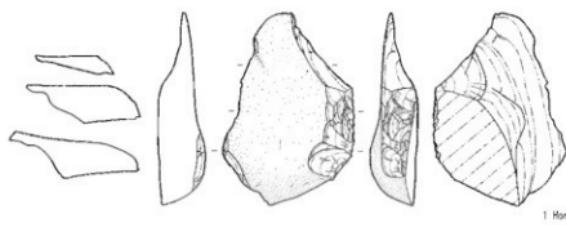


第331図 第V黑色帶出土石器1

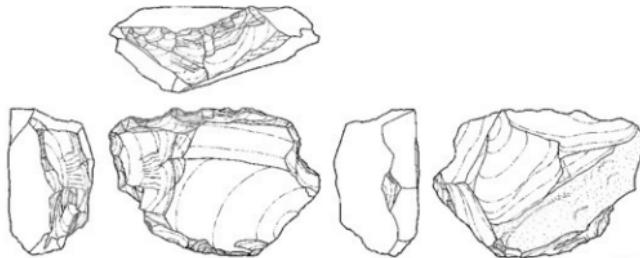


第332図 第V黒色帶出土石器2

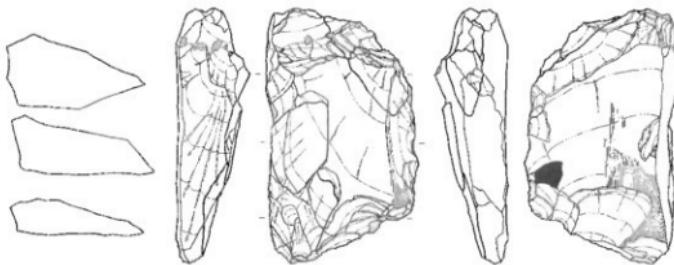




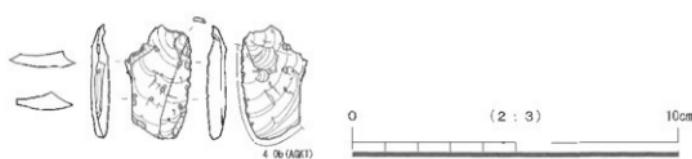
1 Hor



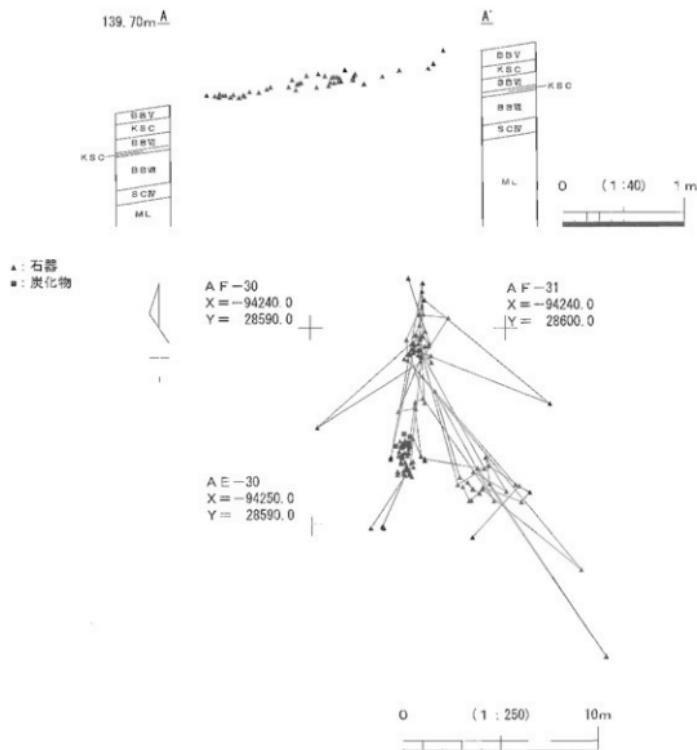
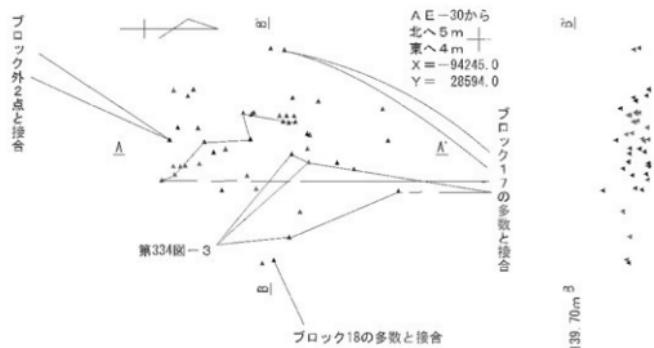
2 Hor



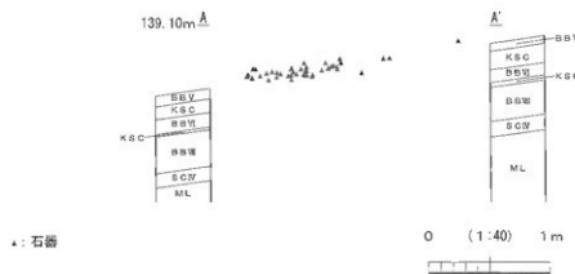
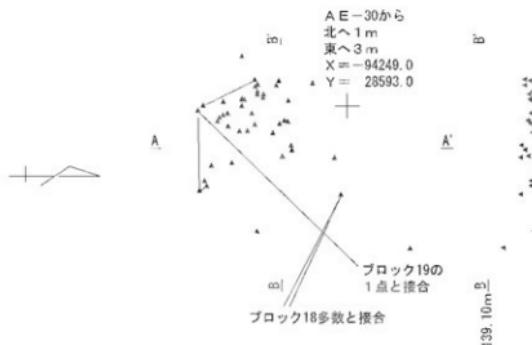
3 Tu



第334図 第V黑色帶出土石器3



第335図 ブロック19遺物分布、接合図



A F -30  
X = -94240.0  
Y = 28590.0

A F -31  
X = -94240.0  
Y = 28600.0

A E -30  
X = -94250.0  
Y = 28590.0

0 (1:200) 5m

第336図 ブロック20遺物分布、接合図

## 接合資料1

第337図～339図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫を搬入したことを示すものである。石核3点とスクレイバー1点、剥片40点が接合して、ほぼ円礫の状態に戻っている。分布はブロック17を中心にして、ブロック16、ブロック18、ブロック20にまたがっている。

剥片剥離工程は、4つの工程に分けられる。下記で順を追って記載する。

### 第一工程

ホルンフェルスの円礫を搬入後、円礫の上端を打面として、交互剥離によって自然面を除去しながら不定形の剥片を剥離する。この工程で第338図-14、第339図-24、29、30の剥片が剥離されている。

### 第二工程

第一工程終了後、円礫の下端から交互剥離によって自然面を除去しながら不定形の剥片を剥離する。第一工程よりも多くの剥片が剥離されている。この工程で第338図-5、9、10、11、15、第339図-17、18、20、21、25、27、28、31の剥片が剥離されている。

### 第三工程

ここで円礫が縦に分割され、第一工程と第二工程では1つの石核だったものが、第331図-1と第332図-1の石核に分かれる。ここでは、第331図-1の石核からの剥片剥離を第三工程とする。この工程では、石核から、第338図-1、2、3、6、8の剥片が剥離されている。この時、第331図-2に示す石核の素材剥片も剥離されている。

### 第四工程

第二工程後、円礫が縦に二分割されたうち、第332図-1の石核からの剥片剥離を第四工程とする。ここでも多くの剥片が剥離されており、第338図-4、7、12、13、第339図-16、19、22、23、26、32を剥離している。大きく円礫面を除去した剥片が目立つ。また、この時第331図-3に示したスクレイバーの素材剥片も剥離されている。

## 接合資料2

第340図～342図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫を搬入したことを示すもので、剥片を剥離した後に、石核が搬出されているため、石核が入る部分が空間になって残っている。剥片を剥離した場所によって3つの工程に分けることができる。

### 第一工程

第340図に示した実測図の右側見通し図に見られる一群の剥片を剥離した工程である。石核の側面に当たる部分で、円礫面を除去した剥片が多い。この工程では、第340図-5、6、1、第341図-11、第342図-21、25、26が剥離されている。このうち、第342図-26の剥離後、同図25の剥片を剥離する前に打面を再生しているようで、打面の高さが低くなっている。

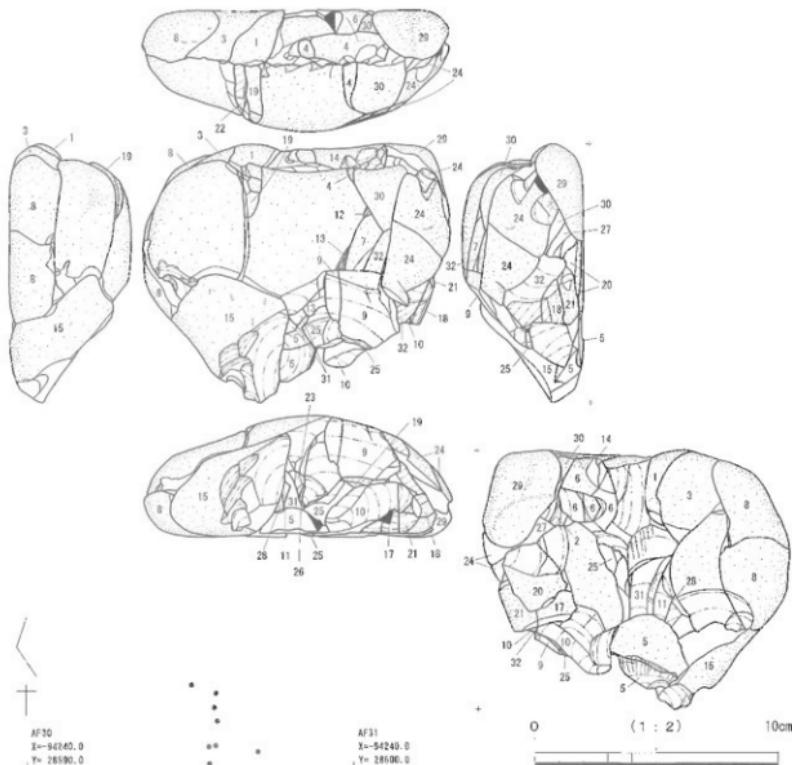
### 第二工程

第340図に示した実測図の上面見通し図に見られる一群の剥片を剥離した工程である。ここは、石核の上面に当たる部分で、この工程で第341図-9、12、13、14、15、16、18、第342図-20の剥片が剥離されている。

### 第三工程

第340図に示した実測図の正面に見られる一群の剥片を剥離した工程である。石核の正面に当たる部分で、この工程で第340図-2、3、4、7、第341図-8、10、17、19、第342図-22、23、24、27の剥片が剥離されている。

以上の工程が終了した後、石核は搬出されているようで、調査区内からは出土していない。そして、接合資料では、石核の部分だけが抜け落ちたようになっている。

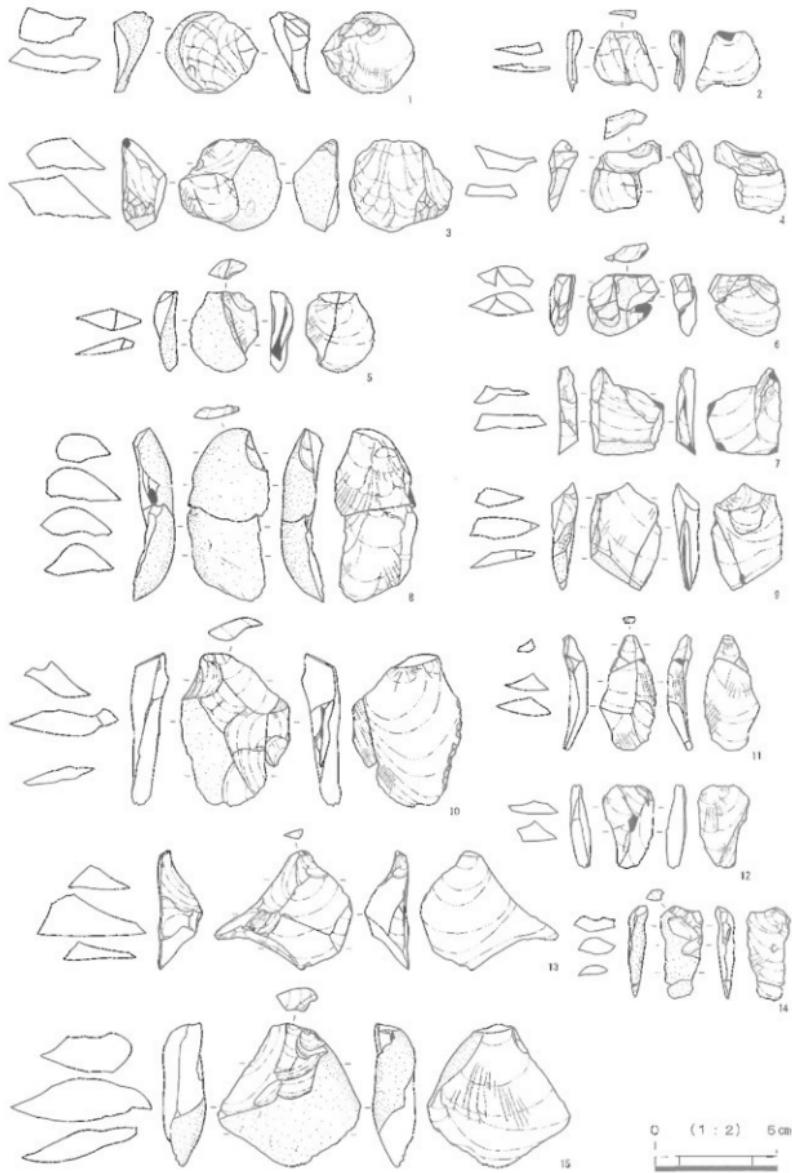


AE30  
X=94240.0  
Y= 28590.0

AE31  
X=94250.0  
Y= 28600.0

0 (1 : 150) 3m

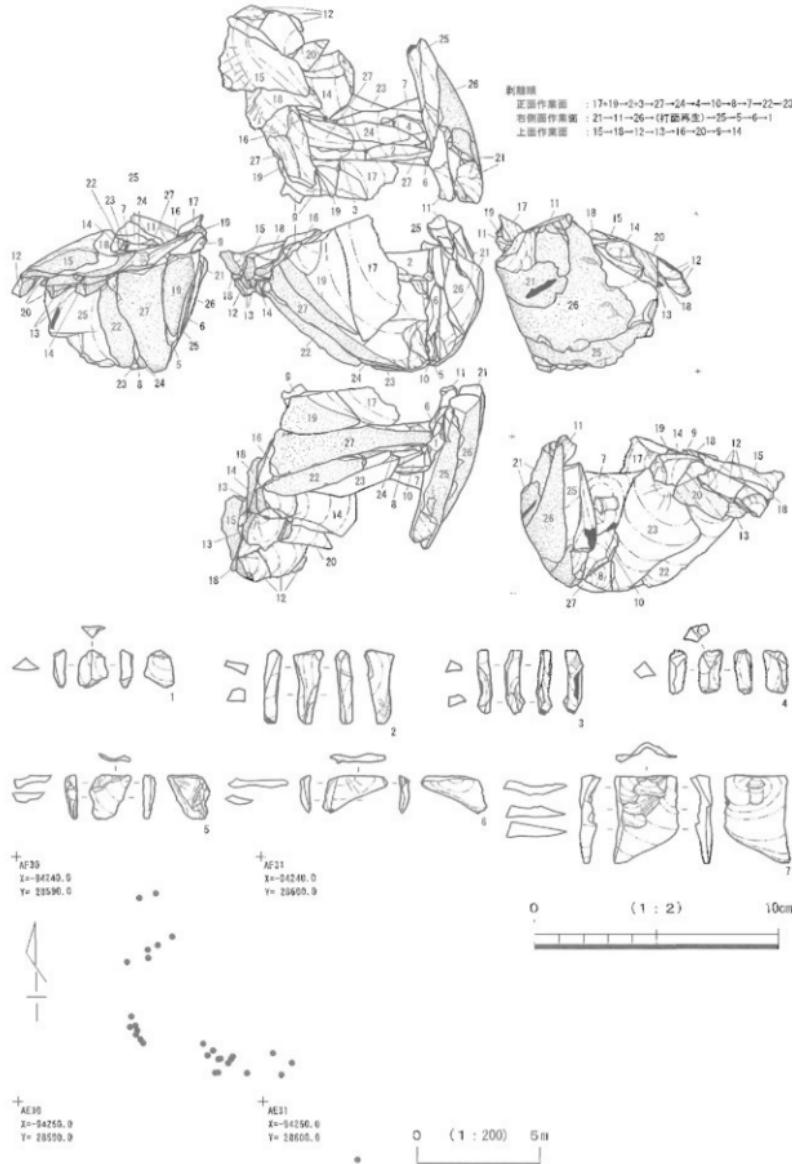
第337図 第V黒色帶出土接合資料1



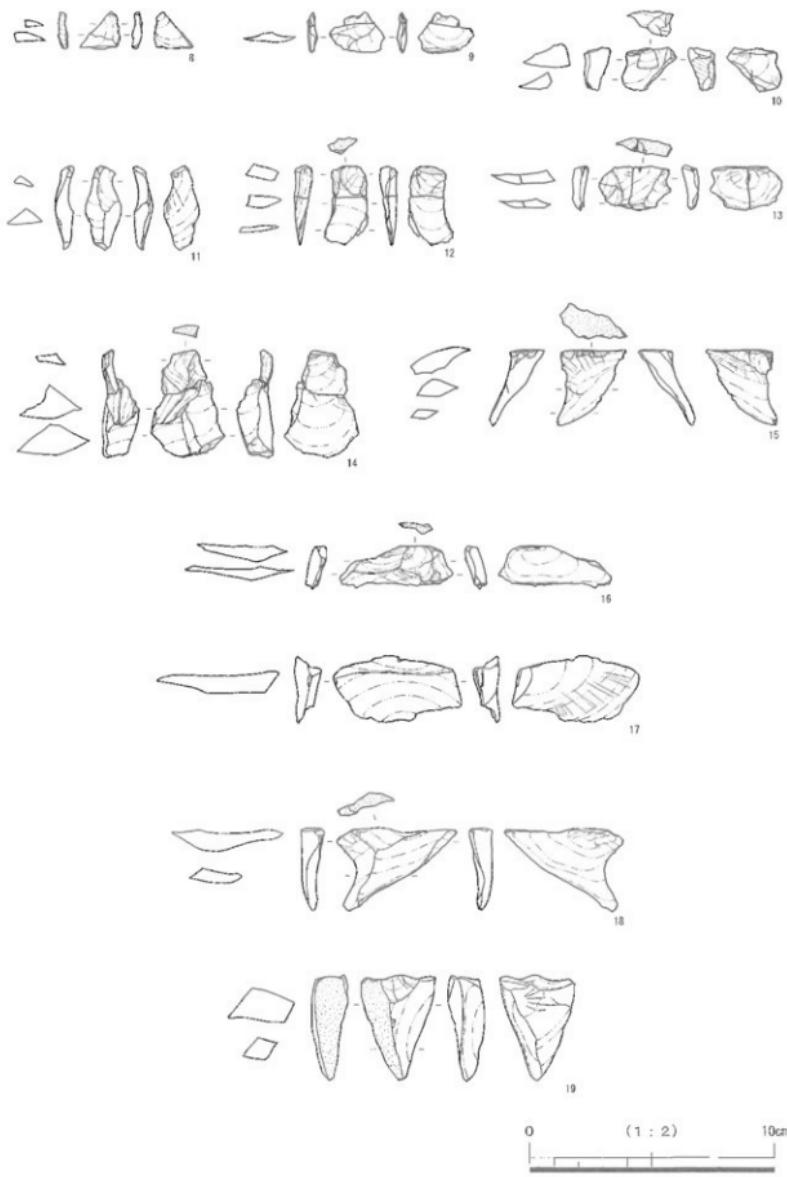
第338図 第V 黒色帶出土接合資料2



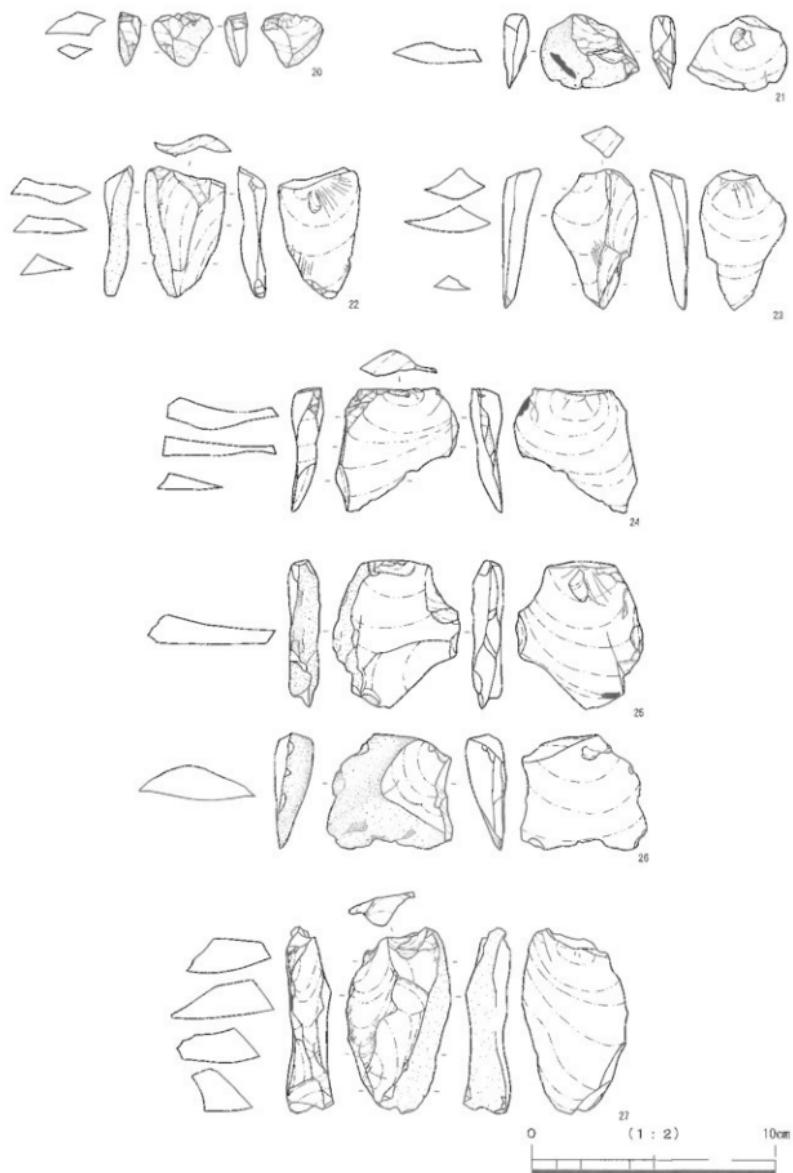
第339図 第V黒色帶出土接合資料3



第340図 第V黑色帶出土接合資料4



第341図 第V黒色帶出土接合資料5



第342図 第V黒色帶出土接合資料6

### 接合資料3

第343図、344図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫、もしくは粗割りした円礫の搬入を示す接合資料である。剥片剥離を終えた石核は搬出されたようで、石核の部分が抜け落ちて、剥片に囲まれた空間が残っている。

石核が入る空間の形から、石核の形は立方体か直方体に近い形だったと想定される。そして、剥片の接合状況から、石核の正面と上面、側面が作業面になっていたと考えられる。実測図では、正面が石核の正面作業面、上面が石核の上面作業面、左側面が石核の側面作業面に当たる。第343図に剥離順を示したように、この3つの作業面の間で頻繁な打面転移が見られる。

剥離作業の工程は下記のとおりである。上面打面から左側面作業面で第344図-7、8、3+9の剥片を剥離した後、作業面が上面に移り、ここで剥片17を剥離する。次に作業面が正面に移り、右側面を打面にして剥片13を剥離する。その後、打面が上面に移動し、左側面を作業面にして1、2、5+6、11、12、14の剥片を剥離する。再び、上面打面、正面作業面の組み合わせに戻り、4+10+16の剥片を剥離する。剥片としては1枚だが、剥離時に3枚に割れている。最後に15の剥片を剥離して、これが剥離時に縦割れして終っている。分布はブロック18を中心にして、ブロック17とブロック20に跨る。

### 接合資料4

第345図、第346図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫、もしくは分割した円礫の搬入を示すものである。分布はブロック18の中に納まっている。第345図-1の右核に26点の剥片が接合している。石核の作業面は、実測図に示した正面と左右の側面で、その作業面に不定形の剥片が積み重なるように接合していることから、連続して剥片を剥離した状況がうかがえる。1の石核だけを見ると、実測図の正面と下面が主要な作業面に見えるが、実際には、左側面に最も多くの剥片が接合しており、この面では実に20枚の剥片を剥離している。これによって、石核の大きさが縮むように小さくなっていく過程がわかる。

### 接合資料5

第347図、第348図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫、もしくは分割した円礫の搬入を示している。分布はブロック18を中心に、ブロック19に1点、ブロック外に1点分布している。これも接合した剥片に囲まれて、石核が入る部分に空間が残っている。その空間から石核の形を想定すると、立方体に近いと思われる。そして、剥片の接合状況から、石核の正面と上面、側面が作業面だったと考えられる。実測図では、正面が石核の正面作業面、上面が石核の上面作業面、右側面が石核の側面作業面に当たる。接合している剥片は、不定形で側面に自然面のあるものが多い。

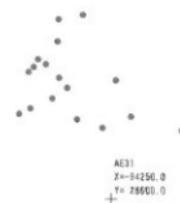
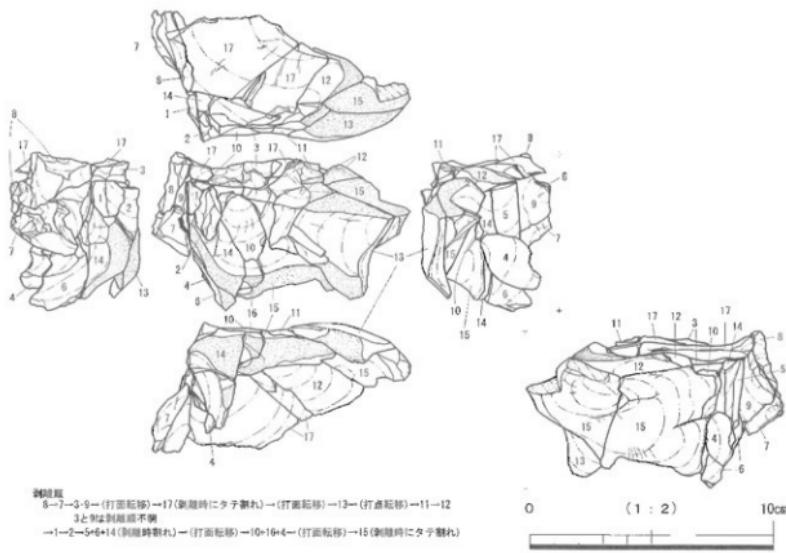
### 接合資料6

第349図に示した接合資料は、ホルンフェルスの板状剥片の一端で、打面と作業面を交互に入れ替える交互剥離を連続して行い、不定形の剥片を剥離している。剥片は小さな調整剥片と思われるものが多いことから、石器に加工できる剥片は搬出されていると思われる。最後に残った石核は、作業面を加工してスクレイパーにしている。分布はブロック18内に納まっている。

### 接合資料7

第350図に示した接合資料は、ホルンフェルスの円礫もしくは分割した円礫を搬入したことを示すものである。円礫面を除去した後に不定形の剥片を剥離している。剥片剥離の初期工程だけ行っていると思われる。分布はブロック17に納まっている。

以上の接合資料から、ブロック17、18といった遺物量の多いブロックでは、ホルンフェルスの円礫を搬入して剥片剥離を行っていることがわかる。石核は残っているものと搬出されているものが見られる。また、完成品としての石器が少ないことも特徴の一つである。



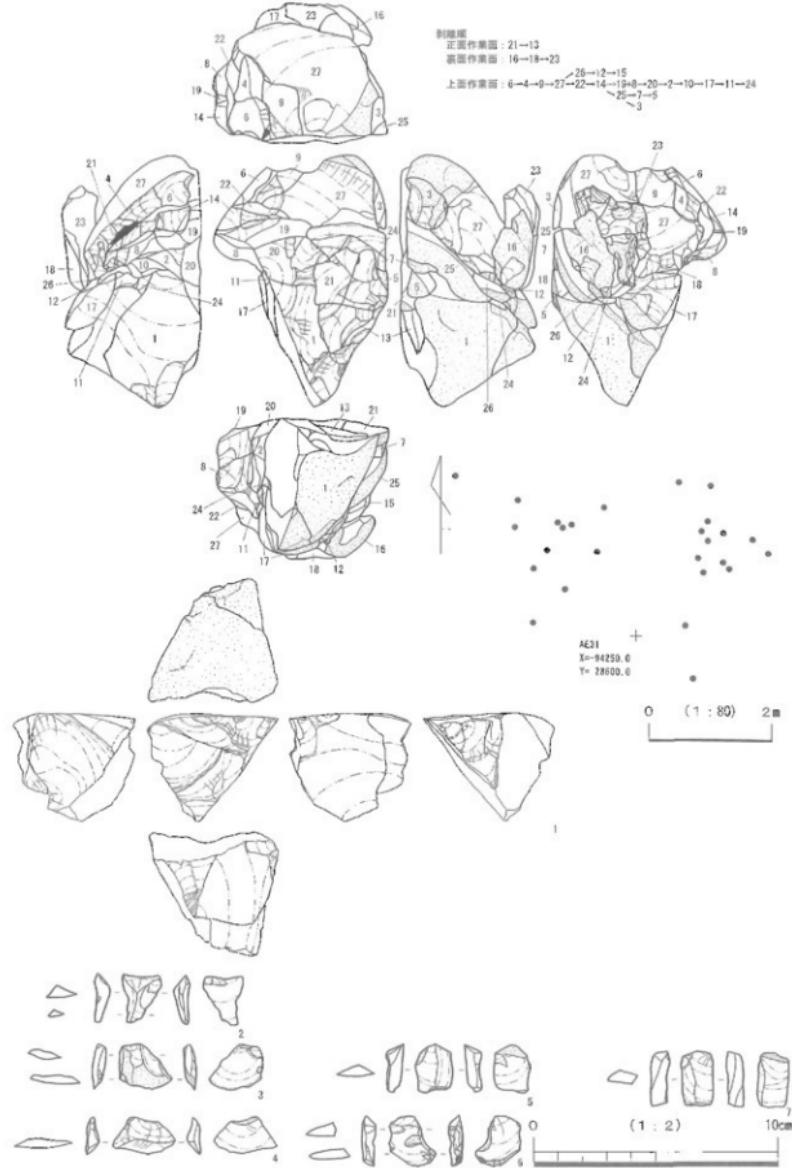
0 (1 : 100) 5m

第343図 第V黑色帶出土接合資料7



第344図 第V黒色帶出土接合資料8

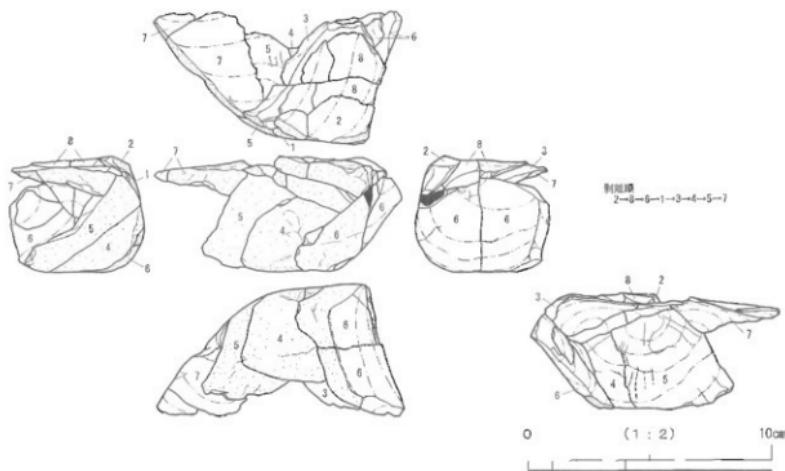
0 (1 : 2) 5cm



第345図 第V黑色帶出土接合資料9



第346図 第V黒色帶出土接合資料10



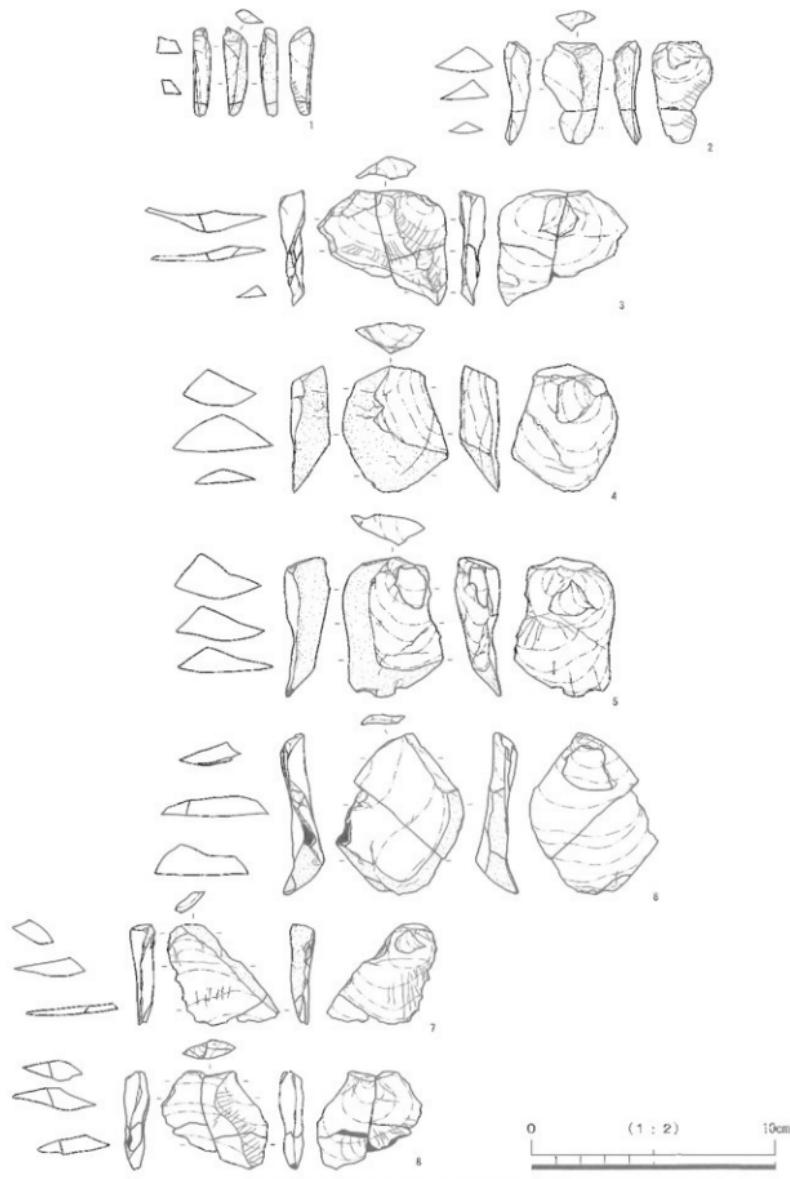
+ AF31  
X=94740.0  
Y= 28606.0



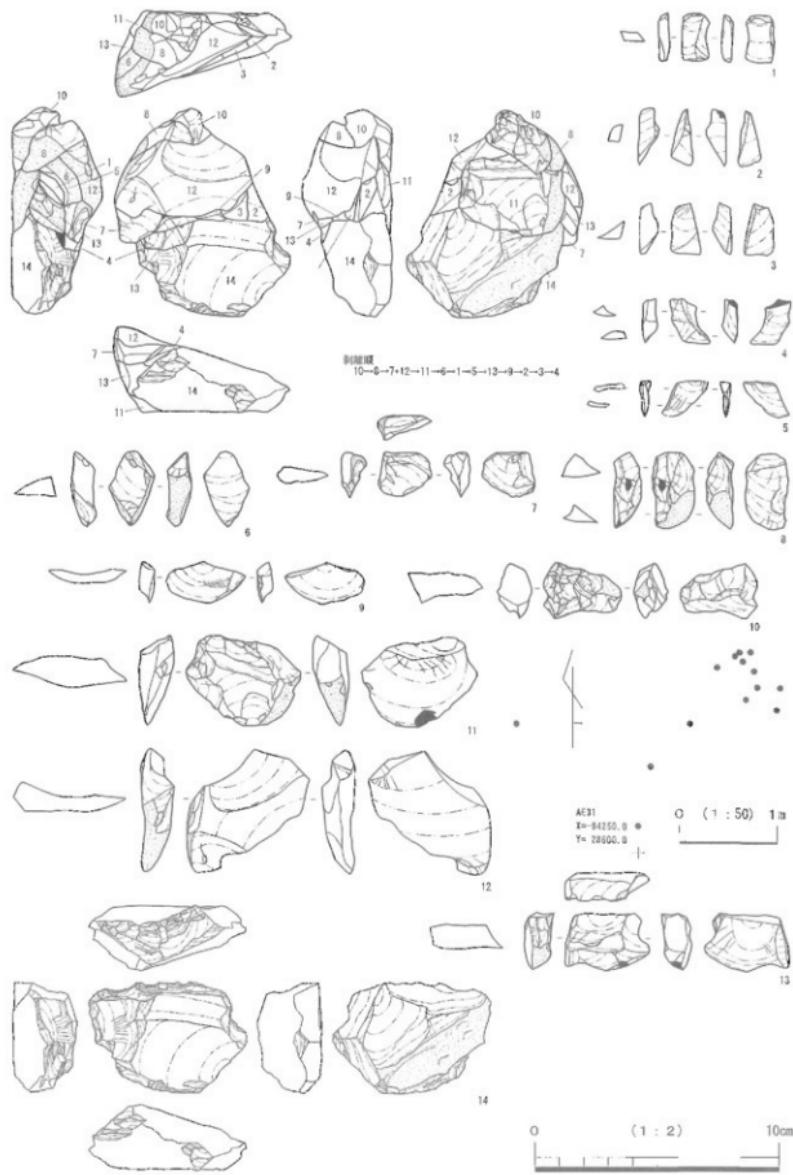
+ AF31  
X=94269.0  
Y= 28609.0

0 (1 : 200) 5m

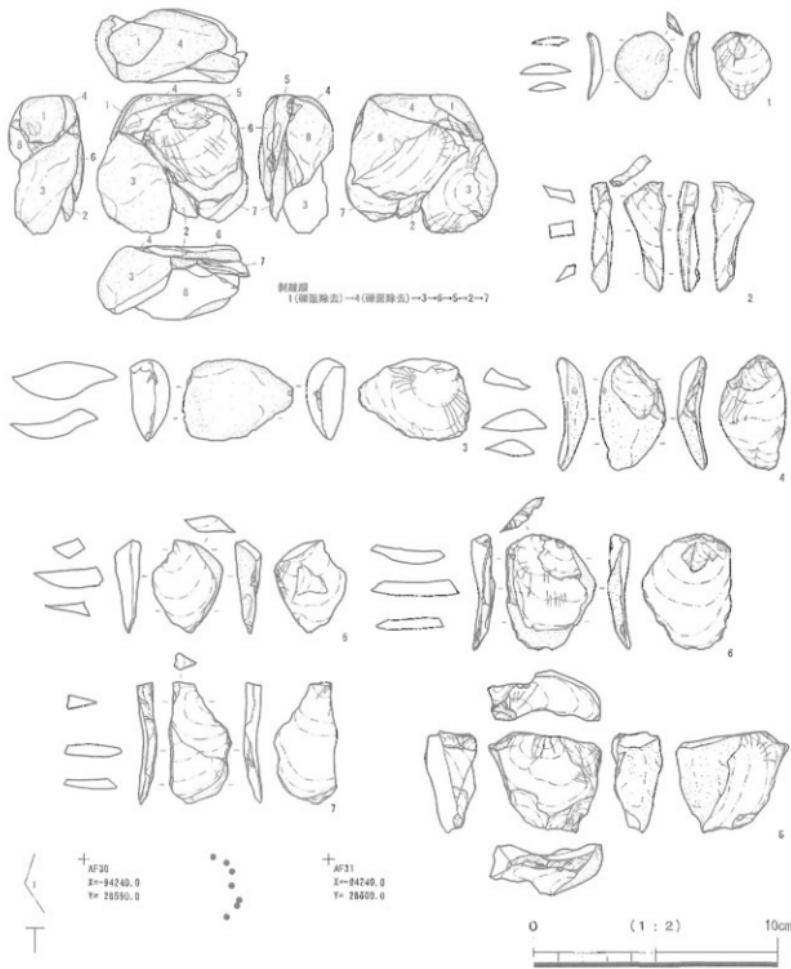
第347図 第V黑色帶出土接合資料11



第348図 第V黒色帶出土接合資料12



第349図 第V黒色帶出土接合資料13



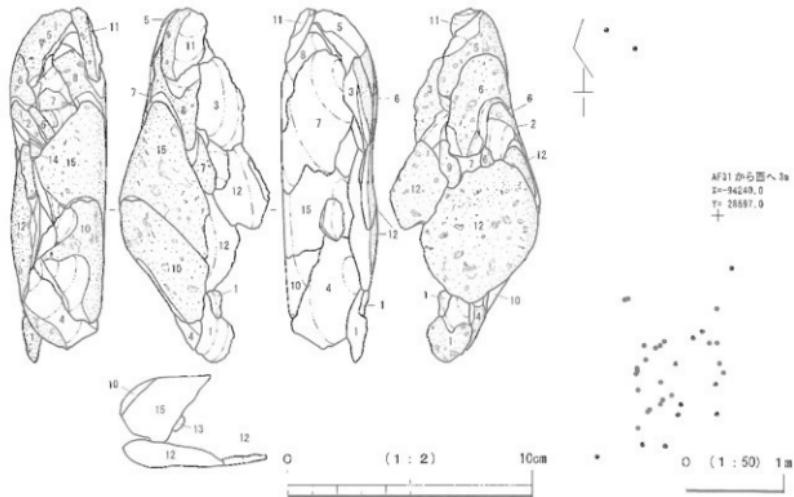
第350図 第V黑色帶出土接合資料14

### 接合資料8

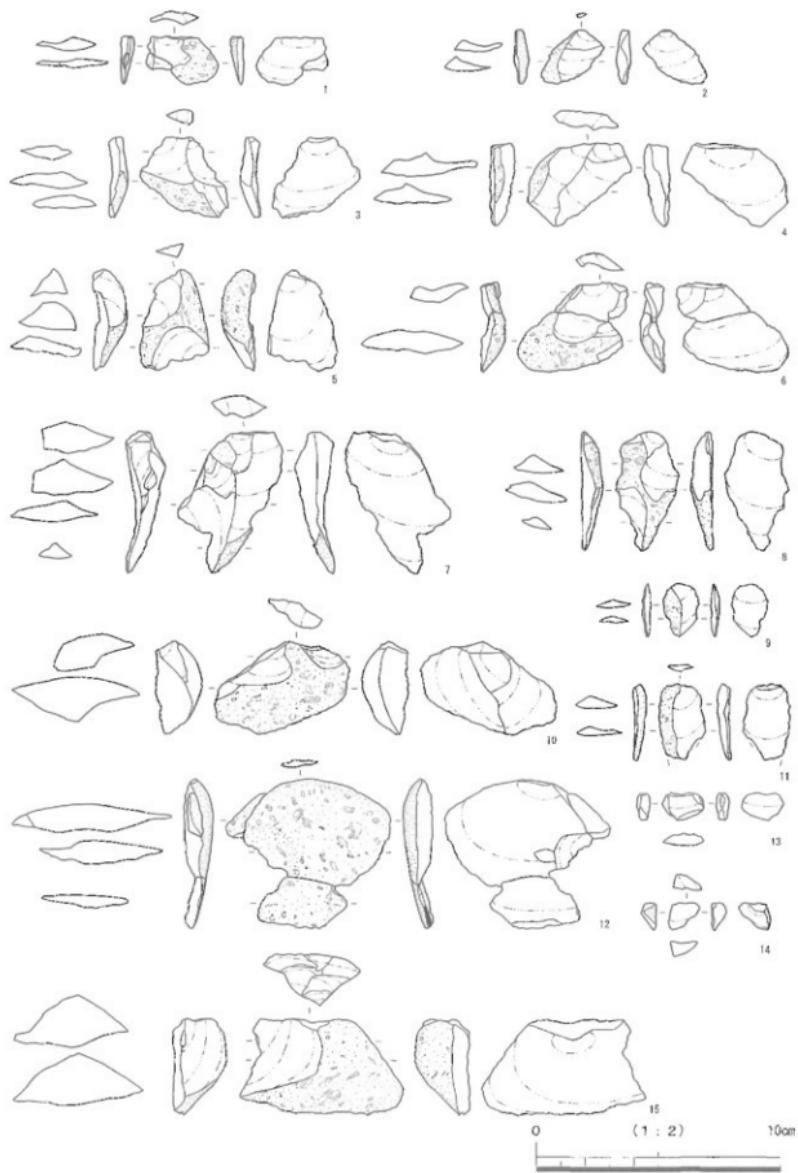
第351図～第353図に示した接合資料は、粗粒の安山岩の剥片が接合したもので、ホルンフェルスが主体になる中で日立つ石材である。第351図、第352図と第353図の接合資料同士は接合しないが、同一個体と考えて間違いない。

第351図、第352図の接合資料は、長楕円形の円盤の周囲から不定形の剥片を剥離したことを示している。剥片は、長楕円形の空間を包み込むように接合しており、この空間に入る石器の形は、細長く扁平な形を想定できる。粗粒の安山岩を使った石器は、他に出土していないが、石材の質から考えて、ナイフ形石器やスクレイパーのような利器は考えられない。接合した剥片に包まれた空間の形から、石斧を製作した可能性が高い。

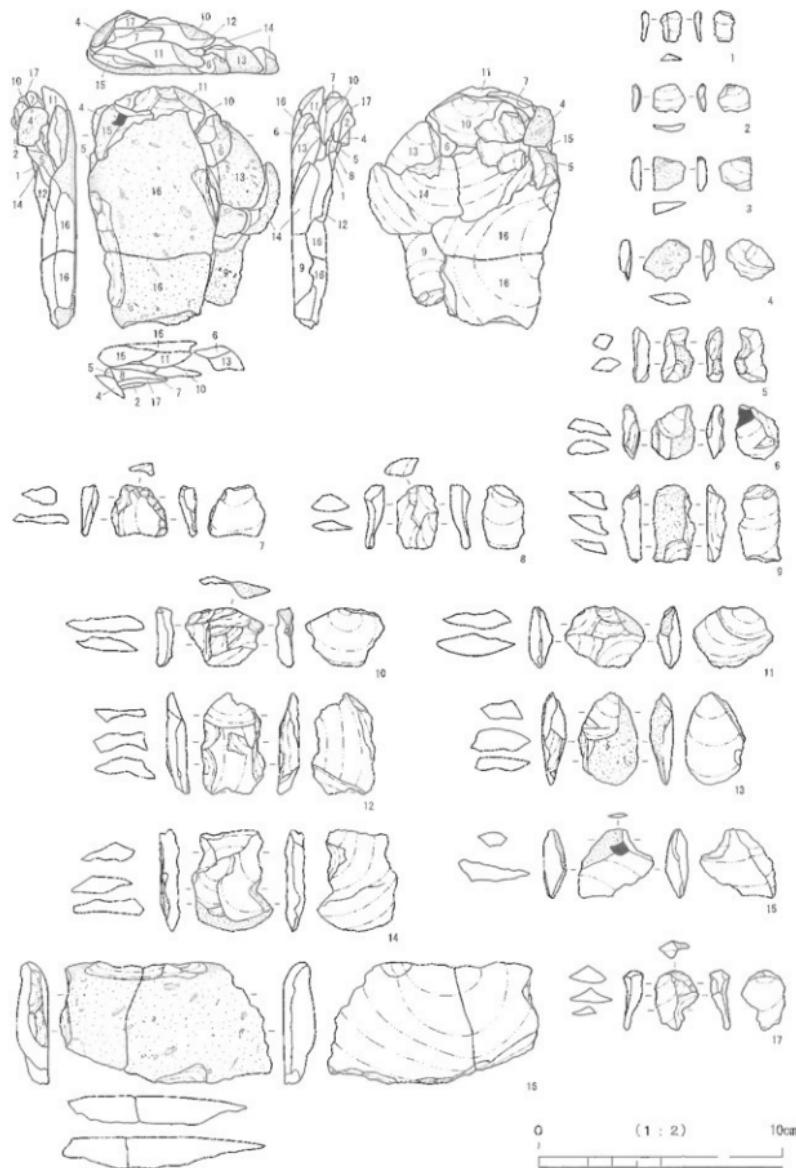
第353図に示した接合資料も平坦な礫面を残す素材を使い、円盤面を除去して素材を薄くしながら幅を縮めていくように剥片を剥離していることから、これも石斧を製作した可能性が高い。



第351図 第V黑色帶出土接合資料15



第352図 第V黑色帶出土接合資料16

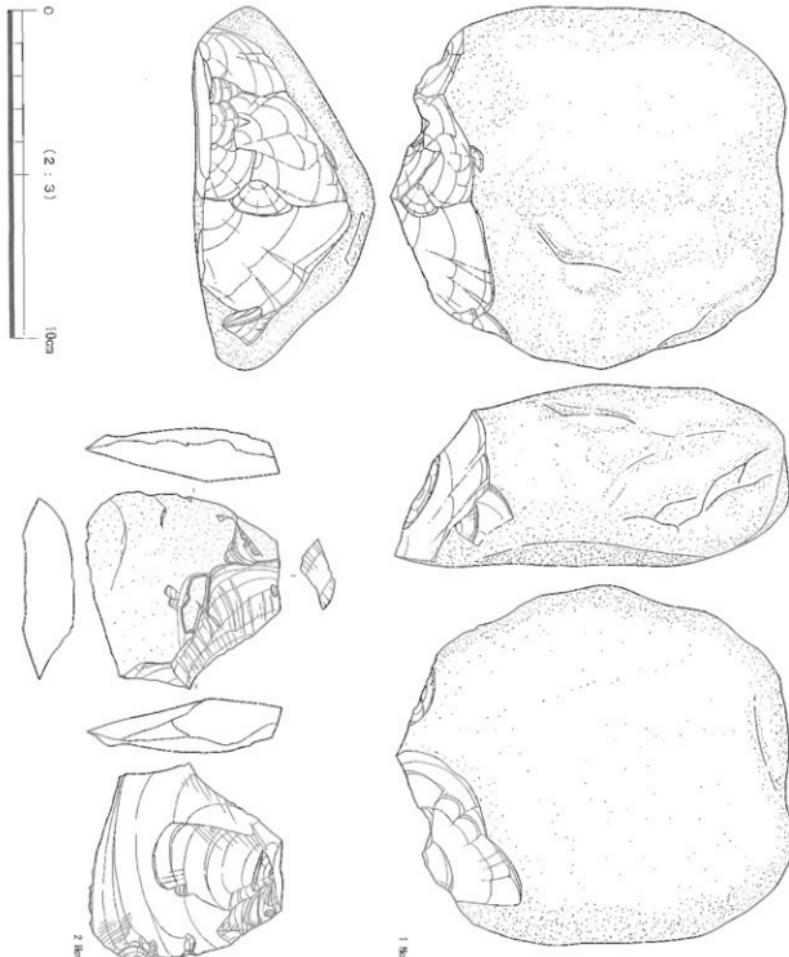


第353図 第V黒色帶出土接合資料17

## 第9節 第VII黒色帶の遺物

最深部にある文化層で、石器が2点出土した（第354図）。この層からは採集した炭化物から、測定年代で、 $32,080 \pm 170$ yrBP、補正年代で、 $32,060 \pm 170$ yrBPの年代が得られている。

第354図-1はホルンフェルス製の礫器、もしくは石核である。円礫と亜角礫の中間のような礫を用いており、平坦になった礫面を打面にして、礫を斜めに分断するように剥離を入れている。2はホルンフェルスの剥片で、1とは個体が違う。平坦打面を持ち、表面には自然面が残っており、この剥片が剥離された方向とは90度近くずれた方向からの剥離面が見られる。裏面は打瘤が発達している。



第354図 第VII黒色帶出土石器

## 第7章　まとめ

### 第1節　的場古墳群の調査

静岡県内における横穴式石室の導入は、6世紀前半に始まり、時期が下るに従って、東に広がっていったと考えられている。しかし、その伝播は単純な東進ではなく、畿内系石室に関する情報が変形することなく純粹に伝わり、拠点的に上位階層の古墳に採用される場合や、三河系石室に関する情報が、東進しながら変形していく場合、横穴式石室という発想だけが伝わり、それが地域内で独自に解釈され、葬送方式に採用される場合が想定されている（鈴木2003）。

富士川～愛鷹山麓では、畿内系の横穴式石室は見られず、三河系の横穴式石室の伝播も明確ではない。代わりに、無袖式横穴式石室を採用し、石室開口部に段を設ける独特の形態が見られる。鈴木2007では、横穴式石室に関する情報が限定的に伝わった地域と解釈されている。

さて、的場古墳群では、主体部が大きく破壊された1号墳を除き、2～4号墳で開口部に段をもつ横穴式石室が見られた。段を持つ石室の系譜は、鈴木2003、井鍋2003、土生田2010、菊池2010、鈴木2010といった最近の研究によれば、豊穴式横穴式石室に求められる可能性が示されている。墓域内外を区別するという、人間の自然な発想からすれば、石室内部と外部の境界に壁を作ることで、墓の中と外を区別する目的があったことは確かであろう。その段の作り方は、各古墳によって違いが見られる。

2号墳では、墓坑内を、墓道よりも一段掘り下げ、墓道と墓坑の間に階段状の段を作っている。3号墳では、墓道から墓坑に向かって下り傾斜を作り、石室内は反対に上り傾斜にすることによって、石室開口部が最も低くなるようにしている。そして、その部分に石を積み上げて壁を作っている。4号墳は、墓道と墓坑を掘削する際、石室開口部を掘り残すことで、はっきりとした壁を作っている。

井鍋2007によれば、段の作り方には他の方法もあるとのことから、段を構築することで、石室の中と外を分ける境界を作ることに意味があるのであって、その方法までは規制がなかったか、あったとしても緩やかな規制であったと考えられる。

このような有段無袖式の横穴式石室の源流を考える上で重要な古墳として、富士市の中原4号墳がある。ここからは鍛冶道具が出土していることから、鉄生産を掌握する立場にある人物が葬られたと考えられている。

的場古墳群では、3号墳から鐵鐸が2点出土している。報告でも書いたように、鐵鐸は、鉄生産にかかるる集団の祭祀具と考えられている。3号墳では、鍛冶道具や鉄滓といった鉄生産に直結する遺物は出土していないが、鐵鐸が出土したことから、鉄生産との関わりは否定できないであろう。したがって、有段無袖式の横穴式石室と鉄生産者集団との関係を考える上での新資料となる。

副葬品では、3号墳で良好な資料が得られた。特に第3遺物群と第4遺物群では、鉄製品の一括資料が出土した。ともに大刀1本、刀子1本と鉄鎌群の組み合わせからなるもので、鉄鎌の形態は、第3遺物群では、平根三角形式短頭鎌、柳葉形長頭鎌、三角形式長頭鎌が主体で、第4遺物群では、長柄円形で鑿頭鎌に近いもの、もしくは片刃箭鎌に近いものが主体であった。3号墳が作られた6世紀後半は、古墳時代後期に見られる鉄鎌のすべての形式が揃う時期で、3号墳から出土した鉄鎌の形式も、この時期に見られるもので、その組成は、6世紀後半に見られる一般的な組み合わせである。

4号墳は主体部が破壊されているため、ここで出土した副葬品は、必ずしも良好な一括資料とは言えないが、刀子に鉄鎌が伴っており、ほぼが1点出土していることから、大刀も1本副葬されていたことになり、3号墳の第3遺物群、第4遺物群と同じ組み合わせになる。鉄鎌では、形の崩れた三角形鎌や飛燕式といった、6世紀末～7世紀初頭に出現する形式が見られることから、3号墳に統いて築造された古墳と考えられる。

## 第2節 的場遺跡の調査

### 縄文時代

丘陵上では、炉跡と集石がまとまって検出できた。いずれも火を使ったことを示す遺構である。各遺構の時期を決める遺物が乏しいが、包含層から出土した土器から考えると、早期から中期にかけて作られた遺構が集まっているものと考えられる。住居跡は2軒しか検出できなかつたことと、包含層から出土した遺物に、装飾品や祭祀用品が含まれないことから、やはり、居住地ではなく、火を使った特定の活動を継続して行っていた場所と考えられる。

縄文土器は、早期～中期の土器が出土した。早期では、田戸下層式土器の中に楕円文土器を入れた状態で出土した土器を特記できる。田戸下層式土器には、貝殻腹縁文で楕円文を模したような文様が見られ、楕円文土器には沈線文を入れてあるといふ、双方の土器が融合したような文様構成が見られた。このことは、田戸下層式と楕円文土器が並行することと、両者が密接な関係にあることを示している。

前期では、十三菩提式土器が多く見られた。十三菩提式は、縄文時代研究プロジェクトチーム1997によって、時期が細分されており、これを参考にすると、的場遺跡で出土した十三菩提式土器は、三角印刻文を入れた古い段階から、細密浮線文を入れた新しい段階まで、各時期の文様が揃っている。

十三菩提式土器と同時期の大歳山式土器は、十三菩提式土器と分布が重なる他、文様構成が大歳山式、胎土と施文方法が十三菩提式といった、両型式が融合した土器が見られた。白っぽい胎土に薄い器壁、「Σ」形の結節竹管文といった、典型的な大歳山式土器も出土していることから、十三菩提式土器を持つ集団が、大歳山式土器を模倣して作った土器と考えられる。これも十三菩提式と大歳山式が同時期であることを示す資料である。

### 旧石器時代

第V黒色帯で5つのブロックが、まとまった状態で出土した。内容は、格段に大きなブロック18があり、その周辺に中規模のブロック17と小規模なブロック16、19、20が分布している。このような大中小の組み合わせは、一般に見られる組み合わせで、最大規模のブロック18では原石の搬入、石核の製作、剥片剥離、石核の廃棄といった一連の工程を示す接合資料が複数あり、ブロック17では原石搬入以降の一連の工程を示す接合資料が一例見られた。小規模なブロック16、19、20では、接合する資料は少なく、石器製作というよりも、石器の搬入と廃棄によって作られたブロックと考えられる。

大小の3つの規模のブロックが1つのセットになることは、野口1996で指摘されたことであり、的場遺跡の第V黒色帯のブロック群は、ブロック群の1つの単位を表す好例であろう。

### 参考文献

- 縄文時代研究プロジェクトチーム1997「神奈川県における縄文時代文化の変遷IV 前期末・中期初頭期～十三菩提式～」『研究紀要2 かながわの考古学』神奈川県立埋蔵文化財センター、財團法人 かながわ考古学財團  
井鍋哲之2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会  
大谷宏治2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄器の変遷とその意義」『研究紀要』第10号 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
鈴木一有2003「東海東部の横穴式石室に見る地域圈の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会  
井鍋哲之2010「東駿河の横穴式石室」『東日本の無袖石室』雄山閣  
菊池吉修2010「駿河」『東日本の無袖石室』雄山閣  
鈴木一有2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』雄山閣  
野口 淳1996「武藏野台地IVド・V層段階の遺跡群－石器製作の工場配置と連鎖の体系－」『旧石器考古学』第51号 旧石器文化談話会  
土生田純之2010「I 東日本の無袖石室」『東日本の無袖石室』雄山閣

## 写真図版

図版 1



調査区全景

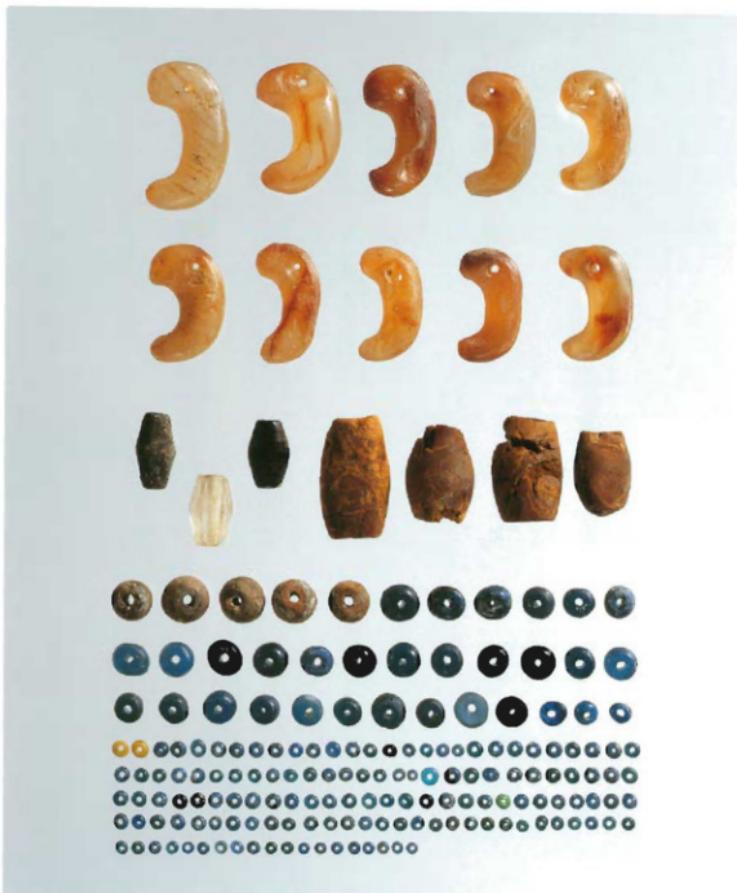
図版2



基本土層断面

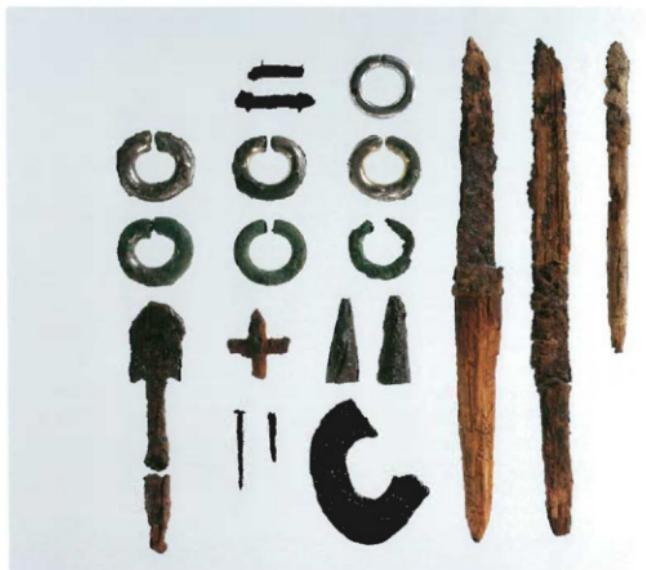


4号墳出土玉類

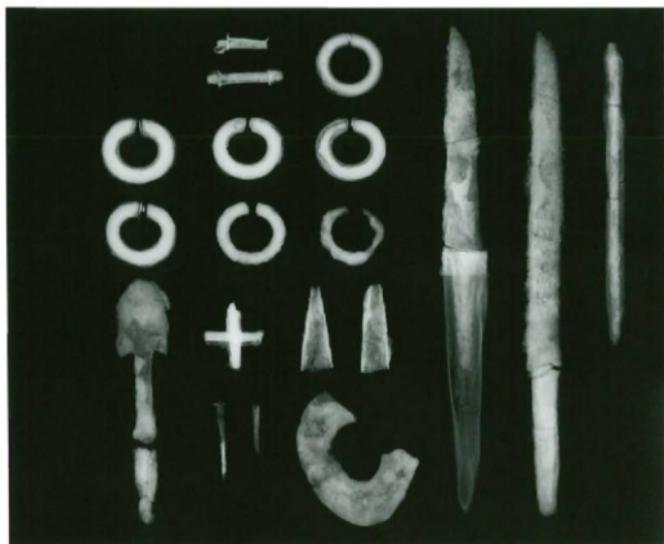


3号墳出土玉類

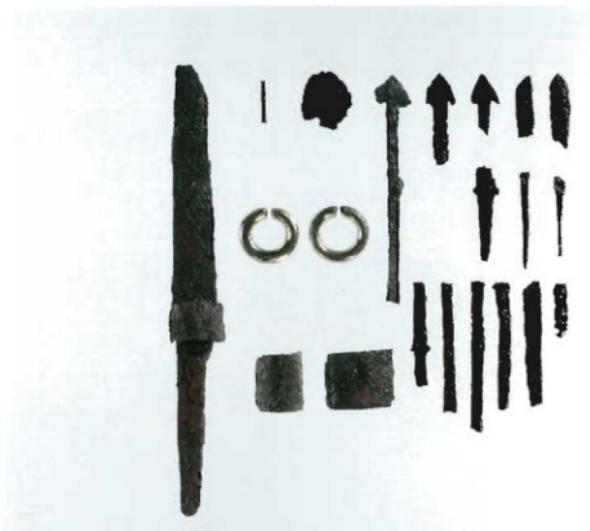
図版4



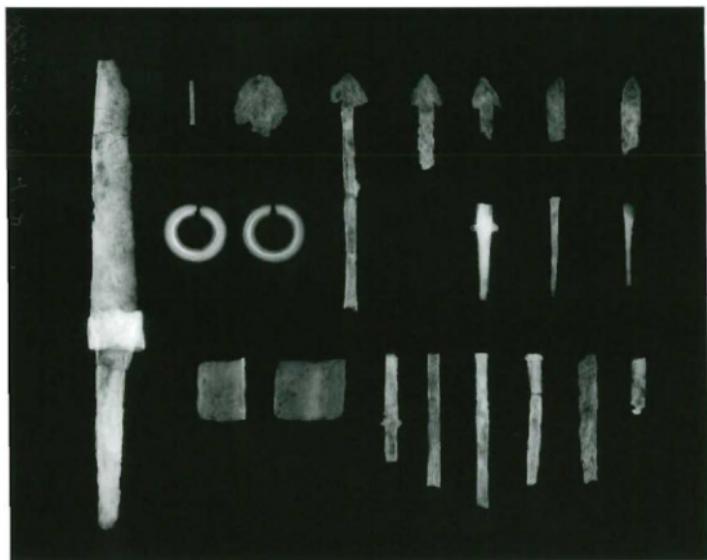
3号墳出土金属製品



3号墳出土金属製品X線透過写真



4号墳出土金属製品



4号墳出土金属製品X線透過写真

図版6



共伴した田戸下層式土器と橢円文土器



第V黑色帶出土接合資料

図版8



第V 黒色帯出土接合資料と第VII 黒色帯出土石器



竪穴住居跡1 遺物出土状況



竪穴住居跡1 完掘状況

図版10



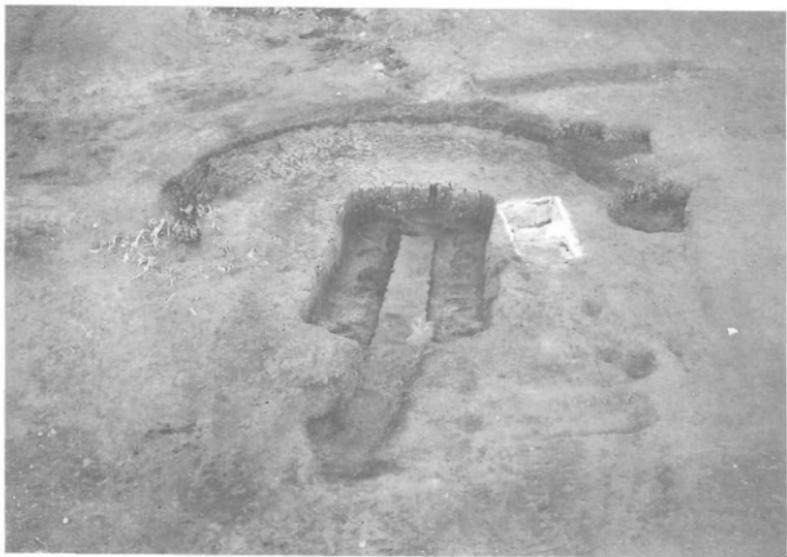
竪穴住居跡 2 床面検出状況



1号填完掘状況

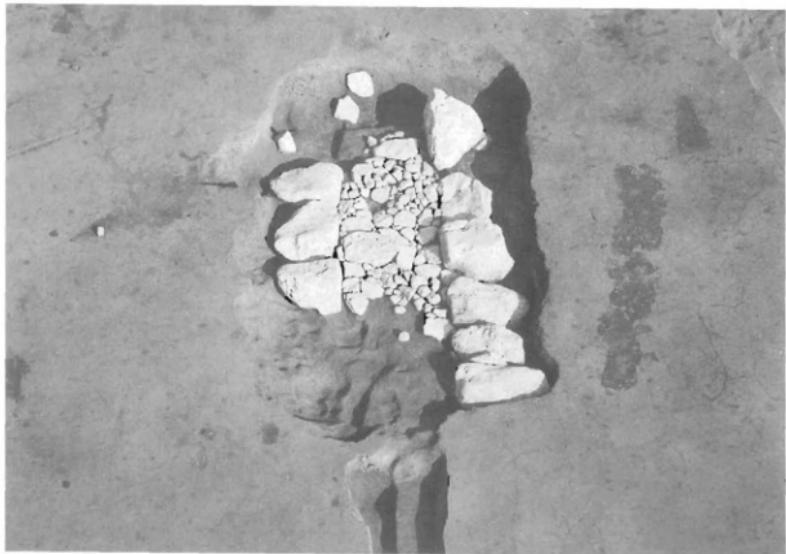


2号墳石室完掘状況

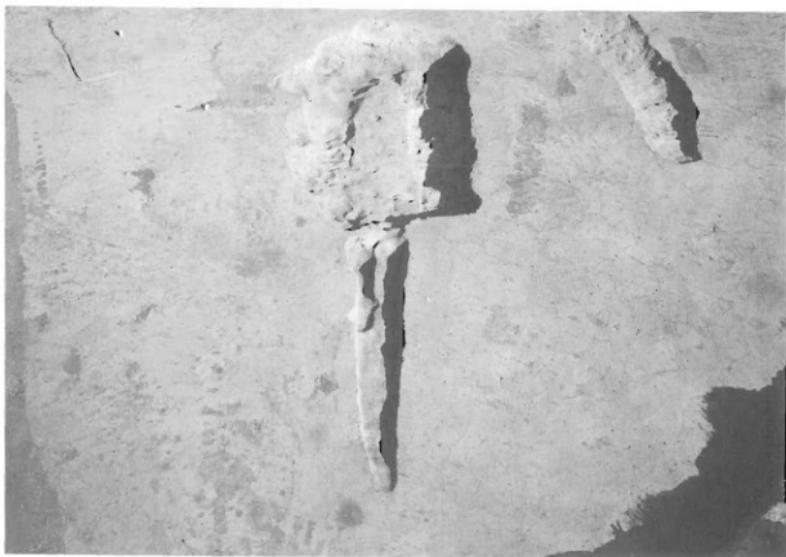


2号墳墓坑完掘状況

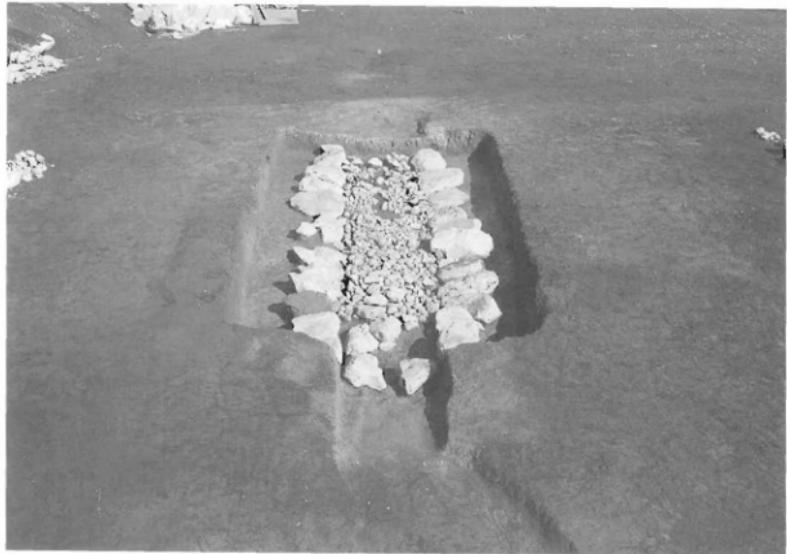
図版12



4号墳石室完掘状況



4号墳墓坑完掘状況

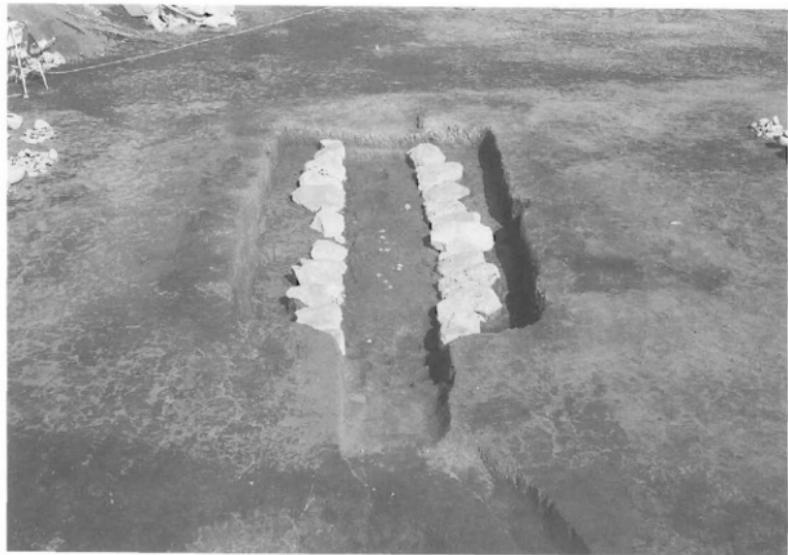


3号墳石室完掘状況



3号墳閉塞石検出状況

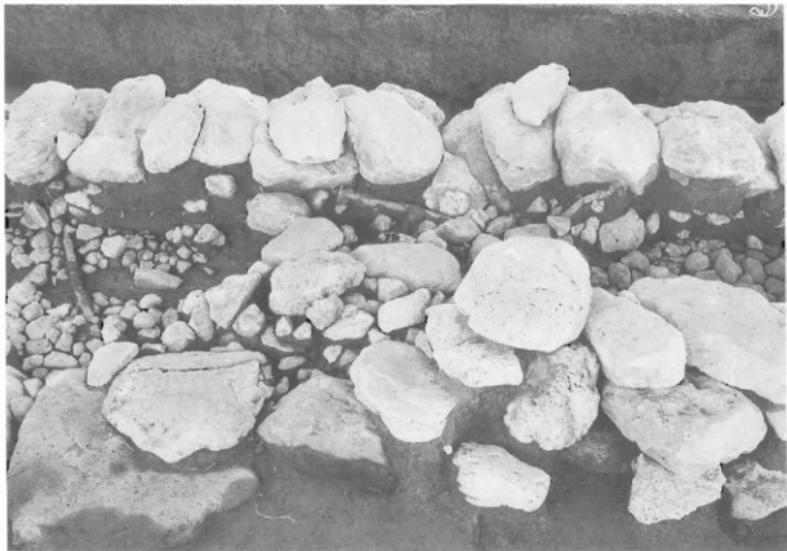
図版14



3号填根石検出状況



3号填墓坑完掘状況



3号墳第3遺物群出土状況



3号墳第4遺物群出土状況

図版16



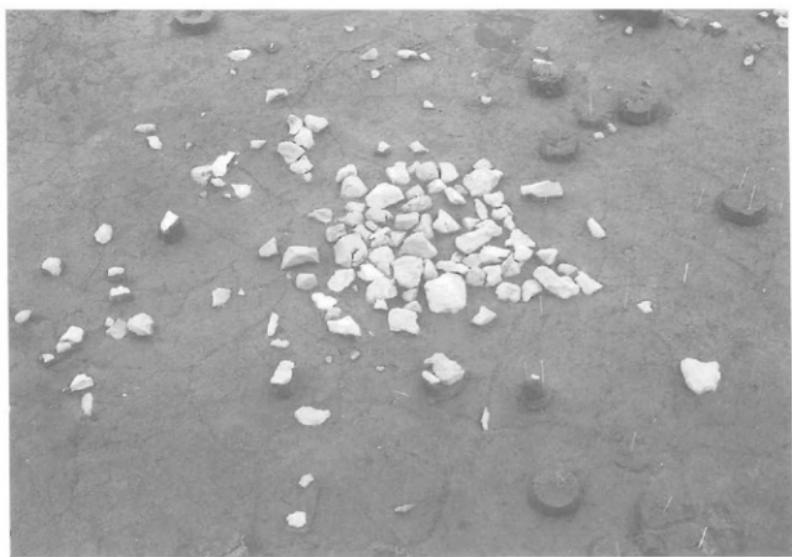
土坑1遺物出土状況



田戸下層式土器と楕円文土器の共伴状況



集石24出土状況



集石25出土状況

図版18



集石14断面



集石16出土状況



集石17出土状況



集石22出土状況

図版20



集石30出土状況



集石34出土状況



礫群18出土状況



礫群25出土状況

図版22



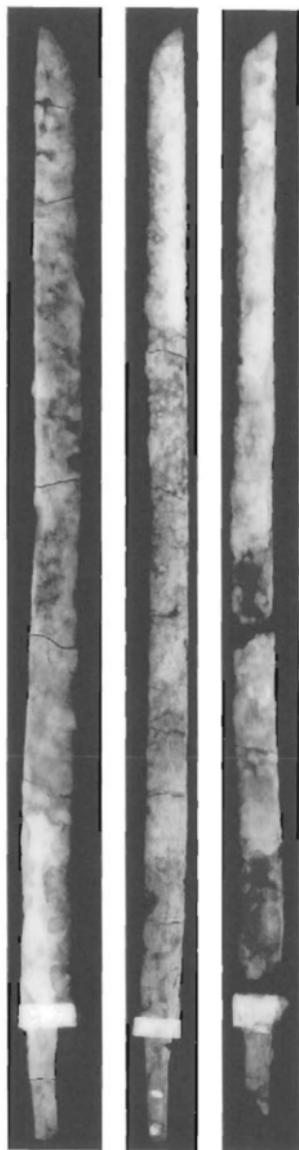
第V 黒色帶遺物出土状況



第VII 黒色帶遺物出土状況

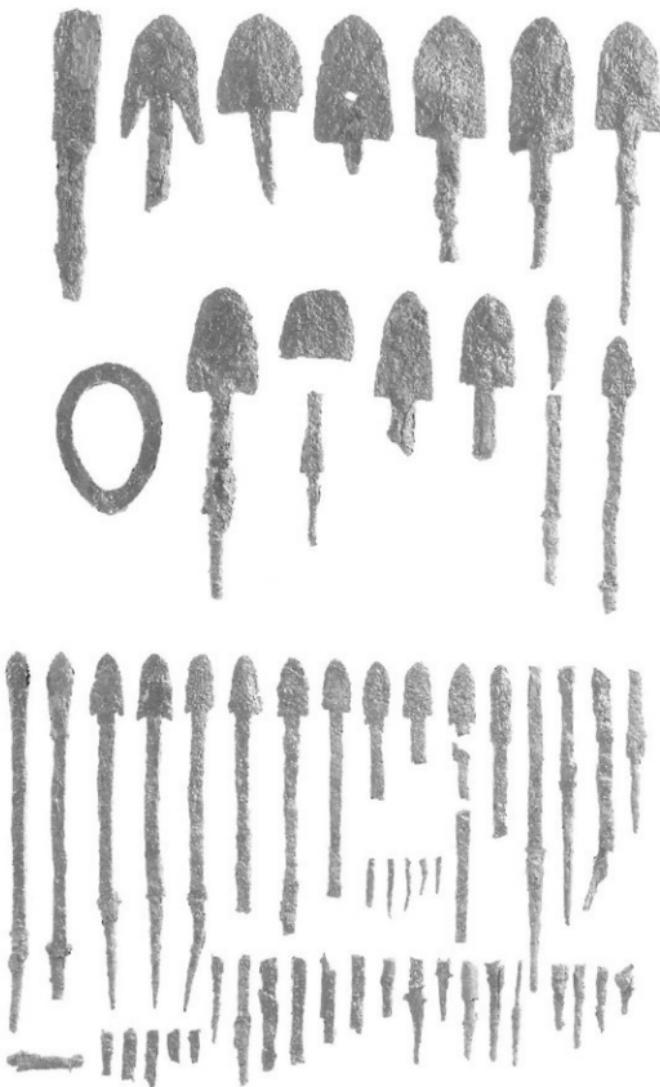


3号墳出土大刀

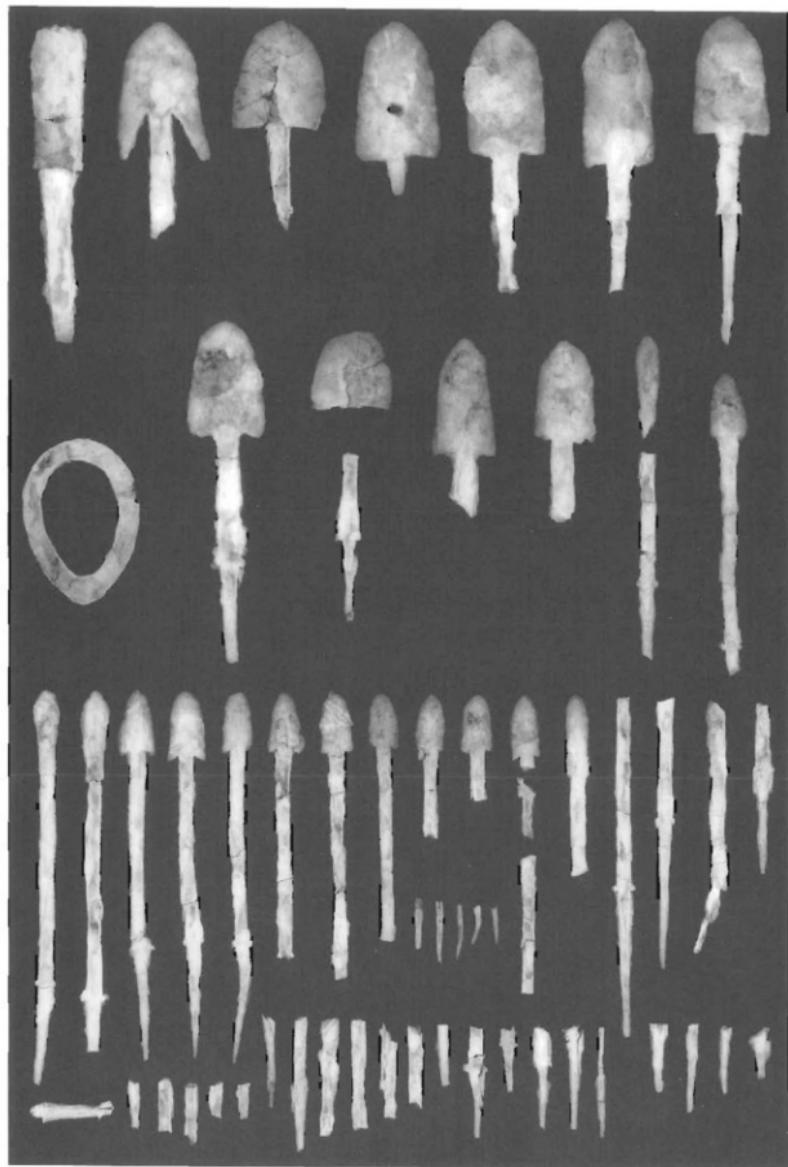


3号墳出土大刀X線透視写真

図版24



3号墳第3遺物群

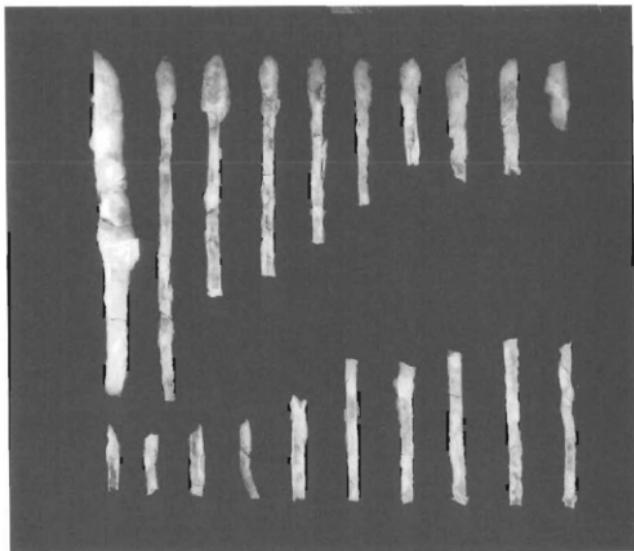


3号墳第3遺物群X線透過写真

図版26



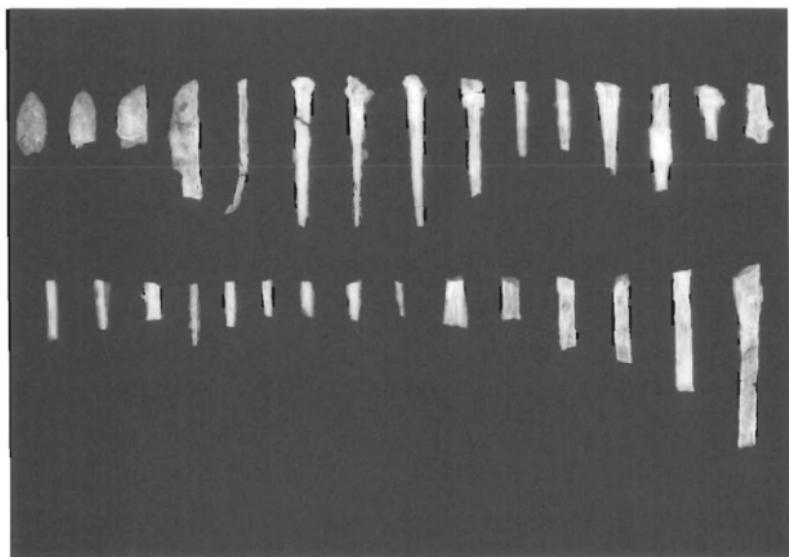
3号墳第4遺物群



3号墳第4遺物群X線透過写真



2号墳出土遺物



2号墳出土遺物X線透過写真

図版28



竪穴住居跡1



4号窯



古墳1



古墳1



古墳1



竪穴住居跡1



3号窯



上野真土郡の高麗瓦窯

平安時代～古墳時代出土土器



縄文時代早期の土器

図版30

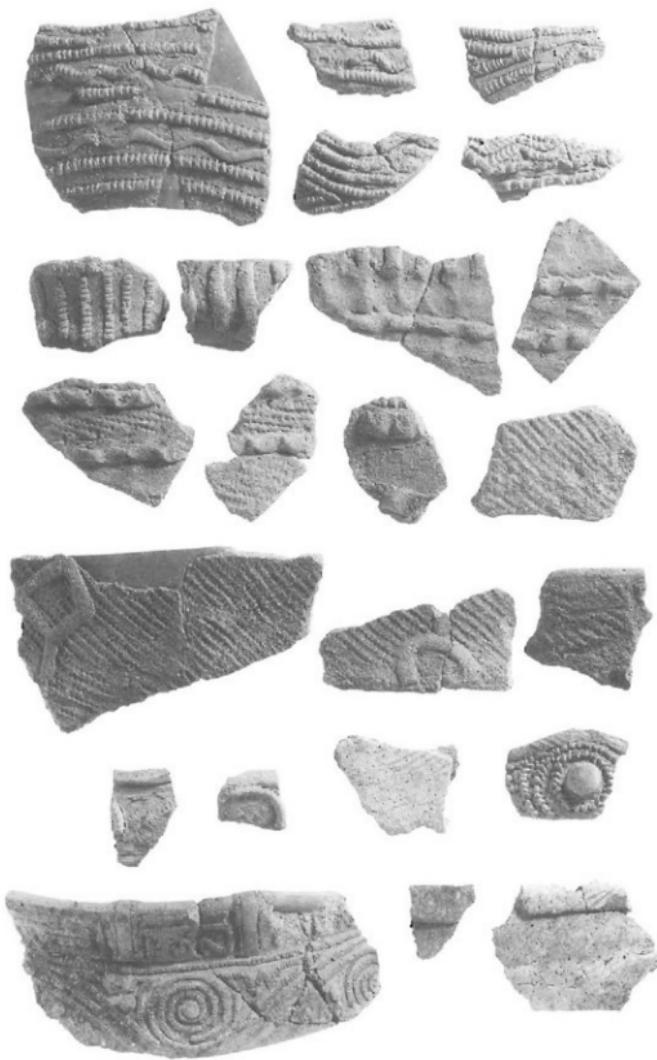


縄文時代前期～後期の土器

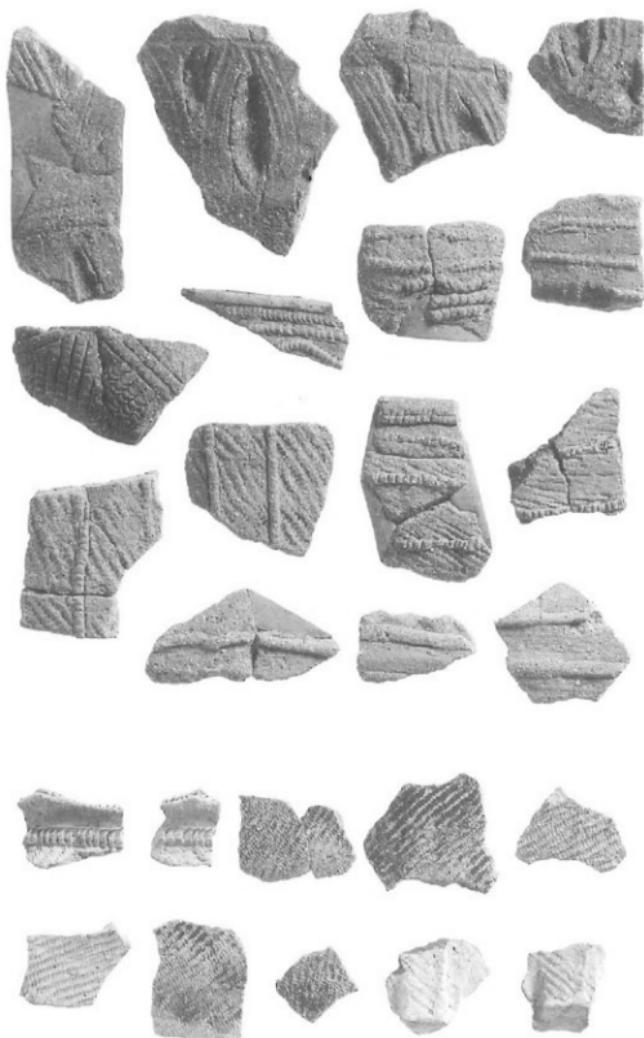


遺物集中域1出土縄文土器

図版32

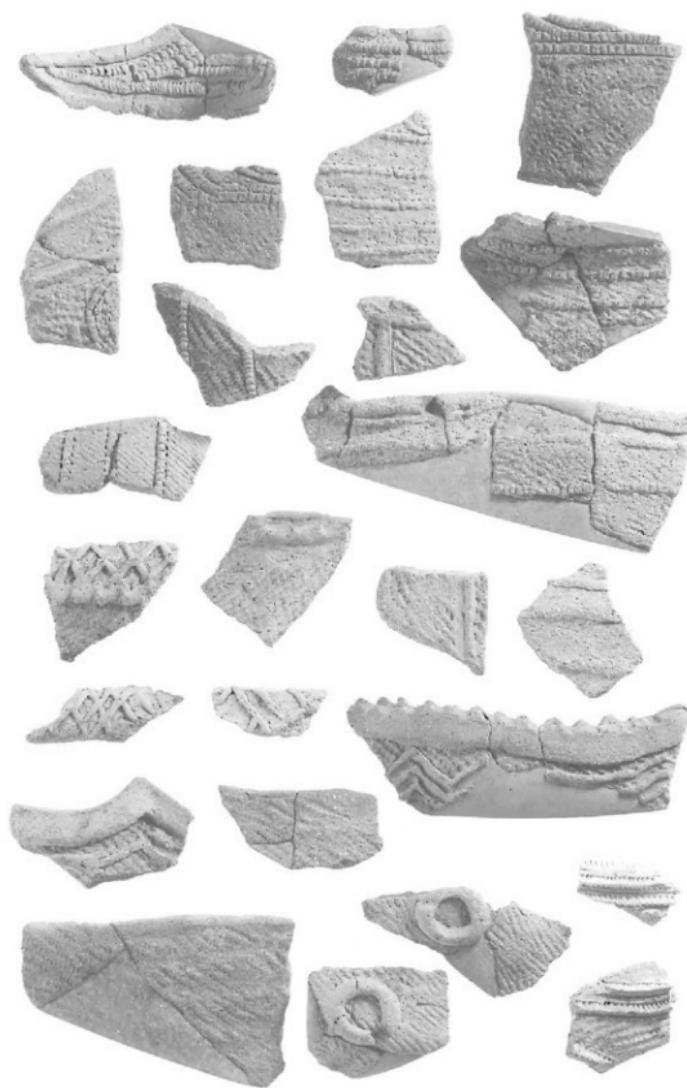


12区遺物分布域1 出土繩文土器



12区遺物分布域2出土縄文土器

図版34

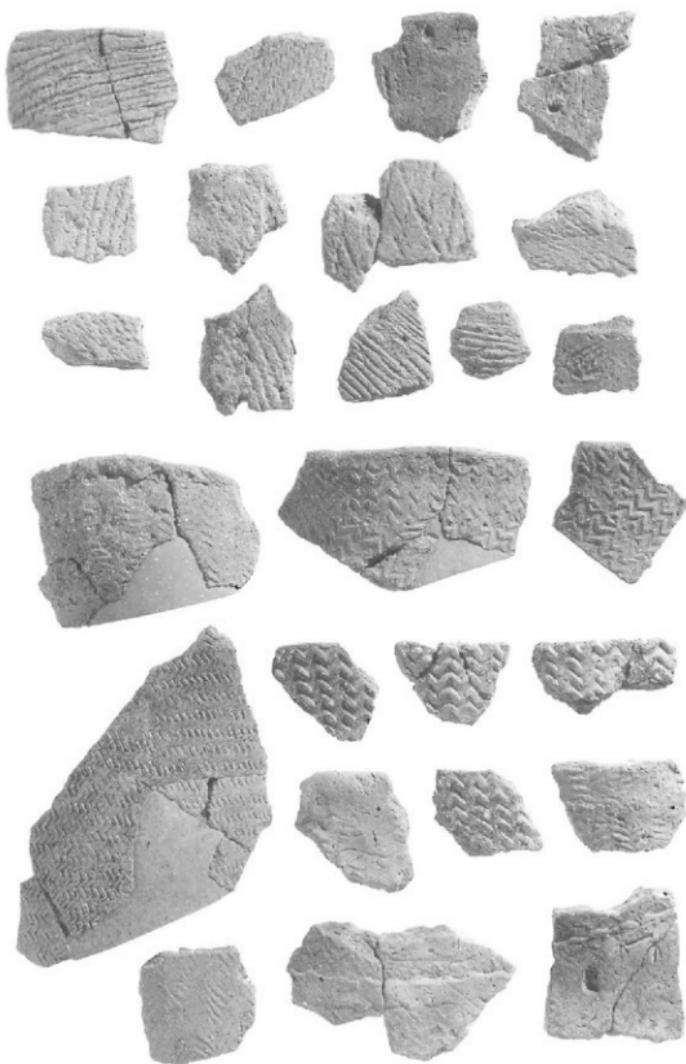


12区遺物分布域3出土縄文土器

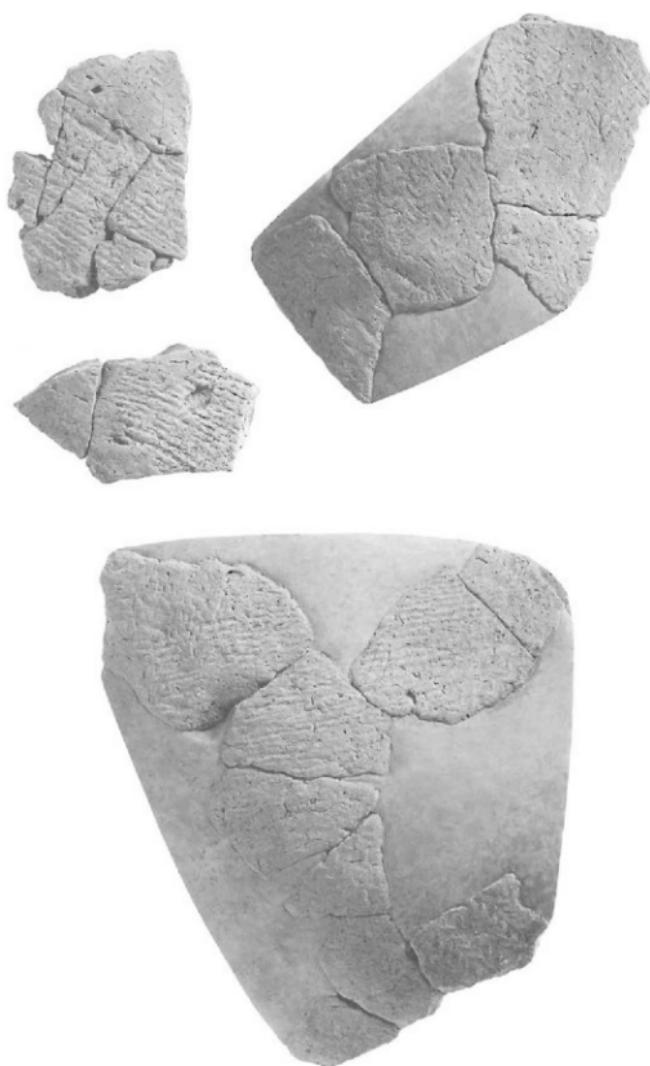


撚糸文土器

図版36

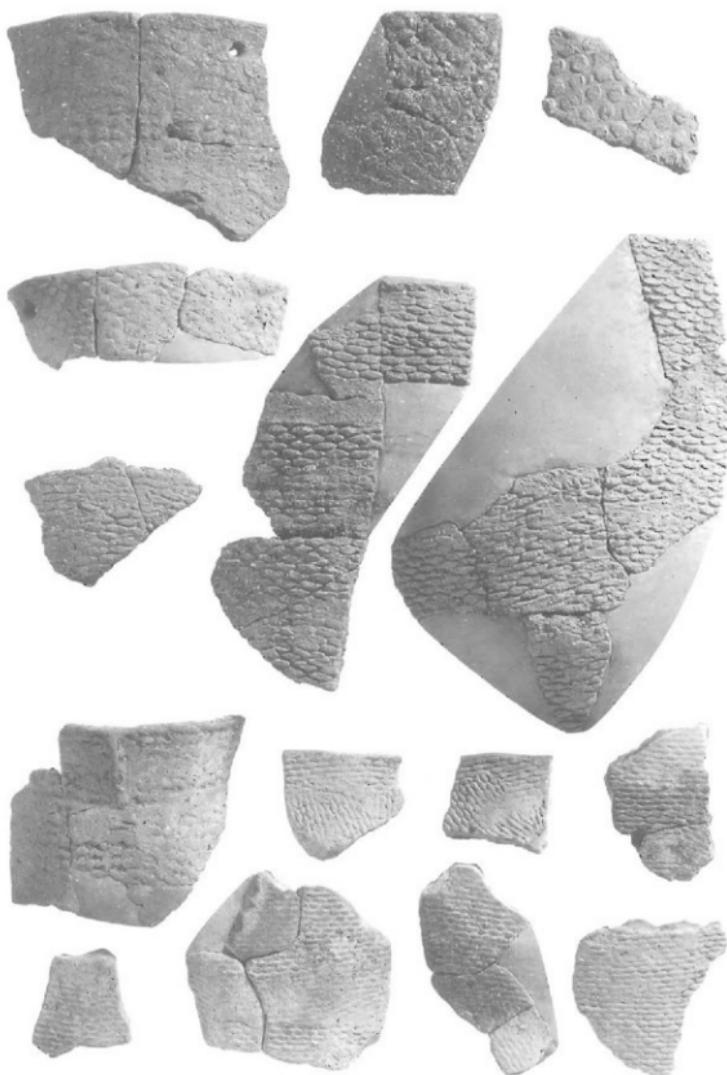


燃糸文土器と山形文土器

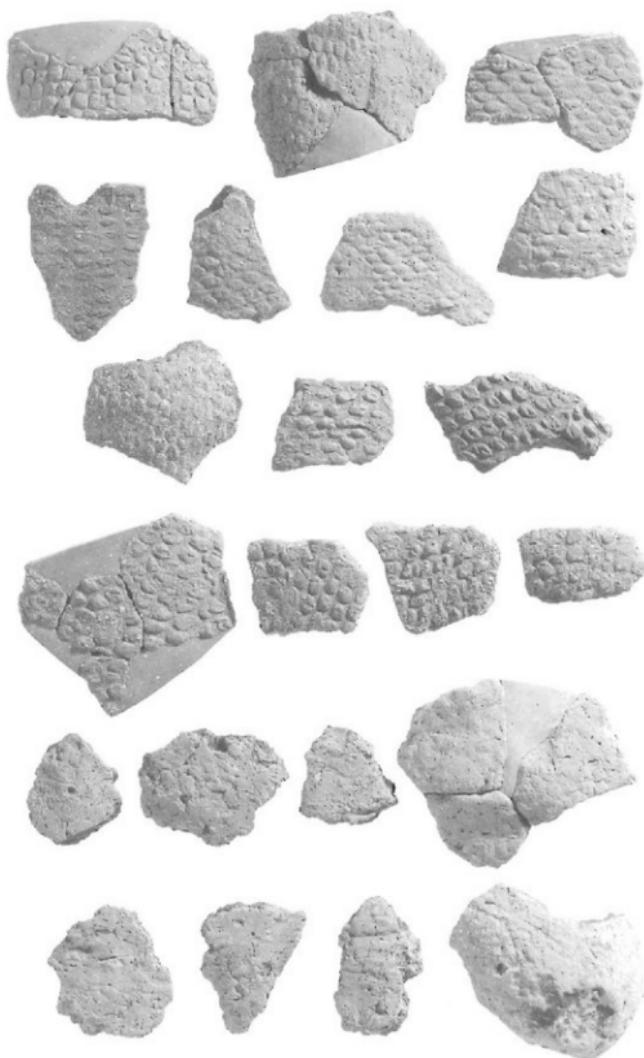


撲糸・山形文土器

図版38

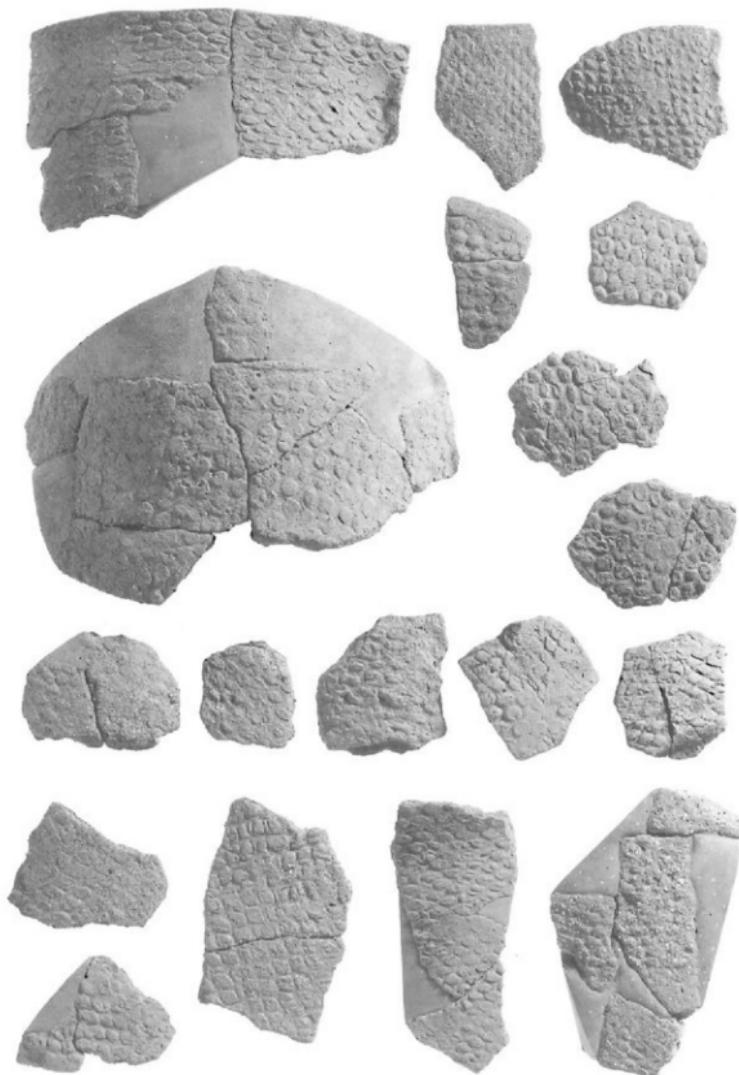


横円文土器 1

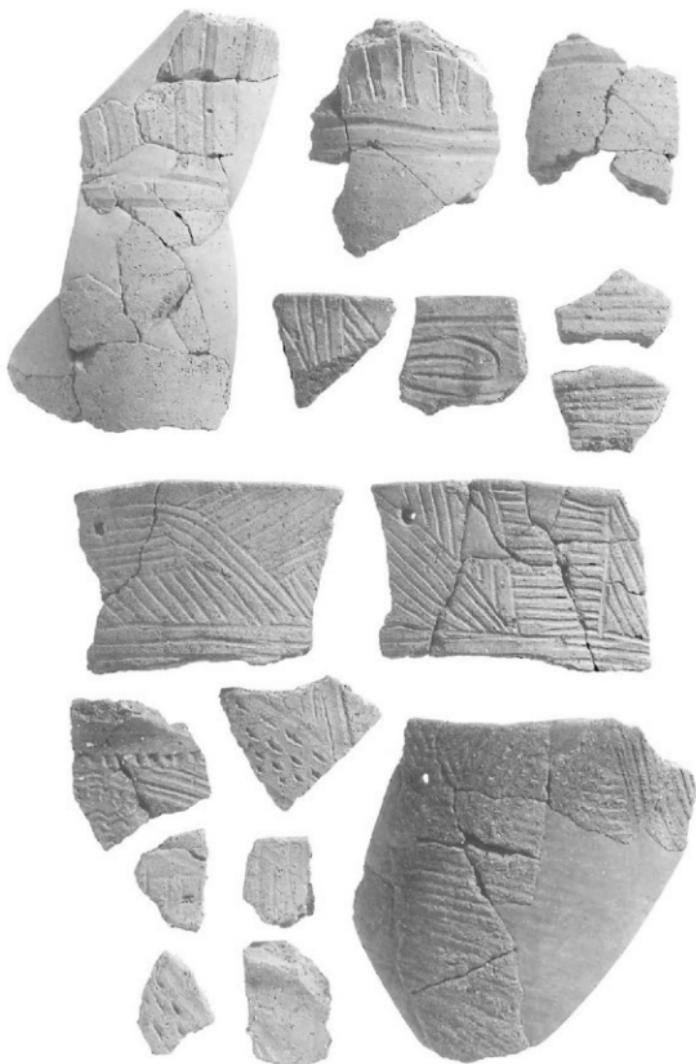


橢円文土器 2

図版40



橢円文土器 3

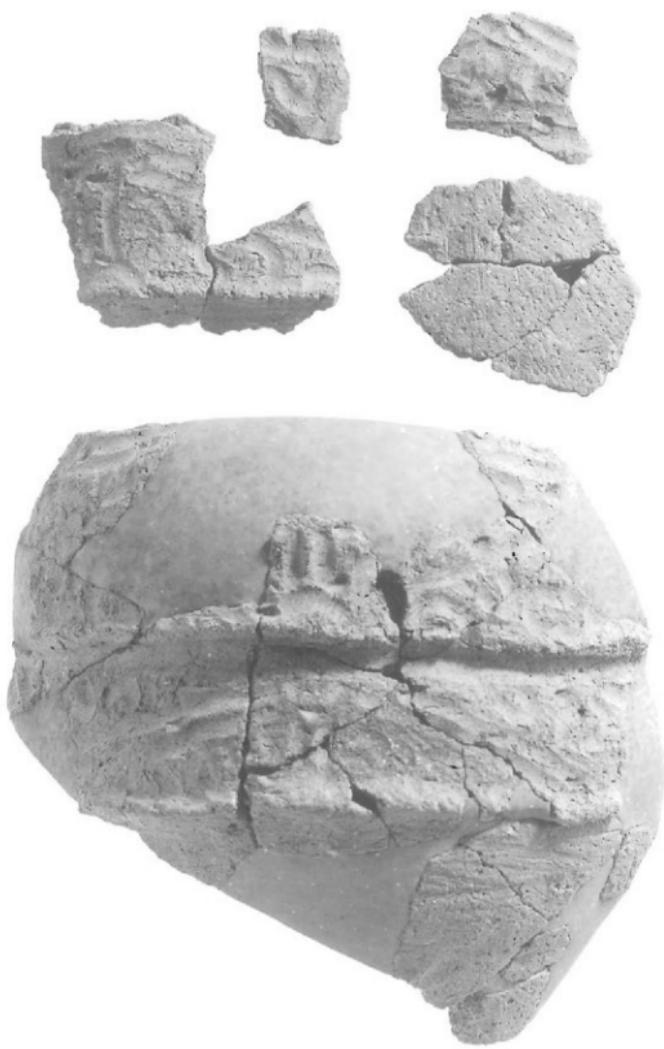


沈線文土器

図版42

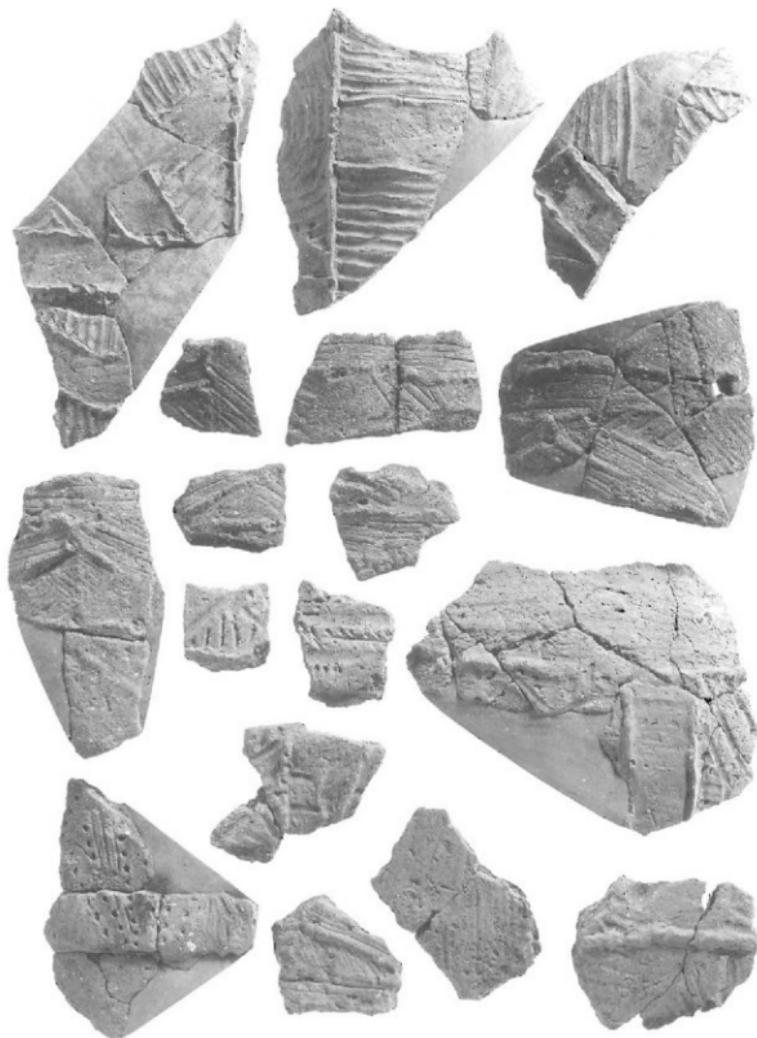


野島式土器

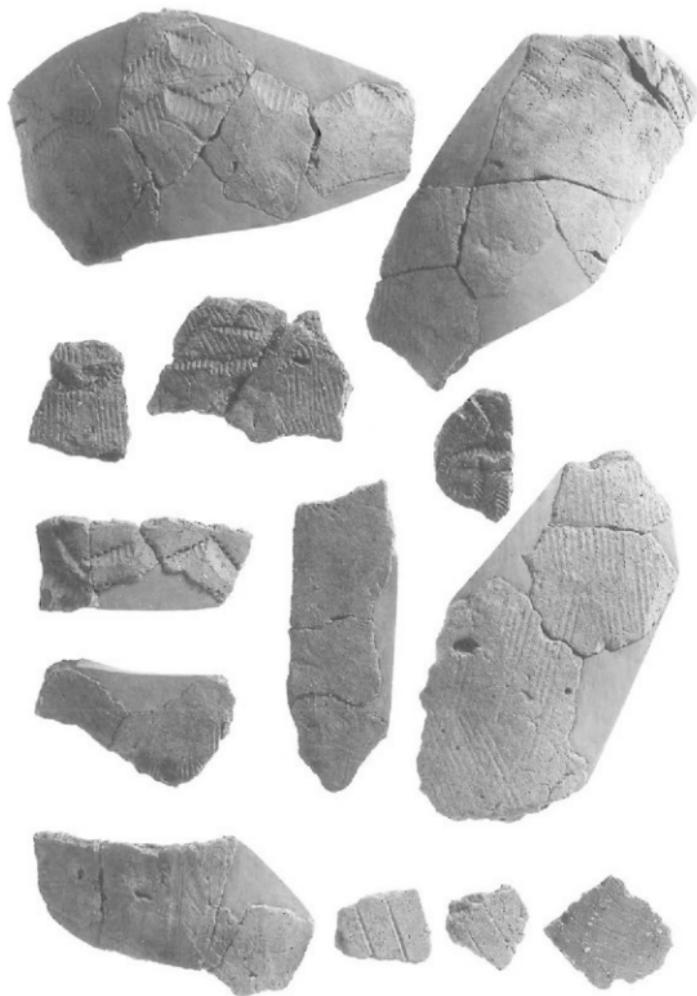


鶴ヶ島台式土器 1

図版44

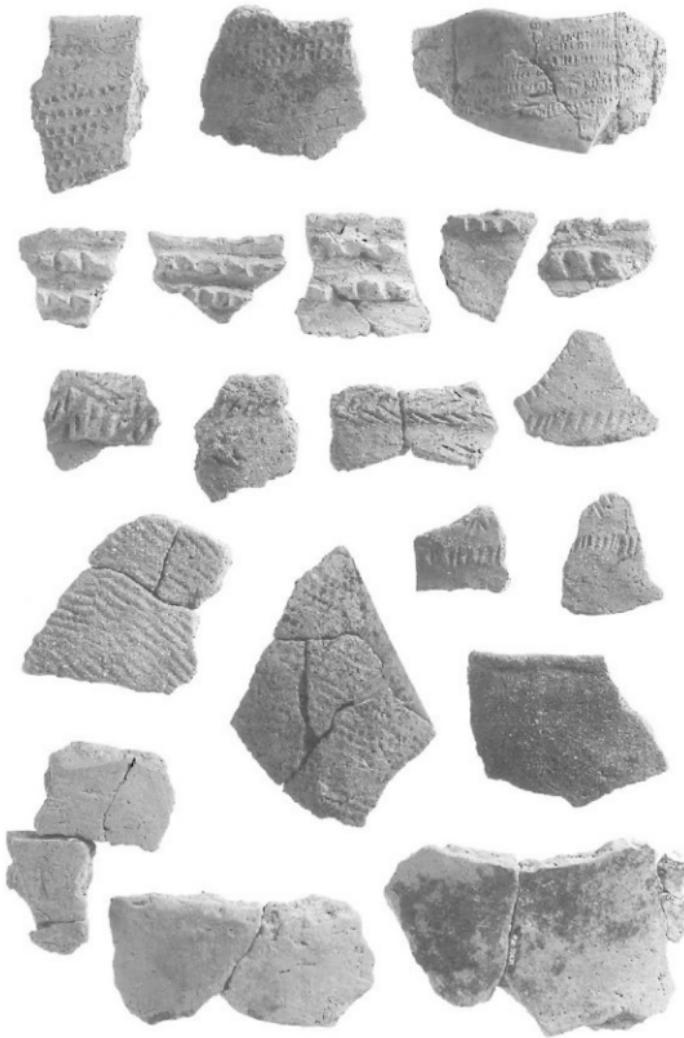


鶴ヶ島台式土器 2

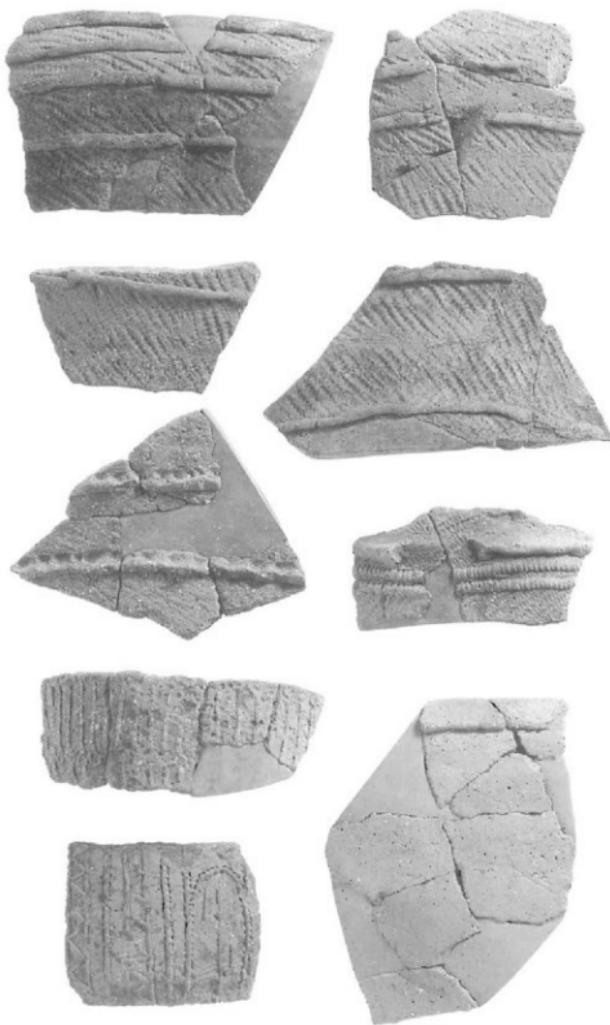


打越式土器

図版46

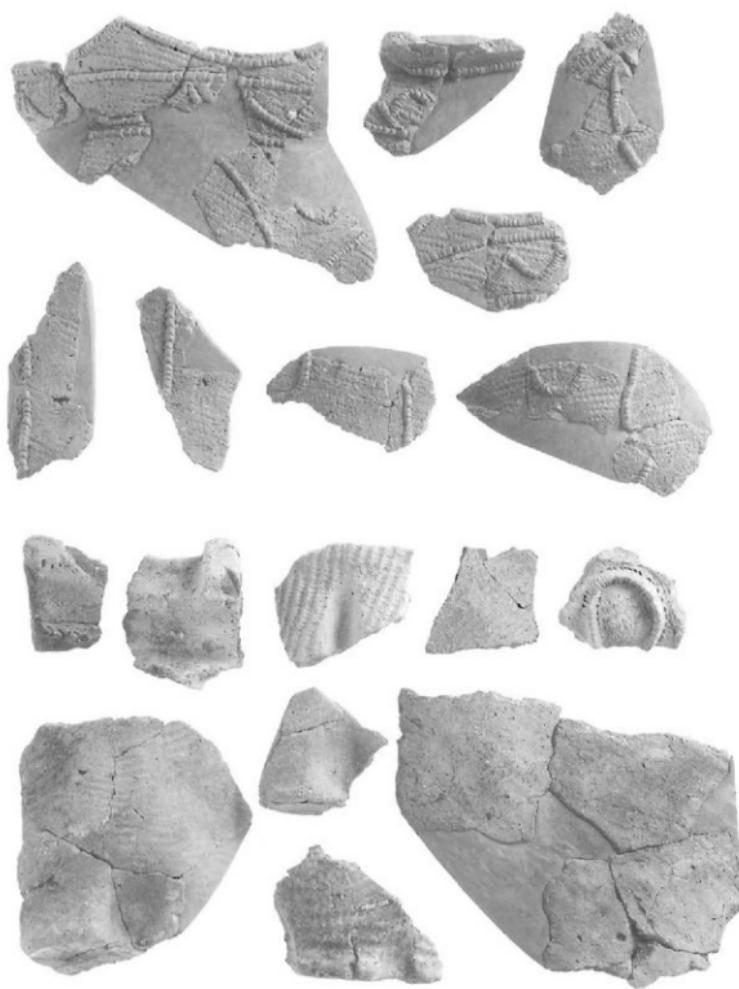


清水柳E類土器、上ノ山式土器、入海式土器他

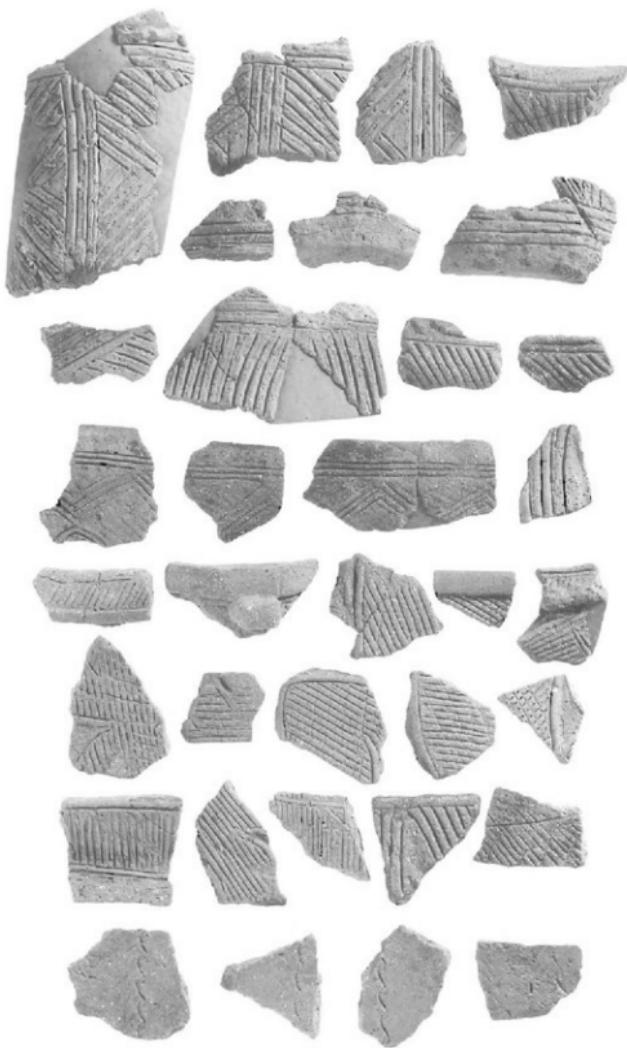


十三菩提式土器

図版48

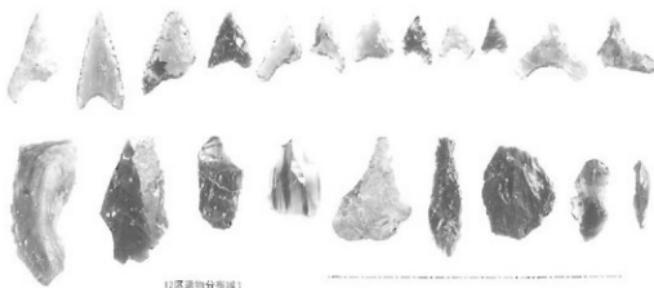


大歳山式土器



五領ヶ台1式土器

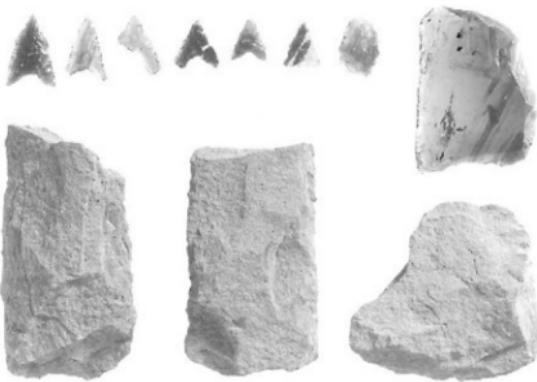




12区遺物分布域1



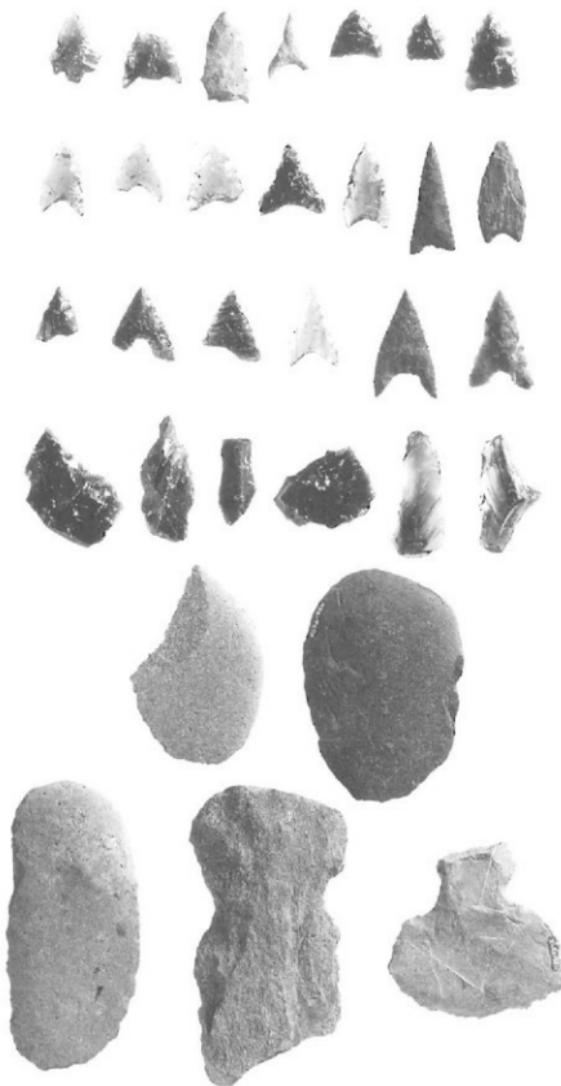
12区遺物分布域2



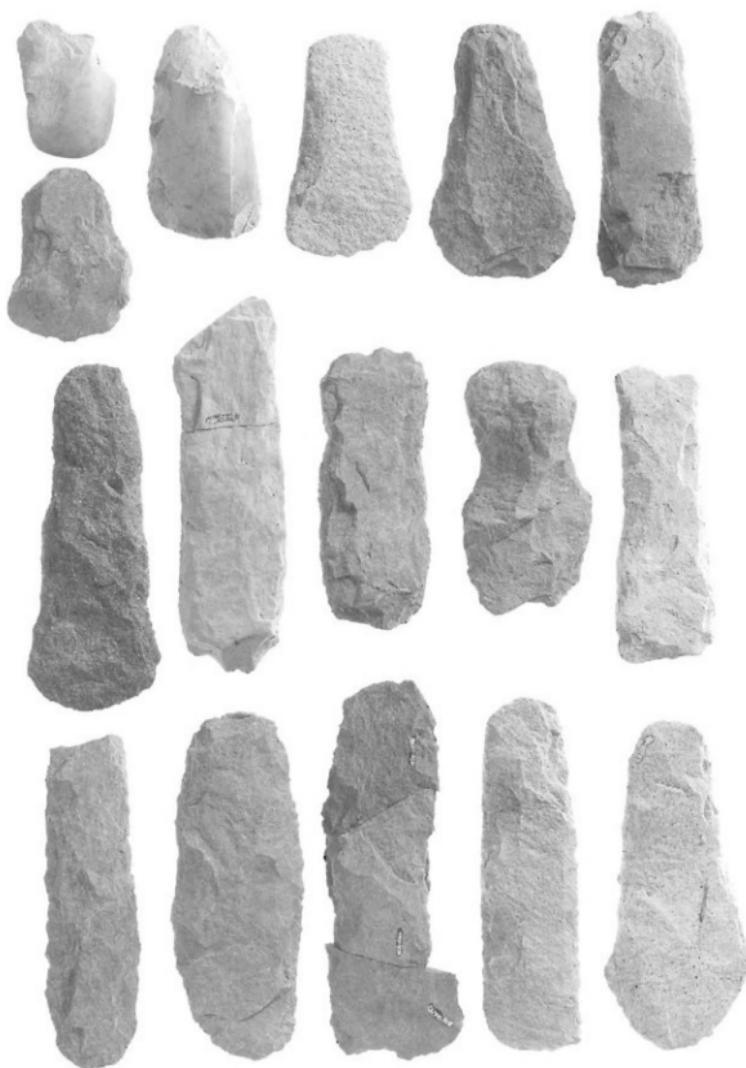
12区遺物分布域3

12区出土縄文時代石器

図版52



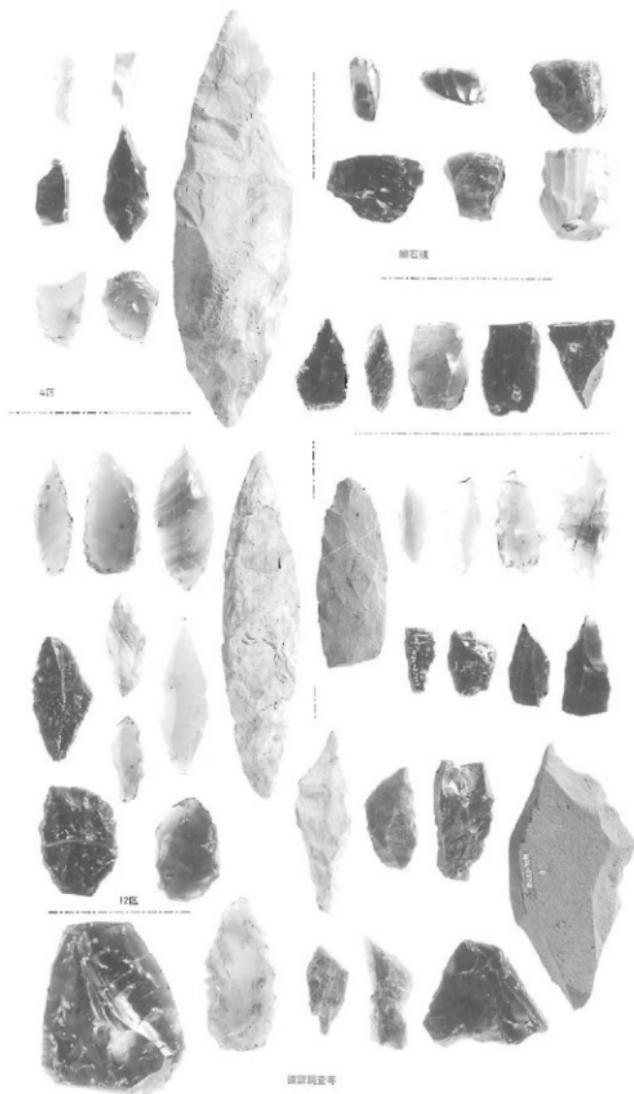
2区出土縄文時代石器



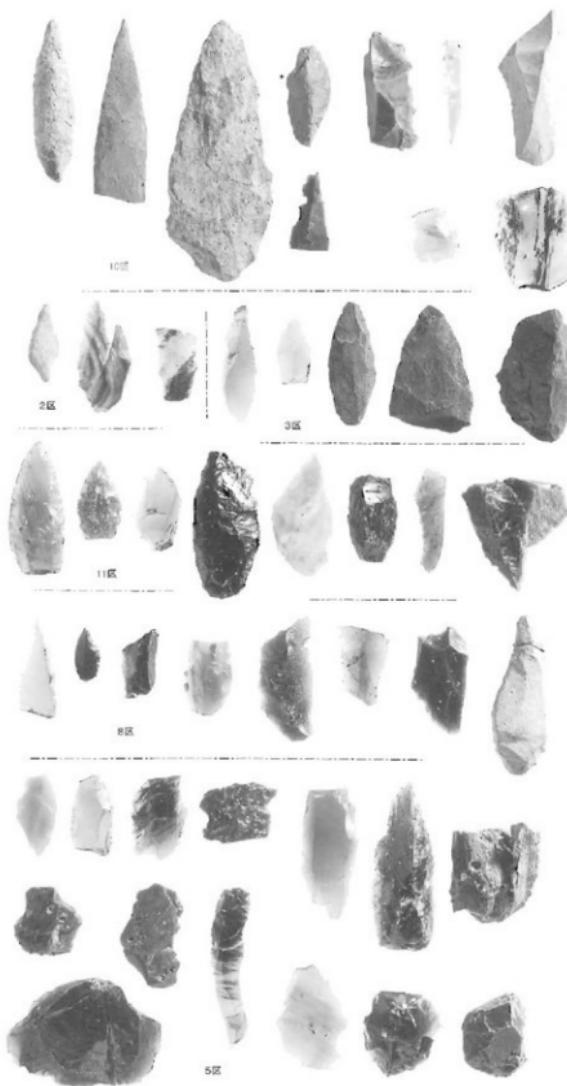
堅穴住跡

打製石斧

図版54

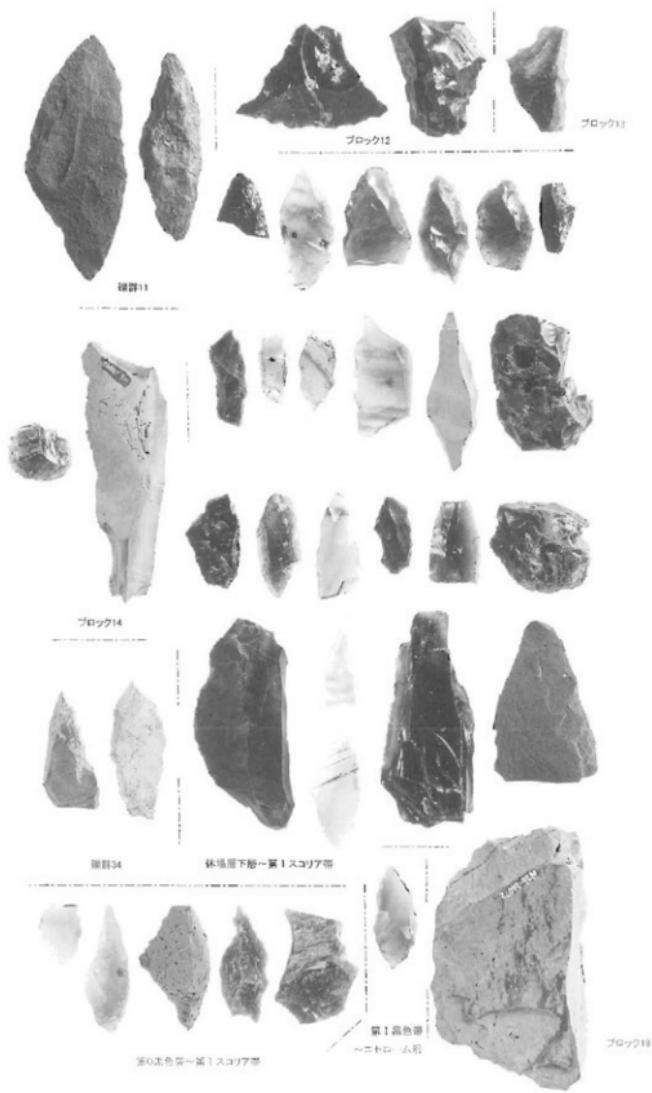


休場層上層～中層出土石器 1



休場層上層～中層出土石器 2

図版56



休場層下層以下出土石器

# 報告書抄録

ふりがな	まとばこふんぐん・まとばいせき						
書名	的場古墳群・的場遺跡						
調書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	沼津市-3						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第227集						
編著者名	富樫孝志						
編集機関	財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL054-262-4261 (代表)						
発行年月日	西暦2010年9月30日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
	市町村	遺跡番号	世界測地形				
的場古墳群 ・的場遺跡	静岡県 沼津市 根古屋 939他	22203	35° 9' 19"	138° 48' 42"	19990501～ 20000331 20000410～ 20000929 20000901～ 20010331 20010824～ 20020131 20031029～ 20040309 20071205～ 20080117	34,754m <sup>2</sup>	第二東名建設事業 に伴う埋蔵文化財 発掘調査
所取遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
的場古墳群	古墳	古墳時代 平安時代 鎌文時代	古墳4基 土坑1基 住居跡1軒 住居跡2軒 焼土上坑14基 集石44基	須恵器、大刀、鉄鐵 須恵器 灰釉陶器、土師器 縄文土器	墓前祭祀跡の可能性あり 石組の墓		
的場遺跡	集落	旧石器時代	土坑36基 土坑6基 礫群40基 石器ブロック20基	縄文土器、石器 縄文土器、石器 石器			
要約	的場古墳群、的場遺跡は、沼津市平野部～駿河湾を望む愛鷹山南麓にある。 古墳時代では、4基の古墳を調査し、そのうち1基では最高で7回に渡る追葬と大刀、鉄鐵などの副葬品が出土した。 鎌文時代では、早期～中期の土器が出土した。特に前期末の十三菩提式は、文様のバリエーションが多く、良好な資料になると思われる。 旧石器時代では、第V黒色帶で出土したブロック群で豊富な接合資料が得られた。また、第VII黒色帶では、3万年を超える年代測定値が得られ、その肩から2点の石器が出土した。日本での最古級の石器として貴重な資料になる。						

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第227集

## 的場古墳群・的場遺跡

第二東名No.26地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年9月30日発行

編集・発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL 054-282-4261 (代表)  
FAX 054-262-4266

印 刷 所 松本印刷株式会社  
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210  
TEL 0548-32-0851 (代表)

